欲望にはチュウジツに！

猫毛布

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏がＩＳを起動して数日。
世界には”もしかして”が溢れた。その”もしかして”に選ばれてしまった幸運（）の持ち主。
コレは活劇でも、悲劇でも、ましてや惨劇でもない。
喜劇である。
合言葉は
「下半身には忠実に！」

目次

目を見て会話するよりも見る所がある 1
小市民と有名人 8
天国は背中に 22
ＩＳスーツはエロい 37
そんな事はどうだっていい！ 51
するん、ペタン 71
八割の冗談と二割の嘘～セクハラを添えて～ 86
ヘタレの置物に餌を与えないでください 101
恥ずかしがり屋さんと黄色の騎士様 122
吹き出しは出ているか？ 148
あんな可愛いヤツが女な訳ないッ！ 169
地雷撤去はお手の物 190
夏野攻めは、ありまぁす！ 206
機密文書 225
地雷原タップダンス 239
自分に正直に生きること 257
醜いアヒル 270
憧れの職業・種馬 286
ウスイホン 300
サンドバックの殴り方 315

オトコのユウジョー ―― 323
息吹をあげろ ―― 337
まじょさいばん ―― 353
ヘタレ ―― 374
これは荷物持ちであってデートではない ―― 392
ウサミミは地面で採れる ―― 418
脳内には特殊なフィルターが存在している ―― 435
水着姿の騎士と第二王女 ―― 450
喜劇の少年 ―― 460
柔らかくて、イイ匂い ―― 478
無色透明 ―― 498
何も柔らかくない首極め ―― 508
全てはソレの為に ―― 519
ちょっとした裏技だ ―― 531
白骨と武器と女のセカイ ―― 543
銀は福音を奏でる ―― 561
代償 ―― 574
わたくしの騎士様 ―― 592
夏野穂次 ―― 606
これはデートであって荷物持ちではない ―― 619
メイドさん、お困りですね！ ―― 642
心に盾を ―― 654
闇夜に咲く華 ―― 680

紅茶淹れのタツジン ―― 695
責任は空中分解させよう ―― 718
肯定する武器 ―― 730
黒と極光と紅 ―― 742
記憶喪失の直し方 ―― 754
自己淘汰 ―― 769
怪我＋食堂＋……＝ ―― 780
冠する少女 ―― 801
第二王女の決意 ―― 812
助けてヒーロー！ ―― 831
ケーキの買い方 ―― 846
裏切り者、織斑一夏 ―― 861
貧乳三人組 ―― 874
望まれたモノ（閑話 ―― 888
瀟洒な執事 ―― 901
乱暴する気でしょう！ ―― 918
舞台の騎士 ―― 934
助言の効果 ―― 946
必殺技は叫びたい ―― 964
ひきょうもの ―― 982
視点共有の有用な使用方法 ―― 999
負けない機体 ―― 1014
勝つための機体 ―― 1033
王女様からのご褒美 ―― 1046
こまめに上書き保存しよう ―― 1058
フルアーマーをパージしよう ―― 1074

君はいい道化だったよ ―― 126
仮面の笑顔 ―― 612
ハイキック・パンティ ―― 451
狂気の浸り方 ―― 227
喜劇の道化 ―― 121
ヘタレた財布 ―― 111
三回勝負にしよう ―― 95
ドキドキ魔王裁判 ―― 117
優柔不断ヘタレ男の決断 ―― 71
理想世界の主 ―― 166
正妻の余裕×2 ―― 115
裏切り者、夏野穂次 ―― 71
好敵手 ―― 144
無名の悪の王様 ―― 11
喜劇の開幕 ―― 27
舞台裏の主人公 ―― 111
1410210871305129112791

目を見て会話するよりも見る所がある

人間、何が起こるかなんてさっぱり分からないモノだ。

インフィニット・ストラトス。略称『ＩＳ』。女性しか操作できない筈のソレに初の男性操縦者が現れた。

朝刊どころか号外で簡潔に書かれ、ネットではあれよあれよとウソと真が入り混じり、『俺だってＩＳを操縦出来るんだぜッ』なんて言う人間も現れたり。

ともかくとして、今しがたテレビに映り、なんとも困ったような引き攣った笑いを浮かべている男――織斑一夏が事の発端だった事は確かだ。

お偉いさん方は日本初どころか世界初である彼の存在が明るみに出たお陰で変に可能性を求めてしまった。他の男でもＩＳを動かせるのではないだろうか、という事だ。

善良なる市民諸君は各地区の所定の場所に呼び出され、そしてＩＳに触れた。当然、微動だにしない。当然である。ＩＳは女性にしか反応しないのだ。

男である織斑一夏に反応したのが間違い、奇跡なのだ。きっと彼がブリュンヒルデ、織斑千冬の血族であるのも奇跡の一因に違いない。

何の取り得も無い、それこそ平凡極まりない小市民な俺も例に漏れる訳もなく、早々

にＩＳに触れておさらばした。いいや、したかった。
俺はさっさと帰って、最近買ったばかりの『ドキッ!?　気付いたら異世界!?―命のポロリもあるよ!―（Ｒ１５）』という何とも謎ゲーをしなくてはいけないのだ。パッケ買いはやはり地雷なのである。
ともかくとして、整理番号を呼ばれ、なんて事なしに注意を聞き、指示に従い、ＩＳに触れた。触れてしまった。もしも今ココでその時点に戻れるのならば俺は全力で俺を殴りたい。
――認証しました
電子音が響き、マシンボイスが響いた。「へー、ＩＳって喋るのかー、スゲー」なんて感想を思わず呟いてしまった。当然、現実逃避だ。
どうしてだか分からないけれど、手錠をされ、拘束具で縛られ、口を塞がれ、俺は非常に丁重にオモテナシされた。きっと世界の要人だってこんな扱いを受けないだろう程、丁重なオモテナシです。
黒服のお姉様方に連れられるのはちょっと変な趣味が目覚めそうでよかったけれど、そこからは実に言い難い行為の数々だった。
あれよあれよと検査の嵐。血は抜かれるわ、身体能力の確認はされるわ、血族関係を改められるわ……お陰で父親だと思っていた人間と実は血の繋がってない事が判明し

たわで。なんというか身体にも心にもダイレクトアタックだッ、みたいな……。

きっと件の織斑一夏もこんな思いをしたに違いない。いや両親関係は俺だけだと思うけどさ……。どういう顔で両親に会えばいいんだよ。

ゲッソリした顔で待合室にいればソコに現れたどこかで見たことのある女性。鋭い瞳に長い黒髪、果たしてこんな美人と会った事があるならば忘れる訳も無いのだけれど……。

その後ろにいたのはメガネで緑色の髪をした……。

「山田真耶?」

「はい? 私を知ってるんですか?」

「そりゃぁ、まあ」

なんせ『元』が付属していても日本の代表候補の一人なのだ。なによりそのおっぱいの大きさは実に記憶に残りやすい。ありがとう。

という事は、である。黒髪さんの方へと目を向ければ何やら思案顔。ついでに俺は睨まれている。視線で人が殺せるというネット評価は間違ってない（自目）。

逃げ出そうにも両腕はベルトでギチギチに縛られ、足も縛られている。俺は受刑者じゃないんだぞ、と声を大にして言いたい。言ったけど「ウルサイ。男（クズ）は喋る権利もないんだよッ」なんて言われて猿轡されたんだけっか……。あの女、次に会ったら覚えて

いろよ……お前のせいで新しい扉の目の前にいるんだからな！
「それで、元世界一位のブリュンヒルデさんがちっぽけな俺に何用で？」
「ほう。その状態でも粋がるか」
「いえいえ、内心逃げたい気持ちいっぱいですよー。拘束がなければの話ツスけど」
「……それに関しては申し訳ない、と言っておこう」
「ま、拘束以上に心がブルーになる情報も聞いちゃったんでー。それで、さっさと本題に入りましょー。不貞寝したいんですよー」
　不貞寝、というか現実逃避がしたい。切実に。きっと全ては夢なのだ。夢に決まっている。いや、現実である訳が無い。
「ではお望みの本題に入ろう。お前の身柄は一時政府が預かり、後にＩＳ学園へと移る」
「あー、なるほどー。そういやＩＳを反応させちゃったんでしたっけ。そりゃぁ国家も秘匿したいでしょーね」
「……ふむ。意外に頭は回るか」
「いえいえー。自棄になってるだけですってー。ついでに言うと美女さんにいい所見せたくて頑張ってるだけですよー。ＩＳに反応されましたけど男ですからねー」
　本当に悲しい気持ちでいっぱいである。両親（仮）もそうだけれど、友人関係の性格を考えれば「お前ＩＳ操縦できるのかよ！　すげー!!」よりも「おまｗｗＩＳ操縦で

きるとかｗｗｗ女の子ｗｗｗワロスｗｗｗ」と言われる方が想像に難くない。やばい頭が痛くなってきた。

「……まあいいだろう。一応、両親への伝言などはあるか？」

「あー、というか俺が政府預かりになるって事は両親には何かしらの恩賞というか、報酬というか、そういう金銭的な援助とかはあるんですかね？　一応、俺って国に買われる事になるんでしょ？」

「……事実だが、臆面もなくそういう事を言うモノではない」

「事実ならしゃーないでしょ。国家預かりになった時点で俺が売られてるのは確定してますしー。母さん達はどうなったんですッ!?　なんてやる気でねーですって」

「そうか。君の身柄を国家のモノにするに至り、多額の報償金が政府から支払われたよ」

「あー、そうッスか……。それで、俺の身柄は国家のモノとして、替えの利く二人目として、実家に帰省とかって出来るんですかね？」

「……残念ながら」

「あー、そうッスか。うん……思ったよりヘビーな内容ッスねー。うん、きっと重い内容なんだろうなー」

心が麻痺をしているのか、それとも両親に対しての何かが欠けてしまったのか。どちらにせよ、両親に会えないという事に関してそれほど何かを感じる事はなかった。きっ

とココから先で何かを感じる事はあるだろうけど、今はさっぱり感じなかった。
「じゃあ父さんには『末永く仲良くお過ごし下さい』と」
「母親には何もないのか？」
「あー、言いたい事はいっぱいあるんですけど。まあ言えないんで父さんと同じ言葉を送ってください」
「言いたい事があるなら言えばいいじゃないか」
「『若気のいたりか、火遊びか知りませんけど程ほどにね（はーと』なんて誰かに言わせたくないっすよー」
「何を言わせたがってるんだ……」
「ま、両親に関してはいいですよー。それで、他に俺がする事とかってあるんですかね？」
「いや、今日の検査は全て終わりだ。明日からは座学を頭に叩き込む事になるだろう」
「頭に叩き込むって、アレをですか？」
「アレをだな」
　視線の先にあったのは電話帳と見紛う何か。両腕が拘束されていて捲ることも出来なかったけれど、アレって教科書だったのか……。すげー。
　頭に叩き込むって事はアレを直接頭にプラグインするんですね！　わかります！

「今日は疲れてるんで不貞寝します。不貞寝させてください」
「仕方ないな……。ああ、一つだけ忠告しておこう」
「はい？」
「人と話すときは胸部ではなくて目を見て話せ」
「今日は許してくださいよー。荒んだ心の癒しなんですよー」
体を揺らしているとおっぱいさんが両腕でおっぱいを隠した。溢れんばかりのおっぱいが両腕に潰されて素敵おっぱいが、なんというか、凄い。素晴らしい。
溜め息が織斑千冬様の口から出た所で彼女らは俺の部屋から出て行った。
「あー……もうマジ無理……不貞寝シヨ」
何はともあれ、寝たい。寝て忘れたい。きっと夢なのだから、少しくらいおっぱいに触れてもよかったのではないだろうか……？　うーん、おっぱい。

小市民と有名人

「これは、夢か……!?」

晴れて拘束から解かれ、ＩＳ学園へと身柄が移った俺はそう呟いてしまった。

見渡す限り女性、女性、女性。女の子、女の子、女の子。素晴らしい。きっとここは地獄によく似た現実世界ではないのだ。理想郷、天国、言い方は様々だが、世界はこんなにも素晴らしいのだ。

「ああ、こんな所に居たんですね」

「おっぱいさん。お久しぶりです」

「は?」

「いえ、山田真耶さん。お久しぶりです。いやー、相変わらずお綺麗で、一瞬誰だか分かりませんでしたよ。アッハッハッハ」

「次は無いですからね?」

「アッ、ハイ」

次は言えばいったいどうなるというのだろうか……。目がマジだったけど、チョークスリーパーとかされるのだろうか……もしくはおっぱいで窒息させられるとか……。

楽しみでしかないな。

「それにしても、どうして校門前なんかに居たんですか？　アチラの方から直接職員室に来るように言われていた筈ですけど」

「いやはや、やっぱりシャバっていいツスねぇ……」

「そんな囚人みたいな発言をして」

「似たようなもんツスよ。それで、おっぱ――山田さんは俺を迎えに？」

晩まれてしまったので乾いた笑いを浮かべながら言葉を変える。どうしておっぱいさんと呼んではいけないのだろうか？　その胸部は誇るべきモノだろう。

……いや、確かにそれほど仲良くも無い異性に勝手に愛称で言われるのは問題かも知れない。なればこそ、俺にも似たような愛称を付け、そして呼んでもらえば問題はない筈だ。

そう、是非とも俺のことは『巨チ――

「そうですよ。迎えに来たんです。まだ校門にいるとは思ってなかったので、申請書類などは後で書いてもらいますからね！」

「へいへい。判りましたよー。つーか、申請書類は向こうで書いた筈なんですけど？」

「ふぇ？」

「あ、ボイスレコーダー準備するんで、もう一回お願いします。ほら、さんはい」

「や、ヤですよ!?」

　なら本当に残念なことをしたのかも知れない。きっとココから先、おっぱいさんの驚いた声は何度も聞くタイミングはあるだろう。むしろ作る。ならば最初の一度ぐらいはいいじゃないか。

　まあ、政府側と学園側の情報伝達が微妙にチグハグなのがわかった。わかったからといってどうこうする訳でもないけれど、――いや出来るならばおっぱいに触れたいけれど――国の奴隷君としては面倒かつ厄介極まりない。

　国からは校門で待てと言われ、学園側からは職員室に来るように指示していたらしい。申請書類も送られてきていない。訴えれば勝てるぞ！　その訴えるのも、裁判するのも国だから負ける事しかないだろうけど。

「ま、いいッスよ。申請書類は後で書きます。今は山田さんの指示に従った方が良さそうですしおすし」

「おすし？　なら入学式が行なわれますので、会場の方へ」

「へいへい」

「返事は一回。ハイで答えなさい」

「わぁ、まるで先生みたいだー」

「コレでも先生なんですからね！」

胸を張られて言われても、もう胸部の布の寿命は限界ですよ！　とは口が裂けても言えない。言うと隠すのだから言って堪るか。

「なるほど、美人（巨乳）教師ですね！　スゲー！」

「えへへ……煽てたって何も出ませんよ？」

「あ、そうなんですか。じゃあ会場に行くんで」

「ふぇ!?　お世辞でももう少し取り繕ってくださいよ！」

「取り繕ったら調子に乗りそうじゃないですか。おっぱいが触れるならまだしも、何も無さそうですし」

「むぅ！　さっきから人の、お、おっぱいの事ばかり！」

「はぁ……いいですか。おっぱいって言うのは青少年にとって憧れの部位なんです。そしてソレはつまる所母性の塊なんです。男は自然とソコに目が行きますし、甘えたくもなります。ある種の凶器みたいなモンです。

俺だって美人な山田さんの事をおっぱいだなんて言いたくないですよ？　けれど、美人な上にまるで聖母の様なおっぱいがソコにはあるんです。だからこそ俺はそのおっぱいを敬った上で山田さんの事を『おっぱいさん』と呼んでいるんです。

つまりです。俺がそのおっぱいを触れようとするのは一種の信仰であって、決してやましい事はありません」

「ふーん……」
「ジト目は止めてくださいよー」
　変な扉が開きかかってるんですから本当に止めてください。
　真面目な顔を崩してヘラヘラと笑みを浮かべて会話を流していく。溜め息を思いっきり吐かれたけれど気にしない。
「まあ美人教師云々のくだりは世辞でも何でもない本心なんで。これからよろしくお願いします、山田先生」
「！　はい、よろしくお願いしますね！」
「ちょれー」
「は？」
「いえ、なんでもないですよー。アッハハハハ」
　ちょろすぎぃ。
　悪い男に騙されないか不安になるぞ……織斑千冬が簡易的な抑止力にでもなってるのか。　つーか、この人、元代表候補だったな。単純にそこらの男より強いじゃないか！　悪い男に騙されるチョロインなんて居なかったんですね！

入学式も粛々と終わった。

周りを見渡しても女の子ばっかりでびっくり。ホント、ギャルゲーみたいな状態ってあるんだなぁ。

コッチを見る瞳が恋する乙女な瞳じゃなくて珍しい動物を見る視線じゃなけりゃぁ良かったけれど、まあ無理があるよね！　珍しい動物みたいな物だし！　検査凄いされたしね！

美人な会長さんの祝辞を見惚れながら聞いてたら意味深な視線をコチラに向けてきたけれど、生憎あんな美人に会った事も無いし、自慢じゃないけれど一目惚れされるような容姿でもない事は確かである。

生き別れの姉とかも考えたけれど、それはそれで俺の精神に大ダメージになるからスグに消した。元母の火遊びなんてなかった。イイネ？

それにしても、慣れない。好奇の視線というのは大して心地よくも無い。確かに容姿レベルの平均がかなり高いクラスなのだけれどその上位に男であるお前が食い込んでるのはどういう事だ、織斑一夏。そしてお前もどうして俺に好奇な視線を送ってくる。

貴様、ホモか！

いやきっと違う。違うんだろう。違うと言ってくれ。

ともあれ、二人目である俺は政府によって秘匿されていた、というかココに来るまで発表が無かったらしい。そりゃあ、表に出すとあの検査の内、幾つかは出来なかっただろうからな！　非人道的とか当たり前ですよね！　俺知ってるよ！

「おい、馬鹿者。何を止まっている」

「あ、アイエエエ!?　ブリュンヒルデ!?　ブリュンヒルデナンデ!?」

「ア〝？」

「はい。すいませんでした。自己紹介ッスね。わかってますよー、やだなぁ。アッハハハ」

すごんだブリュンヒルデは挙動も無しに人を殺せる。絶対に殺せる。蚤の様な俺の心臓がバクバクと脈打ってるのだから確実だ。決して興奮しているからではない。決してだ。

「あー、あー。ドウモ、クラスメイト＝サン。世間体で言うフタリメって奴です。もう名前も似たようなアタリメでいいんじゃないかとか政府に言われて戸籍ごとさっぱり綺麗にさよならバイバイされたらしいけど俺は元気です。元気じゃなきゃヤッテケネーデス。

と、冗談かましてるとブリュンヒルデ様がお怒りなので、夏野（ナツノ）　穂次（ホツギ）です、と簡潔に締めさせていただきます。どーぞよろしく」

ヘラリと笑って自己紹介にも至らない言葉を締め括る。全部事実だよ、畜生め！

別にウソとして扱うのは構わないし、ウソの方がいいだろう。世間体的に消されるのは嫌だし。

冗談の言う明るい人として認定されるなら御の字だ。なにより、いつか冗談でおっぱいに触れても許されるかもしれない。おっぱいに触りたい。触りたくない？　俺は触りたい。

つーか、皮肉に満ちた名前なのに誰からも突っ込みが無かったでござる。ワロタｗｗｗワロタ……。

「やあ、一人目。自己紹介でも言ったけど、俺は二人目だ。お互い色々と気苦労があるだろうけど、頑張ろう」

「おう。俺は織斑一夏。よろしく……。というか二人目が居たなんて知らなかったよ」

「織斑がＩＳを動かした後に政府が色々と可能性を見出して、それで幸運にもＩＳを動かしたのが俺って訳。政府としては発表するよりも有用にデータ採集したかったんだろ。つーか、お前もデータ採集されてないの？」

「血は抜かれたりしたけど……」

「あー……だよなー」

俺みたいに明らかに頭狂ってんだろってヤツは無いのか……。羨ましい。つーか、いくら補欠だからって人権ぐらいあるんだゾ！　と思ったけど無かったわ……。
「それで、さっきポニテさんに連れられてどっか行ってたけど……？」
「ああ、箒は幼馴染なんだ」
「へぇ。つーか、篠ノ之と織斑って昔なじみなのかよ……」
「？　そうだけど」
「いや、邪推だな。忘れてくれ。あんな可愛い子と幼馴染とか羨ましい限りだ」
巨乳だしな。何？　あの胸のサイズは……。素晴らしいだろ、アレ。全ての栄養が胸に集まってる感じ、いいと思います（恍惚。
「よろしくて？」
「ん？　おお、金髪美人さん」
「あら、よくわかってるじゃありませんこと」
「いえいえ。俺の様な小市民には出すことの出来ない高貴な輝き、まさしく貴き人と言われるに相応しく思います」
「そ、そうかしら」
「ええ。誇るべきです。だからこそ、気安く話しかけていただけるだけで俺は天にも昇りそうな気分でございます。素晴らしい。なるほど、美の結晶とはアナタの様な方を指

すのですね！」
「ふ、フフ。そうですか。そうですか」
少しばかり赤くなって口に笑みを浮かべている金髪美人さん。名前は確か、セシリア・オルコットさん。
果たして性格はわからないけれど、代表候補生である事をわざわざ強調して言っていたからプライドは高いのだろう。
「……なあ、夏野」
「なんだ、織斑。わざわざ声を潜める必要がある会話か？」
「誰だ？　というか、どうしてそんなに敬った様な態度なんだ？」
「彼女はイギリスの代表候補生。名前はセシリア・オルコットさん。見て分かる通りに愉快な人だ」
「なるほど……なるほど？」
「ちょっと！　聞こえてましてよ！」
「それは失礼。それで、代表候補生様が小市民と有名人に何用で？」
「夏野って有名だったのか」
「有名人はお前だバカ」
「何!?」

「ジャパニーズマンザイはよろしいです！」
「アリガトウゴザイマシタ！」
「そうじゃありませんわ！　いい加減にしてくださいまし！」
「へいへい。ありがとうございました。　それで、俺はともかくとしてコイツに何か用でも？」
「なんで夏野は関係ない風を装ってるんだよ」
「いいか、この高貴で知的で愉快極まりないオルコットさんが話し掛けてるんだぞ？　一時間目で醜態さらしたお前に自らの知恵を授けんと勇んで来たんだぞ。俺におちょくられて顔真っ赤にしてっけど」
「あー、お前って分かっててやってたんだな」
「当然だ。むしろ意識せずにやってたら悪意の塊だろ」
「いや、どちらにしろだと思うぞ、それは」
　まあそれもそうか。
　どちらにせよ、プライドの高いだろうオルコットさんは見事に蚊帳の外だったり無理矢理引き入れられたりで、明らかに怒ってます、という感じに眉を吊り上げている。怒ってるのに美人って可愛くみえるから凄い。まあ怖いものは怖いけど。
「まあ、落ち着いてくださいよ。主席様」

「落ち着いていられますか！　貴方は人を揶揄って！」
「まあまあ。小市民の戯言だと思って流すのも高貴な方のお役目ですよ。入試で教官を倒したオルコット様がよもやそんな事で目くじらを立てるなど……ねぇ」
「……ふんっ。まあわたくしは優秀ですから、貴方の様な小市民でも優しくしてあげますわ」
「え？　優しくシてくれるのか……緊張するな」
「は？」
「夏野。たぶん、いや、絶対それは勘違いだ」
「期待だけしてる」
　唖然としたオルコットさんとは違いスグに意味を理解したのかかなり呆れ気味に俺の肩を掴んだ織斑。俺だってわかってるよ。ああ、当然だ。
　このスタイルもよく、プライドも程よく高く、少しタレ目な美少女に優しくイケナイ事をされるなんて思ってない。思ってないさ……。
「というか、代表候補生ってそんなに偉いのか？」
「この場合は代表候補生である、というよりはオルコットさん自身が入試で教官を倒したエリートだからこそ俺たち凡愚に知恵を授けてくださるのだ」
「そうですわ」

「故に俺たち凡愚は彼女の優しさをその身いっぱいに受ければいい。俺は期待してる」
「ん？　入試ってＩＳを動かして戦うやつか？」
「それ以外に入試はありませんわ」
「なら俺も倒したぞ、教官」
「おいおい、織斑。嘘はダメだろ。見ろよ、オルコットさんをきっと今にも『ぷんすかぴー』なんて言うぞ。可愛いなぁ」
「言いませんわよ！」
「嘘じゃないぞ。というか、どうして嘘だと思ってんだよ」
「俺は入試自体受けてないからな」
「俺としてはそっちの方が嘘だと思うんだけど」
「ほら、俺って、ユ、ウ、シュ、ウ。だからねッ」
「うぜぇ……」
「いやん。渾身のドヤ顔だったのに、酷い」
「アナタ達！　こちらの話を――」
　とオルコットさんが言葉に割って入ったチャイム。オルコットさんは何かを飲み込んで、やっぱり可愛い顔を真っ赤にして怒ったように言葉を吐き出していく。
「またあとで来ますわ！」

「教室は一緒だな」
「逃げないことね！」
「教室は一緒だって」
「よくって!?」
「よくってよ!!」
「っ……！」
「なあ、思いっきり睨まれてたぞ」
「ハッハッハッ。可愛い人に睨まれて嬉しい限りで」
「夏野は楽しんでるなぁ……。俺は知らないからな」
「逃げるなよ。俺も胃が痛いんだから」
　少しだけ腹を擦りながら言葉を漏らせば溜め息を吐かれて笑われた。
　それにしても、オルコットさんから睨まれるのはわかるんだけれど、篠ノ之箒さんから睨まれるのはさっぱりわからん。幼馴染を取られたことによる嫉妬とか？　いや、男同士だぞ……はっ！　篠ノ之箒さんは腐女子だった可能性がッ!?

天国は背中に

「解せぬ……」

肩を落として机に頬杖をつく。机の上にはボールペンと二度目になる申請書類各種。

おっぱい先生に言った様に、申請書類の面倒な書き直しは気にしていない。面倒だけれど、ソコに何かを感じる事はない。そもそもおっぱい先生の頼みなのだから二つ返事だ。

さっぱりわからないのはクラス代表者の候補として俺の名前が挙がったことだ。意味不明すぎるよォ。

一人目であり、あのブリュンヒルデの弟である織斑一夏の名前が挙がったのは分かる。プライドが高くて、エリートであるオルコットさんが自分で自分を推薦するのもわかる。

二人目であり、人を弄って楽しむような性格で、剽軽といっても相違ない俺の名前が挙がったのはどうしてだ。理由は簡単、俺は織斑一夏を恨む。

「そもそも代表候補生と模擬戦で戦えってのが無茶だー。専用機も無い、才能も無い、技

術も無い、一般小市民の俺が無残に弄られるんだー。嬲られるー」
「夏野。黙って書け」
「アイ」
　目の前で両腕を組んで溜め息を吐き出しているブリュンヒルデ様。提出書類のチェックを逐一しているのだから俺は命令に従わざるをえない。いや、その前提条件が無くてもこの人には逆らってはいけない。絶対にだ。
　そもそも人の皮を被った鬼なのだから絶対に逆らえない。ブリュンヒルデって、北欧だか、ギリシャだか忘れたけれど、神話に登場する戦乙女の名称だっけか？　なるほど戦の神様の名称だな。つまり、目の前の女性は人間離れした戦闘民族の長だったのだ！
「夏野。イラナイ事を考えている頭はイラナイな？」
「いえ決して織斑先生のことを悪魔とか鬼だとか、チフユのチは血液のｔアダダダダダ！　壊れる！　頭蓋骨がいけない音が鳴ってます！」
「次は手が出るから気をつける様に」
「出てる！　手が出てるゥ!!　俺の頭をガッチリ掴んでますよ！　ブリュンヒルデ最高の槍が俺の頭を捉えてますよ！」
「ん、スマンナ」
「謝罪されてるのに力が強くなってる！　痛い！　痛いッス！」

籠められていた力が弱まり俺の頭は机に落ちた。衝撃の痛みよりもコメカミの方が痛いってどうなってんだ。やっぱり織斑先生は人外なんやなって。
「……夏野」
「何も考えてません！　マム！」
「ならばさっさと書け。私とて暇ではないんだぞ」
「ハッハッハッ、またまたぁ。面倒そうな仕事を山田先生に押し付けてるのは見て、ませんよー！　いやー！　織斑先生ほどの美人教師となるとやっぱり沢山お仕事ありますもんね！　クールで美人で仕事も出来るなんて素敵ダナー！　そんな織斑女史の迷惑にならない様に頑張ってサクッと書いちゃいますよー!!」
「減らず口を叩かずにな」
「イエスマム！」
敬礼はせずに書類へと目を通してサインをしていく。逆らってはいけない。絶対にだ。
「まったく……しかし、夏野。お前はソレでよかったのか？」
「何がです？」
「名前だ。随分皮肉の利いた名前じゃないか」
「アッハッハッ。それは俺じゃなくて政府の人に言ってくださいよー。一応コレでも改

善してるんですよ？　元々『セカンズ』だとか『二番』とか『二号』とか、人らしい名前に改善した時も名前は『補欠』でしたからねー」

「……元々の名前があるだろう」

「アッハッハッ。忘れちゃいましたよー、まあ生きる分には苦労しなさそうですし。こうして女の子のいっぱいいるＩＳ学園にも通えましたし。俺は意外に今に満足しているんですよ。だから変に思わないでくださいよー」

「そうか。それで、どうしてお前は私の胸部に視線がいっている？」

「スーツの上からでもわかる素晴らしいおっぱいだな、とアデデデデデデ！」

「警告はしてたよな？」

「確認とる前に手が出てますよ！」

解放されたコメカミを両手で押さえて痛みを和らげていく。織斑先生を見れば呆れた様な顔をしてコチラを睨んでいる。

その視線を紛らわすようにヘラヘラと笑って申請書類に最後のサインを書く。

「って事で。まあ何も問題ねーですって。人生なるようになる、ってのが座右の銘ですからねー」

「ほう？　なるように、か」

「アッハッハ」

ニヤリと笑った織斑先生の手には俺の書いた申請書類の一枚がある。ソレを見て俺は笑って誤魔化した。

息を一つ吐き出され、やはり口角がつり上がっている織斑先生はその紙を申請書類に紛れさせる。そこで俺はホッと一息。

「私を連れ出したのもコレが理由か？」

「山田先生でもよかったんですけど、お墨付きがあればもっといいかなぁと」

「小細工が上手い事だ」

「小市民ですからねー。こうしてないと生きていけないッス」

「まあいいだろう。提出はしておいてやる」

「ありがとうございます！　織斑大明神！　素敵！　抱いて！」

「焼却炉に出しておく」

「冗談ッスよー。やだなぁ」

「……一応、コレの理由を聞いておこうか」

「ソコに書いてるでしょ？」

「建前はな」

「あー……アレです。たぶん、分かんないと思うんッスけど。いつだって男の子は女の子にいい格好を魅せたくて、それでいて、ヒーローに憧れてるんですよ」

「……座右の銘を変えることを勧めるよ、夏野穂次」

書類を持って部屋を出て行った鬼斑先生を見送り、思わず息を吐き出す。

「……『おっぱいは裏切らない』にするかな」

「ソレはやめておけ」

「ヒェッ!?　鬼斑先生!?　ゴメンナサイゴメンナサイ！　アイアンクローの構えはやめてください！死んでしまいます！」

「……まあいい。コレを渡し忘れていた」

織斑先生がポケットから取り出した何かを俺に放り投げる。放物線を綺麗に描いたソレをキャッチすれば、硬い。そしてほどほどに温かい。ヌクモリティ……。

「鍵？」

「お前の寮の鍵だ」

「寮？　あ、そっか。ん？」

頭の中で様々な言葉が結ばれ、俺の頭は一つの結果を弾き出した。

「ラッキースケベ！」

「……」

「いや、ツッコミもなしでそんな呆れた目をしないでくださいよ。さすがに落ち込みます」

「勝手に落ち込んでいろ」
「酷い……織斑家は冷たい人ばかりか……」
「寮の鍵は渡したぞ。あと念のため言っておくが下らない事をすれば――」
「ああ、退学ッスねｗｗｗ　問題ねぇッスよｗｗｗ　ほら、俺ってＩＳ動かせたしィ、退学しても明るい未来が待ってますしィｗｗｗ」
「――命が無いと思え」
「ウ、ウィ……マム」
どうして俺の前にある机が壊れているのだろうか。織斑先生が何かを振り下ろしたのは見えたけれどソレが何かはさっぱりわからない。ただ織斑先生の手が手刀の状態になっている以外は何もわからない。わかりたくない。
織斑先生の目が語っている。「次はお前がこうなる番だ」と。なりたくはない。映画でもモザイク必須の映像になってしまうのは絶対に避けなければいけない。『下らない事』は絶対にしてはいけない。俺の心にソレは深く、深く刻まれた。
監獄にも似た部屋から結構広めの部屋に変わった俺はテンションが上がってしまい

子供のようにハシャイだ。布団がフカフカだったのもその要因の一つだろう。
色々して疲れた俺はすっかり広さによる不安など感じる間もなく眠り、スッキリとした朝を迎えた。
俺が一人部屋という事は織斑も一人部屋なのだろう。気苦労、と言ったけれどどうやらＩＳ学園は俺たち特殊要因に寛大らしい。トイレが遠い事を除けば。
しっかりと目を覚まして食堂に向かえば人だかりが出来ていた。
人だかりと言えば、物珍しいモノが中心にあり、ＩＳ学園に置いて珍しいと言えば決まってる。なんせ俺の後ろにも別の集団があるのだから。
「よお、おはよう。織斑。んで、初めまして、篠ノ之さん」
「おはよう、夏野」
「……ふん」
「おい、箒」
「アッハッハッ。幼馴染との朝のひと時を邪魔されてご機嫌斜めかな？」
「っ……！」
スパンッと小気味いい竹刀の音が響いた。少しだけ遅れて拍子を取る様に乾いた音も響く。
「フッフッフッ！　真剣白刃取り！」

「大丈夫か!?　夏野！」
「あ……、その」
「おいおい、ツッコんでくれよー。アテテテテ」
「箒！」
「っ……すまない」
「大丈夫だって。ほら、痛いの痛いの全部織斑にいけー」
「なんで俺なんだよ!?」
「アッハッハ。まあ変に琴線に触れたのは俺からだったし、竹刀で叩かれてもしょうがないさ」
　しかし、何も見えなかった。唯一見えていたのは彼女の巨乳だけだ。盛ってソレなのか、盛らずにソレなのか……触ればわかるな。
　瞬間に背筋に悪寒が走る。
「何を騒いでいる」
「ち、千冬姉……」
「織斑先生、……その」
「……お、俺は何もしてませんよ!?　俺だって最初の朝ぐらい落ち着いて女の子達を視がッ、」

腹部に衝撃を受けた。何が起こったかさっぱりわからないけれど、何も入ってない胃から何かが溢れ出そうになったけれど無理矢理抑える。

前屈みになって衝撃の原因を見れば、いい笑顔だった。ついでに言うといい匂いだった。

「ああ、夏野。スマンな。ちょうどいい所に腹があったものだから、つい」

「あ、ぁ……」

「お、そうかそうか。この騒動の原因はお前にあると。なるほど、では罰則をこなさなくてはな」

「お、おにい……」

襟首を掴まれてズルズルと引き摺られていく。首が絞まりながら最後に漏れた言葉は織斑に届いただろうか……。届いていなかったのならば絶対に言ってやろう、お前の姉は鬼の化身だったのだ！　と……。

「うげぇ……死にそ」

「大丈夫か？　というか、あの後に何があったんだ……」

「聴くか？　俺は人の限界を二度程突破しそうになったぞ……」

「後悔しそうだからいいわ」

「おのれぇ……」

　一時間目のギリギリに解放された俺はかなり急いで教室に入った。どうしてだか俺を拘束していた筈の鬼斑先生は悠々と間に合っていたのだが……。

　ともあれ、休み時間になり俺の近くに寄ってきた織斑が心配そうに声を掛けてきた。

「その、ありがとうな」

「……織斑に感謝される様な事はしてないけど？」

「いや、千冬姉から箒を庇ったんだろ？」

「実際おっぱい見てたから間違いじゃないんだよなぁ」

「……お前の後ろにいる箒が思いっきり睨んでるぞ」

「大丈夫大丈夫、今朝の事で竹刀は使わない筈だし。それ以外ならチョークスリーパーされる以外は何も問題ない」

「そうか。なら望みどおりしてやろう」

「がっ?!」

　おおおおおおおおおおおおおおおお！　スゲー！

　背中が超幸せ！　なにこれスゲー!!　でも苦しい！　柔らかい！　苦しい！

　ひょおおおおおお!!

　織斑がスゲー残念そうな目で見てるけどそんなの知った事か！　俺は、俺は目的の為

には手段を選ばんぞぉおおお!!
「あー、箒。うん……そろそろやめてやれ」
「タップすれば止める」
「たぶん、いや、絶対ソイツは落ちるまで我慢するから止めとけ」
「む……そうか」
「ブハッ、ゲッホゲホ……ナイスおっぱ、ゲホゲホ」
「早くタップしないからそうなる。どうした一夏?」
「いや、なんか、凄い複雑な気分だ」
「?」
おのれ織斑! 貴様は俺の天国をなぜ止めたのだ! リアル天国も近かったかも知れないけど、本望だ!
「ふんっ。これに懲りたらもうイラナイ事は言わないことだな」
「へいへい。それじゃ、まあ、うん。改めまして。はじめまして篠ノ之さん。夏野穂次です」
「篠ノ之箒だ。今朝は――」
「あー、ソレはもう無かったことにしよう。お互い、つーか俺が一方的に悪かった、って事で。制裁(報酬)も受けたし」

「……そうか」
「そうッスよー。アッハッハッ」
「男のくせにヘラヘラと……」
「こういう性格だから仕方ないさ。今更質実剛健を気取っても遅いしなぁ」
「遅いという訳はないだろ」
「あー……ま、直す気がないんだよ」
　そう言い直せば思いっきり眉間に皺を寄せられた。美少女なのに勿体無い。黒い髪も綺麗だな。おっぱいもスゲーし、いい匂いしたし。女の子ってスゲー。
「そういや、夏野は誰と一緒の部屋なんだ？」
「は？　一人部屋だけど……つーか、普通に考えて女の子と同室とかあり得ないだろ」
「……ダヨナー。俺もそう思う」
「織斑。お前は死んでしまえ」
「なんでだよ！　箒、お前からも言ってくれ、俺は何もしてないよな!?」
「ウッセー！　しかも篠ノ之さんとか和系の美少女、大和撫子じゃねぇか！　死ね！　ラッキースケベとか羨ましい！　羨ましい！」
「お前にわかるのかよ！　締め出されて木刀で突きを喰らいそうになった俺の気持ちが！」

「どーせラッキースケベに遭遇して締め出されたんだろ！　ほら見ろ！　篠ノ之さんの顔が真っ赤じゃねぇか！　何を見たんだ!?　何を見たんだ！」
「なんでそんなに必死なんだよ！　何も見てねぇよ！」
「おまっ……！　必死になる気持ちがわからないって……もしかして、ホモか?」
「違ェよ！　どこがどうなってその結論に至ったんだ！」
「ほら見ろ！　アチラのクラスメイトさん達をヒソヒソと話してるぞ！　きっと内容はお前がホモって話題だ！」
「やめろ！　チョット待って！　俺はちゃんと女の子が好きだから！」
「ハッハッハッ。墓穴掘ってるクッソワロタ」
「夏野ォ！　お前わかってるんだろうな!?」
「何がだよ、織斑一夏くん。君がどうなろうがボクの知った事じゃないよ」
「必然と俺の相手はお前になるんだぞ!?」

「そこの女生徒ちょっと待った！　ステイ！」
　メモをした何かを持って走りだす女生徒。足止めする女生徒。虚しくも手を伸ばした俺と織斑の頑張りは無かったことになった。
　十日程後、織斑の知らない所で薄い本が出回っていたのだが、本当に織斑は知らなく

ていいことだ。

ＩＳスーツはエロい

ついに、ついにこの日がやってきてしまった。
「フフフ、ハハハ……アーッハッハッハッハッ!!」
「夏野、黙れ」
「ハイ」
笑わなきゃやってられないからと言って悪の三段高笑いはどうやらいきすぎらしい。
織斑先生！　いっそのことアイアンクローで俺を昇天させてもいいんですよ！
ジロリよりもギロリという擬音が付きそうな眼光が俺を貫く。ＩＳをもってしても織斑先生の攻撃は防げそうに無い。
「つーか、どうして俺からなんですかねー？　それこそファーストである織斑からってのが定石なんじゃねーんですか？」
「捨て石。当て馬。バーター。好きな言葉が選べるぞ。喜べ」
「わぁい……ウレシーナー」
わかりやすく肩を落として溜め息を吐き出す。
俺が装着しているのはデュノア社製の『ラファール・リヴァイヴ』だ。別に打鉄（ウチガネ）でも

よかったのだけれど、刀が合わなかったのでラファールである。政府からの指定も来なかった、というか向こうもこんなに早く俺がＩＳに搭乗して戦うとは思ってなかったんだろうなぁ。

「織斑に専用ＩＳが届いてないから俺って話なんでしょうけど……俺の専用ＩＳとかって来るんですかね？」

「政府側の都合で遅れているそうだ」

「あ、一応出来るんですね。きっとカッコいいんだろうなぁ」

「任せる企業が天下りの受け皿だった気もするが……きっとお前によく合うＩＳが送られてくるだろう」

「皮肉ツスよねー。はぁ……」

視線でコンソールの確認をして、装備一覧をチェックする。標準仕様であるからある程度の汎用性はあるだろうけど、相手は専用機だ。準備のし過ぎという事は無いだろう。

「そんじゃ、時間なんで行きます」

「ああ、適度に負けて来い」

「……こう、もっと教え子を気遣うような、激昂するような言葉はないんスか？」

「灰は下水に流してやろう」

「死んでも尚扱いが酷い！」
「ふっ……ならば勝ってこい。女にいい所を見せるのが男なのだろう？」
「うっす。格好よく死んできますよ」
バーニアを点火させ、明るいアリーナへと踊り出る。広い。明るい、眩しい。
ハイパーセンサーが捉えた金髪美女は俺の姿を見て眉間に皺を寄せている。デッスヨネー。
ヘラヘラと笑い顔を見せながら適度な距離で停止して相手の一言目を待つ。
「――ふざけてますの？」
「怒らないでおくれ、プリンセス。俺だって美麗なドレス姿の君の前にこんな姿で現れたくなかったさ。帰りたい」
「戦うまでもありませんわ。降参し、今までの言葉を全て訂正して、謝罪して、わたくしにひれ伏せば許してあげなくもありませんわ」
「わぁー、寛大なお心だー。　心惹かれる提案だけれど、コッチもソレが出来ない理由があるんで」
「理由？」
「あー……君を弄るのを止められないのさ。楽しいからな」
「っ……！　最後の言葉はそれでよろしくて!?」

「ああ、それなら一つだけ言っておこう、セシリア・オルコット。コレは二番目としての俺の言葉でもない、一人の男としての俺の言葉だ」

しっかりと指を向けてヘラヘラした顔を取り繕い、真面目な顔へと変化させる。

オルコットさんもコチラの意識の変化に何かを気取ったのか真面目な表情でコチラを睨んでいる。睨んだ顔も中々素晴らしい。

「――ＩＳスーツって、エロいよな！」

「なぁっ!?」

白い太ももが露出してるし、なによりおっぱいの形がモノの見事にはっきりわかる。素晴らしい。ＩＳスーツを発案したヤツは絶対に男だ。間違いない。ありがとう、ありがとう！

しかし、オルコットさんはむっちりとした太股が素晴らしい。おっぱいを支える形のＩＳ装甲も素晴らしい。ただただ単純に素晴らしい！

ブザーが響き、模擬戦の開始が告げられた。初動は何よりも大切というけれど、顔を真っ赤にして大型の筒を出現させコチラに向けているオルコットさん相手にコチラの取れる選択肢なんて逃げの一択しかないのだ。

「へ、変態ッ!!」

「アッハッハッー！」

もっと言われたいと思ってしまったのは、決して新しい扉を開いたからという訳ではない。なんせ元々開いていたのだから。

◆◆

セシリア・オルコットは苛立っていた。夏野穂次に煽られたからという訳ではない。いやソレもまた一つの要因だったのかも知れなかったが。

開始当初よりも幾分か気持ちが落ち着いていたセシリアは小さく舌打ちをする。

なぜ、どうして当たらない……！

当然、セシリアとて通常戦闘であるならば自身の愛機であるブルー・ティアーズを十全に運用しただろう。だがしかし、相手は夏野穂次であり、ＩＳ初心者と言っても過言ではなく、そして男なのだ。

特殊兵装は使用しない。奥の手などもっての他。大型光学狙撃兵器のスターライトｍｋⅢで事足りる筈だった。

ダックスハントによく似た気持ちだった事は認めよう。自身の力量に相応な慢心と相手の力量に相応の油断。けれど、蓋を開けてみればどうだ。

確かにスターライトｍｋⅢは当たる。当たりはする。けれど命中というには少しば

かり外れすぎている。
　機体性能を加味して、もしも夏野穂次がラファール・リヴァイヴの性能を全て発揮していたならば理解できる。けれど、ソレは決してない。なぜならば夏野穂次は男だからだ。
　それならば、この結果は夏野穂次自身の力量となる。けれど、それはセシリアの中では認めてはいけない事なのだ。セシリアの中の男は弱く、自分のプライドもない、格好の悪い存在だ。
「――！　どうして当たりませんの!?」
「ハハッ。的当てとは一風変わって有意義でしょうよ！　コッチは内心凍ってるけどな！」
「黙りなさい！　変態！」
「ヒエッ……反応したら怒られたでござる」
「ヘラヘラと笑って……！　馬鹿にするのもいい加減にしなさい！」
「ハッハッ！　攻撃が当たれば考えてやるよ！」
　プライドは無い。弱い。格好悪い。夏野穂次という人物はセシリアの中での「男の人物像」そのものだった。だからこそ油断した。だからこそ手を抜いていた。全力で相手をする事すらも憚られた。

ならば、ならばである。

「――わかりましたわ。本気で相手をしてあげましょう」

「うげっ……アレはいかんでしょ……」

滞空するフィン型の四つの兵器。ソレこそがセシリアの駆るブルー・ティアーズの真価。機体の名前を冠する武装。セシリアは指揮官のように手を振るう。

「往きなさい！　ブルー・ティアーズ！」

「ビット兵器かよ!?　ＳＦは光学兵器だけで十分だって！」

ビット兵器、四基のブルー・ティアーズが穂次へと向かう。穂次の判断は早かった。逃げの一手である。

スターライトｍｋⅢでの攻撃も掠る程度で避け、ブルー・ティアーズの猛攻も距離を取りながら回避に徹する。

そもそも穂次は攻撃に転じることが無かった。ラファール・リヴァイヴに装備されているアサルトライフルをセシリアに向けて引き金を絞ったけれど、ソレも避けながらであり、当たることなどなかった。

内心が凍ってる、というのは決して嘘ではない。自爆覚悟での突貫も考え、グレネードも準備していたが、そんな余裕などない。そもそもセシリアが遠距離型である事すら知らなかった穂次にとって苦肉の策は単なる愚策へと成り下がっていた。

遠距離なら近付けばいいじゃん！

という発想は穂次にはない。いや、浮かびはしたけれど、セシリアに追いつける想像がまったく思いつかない。新たに登場したビットのお陰でさらに想像が遠くなった。

どうせ奥の手とかあるだろうな……。主に近接最強クラスの何か、とか？

スカート状の装甲の奥からアームの付いた丸ノコが出現して想像上の穂次が叫ぶ。

ちなみにセシリアは高笑いをしている。穂次はそんな想像は頭を振って捨てて、回避に集中する。

勝ち筋を想像してもほとんどゼロだ。幾らか見返す事は出来るかも知れないが、ソレをすると本格的に勝つことは出来なくなるだろう。

「ちょこまかと……！　逃げてばかり！　それでも男ですの!?」

「罵られてうれしいが、罵られ方にもよるんだな……今わかったわ」

グレネードをその場に置くように宙に放り投げてアサルトライフルで射抜く。

爆煙が穂次を隠し、セシリアはブルー・ティアーズを自身の近くに戻して迎撃の準備をする。

「んじゃ、頑張る男の子ってのを見せてやるよ」

「なっ?!」

爆煙から出てきた穂次を視認して、セシリアは驚きを隠すことは出来なかった。

爆煙でやられたのか、別の何かの要因か、ソレの原因などどうでもいい。

「目を瞑って……っ！」

「あっはっはっ！　心眼とやらでも開眼するさ！」

相変わらずヘラヘラとした笑みを浮かべ、瞼を閉じている穂次。異常性を認識しながらもセシリアはブルー・ティアーズを起動し、穂次を迎撃する。

放たれた光線は穂次のいた空間で交差する。

つまり、ソレは穂次に命中していないという事実だ。

目を閉じていたのに避けた。その事実がセシリアの頭を支配して、咄嗟の判断が出来なかった。一瞬。そうその一瞬だけが穂次にとっての勝機。

セシリアが行動するまでに、穂次の行動が通ればソレで試合は終わる。

穂次は手にナイフを出現させて握り締める。もう片方の手にはショットガンを握る。

「男のくせにっ！」

「ああ、そうさ。コレが頑張る男の子だ！」

ナイフを振るう。ショットガンをセシリアに向ける。ドチラかが当たればセシリアも無事では済まないだろう。専用機に汎用機で立ち向かったにすればいい出来だ。

けれど、夏野穂次自身の思考の通り、コレは勝ち筋ではない。決して勝てない動作な

のだ。
セシリアの舌打ち。スカート状の装甲が上がり、そこから見えたのは弾道型の兵器。
穂次の思考はソレを確認するやいなやてんやわんやとして「アカン」とだけ思考を始めた。
穂次の感覚は真っ白に染まった。

◆◆

「いや、アレはマジで無理。つーか勝ち筋なさすぎぃ」
目が覚めると保健室だった。
ベッドの上でゴロゴロとしながら反省する。反省点が多すぎるどころか、自分にとって都合のいい奇跡が何重にも被さってようやく勝てる勝負だったと言っても過言じゃない。
ＩＳスーツを着用したオルコットさんはそれはもう素晴らしいと思った。あの時、接近したあの時に格好なんてつけずにおっぱいに触ればよかった。それだけが唯一の心残りだ。

「あー、あー、負けたー負けたー」
「当然ですわ。むしろ勝てると思っていましたの？」
「思ってなかったけど、実際に負けるのとは別問題なんだよー」
「そういうモノですの？」
「そういうモノ。で、お疲れ様、オルコットさん。一夏との試合はどうだった？」
保健室に入ってコチラに話掛けてきたオルコットさん。俺はベッドで体を起こして自身がＩＳスーツを着ていることを確認する。裸でもないし、着替えさせられてもない。俺の貞操は守られてしまったんやなって……。
「アナタとの試合の後でしたので、コチラの手札がわかっている前提で準備をしましたが……」
「あー、フェアじゃないとかで戦闘見てなかったのかー」
「らしいですわ……」
「ま、それが男の子ってヤツだから仕方ないね」
「意味がわかりませんわ……」
「可愛い女の子には頑張って格好良く見せたいんだよ。俺の頑張りがさっぱり意味をなしてないのが解せないけど」
「……そういうモノですか？」

「そういうモノ。まあ負けた俺が言うのも何だけどね」
「アレは負けて当然の試合だったので、そこまで気を落とさなくても」
「いやぁ、ホント……そういえば、俺って負けたけど平伏して足を舐めた方がいい？」
「そこまでしていただかなくても……というより何か増えてません？」
「そこで土下座して、オルコットさんが足を俺の頭を踏むぐらいしないと今までの発言が取り消せそうにないんですがソレは……」
「いえ、えっと……」
「それでそれで、是非とも家畜を見るような瞳で『変態』と罵っていただければ」
「……死ね、変態」
「ありがとうございますッ！」
ジト目で睨まれて罵られたでござる。
へらへらと笑っていれば溜め息を吐き出されたけれど、俺は元気です。いや決して下半身が元気という訳じゃない。確かに一言で色々とイケナイ感じになって布団で隠してるけれど。
「それがアナタですのね」
「え？　見えてた？」
「は？　何がですの？」

「……あー、いや、うん。ナンデモナイデス」
「まあいいですわ……。それと、まあ、あれです。見直してあげてもいいですわ」
「へ？」
　くりくりと恥ずかしそうに髪を指で弄っているオルコットさん。俺が呆けたような声を出すと、少しばかり「むっ」とした表情に変わる。可愛い。
「だから。その……試合の最後だけは格好よ――」
「夏野っ！　大丈夫か！」
「織斑！　タイミング悪すぎぃ！」
「は？　なんだよ！　お前が倒れたって聞いて、千冬姉の説教終わってからすぐ来てやったのに！」
「ほら見ろよ！　オルコットさんの顔を！　さっき俺を罵ったときよりも殺意に芽生えてるぞ！」
「そんな殺意よりも後ろから来てる殺意の方が怖いんだ！　匿ってくれ！」
「お前は何!?　俺の見舞いに来たの？　それとも逃げてきたの!?」
「逃げてきたに決まってんだろ！　お前なんてどうでもいい！」
「ヒエッ……ホモ扱いしてから俺の取り扱い酷すぎぃ」
「貴様ら。保健室で騒ぐとは、いい度胸だ」

「ひぃ！　鬼か!?　悪魔か!?」
「夏野！　落ち着け、よく見るんだ！　千冬姉だ！」
このあとムチャクチャ校庭周回した。

そんな事はどうだっていい！

結果を言えば、まあソレは順当だったのかも知れない。
織斑一夏がクラス代表になるのも、ファーストだから、織斑だから、加えてオルコットさんによる意味の分からない言葉という理由もあり、あっさりと決定した。
当然、そこには織斑一夏による
「いや、ソレを言うなら夏野はどうなんだよ」
という言葉もあったけれど誰かが何かを言う前に
「専用機持ってない奴よりも持ってる奴が優先だろ」
という悔し紛れの言葉を放った俺により封殺された。別に専用機とか羨ましくねぇし！　つーか、俺の専用機って何が来るんですかね……。嫌な予感しかしないんですがソレは……。
何にしろ、ＩＳに関して俺に選択肢なんて元々ないんだけどな！　悲しい。
「夏野の専用機ってどんなのが来るんだろうな」
「さぁ？　少なくともお前のヤツよりもピーキーじゃない事を祈るわ」
「だよなぁ、やっぱ特化しすぎだよな……はぁ」

「個人的には好きだぞ？　一撃必殺一撃離脱のワンオフ。量産機も好きだけど」
「でも遠距離が無いってやっぱり辛いだろ」
「移動技法か何かに瞬時加速とかって無かったっけか」
「なんだソレ？」
「おま……予習ぐらいしとけよ。教科書に書いてたぞ」
「ついてくだけで精一杯デス」
「わからんでもないけど……あれだ、一瞬で加速するよ！　って感じ」
「あー……それで接近して、一撃か」
「ああ……ロマン溢れるな」
「つーか、ロマンだけしかねぇよ。もっと堅実に行きたい」
「ある種堅実だと思うぞ？　剣術だけに」
「面白くないぞ。　というか、一撃必殺のドコが堅実なんだよ……奇襲もいい所だろ」
「勝てる方法が一つでも、ソレを繰り返せば堅実だな！」
「そんなの出来るヤツ人間じゃねぇよ！」
「お前の姉なんだよなぁ……」
「あっ……」

ＩＳスーツに着替えながらの会話に織斑の言葉が止まる。当然、男が二人なので誰か

に聞かれる訳ではない。聞かれていたらこんな馬鹿な会話を笑われるだろう。一名だけ、聞いていたならば折檻を受けるのだが、その心配は無い。無い筈。たぶん……。

「で、夏野はどんなＩＳがいいんだ?」

「希望なんてない。出来れば武器はちゃんとしてほしいぐらいだな。刀だけとか戦えん」

「そりゃぁ、刀だけで戦えるヤツがいたら見てみたいな!」

「アッハッハッ!　ロッカーに鏡が付いてるし、アリーナに行きゃァ実戦レベルで扱ってた人?もいるぞ!」

「……この話は止めよう。嫌な予感がした」

「奇遇だな。俺も背筋に何かが走った所だ……遅刻もしそうだしさっさと行こう」

お互いに顔を青くして頭にへばり付いた折檻を振り払う。きっと無い筈だ。当然だ。かの美人教師が幾ら地獄耳であって遠く離れた男子更衣室の俺たちの会話なんて聞こえてない筈なのだ。王様の耳はロバの耳。

ともあれ、ほどよく鍛えられた腹筋と腕を見せ付けている織斑。男の俺から見ても惚れ惚れする筋肉だ……ん?　ホモっぽい思考になってしまった。

「どうした?　夏野」

「……いい筋肉してるな、と」

「お、おう。ありがとう」
「その筋肉で何人の男を落としたんですかね？」
「どうして男を落とす必要があるんだよ!?　夏野は俺をホモ扱いしてどうしたいんだよ!?」
「え？　どうって言われると……別に？」
「面白がってるだけかよ！」
「ああ！　それ以外に無いな！」
「性質（タチ）が悪すぎだろ！」
「タチって……お前……」
「え？　何かマズイ事言ったか？」
「いいんやで。お前はそのままでいいんやで」
「変な関西弁を使うなよ！」
　ややいのやいのと騒ぎながら廊下を走らずに早歩きで歩いている俺と織斑は相変わらず好奇な視線に晒されているが、その殆んどが織斑の腹筋に向いていたから何も問題は無い。
　肌の露出が少ない俺に向かってどうしてか舌打ちが聞こえた様な気がしたけれど、自慢出来るほど筋肉が無いんだよ！　チクショウめ！

「で、専用機を持ってるオルコットさんと織斑はわかるんですけど、なんで俺まで訓練機で実演しなくちゃいけないんッスかね……」
「文句があるか。そうかそうか」
「いえいえ、ソンナ滅相もナイ！　織斑美人教師の言う事なら喩え火の中水の中ッスよ！」
「……チッ」
どうして舌打ちされたんですかね？
まあ気にしているとまた拳が飛んでくるのでスグに思考を捨てる。何も気にしてない気にしてない。
既に訓練機であるラファール・リヴァイヴを纏わされている俺と違って織斑とオルコットさんは換装のところからやらされるらしく、と言ってもそれほどの時間は掛からない。
本当に秒単位の話である。
「へぇ……ソレが織斑のＩＳか！　カッケー！　スゲー！」

「そ、そうか？」
「おお！　武装が刀だけってのもカッコいいと思うぞッ☆」
「嫌味だったな、チクショウ」
「騒ぐな馬鹿共。私とてＩＳを殴るのは痛い」
「え？」
「何か言いたそうだな、夏野」
「イエー！　ナニモアリマセン！」
そもそもＩＳを殴るという発想自体が浮かばないと思うんですがソレは……。
いや、この人ならヤる。つーか、ＩＳの装甲が負けそう（確信。
「よし、飛べ」
声に反応するように織斑とオルコットさんが天高く飛び上がる。ひえー、速いなぁ。スピードがまるで違う。
見上げていると嫌な予感がして、何も見ずに天高く逃げ出す。俺の居た場所に『シュッセキボ』が通過して舌打ちが聞こえた様な気がしたけれど、きっと気のせいだろう。気のせいがいい。
空に行けばオルコットさんには当然の様に追いつくことが出来ず、織斑にすら追いつけない。そもそもスペックが違いすぎるし、直線を進むだけならば追いつける訳が無

い。
「夏野。何をしている。さっさと追いつけ」
「はい？　いやいや、スペック考えて言ってくださいよー。無理無理。最新鋭機に汎用量産機が追いつけるなんてネーですって」
「追いつけ」
「アッハイ」
　織斑先生からの叱咤を受けて速度を上げる。ホント、ＩＳには無理をさせてるし、このままの速度では回避も何も出来はしない。
「あら、夏野さんも来ましたのね」
「どうも。待ち合わせには遅れない様にしているからな」
「夏野に追いつかれてスゲー怒られてるんだけど？」
「お前に追いつけってスゲー怒られたから知らん」
「あの時もでしたけれど、ラファールでは普通は出せない速度なのですけど？」
「あー……あれだ。実は俺に特殊能力があってだな」
「ないだろ」
「無いですわね」
「酷くないッスかね？　まあアレだ。ちょっとした裏技だ」

「あの目を閉じていたのと何か関係ありますの？」
「禁則事項ですッ（はぁと」
「ハートまで口に出すと凄い滑稽だな」
「言いたくないならいいですわ。だからその気持ち悪い喋り方をやめて下さるかしら？」
「やっぱ扱いが酷くなってる気がする……気がしない？」
特殊な能力は無い。そもそも俺に特殊能力があったなら時間停止がいい。時間停止の能力さえあれば、なんとウハウハなのだ。何がとは言わないけれど、ウハウハである。
いや、ともかくとして、全ては俺の力でも何でもなくてＩＳが頑張ってくれているだけなのだ。ＩＳ様様である。ラファールだって頑張れば出来る子なんだゾ！　いや、ワンオフの性能には負けるけどさ。
「つーか、オルコットさんはスピード落としてくれてるから分かるんだけど。織斑はもっとスピード出るだろ」
「いや、空飛ぶってイメージがサッパリ」
「お前、和風美少女の篠ノ之さんに色々手取り足取り教えてもらってるんじゃなかったのか？」
「『ぐっ、とする感じ』とか『どかーん、という感覚だ』とか言われて分かるか？」

「ナニソレ怖い」
「一夏っ！　いつまでそんな所に居るつもりだ！　さっさと降りて来い！　そして夏野ぉ！　覚えていろよ！」
「ヒェッ……なんで俺だけなんですかね……」
　ハイパーセンサーが捉えたおっぱいさんは怒り心頭という表情でおっぱい先生からインカムを奪っていた。しかしながらハイパーセンサーは素晴らしい。おっぱいの一挙動一挙動が実に鮮明に捉える事が出来る。素晴らしい。俺の専用機には録画機能を絶対に付ける事を心に誓う。
　ともかくとして、おたおたとしている山田先生が可愛すぎて死にそう。
「なあ織斑。録画機能とかない？　山田先生が可愛すぎるんだが」
「ねぇよ。というか、オープンに変態発言するな」
「何が変態なんだよ。猫を見て可愛いって普通に言うだろ。　可愛いものを可愛いということは決して変態的発言ではない！　普通の事なのだ！　おっぱいがスゲーから録画をしてくれ！」
「おい。セシリアからの視線がキツくなったぞ」
「そんな事はどうだっていい！　重要な事じゃない！」
「おい」

「織斑、オルコット、阿呆。急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ。阿呆は地面にでもめり込んでいろ」

淡々と死ねと言われた気がする。というか、言われた。肩を落として落ち込んでいるとオルコットさんから秘匿通信が開かれた。

『死んでもよろしくてよ？』

すごいいい笑顔だった。思わず見惚れた。言ってることは物騒極まり無かったけれど。

そんな発言に固まっているとオルコットさんは早々と急降下していき、地面にぶつかることも無く停止したようだ。

「で、どっちから行くんだ？」

「俺はほら、地面に埋まらないといけないから（使命感」

「お、おう。じゃあ、俺が行くな」

「いってらー」

ブツブツと自分の想像を固めるように何かを呟いている織斑。ロケットファイアーとか聞こえたぞ、大丈夫か？

織斑の姿は一瞬で消えた。肉眼では捉えきれず、ハイパーセンサーをもってしてようやく捉えきれた織斑はその速度を維持したまま地面へと向かう。盛大な音が響いた。

「……なんだろ、アレだ。オチを全部持って行かれた気がする」

溜め息を一つ吐き出してＰＩＣを切る。重力に従い頭から落下していく。地面が上に、空が下に。風切り音が鼓膜を揺らしボンヤリと思考してしまう。

このまま落下し続ければ、地面にぶち当たる。ＰＩＣを切断しているから、きっと死んでしまうかも知れない。

瞼を落として、世界を閉ざす。閉じたはずの視界はハイパーセンサーにより補完される。全てをＩＳへと任せる。感覚も、視界も、全てをＩＳへと託す。

地面が近くなり、瞼を上げる。どうしてか逆さまなクラスメイト達、オルコットさんも含んだ全員が口を覆っている。

ふわり、と体を反転させて地面の少し上で停止する。

「うむ、完璧である」

「阿呆。誰が自然落下してこいと言った？」

「痛い！　ＰＩＣ越しなのに痛い!?　どういうこと!?」

「ふん……大方お前がＰＩＣを切っていたからだろう。阿呆」

「アッハッハッ！　絶対織斑先生の人外めいた怪力のアデデデデデ!!　アイアンクローは普通に痛い！　痛いですって！」

「そうだな」

「ごめんなさい！　すいませんでした！　教え子の頭が柘榴みたいになっちゃいますって！」
「そうだな」
「誰か止めて!?　殺人事件になっちゃう！　身元不明死体が一つ出来ちゃう!?」
　ようやく解放されて思わず地面に蹲る。装甲越しだった筈なのに、痛かった。本当にどうなってんだ、あの人。人？　いいや、アレは人ではない。千冬なのだ。
「また要らないことを考えているようだな」
「イエ！　滅相もナイナリ！」
「まあいい。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来る様になっただろう」
「は、はぁ」
「お前も受けるか？」
「は、はい！　出来ます！　やります！　ガンバリマス！」
「ハッハッ、ざまぁ」
「夏野、次は潰すぞ」
「う、うぃ……」
　怖い。ただただ怖かった。
　冷や汗をだらだらと流しながら両手を上げておく。

織斑は右腕を左手で掴むという構えをして数秒。光が収縮し、その手には白銀の剣が握られていた。雪片弐型。かのブリュンヒルデが用いた剣の名を受け継いだ一振。

そのブリュンヒルデはと言えば、その剣を見て何かを思う訳でもなく、ただただ鋭い瞳で織斑を睨みつけている。

「遅い。〇・五秒で出せるようになれ」

そして褒めもしない。この人にとっては当たり前のことなのだろう。人外と比べられて織斑も残念なことだ。アッハッハッハッ。

「ふべっ」

「阿呆は放っておく。次、セシリア。武装展開をしろ」

「はい」

頭に何かの衝撃を受けた。ハイパーセンサーでギリギリ捉えられたソレは黒い塊で『シュッセキボ』と書かれていた。きっとアレは武器なのだ。痛い。

オルコットさんの武装展開は速い。織斑に比べれば雲泥の差とも言える。

どうやらソレには織斑先生もご満悦――。

「さすがだな、代表候補生。――ただし、そのポーズはやめろ」

「で、ですがコレはわたくしがイメージをまとめるための――」

「直せ」

「――、はい……」

　ともいかないようだ。つーか、合格基準が高すぎないですかね？　先のことを考えてると確かにクセが定着する前に直すことは大切だろうけどさ。オルコットさんが前に構えて銃を出現させたらおっぱいが鑑賞できないし。そのままでイイんですよ！　オルコットさん！

「おい、阿呆」

「何も考えてません！　俺は至って真面目に見てました！」

「まあいい。アサルトライフルを出せ」

「はい」

　右手を軽く振るって握り締める。セーフティは外さず、トリガーに指が掛かっている。

「次、グレネード」

「――はいさ」

　ライフルから手を放し『収納』し、右手の平を上に向けてグレネードを出現させて握る。当然、ピンは抜かれていない。

「近接武装」

「って、一応、ナイフが二種類あるんですが？」

「両方出せ。出来るだろ」
「まあ……」
グレネードを『収納』してナイフを両手に握り締める。互いに長さの違うナイフであるが、俺にはどういう用途で使うのかがさっぱりである。ただ単に二種類のナイフというだけしか分からない。
「おぉ……」
クラスメイト達から聞こえる感嘆の声。そんな声に織斑先生は溜め息を吐き出しながら言葉を出す。
「阿呆でもココまで出来る様になる」
「織斑先生、もっと素直に褒めてもいいんですよ？」
「このドヤ顔を潰す為にも各自、修練を積むように」
「「ハイ！」」
「凄い一体感だけど、なんでだろ、涙が出てきた……」
目標がある事はいい事だ。その目標が俺の顔面を潰す為という目標でなければもっとよかった。
「時間だな。今日の授業はココまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」
「はい……」

「ハッハッ、ざまぁ」
「阿呆。お前もだ」
「ひぇ……俺は悪くないじゃないッスか」
「私の命令だぞ？　喜べ」
「ヤッターー……やったー……はぁ」
「お、おう。その……ありがとう」
「ふっ、感謝される筋合いはない」
「そうだな。じゃあさっさとやろう」
「なんか無視安定とか思ってないか？　なぁ！　なぁ！」
　土を取りに織斑とふざけながら移動していると高速で小さな石が俺と織斑の間を通過した。発射された場所には織斑先生が珍しくニッコリと笑っていた。
　ハイパーセンサーで捉えられた唇の動きで俺たちの背筋は凍った。「いい度胸だ」。変哲もない言葉だ。けれど俺たちにとっては恐ろしい言葉である事には違いなかった。

「夏野って凄いな」
「まあ、俺が凄いのは分かってたことだけどな」

「……さて、さっさと終わらせるかー」
「ごめん。謝るからスルーはやめてくれ。心にくる」
「ならふざけなければいいだろ？」
「ヘラヘラ笑うのとふざけるのをやめると死んじゃう！」
「あ、そう」
「死んじゃう!?」
「ソレはどうでもいいんだけどさ」
「お、おう……俺の命って軽いなぁ」
「武装展開のコツとかってあるのか？　日常で刀出すとかさっぱり感覚が掴めないんだけど」
「あー……まあそうだろうなー」
「というか、お前があんなにスラスラと銃出してるのも疑問なんだけど？」
「フッフッフッ、気付いてしまったか、織斑一夏ッ！　俺が裏の住人だと言うことに！」
「お前ッ！　やはり、スパイか何かだったんだな！」
「ハッハッハッ！　バレてしまったからには仕方ない！　ココで死んでもらうぞ！　織斑一夏ぁ！」
「クッ!?　こんな所で死んで堪るか！」

「……何をやってますの？」
「わからん」
「……夏野、黙ってやるぞー」
「ういーッス」
　盛り上がったテンションが美少女二人の声により平らになる。そう、まるで盛り上がった地面をトンボで均すように！
　男の子同士にしか分からない世界があるのだ。
「それで、コツとかあるのかよー」
「んー、たぶん俺に聞くよりもオルコットさんに聞くほうが有意義だと思うぞ？」
「男の方が楽」
「お前……だから俺にホモとか言われるんだぞ？」
「そうですわ！　そんなおちゃらけた男よりもわたくしが二人きりで――」
「いいや、一夏には私が教えるんだ。お前など必要ない」
「なんですって!?」
「あー、うん。なんか意味が分かったわ」
「納得してくれてありがとう」
　ややいのやいのと女二人なのに姦しく騒いでいるオルコットさんと篠ノ之さんを遠い

目で見ながら納得する。アレは無理かも知れんね。
「っても、俺は反復練習で無理矢理意識付けしたからなぁ」
「やっぱソレしかないよなー」
「でも刀だろ？　ほら、抜刀とか、構えとかで意識付けできりゃアそのまま行動に移せるぞ」
「なるほど……出現させる感じで思ってたのが間違いだったのか」
「間違いって訳じゃねぇけど。ＩＳって基本的にはコッチの思考に従ってくれるから、無理に出すってよりも握り締めて出す、って方が想像しやすいんじゃね？」
「うーん……まあ要練習だな」
「努力は嘘を吐かないってのはいい言葉だねぇ」
「夏野さん。そういえば反復練習と言いましたわね？」
「あー……言った？」
「言ってたな」
「貴方も一夏さん同様にＩＳに触れたのは最近の事でしょう？　少なくとも授業で触れてはなかったと思いますが、どこで反復練習なんてしたんですの？」
「そこは、ほら……俺って天才だからねっ☆」
「あ、そうですか」

「待って待って、もうチョット構って！」
「いやですわ。面倒くさい」
「えーん、イチえも～ん。オルコットさんが苛めるよぉ」
「よかったな」
「実はちょっと嬉しい」
「ひっ……」
「冗談だから、マジで引かれるのは心が痛むからやめて」
俺の心だって傷つくんだぜ！
まあ冗談と言っただけで嘘とは言ってないから何も問題はない。オルコットさんの視線が相変わらずキツイけど、ちゃんと冗談として受け取ってくれているようだ。
オルコットさんは俺を苛めてストレス解消、俺は単純に嬉しい。まさにＷＩＮ―ＷＩＮの関係と言える。オルコットさんの心的疲労はまた別の話だ。

するん、ペタン

日は既に落ちて、と言っても真夜中という訳でもなく、精々夕方から幾らか時間が過ぎた程度と言える世界。

俺は絶賛大量のプリントの束を持ち上げて歩いていた。なぜかって？　そりゃぁ、鬼斑先生の言いつけだからだ。

「このご時世に紙媒体とかｗｗｗクッソワロタｗｗｗ」

と言った俺は美という言葉全てを尽くしても足りない織斑先生がスチール缶を容易く潰した事で二つ返事で了承した。縦に圧縮される様に潰れたスチール缶はゴミ箱の中へと放られ、きっと拒否していたならば俺もグシャっとされてゴミ箱の中だっただろう。

ただでさえトイレが遠いのだから脅すのは勘弁してほしい。マジで。

「……ん？」

目を細める訳でもなく、ただ聞こえた姦しい声がよく聴く声だと気付いた。オルコットさんの高い声はよく響くし、ソレに対抗するようにキャンキャン騒いでいる篠ノ之さんの声もかなり響いている。どうせ間にいるだろう織斑の声はさっぱり聞こえない。

さて、俺が足を止めたのは別の理由だ。

別にオルコットさんと篠ノ之さんの姦しい喧嘩を聞いて止まった訳じゃない。もう一つ言えばスカートが捲れそう、とかそういうアレでもない。風の通り道の都合上、コでスカートが捲れ上がる事がない事は既に知っている。

姦しい声のする方向。つまるところ三人のいる方向を思いっきり睨んでいる少女がいるのだ。ツインテ少女。生憎顔は見えないけれど、俺は知っている。どうせこんな感じに愛らしい姿形のヤツの顔は残念だっていう事は知っている。後ろ姿が可愛いというのはそれだけで男にとって罪なのだ。

振り返るんじゃないぞ、と心の中で唱えながらその少女の横を素通りする。素通りしてからは唱える内容が「見るんじゃない、見ると後悔するんだから」に変化してなるべく早足で通り過ぎる。いくらＩＳ学園の女生徒のレベルが高いと言っても、その全てのレベルが高いという訳ではないだろう。そもそも少女はＩＳ学園の制服を着ていないからその統計は意味を為さない。

「ちょっと、アンタ」

「……」

俺じゃない。俺じゃない。それにしても声はいいな。いいや、騙されるんじゃない俺。可愛い声をしていても、というじゃないか。そもそも人間は中身なのだ。中身が大

切、ンッンー、名言だな。
「アンタよ！　そこの男！　こんな時代に紙媒体なんて持ってるアンタ！　無視すんな！」
「へいへい。何か御用ですか……ね」
「用も何も、アンタ、夏野穂次でしょ？」
なんということだろう！　俺の経験を全て覆す事実が起こった！　思わず言葉が詰まってしまったじゃないか。
愛らしい顔立ちというよりは快活な少女を思わせる気の強そうな表情。口ぶりからしても気が強いのだろう。ともかくとして、やっぱり人間は外身だよ、ブラザー。
惜しむべきは、するん、ペタンであるという事だろうか。
「アンタ、あいつらが誰か知ってる？」
「ん？　織斑の両隣にいる二人の話？」
「そうよ！　あんなに近くに……！」
あ……（察し。
ギリギリと歯軋りでもしそうな程に織斑を睨みつけている少女。コッチに向いていないというのに怖さが伝わってくる。織斑、気付くんだ！　きっとまだ傷は浅い！
「あの二人は……そう、織斑一夏を狙う存在だ」

「やっぱり！」
「ああ。けれど織斑はそんなハニートラップには決して靡かなかった。どうしてかわかるかい？」
「ま、まさか……私を」
「そう、ヤツはホモ――同性愛に目覚めていたのだッ！」
「……」
　少女がボストンバックを落とした。俺は笑いそうになる顔を収め、いつものヘラヘラした顔を真面目な、そして悲痛な顔をして言葉を吐き出していく。
「アイツは、来る日も来る日も俺へと近寄り、女には一切振り向かず……おっと、スマナイ。ここから先は織斑の意志と性嗜好を尊重して言葉を収めさせてもらうよ」
「……う、嘘よ！」
「さあ、どうかな。少なくとも、初対面の君に対して俺が嘘を吐くメリットはない筈だけれど……」
　織斑を弄れるというメリットはある。当然、その事に対しては言わない。言う訳が無い。
　落としたグシャグシャな紙を拾い上げれば転入届の提出場所が記載されている。
「なるほど、君は転入生なのか。なら、明日にでも織斑に聞いてみるがいい。織斑はきっ

と俺を紹介する為に俺の名前を呼ぶだろう。尤も、俺はノーマルだから、君に協力するのも吝かではない」
「ほ、ホントッ!?」
「ああ。本当だ。俺もホモの扱いには困っていたんだ。二人でアイツをノーマルに戻そう」
「ええ！　よろしくね！」
「よろしく。　それで、本校舎の総合受付だな。俺が案内をしよう」
途中で織斑に出会われてはせっかくの仕込が全て無駄になる。ククク、織斑一夏、着々とハーレムが築けると思うなよ……！

結局、名前も聞かなかった少女と別れて俺は織斑先生へとプリントの束を渡した。渡した端から山田先生へと渡されていた気がするが、きっと見間違いだろう。うん。
涙目になっていた可愛い山田先生を拝んでから寮へと戻ってきた俺は思わず口をへの字に曲げてしまった。どうやら俺のいない間に『織斑一夏クラス代表就任パーティ』とやらが開かれていたらしい。開かれていた、というので既に終わってしまった事が分かるだろう。

つまり、つまりである。俺は完全にスルーされていたのだ！　普通に落ち込みそう……。

まあ、明日になれば仕込みがきっと上手く動いてくれるだろうからソレを楽しみにしておこう。ククク！　織斑一夏ァ！　俺を忘れてパーティを楽しんでいたお前を俺は決して許しはしないぞぉぉおおお!!

「お、夏野。戻ってたのか」
「いんや、今帰ったところだ」
「そっか。おかえり」
「お、おう……つーか、なんで俺の部屋の近くにいるんだよ」
「お前が見当たらなかったからな。俺だけ楽しむってのも、なんか違うし……。お前って一人部屋だろ？　お菓子とか色々確保しといたから――」
「お前っていいヤツだな！」
「俺たち友達だろ！」
「ああ！　今日は寝かさないぜ！」
「夏野、その言葉で反応する女の子達がそこらにいるからやめてくれ」
キリッとした顔で言った俺に対してどこか遠い目で俺の肩に手を置いた織斑はそう

言った。視線だけ動かせば嬉しそうに内緒話をしている女生徒達と目があった。ニッコリ。

あの子は確か、そう、アレだ。掛け算の本を俺に譲ってくれた子だ。というより発見したらくれただけなんだけれど、貰える物は全部貰う性質の俺は心に大きな傷を負った。掛け算って、スゲー。

織斑を部屋の中へと招きいれ、お互いに愚痴を言うためにお菓子を広げ、鍵を締めておく。黒髪ポニテとか金髪ロールの美少女二人が突撃する気がしたからだ。

「というか、何してたんだ?」
「んー? 鬼の手伝いだよ」
「あーなるほど。千冬姉ってあれで結構ズボラなんだぜ?」
「マジで? 家事とか凄い上手そう、つーか、なんでも出来そうだけど」
「ないない。織斑家の家事は俺の担当だからな」
「……一夏。お前はいい嫁になるな。お父さん、嬉しいような悲しいような気持ちダゾ」
「低い声で何言ってんだよ。それに俺が誰かと付き合うとか考えれないし」
「はぁ? 篠ノ之さんとかどうなんだよー。仲いいじゃん」
「箒は幼馴染だからだよ」

「……ん？」
「……ん？」
「ナニソレ怖い」
「どういう事だよ」
「いや、なんつーか。まあガンバレ☆」
「なんで爽やかな笑顔なんだよ。俺は何を頑張ればいいんだよ」
「別にお前に激励してる訳じゃねぇよ」
「俺はいいよ。お前こそどうなんだよ」
「おっぱいが触りたい」
「そのド直球過ぎる欲求を少しは隠した方がいいぞー。というか、女の子は胸じゃねぇだろ」
「あん？　おっぱいこそ至高だろ」
「内面がよければソレでいい」
「そりゃぁ卑怯ってもんだろ、織斑くんよぉ」
「どういう事だよ」
「じゃあ聞くけどさー。お前、今のその内面がよければー、って誰を基準に言ってんだよ」

「誰って、別に基準なんてないけど」
「お前の周りには美人しかいねーって話だよ！　織斑先生も含みで篠ノ之さんも幼馴染、勉強してていSの初期段階の研究資料とかも手を伸ばしたけど、篠ノ之博士も美人じゃねぇか！」
「あー、束さんはアレでブッ飛んでるから」
「え、ナニソレ怖い……どんな人なんだ？」
「んー……頭はスゲーいいよ。俺と千冬姉、あと箒にだけは優しい」
「普通にいい人じゃねーか。おっぱいでけーし」
「俺たち以外への拒絶具合が半端じゃねぇんだよ。気安く話しかけないでくれるかな？　とか普通に言いそうだし」
「ナニソレコワイ」
「ま、それでも俺にとってはちょっとオカシナ普通のお姉さんだったからなぁ」
「はえー……篠ノ之さんの性格を考えてると中々想像つかないな」
「あー……箒の前で束さんの話はNGな。色々あって連絡も取ってないらしい」
「ういうい。つーか、このご時世で篠ノ之博士と普通に連絡取れるとかそのまま国家機関にご案内だろ」
「マジかよ。こえぇ」

「一時期政府機関でお世話になってたけど、あそこは怖いぞ。マジで」
「お前って何かしたのか？」
「お前がＩＳ動かしたからなー。それでゼロだった筈の可能性に引っ掛かったのが俺」
「あー……なんか悪い」
「もう気にしてねぇよ。つーか、お前も不可抗力みたいなモンだったんだろ？」
「ああ。受験会場を間違えてさー」
「ありえなさすぎぃ！」
そんな感じで愚痴大会になり、結局何も解決したという訳でもなく、ただただケラケラと笑い合ってお互いの夜が更けていく。
途中で扉がガンガン叩かれて、俺がマジビビリしたとか、そういう事実は決してない。
無い。

「夏野くーん、転入生の噂って聞いた？」
「ああ、可愛い子だったぞっ」

「えーもう会ったんだ!?　どんな子だった？　タイプ？」
「……いや、好みじゃないけど可愛かったよ、コレはマジで」
「夏野君はみんなに可愛いっていうじゃーん」
「みんな可愛いから仕方ないじゃーん」
　そんな感じな軽いノリの会話が飛び交う。ヘラヘラ笑っている俺に対して気安く話しかけてくれるのは嬉しい。可愛い女の子に喋りかけられて嫌な男などいる訳が無い。
　転入生というのは昨晩の少女の事だろう。少女を思い出して、一部分を思い出して、やっぱり好みとは違うことを再確認する。
「穂次。おはよう」
「おう、一夏。おはよう」
　昨晩の愚痴大会で随分と親交も深くなり、というよりも苗字で呼び合うのも何か面倒になって名前で呼び合うようになった。
　そのお陰で、また薄い本が厚くなる、という情報を得てしまったのだけれど、俺はどうすればいいんだ……。
「それで、穂次って転入生に会ったのか？」
「ああ。お前の好きそうなロリータ系だったぞッ☆」
「死ね」

「ひぃ……篠ノ之さん、アナタの幼馴染が物騒ですよ！」
「お前が死ねば何も問題なかろう？」
「いや、普通に首を傾げられて言われると流石に傷つく……」
　可愛いからいいけれどさ。
　いつもキリッとしているからか、こうしてキョトンとしている表情は本当に可愛く思う。おっぱいもデカイし。
「中国の代表候補生だそうですわね」
「わたくしの存在を危ぶんでようやく中国が動きだしましたのね、オーッホッホッホッ！　って言いそうだなぁ」
「言いませんわよ！　夏野さんの中でのわたくしの印象はどうなってますの……？」
「金髪の美しいタレ目ロイヤル美少女」
「……面と向かって言われると少し照れますわね」
「ステキなおっぱいと太股もイイネ！」
「……その口にスターライトｍｋⅢを詰めて引き金を引いてもよろしくて？」
「目がマジッスよ、オルコットさん！」
「は？」
「すいません、黙っときます」

褒めたつもりなんだけどなぁ。女の子って分からない。
それにしても長いスカートからの黒ストッキングのおみ足も素晴らしいですね！
言うと次こそ警告なしにぶち込まれそうだから言わないけど。
「どんなヤツなんだろうな」
「ん？　向こうは一夏の事を知ってるようだったけど？」
「え？」
「一夏ぁ！　お前というヤツは！　私がいない間にもう手を出したのか!?」
「ま、待て待て箒！　誤解だ！　というか俺は一度も誰かに手を出した覚えはねぇよ！」
「酷いわ一夏！　俺とは一夜限りの遊びだったのね！」
「穂次！　ちょっと黙ってろ！　というか名前ぐらい知ってるんじゃないのか？」
「んー。案内した時に名前は聞かなかったからなぁ。アッチは当然の様に俺の事を知ってたし」
「なんだよ、俺のこと知ってるってメディアに出てたからかよ……」
「いや、ソッチはマジ。知り合いっぽいぞ」
「……中国だろ……。あ、」
「お、思い出したか。ちなみにツインテの快活女子だったぞ」
「アイツか？　……まあ会えば分かるかな」

「……ん？　何か忘れてるような気がする」
「夏野さんどうしましたの？　痴呆ですか？」
「オルコットさん、当たりがキツいッス」
　何か大切な事を忘れているような気がする。まあ忘れるという事はそれほど重要な事ではないのだろう。うん、きっと必要ない記憶だな。
「一夏ァ！」
「やっぱりお前か、鈴！」
　教室の扉を自動扉にも関わらず盛大に力で開けた少女は一夏の名前を叫びながら現れた。
　その少女の名前を、旧友の再会のように喜んで呼んだ一夏。
　あ……。
「いやぁ、久しぶり。ちょうど丸一年ぶりに――」
「アンタ！　ど、同性愛者になったって、ホント？」
「……
　――穂次ィ!!」
「ハイィ!!」

俺はここで失念していた。いくら弄りやすいと思っていても彼は織斑一夏なのだ。

そう、あの織斑千冬と同じ血族だったのだ！

俺を正座させてガミガミと説教をする一夏とソレを見てブツブツと「やっぱり…」とか呟いているツインテ少女。

その後ろで頭を抱えて、少しイライラしてそうな織斑先生。この時ばかりは織斑先生のことが天使に見えた。

八割の冗談と二割の嘘～セクハラを添えて～

「お前のせいだ！」
「なんでだよ……」
　午前中に山田先生に六回。鬼に二回も怒られていた篠ノ之さんが一夏を責める様に詰め寄っている。授業中に上の空だったのだから怒られても仕方ないだろう。
　一夏に昼食を奢る事で許していただいた俺はそんな二人を遠い目で眺めている。どうして一夏は気付かないんだろうなぁ。でも詰め寄ったら篠ノ之さんの竹刀が火を吹くから何も言わないけれど。
「夏野さん、どうかしましたか？　キモチワルイ顔をして」
「容赦も何も無くなってるのはイイ事だけど、もう少し俺を労わってもいいんじゃないッスかね？　オルコットさん」
「どうせ調子に乗るじゃありませんか」
「そりゃぁ、美少女に煽てられたら頑張るのが男の子ってヤツですからなー」
　調子に乗って失敗するまでが俺の常識だ！
　オルコットさん並みの美少女に「頑張って！」とか言われたらそりゃぁ頑張るだろう。

その後に「お疲れ様」とか言われたら頑張った疲れなんて吹き飛ぶし、きっとその後には「頑張ったご褒美ですわ」なんて言って頬にキスとかされて俺の息子がエレクトするに決まってる。ああ、そんな事態になればいいのに！

「待ってたわよ、一夏！」

「お、ツインテ美少女じゃん」

「び、美少女……」

「あー、鈴。コイツは女の子全員にソレを言ってるから真に受けるなよー」

「失敬だな。俺は思った事がスグに口に出るんだ。決して女の子全員に言ってる訳じゃない。つーか、お前の周りに美少女が多いからそう聞こえるんだよ」

そういう話は昨晩にしたばかりだからか、一夏は何かを考えた後に「ふーん」と実に味気ない反応を返した。美人も三日で飽きるというけれど、美人が普通の人であれば飽きもしないのだろう。ともあれ、女性関係において恵まれすぎている一夏は本当に羨ましい。その弊害か、恋愛感情に随分と疎いけれど。

「ツインテさんも一緒に食べる？　一夏を待ってたんだろ？」

「当たり前じゃない！　というよりツインテさんって何よ？」

「名前聞いてねーし。まあ立ち話もアレだから席を取っといてくれよ。一夏も一緒に行ってこい」

「なっ!?　夏野！　こんな誰とも分からないヤツと一夏を二人きりになど――」
「へいへい。んじゃ、篠ノ之さんもヨロシクネ。食券は俺が持ってくから」
「箒が行くなら、俺は残ってもいいんじゃないか？　さすがにお盆を三つも持てないだろ」
「ココで立ち往生してる方が全体的に迷惑だし。一夏が行かねーとツインテさんが一人で可哀想だろ？　それにオルコットさんもいるから三つは持たねぇよ？」
「女の子に持たせるつもりでしたの？」
「……そうやって女を強調させて、俺がなんでもすると思ってるんスかね？　まったく、俺がそんな安い男に見えてるだなんて――」
「……しませんの？」
「――オルコットさんのヤツも持つに決まってんじゃないですか！　だから是非ともお褒めの言葉がほしいなぁ！」
「頑張ってくださいませ」
「ハイ！」
「安いヤツだなぁ……」
　一夏が可哀想な物を見る目で俺を見ている。決して俺は安い男ではない。オルコットさんのお褒めの言葉が高すぎるのだ。そうに決まってるだろう。

俺に食券を渡した一夏と篠ノ之さん、それに既にラーメンを持っていたツインテさんを見送って、お盆を受け取る。

日替わりランチが二つときつねうどん、そして洋食ランチのお盆を持って移動する。

「なかなか器用ですわね」

「腕の上に乗っけてるだけだけどなー」

「わたくしのは冗談でしたのに」

「ま、ちょっとぐらい格好をつけさせてくれ」

「カッコよくはありませんけどね」

「まあ尽くすのも見せ場ってね。こういう所で評価上げとかないとすぐ下がるからなぁ」

「下げてるのは自分ですわよ？」

「自覚してるんだゼッ」

「なお性質が悪いですわね……」

そりゃぁ、俺だって取り繕うぐらいは出来る。出来る筈。出来るんだろうか……無理だな。

そもそも可愛い女の子がＩＳスーツなんてエロい服装で運動しているんだから、我慢なんてする方がむしろ失礼というヤツだろう。だから俺は自重なんてしない。まあ、流

石に変質者扱いはされたくないから実技中は実技に集中してるけど。
「ごっめーんッ、待ったぁ?」
「遅い」
「気持ち悪い」
「二人の反応がシビアすぎて泣きそうです、オルコットさん」
「泣くならどこかに行って下さいます?　目障りですわ」
「……ぐすん」
　酷い扱いを受けた気がする。その証拠にツインテさんが凄い残念なモノを見るような目で俺を見ている。ヤメテ!　そんな目で俺を見ないで!
「テレビで見た夏野穂次とはまったく別なのね」
「あー、アレは、ほらメディア用つーか、上の人にある程度注意を受けてたから」
「上?　アンタ、企業にでも勤めてたの?」
「いんや。まあ、ソコラも含めた自己紹介をするけど。
　政府に戸籍とか色々抹消されて、新しい名前を得た夏野穂次でーす。上って言うのは政府の人ね」
「……」
「あー、鈴。冗談だぞ?　というか穂次の発言の八割ぐらいは冗談で残り二割は嘘だ。

真に受けるだけ無意味だ」
「ネタバラシ早すぎぃ……つーか、それだと俺の言葉に真実がなくね？」
「あったのか？」
「いや……どうだろ……。ん？　つまり、俺が公然とセクハラ発言をしても冗談と思われるってことか！　オルコットさん！　おっぱいを触らせてクダサイ！」
「近くに寄らないでもらえます？　不潔ですわ」
「なあ一夏、冗談として思われてないんだけど……」
「言っていい冗談と悪い冗談があるだろ……」
「なるほど、大体わかったわ。単なる変態なのね」
優しくされないのが確定した。クッ、一夏！　俺を謀ったな！
少なくともツインテさんにセクハラする程俺は落ちぶれちゃいない。安心してくれ、ツインテさん。君の一部分が成長するまでは俺は常に紳士的だ。
「あたしは凰鈴音。中国の代表候補生よ。そして一夏の幼馴染」
「おさななじみ……？」
「ハハッ、篠ノ之さんの思考が停止してんのか知らねーけどスゲー馬鹿っぽい発言してる」
「夏野、黙ってろ」

「アッハイ」
「あー、えっと。箒が引っ越したのが小四の頃だろ？　鈴が引越してきたのは小五の頭だから面識はないのか。　中二まではコッチにいたからちょうど一年ぶりだな」
「へー。愛称で呼ぶぐらい仲がいいんだな。実は付き合ってッテェ!!」
「ＨＡＨＡＨＡ！　夏野、どうした大丈夫か？」
「脛を誰かに思いっきり蹴られた……対面にいる篠ノ之さんが一番有力――」
「ん？」
「だと思ったけどたぶん超常現象だな！　イヤーコワイナー！　チクショー！」
スゲー今まで見たことないステキな笑顔だった。ただしもう一発蹴りが飛んできたけど。
そんな机の下のやり取りなんて一夏が知る訳もなくかなり怪訝な視線で俺のことを見てきた。隣の巨乳さんが原因なんだぞ！
その逆サイドにいる凰さんは少しだけ顔を赤くして――
「べ、べべ別に付き合ってたりなんて――」
「そうだな。ただの幼なじみだ」
「……」
一気に顔が険しくなった。中々忙しいな、この少女も。

まあ、一夏に恋をしたのが全ての原因なのだ。確かに俺から見てもカッコいい男だけど、如何せん唐変木過ぎる。

容姿もよくて、家事も出来て、気も利いて……超人か何かかな？

「あー、うん。南無」

「なんだよ穂次。そんな残念そうな目をして」

「別にィ！　羨ましいとか思ってねぇよ!?」

「なんでそんなに必死なんだよ……」

「うっせー！　バーカ！　バーカ！」

「お前にだけは言われたくねぇよ！」

必死な理由も分からないお前に言われたくもねーよ！　この野郎！

「ンンンッ！　わたくしの事を忘れてもらっては困りますわ、中国代表候補生凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ!?」

「凰さん！　この方をご存知ないのか!?　この方こそイギリスの代表候補生であり、IS学園の入試で一夏を除いて唯一教官を倒した美少女！　まさに天に二物も三物も与えられしエリート中にエリート！　才能も、美貌も、そして美乳まで与えられた――」

「夏野さん？」
「スイマセンスイマセンスイマセン、黙ってますからスターライトｍｋⅢだけは勘弁シテクダサイ」
　途中までは俺の言葉を可愛いドヤ顔で聞いていたのに、解せぬ。やっぱりおっぱいを褒めるよりも太股を褒めた方がよかったのだろうか……。
「ふーん。まあたしは他の国に興味ないし」
「興味があるのは一人だけ！　って？」
「ぶっとばすわよ？」
「俺の扱いが浸透するのが早過ぎないッスかね？」
　肩を落として溜め息を吐いてみてもどうやら扱いが変わる事はないらしい。一夏に至っては我関せずを貫いてるのか日替わりランチの鯖をつついていた。
「つーか、他国の代表候補生って全部覚えてるのが普通なの？」
「当然ですわ！　代表候補生としての義務みたいなモノですわ」
「らしいけど、どうなの？　鳳さん」
「別に義務じゃないわよ。そんな事言われなかったし」
「という事は、オルコットさんの努力の賜物なのか。凄いなー。やっぱオルコットさんは才能にモノを言わせず常に研鑽を積む素晴らしい美少女だったんだな……スゲー」

「ふ、フフン。べ、別に普通の事でしてよ」
「ちょれー」
「何か言いましたか？」
「気のせいじゃないッスかね？」
　素直に凄いとは思うけれど、すぐに調子を戻すのはどうかと思うよ、オルコットさん。ソレに助けられてるから何も言わないけれど。
「ま、どうせ戦ったらあたしが勝つから知らなくても問題ないんだけどね」
「その自信、いつまでもつか楽しみですわ」
　自信たっぷりに言う凰さんに余裕を持って返したオルコットさん。嫌味っぽくない言い方だからこそ、オルコットさんも相応に返しているのだろう。同時に代表候補生として相手のことを知っている筈のオルコットさんが警戒する程度には実力を有している事を意味している。
　……って事は本当に強いんだろうなぁ、凰さん。ちっさいのは伊達じゃない！　とか言ったらマジで殴られそうだ。やめよう。
「それで、一夏。アンタってクラス代表なんだって？」
「ああ。成り行きでな」
「ふーん……あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、アタシが見てあげてもいいけど？」

「そりゃ助か――」

言いそうになった言葉を察して、俺は遠い目をしてしまう。出来れば耳を塞ぎたかったけれど、そうする前に始まってしまったのだから仕方ない。

「一夏に教えるのは私の役目だ！　頼まれたのは、私だ！」

「貴女は二組でしょう!?　敵の施しは受けませんわ！」

「あたしは一夏に言ってるの。関係ない人は引っ込んでてよ」

「二人は怖い顔をしてても可愛いなぁ」

「穂次、今日の鯖は美味しいなぁ」

「そうだなー」

言い争いを始める三人を余所に俺と一夏は現実逃避を始める。慣れたものだ。

正論っぽいモノを吐き出してるオルコットさん。間違ってはいけないのはソレは正論っぽいモノで実は突く穴が沢山あったりする。正論にも穴はあるんだよなぁ……。

そして篠ノ之さん。コッチはもう何も言うまい。正論なんてない感情論である。一夏が本当に言ったかどうかなんて知らないけれど、まあ論を覆すのは容易そうだ。

対して凰さんはオルコットさんの正論っぽいモノの穴を突いて、感情論に対しては同じ条件なら別にいいよね！　と言った風に返している。

しかし、味噌汁うめー。

さて、そろそろ一夏が要らないことを言うだろうから、その前に俺がこの論争を静かに鎮めて進ぜよう。なんせ俺は男なのだから、その利点を有効に使わなくてはいけない。

「そういう一夏。お前の好みの性格ってお淑やかで喧嘩とかしない性格だよなー」

「なんだよいきなり。　ん？　三人ともいきなり止まってどうしたんだ？」

「……いや、そうだな。こうして言い争うのも馬鹿らしい。ハッハッハッ」

「そうですわ。オホホホホ」

「んじゃ、あたしが一夏のＩＳ操縦を見るって事で」

「いい訳がないだろう！」

「ふざけてますの!?」

「スマン、一夏。俺には無理だった……」

「お、おう……。というか俺が穂次に教えてもらえばそれでいいんじゃないか？」

コイツ……簡単に俺を戦地に放り投げやがったな。三人とも俺を睨んでるじゃねぇか。

断れよ、という念が非常に伝わる。怖い。

俺は両手を上げて首を横に振る。

「無理無理。俺は専用機持ってねーし。男の俺が訓練機を使うって事になるとデータ取

りとかで結構な申請が必要なの」
「そうなのか？」
「ソウナンデス。だから、一夏の特訓にも俺は参加してねーだろ？　まあ大凡は鬼とおっぱい先生の手伝いだけど」
「また人のことをそうやって言う！　私は許しませんからね！」
むっとして頬を膨らませている山田先生が後ろから現れた。いい年して頬膨らませて怒るとか考えてはいけない。イイネ？　可愛ければいいのだ。
「ハッハッハッ！　可愛い顔で凄んだってただ可愛いだけですよー。そのまま「メッ」ってやってくれたらもう言わないかも知れませんよ？」
「夏野君、メッですよ」
「なあ一夏。俺って死んでるのか？　ここは天国か何かなのか？」
「少なくともセシリア達がお前に『死んでくれ』って思ってるのは俺でもわかる」
「ヒエッ……」
三人を見ると家畜でも見てるような目で俺を見ているんですが……。俺の何が悪かったって言うんだ！
メッってしてる山田先生可愛いだろ！　童顔だから頬を膨らませて怒ってても可愛いだけなんだぞ！

「それで、山田先生。どうかしたんですか？　また織斑先生に泣かされました？　俺の胸ならいつでも貸しますよ？　ほら、泣いてもいいんですよ？」
「そんな毎回毎回泣いてませんよ!?　最近は夏野君も仕事を手伝ってくれてますし……前はもっと――」
「すげー遠い目で過去を思い返してますけど、落ち着いて下さい。んで、何か手伝いでも頼みにきました？」
「違うんです。夏野君のＩＳが届いたので呼びに来たんですよ！」
「……あー、そうッスか」
「どうしました？　嬉しそうじゃないですね」
「いや、嬉しいッスよ？　嬉しいけど、タイミングがスゲー悪いなぁーって」
「？」
首を傾げてる山田先生可愛いなぁ。後ろから浴びる殺意の睨みさえなけりゃぁ冗談の一つや二つや三つや四つ言えただろうけど、心が死にそう。
一夏に至ってはどんなＩＳだろうな！　ってちょっと楽しみにしてるし……この野郎。　お前はそこの美少女たちを抑えとけ！
「あー、そう！　俺のＩＳって政府も関与してるから秘匿しないといけないんですよね!?」

「え？　そんな事は聞いてませ――」
「いやいや！　前も申請書類が届いてないとかあったじゃないッスか！　もしかしてまた情報が行き届いてないとかあるかもッスよ！　イヤー、俺も一夏の特訓に付き合いたかったけど無理だわーザンネンダワー！」
　決して三人を見ずに立ち上がって何かを言いそうになっている山田先生よりも先に言葉を吐き出す。無理、これ以上三人に睨まれてると俺の心が死んでしまう。
「さっ！　山田先生行きましょう！　いやー、生徒の為に動いている山田先生はサスガダナー！　よっ、教師の鏡！」
「そ、そうですか？」
「そうッスよ！　美人に案内されて俺は光栄ダナー！　だから一刻も早く行きましょう！」
「え？　わわっ」
　コチラを向いている山田先生を反転させて背中を押して歩いていく。　だらしない友人ですまない……。でも大本の原因はお前にあるんだぞ、一夏！

ヘタレの置物に餌を与えないでください

「夢だ、きっとコレは夢なんだ……ハハ、ハハハ……」

ぐったりとした俺は覚束ない足取りで寮へと戻ってきた。その左手薬指にはしっかりと指輪が嵌っている。

俺のＩＳの待機状態なのだが、どうしてかソコに納まってしまった。女の子が寄ってこない理由になるじゃねぇか。

フィッティングと初期設定の終わった俺は武装を確認して思った。作ったヤツの頭は絶対にオカシイ、と。少なからず白式を作ったヤツと似たような思考で、ソレでいてソレよりもぶっ飛んでいる事は確かだった。極論にも程があると思う。

いや、冷静に考えれば俺には過ぎたモノなのだ。だから返品とかって出来ないッスかね？　へ？　あ、政府の命令？　ソウデスカソウデスカ。

そんなこんなで何度も吐き出した溜め息をもう一度吐き出して俺は部屋の前に到着した。

俺の目の前には三角座りをしているヘタレの置物がある。その置物に供える様にお菓子が並んでいるのだからもしかしたら結構な時間ココにいたのかも知れない。

「ん、おかえり。穂次」
「帰れ。俺は寝るんだ。俺は今すぐ寝てこの夢から覚めるんだ！」
「落ち着け!?　ココが現実だ！」
「お前!?　今の俺には決して言ってはいけない事を言ったな……！　もういい！　ヘタレのいる部屋になんて居られるか！　俺はオルコットさんに慰めてもらいに行く！」
「それ死ぬヤツだから！　サスペンスとかで絶対に次の朝には死んでるヤツだから！」
「ええい、離せ！　ヤメテ！　襲われる！」
「変なこと言うな!?　お前、また変な噂立ってるんだぞ!?」
「知ってるよ！　その変な噂の発生源が誰だと思ってるんだよ！　全部知ってるに決まってんだろ！」
「お前かよ!!　よくわかんないけど、俺が攻めでお前が受け？　とか言われてるんだぞ!?　なんだよ!?　攻め受けって！　普通攻めの反対は守りだろ！」
「お、おう……お前は知らなくていい世界なんだぞ……主に心の安寧の為に」
「……そんなヤバイ情報なのか？」
「心が弱ければ自殺するレベルには」
「お、おぅ……」
「まあ、入れよ。今更遠慮する事なんてないだろ。俺とお前の仲じゃねぇか。　今夜は、

寝たいです……」

「ホント、疲れてるんだったら冗談とか言うなよ」

　無理。冗談言わなきゃそのままベッドにダイブしてる。そのまま明日の朝、というか夢の世界から脱出している事だろう。きっと現実の俺はオルコットさんに膝枕されて甘えている筈だ。そんな現実があってほしい。

　部屋の中へと案内してグラス二つとお茶のペットボトルを準備する。

「ん？　左手のソレ……？」

「俺のＩＳ。ハハハッ、俺を離したがらないのか左手の薬指に納まりやがった。イヤー！　モテる男ってのは辛いナ！」

「お、おう……泣いてもいいんだぞ？」

「誰が泣くかよー。マジで、俺のＩＳチョースゲーから、マジで。　イヤー、コレで白式なんてメじゃナイネ！　……はぁ」

「おお……お前がココまで落ち込んでるの初めて見たかも知れないな」

「クラスの皆には内緒ダヨ！　……結構取り繕って頑張ってっけど、なんかドッと疲れがきた感じ」

「ホント、大丈夫か？　何があったんだよ」

「……一応、政府のあれやソレだから内容は言えない」

「あー、そういえばそんな事言ってたな……」
「ちなみに感想だけ言ってやろう。死ぬ」
「いや、ＩＳに乗った感想でソレってどうなんだよ。安全は確保されてるだろ？」
「一夏。安全が確保されてるからって危険に飛び込むのはオカシイよな？」
「ま、まあ、そうだな」
「そういう事だ」
「どういう事だよ……」
「ＩＳ着用して怪我しないから織斑先生を馬鹿にしにいく感じ」
「いや、千冬姉はＩＳ着てても無意味だから」
「お、そうだな」
「アッハッハッハッ」
「ハッハッハッハッ」
「「はぁ……」」
　同時に溜め息を吐き出した所でこの話は全てなかった事になった。夢なのだから、元々ありはしないのだけれど。
「つーか、普通に夜半に俺の部屋に用ってなんだよ」
「あー……まあ、聞いてくれ」

「待て待て。ハッハッ、分かったぞー、凰さんに怒られたなー」
「なんで分かったんだよ」
「マジか……かなり冗談で言ったんだけどアタリかよ。昨日の今日でお前何したんだ？」
「俺は何もしてない……事もないんだろうけど」
「アッハッハッ、どうせアレだろ？　またラッキースケベを巻き起こしたんだろぉ？　死ね。死んでしまえ。もしくは今すぐ篠ノ之さんのブラの色を教えるんだ」
「なんでそうなるんだよ」
「んで、どうしたんだよ。何があったかわかんねーから、何も言えん。つーか、何も知りたくないってのが俺の本心だ」
「助けてくれよぉ」
「どうせお前が悪いのは目に見えてるけど、一応聞いといてやろう」
「まあ……。　事の始まりは――」
「お前が悪い。ハイ可決。ほらさっさと謝って来い。おやすみ」
「早ェよ！　まだ何も言ってねぇよ!?」
「はいはい。とりあえず、全部言ってみろ。言うだけで意外にスッキリするかも知れねーし、自分で気付くかも知れないだろ」

「お、おう……なんか今日の穂次は頼れるな。ずっとそうなら印象もいいと思うぞ？」
「ハイハイドウモ。さっさと話せ唐変木」
「酷くないか？　まあ、えっとだな――」

話を簡単に纏めよう。

凰さんが一夏の部屋に同棲を求めたら元々居た篠ノ之さんが反発。もう一緒に住むでいいんじゃないッスかね？　という発言を抑えた俺を褒めてやりたい。

それで凰さんが幼い頃に交わした約束の事を言い出し、一夏はソレを確認の為に口にしたそうだ。「鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を奢ってくれる」という約束らしい。この時点で俺は頭を抱えた。そんな抱えた頭をどう思ったのか一夏は補足するように凰さんのご自宅が中華料理店であるという事を説明してくれた。ソコじゃない。ソコじゃないぞ、織斑一夏。

「――という訳だ」
「お前が悪い。ハイ閉廷！　おやすみ」
「待て待て！　どうしてそうなるんだよ!?　箒にまで馬に蹴られて死ねとか言われたんだぞ!?」
「俺は毎日死ねって言われてるわ！　クソが、珍しくお前が本気で考えてると思ったら

惚気話かよ！　死ね！　マジで死ね！」
「今の話のドコに惚気要素があったんだよ!?　俺が怒られた話しかしてないだろ！」
「あーあー、アレですか？　ＩＳにしかモテない俺へのあてつけッスかね？　俺って人間の女の子にこんなにモテてるんダゼって」
「どうしてそうなったんだよ!?　お前、今の話聞いてたのか!?」
「一言一句間違いなく聞いてましたー！　かなーり嫌々だったけど聞いちゃいましたー！　つーか、凰さんかなり怒ってただろ……泣いてたもありえるぞ、ソレ」
「お、おう……やっぱアレって泣いてたのかな」
「絶対泣いてる。あー、一応言っとくけど、泣いたのか？　とか確認は絶対取るなよ」
「？　なんでだ？」
「凰さんの性格考えてみろよ。泣いてたとしても泣いてないとか言って意地張りそうだろ」
「……なるほど」
「つーか、どうして凰さんとの付き合いの長いお前が高々一日話した程度の俺に諭されてるんですかね……」
　コレがワカラナイ。
　凰さんが不憫でならないし、篠ノ之さんと並んで俺の中で不遇さが増してきた。いた

たまれない、というのはこういう時に使うのだろうか……。
「んじゃ、馬鹿な織斑一夏君の為に一つずつ解決していくゾ☆」
「穂次に馬鹿って言われた……」
「ん？」
「よ、よろしくお願いします？」
「ヨロシイ。では先ず一番大切なところを初めにしよう。お前、約束を間違ってるぞ」
「は？　いやいや、約束は合ってるって。ちゃんとした」
「内容がたぶん違うと思うぞ。実際にそこに俺がいた訳じゃねえけど、聞く限りの凰さんの反応を考えると、間違ってる」
「まさか」
「お、気付いたか」
「酢豚じゃなかったのか……」
「なあ、ふざけるなら俺寝るよ？　今日はもう疲れてるんだよ。寝たい中、お前の惚気話聞かされて、こうやって説教もして、わざわざ説明も入れてるんだぞ？　俺って優しい！　はい復唱ッ！」
「俺って優しい！」
「違う！　確かに復唱されたけど圧倒的に違う！」

「お、おう……すまん」
「まあいいけどさー。とにかく、冗談はいいんだよ。この際、酢豚か味噌汁かボルシチかスコーンかパスタかはどうでもいい。なんでも一緒だ」
「そうなのか？」
「ああ。つーか、コレを俺が言っていいのかわからん、つーか、言うと俺が漏れなく全力蹴りされるし嫌われるから核心には迫らないぞ」
「ん、ダメなのか？」
「別に蹴られるのはいい。全力で蹴られるのもいい。いっそ踏まれるのも構わない。つーか踏まれたい」
「オカシクなってきたぞ」
「……まあ、核心を語らずして上澄みだけを言えば、凰さんはお前と仲よくなりたいんだよ」
「今も仲はいいだろ」
「あー、まあ、そうなんだろうけど。ほら、仲がよくても俺らみたいに二人きりでゆっくり話す機会とかもないだろ？」
「そりゃぁ……男と女だから仕方ないんじゃないか？」
「あのさぁ、お前って俺のこと馬鹿にしてる？」

「なんでそうなるんだよ」
「なんでそこまで分かってんのに重要な所で抜けてるんだよ！　馬鹿なの!?　いいや、お前は馬鹿だ！　バーカ！　バァァアアアカ!!」
「うっせぇ！　馬鹿って言う方が馬鹿なんだよ！　馬鹿！」
「やーい、お前も馬鹿って言ったぁ！　お前の方が馬鹿なんだよぉ！」
「もういい！　帰る！」
「おう帰れ帰れ！　ちゃんと考えて凰さんには謝るんだぞ！」
「わかってるよ！　馬鹿野郎！　ちゃんと寝ろよ！」
「おう！　おやすみ馬鹿一夏！」
「おやすみ馬鹿穂次！」
扉が閉められた。肩を落として溜め息を吐き出してしまう。
凰さんには冗談の上とはいえ、協力すると言ってしまったのでそれなりに手は出すつもりだ。まあアレで一夏が察してくれるとは思えない。察するようならきっと凰さんも篠ノ之さんも苦心しなくてよかっただろう。
無理だろなぁ、と考えて苦笑する。
戻って来た時よりも幾分か気分はよかった。

五月。徐々に気候も暖かくなり、長袖で厚手の制服もきっと夏に差し掛かれば薄手の制服になる事を願い心の躍る季節でもある。

日本という国に四季があってよかったと本当に思う。春は初々しい女生徒、夏は水着美女、秋はスポーツ女子に冬には寒さに顔を赤くした女性がそこらに居るのだ。尤も、冬にはクリスマスとかバレンタインだとか、そんな日があった様な気もする、いいやなかったな、ないない。

「それで、夏野さんのＩＳ調整はまだ続きますの？」

「らしいッスねー」

「そうですか。残念ですわ……」

「いやー俺も残念だわ……オルコットさんのＩＳスーツ姿を長い間見れないなんて」

「せっかく名分を得てボコボコに出来ると思いましたのに、本当に残念ですわ」

「うわー、コレはマジなヤツですわ……」

ＩＳを所持してから数週間経過した。ある程度の日数を開けてオルコットさんや一夏から訓練（と称した俺虐め）に誘われているが俺はその全てを断っていたりする。表

向きの理由はＩＳの調整の為。実際はＩＳに問題などない。かと言って俺が三人の訓練に付き合う事を嫌がっている訳でもない。むしろ、篠ノ之さんがＩＳスーツを着てる事を聞いて見に行ったぐらいだ。

　当然の様に「いいおっぱいッスね！」と褒めた俺に対してかなり本気で刀を振りかぶっていた篠ノ之さん。そしてビットを飛ばしてきたオルコットさんにはちゃんと「オルコットさんも素敵な太股ですね、最高ッス！」と言ったのだが、そこから二日ぐらい目も合わしてもらえなかった。解せぬ。

「まあ、今日はアリーナに顔を出してから織斑先生の手伝いするし」

「お、今日は来るんだな」

「お前の姉が俺に色々頼まなきゃ毎日行ってるよ」

「……動機は不純じゃありませんよね？」

「一夏の特訓だろ？　手伝えないけどデータ取りぐらいは出来るぞ」

「そうですか……流石の夏野さんでもわかっていましたか」

「データ取りのついでにオルコットさんと篠ノ之さんを録画するのも忘れないぞ！」

「……死んでもよろしくてよ？」

　死んだ家畜を見るような瞳が俺に突き刺さる。最近はこの視線にもなれて、こう、よくわからないけれど、ゾクゾクするようになった。人間、慣れると凄い事になるんだな。

　へらへら笑いながらエレクトしそうな思考を誤魔化していれば一夏が何かを疑問に感じたようで首を傾げている。それは可愛い女の子だけに許された行為なんだぞ！
カッコいいお前がやっても絵になるのが非常に苛立たしいけどな！
「というか、毎度思うんだけど。なんで穂次って千冬姉の命令に従ってんだよ」
「おまっ!?　あの人に逆らえって言うのかよ……さすがに命は惜しいぞ」
「え？」
「オルコットさん。その反応は何？　俺が命を惜しいことに驚いてるの？」
「てっきり夏野さんは死んでも復活するものと……復活しませんの？」
「この美少女って日本を覚える為にギャグ漫画とかで勉強したんですかね？　ギャップはあるけど萌えるヤツじゃないぞ……」
「違う違う。俺が言いたいのは千冬姉の手伝いを率先してやってるみたいだったから」
「ほら、俺って、信☆頼、されてるジャん？」
「使い勝手がいい、の間違いじゃありませんこと？」
「ヒエッ……人を奴隷みたいに言いやがって」
「わたくしが使ってあげてもよろしくてよ？」
「奴隷でいい」
「お前ってプライドないんだな」

「いらないプライドなんて捨てた。俺はオルコット様の奴隷になるんだ！」
「プライドのない方はお断りですわ」
「フンッ、誰が貴様なんぞの奴隷になるか。俺以上の存在など天上天下に在る訳がないだろう、ハーッハッハッハッ」
「忙しいな、コイツ」
決して忙しい訳ではない。コロコロと意見を変えているだけだ。
さて、本当にオルコットさんの奴隷になれるんですかね？　お仕置きよッ！　とか言われて踏まれたり折檻されたりするんですよね！　今から楽しみだな！　あ、されない？　知ってた。知ってた……。
「む、今日は夏野も一緒か」
「ってもデータ取りだけどなー。ＩＳは調整中だし」
「……そうか」
「ん、不満そうな顔デスネ篠ノ之さん……。ハッ!?　ま、まさか篠ノ之さんも俺をボコボコにしたいとか言い出すんじゃ!?」
「失礼なヤツだな。私がお前にそんな事を言うと思うか？」
「ほら、オルコットさん。コレが大和撫子というヤツですよ。実に素晴らしい」
「お前の事は唐竹割りにしたいと常々思っているんだ。ボコボコで済む訳がないだろ

う」

「ヒエッ……大和男児（ヤマトオノコ）もビックリの発言だぁ」

「よかったですわね、夏野さん」

「いったいドコにイイと言える言葉があったんですかね？　戦々恐々なんですがソレは……」

「死んでも生き返れることが証明できますわよ？」

俺がギャグ漫画世界の住人だったとしても次のコマがこない世界だから甦らないんですよ！　オルコットさん！

キョトンとして可愛い顔してるからソレを眺めることの方が重要だから何も言わないけどね！

俺を散々弄って気が済んだのか、二人はいつもの様に「中距離射撃型の戦術は一夏には無駄だー」や「ＩＳ使わない訓練とか意味ないですわ！」なんて言い合いをしている。いつもの事である。

俺から言わせて貰えるならば両方とも一夏には必要な事だと思う。いや、剣術的なことはさっぱりだけど。そもそもオルコットさんはＩＳの操縦関係を中心に教えているから別に戦術法を説いている訳では無いし、篠ノ之さんの剣術関係も刀だけしかない一夏にとっては必要になる事だろう。

本当に美少女二人に教えてもらってる一夏を見ていると思う。
「なあ、一夏。お前っていつ死ぬんだ？　葬式とかいつ？　花火あげるから予約取らなきゃ」
「なんで俺が死ぬ前提で話をしてるんだよ！」
「お前死なないのか……オルコットさん！　ギャグ漫画の住人はココに居ますよ！」
「は？　何を言ってますの？」
「あ、スイマセン何でもナイデス」
「あー、うん穂次。今のは流石に同情する」
「男の同情なんて要らないんだよ。薄い本が厚くなるだろ！」
「それも意味がわからないんだけど……」
やいのやいのと騒ぎながらようやくアリーナへと到着した。圧縮空気の抜ける音を伴って開いた扉の置くには小さな陰。
「待ってたわよ、一夏！」
「えっと、ゴメン。凰さんって待ち伏せ癖か何かでもあんの？」
「ないわよ。失礼ね」
「あ、そうッスか……」
「それで、一夏。反省した？」

「……ああ、俺が悪かった」

一夏の言葉に幾分か満足したような凰さんを見て心のどこかで安心する。尤も隣からスゲー怖い何かが伝わってきてるから何も言わないけど。オルコットさんまで珍しく俺の近くで怯えてるし。実にいい匂いだ。イイゾ、もっとやれ篠ノ之さん。

篠ノ之さんになんでか睨まれた。サトリ妖怪か何かなのだろうか。それとも俺の思考って頭の上辺りに括弧付きで吹き出しと一緒に出てるとか？

「わ、わかればいいのよ」

「穂次に相談して色々と考えたんだ――」

「え？」

「あ……」

ん、コレはマズイぞ。ヤバイ。かなりヤバイ。俺の心の警鐘がガンガンと鳴っている。

少しだけ照れた様に赤くなっていた凰さんの顔が真っ青になり、俺の方を向いてる。そりゃぁ、凰さんからすると、きっとかなり勇気が必要だった告白を赤の他人、それも冗談に産み落とされた様な俺に知られたのだから気が気じゃないだろう。

「それで、穂次に説教されたんだよ。俺はお前の事をよくわかってなかったんだって」

「え、あ、そ、そう」

「だから、俺との親交を深める為に、酢豚を作ってくれ――」
　満点である。あの状態の一夏にしてみれば最高の着地点だったと思う。これには凰さんもご満悦。というか顔が真っ赤になってる。いやー可愛いなぁ。隣で鬼が刀を構えてなけりゃぁ集中も出来たのに。その鬼に結構本気で怯えているオルコットさんは少し震えながら俺に寄ってるし。よーし、いいぞ！　鬼！　もっと怒るのだ！
「――幼馴染、友達として」
　ガッデム。どうしてその言葉を付け加えてしまったのだ一夏よ。しかも日和ったのか、幼馴染の後に保険の様に友達と足しやがった。
　凰さんは凰さんで輝いていた目から輝きが消えて、プルプルと震えている。
「夏野穂次ィ!!」
「は、ハイ！」
「集合！」
「ういッス！」
　呼び出されたでござる。凰さんに近付く為に何度か深呼吸をしてなるべく早足で向かう。オルコットさんが俺に手を伸ばして涙目になっていた。本当に、お姫様みたいで凄い可愛かった。尤もソレが鬼との間にあった肉壁を求めているモノって事は気付きたくなかったけど。

一夏よりも少し低い身長である俺よりも幾分か低い凰さんと一緒に一夏に背を向ける。一夏はかなり怪訝な顔をしていたけれどそんな事はどうでもいい。
「アンタ、一夏に何を言ったの？」
「別に普通の会話をしただけだぞ。つーか、一夏から話を聞いたけどゴメンね。流石に言いふらす気はないから」
「それは、その、ありがとう」
「ドウイタシマシテ。んで、先に言っとくけど、凰さんが一夏を好きって事は言ってないから」
「なっ!?　あ、あたしは、その」
「あーハイハイゴチソウサマデス。んで、そこらを誤魔化しながら、二人で一緒に話す機会を増やしたら？　って一夏に促した」
「夏野、優秀」
「アザッス！　まあソコから先は頑張ってって事で」
「アンタ、凄いわね……あたしがどれだけ頑張ってもさっぱり動かなかった一夏をこんなに簡単に……」
「ま、そこは男同士だからって事で。一応、手伝うって言っちゃったからこの程度は、ね」
「夏野……アンタ、いいヤツね」

「惚れた？　まさか恋しちゃいました？」
「そういう所がなければ本当にいいヤツなのに」
「ま、そこも含めて俺って事で」
　へらりと笑ってみせれば可笑しそうにクスリと笑みを零した凰さん。やっぱり可愛い女の子である。性格は随分と男らしいけれど、それも魅力なのだろう。
「それで、内緒話は終わったか？」
「ええ、もういいわ」
「何喋ってたんだよ」
「そ、それは……」
「クラス対抗戦で凰さんと一夏が戦うだろ？　だから勝った方がなんでも一つ命令できるって約束をだな」
「なんでソレを俺じゃなくてお前がしてるんだよ！　というか、なんでも一つ命令って――」
「何でも一つ命令できるだって!?」
「お前が言ったんだろ！」
「あ、そうか。いやぁ、是非とも凰さんに着てほしい服装があるから、頑張れ！　一夏！」
「いや、頑張りはするけど、お前の願いを通すのは絶対ないから安心しろ」

「なんでだよ！　凰さんにゴシックロリータとか着せたくないのか!?　絶対似合うぞ！　身長とかおっぱイッタイ」

「夏野、何か言ったかしら?」

凄いいい音でお尻を蹴られてしまった。オホホホホ、だなんて口にしている凰さんは怒っている様な感謝しているような、微妙な表情だった。

一夏の向こうにいる二人は汚物でも見るような視線をしていたような気がするが、きっと気のせいだろう。うん。そうに決まってる。

恥ずかしがり屋さんと黄色の騎士様

「はえー……ゆっくり観戦出来るとか思ってたのに」
「よかったじゃないか、夏野。ココは特等席だぞ」
「ワァイ、ヤッターー……」
　クラス対抗戦一戦目。つまる所、それは我がクラスの代表である織斑一夏とその唐変木に恋する二組の代表である凰鈴音さんとの戦いという事を示す。
　ピットの中という特等席に座っている俺の後ろでは鬼が腕を組んでニヒルに笑っている。そんな姿も美しいのだからホント美人ってスゲーね。尤も、アレは美人の皮を被った戦の神様だけれど。
「夏野、何か言ったか？」
「言ってません！　だから頭を掴むのは止めてください！　言ってませんよ!?」
「お前は黙って手だけを動かしていればいい。そうだな？」
「へいヘイダダダダァ！」
「返事は一度でいい」
「厳しすぎです織斑先生！　だから鬼とか悪魔とか千冬とがガガガガガ」

「ハハハッ、悪い事を思う頭はこの頭か」

後ろにいるからわかんねーけど絶対楽しそうな顔してるよ！　この人！

数秒間掴まれていた頭はどうやら潰れていないようだ。両手で頭があるかどうかの確認をする。大丈夫、まだ頭は存在する。

隣に座っているおっぱい先生をちらりと見れば苦笑をしている。この光景にもきっと慣れてしまったのだろうか。いや、そんな事はない。俺は山田先生に慰められるという未来を信じるんだ！

「夏野、手が止まっているようだが？」

「ヒッ、動かしてマスヨ！　ヤダナー！　つーか、なんで生徒の俺がココまで手伝わなきゃいけねーんですか！　人手不足って事もないでしょ！」

「ん、ああ。お前が手伝わなくても問題はないな」

「なら、俺だってソコにいるオルコットさんとか篠ノ之さんみたいに座ってのんびり一夏の勇姿を見てもいいんじゃないッスかね!?」

「なんだ、山田先生の隣では不服か？」

「むしろ山田先生を膝の上に乗せたいですけど……」

「……まあ、ソレは叶わないから隣で我慢しろ」

「イエスマム！　……ん？　あれ？」

「どうした夏野。いいから手を動かせ。そろそろ試合が始まるぞ」
「あ、はい。わかりました」
うん？　何かオカシイぞ……。確か、俺は仕事をしたくないと織斑先生に言った筈なのに、どういう訳がアッサリと仕事をしている。うん？
隣にいる山田先生が凄い可哀想なモノを見る目で俺を見ているのに何か関係しているのだろうか？　いや、そんな筈はない。つーか、いつもとそれほど変わらないな。アッハッハッハッ……はぁ。
事前に読まされていたマニュアルの通りにコンソールを叩いていく。画面に映った凰さんと一夏。こうやってＩＳスーツに身を包まれた凰さんを見ればわかるのだが、無い訳じゃないんだな……こんど揉ましてもらえるように頼んでみようか……。口八丁で揉めばデカクなるとか、一夏に揉まれた時へんな声が出ない様に、とかテキトウな事を言えば揉ませてくれるかも知れない。
そもそもおっぱいに大きいも小さいもない。全てのおっぱいには各々に良さがあるのだ。そう俺は信じている。だから、まだ希望は捨ててはいけないゾ！　凰さん！
「それにしても凰さんのＩＳ、トゲトゲが浮いてるなぁ」
「非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）ならブルー・ティアーズで見慣れているじゃありませんこと？」
「いや、まあそうなんだけど……ブルー・ティアーズはどっちかってーと、ビットとして

飛ばされてる印象の方が強いからなぁ」
「そうですか」
　とオルコットさんが会話を打ち切り画面に注視している。その瞳は真剣そのもので鳳さんと一夏との戦いを一瞬たりとも見逃さない様だ。見返す様にセットしてる録画データを編集してオルコットさんに渡してあげよう。きっと喜ばれる筈だ。俺は鳳さんのおっぱいと太股が何度も見れる、オルコットさんは戦闘を見返して戦術を練れる。まさにＷＩＮ―ＷＩＮだな！
「夏野。どちらが勝つと予想する？」
「織斑先生、そんなの言わなくてもわかるでしょ。鳳さん圧勝にデザートの食券を一ヶ月掛けてもいいッスよ」
「なっ!?　夏野！　お前は一夏が負けるというのか!?」
「やだなぁ篠ノ之さん。俺は一夏が負けるなんて一言も言ってないじゃないッスかー」
「屁理屈ではないか！」
「そりゃぁそうだ。まあ鳳さんの実力は知らないけど、ソコのエリート（笑）の代表候補生様もある程度の警戒をする実力なんだろ？」
「夏野さん、ふざけてますとその汚い顔を消し飛ばしますわよ？」
「ヒエッ……それなりには普通の顔立ちだと思ってたのに」

「そ、それでも一夏には雪片があるではないか！」
「当たれば一撃……とまではいかないけど大ダメージ。ってのはロマン溢れるけどさー。　凰さんの戦い方は知らないけど、遠距離型なら接近対策をしてない筈もないし、中距離ならチャンスがあるかも程度だけど距離の保ち方は上手くなる。近距離ならソレこそ一夏の負けが確定だろ」
「接近戦ならば一夏の方が――」
「無理無理。それこそ凰さんが遊んでたら倒せる可能性もあるけど、凰さんの性格を考えて絶対に本気な筈だし。一夏の才能は認めるし、実力も知ってるけど、知ってるからこそ、万が一って話。瞬時加速で決まれば一撃は与えれるけど、ソレは奇襲しか無理だし、一撃だけしか与えれない。どっかのブリュンヒルデ様みたいにソレで一撃必殺になるほどの実力は一夏にはねぇよ」
「それでも……」
「……ま、実際に戦ってみないとわかんないってのがこの話の落としどころかなー」
「そ、そういうお前はどうなのだ！　専用機を得てもなお訓練をしていないお前は！」
「アッハッハッ、それこそ無理ッスよ。俺の大敗ですよー」
　どうしてか矛先がコチラに向いた篠ノ之さんにヘラヘラ笑いながら答える。無理無理、少なくとも俺のＩＳに相性なんて物は無いけれど、俺自身が死んじゃうから無理。

両手を上げて降参の意志を示した俺に満足したのか、「フンッ、戦う気もないヤツが戦いを評するな！」みたいな事を言って画面へと視線を向けて祈る様に手を握っている。つーか、俺は織斑先生に対しての質問に答えただけなのに……もしや、織斑先生は俺と篠ノ之さんとの仲を悪化させるのが目的だったのか!?　ともすれば俺と篠ノ之さんってかなり仲がよかったのだろうか。おっぱいを触っても「いやんっ！　穂次君やめてぇ！」みたいな事を言われる程の仲だったとは思えないけど、その一歩手前までは行っていたのだろう。なるほど、そんな弱々しい篠ノ之さんはとても可愛かったけれどどうしてか腰には日本刀が差されていた。妄想でも怖い存在なのかよ。

溜め息を吐き出してコンソールへ向いた俺へ隣にいた山田先生が意外そうな顔をしてコチラを向いている。

「どうしたんですか？　山田先生。もしかして俺におっぱいでも揉まれたいんですか？」

「どうしてそんな選択肢になったんですか！　もうっ！」

「アッハッハッ。今日はピンクでレースな下着ですか。いやぁ素敵です」

「へ？　今日はシンプルな白……」

「ほう！」

「……夏野くん！」

「いやぁ、真っ赤になって怒った顔も素敵です！　ん、後頭部に何か圧力がダダダダダダダダダ!!」
「夏野、お前は黙って仕事が出来んのか？　ん？」
「痛いッス！　痛いですよ織斑先生！　黙って仕事どころか、黙ってそのまま目が覚めなくなっちゃいますよ!?」
「そうか。そうだな」
「アダダダダダダダ!!　力が強くなった！　ミシミシ聞こえる！　鳴っちゃいけない音が聞こえるゥ!!」
「懲りたら黙って仕事をする事だな」
「う、ウィ……」
「それと山田先生」
「あー……ハイ。すいません」
「なんスか、二人共。生徒にはわからない話をして……よもや、二人は実は――」
「夏野、何か言ったか？」
「ナニモイッテマセン！　シゴトシテマス！」
「ならいい」
二人はプリティでキュアキュアなのだ。ああ、そうだ。決して二人が夜の部屋で、

ベッドで運動会などしていないのだ。そんな事はない。つーか俺と一夏の本があるなら、そういう本があってもいいんじゃないッスかね？　今度頼んでみよう。

　若干妄想に思考を取られながら戦闘中の一夏と凰さんを見る。一夏が何も無い所で回避行動を取ったり、何かにぶつかった様に急に移動している以外は普通の戦闘だ。

「一夏のヤツ、何やってんです？」

「『衝撃砲』ですわね」

「あー、空間自体に圧力掛けて砲身つくるヤツか……まーた一夏の勝ち筋が減ったのか。ざまぁ」

「夏野！　お前はドチラの味方なのだ!?」

「そりゃぁ、自分に得になる方の味方に決まってるだろ！　今はどっちも応援してる！」

「お前というヤツは……！」

「一夏が勝てば凰さんに園児服。凰さんが勝てば一夏を馬鹿に出来る。どっちに転んでも俺に被害は無い！　素敵！」

「山田先生、この変態を頼みますわ」

「へ!?　嫌ですよ！」

「あ、コレ普通に傷つく展開だな。もう俺は知ってるゾ☆」

「夏野」

「まさか、織斑先生から救いの手が――」
「手が止まっているぞ？」
「あ、ハイ。デスヨネー」
　俺に救いなんて無い。
　溜め息も吐き出さずに画面を見つめる。一夏と凰さんの距離が少し離れている。凰さんからすれば絶対安全距離であり、その表情には少しばかりの余裕が浮かんでいる。
　ココまで使わなかったのだから、今しかないだろう、一夏。行け、一夏！　凰さんの園児服の為に！　あの水色ポンチョの為に！　さあ！
　強く拳を握りこんで一夏の勝ちを祈る。祈り、咄嗟に鳴ったブザーに視線はスグにコンソールへと向いた。警告音だ。
　画面には土煙とその中から飛び出る光線。おいおい、アリーナの遮断シールドはＩＳと同じモノで作られてるんだぞ……？
「夏野！　生徒達の安全確保を！」
「今してますけど！　システムがハッキングされたか、元々計画してたか知りませんけど出入り口がロックされてます！」
「チッ……」
「織斑くん、凰さん！　スグにアリーナから退いてください！　先生たちがＩＳでスグ

に制圧に行きます！」
『――いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます』
「なっ!?　ダメですよ！　生徒さんにもしもの事があったら――」
「一夏。聞こえるか？」
『穂次？』
「どうしてお前は凰さんをお姫様抱っこしてんだよ！」
『今そういう状況じゃねぇだろ！』
「うっせー！　俺にとって所属不明機が遮断シールドをぶち破って突入してきた事よりもソッチの方が大事なんだよ！　羨ましい！」
『お前の優先順位オカシすぎだろ！』
「馬鹿か！　コッチは散々ピッチで罵られてんだぞ!?　ソレなのにお前は美少女抱っこして……！　死ね！　いいや、俺が殺す！　生徒達の安全確保したらスグにお前を殺しに行くからな！」
『お前なんて返り討ちにしてやるよ！』
「言ったな！　覚えてろよ！」
　コッチからではなく、アチラから通信が切れたということは何かしらの妨害が入ったのだろう。舌打ちをして妨害の痕跡を探しても足跡すら残っていない。

ダメだ、落ち着け。落ち着くんだ夏野穂次。焦って行動しても失敗するのは目に見えている。

「夏野くん」

「……わかってますよー。大丈夫ッスよ。一夏は俺に殴られないとダメなんですから。大丈夫ッス」

心配そうに話掛けてきた山田先生にヘラリと笑って言い聞かせるように言葉を吐き出す。そう、大丈夫なのだ。だから、落ち着け。いつもの様にヘラヘラと笑っていろ、夏野穂次。

お前には才能も、チャンスも、何もかもが無いのだから。

「織斑先生！　わたくしにＩＳ使用許可を！　すぐに出撃できますわ！」

「オルコット、お前はあの阿呆の言葉を聞いてなかったのか？　アリーナに続く扉は全てロックが掛かっている。ロックの解除には今しがた三年の精鋭にクラッキングを依頼している」

「で、でしたら緊急事態としてスグに政府に助勢を！」

「だそうだぞ、阿呆」

「あー、今連絡とりましたけど、遮断シールドがあるから無理らしいッスねー。クラッキング成功したら部隊は突入させるらしいけど、ハハッ怠慢もいい所だなー」

「夏野さん！　笑っている場合ですの!?」
「そりゃぁ、まあ笑ってる場合じゃないんじゃないツスかね？」
「なら――」
「でも、まあ焦って何かが出来る状態でもないデショ。いつもの余裕を持ったオルコットさんでいましょうよー。ほら、おっぱい触っちゃうぞ☆」
「……はぁ、どうしてそんな調子なんですか、まったく」
「ソレが俺だからな。それでおっぱい触っていいですかね？」
「ぶっ殺しますわよ？」
「ぶっ飛ばすから進化してるゥ！」
さて、オルコットさんの調子も戻った所で改めて状況を整理しよう。
コッチからの行動は先輩方のクラッキング成功が開始。織斑先生にはああ言ったけれど、政府は行動を起こすつもりは無し。体面は保つだろうけれど、ソレだけ。
一夏達は見事に一夏が足を引っ張って攻撃がヒットしていない。アチラの攻撃も回避しているけれど、元々消費していた分を考えるとあまり時間は無い。
ん？　無理ゲーかな？
「……あれ？　篠ノ之さんは？」
「あら？」

「……ハァ」
「織斑先生がスゲー複雑そうな顔で溜め息吐いたんですけど山田先生」
「何度かあんな表情見たことありますよ。匿名通信してる時はずっとあんな感じでした」
「夏野。暇そうだな」
「まあ、先輩方のクラッキング待ちッスからねー。緊急時の作業なんて俺は出来ないでしょ」
「なら暇だな」
「……あ、いや、暇じゃないッス！　スゲー忙しい！　イヤーコマッタナー！　体一つじゃ足りないヤー！」
「ほう、足りないのなら増やしてろうか？　真っ二つにすれば体は二つになるだろう？」
「スゲー暇！　暇すぎて欠伸出るぐらい暇ッス！」
「ならちょうどいい。仕事をやろう。嬉しいだろう？」
「アッハイ」
「ついでに政府から色々お前に命令が飛んで来ているんだろう？　ソレもこなして来い」
「……へいへい」

「――夏野穂次、ＩＳの使用を許可する」
「ういッス」
「夏野さん！　ＩＳは調整中と」
「あー、丁度今終わったんだよ。うん」
「嘘おっしゃい！」
「スグに嘘ってバレたんですけど……ま、調整中ってのはホントだったんッスよ。そこは織斑先生が保障してくれるから」
「ん？　ああ。そう頼まれたからな。安心しろ、夏野。お前がＩＳを使えた事は黙っておこう」
「ふぇぇ、契約に問題があるよぉ」
「さて、一体何の契約だったか？　さっさと行って来い阿呆」
「夏野さん！　戻ってきたら聞かせてもらいますわよ！」
「へいへい」
　なんて言い訳をしようか。武装が特殊すぎて、という話をする訳にもいかないし……うーん、いっそ膝に矢を受けてしまったことにしようか。お、コレは完璧かも知れないな。

「それで、織斑先生。本当に夏野さんはＩＳを使えますの？」
「それなりには、な」
「……ならどうしてわたくし達に黙ってましたの……？」
「アイツなりに色々考えた結果かも知れないが……いや、アイツがそれほど考えてるとも思えんな」
「なら――」
「アイツの言葉を借りて言ってやろう。オルコット。アイツはアレでも男の子らしい」
「――意味がわかりませんわ」
「そうだな。だが、案外ソレが全てなのかも知れんぞ」
「……いいですわ。織斑先生が言わないなら夏野さんに詰め寄ればいいだけですわ」
ふんっ、と息を吐き出したセシリア・オルコットを見て織斑千冬は苦笑する。今頃ロックの掛かっていない扉を探しながら走っているだろう阿呆の未来を想像して、更に笑みを深めた。

◆◆

織斑一夏は考える。相手の攻撃には一定のパターンがあるという事はわかった。わかったからとて、どうこうなる話ではないが、一夏の中には一つの可能性が溢れ出す。

普通、あそこまでパターン的な攻撃が出来るだろうか？

それこそ剣術でいう所の型にも似た一連の行動。相手の動きを見て行動する、というのは型に嵌った行為ではある。

けれどもソレを完璧にこなせる人物など織斑一夏にとって一人しか居ない。そしてその一名は現在はピッチで現状に苛立っている事を一夏は察していた。

だからこそ一夏にとって極々自然な疑問が生じた。

「なあ、鈴。アレって本当に人が乗ってんのか？」

一夏にとって当然の疑問。けれどもソレは世間一般的にはありえない意見なのだ。証拠に凰鈴音は一夏の言葉に対して「何馬鹿なこと言ってんだコイツ」という顔をしている。今この場にセシリア・オルコットが居たならば長々と一夏がどれほどありえない事を言っているかを論じただろうが幸い、セシリアはこの場にいない。

「無人機って事？　ありえないでしょ。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない」

「まあソレはわかってるけど……もしも、万が一、無人機だったら」
「だったら？」
「容赦無く、全力で攻撃しても問題ないって事だよな」
その言葉を聞いて鈴音は目を細める。先ほどの試合の時は本気ではなかった、という訳じゃないのは鈴音も分かっていた。けれどもソレは一夏が本気なだけであって、白式の機能全てを使っていた、とは言えない試合だったのだろう。
尤も、一夏とて白式の機能を十全に使いこなせる訳ではない。ただ、力加減が難しすぎるのだ。最大出力で雪片弐型を振るえば過剰すぎるエネルギーは人間に向かってしまう。だからこそ出力は必然と抑えなければいけなかった。その事を考えれば試合中と今に至るまでのお粗末な操縦はソレこそ一夏本人の実力という事になる。
「一夏、どうしたらいい？」
鈴音は何も聞かずに一夏に尋ねた。一夏の事をよく知る鈴音にしてみれば、こうして決意に満ちた真面目な表情の一夏は何か考えがある事が多い。ついでに言えば、今が戦闘中じゃなければ頬を赤くして「一夏はやっぱりカッコいい」なんて両手で頬を押さえてシナを作っていただろう。残念、今は戦闘中で更に言えば一夏が目の前にいるのだからその行動は理性によって封殺された。
対して一夏は鈴音の言葉をある種の脅しみたいに感じていた。失敗したら駅前のカ

フェか何かでスイーツを奢る事になるだろう事を予想した。その時はまたあの男友達に色々アドバイスを貰おう。という所まで決意してから一夏は自身の考えを述べる。
「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を全力で撃ってくれ」
「？　わかったわ。でもどうせ当たらないわよ？」
「上手くやってやるさ」
「……そう。わかった。信じるわよ、一夏！」
「ああ！　じゃあ、早速――」
「一夏ァ!!」
ハウリングした声がアリーナに響く。一夏はこの声を知っていた。例えマイク越しであろうが、聞き間違える筈は無かった。
ハイパーセンサーで捉えたその姿はマイクを握り締めて、黒い髪を僅かに乱してはいたが篠ノ之箒その人に間違いない。
「男なら……男ならばその程度の敵に勝てなくてどうする！」
かなり無茶な言葉だった。ココに夏野穂次が居たならば「超理論スギィ！」と叫んでいたことだろう。
大声で叫んだ人間だったからか、それともソレが美少女であったからか、或いは――篠ノ之箒であったからだろうか。深い灰色の全身装甲というＩＳにとっては異常なＩ

Sは幾つもあるセンサーカメラで箒を捉えた。
決して素早くは無かった。けれども遅いというには滑らか過ぎる動きで灰色のＩＳは動いた。右腕を上げ、砲口を箒へと向けた。
一夏の心がゾクリと冷え込んだ。
マズイ、マズイマズイマズイマズイ！
「箒、逃げ――」
一夏の言葉が早かったか、それとも灰色のＩＳがビーム兵器を撃つのが早かったか。放たれたビームがその答えを求める訳もない。ビームが求めたのはただ進む事だけ。ソコに障害があろうが無かろうが、関係など無い。
迫る光が視界いっぱいに広がる。思わず一歩下がってしまった箒を誰が責めようか……。
光は確かに箒の命を奪う為に動いた。
光は確かに箒を包みこむ為に動いた。
箒は思わず瞼を閉じた。覚悟した。自分を狙ったという隙に一夏が動き、敵を討てば、という考えもしてしまった。
瞼を焼かんばかりの光。その光が瞼の上から消えた。
瞼を上げた箒の目の前には、黄色い甲冑を纏った騎士が居た。

腰に剣などなく、一夏の白式のような翼もなく、セシリアのブルー・ティアーズや鈴音の甲龍の様な非固定浮遊部位もない。

けれどソレは盾を持っていた。万物から乗り手を守る五角盾だ。その盾が、篠ノ之箒を殺す為に迫っていた光を防いでいる。

やがて光が止み、ようやく箒の視界が光に慣れてくる。

黄色のＩＳ。五角盾。

「いやぁ、マジ死ぬ。コレ絶対死ぬって」

騎士は相変わらず口を開けば冗談の様に減らず口を叩く。盾が付けられた左腕を軽く振るって息を吐き出したお調子者はやっぱりヘラヘラ笑いながら箒に振り返った。

「大丈夫か、篠ノ之さん。パンツ見えてるよ！」

「死ね」

「ヒッ……助けたのに酷くないッスかね？」

「助けてくれと頼んだ覚えは無い！」

「あー、まあそうだけどさー。ま、パンツっていう報酬得てるからいっか」

「ふん……」

尻餅をついていた箒はしっかりと足を閉じてから立ち上がった。その頬は少しばかり赤いけれど、阿呆のヘラヘラ笑っている顔を見ていれば幾分か落ち着いてしまった。

「穂次!?」
「おお、一夏！　お前を殴りに来たぞ！　俺はそこの恥ずかしがり屋な全身装甲のお姉さんの味方だ！」
「冗談でもシャレにならねぇよ!!」
「ま、そっか。んじゃ、ＩＳ《村雨（ムラサメ）》、駆り手は夏野穂次。ヒーローみたいにとは言わねぇけど、推して参ろうか！」
穂次のＩＳ、村雨が空へと舞う。盾しか持たないＩＳ。それは全身装甲のＩＳの事を異常と言う事が出来ない異形だ。
守るぐらいならば、避けるべきというのがＩＳの通説だ。
だからこそ、全身装甲というのは異常だ。
だからこそ、盾持ちというのが異形だ。
「んじゃ、一夏達。攻撃は任せた！」
「は？」
「防御は俺に任せろ！　バリバリー」
「本当に武器ないのかよ！」
「ねぇよ！　あったら俺だってもっとカッコよく登場したね！　間違いない！」
「お前も武装一つとか、ざまぁみろ」

「ウッセー、バーカ！」
「アンタら、アレより先にぶっ飛ばしてもいいのよ？」
「ヒッ……今もビーム防御してる俺への感謝はソレですか」
「むしろ囮としての仕事だから、ソレが普通よ」
「ブラックすぎぃ！」
「お、鈴のＩＳの色と掛けてるんだな！」
「一夏、穂次。この戦いが終わったら覚えときなさいよ？」
ニッコリとした笑顔の凰鈴音に戦慄する夏野穂次。彼は今も盾で灰色ＩＳのビームを防いでいるのだが、労わりの言葉が飛んでくる事はない。
当然である。そう、ソレが当然なのだから。
「そんじゃあ、まあ一夏。後は頼んだ。ぶった斬るかアリーナのバリアを消せば終わるからヨロシクね！」
「前者は分かるけど、後者は？」
「さっき鬼から金髪美少女が飛び出してったって連絡があった」
「わかった。お前、死ぬんだな……」
「その時はお前も一緒ダゼ……」
「ハイハイ。遊んでないで、動きなさい、馬鹿二人」

「ヒッ……俺は攻撃防いでるんですがソレハ」
「木偶にも出来る事は仕事って言わないのよ」
「条件キツスギィ！」
「それじゃ、鈴。さっきの言った様に」
「わかったわ。次はアンタが射線上に飛び出してきても容赦も情けもなく撃つから」
「……穂次が来てから何か当たりが強くなった気がする」
そんな一夏の言葉は空へと溶け込んだ。
刀を構えた一夏を見て、穂次は目を細める。けれどその表情も一瞬だけで、溢れ出そうになった言葉を穂次は飲み込んで、またへらへらとした笑いを改めて浮かべた。
白式が加速し、その背中に更に衝撃を受け、衝撃は全てエネルギーへと変換される。ソレを証明するように白式の握る刀、雪片弐型の光が強くなる。
純白の光。全てを打ち消す光。脅威を断ち切る剣。
エネルギー状の刃は振るわれ、けれどそれは灰色のＩＳに触れることは無かった。所詮は人間の動きであり、計算しつくされた動きをする灰色のＩＳにとって一夏の動きは見切りやすいモノだった。
だからこそ灰色のＩＳは一夏へと砲口を向けた。何の警戒も無く、一夏に狙いを定めた。

例え黄色のＩＳが同じ様に盾で防ぐからといって、その行動を変えることはない。そこに疑問など生じない。
けれど、どうだ。
どうして腕が動かない。
灰色のＩＳは自身の腕に意識を伸ばす。
エラー音。エラー音。
エラー、エラー。エラー。エラー！
センサーカメラを周囲に巡らせて漸く灰色のＩＳは客席に飛ぶ四つの何かを捉えた。
捉えたがソレに対して動く事など出来なかった。
既に光は灰色のＩＳを貫いていたのだから。

「流石ですね！　オルコットさん！　イヤーその狙撃の腕は感服に値します！」
「夏野さん！　さぁ答えてもらいますわよ！」
「いつものチョロいオルコットさんで居ましょうよ！　おっぱい触っちゃうぞ☆」
セシリア・オルコットが黙って砲口を夏野穂次に向けて、何も言わずにトリガーを引いた。その目は何の感情も無くただ家畜を殺す為だけの行為であった。

そんな家畜はしっかりと迫ってきた光を盾で防ぎ口早に捲くし立てる。
「流石に警告なしは怖いッスよ！」
「チッ……ブルー・ティアーズ！」
「それは当たるから！　お、俺の後ろには一夏もいるんだぞ！」
「おい、俺を巻き込むな！」
「知りませんわ。纏めてお逝きなさい」
「怖すぎますよ！　オルコットさん！」
「俺は本当に関係ないだろ！」
やいのやいのと言い争いをする男二人を家畜でも見るように視線をやるセシリア。彼女の目は本気であるが流石にブルー・ティアーズまで使用して穂次を狙おうとは思わない。それは次の特訓でするのだから、お楽しみは次にとっておこう。
安堵の息が溜め息に変わって、吐き出された。心配も馬鹿らしくなってしまった。それもコレも穂次が悪いのだろう。と苦笑を浮かべるセシリア。
気を抜いた。
いいや、気を張っていたとしても回避は不可能だったのかもしれない。気がつくのが遅れた。だからこそ、セシリアは珍しく必死な顔をしていた穂次に驚いてしまった。
「オルコットさん！」

「へ？」

逸早く気付いたのは穂次だった。ソレが幸いだったかどうかなど穂次にしかわからない事だし、少なくとも誰かにとっては穂次であってよかったと思う事だろう。

セシリアを押した穂次が光の奔流に包まれた。

吹き出しは出ているか?

目が覚めるとソコは保健室だった。最近お世話になりすぎている様な気がしないでもない。というより、

痛い。全身痛い。ＩＳの絶対防御は効果が薄いのだろうか……いや、うん、ないな。

体を起こして気絶していた分で動かせなかった筋肉を動かしていく。腕を高く上げた所で左肩に鈍い痛みを感じて止まる。

「イテテテテ」

「阿呆が。あまり動くな」

「っても全身打撲程度でしょ。問題ねーですよー」

鋭い目をして俺を窘めた織斑先生にヘラリと笑って言葉を返す。左肩が痛むのは変な体勢で盾を使っていたからだろう。うーん、色々足りないなぁ。

「夏野。閉じていたな?」

「いやぁ、アハハ……数秒程度だったので、つい」

「……お前を責めるヤツは居らんさ。ただし、許可無く閉じることは今後禁じる」

「うぃッス。んで、事の顛末って何かあります?」

「所属不明機は白式の一撃によって粉々に粉砕。政府側はこれ以上の情報を求めているが……」
「あー、まあ、粉々になってるんなら仕方ないでしょー。政府も無茶なことを言うモンですねぇ」
「明日の朝にはアリーナの復旧活動もする。ソコで見つかるかも知れんが……あまり期待は出来んな」
「あー、そうツスねー」
互いに肩を落として溜め息を吐き出す。お互いの状況を確認した所でようやく一息吐けた程度のモノだ。
「……なるべく早く治せよ、夏野」
「心配してくれてるんスね。いやぁ織斑先生に心配されるなんて男冥利に尽きるツスねぇ」
「お前が居らんと仕事を任せるヤツが居ないからな」
「ふぇぇ……生徒にさせる仕事じゃないツスよぉ」
「ふん。それと、お前は適度にヘラヘラ笑っていろ。それが夏野穂次だろう？」
「……そうツスね！　いやぁ、変に落ち込んでたんスかね！　お気楽極楽極々普通、それが俺でしたね！　アッハッハッハッ！」

「そのまま極楽にでも行ってろ」
「乗せるだけ乗せてその反応はどうかと思うんですが……」
笑いを零してみれば随分と冷たい反応が返ってきた。どうしろってんだ!
口を尖らせたところで誰もキスをしてくれないんだから、ガックリと肩を落とすことで不機嫌を表していく。当然、織斑先生はそんな俺を見て「可哀想!　仕方ない慰めてやろう!」と感じる筈だ。いやー!　おっぱいがきっと当たるんだろうな!　出来れば山田先生にお願いしたい。なんか織斑先生のソレは硬そうだし……。
「怪我人に手を出す気はない」
「……ナチュラルに思考を読まないでもらえますかね」
「治ったら覚えていろ」
「ヒッ……怪我の治らない方法を調べなきゃ」
怪我が治る前に次の怪我の予約が取れてしまった。保健室の住人になりそう……いや、次に目が覚めることがあったならそこはきっと来世になってるだろう。夏野穂次はクールに去るぜ……!
「ふん……その調子で後から来るヤツらにも心配させない様にしていろ」
「了解ッス!　むしろ俺を心配してる人とかいるんですかね……」
「サンドバックが無くなれば誰を殴ればいいかわからないだろう?」

「例えとして出すのが可笑しくないッスか？」
「……巻き藁が無ければ試し切りもできんだろう」
「なるほど。つまり、俺は意外に大事にされてたんですね！　ワカリマス（白目！」
サンドバックか巻き藁……きっと他に例えを聞いたら瓦とか端材とか、そういうのが出てくるんだろうな！　流石俺！　必要とされてるな（錯乱。
どこか遠くを見ながら乾いた笑いを浮かべている俺を見て満足したのか、織斑先生は少しだけ口元を歪めてからいつもの様にキリッとした表情に戻り保健室を出て行った。
んじゃ、俺も出て行くかな。
と布団を出て両足で地面を踏む。冷やっこいタイルが足に冷たい。
「って、まだＩＳスーツのままじゃん……。フッ、また俺の貞操が守られてしまったか」
泣きそう。
いや、ともかくとしてスリッパを履いて、パタパタとゆったり鳴らしながら保健室の出入り口に立つ。自動扉というのはやっぱり楽だな。
開いた扉の先に、俺は金色の髪を見た。その奥に一夏の顔も見た。その隣には篠ノ之さんも見えた。
「ツテェ！」
「――――っ！　ど、どうしてソコに居ますの!?」

「そりゃ出る為に決まってるでしょうが！　まさかオルコットさんの頭突きが俺のアゴにキまるなんて思っても見なかったけどな！」
「ＩＳで気絶して、ようやく起きたと聞いて急いで来ましたのに、その反応はどういうことですの!?」
「いやいや！　これだけは言わしてもらいますよ！　いつもは俺の冗談ですましてるけど、コレだけは言わしてもらいます！　今回に限ってはオルコットさんの前方不注意が原因でしょうが！」
　俺はアゴを抑えて、オルコットさんは頭を抑えて涙目で俺に牙を剥いている。俺の反論に悔しそうな顔をして、それこそ「ぐぬぬ」とでも言いたそうな顔をしていたオルコットさん。可愛い。
「ま、まあ確かにわたくしの不注意が原因ですが……！　それでも気絶したアナタがどうして出入り口に立ってますの!?」
「そりゃぁ起きたからに決まってんでしょ。気絶してる方が都合がよかったんですかね……なるほど、わかったぞ。オルコットさん。気絶している俺にキッスをしようとしたんですね！」
「死ね、変態」
「ありがとうございます！」

「あー、穂次。後ろで保健の先生が凄い睨んでんだけど？」
「大丈夫だ問題ない。俺はいつも睨まれてる！」
「問題しかないな。死んだ方がいいんじゃないか？」
「ヒッ……篠ノ之さんの当たりがキツイんですが……俺って何かしたっけ？」
今回に限ってはまだ何も言ってないから攻められる何かは無い筈なのだけれど、先ほどまでの発言を洗っても何も無い。
「うーん、俺って篠ノ之さんに対しては別に変な発言してなかったと思うんだけど……」
「穂次の事だから何かしたんだろ」
「否定できないのが悔しい……でも感じちゃう！」
「……」
「せめて反応ぷりぃず。というか出て行かないと本当に折檻くらうから寮に戻ろうぜ」
きっと織斑先生にも負けないぐらいに鬼の様な形相だろう保健の先生は決して見ない。まあ、鬼本体には流石に負けるだろう。
両肩を竦めて歩き出してようやく気付いた。
「凰さん！　居たんですね！」
「ぶっ潰すわよ？」
「ひっ……ドコが潰れるんですかね……俺、気になります！」

「そりゃぁ、衝撃砲で頭からズガンッ、よ」
「ズガンッ、っすか……流石に死にそうかな」
「むしろ確実に死ぬぞ、ソレ」
「織斑先生の一撃よりも軽そうだから、もしかしたらと思って」
「おいおい、穂次。流石に千冬姉だってＩＳの一撃、それも特殊兵装の一撃には及ばないだろ」
「お、そうだな……そうだよな?」
「不安になるからやめてくれ」
「アンタら、また千冬さんに怒られるわよ?」
「その時は一夏を囮に逃げるから、俺は大丈夫だな!」
「安心しろ穂次、どうせ捕まる」
「デッスヨネー……」
　俺と一夏の目がドコか遠くを見つめる。見つめた先には何もないのだけれど、出来るならば織斑先生からの折檻という未来だけは見たくなかった。
　それにしても、俺を睨みつける篠ノ之さんの視線が痛い。本当に俺は何もした覚えはないんだけどなぁ。
「ねぇ、篠ノ之さん。俺って何かしたか?」

「……ウルサイ、変態め」
「変態って言われると、喜んじゃうゾ☆」
「死んでもいいですわよ？」
「遠距離攻撃とは流石専売特許ですね！　てか、本当に何かしたっけ？　少なくとも助けた覚えぐらいしかないんだけど？　ソレで怒られるって……ナニソレコワイ」
「……」
「うーん……あ、わかったゾ☆　俺が篠ノ之さんの白のパン――「ふんっ」ヅッ！」
「穂次が竹刀で殴られてるって凄い新鮮だな。それも悶絶してる」
「いや、一夏。何冷静に判断してるのよ……明らかに変な音してたわよ……」
鼻筋に斜めに何か衝撃が走って言葉が止まった。痛すぎて声が出ない。鼻を押さえた手を見てみれば血は見えない。という事は鼻血が出る程ではないという事か。
「オルコットさん！　俺の綺麗な顔が歪んでない!?」
「元々歪んでましたわよ？」
「慰謝料は誰に請求したらいいんですかね……」
「神様あたりが妥当じゃない？」
「凰さんまでキツイでござる」
「大丈夫か？　穂次」

「お前はどうでもいい。俺に優しくすんな」
「ひでぇ……。つーか、箒。流石に謝れよ?」
「……ふんっ。コイツがいらない事を言わなければよかっただけの話だ」
「まあ、そうツスね!　俺は満足してるからいいんだゾ☆!」
「……あ、穂次ってマゾなのね」
「そうやって納得される様に言われると傷つくって初めて知ったわ……ん?　というか名前?」
「ん?　あー、何?　もしかして名前を呼ばれるの嫌だったとか?」
「いや、そうじゃねぇけど」
「それとも名前を呼ぶのに段階踏んで、なんて女の子みたいなことを言うの?」
「いやいや、滅相も無い。　俺も名前で呼んだ方がいいかなー、って」
「アンタに名前で呼ばれるなんてゴメンよ。というかちゃんと段階踏みなさい。これでも女の子よ」
「ひっ……さっきまでのサバサバした対応はどこに行ったんだ」
　女の子って分からなさすぎぃ。女心と秋の空なんて言うから仕方ないのだろうか。
　いや、それでも凰さん程の美少女から名前で呼ばれることは非常に嬉しい。コレは確かに嬉しい。むしろ名前を呼んでくれる程度には親交を深めたと言ってもいいだろう。

つまりソレはきっと未来的に見れば「ダーリン（はぁと」と呼ばれるに違いない！
「ないから」
「あ、そうっすよね。知ってますよーアッハッハッハッ……。　ん？　俺の頭の上とかに吹き出しでも出てるの？」
「アンタの顔見てるとなんとなく考えてることわかるわよ。あと、名前でもいいわよ。というか、アンタに凰さん、とか言われるてるとなんか変な感じするし」
「鈴ちゃん！」
「あー、うん。わかった。コレはアレだ。馬鹿にされてる感じね」
「ヒエッ……名前を呼んだら殺気を当てられてるんですが……」
「次にそんな愛称で呼んでみなさい。プチッといくから」
「一夏。鈴音さんが怖いんですが……」
「お前が大体悪い」
「どうせお前には優しいだろうよ！」
「そうでもないぞ？」
「……あ、そうだな！」
「なんだよ、今の間は……」
「な、夏野さん、わたくしも名前で呼んでもよろしくてよ？」

「ありがとうございます！　セシリア様！」
「……」
「そんな険しい顔しないで。美人な顔が台無しだゾ！　というか、別に俺も名前で構わないぞ」
「そ、そうですか……ほ、ほ、」
「オーッホッホッホッ！」
「穂次さん？　次に馬鹿にしたらぶち込みますわよ？」
「う、ウィ、マム……」
　一体何が、ドコにぶち込まれるんですかね……ニッコリ笑ってるのに、明るく聞こえないんですがソレハ。
　ともあれ、いくらノンビリ歩いているかと言っても寮の前へと着くのは容易くて。そして俺は気付いたのだ。いいや、気付いてしまった。
「ヤバイ……」
「どうした？　穂次。常識でも落としてきたか？」
「いや、それは元々ないんだけど」
「無いのかよ」
「俺、ＩＳスーツのままじゃん……着替えとかアリーナに置きっぱなしだよ」

「あー、明日でいいんじゃない？　もう寮の目の前だし」
「今まで気付いてない事も問題だと思いますが……」
「夏野だから仕方ないだろう」
「そうですわね」
「そこの美少女二人！　聞こえてるぞ！」
「俺も着いて行こうか？」
「ヒェッ……」
「いや、なんで怯えたんだよ」
「いや、まあオヤクソクってヤツだよ」
「何の約束なんだよ……」
「ま、それはイイとして。俺一人でいいよ。それこそ寮の前だからな」
「ふーん……そっか。んじゃ、お前の部屋に後でまた行くわ」
「まーた、お前はそんな事言う……鈴音さんとか篠ノ之さんとかセシリアさんの視線も強くなるし」
「一夏、アンタやっぱり……」
「なあ鈴。お前も俺をどうしたいんだ？」
「ほら色々噂もあるし……」

「穂次、あとで言うことあるからスグ帰ってこいよ?」
「俺が原因って決め付けるのはどうなんですかね……」
やけにいい笑顔の一夏が俺を見送る。俺に決め付けるのはどうかと思う。いや、俺が原因だから問題ないのか?
ともあれ、織斑式説教が確定した訳である。解せぬ……。

「ただいまー……」
「おかえり、穂次」
「ようやく帰ってきましたのね」
「ちょっと遅いんじゃない?」
「勝手に頂いているぞ」
「……色々言いたい事があるけど、うんイイヤ!　アッハッハッハッ……はぁ」
アリーナから戻ってきた俺を部屋で迎えたのは織斑一夏と愉快な美少女達の皆様である。

一夏はまあいい。コイツは来るって言ってたから問題はない。いや、まあ他の事では問題が多数だけど。

セシリアさんと鈴音さん、そして篠ノ之ォ！　お前らはなんで居るんだよ！　つーか！　篠ノ之さんはどうして俺がこっそり買ってた煎餅とお茶を勝手に飲み食いしてるんですかね！　許可とろうよ！

「あー、スマン。俺が出した」

「テメェか一夏ァ！　ん、一夏か。じゃあいいか」

「いいんですの？」

「いいのいいの。つーか、一夏には元々勝手にしていいって言ってたし。これでも心は広い方なんだぜ！」

「あ、戸棚の奥に大切そうに仕舞ってたヤツだったんだけどよかったんだな」

「おのれ……許さんぞ一夏ァ……」

「心狭いじゃない」

鈴音さんが苦笑しながらちゃんと締めてくれた。俺と一夏だけの会話だと広がるだけ広がって閉じることはないので非常に納まりがいい。互いに互いがボケっぱなし、というのも面白いけれど、やっぱりツッコミが必要だな！

「つーか、一応男の部屋なんだけど……寮とは言っても慎みとか持とうぜ」

「……あ、穂次って男だったわね」
「他に何に見えてたんですかね……」
「……ヘタレ?」
「スゲェ不当な評価を得た気がする……」
「それでは穂次さんも帰って来た事ですし、キリキリ吐いてもらいますわよ?」
「え?　何?　俺がデータ取りと称してセシリアさんのＩＳスーツを舐るように見てたことがバレたの?」
「それは後で後悔してもらいますわ」
「墓穴掘ったなぁ……他に吐く情報とかあったっけな……」
「穂次さんのＩＳに関してですわ!」
「あー、そっちかー。なるほどね!　いや、知ってたよ!　ハハハッ……よかったぁ」
「他も後で吐いてもらうからな?」
「ヒッ……篠ノ之さんも怖すぎぃ……」
「というか、何?　穂次ってＩＳ使える事を黙ってたの?」
「調整中だったんだよー」
「ふーん。じゃあ仕方ないんじゃない?」
「あの調子を見る限り、その調整中というのも嘘なのでしょう?」

「あー……うーん。まあそうなんだけど」

どうしたもんかなぁ。と頬を指で掻く。どうやらセシリアさんは逃がしてくれそうにも無いし、鈴音さんは何やら興味がありそうに俺を見てるし、篠ノ之さんはお茶飲んで寛いでるし、一夏はそのお茶淹れてるし。あ、一夏、俺もおかわり。

「さあ！　言ってもらいますわよ！」

「禁則事項ですッ☆」

「嘘おっしゃい！」

「コレはホントだよぉ……。コレでも政府側から色々口止めされてるんだぜ？　村雨だってココでお披露目するつもりじゃなかったし」

「むぅ……」

「不満顔のセシリアさん可愛い。　ま、一夏達の特訓に参加出来なかった事は謝るよ。ごめんなさい」

「……そうやって素直に謝られますとコッチが悪い気がしますわ」

「いやいや、そんな。元々は俺が面倒臭いとか、おっと」

「穂次さん！」

「ハッハッ、セシリアさん。コレでも怪我人だから、流石に勘弁してください」

「怪我人にしては元気そうね」

「心の怪我を負ってしまってな……」
「じゃあ肉体は元気ね。問題なし!」
「そこに気付くとは……やはり鈴音さんは天才かッ!」
「やめて、照れるわ」
「ドヤ顔してるのもイイッスね!」
「穂次さん!　話は終わってませんわよ!」
「あ、ハイ。　つーか、なんでそんなに怒ってんのさ」
「怒ってなんかいませんわ!」
「いや、怒ってんじゃん……ハッ!?　なるほど、わかったぞ!」
「穂次、ソレを言ったら流石に本気で引くわよ?」
「あ、うん。黙ってる」
　本当にどうして鈴音さんは俺の発言を読むんですかね……精神感応の特殊能力でも有していのか?
　ともあれ、どうやらアノ日でもないらしいのに怒ってるセシリアさんの前に正座する。
「なんか穂次が凄い自然な動作で説教聞く体勢になってるんだけど」
「千冬さんの調教の賜物ね」

「いや、あの人は先に手が、いや、なんでもないです」
「穂次が学習してる……ですって!?」
「ククク、俺が同じ間違いを二度も繰り返すと思っているのか……！」
「穂次さん！」
「あ、スイマセン。真面目に聞きます」
「やっぱ学習してないじゃない」
「というか、セシリアは穂次が倒れて一番心配してたんだから甘んじて受けとけ」
「一夏さん！　何か言いまして!?」
「何にも言ってないゾー。凄い穂次の気持ちが分かった気がした」
「なるほど、セシリアさん。すまなかった」
「わ、分かればいいのです……」
「まさか君がソコまで俺を想ってくれていたなんて……！」
「……」
「人を見る目じゃありませんよ！　セシリアさん！」
「家畜は黙っていただけますか?」
「あ、スイマセン……」
ヤバイ。コレはヤバイヤツだ。ゾクゾクしてきたぞ！　このまま頭を地面につけれ

ば踏んでもらえるだろうか?　つーか、股間的に正座しているのも問題だから頭を下げるんだけどね!
「それで、なんですの?　あのＩＳ」
「あー、村雨のこと?　カッコいいだろぉ!」
「武装面がちょっとなぁ」
「刀だけの男に言われたでござるよ」
「最後のあの一撃も盾があったのですから、ソレで防げばよかったのですわ……」
「あー、うん。ゴメンゴメン。出来ない理由もあったんだけどさー、うん、あの時はアレが限界だったのさ」
「ふん……。それで、出来なかった理由とはなんですの?」
「禁則事項ですッ!」
「……」
「ああ!　またセシリアさんの目が家畜を見下すような目に!　素敵!」
「ゴミでも喋りますのね」
「家畜以下になってた……まあ、冗談はさておき。あの盾が特殊兵装らしくてさー。防御するに至っても色々設定とかが必要なんだ」
「……まあ、それで満足してあげますわ」

「わーい。嬉しいなぁ」
「次はあんな危険なことはしないでくださいますね？」
「あー、うん。それはムリ」
「どうしてですの!?」
「いや、ほら。セシリアさんは女の子で、俺は男の子だからね！」
「――っ、意味がわかりませんわ！」
そんな事を言い残して部屋から出て行ったセシリアさん。うーん、俺は正座を崩していいのだろうか……。
「うーん、やっぱり女の子には理解してもらえないんですかねー」
「俺はなんとなくわかるぞ？」
「男だからだろ」
「あたしもなんとなくだけどわかるわよ？」
「男だから、いえ、女の子です！　美少女！　スゲー！　チョー可愛い！」
鈴音さんの右腕が拳を握ってＩＳ装甲を纏った。ソレは死ぬから。普通に死ねるから。
どうしようもないので立ち上がろうとした所で俺の前に陰が出来る。顔を上げればおっぱいがあった。うーん、デカイ。

「何を立ち上がろうとしている」
「へ?」
「さあ、お前が馬鹿の様に言っていた記録とやらをさっさと出してもらおうか?」
「……ひぇっ」
「ああ、その後には俺の説教も待ってるからな。喜べ、穂次」
「……」
俺が立ち上がるのはきっと二時間ぐらいあとだろう。え?　ナニソレコワイ。

あんな可愛いヤツが女な訳ないッ！

シャワーから出てきたお湯を浴びていればようやく頭が冷えてきた。冷静になれば後悔と罪悪感が心から湧き出してきた。

瞼を閉じて溜め息を吐き出し、セシリア・オルコットはシャワーのバルブを捻って水を頭から被る。

助けられた、という自覚はあるし感謝もしている。穂次が自分を押し出さなければ今頃ベッドの上で寝ていたのは自分だった筈だ。

自分が素直に感謝の言葉を出せなかった、という事もある。けれど、言うタイミングを逃してしまったのだ。あれよあれよ、と彼の言葉に流されて、気がつけばいつもの様に彼に対して酷い物言いをしていた様な気がする。というか、していた。

そもそも彼がソレを咎めずに、言葉を受け入れ、更には冗談の様に振舞っているのだから、という言い訳を心で唱えながらふと疑問が沸く。

もしかしたら実は嫌がっていて、けれどソレを言い出せないでいるかも……。

そう考えて、そんな彼を想像して、いや、無いだろう。と自分を否定した。アレがそんな人な訳が無い。むしろ自分からヘラヘラ笑ってセクハラ発言をするような男だ。

セクハラ発言が無ければそれなりに見てくれもいいのに。
　そんな男に助けられた。助けてくれた。あの時点で一番素早く動く事が出来たのは機体スペックを考えると一夏だったであろうけれど、自分を助けたのは穂次だった。
　その理由を聞いてみれば、男だから、という随分と抽象的な言葉が返され、理解も出来なかった。いっその事いつもの様に「セシリアさんのおっぱいを触りたくて移動したらあのＩＳに邪魔されたでござる」なんて言ってくれた方がまだ理解できる。
　そこまで考えてから、自分の中での彼が随分と酷い扱いである事に気付いた。そもそも彼が変な発言をするのだから、悪い。そうに決まっている。
　彼が真面目な顔で、それこそ自分を助けたぐらいに真面目な顔で、真面目な事を言っていたならば。
「――っ！」
　セシリアは無言でシャワーのバルブを回して水の勢いを強くした。激しく白い肌を叩く水のお陰か、幾分か顔の熱は引いた。
　彼はいつもの様にヘラヘラ笑っているのがお似合いだ。そうに決まっている。
　でも、それでも……。
「……ないですわ。そんな訳がある筈ありません！」
　否定をする。無いったら無いのだ。

セシリアの脳内には金色にも似た黄色の騎士が自慢の盾を構えていた。その顔は真剣そのもので、「俺がセシリアさんを護ってやるよ」なんてありえない事を言っているのだ。頬が熱くなってきた。

そもそもあんなセクハラ男のドコがいいと言うのだろうか。口を開けば自分の胸を触りたいなどと言うし、挙句には自分以外の人にも可愛いなんて言うし！

いや、これ以上は止めよう。あんなヤツのことを考えても生産性などないのだ。

バルブを捻って水をお湯へと変えて冷えていた体を温める。

今一度溜め息を吐き出して、セシリアは自身の胸に手を伸ばす。

水の流れる隆起を少し撫でて、眉間に皺を寄せてからお湯と一緒に色々な妄想を排水溝へと流す。

「……ま、まあちょっとぐらいはカッコよかったですわよね？」

誰に聞かれる事もない確認の様な言葉を呟いて、セシリアは顔を少し赤くする。どうせ本人には言われないだろう言葉はお湯と一緒にどこかへと流れていった。

「ぶえっくし！」

「なんだ、風邪か？」

「いや、違うと思うけど……あれか。何処かの美少女が俺のことをカッコいい！　とか

噂してるんだろ。イヤー！　俺って罪な男だぜ！」
「お前、本心で言ってる？」
「そうだよな、悪口だよなぁ……目の前で言われたら反応出来るのに、悔しい！」
「言われる事自体はいいのね。馬鹿」
「もっと言ってもいいんですよ！　鈴音さん！」
「さっさと帰ってもらえる？」
「ヒッ……俺の部屋なんですがソレハ」
「土に」
「あ……（察し」
そんな美少女とは関係ない所で変態は説教中に更に罵倒されるのである。

◆◆

「うーん……どうしたもんかなぁ」
日曜日という事もあり、ＩＳ学園はそれほど賑わいも無く、男（セカンド）である俺を眺める人もソレほど多くない。というよりも、俺よりも一夏の方が人気だから仕方ないね。
一夏とセットじゃない俺はカレーの福神漬け、トンカツ定食の冷奴、酢豚のパイナップルみたいな存在らしい。まあ、居なくても問題ないけれど居れば居るならそれでよ

し、みたいな。

ともあれ、男性的にモテている一夏に比べれば相変わらず珍獣感の止まない俺は言動もあって親しみやすいお調子者、という立ち位置なのだ。話掛けてくれる美少女が増えるのだから俺として大満足である。

さて、俺の前には券売機がある。寮生活に置いて、食堂を利用することになるのだけれどここ数ヶ月で大体のメニューをコンプリートした俺は二週目に入ろうとしている。

その二週目の第一食。ここは慎重に決めなくてはいけない。それこそ今後の学園生活が掛かる。

「あら？　穂次さん。おはようございます」

「おはよう、セシリアさん。今日もお綺麗です！」

「……」

「ん、どうしたの？　何かあった？」

「……いえ、なんでもありませんわ」

「なるほど、低血圧って訳ですね！」

「……はぁ」

「いや、反応が溜め息だと流石に傷つくんですが」

本当に低血圧なのだろうか。いや、普段の朝は普通にしているし……実は休日は昼ま

で寝てる派とか？　それなら朝の食堂には来ないだろう。
　悩んでいながら食券のボタンを押す。押してしまった。クセみたいなモノなのか、一夏との飯が増えていたからだろうか、日替り定食の食券が券売機から吐き出された。俺の二週目は日替りかよ……ま、いっか。
「セシリアさん何食べるの？　いつもと一緒でいい？」
「え、あ、はい」
「はいはーい」
　軽めのサンドイッチセットの食券を券売機から吐き出させて食堂のおば様へと渡し、料理が出来るまでゆっくり待つ。
「……どうしてナチュラルにわたくしの食券まで買ってますの？」
「え？　サンドイッチな気分じゃなかったとか？」
「そうではなくて……もういいですわ」
「何を諦められたんだ……」
　何か調子が狂ってしまう。いや、というよりもセシリアさんの調子がおかしいのだろうか。
　ふむ、ココは俺が頑張ってセシリアさんの調子を戻さなくてはいけないな！
「本当にどうしたんだ？　セシリアさん。おっぱいでも萎んだの？」

「……ハァ」
「これはマジな溜め息だな！　俺でもわかるゾ☆」
ジト目で睨まれながら溜め息を吐かれた。流石の俺も傷つくんですよ！　朝からいいものを見れた、と言いたいけれど、それはソレ。
サンドイッチセットと日替り定食のお盆を持って空いている席に移動して座る。
「……ありがとうございました」
「セシリアさんが俺に感謝してる……だと!?」
「茶化さないでいただけます？」
「ヒッ……スグにキツく睨まれるのはどうかと思うんですが……」
「……ハァ」
「ホントにどうしたんだよー。俺にでも吐き出しちゃいなヨ！　俺なんて壁みたいなモノだから吐き出しても問題ないんだゼ！」
「……前に助けていただいたのに、すっかり感謝をするのを忘れていましたので……」
「あー、っても、アレはアレで。俺としては当然の事をしただけだからなぁ」
「それでも感謝されるべき行為である事は変わりませんわ。その……ありがとうございました」
「うむ。報酬としておっぱいを揉めるとか」

「は？」
「あ、なんでもないッス」
「……そうやってスグに誤魔化しますのね」
「へらへら笑ってるのが俺だからネ！　まあおっぱい触りたいのは本心だけど」
「救いようがありませんわね」
「へっへっ、だからこれからも適度に罵ってくれればいいんだと思うよ！」
「……ハァ」
「いやだから溜め息は止めてぇ！」
何かに失望するように溜め息を吐かれるのは流石に傷つくんだからな！
それにしても不機嫌顔でもサンドイッチを小さく食べてるセシリアさんは可愛いなぁ。ずっと眺めていた。　ハッ！　今こそＩＳの記録機能を用いる時じゃないか！
「穂次さん？」
「ん？」
「許可無くＩＳを使用すると織斑先生が飛んできますわよ？」
「ヒエッ……まだ何も行動してないのに気付かれたでゴザル」
「考えが顔に出てるからですわ」
「なるほど！　真面目な顔をしてればバレないんだな！　おっぱいを触りたい」

「声に出していますわよ、変態」
「ありがとうございます！」
「……はぁ、もういいですわ」
「急に諦められるとどうしていいかわかんねーんですが」
「穂次さん。今日のご予定は？」
「へ？　まさかデートのお誘い!?」
「アリーナでガッツリ絞ってあげますわ」
「ドキドキしてきた……」
「？」
「ツッコミも居ないからどうしようもないッスなぁ……。ああ、それで。今日は予定があるから無理ですゴメンナサイ」
「ご自宅にでも帰りますの？」
「――、あー、いや、ちょっと日用品を買いにね」
「そうでしたの」
出てきそうになった言葉を飲み込む。別に言ってもいいのだけれど、変に気を使われるのも困る。
へらへら笑いながら「ふーん」と言葉を漏らしているセシリアさんを眺める。日常的

に絵画を見つめる生活ってこんな感じなのかね？　美人が三日で飽きるとかないわ。絶対ない。一生見れるよ！

「なら、わたくしも着いていってあげますわ」

「え？　いや、いいです」

「……」

「そんな怒ったような顔をしないでもらえますかね？　可愛いなぁ」

「一応、理由を聞かせてもらいましょうか」

「禁則事こ、スイマセンスイマセン睨まないで下さい」

「理由はありませんのね」

「いやー、セシリアさんじゃなくても断ってるぞ？　むしろ、俺だってセシリアさんを隣に連れて歩きたい。小物屋とかに行って「キャーアレ可愛いー」なんて言いたい」

「アナタが言うんですのね……、気持ち悪い」

「冗談ですよ。アッハッハッハッ！　ヤダナー！」

「それで、そこまでわたくしを連れて歩きたい夏野穂次さんはどうしてわたくしの申し出を断りましたの？」

「あー……凄い言い難いんですけど」

「？」

「俗に言う、女の子の日。みたいな感じで男にも特有の男の子の日というモノがあるんですよ」
「……な、なんですって」
「だから、まあ、その消耗品を買いに行くんで、ね？」
「わ、わかりましたわ……申し訳ありません」
「ちょれー」
「何か言いました？」
「いえいえ」
そんなのある訳ねぇだろｗｗｗどうして信じるんだよｗｗｗ俺って俳優にでもなれるんじゃね？ｗｗうっはっｗｗＩＳ学園辞めても先は明るいな！
明るけりゃァいいなぁ……。
ともあれ、朝食も終わり俺は街に買い物に、そして夕方に戻った俺は騙されたことを教えてもらったセシリアさんの待つ寮にシバかれに行くのでした……メデタイ！

◆◆

六月上旬。俺の耳に途轍もない情報が入ってきた。

どうやら今月の学年別トーナメントで優勝すると一夏とデート出来るらしい。いや、うん、コレはどうでもいい。どうせ一夏だからそんな事ありえない。

問題は、よく情報をくれる女の子が「女の子だけの内緒話だよ！」と言ってその情報を俺にくれた事だ。

……俺は女の子だったのか！　やっべぇ、鈴音さんの事を馬鹿に出来ない絶壁っぷりなんだけど。

ともあれ、女としてはともかくとして、男としての自信を大きく無くした俺は日々をヘラヘラ笑いながら過ごしている。何も知らない一夏から「目が死んでる」と評価を得たが大体コイツの所為と考えるとイライラしてきたからコイツの手助けはしない事を心に誓ったのである。

お前は勝手に困っていろ、一夏。アーッハッハッハッハッ！

そんな噂の飛び交う月曜日。唯一その噂を一夏に伝える事が出来そうな俺が黙っている事で一夏を取り巻く環境が凄い面白い事になっている月曜日。当然、その事を一夏は知らない。一夏の見ていない所で火花を散らしあう女生徒達を見ていると俺の胃に穴が開きそうな気がしてならない。俺はまったく関係ないのに。つーか、俺とのデート

とか、そういう噂はまったくでないんだけど、それはどういう事だよ。
「やっぱり一夏が悪なんだなって」
「なんでだよ」
「うるせぇ、この野郎。女の子扱いされた俺の気持ちがお前にわかるか!?」
「いや、むしろお前のドコが女の子なのかすら分からん」
「そうだな。俺にもさっぱりわかんねーよ……わかんねーよ……」
「お、おぅ……お前も苦労してるんだな」
「お前の苦労は幸せそうだな！　呪うぞ！」
「なんで呪われなきゃならないんだよ！」
「――黙れ、阿呆共」
しっかり二撃で俺と一夏の頭を捉えた織斑先生が淡々と言葉を繋げる。俺と一夏は黒い閃光が走ったことにより頭から湯気が出ている気がするけど、きっとそれは気のせいだろう。つーか、叩かれて湯気が出るなんてギャグ漫画じゃあるまいし……どういう速度で殴られたんだ、マジで。
「では、山田先生。ホームルームを」
「は、はい！　ええっと、今日はなんと転入生を紹介します！　それも二人ですよ！」
「ハイ！　おっぱ、山田先生！」

「……はい、夏野君」
「すっげぇ顔を顰められたけど、関係ねぇ！　可愛いですか!?」
「……さ、それでは入ってきてくださーい」
凄い無視のされ方をされた気がする。
入ってきたのは両方ともズボンを穿いた存在だった。
片方はわかる。女の子だ。白銀の長い髪と眼帯の美少女。緊張とは無縁なのか厳しい顔をして視線で一度グルリと見渡して一夏の所で停止し、そして静かに瞳が閉じられた。あ……またツスか。そうツスか。
もう片方。セシリアさんと違って黄色の強い金色の髪。爽やかそうな笑みを浮かべている。コチラも美少女だ。ああ、美少女だ。
両者とも胸がとても残念だが、美少女を見るには関係ない。全てのおっぱいには各々に良さがあるのだ……。
「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことが多いかと思いますが、よろしくお願いします」
「お、男……？」
「ハッハッ、一夏、何言ってんだよ。あんな可愛い男が居るわけないだろーヤダナー」
「あ、はい。僕と同じ境遇の方がいるという事で本国から転入――」

俺の視界は真っ白になった。
男……？　男だと……？　いやいや、何を言ってるんだ。お前の様な可愛い男が居る訳ないだろう。俺を騙そうなんて百年早いぞ！

マジかよ……。
パチクリしている俺に苦笑して、まったく嫌味のない爽やかな笑顔を浮かべているデュノア。
途端に黄色い声が響く。
「きゃあああああ！」
「男子！　三人目の男子！」
「美形！　しかも守ってあげたくなる形の！」
「きゃあああ、デュノアクーン！　コッチ向いてぇ！」
「なんで穂次まで参加してるんだよ……。一応、確認しとくけど男なんだぞ？」
「バッカッ！　あんな可愛いヤツが女な訳ないだろ!?」
「穂次が壊れた……」
「デュノアくーん！　ほらもう一回笑顔をコッチッ!!」
「黙れ、騒ぐな、静かにしろ。あの阿呆の様になりたいなら騒げ」

額に何かが高速でぶつかった。大丈夫？　俺の頭を貫通してないよな？
当たったソコを手で触れて確認すれば何か白い粉が付着していた。チョークだろうか……いや、チョークが粉々になる速度ってなんだよ……怖すぎ。
俺の犠牲もあって静かになったクラスに一息吐き出した織斑先生。
さて静かにもなった事でタイミングは十二分にあったのだけれど、銀髪美少女は口を開かない。実は極度の上がり性なのだろうか。フフフッ、なるほど、それならば俺がその緊張を解さねばならないな！
立ち上がろうとした俺の机に何かが飛来して、粉々に散った。織斑先生を見ればこちらに鋭い瞳を向けている。コワイ！
もう一度溜め息を吐き出した織斑先生が腕を組み、黙っている銀髪美少女に、若干面倒そうに声を掛ける。
「挨拶をしろ、ラウラ」
「はい、教官」
アカン。これはマジな受け答えだ。たぶん俺がふざけた事、それも織斑先生に対して言えば殺されても文句を言えないレベルのソレだ。次から織斑先生に何かをいう時は場所を確認していう事にしよう。
ん？　そもそも織斑先生に何かを言う時は命を掛けて言ってるからそれほど変わっ

てないな！　問題なんてなかった！

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

自分の名前を言って、それきり黙っているボーデヴィッヒさん。俺はこの自己紹介を知っているぞ。二ヶ月ぐらい前に聞いた自己紹介だ。

俺は視線を一夏に向ければ、一夏は乾いた笑いを浮かべている。お前が自己紹介した時もこんな空気だったんだぞ！

そんな一夏を再度視界へと入れたボーデヴィッヒさんはコツコツと靴を鳴らしながら一夏へと近付く。あー、あれですか。ツンデレ、ツンデレ、と続いて次はド直球系のソレですか。くっそ羨ましい！　死んでしまえばいいのに！

俺が一夏へと怨念を送っていると、ボーデヴィッヒさんの右腕が振られた。乾いた音が響き、一夏が頬を押さえている。

「お前が、お前があの人の弟などと私は認めない！」

俺が一夏にちょっと優しくしようと心に誓った瞬間であった。

ともあれ、叩かれた一夏は少しだけキョトンとしてその表情を怒りへと染める。

「なにしやがる！」

「ふん……」

「こういう役目はソコにいる穂次の役目だろうが！」

「おう、ちょっと待て一夏」
「あー、ゴホンゴホン。それではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二アリーナに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行なう。では、解散」
　一夏がこれ以上何かを言わない為か、それともボーデヴィッヒさんにこれ以上一夏に何かをさせない為か。少なからず俺がこれ以上何かを言われない為でないだろう。泣けるぜ！
「あー、夏野。デュノアの面倒を頼む」
「そういうのってクラス代表の仕事じゃないんスかね？」
「アレだけはしゃいだのだ。嬉しかろう」
「あ、ハイ……つーか、コレ断ったら折檻コースのヤツだ」
「なんだ学習しているじゃないか。ツマランな」
「ヒエッ……俺はいつ殺されるんですかね？」
「さてな。では頼んだぞ」
「へいへい」
　ともあれ、いくらか納まったとはいえ、まだ心に怒りが残っている一夏の腕を掴んで、コチラに寄ってきた爽やか美少年のデュノアに向く。
「君が夏野君？　はじめまして、僕は――」

「あー、自己紹介はまた後で。非常に惜しいけど今はココからスグ離れなきゃいけないんだ」
「へ？」
「ハッハッ、キョトンとした顔もイケてるとか最強かよ。ともあれ、変態扱いは俺だけで十分だろ、ほら行くぞー」
「え、わ、」
「ほら、一夏。いつまでも俺に腕を引っ張られてるな！　俺の許容量は男一人で限界なんだ！」
「筋力がないのか？」
「精神的なソレだ！　つーか、なんなの!?　俺の役目って！　この野郎！」
「お前の日頃の行動思い出してみろ！　叩かれたのがお前ならシックリ来るだろ！」
「……おお、すごい普通だったわ」
「だろ？」
「いや、夏野君は普段どういう性格なのさ」
「フッ、俺ほど素晴らしいイケメンな性格なヤツも早々おらんだろう！　敬え！　そして俺を崇めるのだ！」
「あー、まあノリが良くて、いいヤツって事は確かだから」

「一夏からの評価が微妙に高くてムズ痒いんですが……」
　へらへらと笑いながら急ぎ足は止めない。本当に変に評価が高くてビックリである。
「あ！　転校生発見！」
「しかも織斑君と一緒!?」
「夏野くんも居るわ！」
「夏野くーん！　新しい情報ちょーだい！」
「一夏が俺のこと好きだってよ！」
「きゃあああああ！　また薄い本が厚くなるわね！」
「その原因が本人っていうのも凄いわね！」
「おい穂次」
「安心しろ一夏！　俺は被害の及ばない所でへらへら笑ってっから」
「死ね」
「ひぇぇ……」
　ともあれ、軽口を叩きながら急ぎ足は決して止めない。走りもしない。きっと走れば後ろから『シュッセキボ』が飛んでくるのだから。
「な、何？　どうしてみんな騒いでるの？」
「だいたい穂次が悪い」

「つーか、男が俺ら三人だけだからなぁ。しかも一夏もデュノアもイケメンだろ？　俺は珍獣枠だから（震え声」

「……？」

「ま、そこらも後で話そうぜ。ともかく今は遅れない様に急ごうぜ☆」

ホント、せめて更衣室が近くにあればいいんだけどなぁ。いや平均レベルの高い女生徒達の触れあいは非常に嬉しいけどサ！

地雷撤去はお手の物

「んじゃ、まあ着替えながらで悪いんだけど自己紹介。俺の名前は夏野穂次。好きなものは女の子。嫌いなやつは織斑一夏。ちなみに政府に監禁されてた経歴持ちだ！」
「え？」
「俺の名前は織斑一夏。好きなモノは特にないけど、嫌いなヤツはそこの馬鹿だ」
「ハハッ」
「ハハハ」
「お、やんのかテメェ！」
「お前なんかに負けるかよ！」
「ちょ、ちょっと待って二人ともどうしてさっきまで仲がよかったのに急に喧嘩なんて!?」
「喧嘩するほど仲がいいって言うだろ？　流石に冗談だけどな」
「え？　俺は本気だったんだけど」
「一夏、色々と悪かったな……」
「いや、そこまで萎れた反応されると困るんだけど？」

「そこまでお前をホモ扱いしている事を気にしていたなんて！」
「おう、ソレは普通に気にしてるからもうやめろ」
「スマナイ、一夏……本当にスマナイ！」
「あ、コレはもう広まってるヤツだな……ハァ」
「あはは……えっと」
おっとしまった。いつもの流れでデュノアを放置してしまっていた。俺は肩を竦めて、ＩＳスーツに袖を通していく。
「ま、テキトウに慣れてくれればいいさ。俺はともかくとして一夏はマトモなヤツだからな」
「お前、自分がマトモじゃないって知ってたのかよ」
「知ってなきゃセシリアさんとか篠ノ之さんに『おっぱい触らせてください！』とかお願いできないだろ、普通」
「普通はしないぞ」
「ん、というかデュノアの俺を見る視線が汚物を見るソレになってるんだけど」
「あ、いや、そんな事無いよ？」
「そっか？　まあいいんだけど。所でデュノア」
「な、何かな？」

「おっぱいとお尻、どっち派だ!?」
「え?」
「ちなみに俺は断じておっぱい派だ!」
「あー、穂次。普通に引かれてるから」
「ナンデスト……おぅ、スマナイ……自重します」
「う、うん……ごめんね」
「穂次だから問題ないだろ」
「ヒエッ……そうやって俺の扱いを浸透させていくのはやめてもらえないですかね……」
「嬉しいだろう?」
ちょっとだけな。
ともあれ、一夏の嬉しいだろう? という言葉で何処かの鬼を思い出してしまった。
やはり血縁という事なんだろうか……という事はコイツも人外じゃねぇか!
「というか、デュノアは着替えるの早いなぁ」
「え? そうかな?」
「俺はともかくとして、一夏を見てみろよ。まだ半裸だぜ」
「わぁっ!?」

「……顔を赤くして一夏の半裸を見てる……ハッ!?　よもや貴様もホモか……」
「おい、穂次。自重するって言ってたよな?」
「うん。ゴメン。謝るから。謝るから睨むな。鬼を思い出すだろ?」
「……鬼?」
「きっとデュノアもテレビで一度は見たことのある、有名な鬼さ。名前はチフユ。伝説のスーパー超人だ」
「まあココでの発言は聞こえてないと思うだろ?　本当に、思ってたんだけどなぁ……」
「一夏、あの時のことは忘れるんだ……いや、忘れてはいけない」
「だな。というか、お前ら着替えるの早すぎるだろ」
「一夏が遅いに一票」
「えっと、二票?」
「そりゃぁないぜ」
肩を落として、少しだけ着替えるのを早くした一夏。そんな一夏を顔を真っ赤にしながら凝視しているデュノア。コイツ、マジなヤツか……。一夏の貞操が危険で面白い。
ヘラヘラ笑ってる俺に気付いたのかデュノアは俺に振り向いて顔を青くする。大丈夫だぜ、デュノア。俺は面白い限り、お前の味方だ!
「よし、さあ行こうぜ」

「へいへい。ほら、デュノアも顔を真っ青にしてねぇで行くぞー」
「う、うん」
「というか、デュノアのヤツって着易そうだな。どこのヤツ？」
「あ、うん。デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどフルオーダー品だね」
「へー。穂次も俺と違うよな、そういえば」
「ま、俺様はァ、と、く、べ、つ、ってヤツですからぁ」
「そうだな、よかったな」
「その反応もキツイんだよなぁ……まあ、俺のは政府から支給されたやつだからな。コレでもデータ取りとか色々任されてるんだぜ」
「ふーん」
「あれ？　興味なさげ？」
「興味ないっていうか、穂次の言ってることだから嘘っぽいっていうか」
「あっるぇ？　俺ってそこまで信じられてないのか？　穂次ちゃん悲しいなぁ！　泣いちゃうぞ!?」
「へえ」
「……デュノア、慰めてくれ」

「えっと、頑張ってね？」
「……」
「え？　何か間違った？　ゴメン」
「いや、普通に優しくしてくれるヤツなんてこの学園に居なかったから……マジ泣きしそう」
「え!?」
　手の甲で目元を拭う。手が濡れた気がするがコレは涙ではない。そう汗なのだ。汗に決まってるだろ！
　慌てた様に俺と一夏を交互に見てるデュノア。まあ、心配されるのは性に合わないのでスグに立ち直る。
「つーか、デュノアって、デュノア社に関係してるの？　間違ってたら悪いけど」
「うん。父が社長をしているんだ。一応、フランスで一番大きいＩＳ関係の会社だと思うよ」
「じゃあ、デュノアって社長の息子なのか。　道理で」
「道理でって？」
「なんつうか気品っていうか……あー、穂次。いい言葉ないか？」
「王子様。もしくは貴公子。いっそ横文字でプリンス様、ってのもアリだな！」

「ソレだ！　なんかいいところの育ちって感じがするんだよな。納得した」
「いいところねぇ……。」
「ん？」
「ま、いいところかどうかは人によりけりって事だろ。そこらは軽ーく流そうぜ」
「――そうだね。それより織斑くんだってあの織斑千冬さんの弟じゃないか」
「ハッハッ、コヤツめ」
「へ？」
「有名である事がイイ事じゃないってこと。まあ特に一夏の場合は織斑先生だし、弟だし」
「というか、なんでお前だけ地雷を踏まれてないんだよ。ずるいぞ、穂次」
「ハッハッ。俺の地雷なんて全部踏み抜かれたあとだわ！」
「？」
「穂次、泣いてもいいんだぞ？　放っていくけど」
「酷スギィ！」
「フッ、ふふ。アハハ」
「お、やっと笑ったな、デュノア。爽やかな笑いよりも軽快に笑ってやろうぜ！」
「お前はちょっとぐらい真面目な顔をした方がいいぞ」

「そうだね、夏野くんはちょっとへらへらしすぎかも」
「ひぇっ……ダメだし早すぎぃ。あーそれと。名前でいいぞ」
「俺も名前を呼び捨てでいい。というか苗字だとほら、うん」
「わかったよ、一夏、穂次。僕もシャルルでいいよ」
「んじゃ、まあ、ヨロシク。シャルル」
「よろしくね！」
「というか、急がないとヤバイぞ……最悪、穂次を犠牲にするまである」
「ないよ！　そんな選択肢ねぇよ！」
「穂次は僕らを守る為に散ったんだ……！」
「散らねぇよ！　つーか、俺が散っても第二第三の俺が」
「それこそないだろ」
「ないの？　ジャパニーズキンタロキャンディみたいに出てくるとか……」
「ねぇよ！　怖いよ！　俺を切ったら俺が出てくるの!?」
　そんな軽口を言い合いながら俺たちは早足で歩く。走れば元も子もない。織斑先生はいつ何時でも俺たちを見守ってくださっているのだ……。実際怖い。

「遅い！」
「穂次が悪いです」
「コイツ、人を容易く売りやがった……」
「夏野。またお前が原因か」
「そして信じやがりましたよ、この鬼」
「あ〝ん？」
「イヤー！　スイマセン！　俺がシャルルと一夏を弄ってたら思ったよりも時間が掛かって！　いやー！　ホントすいません！　決してアナタ様の溺愛している弟様が悪い訳では」
「夏野。後で指導室に来い」
「ヒェッ……今のどこに俺の悪い要素があったんですかね……」
「むしろ悪い要素ぐらいしかない気がしたけど……？」
「おっとシャルル。ソレは言わないお約束だゾ☆」
「う、うん？」
釈然としていないシャルルと俺を生贄にしやがった一夏と一緒に列に並ぶ。
一夏を睨んで見れば少しだけ眉尻を下げて、片手だけで軽く謝ってきた。許す。

「ずいぶんとゆっくりでしたのね」
「いやぁ、セシリアさん今日もまたお美しい。そのボディのメリハリは本当に素晴らしい！」
「……」
「すっげぇ、視線がキツクなったんだけど……」
「当然だね」
「うひぃ、シャルルも厳しいよぉ……一夏ぁ」
「話しかけるな。千冬姉が凄い睨んでるぞ」
「ヒッ……」
　怯えた様に黙る俺に対してニッコリと笑った織斑先生がまるで見せしめの様にシュッセキボで俺を叩いた。解せぬ……。いや、お陰でスムーズに授業は進んでいるのだが……。誰が俺の心を癒してくれるんですかね……。
「今日は戦闘を実演してもらおう。――凰！　オルコット！」
「あら？　穂次さんじゃありませんのね」
「そりゃぁ、俺なんかよりもエリートのセシリアさんとか鈴音さんの方が選ばれるでしょ」
「その阿呆の武装は盾だけだ。そんなモノで実演など出来るか」

「らしいッス……あれ？　視界が歪んできたぞ……」
　チクショウめ。俺だって、やれば出来るんだぞ！　盾で殴ったり！　何よりこの盾の凄いところは攻撃を防御できるんだぜ……！　涙出てきた……。
　シャルルの優しい眼差しが辛い。くっ、優しさなんかには負けないんだからッ！
「ほら、穂次は二人目だから大事にされてるんだよ」
「優しさには勝てなかったよ……」
「え？」
「ナンデモナイデス」
　普通に慰められた……、いや、それはそれで辛いんだけど。というか俺って二人目な筈なんだよなぁ。扱いが酷くないですかね？　あ、普通？　ソウデスネ。
「それで、相手はドチラに？　わたくしは鈴音さんとの勝負でも構いませんが」
「ふふん、返り討ちにしてあげるわ」
「いいぞー！　やれやれー！」
「その前にアレを撃ち落としますか？」
「そうね。それには同意だわ」
「ヒェッ……目がマジですよ！　二人共！」
「馬鹿を弄るのもそこまでにしていろ。対戦相手は――」

と織斑先生が零したところで耳を貫くような高音。確か一夏が地面にぶつかった時もこんな感じの音が鳴ってたなぁ……。と空を見上げる。何かの粒が見える。ソレはかなりの速度で大きくなっている。

「あれはなんだ!?　鳥か!?　飛行機か!?」

「いや、違う！　……え？　マジでな――」

「あああああーっ！　どいてくださいー！」

俺のノリに一夏が着いてきている途中でその飛来物の叫びが聞こえた。

あ、これはヤバイヤツだ。

後ろに逸らす事も出来ない。なんせ後ろには専用機を持っていない、つまり咄嗟にＩＳを装備出来ない少女たちがいるのだ。

「村雨！」

ＩＳの名前を叫び、世界が静かに、そして澄んで見える。あれ、山田先生かよ……。代表候補生は天然ボケばかりかッ！

左腕に備え付けられた盾を掲げながら、右手で左腕を押さえる。歯を食いしばり、来るであろう衝撃に備えた。

「ッ――！」

衝撃に呼吸が止まる。

脚部のバーニアを吹かし、これ以上後ろにはいかない様にする。適度に速度さえ落ちればいい。ソレであとは山田先生に任せればいい。

弾いてはいけない。逸らしてはいけない。力を抜いてはいけない。

そうだ、夏野穂次！　刮目せよ！

今お前の目の前にはたわわに実るおっぱいがあるのだぞッ!!

「おっぱいスゲー!!」

思わず叫んでしまった言葉が悪かったのか、それとも山田先生の操作ミスなのか、アチラの出力が上がった気がした。きっと後者、いや、ＩＳがバグを起こしたんだろうな！

軌道調整が上手くいったのか、というよりは山田先生が上手く移動したのだろう。衝撃は後ろに行かず、俺は山田先生に潰された。

「穂次！　大丈夫!?」

「穂次さん！」

鈴音さんとセシリアさんの心配そうな声が聞こえる。何も問題はない。むしろ俺はハッピーなのだ。今の俺に触れるな。

俺はしっかりと山田先生のクッションとなって地面に横たわっている。いいや、山田先生のクッションが俺の顔に当たっているんだから！　コレを最高といわずになんと

言う！　うはぁ！　体勢的に仕方なく抑えられている腕が動いたなら俺は迷わずこのおっぱいを触ったね！　間違いない！
「んはぁ！　おっぱいだ！　おっぱいぃ！」
「……」
　ガチャリと重厚な音がした。ハイパーセンサーで捉えたセシリア様からスターライトｍｋⅢをお持ちである。とても綺麗な笑顔で、コチラに銃口を向けていらっしゃる。
あ、コレは死んだな……。
「あ、あの、オルコットさん？　私、状況がわからないんですが……」
「退いて下さいませ、山田先生。そこのクズを掃除します」
「ひえ、待った。待って下さい山田先生！　俺はただ山田先生のおっぱいを堪能していただけなんです！　俺は悪くないんです！」
「チョット待って下さいね。私も一撃いれておきますから」
「ゼロ距離でアサルトライフルはどうかと思アガガガガガガ」

「ふう、すいませんでした。　夏野君、ありがとうございます」

「1マガジンしっかり撃ち終わった後にソレを言うのってどうなんスかね……まあ、俺も楽しんだのでいいッスよ！　ナイスおっぱい！」
「それじゃあオルコットさん。コレをあげます」
「ええ。どうも」
「ヒッ……織斑先生！　授業が滞ってますよ！」
「お前の所為だろう、阿呆」
「被害者なんだよなぁ……」
「何か言ったか？　阿呆。お前の実力不足だ。精進しろ」
「ういッス……夏野穂次、ガンバリマス！」
「さて、この気持ち悪い物体は放置して。山田先生はコレでも元代表候補生だった人だ」
「へー……」
「あんな操縦見せられて信用できないと思うけど、皆、その時の代表を思い出すんだ！　そこにいる鬼だぞ！」
「夏野」
「アッハイ、正座してます」
「うむ。まあ信用ならない様なら実力で、だ。そこの小娘二人程度なら同時に相手しても問題ないだろう」

「なっ……!?」
「いや、さすがにソレは……」
「山田先生。コレが今のアナタの評価だ」
「ふぇ……私って皆さんに弱いって思われてたんですね……」
「そんな!? 俺は山田先生の事はずっとおっぱいが強い人だって思ってましたよ!」
「夏野君？　終わったら職員室に来ましょうね？」
「はい……あれ？　なんでだろ、着々と説教の予定が立てられてるぞ……」
「穂次、君は実に馬鹿だなぁ……」
「知ってるゾ☆」
一夏の言葉に即座に返答する。返答した後に自分で言ってて悲しくなった。でも涙は流さない。だって男の子ダモンツ！
はてさて、冷たい視線を受けて現実逃避を続行する。クラスメイト達の視線が冷たすぎる。しかも現実逃避してもハイパーセンサーが情報を拾ってくるから知ってしまう。
ＩＳが優秀すぎるのも考え物だなぁ……モウムリ、現実逃避シヨ。

夏野攻めは、ありまぁす！

　さて、戦闘実習ともあり、専用機持ちである俺や一夏、シャルルにセシリアさんと鈴音さん。そしてボーデヴィッヒさんが各班に分かれてチームリーダーとして補助をする形になる。
「えー、夏野君かぁ」
「ま、夏野くんでも男だし」
「夏野君は織斑君とセットで輝くっていうか……」
「でも、ほら、新しくデュノア君も来たじゃない？」
「夏野君が攻めになる可能性も……」
　しっかりと出席簿の順で分けられたクラスメイト達は俺を見ながらしっかりとそんな事を言うのだ。俺でも流石に頭を抱える事はある。
「あのさ。美少女達。いくら相手が俺だからって、そういう話を本人の目の前で、しかも聞こえる様に言うのはどうかと思うゾ☆」
「あはは～、でもなつのんだしねぇ～」
「つーか、俺が攻めって……よく考えてくれよ。我ながら結構劣等生なんだから、貴公子

シャルル・デュノアに攻められるってのもまた乙なんじゃね？」
「ハッ……貴様が天才か……！」
「残念、凡人デス☆」
「なつのんって馬鹿だもんねぇ～」
「布仏さんも容赦ないッスね……ま、いいけど。ほら、ささっと実習を始めようか。俺だって好きで織斑先生を怒らせてないんだから」
「え？　そうなの？」
「てっきりそういう趣味なんだと……」
「あのさぁ。あれだけの美人さんに責められたり、罵られたり、挙句の果てに踏まれたりしても感謝しかわかねぇけど、説教はまた別だから」
「ねぇねぇ、なつのんなつのん」
「どうしたのかな、布仏さん。あ、もしかして俺が格好良すぎてホレちゃいましたか？」
「織斑先生が凄い睨んでますよー？」
「……サッ、スグに始めようか！　放課後に職員室に呼ばれてるのは俺だけでいいんだゼ☆」
　冷や汗をダラダラと流しながらカラカラ笑う。俺だって好きで説教を受けたい訳でもない。時間は短いに限る……でも短くなった時間はオシゴトに費やされるんだよな。

俺に人権はあるのだろうか？　あ、なかったね。

　専用機持ちだからってチームリーダーに任されるのはいい。可愛い女の子たちが俺の事を虐めるのも構わない。なんせ、可愛いし、露出高いし、おっぱいもそれなりにあるんだ。何も文句なんてないな！　あれ？　なんでだろ、涙が出てきそう。

　遠くを見て涙を抑えていると、別の方向から歓声が聞こえた。ソチラを見れば織斑一夏が女生徒、相坂さんをお姫様抱っこしてる。どういう経緯かわからないけれど、ただただ死ね、という感情が溢れてきた俺は悪くないと思う。

「ココは俺もお姫様抱っことかしとくべきなのか？」

「いやぁ、夏野君じゃダメかなー、って」

「夏野君だしねー……」

「おっと、そこまでだ。それ以上は俺の心が崩壊してしまう」

「なつのんはずっとヘラヘラ笑ってるからねぇ～。真面目な顔してればそれなりにカッコいいのに」

「ムリムリ。俺が真面目な顔したって、俺に得がねぇもの」

「女の子にモテるよぉ？」

「……いやいや、そんな事で俺が乗せれるなんて思ってるのか？　ヤダナァ、この俺がそんな冗談で本気にする訳ないじゃないかー」

「そうなのぉ？」
「……さ、お嬢様方。俺がエスコートしてあげよう。何、全てを俺に任せてくれ。君たちの安全は俺が盾に誓って守ろう」
「……」
「ほら、布仏さん。みんな固まってるじゃん……俺泣いちゃうぞ」
「キザっぽい事言ってるのに変に様になってたからじゃないかなぁ」
「いや、ともかく、ほら、ちょっとは反応してくれよ。無反応が一番辛いんだぞー」
「夏野君。もうずっと真面目でいいんじゃない？」
「夏野君攻め。あります！」
「ありね！」
「また世界を広げてしまったか……」
「いけない世界だねぇ～」
「お、そうだな……さって、美少女達。俺を真面目にしたけりゃ、実習を消化していこうぜ」
「えー、煽てればチャンスが……」
「夏野君はチョロイ。薄い本にも書いてる」
「織斑先生が睨んでるからサクッと終わらせようぜー」

「そうね!」
「急がなきゃ!」
「夏野君が準備遅いのが悪いんですよー!」
「なつのんが原因ですよぉ～」
「……ん？　いや、まあ色々言いたい事があるけどいいや」
果たして織斑先生の実力、というか恐怖教育が凄いのか。それとも俺の扱いがただ単に酷いだけなのか……両方だな!
ともあれ、お姫様抱っこなんてするタイミングもなく、淡々と授業は終わっていく。当然、俺がおっぱいを触るタイミングなんてない。つーか、そもそもおっぱいに価値なんてない。あんなモノ、単なる脂肪の塊に過ぎない。
数分前に至宝のおっぱいに包まれてやけに思考がクリアになった俺が言うんだ。間違いなんてある訳がない。
それにしても、眼鏡を直している時にスゲー揺れる山田先生のアレは何なのだろうか……実に、素晴らしい。ＩＳスーツという事もあって、実に揺れているのが良く分かる。なるほど、やっぱりおっぱいが一番なんだなって。

◆◆

実習も終わり。訓練機をＩＳ専用のカートで四台ほど運んだ。一台は当然、俺のチームのモノだ。ある種の賢者モードに入っていた真面目を装っていた俺は煽てに煽てられて調子に乗って、いつの間にかチーム全員で仲良く運ぶ筈だったカートを一人で運んでいたのだ。いったいどういう事か俺にも分からない。空間回帰とか時間停止の方がまだ分かると思う。いや、どっちもわかんねーけど。

さて、残りの三台。コレは「デュノア君にそんな事させられない！」と言って体育会系の方々が運ぼうとしている所をヘラヘラ笑いながら譲ってもらったのだ。もし殴れるのならあの調子に乗っていた俺をぶん殴りたい。

ソレを見た鬼が何を思ったのか。「丁度いい。では、片付けはそこの阿呆に全て任せておけ」という一言を放ったのだ。そこで俺はようやく覚醒した。いや、ある種の覚醒から解けたのだけれど。

セシリアさんはいい。当然だ。美人系の美少女で可愛いし、何の問題もない。

鈴音さんもいい。可愛いし何かと言って優しいし、何よりも可愛い。何の問題もない。

ボーデヴィッヒさんもいい。そもそも喋った事はないけれど、可愛いをそのまま詰め

込んだ容姿にキツイ眼光。是非とも可愛い服とかを着させて顔を真っ赤にさせてやりたい。
「だが、一夏。テメェはダメだ！　自分で運べ！　つーか、一つ手伝って下さい！」
「貸し一(イチ)な」
「ヒッ……カラダで払います……」
「貸しが二つに増えたな。コノヤロウ」
「ハッハッ。ツケといてくれ、大将」
「払う気ないな、コイツ……」
「つーか、色々考えるとトントンだと思うんだけど？」
「どこがだよ」
「鈴音さんの関係改善」
「ぐっ……」
「フッフッフッ！　これぁ、耳揃えて返してもらわなあきませんなぁ、織斑ハン！」
「ま、待て、待ってくれ。明日、明日までには必ず返済する！　だから」
「あきまへんなぁ。その言葉、昨日も聞いたデンガナ……まあコレ一つでチャラにしたらん事もヤイヤデ？」
「ッ！　ありがとうございます！」

「つーか、こんな小芝居挟んでる間にお互い二つ目運んでるんだけどなー」
「まあ、何かと穂次には迷惑掛けてるからな……。友達だから、手伝うのも当然だろ！」
「一夏……！」
「あ、そういえば今月の友達料金の徴収なんだが」
「ヒエッ……俺よりもキツい冗談はやめてもらえますかね」
そんなやり取りを笑いながら続け、三つ目に手を掛けた一夏をやんわりと断って、残りの二つを運び終わった。
「大丈夫か？　手伝うぞ？」
と不思議そうな顔をしていた一夏だったけれど、何も問題がない事と、織斑先生の説教までの時間稼ぎをさせてほしいと言えば何とも言えない顔で「頑張れ」と言われた。その頑張れはカート運びの事を言っているのか、折檻の事を言っているのか、俺にはさっぱりわからなかった。きっと前者だろう。そうに決まってる。
カート運びの終わった俺は疲れた身体に鞭を打ち、俺は教鞭を振るわれに行くのだ……コレは比喩表現ではない。
いっそ教鞭がバラ鞭だったらよかったと、きっとこの時以上に思った事はこれから先もない事だろう……というか、その状況が特殊すぎるんだよなぁ……。

俺が折檻されようが、のんびりと過ごそうが時間は進むもので、時は昼休みに変わる。
呼び出しを喰らっていた俺は肩を落としながら指導室へと向かう。授業中に山田先生のおっぱいを凝視して何が悪いのか。そもそもあのおっぱいがあるのがいけないのだ。しかも凝視してると両手で隠すのだ。むぎゅう、である。むぎゅう。
開いた扉の先は小さな個室で、織斑先生が腕を組みながら机に凭れていた。
閉じられた瞼が緩やかに開き、鋭い瞳が俺を貫く。
「夏野、来たな」
「そりゃぁ、呼び出されたら来るでしょ。無視したらあの世に呼び出されそうですし」
「よくわかってるじゃないか」
「……今、ここに居てスゲーよかったって心の底から思ったツスよ」
「よかったな」
「織斑先生が大凡の原因だと思うんですが、ソレハ……」
「生の感動を私で得るとは。お前、実は私の事を神様か何かだと思ってたのか?」
「修羅って神様でしたよね? なら間ちがガガガガガガガガ! 頭壊れる!」

「阿修羅の一撃で死ねるんだ。本望だろう」
「マジで壊れますから！　それほど重要でもない俺の頭壊れちゃいます！」
「換えの頭なら今度用意してやろう」
「俺は愛も勇気も友達じゃないッスよ!!」
「む、そうか。愛も勇気もお前を友達だとは思ってないからな」
「ひっ……順番逆にするだけでスゲー悲惨なんですけど」
俺の頭から手を離した織斑先生は肩を落としている俺を見て少しだけ目を細めた。
「さて、呼び出した本題を言うぞ」
「あ、今日は手伝いはいいんスね」
「放課後に回している」
「ないって事はないんですね……」
「デュノアはお前と同じ部屋になる」
「は？　いやいや、どういう事ッスか」
「そういう事だ。察しろ」
「あー……政府ッスか？　それとも学園？」
「……ドチラもだ。尤も、政府が言ったから、という理由立ては出来るがな」
「そうッスねぇ……。ま、得体の知れない奴をファーストと一緒にするのはリスク高い

ですからねぇ……。その為のセカンドって事ですか」
「……不満か?」
「まさか。これでも結構ムリ聞いてもらってるんで。つーか、俺の部屋ってベッドが一つしかねェんですけど?」
「お前が廊下で寝れば問題なかろう」
「打開案が酷くないッスかね……ま、了解です。探りを入れれる程器用じゃないッスけど、そこそこには頑張ってみます」
　変わらずにヘラリと笑って見せれば織斑先生もニヒルに笑い返す。スグにそれは真剣な顔付きへと変わる。
「……夏野」
「なんスか、織斑先生」
「お前は少し後、恐らく数日後に私に感謝することだろう。だが、ソレを私に伝えるなよ?」
「?　感謝なら毎日してますよ」
「……そうか。分からなければいい。が、その調子で私に常に感謝していろ」
「へいへい。了解しましたよー」
「では戻ってよし」

「ういーっす」

随分と意味深なことを言っていた織斑先生だったけれど、一体なんだと言うのだろうか。

何か面白い事を黙っている様な顔をしていたけれど、まあ彼女にとって面白い事の一部に俺の不幸というのがあるから俺にとってイイ事だとは思わない方がいいだろう。

さて、織斑先生のお話も終わった。確か一夏達は屋上で飯を食ってるんだけっか。

「お、いるじゃーん」

「穂次。早かったな」

「アンタ、また何かしたの？」

「いやぁ、山田先生のおっぱい見てたら呼び出しくらってさー」

「あ、私の視界に入らないでもらえる？」

「無茶な事を言う……」

そんなチッパイでも需要はあるんだぜ……鈴音さん！　あ、スゲー睨まれた。コレダメな思考だ。ともあれ、昼食時という事もあってコチラを殴ろうとしない辺りは流石鈴音さんだろう。その慎ましやかな性格がおっぱいに表れている。

「んで、なんで一夏は酢豚を……あぁ、なるほど」

「な、なによ……!」
「べっつにぃー。美味しそうな酢豚ですなぁ、一夏くん?」
「美味いぞ?　お前も食べるか?」
「……いや、実は酢豚アレルギーなんだ。食べると発狂しておっぱいを揉まないと戻らなくなる」
「それはアレルギーじゃないだろ。アレルギーに託けたお前の趣味だろ」
「カッコつけた趣味だからな!」
「アッハッハッ!　やるな、穂次!」
「ハッハッハッ!　だろう?」
「アンタら、食事時ぐらい黙れないの?」
　そもそも一夏が俺に酢豚を渡そうとした時に睨んできた鈴音さんが悪いと思うんだ。いや、原因で言えば一夏が圧倒的に悪いんだけど。
　シャルルの隣に座った俺はシャルルの方をチラリと向く。しかし、得体の知れないとは言ったけれど、何か危害を加える様には見えない。俺の人物鑑定眼なんて物はないに等しいけど。それこそ、実はシャルルがシリアルキラーなんて事があったら怖いが……ないだろう。たぶん。映画じゃねぇんだし。
　織斑先生も一夏からコイツを離したかった、ってのを考えるとやっぱそれなりに警戒

とかしとくべきなのだろうか？

「どうかした？　僕の顔に何か付いてる？」

「目と鼻と口。よく整っているのが実にいいと思う。美形だな！」

「そ、そうかな？」

「照れた顔もいいッスね！」

コイツが何か危害を加えるとは思えない。つーか、ムリだろ。良心がイケメンの皮を被って歩いているようなモンだぞ……。ないない。

へらへら笑っている俺と照れるシャルル。そんな俺たちを睨むセシリアさん。

「む、セシリアさん。俺がシャルルに取られて嫉妬かな？」

「なっ!?　だ、誰が――」

「まあ、美人で何でも出来るセシリアさんも俺の魅力でイ、チ、コ、ロ、だったからな！」

「穂次、凄いオルコットさんが睨んでるよ？」

「恥ずかしがってるんだよ。アッハッハッ……ゴメンナサイ。スイマセンでした。調子乗りました」

「わかれば、いいですわ」

「なるほど、コレがジャパニーズドゲザって奴なんだ」

「あら、デュノアさん。今ならハラキリも見れるかもしれませんわよ？」

「いや、セシリアさん？　それって俺死ぬよね？　死んじゃうよね？」
「そうですわね」
「ほら、カッコいい俺が死んじゃうんですよ……？　こう、もっと、あるでしょう？」
「ああ。汚れるといけませんので、ブルーシートの上でお願い致しますわ」
「そこじゃないんだよなぁ……」
「えっと、ブルーシートは用務室で貰って来ればいいのかな？」
「シャルルは天然。ハッキリわかんだね」
　かなり真面目な顔で立ち上がってブルーシートを貰いに行こうとしていたシャルルを止める。ハラキリがそれほど見たかったのだろうか……。シリアルキラーの比率が高くなってくるんだからやめて下さい！　シャルルくん！
　さて、一夏とイチャイチャしている篠ノ之さんと鈴音さんはいいとしよう。アレに口を出して怪我をするのは勘弁願いたい。そして俺に助けを求めるような視線を送るな、一夏。俺はお前を助けられん。
　そんな一夏から視線を逸らしていれば自然と対面に座っていたセシリアさんの胸に視線が集中する。相変わらずいいおっぱいだぁ……。さりとて見つめすぎるとスターライトｍｋⅢをドコかにぶち込まれるかも知れないので更に視線を下げる。肉付きのいい太股が……、見えない。スカートに邪魔されて、という訳じゃない。その上に乗っ

ているサンドイッチが悪いのだ。しかもそれほど減っていない。
「ん？　セシリアさんって体調悪いとか？」
「？　どうしましたの？」
「いや、サンドイッチが全然減ってないし」
「あ、」
鈴音さんの声が聞こえた。チラリと視線を向ければ一夏も何か残念そうな顔をしている。いったいなんだと言うんだ。
疑問を感じながらセシリアさんに視線を戻せば、なんとも言えないキラキラした顔をしていた。
「そ、そうなのです。今朝から少し体調が悪くて」
「へ、へぇ」
「それで今朝たまたま偶然何の因果か目が覚めてしまって、つい作ってしまったのです」
「お、おう……」
キラキラしているのに体調が悪くて、そして今朝起きてしまったのにサンドイッチを作った、と。体調が悪かったのに。
ココは寝ろよ、とツッコミを入れるべきなのだろうか。鈴音さんを見れば首を横に振っている。つまりツッコムべきではないのだろう。流石、鈴音さんだ、ナイスサポー

ト。

「よ、よろしければ、お一つどうぞ」

「こりゃどうも。じゃあ頂くよ。いやー美少女の料理ってだけで素晴らしいのに、才女であるセシリアさんの料理かー」

きっと素晴らしい出来なのだろう。なんせセシリアさんだ。俺は口を開き、サンドイッチを噛んだ。

「おい、穂次が停止したぞ……」

「流石にムリだったのかしら?」

「アレは……流石の夏野も反応出来まい」

――――っ。

「なあ、セシリアさん。是非とも俺に料理を教えてくれないか?」

「へ?」

「こんな美味しい料理を作れるセシリアさんに是非とも教えてほしい」

「そ、そうですか。ま、まあ時間が空けば考えてあげなくもないですわ」

「おい、穂次が可笑しくなったぞ……」

「よもやセシリアの料理にそんな効果があるなんて」

「待った。コレは、違うわ。あたしにはよく分かる」

「是非頼むよ。出来るなら次回セシリアさんが作る時にでも片手間で教えてもらえたら嬉しい」
「あ、これは修正する気だな……」
「出来るのか？　夏野に……」
そこの外野三人、聞こえてるぞ。俺だって料理は出来ない。でも言える。コレよりも美味しい料理は作ることが出来る。意識が飛ぶ料理ってなんだよ……サンドイッチだな！
サンドイッチはちょっとしたオクスリなのかも知れない。いっそ隠語か何かかも知れない。つーか、何これスゲー。もう言葉がマズイ以外の言葉が出てこない。
「そ、そこまで言うのでしたら、このサンドイッチを全部食べてもよろしくてよ？」
「マジでか!?　イヤーウレシイーナー！　涙が出てくるほどウレシイーナー！」
「そうですかそうですか。ふふふ」
なるべく美味しそうに食べよう。うん。何かといってセシリアさんの笑顔が可愛いんだから。しょうがない。
でも出来る事ならば、この料理が美味しければもっとよかった。せめて普通に食べれる程度なら誇張表現も出来た。ヘラヘラ笑いながら、冗談を混ぜて褒めることが出来ただろう。

コレは、無理。一瞬、罰ゲームか何かだと思った。
セシリアさんの舌がオカシイ、という事はないだろうから、きっと味見をしていない。
そしてサンドイッチの減り具合、つーか俺が食べるまで減ってなかったサンドイッチを見ると食べてない事は分かる。この時点での俺の仕事はセシリアさんに次の料理を作らせない事、そして俺がコレを処理しなくてはいけない事だろう。
購買部って胃薬売ってたっけなぁ……。

機密文書

シャルル・デュノアはゴクリと喉を動かした。
手に持った文書を穴でも開けんばかりに凝視して、その文面、そして図に意識を集中させていた。

数分前。
セカンド、夏野穂次に部屋に案内されたシャルル。どうやら穂次はこの後に織斑千冬に呼び出しを頂いたらしく出頭しなくてはいけないらしい。
一日も経過していない筈なのに、穂次という人物だから仕方ない。と容易く思考してしまう程度には穂次はわかりやすい人物だった。
ともあれ、シャルルにとってはルームメイトにあたり、そして思惑の標的の一人にあたる。本国からすればファーストである織斑一夏と同室である事が好ましかっただろう。
けれど、セカンドであっても、この世界に二人しか居ない男性ＩＳ操縦者だ。親交を

深め、その情報を得る。更に言えばお調子者である穂次の事を考えれば織斑一夏への接近も容易に済むかもしれない。

　そんな事本国からのお達しを受けたシャルルからすれば、正直どっちでも構わなかった。お調子者とは言えど、恐らくこれから仲良くなる人物を裏切ると考えれば気は重かった。ソレは笑顔で隠したけれど。

「んじゃ、ここが部屋な。んで、コレが鍵。もしドコか行くんだったら寮母さんのいる受付に渡しといてくれ」

「うん、わかったよ」

「部屋にあるものは勝手に弄っても構わない……っても俺の所有物なんて結構少ないんだけど」

「そうなの？」

「そうなんですヨ。ま、詳しい説明とかは戻ってからするわ。急がないと織斑先生に殺されるかも知れん……」

「じゃあ僕の一人部屋になるんだね！」

「ヒッ……俺は帰ってきますよ、シャルルくん」

「アハハ、頑張ってね」

「優しさが心に染みるなぁ……」

そんな会話が終わったのが数分前。

出て行った穂次を見送り、ようやく部屋に一人になり、鍵を後ろ手で閉めたシャルル……いいや、シャルロット・デュノアは息を吐き出して、髪と胸部のコルセットを外した。解放感を味わうように深呼吸をして、ふぅ……と息を吐き出した。

「とりあえず、第一ステップは問題なし……かな？」

親交を深める、という点においては優秀とも言える一日だった。そうシャルロットは自身を評価した。尤もその評価をした所で自分に嫌悪感が沸いて、ソレを溜め息で誤魔化した。

三人目の男性ＩＳ操縦者。ソレは虚偽である。そもそもＩＳが男性に操縦できる訳がない。いや、その前提を覆してしまった存在が二人ほど存在しているが……。

シャルル・デュノア……いいや、シャルロット・デュノアは女性である。自己紹介の時に穂次が「男な訳がない」と言った時は肝を冷やしたけれど、それでもその穂次自身がさっぱり怪しむ事もせずにシャルロットをシャルルとして受け入れているあたり、親交を深めるという点では優秀だっただろう。

さて、と思考を改めたシャルロットは当然の様に家捜しを開始する。穂次自身は自身の所有物が少ないとは言っていたが、もしかしたら穂次の所属する組織、つまる所の日本政府の情報が何かしら出てくるかもしれない。

もし出てこなくても何も問題はない。そもそも出てくるとは思っていない。出てくれば奇跡とも言える程度の期待だ。

風呂場、トイレ、キッチン、引き出し。様々なところを探したシャルロットがタンスを開けて、その手を停止させた。

男性用の下着が並んでいる。当然である。夏野穂次は男性なのだから。

そんな当たり前の事でシャルロットの意識が僅かに切り替わる。

男の子の部屋に入るなんて初めてだなぁ。

そう考え始めればかなり恥ずかしい事をしている。いいや、コレは任務なのだ。仕方ない。うん、そうに決まってる。

少しばかり顔を赤くさせたシャルロットは男性用下着に触れて更に顔を赤くさせた。

「コレは布。そう布の塊なんだ、シャルロット・デュノア……頑張れ！」

自分自身を鼓舞し、パンツの海へと手を突っ込む。当然肌には布の擦れる感覚が広がり、シャルロットの頭はパンクしそうなほど膨らんでいる羞恥心で満たされた。

数分もしない内にパンツの捜索は終了した。いや、シャルロットの心の都合上で何も無しと判断されてものの数十秒で完了した。果たしてソレを完了と呼ぶかは別としてシャルロットの中では完璧に、完全に、完了したのである。

果たして家具の少ない部屋での捜索はアッサリと終了した。結果的に言えばやはり

何も無かった。

シャルロットからしてみれば「そりゃそうだ」という感想も沸いている。穂次という人物を考えてみれば、それこそ機密文書など持っている訳が無い。むしろこの家捜しで盗聴などの監視が無かった事を確認した、と思った方が幾分も価値があった。

ふぅ、と息を吐き出してベッドの上に座る。ギシリとスプリングが響いて、そのままベッドに横たわる。寝ることは無いけれど、変に気負ってしまったシャルロットの暫しの休息は必要だ。

ハチミツの様に深い金色の髪が布団に広がり、シャルロットはゆっくりと呼吸をした。

「――っ！」

何かを思い出した様にシャルロットは半身を上げて両膝に手を乗せて背筋を伸ばしてしまった。その顔は真っ赤である。正しく、その匂いは穂次の匂いであると脳は判断した。それもその筈。普段そのベッドで眠っているのは穂次である。

今日何度か鼻にした匂いよりも濃い穂次の匂い。いい匂い、という訳でもないが不快になる様な匂いではない。

異性、という事もあり、イケナイ気持ちがフツフツと沸いてきたシャルロットは自分の中の妄想を振り払う。それこそ、あの夏野穂次に女だとバレてしまった自分を想像し

てしまった。あれよあれよと衣服を脱がされてしまい。
「わ、わぁあああ！　やめ！」
パタパタと自分の脳にストップを掛ける。妄想の雲を霧散させて、殆んど空っぽな冷蔵庫からミネラルウォータを取り出してグラスに注いで勢いよく飲み干す。
タンッと音を鳴らしてシンクに置かれたグラスと冷たい水を飲んで幾分か顔の冷めたシャルロット。少し荒くなった息も深呼吸をすれば落ち着く。
「ふぅ……ん？」
シャルロットの視線がソコに集中した。確かにソコは探していなかった。
別に期待もしていなかったけれど、あそこまで探したのだから、ソコを見ないという選択肢はあってないようなモノだ。
シャルロットの足はゆっくりとソコに近付く。
膝を曲げて、顔が床に触れそうになる程下げて片目だけでソコを覗いた。
何かがある。箱に入れられた何かだ。
思考を少し巡らせたシャルロットは、ベッドの下へと手を滑り込ませた。
そうソコは男の秘境。全ての男性諸君が一度は使用したであろう女性禁制の秘密の隠し場所。女性諸君はソコを探したこともあるだろうが、そこは何もなかったと、そう言ってほしい。決してその”何か”を見つけてもベッドの上に置いとくとか、机に置い

て、挙句の果てには「もっと上手く隠してねッ」なんて書置きを残してはいけない。

指に箱が引っ掛かり、自分の方へと寄せたシャルロット。

「……見つけた」

いいや、「見つけちゃった」というべきだったのだろう。

ようやくベッドの下から拾ったソレは黒い箱だった。更にソコには『機密』と書かれた紙が張られている。機密も何もない、とは言ってはいけない。

シャルロットは喉を鳴らして、緊張しながら蓋を開く。当然、何かの引っ掛かりを感じれば即座にこの行動をやめるつもりで、作業には細心の注意が払われた。

そんなシャルロットを嘲笑う様に、箱はアッサリと開いてしまった。警報も何も鳴らない。「そりゃ、映画じゃないんだし……そうだよね」と呟きながら、シャルロットは安堵の息を吐き出して蓋を自身の近くへと置いた。

さて、中身を確認しなくてはいけない。とシャルロットは視線を戻した。戻してしまった。

「何……コレ……」

シャルロットが声を震わしてそういうのも可笑しくはなかった。シャルロットは震える手でその文書を一冊持ち上げる。

「穂次と……一夏？」

そうソコに描かれていたのは夏野穂次と織斑一夏に相違ない。いいや、絵になっている事で幾分か美化されているが、確かに特徴は捉えられている。

問題はその二人が上半身裸で表紙に描かれている事だ。そう、まだ表紙である。

震える手で一ページ目を開く。

「っ?!　!?!?!」

何も声!!は出なかった。シャルロットとてマンガを読んだ事が無い訳ではない。コマ割を考えて話の流れを掴む事も出来る。いや、ソコは何も問題ではない。

どうして穂次と一夏がまるで恋人の様に絡んでいるのか。ソレがシャルロットにはさっぱり分からなかった。ただ顔が熱くなるのは分かる。

『夏野。いい加減俺の方を向いてくれよ!』

『いいや、俺は女が好きなんだ……!　お前の事なんか、別に……』

『俺の気持ちに気付いているんだろ!?』

『お前には、篠ノ之さんが……』

『そんなの関係ない!　好きだ!　穂次!』

『……一夏』

幾分か前に描かれたモノなのか、本の中での一夏と穂次は冒頭では苗字で呼び合っていた。そこから一夏が告白し、二人は名前を呼び合い、互いの愛を確認し合っている。

一応、言っておくが、当然の様に表紙には『この物語はフィクションです。実在の団体、人物、地名とは一切関係ありません』と小さく注意書きもされている。尤もそんなモノを確認できる程シャルロットは冷静でなかったが。

さて、ようやく冒頭に戻り、シャルロットは手に持った文書（ＢＬ同人誌）を穴が開かんばかりに凝視している。

幾らか読みにくいコマ割りであったからか、それとも別の理由があったからか、少しだけ時間を掛けて一冊目を読み終わったシャルロット。箱にはまだ本というには薄い、けれども濃い本があった。

「ほ、ほら。機密文書があるかも知れないし、確認だから、確認……」

一体誰に言い訳をしているのだろうか、この娘は……。さて、機密文書（ＢＬ同人誌）も二冊目に入り、お互い名前で呼び合う程度に仲良くなった一夏と穂次。さりとてその仲は許されるモノでもない。同性愛の壁は多いのだ。

『箒、やめろ。穂次を虐めるな』

『なぜだ一夏！　こんな軟弱者……！』

「ただいまー……」

『一夏、俺はいいから……』

『いや、穂次。俺は恋人が虐められて何も言えない彼氏にはなりたくない！』
『一夏……』
「無視はキツイなぁ……あっ」
『一夏！　何を言っている！』
『もう一度言うぞ箒……！　俺は穂次が好きなんだ、愛し合ってるんだ！』
　一夏と穂次にとって最初の壁である篠ノ之箒。コチラも非常に特徴を捉えられている。妙に爆乳化されているのは何か作者の恨みでも込められているのだろうか……。ともかくとして、二冊目ともなればコマ割りは随分とよくなっていて非常に読みやすかった。けれどもシャルロットはしっかりと時間を掛けて読みきった。機密文書があるかも知れないから仕方ない。
　さて、ナンバリングされているモノを取り出せば箱には別の作品が見えてしまった。三巻しかない。いいや、三巻も描けている方が異常なのだが、読者シャルロットからすれば物足りなさを感じる。
　いいや、けれど、私は読むね。と言わんばかりにシャルロットは表紙を開いた。当て馬、というには悪いがそこにはセシリア・オルコットが描かれている。コチラも随分と特徴が捉えられているが、実際よりも幾分も鼻に付く喋り方なのは作者の嫉みでもあるのだろうか……。ともかくとして、三巻目ともなれば目も慣れていく。

『オーッホッホッホ！　穂次さんはわたくしがいただきましたわ！』
「あー……うん、風呂入ってっから」
『一夏……悪い……お前とはもう』
『穂次！　そんな事を言うな！　俺とも愛は嘘だったのかよ！』
『一夏……ッ』
「普通だと思ったら腐男子か……イケメン腐男子って……はぁ」
『穂次さん？　わかっていますわね？』
『ああ……ッ！　俺の事はいい、でも一夏だけは!!』
『オーッホッホッホ!!』
果たして穂次はセシリアに何を掴まれてしまったのか、セシリアに性的に責められ続けていた穂次。そして一夏は自分の何も出来ない事に苦悩し、そこに誰とも分からない影が出て三巻が終わった。果たしてあのツインテールの小さな影は誰だったのだろうか。コレは四巻目が楽しみである。
満足気に、けれども続きの巻がない事の物足りなさを感じながらシャルロットは本を閉じた。
時計を見ればかなり時間が経過してしまっている。おっと、危ない。これ以上何かをしていれば穂次が戻ってくるかも知れない。シャルロットは少し凝り固まった背筋を

伸ばし、別の本はまた今度にでも。と静かに箱をベッドの下に戻した。
穂次が戻ってくる前にシャワーを浴びて、またコルセットをして……とシャルロットは脱衣所へと向かった。
しかし、世界は広い。まさか穂次と一夏があんな関係だったなんて……。
悶々と妄想が広がり、裸の一夏と穂次が絡み合う。当然そこに愛はある。非生産的極まりないが。
そんな妄想に取り付かれつつも服を脱ぎ、浴室の扉を開いた。
「ん？」
「え？」
二人は目をしっかりと合わして固まった。
なんで、どうして穂次がここに居るの？　え？　どういう事？
そんな思考がシャルロットを巡っている中、穂次はシャルルの顔を見て、視線を少し下げた。隆起している胸部から細く綺麗に絞られた腹部。小さな臍とどうしてか湯気で見えにくい腰。
「――え？」
落ち着け、落ち着くんだ夏野穂次。もう一度、よく確認するんだ。
次はしっかりと、シャルルの顔を見て、そのまま視線をゆっくりと、舐める様に下げ

る。

うん、おっぱいがある。おっぱいである。おっぱい。え？　おっぱいってなんだっけ？

互いに混乱に支配されている中――尤も穂次はそれでもおっぱいを凝視していたが――シャルロットは先に覚醒した。

「なんでいるのッ!?」

「いや、普通に戻ってきてただろ……！　つーか、え？　こっちがどういう事が知りたいんだけど？」

「え？　きゃあああああああああああ!!」

シャルロットは自分の状態を改めて確認して、自分の一部分を見てそう言っている穂次に向かって悲鳴を上げながら、手近にあった風呂桶を投げる。石鹸も投げた。

風呂桶は額に、石鹸をアゴに喰らった穂次はシャルルを制止する。

「待て待て！　椅子は冗談になんねーよ！　死んじゃう！　死んじゃうから！」

「死ね！　死んじゃえ！　変態っ！」

「えぇ……自分で入ってきてソレってどうなんスか……」

「う、あああああ！」

「まあ、落ち着け、シャルル。ただコレだけは言わしてもらうぞ

ナイスおっぱい！」
シャルロットの投げた椅子は綺麗に回転して、穂次の頭を蹴り飛ばした。
撃沈してしまった穂次に気付いて慌ててしまうのは数秒後の話である。

地雷原タップダンス

「いやぁ、煩くしてスマンスマン」
「いいよ！　上半身裸の夏野君が見れたからいいんだよ！」
「あっはっはっ。水は滴ってもいい男じゃないのは理解してるんだゼ☆」
　タオルを首から掛けて自室の前で女生徒と会話をする。
　叫んだシャルル、いや、デュノアさんと呼ぶべきなのだろうか。ともあれ、叫んだデュノアさんのフォローとして俺が扉に立っている訳である。
「それにしても夏野くんからしたら災難だったんじゃない？」
「気付かなかった俺も悪かったって言うか」
「シャワー浴びてたデュノア君に気付かなくて入ったら叫ばれた挙句にシャワー掛けられたんでしょ？」
「ホント、甲高い声で叫ばれてビックリしたわ……あれで女の子だったらラッキースケベだったのに！」
　ともあれ、立場を逆転させてみれば随分とアッサリ受け入れられた。それはそれで普段の俺の扱いが非常に悲しくなるのだけれど……まあいい。

風呂に入っていたのと、慌てて表に立つ事で着替える時間も無かったのでシャワーを掛けられたと嘘を言えば随分とアッサリ受け入れられた……というよりも歓声が聞こえた。隠れているとは言ってもＩＳスーツで身体のラインは見慣れてる筈なんだけどなぁ。

「そんな!?　夏野君が女の子が好きだったなんて……」

「織斑くんが好きな夏野くんはドコに行ったの!?」

「残念、その夏野くんは売れ切れたんですよー。今は女の子大好きな夏野君が主流なんですよ！」

「そんな……神は死んだのか……」

「つーか、俺もホモ扱いされてるのってどうなんですかね」

「ＢＬ読んで面白いからって情報提供してる夏野くんが悪いんじゃない？」

「マトモな意見だなぁ。ああ、それと騒いだ事は織斑先生に言わないでおくれ。俺が死ぬ」

「あっ……わかったわ！　アナタとデュノア君の愛の巣は私たちが守るから！」

「もっと情報を下さい！　私たちに萌えを、萌えを……！」

「シャルルの身体は、一夏よりも細くて、でも綺麗だったゾ！」

「おぉぉ、アナタが神か……」

デュノアさんの身体は綺麗だった。ああ、綺麗だった。椅子の蹴りから目を覚まして再確認したけれど、凄かった。

ともあれ、崇められている俺はへらりと笑って部屋の中に入った。鍵を締めるのは忘れない。

タオルで頭をガシガシと拭きながら、部屋の中で座っているデュノアさんを見る。顔は真っ赤で、俺を見る目が涙目である。可愛い。女の子と認識すればヤバイ。

「さて、デュノアさん。何か言いたい事はあるか？」

「ふ、服を、せめてジャージを着させてくださぃ」

「答えは断じてノーだ！　どこから武器を取られるか分からんからなッ！」

「そんなぁ……ＩＳコアだって預けたじゃないか」

「それでもノーだッ！　ジャージを取ると見せかけて俺を圧倒するかも知れない」

「そんなぁ……」

「一応言っておく。決して俺がデュノアさんの裸Ｙシャツが見たいとか、そのシャツを押し上げているおっぱいを凝視したいとか……そんな思惑は決してない！」

「……」

「ひぇっ……立場的に有利なのは俺なのに、どうしてそんな冷たい目をするんですかね……」

冷めるのは体温だけでいいんですよ！　デュノアさん！　俺が、俺が温めてあげるよ！　我ながら完璧な作戦だぁ……。

ともあれ、普通に戦っても俺が負けてしまうので武器も何も持たせるつもりはない。ＩＳコアも俺の手の中である。

ククク、返してほしくば俺にもっと優しくするのだぁ……！

「それにしても、いい身体をしてるなぁ」

「……」

「そのシャツから出ている太股も素晴らしい。挟まれたい」

「……」

「あの、無視はどうかと思うんですが……」

「ふ、ふん……穂次には一夏がいるから全部冗談ってわかるんだよ」

「……おぅふ……」

おっと、ココでデュノア選手。俺の心にダイレクトアタックだ！　イヤー、キレがありますね……。

頭痛がしてきた。何をどう間違ったらそうなるんだろうか。ＢＬ本の影響は凄い（確信。

いいや、ココは逆手に取ってみよう。そうチェス盤をどんでん返しだ。

「そう、俺には一夏がいる」
「や、やっぱり一夏と穂次は――」
「だから君の実に貧相な、女らしい肢体を見たところで大した感動も性的興奮も覚えない。まさに無駄の塊だな」
「――っ！」
はっ、と鼻で笑ってやれば睨みがキツくなった。けれど反応するな、俺。ココでふざけてしまえば全ては台無しになる。残るのは俺と一夏がホモだという虚偽だけになる。
冗談を言いたい気持ちを溜め息に吐き出して呆れたように彼女の胸を見る。やっぱり、おっぱいは正義なんだなって……。
「第一、デュノアの御令嬢としてその脂肪の塊を付けていて、恥ずかしくないのか？」
「……――」
「ああ、なるほど。そのおっぱいで誑かしたのか。ハッハッ、なるほど、それは素晴らしいおっぱいだ。是非俺も揉みたいモノだな」
「――だって……」
「ん？　どうした、何か反論でもあるのか？　それとも俺に胸を揉ましてくれるのか？
生憎俺には一夏が――」
「僕だって好きでデュノア令嬢になったわけじゃない!!」

「……お、おう」

　これはイケナイスイッチを押してしまった。泣いてる。冗談にしては性質が悪すぎた。反省すべきだ。

　自分を咎めていると、デュノアさんが立ち上がり扉に向かって歩き出す。慌てて俺はその腕を掴む。

「待て待て！　出て行こうとするな！」

「五月蝿い！　ホモ！　離して！」

「ホモじゃねぇよ！　そこだけは真実を言うぞ！　ホモじゃねぇ！　んで、デュノアさんは自分の格好を思い出せ！」

「こんな格好をさせたのは穂次じゃない！　変態ッ！」

「それは認めるけど、落ち着け。　ほら、泣かないでおくれ。可愛い顔が台無しだゼ☆」

「馬鹿！　馬鹿!!」

「はいはい、馬鹿デスヨー！」

「ホモ！」

「ホモではないっ！」

　しっかりとホモという発言は否定して泣き始めたデュノアさんからの罵倒を素直に受ける。ホモは否定するけど。

今回に限って、という事も無いけれど。俺が悪いのは明白なので、しっかりと泣き止んでしまうまで付き合う所存である。泣き顔も可愛いというのはそれだけで特権だと思いました。まる。

「ぐすん……」

数十分、いいやもう少し掛かったかも知れないけれど、泣いて俺を叩いたり、罵倒の数々を言ってのけたデュノアさんはようやく落ち着いた様である。

「落ち着いたな。よし、お兄ちゃんがココアを作っちゃろう」

「……ホモなお兄ちゃんなんて要らない」

「だから、ホモではねぇよ」

「……ふふっ」

「お、やっと笑ったな。んで、ごめんなさい。色々言って気分を悪くしたと思う」

「ううん……私もいっぱい穂次の事言っちゃったし」

「あー、まあ、俺への罵倒は慣れてるからいいんやで。デュノアさんが来る前までにも沢山言われてるからなぁ……あれ？　俺って罵倒されてない日ってあったっけ？」

「ふふ、あはは」

ＩＳ学園に来てから一日一度は最低でも罵倒されている気がしてきた。いいや、アレはスキンシップなのだ。決して罵倒ではない。

ともあれ、少し目を腫らしてしまってはいるけれどデュノアさんに笑いが戻ったのはイイ事だと思う。美少女は笑えばもっと素晴らしいのだ。

そんな彼女の前にココアの入ったコップを置く。両手でしっかりと持った彼女は湯気を「ふぅ」と吹き飛ばす。そして視線をコッチに向けた。

「どうしたの？」

「いや、やっぱ可愛いなぁと」

「おっぱい見てたのに？」

「いい形だなぁと」

「……変態」

「いやぁ、それほどでも」

「褒めてないよ。ふふっ」

座る前に彼女にジャージの上着を被せてかた対面に座る。少しだけ意外そうな顔をしたデュノアさんがコチラを見ている。なんだよー、変なことしてないだろー。おっぱい揉んじゃうぞー？

「そんな意外そうな顔をされても可愛いだけダゾ☆」

「そうやって誤魔化す……ありがと」
「それはどうも。おっぱい触ってもいいですか？」
「ダメです」
「デスヨネー……はぁ」
「ふふっ……あー、バレちゃったなぁ……」
「腐女子ってこと？」
「確かに婦女子だけど、確認することなの？」
「……よし、まだ腐ってないな！」
「え？　え？」
「君は何も知らなくていい。いいんだ」
「う、うん。どうしてそんなに真面目な顔をしてるかわからないけど、わかった」
「よろしい」
新しく腐女子は生まれることはないのだ。そう、これ以上増やしてはいけない。
何かを諦めた様にボンヤリと俺を眺めているデュノアさん。え？　俺って何かした？　言い過ぎた見に覚えはあるけど、他は無いよな？
「なんでそんなに諦めた様な目をしてるんですかね……」
「だって、僕は穂次に女ってバラされて本国に強制送還決定だよ？」

「え？　俺ってデュノアさんが女ってバラすの？」
「え？」
「え？」
「ナニソレコワイ」
「いやいや、チョット待って、どうして引いてるんだよ!?」
「だって、僕にいやらしいことする気なんでしょ!?」
「はっ!?　その手があった！」
「しまった……穂次が馬鹿だって忘れてた……」
「ククク、じゃあ先ずはおっぱいを見せてもらおうか……！」
「いやだ」
「あ、そうッスか……」
「ふふっ」
「アッハッハッ。　まあ俺がデュノアさんをどうこうするつもりは無いよ。メンドイし、何より美少女が俺の前から消えちゃうのも嫌だし」
「……シャルロット」
「ん？」
「僕……私の名前。ホントはシャルロット・デュノアなんだ」

「そりゃぁまた可愛い名前ですこと。デュノアさんにはよく似合ってること！」
「……名前でいいよ。というより名前で呼んでほしい、かな？」
「シャルロット様ぁ！　シャルロット様ぁ！」
「ふふっ……よきにはからえー」
「ははぁー！」
「……私だって、本当はこんな事したくなかったんだ」
「え？　ゴメン……急なカミングアウトでビックリした。自重します」
「違うよ。僕が男として転入すること」
「……まあシャルロットさんじゃねぇからどうとも言えないけど、似たような気持ちは分かるよ」
「……穂次も女の子なの？」
「違ェよ！　何!?　俺ってまだ上半身裸なんだぞ!?　この絶壁を見てわかるだろ！　俺は男！　好きなのは異性！　女の子！」
「……でも本当は？」
「実は男も、ってなるか！」
「ふふ。やっぱり穂次は面白いなぁ」
「そりゃぁどうも。アリガトウゴザイマシタ」

「あ、ジャパニーズマンザイだね」
「外国の方達は日本語を学ぶのに漫才を見る習慣でもあるんですかね……？」
セシリアさんといい、どうして漫才の定型文を知っているんだ……。漫才は世界レベルの文化だった？
いいや、そんな訳がない。無いに決まってる。無いよな？　いや、ノリがいいのは嬉しい限りだけど。
「……私、デュノア社社長の愛人の子なんだ」
「……あー、茶化しちゃマズイ話？」
「うん」
「んじゃ、まあちゃんと聞くから。全部吐き出しちまえ」
「……ありがと。それじゃあ、あのクズ野郎の話から始めるんだけど」
クズ野郎というのが最初は誰かさっぱり分からなかったけれど、話を聞いていけばどうやらデュノア社長らしい。娘にそう言われるって何したんですかね……。
長々と、本当に長々と、時間で言うなら二時間ぐらい止まる事もなくシャルロットさんの愚痴に付き合う。本当に溜まってたんだなぁ……。
「――、ふぅ……穂次、ココアのおかわりがほしいなぁ」
「可愛く言ってくれたら淹れてやろう」

「穂次のココアが飲みたーいー。淹れてー」
「子供っぽくなっただけじゃねぇか……でも可愛いから淹れちゃうぞ！」
「真面目に喋ってるんだから茶化さないでって言ったよね？」
「ひっ……愚痴にも一段落ついたじゃないッスか」
「えへへ。冗談だよー」
「目がマジだったんですがそれは……」
ともあれ、彼女から聞いた話は小市民にとっては随分とドラマ的だった。
妾腹で、ソレを知らずに育ち、母が死んでからデュノアに引き取られて、継母に『この泥棒猫がっ！』って……どこの昼ドラだよ……。
更にデュノア社の経営不振やらと小市民にとっては心の休まらない情報が沢山降ってきた。忘れたい。
「ふう、全部言ったらスッキリした……」
「そりゃぁ、イイ事ですなぁ。話を聞いた壁には何かご褒美的なモノはないのですかなぁ」
「ないですなぁ」
「そうですか……そうですかっ！」
「じゃあ仕方ない――」

「おっぱいを揉ましてくれるんですか!?」
「少しだけ優しくしてあげよう」
「っしゃぁあ!!　マジで!?　言ったぞ!?　嘘じゃないよな!!」
「う、うん……僕としては穂次がそこまで優しさに飢えてることに驚きなんだけど」
　美少女に優しくされるんだぞ！　そりゃぁ喜ぶに決まってるだろ！　そうか、優しくされるのか……涙が出てきそうだな……。
「誰も俺に優しくなんてしてくれないんだぁ……」
「よしよし。穂次は可哀想な子だなぁ」
「うわぁーん！　撫でられてることよりも身を乗り出しておっぱいがハッキリ分かってる方が嬉しいよー!!」
「ふんっ」
「ガッ」
　頭に強い衝撃を受けた。机にぶつけた頭を上げてみれば拳を握っているシャルロットさんがニッコリと笑顔を作っている。実際怖い。
「何か?」
「いえ、ナンデモアリマセン。シャルロット様が全て正しいのですじゃぁ」
「ふふっ、穂次はわたくしに従っていればいいのよ！」

「あ、そういう役はセシリアさんなんで」
「ダメだしはするんだね……」
「そりゃぁ役被りは俺の得にならないからなぁ。シャルロットさんは女王様ってよりも、お姫様？　いや、そこらを言い始めるとセシリアさんもお姫様なんだけど、第一お姫様と第二お姫様というか、長女と次女的な」
「意外に凝った設定があるんだね……そっちもビックリだよ」
「脳内設定だけでゴハン三杯はいける」
「男の子って凄いなぁ……」
「……あ、そっか女の子なんだよなぁ」
「え？　いまさら？」
「いや、なんつーか、ようやく再認識したっていうか……ベッドが一つしかねぇと言いますか」
「……ほ、穂次がベッドでいいんじゃないかな？　僕は床で」
「いや、女の子を床で寝かすってのも俺としては嫌なんだけど？　織斑先生が言ってた様に廊下で寝るか」
「それは風邪引いちゃうよ!?」
ソコらを考えれば織斑先生はシャルロットさんがシャルロットさんである事を気付

いていたのだろうか……やはり野生の勘は凄いという事だな。
　ん、寒気がしたぞ……どういう事だ。
「ほら、震えてるじゃないか！　早く服を着て寝ないと！」
「お、そうだな」
「そ、そうだ！　二人で一緒にベッドで寝れば問題ないね！」
「お、そうだ……いや、ソレは別の問題が出る」
「……穂次」
「どうしたシャルロットさん。急に低い声を出して」
「僕はシャルル。男だ」
「いや、ソレはさっき自分で否定してたじゃん」
「男だ。イイネ？」
「アッハイ。いや、いやいや、おっぱいあるじゃん。よく考えろよ」
「穂次こそよく考えればいいじゃないか。僕は男だ。だからホモじゃない穂次と一緒に寝ても何も起こらない。そうだろう？」
「……ソウダナ！　シャルルは男ダ！　だから一緒にネテモ問題ねぇッス！」
「ハッハッハッ、まったく穂次はオカシナヤツだなぁ」
「アッハッハッ。まったく俺がどうかしてたゼ☆」

「……優しくするって約束だからね」
「それ、寝る前に囁く感じで言ってくれませんかね……いや、寝れなくなりそうだからやっぱイイッス」
「……『優しくしてやるよ』？」
「ソレ、あの本の一夏のセリフだよな……そう考えると結構絶望してきたからやめて」
「アハハ。じゃあ寝よっか」
「ういーっす。ってマジで一緒に寝るの？　いいの？　襲っちゃうぞ？」
「穂次は受けだから何も問題ない！」
「腐ってやがる……遅すぎたんだ……」
凄い真顔で言われて俺はどうすればいいのか困った。本当に困った。アレか、他の女の子諸君が俺の事を男扱いしない理由ってソレか……。落ち込むぞ……女の子扱いされることよりも落ち込む自信があるぞ……嘘だと言ってくれ。
ともあれ、ようやく上着を羽織って俺は布団の中に入る。その後から「お邪魔します」とシャルルが入ってきた。こいつ、男のクセにいい匂いがするなぁ。
背中が妙に柔らかいし。いやー、スゲー、スゲー!!　マジでスゲー!!　おっぱいってスゲー!!　なんか色々と感想を言おうとしたけど、無理！　スゲー!!　うほおおお!!!
「もう辛抱溜まらん！」

「――――」

「……」

シャルロットに振り返れば既に眠っているし、安心しきったように頬が緩んでいる。ココ最近の睡眠不足が窺える。

盛大に、けれども静かに溜め息を吐き出して彼女の頭を撫でてやる。お疲れ、と言ってやれる程俺は偉くもないし、彼女の心労の一割も理解する事は出来ないし、するつもりもない。

ともかくとして、俺のいきり立ったソレがへたれてしまったから仕方ない。今日のところは勘弁してやろう。

それにしても、女の子は柔らかいしいい匂いがするし……ベッドに入れてると温かいし。いや、これ以上はイケナイ。

結局、落ち着ける訳もなく、俺は朝日を拝んだ。俺は後悔なんてしていない。名誉の徹夜だ。むしろ疲れは吹き飛んでいる。やっぱり、おっぱいってスゲーッス。

ちなみに、この事を客観的に考察して「俺はヘタレである」という情報を流しに言ったら全員から「知ってるから」って言われたのはスゲー後悔してる。

自分に正直に生きること

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは――」
「弱いからだヨ！」
「よし穂次。俺と戦おうか？」
「ひっ……俺に攻撃手段はありましたか……？」
「盾で殴る」
「それは攻撃って言わないんですよ！　一夏くん！」
「お、そうだな。でも俺のストレスの発散にはなる」
「ふぇぇ、一夏が虐めるよぉ」
「穂次さん――」
「セシリアさん、慰めておくれぇ」
「キモチワルイですわよ？」
「あ、ハイ……」
シャルルが俺の部屋にやってきて、もっと言えばシャルロットさんは俺を安眠枕と勘違いしてるのか、約束通りに優しくしていただいている日々が既に四日。

と言っても抱きつかれて眠られたのは最初のアノ日だけだったので、今は彼女が寝た後に床で眠っているのが俺である。ヘタレの称号は伊達じゃない！

ともあれ、美少女の寝顔を見て和む日々が続いていることには変わらず。俺としては非常に充実した毎日を過ごしていた。シャルロットさんは寝顔でも可愛い。ハッキリわかんだね。

「それで、勝てないのは一夏が射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そうなのか？」

「ぷーくすくす、今時射撃武器の特性も把握できてないとか、クスクス」

「セシリア。穂次がセシリアの攻撃なんて全部防げるってよ」

「穂次さん、ちょっと空へイきましょうか？」

「戦うって意味なのか、それとも死ねと言われているのか……後者だな！」

「後者にしてあげてもよろしくてよ？」

「ひっ……目が本気だぁ。でも残念！　俺はＩＳ使用許可が下りてないのだ！」

「……アンタ、何をしたのよ」

「いやぁ、ＩＳスーツってエロいじゃん！　前の放課後にアリーナに来てＩＳの映像記憶機能を起動してたら担当教師に見つかって、そのまま織斑先生に……」

「不潔ですわ……」

「お前がどうして捕まらないかが不思議だな」
「あ、アタシたちの視界に入らないでもらえる？」
「わかってた反応だけど、ツラスギィ！　助けてシャルル！」
「一夏は知識として知ってるだけって感じかな。さっき僕と戦った時もほとんど距離を詰めれなかったよね？」
「……あ、あの」
「何かな？　変態と話す事はないんだけど？」
「ヒェッ……一番当たりが強いのが同性ってどうなんですかね」
「穂次、俺はお前の味方だからな！」
「あ、一夏は別にイイッス」
「解せぬ」
「……うん」
「はい、シャルル。意味深に頷くのはやめような」
ごめんごめん、と謝っているシャルルは相変わらず爽やかな笑顔だ。ここ三日、俺と一夏がふざけ合ってるとニッコリシャルルが近くにいる事が多い。挙句に部屋の中で「男の友情っていいよね。一夏と穂次が羨ましいよ」なんて言ったのが俺にとっては決定打だった。

いや、まだ腐っている訳ではないだろう。きっと腐ってない。こんな美少年が腐る訳ないだろ？　ああ、きっとそうだ。
「シャルルの説明はわかりやすいなぁ」
「そうかな？」
「つーか、お前のコーチ様達の説明がぶっ飛びすぎなんだよ」
「穂次、私のアドバイスのドコがぶっ飛んでるんだ！」
「まず自分の感性がぶっ飛んでる事に気付こうね、篠ノ之さん」
「そんな事はないだろう！　なあ一夏！」
「……あ、ああ」
「ほら見ろ！」
「いや、篠ノ之さんもよく見ろよ。アイツ思いっきり視線外してるじゃん」
「穂次、俺を巻き込むんじゃない」
「むしろお前が中心の話だよ、コノヤロウ」
「私のアドバイスのドコが分かりにくいというのだ！」
「いやいや。普通に『ずばーっ』とか言われてもわかんねーよ」
「なぜだ!?」
「感覚で言ってるからだよ！　おっぱいがデカけりゃ何してもいいって訳じゃねぇんだ

ぞ!!」
「――ッ!!　死ね！　変態！」
「うっせぇ！　そんなたわわに実ったモノぶら下げやがって！　俺がどれだけ触りたいと思ったか知らねーだろ!!」
「知って堪るか!!」
「なんなら今から教えてやろうか!!」
「穂次さん？」
「ヒッ、セシリアさんセシリアさん！　俺丸腰、つーか、ＩＳも装着してないから！　スターライトｍｋⅢは死ぬから！」
「死んでしまえ！　変態ッ！」
「篠ノ之さんはおっぱいに行った栄養を頭に持って行きやがれ！　もしくは鈴音さんに――」
「穂次？」
「ナンデモナイデスナンデモナイデス」
　スターライトｍｋⅢの砲口をコチラに向けているセシリアさんも怖いけれど、ふわふわ浮いてるトゲトゲを部分展開した鈴音さんも怖い。つーか、怖い。
　両手を高々と上げて俺は自分の無事を祈った。祈っただけで助かる訳もない。つー

か、どうして一夏とシャルルは俺のことを放置して会話を楽しんでるの？　俺が危険なんですよ！　ちょっとぐらい助けてくれてもいいんじゃないッスかね？
「自業自得だろ」
「自業自得だね」
「心が伝わったのに誠意は伝わらなかった！」
「それじゃあ穂次、ちょっと腕を出そうか」
「……なるほど、鈴音さん。シッペで制裁だなんて可愛いなダダダダダダ!!　アームロックじゃねぇか!!」
「折らないだけマシだと思ってなさい」
「俺の腕はそれ以上曲がりませんよ！　つーか！　おっぱいも当たらないからただただ痛いだけッスよ!!」
「……」
「アダダダダダ!!　ギブ！　ギブ！　マジで折れるから！」
「折れろ」
「マジな声だ！　誰か助けて！　ヘェルプ!!」
「すいません。もう少し発音をよくしていただけますか？」
「ふんっ、当然の報いだな」

「女性陣二人が辛辣すぎぃ!!　つーか、男二人助けて！」
「じゃあ射撃武器の練習をしてみようか」
「え？　他のやつの装備って使えないんじゃないのか？」
「せめてコッチを見ろ!!　見て！　お前のセカンド幼馴染を見て!!　友人の腕を折ろうとしてるこの美少女を見て！」
「鈴、うるさいからもうやめていいぞ」
「……それもそうね」
「あれ……？　アームロックが終わったのに目から涙が出るぞ……」
　俺の扱いが雑すぎやしませんかね？　扱いの改善を要求したい。した所で全部通る訳が無いけど。こう、せめてアームロックはセシリアさんとか布仏さんとか、おっぱいのある人にしてほしい。
　おっと、鈴音さんからの睨みが強くなったゾ！
「何も考えてませんよー？」
「何も考えないで本能で喋ってるから問題なんでしょ？」
「そりゃ、おっぱいを求める本能には逆らえないだろ……」
「どうしてそういう発言する時だけは真面目な顔なのよ……」
「俺は鈴音さんのちっぱいも好きだぜ！」

「……」
「ヒッ……目が家畜でも見てる目ですよ?」
「うっさい、ゴミ」
「家畜以下だったでゴザル……」
　でも感じちゃう！　と冗談を口走ると評価がゴミ以下にでもなりそうだから何も言わなかった。言わなかった筈なのにセシリアさん辺りからの視線がやけに鋭くなった気がする。やっぱり頭の上とかに吹き出し出てるのか?
　ともあれ、記録係りとしてこの場に借り出されているから一夏が射撃の構えをして、引き金を絞るまでもしっかりと記録する。
　銃声が響き、一夏が少しだけ驚いたような顔をしている。
「……」
「どうしましたの?　珍しく奇跡的に難しい顔をして」
「あのさぁ、セシリアさん。俺だって悩んだりするんですよ?　ヘラヘラ笑ってるけど実はそこには政府もビックリな思惑がデスネ」
「……どうせ女性の胸の事ばかり考えてるじゃありませんか」
「なぜバレた……。おっぱいの事だけ考えて生きたい」
「……」

「スゲー目が細められたんですが……。俺は自分に正直に生きてるだけなんだけどなぁ」
「正直すぎるというのも考え物ですわね」
「そりゃぁそうか。ま、隠してた所でイイ事なんて何もネーですし」
「それで……何かありましたの？」
「別に。なんでもねーですよ。ただ――」
「ただ？」
「――あそこにいる女の子、スカートの中が覗けそうなんスよね」
「……」
「おっぱい小さいけど……お、見え」
「穂次さん？」
「ないッスヨー！　わぁ、両手を太陽に向けてあげるのって幸せ！　真っ赤に流れる俺の血潮が見える！　ああ！　生きてるって幸せ！」
「次、ふざけた事を言いましたらその幸せが味わえなくなりますので」
「ヒッ……もうおっぱいとか言えないんですね」
「短い人生でしたわね」
「待った待った。今のはノーカン!!　ノーカウントだ！　ノーカウント！　だからス

ターライトｍｋⅢに光を溜めるのは止めて!!」
「……フンッ」
「恐ろしい美少女だぜ……ん?」
　視線をセシリアさんから一夏へと向ければ、そこには見慣れない黒いＩＳ。装着しているのは銀色の髪に眼帯……ちっぱい、あ、ボーデヴィッヒさんか。
　ここからでは聞こえないが、かなりキツイ目と表情をしている。実は一夏が昔捨てた女の子とか……一夏に自覚はないけど、ありえそうで怖い。
　事情を知らないから何も言えないけれど、教室の一件もあるからなぁ……。
「んー、ちょっと鎮めてくるわ」
「あ、はい」
「セシリアさんは記録をヨロシクぅ。っても時間的にはもう終わりかなぁ」
　立ち上がり、一夏達のいる方へと向かう。つーか、一夏が上手くいなしてくれればいいんだけど、無理だろうなあ。平和が一番なのに、どうして人は争うのかねー。人間だから、ってのが理由なんだけど。
　ボーデヴィッヒさんがトゲトゲしすぎというか、ホント、一夏は彼女に何をしたんだか……。
「村雨」

ＩＳを装着して速度を上げる。別に盾とか必要ないと思うけれど、常に出てるというか腕に付随しているから仕方ない。
「――私は貴様の存在を認めない」
「はいはーい。ストーップ、ボーデヴィッヒさんストーップ」
「なんだ貴様は」
「クラスメイトの夏野穂次。つーか、軍属ならセカンドって言った方がわかるのかな？」
「……セカンドが何の用だ」
「別に君と一夏に何があったか知らねーし、興味もねーけど、一応、一応、そこの一夏は友達だからな」
「どうしてそんなに一応を念押してんだよ」
「……フンッ、トモダチごっこで助けにきたという訳か」
「無理無理。俺が一夏も守って君に勝てる訳ないじゃん。だから、ココはちょーっと落ち着いてほしいかなーって」
「お前の命令を聞く意味はない」
「そりゃぁそうだ。でも戦う意味もないでしょーよ」
「――私には、ある！」
「だから――」

ボーデヴィッヒさんが戦闘状態へとシフトし、左肩に装備された実弾砲が火を吹く。
盛大に砲音を鳴らしたソレは一夏にも、ましてやシャルルにも当たっていない。
ボーデヴィッヒさんと一夏達の間に入っていた俺に命中もしていない。盾にすら当てていない。
俺の腕で銃身を逸らされた大型実弾砲の弾丸は誰もいない空へと向かったのだ。
「――ちょっとは落ち着こうぜ。大佐殿」
「……チッ」
「おー怖い怖い。まあホラ、騒ぎになると担当教師が怒り心頭で来るんだから……俺は知ってるぞー、あの人怒ると物凄く怖いんだぜ☆」
『そこの生徒！　何をしている！』
「噂をすれば――」
『お前ェ！　夏野穂次イ!!　またお前かぁ!!』
「……あー、うん。マジで怖いんだぜ……」
「穂次、何したんだよ……」
「女生徒を見てたら捕まって折檻された」
「自業自得かよ……」
「……ふん。今日は引こう」

「お、そうか。んじゃ、担当教師には俺が悪いって言っといてくれ、ソッチの方が君も楽だろ？」

「……」

返事はなかったが、性格を考えると無視をするか言う事だろう。別に言われた所で問題はないのだけれど……。

「穂次、いいのかよ」

「いいも何も、俺は一夏が全部悪いって言うし」

「どういう事だよ!?」

「そういう事だよ！　俺だってあの人に怒られるのは怖いんだよ!!　好きで怒られてるわけじゃねぇんだぞ!?」

「女の子見てたのは完全に自業自得だろうが!!」

「今回はお前も悪いかもだろ！　つーか、マジで襲われる覚えとかねぇのかよ!?」

「それは……」

「うわ、出ましたよ。どーせ、昔に捨てた女の子とか言うんですよ、このモテ男」

「どうしてそうなった!?」

そりゃぁ、お前が織斑一夏だからだよ！　クソが!!

醜いアヒル

シャルロット・デュノアはいつもの様に目を覚ました。

まだ暗い部屋の中、ベッドのスプリングが揺れて浅い眠りが覚めた。最初の一日以外はずっと同じ時間に目を覚ましている。

ベッドを揺らしたのは他でもない、夏野穂次であり、シャルロットが眠っているかの確認の様に息を潜めて動きをみせない。

シャルロットはいつもの様に、少しだけわざとらしく、「う～ん……」なんて言いながら寝返りをうつ。

「……うん、今日も可愛いなっ」

まるで確認の様にそう呟いた穂次。目を覚ましているシャルロットからすればここ四日程毎日言われている事であり、眠っている自分のことを考えれば穂次の言葉に嘘はないのだろう。故に少しだけ恥ずかしい。

異性に直接褒められる事に慣れないシャルロットは赤みが差した顔を隠すように穂次に背を向けている。

スルスルと布が擦れる音が聞こえ、穂次の不恰好に潜めた足音がベッドから遠のく。

これも、いつもの事だ。
穂次はこの時間になると、何処かへと行く。
パタリと扉が閉められて、シャルロットは起き上がる。
人の好奇心というモノは抑えられないのである。
用意していたジャージを拾い上げ、寝間着の上に羽織る。扉を静かに開いて廊下を覗けば、少しばかり小さくなった穂次の背中が見えた。
シャルロットは穂次に習うように、静かに扉を閉めて穂次の後を追う。心のドコかで一夏の元へ向かうのではないか、という何かを思いながら。
穂次を追う。その事は意外とすんなりと完了した。
そもそも穂次が慎重すぎる程に辺りをキョロキョロしていたり、警戒し続けて歩く速度が遅かったのが原因だ。それでもシャルロットがまったく発見されていなかったので、その精度は推して知るべしである。
「……アリーナ？」
寮から抜け出して、アリーナ。シャルロットの中で様々な予想が立てられる。その半数以上が〝盗撮〟などの変態的行為の数々であるのは穂次にとって名誉なことなのだろう。きっとそうに決まっている。
ともあれ、アリーナへと入られては追うことは難しいだろう。さて、どうするか……。

「おい、そこの生徒。何をしている」
「ヒッ!?」
「……ん?」
シャルロットは声に思わず背筋を伸ばし、錆びたブリキの玩具の様に振り返った。ソコにはスーツに身を包んだ織斑千冬が立っていた。
ヤバイ。マズイ。殺されるかもしれない。
シャルロットはそう思った。
当然、千冬と言えど何もなく生徒に攻撃するような性格ではない。更に言えば殺す訳もない。
千冬は睨む様な視線をシャルロットへと向けて、ふむ、と一言唸ってみせた。
「あの阿呆め。あれほど自分から人に言うなと言っておいて……情けないな」
「え?」
「どうした。お前がどこのクラスかは分からんが、寮から出たアイツの後を追ってきたんだろう?」
「そ、そうです!　穂つ、夏野君がこんな時間に寮から出てて、気になって」
「……まあいい。気になる様なら見ていけ」
「え?　でも」

「わざわざ阿呆のミスを拭うつもりはない。それにピット内部はアイツから見えん。バレることもないだろう」

つまり、シャルロットの口から何かを言わない限りバレはしないだろう。そういう事である。

何が楽しいのか、千冬は口元を歪めて笑いシャルロットを案内する。

ピット内部には幾人かの教師が居て、シャルロットは少しだけ身を千冬の背へと隠した。

「ご苦労、諸君。ついに阿呆がバレたぞ」

「やった！　コレで賭けは私の勝ちね！」

「あぁ！　もう！　半年なんて賭けなきゃよかった！」

「そう言うな。最短の一日だった私は既に全額支払いが決定しているんだぞ？」

「そりゃぁブリュンヒルデが悪りぃな」

和気藹々と会話をしている教師達を見て、シャルロットは自分との接点の少ない教師達だと判断できた。

ちゃんと姿を現し、頭を下げたシャルロットに対しても名前やクラスなんて聞かずに「よくやった」なんて言っている辺り、教師としては問題だろう。

「それで……その、夏野くんは？」
「もう始まっているんだろう？」
「そりゃぁ、いつもの様に」
「モニターに」
「はいよ」
スルメを咥えた教師はコンソールを弄りモニターに光を映した。
そこに映されたのはＩＳを纏った夏野穂次である。
空を駆け、盾で攻撃を防ぎ、八方から来ている攻撃を捌いている。
「……凄い」
シャルロットがそう評する程度に穂次の動きは機敏だった。尚且つ、穂次の表情は一片の笑いもなく、真剣そのものであり、僅かに汗も流している。
「被弾は？」
「七、いいや、今当たったから八だねー」
「……まだ甘いな。まだ五分も経っていないだろう」
「おぉ、おぉ、ブリュンヒルデ様はお厳しい事で」
「初日を考えるとだいぶ成長してるんですけどねー」
「そうさ。このＢＯＴだってアンタが設定したヤツなんだろう？　ブリュンヒルデ？」

「……ふん。阿呆が頼んだ事だ」
「夏野君は何を？」
「あん、見てわかんねーか？　特訓だよ、特訓」
「え？　でも、夏野君は自分のことを」
「ぶあっはっはっはっ！　天才だってか？　アイツがぁ？　見ろよ、アレが天才のする行動で、天才がするような表情かよ！」
「まあ普段はずっとへらへら笑ってますからねー」
「夏野くんが天才なら、ＩＳ乗りはみんな天才って訳ね」
「つーか見ろよ、被弾が十超えたぞ」
「タイムは？」
「八分二十秒。昨日よりも三秒長くなったわね」
昨日よりも、という事は穂次はこの〝特訓〟とやらを昨日もしていたのだろう。
シャルロットは真面目な顔をしている穂次と射出されている攻撃を見つめる。
「あー、ココから、何もアシストなけりゃぁ結構攻撃が激しく見えるだろ？」
「え？　あ、ハイ」
「でもハイパーセンサー越しだと、あの攻撃はかなり避けやすい設定になってるのよ」
「え？　……じゃあ」

「あの阿呆はその程度も避けれない、という事だ」
「コレでもだいぶマシにはなってんだけどな」
「代表候補生ならば二時間もあれば被弾も無くなるだろう」
「おいおい、ブリュンヒルデ。あの馬鹿と代表候補生なんて比べんなよ」
「アレが望んだのはそのレベルだ。マイクを借りるぞ」
「お好きにどうぞ」
「おい阿呆。何度同じミスを繰り返せば学ぶ？　初日から何を学んだ？」
『もう一回、もう一回お願いします！』
「……同じミスは繰り返すなよ？」
射出される攻撃。ソレを避け続ける穂次。
日頃見る事の出来ない穂次の表情がシャルロットに濃く映る。果たしてこの特訓とやらはいつから続けれている事なのだろうか。
どうして特訓なんてしているんだろうか。それなら普段から真面目にしていれば……。
シャルロットからしてみれば穂次が何を考えているのかさっぱり分からない。分かる訳がない。
「ど、どうして穂次は特訓を？」

「あ？　そりゃぁ、カッコいいからだろ」
「あら？　格好悪いからって言ってなかったかしら？」
「どっちも変わんねぇよ。人に努力されてるのを見られたくないんだとさ」
「え？　なんで……」
「さぁ？　私たちにもさっぱりなんだよねぇー」
「いつも飄々として、ヘラヘラしてる馬鹿やってる馬鹿が実はスゲー努力してて、何回も失敗して、何回も挑んで、んで、ようやく成功に一歩近付く」
「それがあの阿呆にとっては格好悪い事らしい」
「普段、女の子の前では虚勢張って頑張ってるからねー」
「そういやあの一年のイギリス代表候補生戦は燃えたよな」
「珍しくブリュンヒルデが上機嫌だったものね」
「ごほん」
「あら、失礼」
話を聞けば聞くほど、シャルロットはこの場にいる事を後悔してしまう。
穂次にとって見られたくなかった所。ソレを見てしまった。偶然という訳でもなく、ただ気になってしまったから。
けれど、汗だくになって真面目な顔をしている彼はいつもの幾分も格好良く見えてし

まった。だからこそ、見るべきではなかったのかも知れない。
「む、帰るのか？」
「はい……その、私が居ちゃ、邪魔かな、と」
「別に邪魔なんかじゃねぇよ。私たちだって酒飲みながらだしなー」
「下戸のアナタは麦茶じゃない」
「うるせぇ！　スルメぶつけんぞ！」
「やめてよ、ワインには合わないんだから」
「あー、私食べるー！」
「うわ！　お前！　私に寄るな！　酒くせぇ！」
「その……穂次にも悪いですし」
「あー、じゃあ仕方ネェな。アイツは白鳥みてぇに水中でバタバタしてんだから」
「白鳥？　精々アヒルがいい所でしょ？」
「それもそうか」
「あの阿呆の扱いは変えてやるなよ。アレは阿呆が望んでいることでもあるからな」
「……はい」
「ああ、それと。お前は誰かわからんが、帰ったらベッドで眠っていろ。アイツが戻ったときお前が居なかったらソレこそアイツが騒ぐからな」

「……ワカリマシタ」

これはバレてるなぁ。とシャルロットは乾いた笑いを出して、カタコトの言葉を吐き出した。

夏野穂次が部屋に戻ってきたのは、シャルロットが部屋に戻って二時間後の話である。

◆◆

悪夢にも似た日曜日も終わり、ようやく月曜日がやってきた。用事を終わらせる為に街に繰り出さなくてはいけない日曜日ほど苦痛なものはない。逆に言えば美少女を愛でるだけの学園生活は非常に素晴らしい。可愛い人が多いというのはそれだけで素晴らしい。

それで俺におっぱいを揉ましてくれるのならばもっと素晴らしい。ああ、おっぱい。おっぱいが触りたい。

逆に考えよう。おっぱいが俺に触られたい時はどういう時なのだろうか？　それはきっと、おっぱいが俺を求めている時だ。きっとソレが今なのだ!!

「セシリアさん！　おっぱいを触らしてくれませんか！」

「おはようございます、穂次さん」
「挨拶みたいに定着しちゃったかぁ、おはよう、セシリアさん。今日もお綺麗ですね！」
「は？」
「あれ？　俺って今普通に挨拶したよね？　反応逆じゃない？」
「穂次さんが普通に挨拶なんてする訳がないですわ……偽者？」
「俺の様なイケメンが二人もいたらセシリアさんが困っちゃうじゃないですかー」
「そうですわね。鬱陶しくて殴ってしまうかもしれませんわ」
「ひっ……セシリアさん、既に拳が俺の横を通過したんですが」
「……チッ。鈴音さんに近接技術でも教えていただこうかしら」
「それは実にいいと思うよ！　アームロックとか、チョークスリーパーとか、いいと思うよ!!」
「……何を考えてますの？」
「おっぱいの事に決まってんだろ!!」
「聞いたわたくしが悪かったですわ」
「そんなにマジで謝られるとどうしていいかわからねーんですが……」
　しっかりと溜め息を吐き出されて諦められたような目を向けられた。ゾクゾクするよね!!

教室に入れば今居るクラスメイトがコチラを向いて、安心したように息を吐かれた。
「よかった、織斑君じゃなかった」
「なになに？　面白い話？」
「女の子だけの話なんだけど、月末の学年別トーナメントで優勝すると織斑君と交際出来るんだって！」
「……あ、俺って女の子だったな！　いやん、忘れてたわん！」
「穂次さん、慰めてさしあげましょうか……？」
「うん……いや、慰められると余計に心にきそうだからいいや」
「……」
「どうしてそんなに残念そうな顔をしてんですかね……俺が傷ついて嬉しい事でもあるんスか」
「そ、それは……」
「それは？」
「べ、別になんでもないですわ！　汚い顔をコチラに向けないでくださいます!?」
「えぇ……」
俺はもう立ち直れないかも知れない。いや、どうしてかプンプンと怒っているセシリアさんは可愛いからソレを見て癒されるんだけど。

ソレにしてもようやく一夏と交際できるという噂が学園中に回ったか。この前まで一夏の部屋の周りだけで立ってた噂だった事を考えれば早い方なのだろうか。
「ん、おお、おはよう。シャルル」
「あ、うん。おはよう。穂次」
同室であるのに今日初めて見たシャルル。つーか、ここ二日ぐらい距離を置かれているんですが……。
俺が何かしたの？　まさか寝惚けておっぱい触っちゃった？　それともシャルロットが眠った後に毎日寝顔チェックしてる事がバレた？　それとも下着の匂いを嗅いだのがバレたか……？　ヤバイな、身に覚えがありすぎるんだけど……。
ハッ……まさか……。
「シャルル……、お前、俺に惚れたのか」
「総受け君は黙ってくれるかな？」
「その不名誉すぎるあだ名はどうにかならないッスかね……」
「二人ともおはよう」
「おはよう一夏。今日も人気だな、ホモのくせに」
「おはよう一夏。穂次と末永くお幸せに」
「なあ朝から俺って何かしたのか？　少なくともシャルルには何もしてないと思うんだ

けど」
「俺には何かしたのか！」
「お前は常に何かしてるだろ、既に日常みたいなもんだ」
「お、おう……でも反応してくれないと悲しいんだゾ☆」
「ふーん」
「俺を虐めて何が楽しいんですかね……」
「一夏と穂次はそのままがいいよ！」
「なあ、穂次。シャルルに何かあったのか？」
「一夏は知っちゃいけない世界だ。マジで」
「あー、うん。その世界の事はさっぱりわかんねぇけど、触れてはいけない事だけはわかったわ」
「そんで、一夏って月末のトーナメント誰と組むか決まったのか？」
「は？　組むってペアじゃないとダメなのか？」
「らしいぞ。俺は先輩さんに聞いた」
「穂次の人脈すげぇ……」
「ふっ、褒めるな。ちなみにお陰で財布は軽くなったゾ」
「あぁ……ドンマイ」

「じゃあ、一夏は穂次とペアだね」
「そうだな」
「……なあ、シャルル。お前、他意はないんだよな？」
「他意はないよ！」
「……」
「おおぅ。穂次がすげぇ顔してる。大丈夫か？」
「いや、なんつーか、頭痛が痛い」
「ソレ二重になってるぞ」
「まあいいや。俺は一夏と組まないから」
「そうなのか？」
「当然だろ。お前の機体と俺の機体を考えろよ。セシリアさんとか、中距離が主なシャルルとかと当たると死ねる。主にお前を守る俺が死ぬ」
「お、おう。じゃあ、組もうぜシャルル」
「え？　僕でいいの？　穂次じゃないよ？」
「なんでシャルルは俺にそこまで穂次を推すんだよ……」
「んじゃ二人は決定って事で。ま、俺もお前と戦いたかったし」
「……負ける気しないぜ？」

「言ってろ。勝ちを譲る気はねぇよ」

互いにニヤリと笑い、戦意を確認する。ついでに流れも頂いたので俺は宣言するように言葉を吐き出す。

「優勝はこの俺、夏野穂次が頂く！　その報酬も当然、譲るつもりはない！」

「きゃあああああ!!　夏野君が遂に嫁宣言したわ！」

「いいえ、織斑君が婿なのよ！　夏野くんは嫁だから！」

「やっぱり織斑君を盗られたくないのね！」

「なあ、穂次。どうしてこんなに騒がれてんの？」

「俺は知りませんなぁ」

「その顔は絶対知ってる顔だろ」

「ハッハッハッ。知りませんなぁ」

俺は面白さの為にならば自分の犠牲も厭わないぞ!!　お前も一緒に風評被害に見舞われろ!!

憧れの職業・種馬

どういう訳か知らないけれど、篠ノ之さんの視線がキツくなっていた授業時間も終わり、時は放課後へと変わった。

本当に何もしていないんだけれど、俺は無意識でまた何かをしてしまったのだろうか。それとも授業中に山田先生のおっぱいを凝視していたのがいけなかったのだろうか……。確かにおっぱいという点では山田先生に負けないおっぱいをお持ちである篠ノ之さんであるが、如何せんその鋭い目付きがいけない。いいや、確かに篠ノ之さんは美少女だ。それは間違いない。そして巨乳だ。コレも間違いではない。

ん？　俺は何を言いたいんだっけ。まあ、とにかくおっぱいは素敵って事だな。

「穂次さん」

「ん？　どしたの？　セシリアさん」

「この後時間はありまして？　第三アリーナで学年別トーナメントの特訓を」

「あー。オッケー。っても記録と偏見での見解しかできねーよ？」

「……今度は何をしましたの？」

「その俺が常に何か悪い事をしてる、って思うのはどうかと思うんスけど？」

「……そうですわね」
「ありゃ？　素直に受け入れられた」
「いくら救いようの無い変態で馬鹿な穂次さんでも常に悪いなんて事ありませんわ」
「あ、そういう攻めだったのか……泣きたい」
　俺がションボリしているとクスクスと微笑むセシリアさん。俺を弄って楽しむなんて……!!　素敵な趣味ですね！　もっとやってもいいんですよ！　具体的には靴脱いで踏んでもいいんですよ！　踏んでください！
　それにしても、素晴らしい太ももだぁ。黒いストッキングも素晴らしい。もう、素晴らしい。挟まれたい。
　こうして隣で歩いているだけだけど、イイ匂いするし。ホント、完璧な美少女だよな、セシリアさん……。欠点らしい欠点が料理ぐらいなんて……ホント、カンペキダナー。
「どうしましたの？　お腹を抑えて」
「いや、なんでもない。前に食べたセシリアさんのサンドイッチを思い出して――」
「よ、よろしければまた作ってさしあげますわよ？」
「――よろしくお願いします。イヤー！　嬉しいな!!」
「ふふふ、そうですかそうですか。フフフ」
　思い出してお腹が痛くなったなんて言えなくなってしまった。更には新しい苦行の

予定まで決定してしまった。こんな輝かしく愛らしいセシリアさんの期待を裏切ることなんて出来るか？　否出来ない。少なくとも俺には出来ない。

　ころころ笑っているセシリアさんを見てヘラヘラとした笑いを張り付ける。冷や汗なんてかいてないんだからねッ!!

「あ」

「あ、ふーん」

「鈴音さんは何を感知したんですかね……」

「アンタらってそんな仲よかったんだぁー、へェー」

「ッ！　そ、そんな、わたくしと穂次さんが仲がいい筈がありませんわ！　誰が、こんな変態！」

「……なあ、鈴音さん。俺って泣いていいの？　よくわかんねーけど、スゲー不当な罵声を受けてる気がするんだけど」

「罵声の中身は真っ当だから素直に受けときなさい、変態」

「……なるほど。つまり、不当な扱いをされるなら真っ当にしろと、そういう事ですね!!

　セシリアさん！　そこまで言うならおっぱいを、いや、太ももを撫でさせて、いいや!!　踏んでもいいんですよ!!」

「……」

「急に視線が冷たくなったんですが……」
「まあ、妥当ね」
血が頭に昇っていたのか顔に赤みを差しながら順調に俺を罵っていたセシリアさんが俺の一言で停止して、俺を見下してくる。照れてしまうじゃないか!!
罵倒されてるのはいいんだけど、もっと、こう俺にご褒美的な何かがあってもいいと思うんだ。おっぱいを触れたり、おっぱいに挟まれたり、胸に抱きこんでもいいですよ!! あ、鈴音さんは別にいいから。安心してくれ、俺は貧乳にも優しいんだ。
「穂次、次に余計なこと考えたら――」
「い、イヤダナー、何も考えてませンヨー」
「潰すから」
「あ、ハイ」
いったい何が潰されるかは分からなかったが、この目はマジである。というよりどうして俺の思考は読まれるんだ……頭の上にやっぱり吹き出しでも出てるのか？　いいや、それならこの俺の溢れんばかりの愛が皆に伝わっていてもおかしくはない。皆は俺におっぱいを触らせてくれても何もおかしくないだろう。
つまり、頭の上には吹き出しは出ていない。
んじゃ、なんで読まれるんですかね……。

「それで、セシリアも学年別トーナメントに向けての特訓かしら？」
「ええ。元々優勝する気でしたがとある噂を聞いて――」
「？　アンタもあの噂を聞いたの？」
「――優勝宣言した変態には勝つ為ですわ」
「……あぁ、うん。なるほど、わかったわ」
「あの、俺にもわかる様に話してくれませんかね？　少なくとも今朝に俺が宣言したのはわかるけど、セシリアさんがソレでやる気になる理由がさっぱりなんですが……」
「変態に負けたくないって普通じゃない？」
「あ、なるほど。スゲー納得いったわ」
　悲しいけど、二人共俺より強いじゃん。こんな小市民なんて警戒しなくてもいいだろ。少なくとも、鈴音さんとセシリアさんを相手にして勝てるなんて思えなんですが……。
「つーか、時間は有限だからさっさと特訓をハジメマショー」
「何？　アンタまだＩＳの使用許可下りてないの？」
「覗きの罪は重い……つーか、一昨日あたりにボーデヴィッヒさんと一夏を止める為にＩＳ展開したのがバレて余計に罰則が増えた」
「……ああ、アレね」

「まあ、別に罰則が増えるのはいい。基本的には俺が悪いし、説教に託けて美人教師に怒られてるのも素晴らしいから別にいい」
「……」
「アンタ、そんな事を言っているからセシリアからの視線が強くなるのよ」
「だがしかし！　どうして誰も俺におっぱいを触らせてくれないのだろうか!?」
「遺言はソレでよろしくて？」
　ニッコリと笑ってコチラにスターライトｍｋⅢを向けるセシリアさん。思わず両手を上げた俺は悪くない。いや、そもそもソレ以前で悪い発言があったのだろうけど。
「ヒッ……もう少しマトモな発言を――」
「――穂次さん！」
「へ？　へぇあぁあああああ!?」
　セシリアさんに抱かれ、急に視界が動く。
　何!?　怖い!!　スゲーこわ……ん？　うぉおおおお!!　スゲー!!　柔らけー!!　え!?　何コレ!?　夢か!?　遂にご褒美をいただけた訳か!!　スゲー!!　美少女に抱き締められているってスゲー!　イイ匂いもするし！　ココが天国ってヤツか!!　死んでもいい、いや死にたくない!!
「ラウラ・ボーデヴィッヒ……」

セシリアさんの言葉なんて関係ねぇ！　今はこのおっぱいと素晴らしい匂いと、滑らか過ぎる美しい髪を堪能する時だ!!

なるべく気付かれないようにソレっぽい表情だけ作ってりゃいいだろ!!　ハッハッハッ！　俺の演技力ってヤツを見せてやるよ!!

「……どういうつもり？　いきなりぶっ放すなんてイイ度胸してるじゃない」

「中国の『甲龍』とイギリスの『ブルー・ティアーズ』か……データで見たときの方がまだ強そうではあったな」

「何？　やるの？　わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて、随分なマゾっぷりね」

「あらあら鈴さん。コチラの方はどうも言語をお持ちで無いようですわ」

「はっ……。二人掛りでも量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな」

あ、これは胃が痛くなるヤツだ。もういい！　俺はおっぱいを楽しむんだ!!

ああ、素晴らしい、なんて柔らかいおっぱいなんだ!!

「……ふん、それにあの程度にも反応出来ない荷物もいるようだしな」

「え？　おっぱいがなんだって？」

「……」

「……」
「……」
「あれ？　え？　いやいや、聞いてたよ。ヤダナー。別にセシリアさんのおっぱいが素敵過ぎて耳に何も入ってこなかったとかないッスよ？　ナイスおっぱい」
「……」
「いや、すいません……あの、無視はやめてくれないッスかね？」
セシリアさんが俺を離し、その上に背中を押して俺から離れた。スゲー、扱いが悲しい……。でもおっぱいをありがとう。ありがとう!!
「ふ、ふん……所詮は政府に選ばれた種馬だな」
「これは……褒められてるな！」
「穂次、挑発されてるのよ……」
「なんですと!?　種馬は憧れの存在ではないのかッ!?」
「……所詮は二番目か。知性に欠けるな」
「アッハッハッ。……安い挑発だなぁ、ラウラ・ボーデヴィッヒさん。君を教えた人の知性も知れているな」
「――なんだと？」
「おや、お気に障ったかな？　それは失礼。けれど君がしている事全てはその教官殿に

泥を塗っている事に気付かないのか？　いや、失敬。ソレもわからない程度の知性だったな。アッハッハッ」

「貴様……」

「おっと、何も持たない民間人に攻撃か？　それこそ教官殿は君に何を教えたんだか……まったく、君の教官は無能もいい所だな」

「それ以上、貴様が教官を語るな……!!」

「何を言う、君が俺に語らせているんだ、ラウラ・ボーデヴィッヒさん。君の行動一つ一つが全て教えた人の評価に繋がる。つまり、評価を落としているのは君自身だ」

「ッ……私が、教官の評価を――」

「そうだ。ああ、すまないね。君には幾分も難しい話だった。所詮、奇襲しか出来ない君には、ね」

「――っ」

「ココで攻撃を仕掛けようとする。ソレも馬鹿の様な行為だ。君自身が荷物と呼び、知性が欠けると言った俺の挑発に乗り、攻撃を仕掛ける。さて、知性が無いのはどちらだろうか、ラウラ・ボーデヴィッヒさん？」

「……」

「ではこうしよう。今回の戦いに関しては俺の預かりとする。然るべき場所で、真正面

から、奇襲もなく、不利も有利もなく、尽力し、決着をつけよう。お誂え向きに月末には学年別トーナメントも控えている事だ。って事でいいかな、お二人さん?」
「え、ええ……わたくしは、別に」
「あたしも問題は……」
「ボーデヴィッヒさんは当然問題なんてないだろ? それこそもう君は教官殿に泥を塗る訳にはいかない訳であるし」
「……ああ」
「ならばこの場は夏野穂次の預かりとする。対戦し、負けた者は勝者に謝る事!」
「なっ!? アタシたちは――」
「お二人さんもボーデヴィッヒさんを挑発してたでしょーが。ソコは褒められるべき所じゃねぇぞ?」
「それは……そうですが……」
「んじゃま、ボーデヴィッヒさんはこの場は矛を収めるって事で。対戦相手に情報を落としていくなら俺が相手するぞ?」
「……ふん」
IS状態を解除してアリーナから出て行くボーデヴィッヒさん。いやー、怖かった。いつ撃たれるかヒヤヒヤした。 流石に亜音速なんて俺には反応できねーよ。

「ふぅ、怖かった怖かった。いやぁ争いが無くてみんなハッピー」
「アンタ、穂次よね？」
「え？　こんなカッコいいヤツが他にもいるのか!?」
「あ、穂次ね」
「それより穂次さん、その……大丈夫ですか？　先ほどまでいつもと違う様でしたが……」
「惚れ直した？　イヤー！　美少女に惚れられて困っちゃう!!」
「……」
「ヒッ……視線がキツイですよ！　セシリアさん！」
「それで？　なんで怒ってたのよ」
「え？　別に怒ってねぇけど？」
「いや、怒ってたでしょ。普段のアンタからは想像出来ないわよ」
「いやぁ、照れますなぁ。っても、本当に怒ってはねぇッスよ」
「ふーん、知性が無いって言われてキレた訳じゃないのね」
「え？　鈴音さん、俺に知性があるように見えてたんスか？」
「自分で言ってりゃア世話ないわね……」
「それじゃあ、二番目と言われた事ですの？」

「別に俺がセカンドなのは変わんネーでしょ。むしろ面倒な事は一番目に任せれる二番目サイコーッス！

つーか、別に俺がどうのこうの言われてるのは慣れてるからいいんだよ。変態だし、馬鹿だし、知性がなけりゃ、荷物な二番目だし。うん、事実しかねーな」

「……ああ、なるほど。ふーん」

「鈴さんはわかりましたの？」

「あーあー！　えっと、そうそう。セシリアさん、助けてくれてありがとう！　あとナイスおっぱいでした!!」

「鈴さん教えてくださらない？」

「無視はいやん。つーか、あんまり触れないで！　たぶん鈴音さんが当たってると思うから、ヤメテ！　恥ずかしいからヤメテ！」

「別に自分はどうでもいいんじゃなかったんじゃないのー？」

「ひぃっ！　恥ずかしいからヤメテ!!」

「？　どういう事ですの？」

「ああ、セシリアさんが馬鹿でよかったぁ」

「穂次さん？」

「ヒエッ……」

カタカタ震えて両手を上げている俺は何も悪くない。スターライトｍｋⅢを構えているセシリアさんの後ろでクスクス笑っている鈴音さん。まあ鈴音さんは言わないだろう。変に義理堅いのはわかってるし……。今度姉御と言ってやろう。
「そこで銃を向けられている阿呆」
「ヒッ……織斑先生じゃないッスか」
「お前に少し用がある。オルコット、コイツを借りてもいいな」
「え、あ、ハイ」
「提案じゃなくて確定だったんですが……つーか、今日のお手伝いは全部終わったじゃないッスか。どうしたんスか？」
「いいや、先ほどの舌戦を聞いていてな。随分と好き勝手言ってくれたではないか」
「……いやいやいや、俺は織斑先生の事――あっ」
「ようやく気付いたか、阿呆。阿呆め」
「ちょ、ちょっと待って下さい。俺は悪くないッスよ。そう全部一夏ってヤツが悪いんだ！」
「黙れ三下。何、安心しろ。全部終わる頃には目が覚める」
「ちょっ、ソレって完全に俺の意識飛んでるじゃないッスかヤダー!!」
「では行くぞ」

「待った!!　待って！　織斑先生!!」
「どうした、阿呆。お前のせいで私の貴重な時間が浪費されていくぞ」
「スイマセン!!　連れて行かれるのはいいッスけど、なんで頭掴んでいくんスか!?」
「持ちやすかったからな」
「あ、なるほどー!!　さっすが鬼ッスねダダダダダダダダダ!!　割れるから！　ミシミシいってっから!!」
「割れろ」
「死刑宣告!?」
その後のことは若干記憶にない。けれど俺が生きているという事は、どうやら頭を割られる事はなかったらしい。連れ去られるのを見ていたらしいシャルロットさんと一夏から妙に優しくされるが、二人は俺がどうなっていたかを頑なに言ってくれない。
マジで記憶に無いことが幸いである。

ウスイホン

夏野穂次、つまる所セカンドである俺だからこそ言わせてもらうのだが、学年別トーナメントで俺とペアとなれる人間は専用機を持っていなくてはいけない。

そこに俺の意思なんて物はない。決定事項と言ってもよく、再三と言ってイイほど政府の方々に念押しされたのだ。

俺、或いは一夏、そしてシャルルの三人はこの学園でたった三人だけの男性だ。詳しく言えばシャルルにはおっぱいが付いていて、そしてアレが無いから男として区分するのはオカシナ事だろう。まあ、それは俺しか知らない事だから、置いとくとして。

そんな三人。希少枠である三人とペアになるという事は誰もが望んでいる事だったりする。当然、俺なんかよりもシャルル、もしくは一夏とペアになりたいというのは分かっている。つーか、聞かされた。心がキツいッス……。

ともあれ、希少枠の中での珍獣枠、もしくは『掛け算の後ろの方』である俺とペアになりたい女の子は少ない。少ないだけであって、それこそ少し気の強めなお姉様と言えそうな同い年の女の子やどこか怪しい笑みを浮かべる婦女子の方々が俺の元へとやって来た。当然、丁重にお断りの言葉を言ったのだが。

生憎、婦女子の相手はシャルロットだけでお腹いっぱいです……。気の強い人は篠ノ之さんとか、セシリアさんとか、千冬様で頭がいっぱいなんだ……。千冬様？　織斑先生……うっ、頭が……！

話を戻そう。

俺とペアになる人間は専用機持ちでなくてはいけない。そもそもセカンドと一緒になる、という事はいくら珍獣枠で『掛け算の後ろの方』な俺が相手だろうが関係なく、方々から羨望とか嫉妬とかが結構ある。俺とよく一緒にいるセシリアさんも裏では結構言われていたりする。ソレが俺に聞こえてくる辺り、女の子は怖い。ホントに怖い。

まあそんな『ドキッ！　女の子の秘密の事情』があり最低でも相手が専用機を持ってないとドウニカなりそうで怖い。俺はエッチな意味でドキッとしたいのにどうして怖さでドキドキせにゃならんのだ。ホラーじゃねぇんだぞ!!

ともかく。俺と一緒になるのは同じ男である一夏かシャルル。もしくは専用機を持っている人になる。一夏とシャルルは俺が組ませたので何も問題は無いだろう。一夏を取り合って篠ノ之さんが勝ちあがったら……いや、篠ノ之さんはそもそも大丈夫なのか？　まあ、ソレはどうでもいい。本当にどうでもいい。

そんなシャルルに一夏を……、いや、一夏にシャルルを奪われてしまった俺は現在ペアがいない状態になっている。

セシリアさんと鈴音さんはペアになったし、一年生で専用機を持っているもう一人を訪ねれば小さく悲鳴を上げられて出ない事を告げられた。後になったが、俺は彼女に対してまだ何もしていない。キュートな眼鏡をしていた水色の少女はおっぱいが小さかったのだ。無い訳じゃない、そう、小さかったのだ!!

悲鳴を上げられてもちゃんと対応してくれた少女に感謝を述べて、どうすっかなぁ、と口ずさみながら廊下を歩いていた。

「セカンド」

「……うーん、ちょっと待って。頭痛が痛い」

「ん……？　頭痛が痛い、は間違いだ」

「うん、そうなんだけど。つーか、ボーデヴィッヒさんはどうして俺を待ち構える様に仁王立ち？　自分で言うのも変だけど、俺達って前の罵り合いで仲は悪くなったと思ったんだけど」

「ふんっ。別にお前に好意を抱いた事などない」

「新手のツンデレか何かか……ん？　罵り合い？　教官……千冬様、うっ頭が」

「何を遊んでいる？」

「いや、まあ……それで、大佐殿はこんな小市民に何か御用で？」

「……トーナメントのペアは決まったか？」

「残念ながら。俺と一緒になりたい奴なんていないそうッスねー」
「そうか！」
なんでだろうか。この少女の顔が明るく見える。チョット前までは暗い、つーか、冷酷な表情しかなかったのに。同時に嫌な予感しかしないんですが……。
「私とペアになれ、セカンド」
「……いやいやいや、え？　どういこと？　ええっと、俺とペアって事は、え？　そんな……俺には将来を誓った相手が――」
「何を勘違いしている？　学年別トーナメントのペアになれ、セカンド」
「あ、うん、そっちだよな。ビビッた……割りとマジでビビッた。新手のツンデレって怖い」
「？　お前はさっきから何を言ってるんだ？」
「いやぁ、ツッコミのいないボケってのがどれぐらい無様で滑稽でツマラナイかの再確認をですね」
「？　お前が無様で滑稽なのはいつもの事なのだろう？」
「……あー、うん。まあそうッスね」
否定したいけど、否定したらしたで面倒なんだろうな……。つーか、否定材料が全然見つからない。カッコいい俺ってドコ？　あ、売り切れ？　いや、そっちのホモっぽい

奴はイラナイッス。
「それで、えー、ボーデヴィッヒさんはどうして俺と？　それこそ俺じゃあるまいし、ボーデヴィッヒさんのペアなんて選り取り見取りデショ」
「ふんっ。お前が一番荷物だったからな」
「……ん？　えっと、俺って怒っていいの？」
「教官に薦められた」
「あーコレ怒れないヤツですわー。怒ったら織斑先生飛んでくるヤツですわー。もうマジ無理。何？　あの人、俺に盗聴器でも付けてんの？」
「教官がお前など意に介する訳ないだろう」
「あ、ソウッスネ……。んで、荷物ってのはわかったけど、なんでその荷物を背負おうとしてるんですかね……」
「フッ……荷物を背負って尚勝つ事に意味があると、教官が教えてくれたのだ」
「……あ、コレ面倒を全部俺に押し付けてるヤツですわ」
「お前は何もしてくていい。ただ私の後ろに隠れていろ」
「わー、スッゲー愛の告白みてー。その前に色々なけりゃぁ俺だってハシャイでたよ!!」
「一応、荷物と言っても無断で出す事は出来ないからな。確認を取りに来た訳だ」
「あ、我が道を往く娘だったね……つーか、織斑先生が絡んでる時点で俺が断るって選択

肢がないんですが……むしろ、断る選択＝死な訳ですが？」
「うむ、教官もそう言っていたが。確認は必要とも言っていたぞ」
「あー、うん。ソウッスネー。まあ俺からは何もナイデス。署名すっから書類を――」
「問題ない。既に記入済みだ」
「……いやいや、書いた覚えはないんですが」
「？　お前、文字を書けたのか」
「流石に自分の名前ぐらいはかけるもん！」
「は？」
「ヒッ……マジ睨みはやめてくださいよ、大佐殿。結構怖いんですから」
「……ふん。私の階級は少佐だ。間違えるな」
「へいへい、了解いたしました、少佐殿」
ふざける様に言ってやれば更に睨みが強くなった。馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前！
睨みになんて負けないんだからねッ！　まだ織斑先生の方が怖いんだから仕方ない。
そんな彼女の背中が遠のくのを見ながら溜め息を吐き出してしまう。俺としてはいい方向に転がった……んだろうか。　まあいいか。
そんな事よりも、ボーデヴィッヒさんとペアになったという事実を広めておかなくてはいけない……。あの言い争いを聞いていた人も多いだろうし、更には広まっているだ

ろうし、そこから俺とボーデヴィッヒさんがペア？　ハッハッハッウケルー、チョーウケルー。

　少なくとも俺自身が納得出来てないんですがソレは……。いや、事実として受け入れは出来てるけど、どうすっかなぁ……。

「まあ、どうにでもなるか。うん、どうにでもしよう。そう、強いものには巻かれろってね」

「穂次！　聞いたぞ！　アイツとペアなんて何を……」

「ヘルプ！　一夏いい所に来た!!　俺の部屋がちょっとしたサバトみたいになって――あー!!　待て待て！　扉を閉めるんじゃなぁい!!」

　閉じられた扉が恐る恐る開かれた。顔を覗かせた一夏は出来れば何も見たくなかったと表情に表している。俺だって、こんな体験を今したくはない。

「あら、一夏さんもします？」

「ストレス解消にはなるわよ？」
「いや、エンリョします」
「あっそ」
「というか、シャルルは？」
「アイツは逸早く危険を感知して逃げ出した。この戦いにはついてこれそうにもない」
「穂次は何と戦ってるんだ……」
「それで、穂次。いい加減に言う気になった？」
「だから何回も言ってんじゃないッスか!!　俺の座右の銘は『なるようになる』だから結果こうなっただけなんだって!!　俺は悪くねぇ!!」
「――穂次さん？」
「スイマセン！　俺が悪いかも知れないッス!!」
「穂次弱ェ……というか、なんかいつもよりも、その、あー、過激？　になってるけど」
「ソレな!!　俺の部屋で、俺のベッドで、俺が縛られてるってどういう事だよ!!　そういうプレイなら事前に教えとくのがマナーだろ！」
「まだそんな事が言える余裕がありますのね」
「ヒィッ!?　待って待って！　割りと真面目に待って!?　そんな、俺の腹の上に座るだなんて!!」

俺だって心の準備ぐらいさせてくれ!!　嫌がってる演技って言うのも疲れるんだぞ!!　うひゃぁ!!　もっとやってください!!
「あー……」
「どうしたの一夏?」
「いや、まあ、なんでもない」
「一夏ァ!!　グッジョブ!!」
「穂次さん?」
「くっ!　止めてくれェ!!　タダでさえ重いんだか――」
「何かいいまして?」
「スイマセン、失言でした!!　スイマセン!!」
「……ふん」
あぁ、拗ねたセシリアさんが可愛すぎるぞぉ。っても、ホントに腹筋の限界が来てるんですが……。あと下半身が真面目にエレクトしそうです……!!
いやいや、こういう時はアレだ、落ち着いて怖い事を思い浮かべればいいんだ。鬼が一匹、鬼が二匹、俺が死んだ……。
「まあ穂次の事はどうでも……よくは無かった。お前、なんでラウラ・ボーデヴィッヒとペアになってんだよ」

「……優勝する為に決まってんだろ……！　言わせんな恥ずかしい！」
「そうか……ん、どうした二人共、俺をそんな目で見て」
「……いや、なんでもないわ」
「知らなくてイイ事もありますわ」
「え？　ナニソレコワイ」
「というか、穂次。アンタは男としてのプライドとか無いの？」
「俺のプライドはとある人から貰った『ウスイ＝本』によってなくなりましたー!!」
「……すいませんでした」
「え？　セシリアさん、ココで真面目に謝られると俺は余計な悲壮感がですね」
「……？　あー、うん？」
「どうしたの？　一夏」
「……イヤ、ウンナンデモネーデスヨ」
「一夏。一応言っておこう。お前の想像しているウス異本ではない。むしろ、俺はソレをココに持ち込んでない」
「だよな……びっくりした」
「お二人で何を言ってますの？」
美少女には関係のない話だ。男以外、帰ってくれないか!!　いや、嘘です。潤いはほ

しいデス。
「ま、ボーデヴィッヒさんと一緒になって戦うって決めたのは数時間前だし……つーか、一時間近くも縛られてんのか……もう解いてもエエんやで……？」
「あれだけの言い争いをして？」
「そんなに凄かったのか？　噂にもなってるんだけど？」
「フツ、遂に俺のカッコよさに世の美少女達が気付いてしまったか……！」
「いや、受けが攻めになったとか……？　誘い受けとか？　よくわかんねーけど」
「……」
「穂次、アンタはもう泣いていいのよ……」
「いやいや、泣くなら壁じゃなくてクッションがいいから我慢するよ！」
「……」
「なあ穂次。すごい鈴が怒ってるんだけど？」
「ハッハッハッ、クッションに顔を埋めて泣きたいって言っただけなんだけ――」
「アンタら二人、ちょっと黙ってろ」
「あ、ハイ」
「なんで俺まで……」
「一夏だから仕方ないんだゼ☆」

怒り狂った、というよりは静かに、フツフツと怒りを煮出していた鈴音さんを危険と判断したのかセシリアさんが連れ出す。

結果的に残るのは一夏と俺だけになってしまった。

「はぁ……それで？　なんでアイツとペアになったんだ？」

「あー、まあ、織斑先生の御達しでな」

「……なんか、悪い」

「イイって事よ！　つーか、あの言い争いはドッチモドッチだったからなぁ。むしろ俺が織斑先生を貶めた感じになったし」

「そうなのか？　俺が来た時にはもう……いや、なんでもない」

「なあ、一夏。たぶん、俺ってその部分を覚えてないんだ。いや、覚えてるかもしれない……うっ、頭が」

「思い出さない方がイイ事もある」

「そうだな……まあ俺が織斑先生に対して、って訳じゃないけど評価を下げたような事を言ったから、その償い、つーか、なんだろ？　あの人の考えって俺だとわっかんねーんだよなぁ」

「俺にもわからねぇよ。というより、ソレを言うなら俺は穂次の考えもわかんねぇけど？」

「え？　マジで？　ふっ、貴様程度にはこの俺様の高尚で知的な考えなど理解出来んさッ!!」
「アーソウダナー」
「もう突っ込みなしはボーデヴィッヒさんだけで十分だから……。　まあ織斑先生の考えはわかんねーけど、何かと甘い、つーか面倒見はいい人だからなぁ」
「あー、確かに……」
「どうせアレだぜ。教え子だったボーデヴィッヒさんのペアが見つからない……夏野が居たな！　とか考えてるんだぜ！」
「ん？」
「もっと言えば教え子が可愛くて可愛くて仕方ないけど変にツンデレ、つーか、クール系のツンデレ入って素直になれないんだぜ!!　鬼の顔にも萌えって諺あったっけな……」
「なあ、穂次。それ以上は言うんじゃない。俺はわかったぞ、今までの流れを思い出すと、千冬姉がこの部屋に来るんだ、間違いない」
「ハッハッハッ！　そんな訳ねーだろｗｗｗｗ　あの鬼がココにとかｗｗｗｗ
　一夏、逃げるぞ。俺の拘束を外してくれ!!　早く!!」
「おうっ！」
　一夏が俺の腕を縛っているタオルに手を掛けた所で扉の音がなる。俺と一夏は顔を

見合わせ、停止した。
フラグかよ。
スマン、穂次……お前の犠牲は無駄にしないッ！
なんでお前だけ逃げる気なんですかね……。
アイコンタクトで会話を交わし、俺と一夏は静かに首を動かす。
そして安堵した。そこに居たのは金髪だった。同室のシャルル・デュノアだ。どうやらセシリアさん達が出て行ったのを知って戻ってきたらしい。
俺たちを見て、どうしてか驚いた様な顔をしたシャルルは数瞬して、持ち前の思考の早さからか表情をいつもよりも数倍爽やかな笑顔に変化させた。
「シャルル、千冬姉は廊下に――」
「ごゆっくり！」
「――は？」
扉は閉じられた。
俺と一夏はもう一度顔を見合わせ、お互いの状態を確認する。
一夏、俺の腕を縛っているタオルに触れている。
俺、ベッドに縛られている。
「アカン！　一夏ッ！　今すぐシャルルを止めるんだ!!」

「え？　なんでだよ。お前の拘束を解いた方が」
「いいから！　急げ!!　俺の拘束は最悪最後でいい。むしろ俺の腕が壊死してもいい!!　急いであの馬鹿野郎を止めるんだ！　お互い後悔しないようにッ!!」
「お、おう……」
俺の語勢に当てられたのか、一夏は慌てた様にシャルルを追いかけた。きっと一夏ならばスグに追いついて連れ戻してくれるだろう。
状況整理すると、一夏が俺を襲おうとしているように見えるなんて……流石に一夏には言えんよなぁ……。

サンドバックの殴り方

六月も最終週に入り、ＩＳ学園は学年別トーナメント一色に変化している。妙に先輩方がそわそわしていたり、その影響からか一年生諸君も同じように緊張をしている。

更衣室に備え付けられたモニターから見える観客席には大凡、俺にはさっぱりわからない人達が並んでいた。研究員に、企業のエージェント、どうやら政府の関係者まで来ているらしい。

らしい、とか、さっぱり、とか使ってる割には詳しいと思うけれど、ソレも全て隣に居るシャルルが俺と一夏に教えているからだ。教えてもらわなければ空の上の出来事として意に介す必要もなかったんだろうけど、スゲー緊張してきた。

「はへー……なんつーか、すげーですなぁ」

「というか、学年別トーナメントってだけであんなに緊張するモノなのか？」

「三年生にはスカウト、二年生には一年間の成果を見せるチャンスか、所属している所から人が来てたり」

「ふーん、ご苦労な事だ」

「当然ながら俺と一夏を見に来てる人もいる……つーか、半分以上はそうなんじゃね？」

「え？　なんでだよ」
「いい加減にお前は自分が有名人って理解しとけよ。あんまりこう言うのはイヤだけど、織斑千冬の血族ってだけでも見る価値はあるのに、ソレが第一男性ＩＳ操縦者だぞ」
「ソレを言うなら穂次もじゃないの？」
「ポッと出の俺なんて一夏の知名度に比べれば月とラバーカップみたいなモンだからなぁ……」
「ラバー？　ゴム製の丸いモノなんてあったっけ……？」
「穂次にあんな実用性はないだろ」
「ウッセー。美しさの比較だ」
「穂次、あんなに機能だけに特化した見た目のドコが美しくないって言うんだ!!」
「どうしてお前はそんな性格なのに、白式はあんな性能なんだよ。もっと機能増えても可笑しくないだろ……」
「俺が一番知りてぇよ!!」
「お、そうだな」
「？」
　首を傾げるシャルルを放置して男二人で落ち込む。どうして俺たちのＩＳはあんなに不器用なのだろうか。ツンデレな幼馴染だってきっともっと器用に……あー、出来て

ねぇな。
「あ、対戦表が発表されるみたい」
「どーせ、俺たちと一夏達が当たるのは決勝だろ？　それこそマンガみたいな事だろうけど、そこはきっと在り来たりダナ！」
「穂次――決勝まで負けるんじゃないぞ！」
「ああ！　俺たちの戦いは決勝で決めよう!!」
「あのー……スゴク言い辛いんだけどさ」
「ふっ、知っているぞシャルル。どうせ　優勝は僕達のモノだ、キリッ　とか言うんだろ。　だがしかァし！　ボーデヴィッヒさんという最強の手札を持った俺がそう簡単に――」
「……あー、穂次、画面画面」
「なんだよ、一夏まで――」
対戦表が表示されているモニターを見る。端っこから自分の名前を探して、見つける。どうやら一回戦らしい。ふむふむ、早く戦うのはイイ事だ。
でもどうして一夏とシャルルの名前が隣にあるんですかね……。
「……く、ククク！　アーッハッハッハッハッ！　そうかそうか！　どうやらオーディエンスは俺たちの戦いを先ず見たいらしいッ！　我慢の出来ない愚民共めッ!!」

「穂次、セリフと顔の悲壮感がマッチしてなさすぎて混乱するからやめろ」
「穂次、大丈夫だよ。ココで意地を張らなくてもいいんだよ」
「ふぇぇ……緊張でぽんぽんが痛いお……帰りたい。寝たい。現実逃避したい。つーか、無理。無理だって。ああ神様！　死ね!!」
「穂次が荒れてるなぁ……」
「壊れてるの間違いじゃない？」
「むしろ俺が壊れてない時はあったのだろうか……否、無い！」
「ああ、壊れてるな……直すのはどうしたらいいんだ」
「誰かのおっぱいを揉めば直る。すぐ直る。真面目な俺が参上するゼ!!」
「確か、ニホンではこういうとき、斜め上から力一杯叩けば直るんだっけ？」
「あー、昔の手法だな。でもやってみる価値はあるな！」
「ねぇよ!?　それで直るのは旧世代のテレビだけだよ！　つーか、何!?　暗にポンコツって言われてるのか!?」
「直接言ってほしかった？」
「いい笑顔しやがって……。一夏が前に優しいとか性格いいとか言ってたのは嘘だったんだ……」
「いや、イイ性格してるだろ」

「あ、皮肉だったのか、今理解したわ……お前も皮肉が言えたんだな」
「一夏？」
「落ち着くんだ、シャルル君。今俺たちが争うのはよくない。わかるな？」
「そうだね。じゃあ、覚えててね？」
「あ……」
「プーックスクス。シャルルに説教予定されてやーんのー！」
「当然穂次もだよ？」
「ふぇぇ……勝って有耶無耶にするからいいんだ」
「ははっ、じゃあ説教決定だね」
「そうだな。勝つのは俺たちだ」
「ハッハッハッ。何度も言ってるけど、負けるつもりは無い。シャルルはともかくとして一夏には負け……一夏になんて負けないんだからねッ!!」
「なんでお前は最後にちゃんと締めてくれないんだ……」
それは俺だからだ。と胸を張って見せればシャルルが噴き出して、そのまま空間は笑いに包まれる。
まあ本当に負けるつもりはない。コレは相方がボーデヴィッヒさんじゃなかったとしても言っているだろう。負けたくは無い。

「さ、ボーデヴィッヒ少佐。作戦会議を始めよう」
「お前は後ろで見てろ」
「ハイ作戦会議終了!!　いやいや、待とう。待つんだ、ボーデヴィッヒさん」
「なんだ？　お前がシャルル・デュノアでも抑えるのか？」
「あー、ボーデヴィッヒさんの中で既に相手は一夏なんだな」
「当然だ」
「……ま、いいけど。一応、ペアなんだから役割分担はしようぜ？」
「盾しか武装が無いお前に何の役割がある」
「マジでソレ。一応、殴る蹴るとかは出来るから、ある程度の足止めは出来る……と思う」
「そんな不確かな情報で何を信用しろと言う」
「あー……まあ、アレだ。一応、シャルルはなるべく抑える。逃げられるかも知れないけど、まあボーデヴィッヒさんが一夏を落とせるぐらいの時間は稼げる筈」

「……ふん、まあ期待しないでおこう」
「それがいいッスねぇ。まあドウニカナルデショ」
「……私はお前の様に弱い奴は嫌いだ」
「まあそうでしょうなぁ」
「努力もせずに、へらへら笑うだけで、周りに押し上げられている。気に食わん」
「そうでしょうなぁ。誰かの助けを借りなきゃ俺は弱いですからなぁ」
「やはり、気に食わんな。……助けを求め続けて何になる？　一人で立たねば意味もないだろう」
「そうだなぁ。まあ、ボーデヴィッヒさんはもう一人で立ててるんだろ？」
「当然だ」
「うーん……まあ弱い俺を頑張って優勝まで導いてくだせぇ」
なんとなく、織斑先生が俺をボーデヴィッヒさんに預けたのがわかった気がする。いや、罵られて嬉しいとかそういう理由ではなくて。
自己暗示する程度には彼女は弱いらしい。いや、実際の力量という意味では問題の欠片も無いだろう。
求めていない、一人で立っている。けれども彼女はきっと渇望している。だから、故に、彼女は求めていて、一人で立ち止まっている。

誰を、なんて知らないけれど、飢えている彼女の息抜きとしてサンドバックが選ばれたんだろう……まったくもって不運なサンドバックである。一体誰の事なんだ……（白目

オトコのユウジョー

「一回戦で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「そうだな。俺もお前達が負ける心配をしなくてよさそうだ」
「どうしてお二人さんはそんなに喧嘩腰なんですかね……」
「あはは……」
睨みあう織斑一夏とラウラ・ボーデヴィッヒ。その互いの後ろには夏野穂次とシャルル・デュノアがそれぞれ控えている。
肩を落として面倒そうに、けれども相変わらずヘラヘラと笑いを浮かべて状況を楽しんでいる夏野穂次に対してシャルル・デュノアは決して油断を抱かない。
既にアサルト・ライフルのセーフティは外れている。警戒はずっとしている。

「俺は穂次に勝てない？」
数分前、織斑一夏はシャルル・デュノアによって放たれた言葉を復唱してまるで信じ

られないと言った様に言葉を吐き出した。
　そもそも、この発言に至るまでに一夏とシャルルによる作戦会議が行なわれていた。そもそも一回戦で当たるつもりも無く、シャルルから言ってしまえば穂次の実力を鑑みてその評価を下すつもりであった。
　けれど結果を見れば一回戦。相手の実力を見るには時間が無い。
　一夏とシャルルが立てていた作戦は夏野穂次を早期撃破しラウラ・ボーデヴィッヒに集中するという事。もしも、その作戦をこの学園の誰かに聞いたならば、当然の作戦として受け入れていただろう。それほどに当たり前な作戦で、誰にでも思いつくような作戦であった。夏野穂次だって「うわっ……俺の実力なさすぎ……」なんて冗談めいて言った事だろう。
　けれど、しかしである。シャルル、いいやシャルロット・デュノアだけは知っている。彼の努力を知っていた。
「一夏と穂次が戦えば、一夏は負けないよ」
「負けないだけ、か……ホント、矛盾みたいな話だな」
「中国の故事だね。一夏達の場合は刀盾って言った方がいいかも知れないけど」
「そっか……穂次と戦っても勝てないのか……」
「納得できない？」

「いや、なんというか、ちょっと嬉しい」
「え……ああ！　そうだね！」
「友達、というか、ライバルみたいなモノだからな……」
「いいよね！　男の友情って!!」
「ああ！　当然シャルルもだぜ！　まあ、今戦ったら俺がボロ負けするんだろうけど……」

果たして織斑一夏は気付いていない。いいや、気付かない方がいいのだろう。彼とシャルルの間には決して理解出来ない壁があるのだけれど……まあ、気付かないのならば問題は無いだろう。

ともかくとして、一夏と穂次が戦えば負けもしないし勝ちもしないという戦闘が続いてしまい、残るのはシャルルとラウラの戦いになる。

そもそもシャルルがラウラに圧勝、もしくは勝てるという事実があったならばソレで問題などなかったのだけれど、ソレも無い。

結果的に変則的ではあるが、シャルル自身が穂次を抑え、隙を見てラウラへとアタック。というのが基本的な戦略として立てられた。

そこに一夏は否定を入れることはなかった。一夏だって自分の実力はわかっている。シャルルの方が上であり、更にそのシャルルが言うには自身と穂次は相性が最悪らし

い。

けれどもシャルルよりも実力が上であるラウラ相手ならば一夏とて多少は耐える事が出来るし、或いは一矢報いることも出来る。これも相性の問題である。

さりとて、時間は戻り、目の前に表示されたカウントが減っていく。

カウントがゼロになる前に穂次のＩＳ、村雨がアラートを煩く鳴らし、危険を操縦者に告げる。アラートの内容は相手からのロックオンをされたという内容だ。

穂次は展開され続けている盾を咄嗟に構えてゼロを表示された瞬間に放たれた銃弾を防ぐ。

「ヒッ、いきなり撃つなんておっそろしいなぁ」

「ゴメンね。穂次を落とさないとボーデヴィッヒさんの相手は辛いみたい」

「ま、そうだろなぁ……まあ、コッチの仕事も似たようなモノだし、良ければ傍観するってどうッスかね？」

「イイ案だね。じゃあ君はアッチで見てればいいよ」

「それはイイ案だけど、生憎銀髪の美少女のお仕事をこなさないと怒られるからな」

「嬉しいんでしょ？」

「言わせるなよ」

ヘラリと笑った穂次は踏み込んだ。拳を握り締め、宙を蹴り、シャルルへと接近を挑む。けれど、シャルルは容易く距離を開けてトリガーを絞る。放たれた弾丸は容易く盾で防がれてしまうが、それでいい。お互い、既に仕事を開始している。

『それじゃあ一夏』

『んじゃ、ボーデヴィッヒさん』

『『あとはよろしく』』

まったく別の声、別の人物、秘匿通信で入った言葉に一夏は笑い、ラウラは当然と言わんばかりに鼻を鳴らした。

「一応、宣言しといてやるよ。勝つのは、俺たちだ！」

「ぬかせ。勝つのは、私だ！」

黒と白の戦闘の幕が切って落とされた。

戦闘に置いて、シャルル・デュノアは一切の慢心も、油断もしていなかった。そもそも学園内で言われている穂次の印象というモノをシャルルは否定した。

基本的に穂次の印象というモノは馬鹿者、剽軽者、或いはお調子者、変態という印象だった。変態という所は流石にシャルルも同意するしかなかったけれど、他の印象に関しては信じることはなかった。

彼は努力を続けている。
彼は努力を知っている。
才能が無い、という事は彼自身の言葉であるから、きっと彼に才能なんて物はないのだろう。ソレを努力で補おうとしている事をシャルロット・デュノアだけは知っていた。
だからこそ努力しないお調子者であるセカンドはシャルロットの前にいない。いるのはヘラヘラと笑ってはいるけれど、努力に裏付けされた実力と自信を持つ夏野穂次だけが、彼女の前に居た。
対して穂次はと言えばかなり困惑していた。
当初の予定では一夏とシャルルの相手を同時にして「ぐわーやられたー」なんて言う簡単なお仕事な筈だったのに、気が付けば超警戒しているシャルル君が目の前にいるのだ。穂次の目の前は真っ暗になった。心の中では倒れた穂次を抱き上げている穂次が必死に「ジョーイさん！　ジョーイさんはいませんかー!!」と叫んでいる。当然、ソレが外に出て行くことはない。
互いにそんな思考をしながらも、攻めあぐねているシャルルとそもそも攻める気もない穂次。穂次にしてみればアサルト・ライフルからショットガン、更に頑張って接近してもナイフで応戦されて離れられるというシャルルの技量に舌を巻くばかりである。

コレが公式戦でもなければ「スゲースゲー!!」とテンションをあげてシャルルを賞賛した事だろう。

シャルルにしてみれば目算よりも随分と激しくない戦いである、といったところである。確かに攻撃の幾つかに驚くような攻撃はある。けれどもその全ては蹴りや拳といった格闘メインであり、中距離を主としているシャルルにとって恐れるに値しない攻撃といってもよかった。

そもそも、穂次の空中移動がシャルルにとっては異常の一言であった。シャルル……いいや、ＩＳをそれなりに動かせる者達にしても穂次の動きは異端であるといえた。ソレが特に優れているという訳ではない。むしろ欠点だらけ。

空を飛べるＩＳ。ＰＩＣにより慣性は消され、バーニアによる推進を得れば空を自由に飛ぶ事が出来る。

けれど穂次の場合、穂次のＩＳ、村雨の場合は飛べる、ではなくて跳べる。

宙にまるで地面でもあるかの様に踏み込み、足裏に付随されているバーニアが噴き出して推進を得る。そうしてようやく飛行できる。いいや、跳んでいる、と言った方が正しいのだろう。

踏み込む事によって人間の筋力、力の動きは脚を伝わり上半身へと向かう。けれどそれは人間単位の話であり、今二人の彼とその他彼女達が操縦しているＩＳに置いては

まったく意味のなさない話だ。

利点などない移動方法。攻撃手段の少なさ。そしてその拙さ。全てを以ってして、ようやくシャルルは穂次に評価を下す。

弱い。けれども倒そうとすれば時間が掛かるだろう。だがしかし、それだけだ。倒す事を考えなければ……それこそ、一夏へのフォローを考えたならば。

頭の中で様々な思考が巡り、シャルロット、いいやシャルル・デュノアは決断した。決断してみれば後は早かった。そもそもシャルルには時間など無い。あと一分も経たない内に一夏は落ちてしまうことは明らかだった。対してシャルルも穂次もどちらもエネルギーはそれほど減っていない。むしろ穂次などシールドで防いでいるからなのかエネルギーの減りなど無いようだ。

ボーデヴィッヒさんを落とす為にアレは必須だから……。使える武装は少ない……でもいける。

果たしてそれは自分の実力からの自信なのか、それとも対戦相手である変態の弱さからの結論なのか。きっとどちらもなのだろう。

シャルルはグレネードを取り出して宙へと放り投げた。穂次は一瞬だけキョトンとした。それもそうだ、そのグレネードのピンが外れていなかったからだ。

ミス？　いいやありえない。少なくとも自分が仕出かしそうなミスをシャルルがす

る訳が無い。

一瞬の思考の後、咄嗟に、踏み出してしまった穂次。ミスではない、コレは罠である。そう断じたにも関わらず、穂次は踏み出した。踏み出してしまった。

その踏み込み動作に合わせる様にシャルルの腕が上がる。持っているのはアサルト・ライフル。

「ちょっ、ま」

「ごめんね」

踏み込んだことによってグレネードに近付くしかない穂次の顔が驚きと悲壮に包まれる。何か言っていた様な気がするが、シャルルは聞かないフリをした。

アサルトライフルから吐き出された弾丸は螺旋回転の軌跡を残しながら宙を走り、グレネードへと命中した。

瞬間、轟音。黒々とした煙が穂次を包み、けれども穂次の視界は真っ白に染まった。

さて、流石にアレで穂次を落としたとは思ってはいないシャルル。あの爆炎の中に一斉掃射というのも思考に過ぎったが、そんな事をしている暇もない。身体を翻すように泳がせて一夏の元へと移動した。

「……ふん。やはりセカンドはその程度か」

「穂次はよくやってたと思うよ」

「さ、これで二対一だぜ」
「ふん……元々アレは数に含んでない」
　ラウラにしてみれば本当に穂次に期待などしていなかった。している訳が無い。アレは何の実力も持っていないのだ。
　実力も無いくせに、へらへら笑い、挙句の果てには馬鹿にしても何も言い返せない。そんな男に何も期待などする必要は無い。
　だからこそ、ラウラにとっての本番は今からになる。意識を入れ替える訳ではない。なんせラウラ・ボーデヴィッヒにとって戦闘とはそういうモノなのだ。
「行くぞ、シャルル！」
「うんッ！」
　シャルルの射撃に合わせて一夏が動き出す。極光を纏った剣を構えての突進。シャルルの射撃はレールカノンの砲身へと当たり、射線をズラした。
　ラウラは思わず舌打ちをした。一夏一人ならば容易かった。シャルル一人でも恐らく対処は出来ただろう。けれども二人になれば、面倒極まりない。
「無駄な、事をッ！」
　ラウラの手が上がり一夏へと向けられる。瞬間、一夏の動きが静止した。まるで網にでも引っ掛かった様に。ＰＩＣ、能動的に相手の慣性を消せる機能であり、相応に集中

力を必要とする武装。もしも一対一ならば、コレで勝負が決まっていた。けれどもコレは――

「――俺たちはふたり組なんだぜ？」

「ッ!?」

コレはタッグマッチなのだ。

ラウラの横へと回り込んだシャルルによるショットガンの射撃。一撃、二撃、ワンマガジンを撃ちつくすようにトリガーを絞る。放たれた弾丸は複数に散りラウラへと当たる。当たりはしたが、ダメージとしては随分とお粗末だ。弾丸の集束率からして、精々つぶてが当たった程度かもしれない。けれど、それだけで良かった。

ラウラの集中を切らすだけでよかったのだ。

「くっ……！」

「これで、終わりだッ!!」

極光。白い剣が掲げ上げられ、その斬撃は絶対必中であっただろう。そして一撃必殺になったであろう。

突如降って来た黄色いＩＳに阻まれなければ、の話であったが。

「ッ！　穂次ぃ!!」

「ハハッ。お前が言ったんだぜ？　俺たちも二人組なんだぜ!!」

必殺の剣が盾に阻まれる。どれほど出力を上げたとしてもその盾が破られることなどない。なんせこの盾は高出力のエネルギーを防ぐ為の盾なのだから。

穂次の登場を一番驚いてしまったのはラウラであった。頭の中が混乱する。どうしてコレは自分を助けたのだろうか。馬鹿なのだろうか。馬鹿だった。

いいや、ともかくとして、混乱は瞬時に解けた。けれど、それも遅かった。

「だから、僕達は穂次をずっと警戒してたんだよッ！」

ラウラは一夏に意識が行き、穂次は一撃必殺の刃を抑えている。

ずっと一夏とシャルルは二対二の戦闘で考えていた。だからこそ、穂次という盾が邪魔でしかなかった。何をするにしても穂次の盾が邪魔だった。

だからこそ、その穂次を止める為の手段を相談した。それも、もしも穂次が強ければ、という前提条件で話合った。

どうすれば穂次を止めれるのか。答えなど簡単だった。必殺の刃は穂次にしか止める事は出来ないだろう。そう直感したのは一夏だった。

それは織斑一夏としての直感ではない。

穂次と友人である一夏だからこそ。

穂次をライバルと言える一夏だからこそ!!

瞬時加速でラウラへと接近を果たしたシャルル。そのシャルルの腕にはリボルバー

と杭が融合を果たした武器が露出している。六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》。

「『盾殺し（シールド・ピアース）』……ッ!?」

「え？」

ラウラの驚きの声と共に漏れ出した通称に穂次の背筋が凍る。通称が彼をぶち抜く為だけのモノだったのから仕方が無いといえばそうだろう。

突き出された拳はラウラの腹部を捉え、同時にパイルバンカー内部の火薬が炸裂する。

火薬の爆破による推進を得て、撃音を響かせ杭がラウラへと打ち込まれる。

「ぐぅぅぅ！」

ＩＳのエネルギーシールドで相殺しきれなかった衝撃がラウラを貫く。その一撃で終わったのならば一夏達は負けていただろう。

《灰色の鱗殻》のリボルバー部分が回転する。同時にそれは次弾の装填が完了した事を意味した。

撃音。またリボルバーが回転し、撃音が響いた。

続けざまの三撃により、ラウラのＩＳに紫電が走り、ＩＳ強制解除の兆候が見えた。

そして、異変は起きた。

息吹をあげろ

負けたくなかった。
いいや、それはきっと正しくない。
強くなりたかった。
いいや、それもきっと正しくはない。
ラウラ・ボーデヴィッヒは暗闇の中で問答する。誰に問う訳でもない。誰が答えられる訳でもない。
ただただ問答を繰り返す。
織斑千冬。憧れ。尊敬。自分の中に存在している全ての感謝を与えられる存在。そんな彼女がドコか照れくさそうに語った弟、織斑一夏。
だからこそ、ソレが堪らなく許せなかった。
コレは嫉妬ではない。いいや、そんな感情、ラウラ・ボーデヴィッヒは持ち合わせていない。
憧れの織斑千冬が、あの人が優しい表情をして誰かを語るなど、ありえてはいけない。
強く、凛々しく、自信に満ちた彼女に憧れていた。だからこそ許せない。織斑一夏が

許せない。
織斑千冬は孤高であるべきだ。
だからこそ、織斑一夏など必要ではない。
完膚なきまで叩きのめせば、きっとあの人は私を選んでくれる。私を認めてくれる。
私を――、私を――。

ラウラを認めてくれる。
ラウラの脳内で、ガチリ、と歯車が噛み合う。何かが声を掛けてくる。
力が欲しいか？　と何度も問いかけてくる。
煩い。ただただ煩いだけの声だった。既に答えは出ているのだ、既に歯車は回り始めたのだ。
だからこそ、
――黙って力を寄越せ。アレを完膚なきまで潰せるだけの、あの人に認められるだけの、あの人の隣にいれるだけの力を、私に、寄越せ!!
ラウラは渇望した。ソレは不純な動機だったかも知れない。けれどソレは純粋な願いだった。ソレは至極真っ当な望みだった。ソレは屈折しきった感情だった。
だからこそ、声を掛けた何かは、相棒の願いをただ叶える為だけに、そのシステムへ

と身を投じた。

◆

「アアアアッ!!!」
「うわっ!?」
「くっ……!?」
ラウラ・ボーデヴィッヒが身を裂かんばかりの叫びを上げ、シュヴァルツェア・レーゲンから電撃が迸る。
近くに居たシャルル・デュノアはしっかりと回避したにも関わらず、夏野穂次はその背中にしっかりと電撃を浴びて驚きの声を上げて距離を置いた。
「なになに？　アレ。つーか、え？　囮とか言われてたけど全体攻撃出来るとか聞いてないんですけど……」
「いや、アレは違うだろ」
あからさまにキョドっている穂次を否定する様に一夏の視線はラウラに集中してい

る。

　ドロリと、装甲が溶けている。ラウラの顔すらも隠す様に、肌の露出すらも許さないように、ＩＳが変形していく。

「うげぇ……つーか、一夏が呪われてるんじゃね？」

「なんでだよ」

「前のクラス対抗とか。女に恨まれることでもしたの？　お前」

「してねぇよ！」

「ふーん……え？」

「なんで信用してないんだよ」

　事態が飲み込めないからと言って談笑をしている男二人は放置する。現実逃避もいい所である。

　ドロリと溶けたＩＳはその装甲を流動的に波打たせ、ゆっくりと形を形成していく。

　最小限の腕と脚の装甲。フルフェイスの装甲。目の部分に怪しく赤い光が灯っている。何度か明滅したソレがようやく安定して鈍く光る。

「雪片……」

　一夏の声に穂次は反応しなかった。ただ細められた瞳がそのＩＳを見つめ、その一挙手一投足の全てを把握しようとしていた。

手に持った刀を一度振るったラウラだったモノはまるで息を吐き出したように肩を一度下げた。

瞬間、穂次は横に押し出されていた。

「はっ？」

雪片弐型と黒い雪片がかち合い激しく金属音を響かせた。歯を食いしばって攻撃を防いだ一夏はラウラだったモノの行動と同時に遥か後方へと飛びのいた。

一夏の居た場所に斬撃が走る。あの一太刀を浴びていたならば、織斑一夏は真っ二つになっていただろう。そう予想するに容易い一撃であった。

穂次は眉間に皺を寄せて飛び退いた一夏へと近付く。白式は白い粒子へと戻っている事から先ほどの強制撤退で力を使い果たしたのであろう。

「おいおい、なんだよ、アレ。おっかねぇな」

「……千冬姉だ」

「は？　おいおい、よく見ろよ。ボーデヴィッヒさんはそんなにおっぱいねぇだろ」

「違う！　アレは、アレがッ!!」

怒りを顕わにして拳を握り締めた織斑一夏が一歩を踏み出す。その二歩目は地に着く事もなく、空を切った。

「はい待った。お前って自殺志願でもあったの？」

「うっせぇ！　止めるな!!」
「ヒェッ……」
「離せ！　あいつ、ふざけやがって!!　ぶっ飛ばしてやる!!」
「えぇ……お前が織斑先生ぐらい強靭無敵最強だったら離したけど」
「邪魔すんな！」
「……はぁ。しゃーねぇっすな」
穂次は一夏を持った手を離し、地面へと一夏を下ろす。溜め息を吐き出してからＩＳを解除した穂次は駆け出そうとしている一夏の肩を掴んで振り向かせる。
「ふんっ！」
「がっ」
そして力の限りの拳を一夏の頬へと叩き込んだ。
力の限りではあったが、一夏がギャグ漫画みたいに吹き飛ぶこともなく、多少身体をよろめかすだけで終わり、一夏の怒りが穂次へと向く。
「何しやがる!!」
「何って、人助けだよ。コノヤロウ」
「俺はアレを止めるんだよ！　邪魔するならお前も――」
「へいへい。んじゃまぁ、状況教えろって。ホモのお前でもそのくらいは出来るだろ？」

「ホモじゃねぇよ!?」
「うっせぇホモ。やーい、ホモ！」
「コノヤロウ」
「お、やんのか？　俺はお前と違ってＩＳがあるんだぞ!!」
「卑怯だぞ！」
「アッハッハッ！　お前は手も足も出ないだろう！」
「くっ……」
「……んじゃ、まあその手も足も出ない状態でアレに攻撃挑もうとした織斑君、馬鹿なの？」
「うぐっ……悪い」
「俺も殴ってるし。つーか、出来るならもう一発殴りたい。気分的に」
「ソレはイヤだ」
「チッ」
「それで、ソッチの話は終わったかな？」
「シャルル。大丈夫か？」
「まあ、足止めの相手が弱かったお陰であんまりエネルギーを使ってないからね」
「ヒッ……いきなり毒舌すぎやしませんかね……」

ニッコリと笑って毒を吐き出したシャルル・デュノアに怯えるように声を出した穂次。

さて、と声を出したのは誰だったのだろうか。三人は同時にアリーナの中心にいるソレに視線を集めた。

『非常事態発令！　トーナメントの全試合は中止！　状況をレベルDと認定――』

「うへぇ、マジか……」

「どうした？」

「レベルDって事は鎮圧に先生らが狩り出されるってこと、ついでに言えば生徒達にも避難勧告が出されてるだろうな」

「というか、穂次はそんな事も覚えてんのかよ」

「先生達に叩き込まれたんだよ……ほら、手伝わされたりするし」

「エグイなぁ」

「嬉々として覚えさせたのはお前の姉なんだよなぁ……」

「あ……」

「……んじゃまあ俺らも撤退するか。後は先生方に――」

「なあ、穂次。――」

「……ハイハイ。どーせ許せないとか言ってアレを止めるんだろ。まったく、何なのか

ねー。織斑って人使いが荒い血族なのか？」
「ありがとよ」
「へいへい。つーか、お前エネルギーないじゃん。無理だな！　はい、撤収！」
「――エネルギーがあればいいんだね？」
　そう声を上げたのはシャルルであった。そのシャルルに向かって至極嫌そうな顔をしてしまった穂次。誰が楽しくてあんな恐ろしい動きのＩＳを止めないといけないのだろうか、というのが穂次の気持ちである。
　そんな事を知るはずもないシャルルはニッコリと笑顔のまま言葉を続ける。
「リヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを渡せると思う」
「本当か！」
「うん、やってみるよ！」
「ホント、俺と一夏のやりとりを見て輝かしい目をしてた奴とは思えない有能さ」
「穂次、何か言った？」
「いえいえ、何も。シャルルは優秀って話だよ」
「ふーん。覚えていてね？」
「ひっ……聞こえてるじゃないッスか……。つーか、一夏。大丈夫なのか？　分の悪い賭けは嫌いだぞ」

「問題ねぇよ。俺は勝つ。男に二言はない」
「んじゃ、負けたら何かしろよ」
「げっ……」
「！　負けたら穂次が女装して登校しよう！」
「ふぁっ!?」
「それでいいな!!」
「待てぃ！　どうして俺が巻き込まれてんだよ!?」
「いいじゃないか。一夏も穂次も負けないんでしょ？」
「ぐぬぬ……。んじゃ、俺らが勝ったらシャルルは女の格好で登校しろよ」
「え？」
「よし、決定。一夏、終わったか？」
「……あぁ」
　右手だけに装甲を出現させた一夏。その手にはしっかりと雪片弐型が握られている。
ソレを見た穂次はやや眉間を寄せたけれど、まあ、仕方ないといわんばかりに溜め息を吐き出した。
　二人は隣合わせで立ち、前にいるＩＳを見つめる。
「んじゃ、一回だけ隙を作るから」

「おいおい、アレでも一応千冬姉だぞ？」
「腹が痛いって言ってどこかに行ってもいいなら帰るけど？」
「お前ならできる!!」
「手首にモーターでも仕込んでるのかよ……」
「というか、本当に大丈夫なのか？」
「ふっ、安心しろ。俺は故郷に恋人を残してるんだ」
「お、おう」
「この戦闘が終わったら俺、結婚するんだ。将来は海岸の見える白い家を買って大型犬と一緒に」
「穂次……お前、死ぬのか……」
「ま、ほぼ生身のお前をエスコートできるぐらいの働きはしてやるさ」
穂次は緩やかに盾が付いている左腕を上げる。隣に居た一夏はソレを横目で見て同じ様に雪片を握り締める右腕を上げた。
「つー事で、締めは任せるぜ、相棒」
「ああ、任せろ、相棒」
ゴツンと金属の拳がぶつかり合った。
穂次が一歩目を踏み出す。その一歩こそ村雨の特異点であり、同時に唯一加速が可能

な方法だ。そしてその加速は瞬時加速に引けをとらない。
瞬間的に景色が動く中、穂次の心は驚く程に落ち着いていた。迷いはない。恐れもない。
戦術が湧き出る訳ではない。夏野穂次は天才ではない。
戦略を編み出せる訳でもない。夏野穂次に才能はない。
圧倒できる力を得れる訳でもない。夏野穂次は秀才ではない。
だからこそ、夏野穂次はその瞼をゆっくりと降ろした。
戦乙女は接近してきた黄色い騎士に反応し、刀を振るった。絶死の一撃であるその剣は容易く騎士の盾に防がれる。
戦乙女は黄色い騎士を視界に入れた。ソレはヘラヘラと笑うこともなく、瞼を下ろした騎士であった。
盾で剣を防いだ騎士は戦乙女に蹴りを放つ。鋭い蹴りが空気を裂きながら戦乙女の顔スレスレを通り過ぎる。
戦乙女が回避と同時に振るった一太刀は騎士に当たらず寸で回避され、二撃目は盾で防がれる。
戦乙女はシステムに含まれていない舌打ちがしたくなる。果たしてトレースした本人であったならば盛大に舌打ちをしたであろう。

まるで、コチラの攻撃が読まれている。
そんな訳が無い。ある筈ない。
世界最強を謳ったブリュンヒルデと同等であるべき戦乙女の攻撃を全て初見で見切れる訳はない。ならばどうしてコレはコチラの攻撃を全て防ぎきっている。
ＩＳに記録されていた先ほどの彼の力量ではない。少なからず、現在目の前でブリュンヒルデに肉薄しているコレを先ほどまでの力量だとは言えない。
ならば、なればこそ。相手の力量を設定しなおせばいい。全てをもってして打倒すべき相手だ。
戦乙女が正眼に、真正面に刀を構え直す。対して騎士はダラリと脱力している。
全てを両断する剣がある。戦乙女は空を駆ける。騎士の左腰を、左腕に付随されている盾ごと両断すべく、攻撃を仕掛ける。
一閃。戦乙女の右から空を滑るように裂き切り、刀は騎士の盾へとぶつかる。

ぶつかり――――静止した。
瞬間、盾が黒々とした粒子を撒き散らす。まるで溜め込んだ何かを吐き出す様に、その息吹をあげた。
盾の上部から何かが飛び出す。戦乙女はソレに視線をズラす。ソレは――棒であっ

た。

長方形型の棒がクルクルと回転する。二尺程度の棒。片方の端には菱形の穴が空いているだけの、棒。

騎士はその棒を掴み、自身の左腰に貯めを作る。

「――隠し剣」

夏野穂次はようやく瞼を上げて息を吐き出す様に、言葉を吐き出していく。

一言目を吐き出せば、右手に持った柄から黒い刃が映える。ソレは暴力的なまでのエネルギーを秘めているのか刃の端々から黒い粒子を舞わせ、正しく形を保つことが出来ない様に不安定な刃を吐き出し続けている。

「鬼の爪ェ!!」

穂次の絶叫と共に刃がかち上げられる。決して身体を狙った訳でない。確実に回避できない、少なからず相手の攻撃の手段を奪えるであろう箇所。

黒い粒子を軌跡に残し、鬼の爪は戦乙女の右腕を通過した。避ける様に身を引いた戦乙女、けれどもソレでは遅すぎる。軌跡の先に残っている刀までは逃げ切れなかった。

黒い奔流剣は刀に当たり、弾き飛ばした。

撃破までに至らない。戦乙女は瞬時に判断し、刀を手に取る方法を思案した。けれども、それは要らぬ苦労だった。

「何度でも言ってやるよ。コレは、俺たちは――」
「ふたり組みなんだぜ!!」
穂次の背後から出てきた白い極光。それこそが真の両断の刀。全てを両断する為だけの、ラウラの憧れた一太刀だった。
真っ二つに割れた黒いＩＳの中から眼帯で隠されていた金色の瞳を顕わにしたラウラ・ボーデヴィッヒが一夏を見つめる。ソレは一瞬だけの、ラウラ・ボーデヴィッヒが気絶するまでの一秒もない間だったかもしれない。けれど、確かにその瞳は織斑一夏を捉えていた。
酷く弱った瞳は緩やかに閉じられて、一夏が倒れそうになったラウラを抱きとめる。
「……ぶん殴るのは止めにしといてやるよ」
「つーか、なんでお前って自然に抱きとめてんの？　ロリコン？　ホモでロリコンとかもうわっかんねぇな」
「穂次、もうちょっと空気読め」
「イヤだね!!　コッチは武装使った事の始末書とか色々あるんだからちょっとぐらいいい思いしたい！　アア!!　女の子をクンクンしたいよぉぉおお!!　おっぱいサワサワしたいのぉぉおお!!」
「お前には絶対に渡せないってわかった。というか、穂次。ソレなんだよ」

「クックックッ、知りたいかね。ああ、そうだろう知りたいだろう!!」
「いや、別にいいや」
「イケズゥ。もっとノリよく行こうぜー」
「どうせセシリア達に詰め寄られるんだからその時に一緒に聞くわ」
「……おぅ……」
先に起こるであろう未来を想像して夏野穂次の顔はドンヨリと暗くなった。そんな顔を見て一夏は苦笑をする。
空は驚く程に快晴であった。

まじょさいばん

学年別トーナメントは実に悲惨な結果に終わった。一回戦を終えることもなく、中止になった。

「イヤー、オリムライチカは強敵でしたね」

「ふーん」

「なあ、頼むからもっと普通に反応してくれよぉ！　こうやって椅子に縛られてる俺を見てもっと反応してくれよぉ!!」

「さあ、キリキリ吐いてもらいますわよ？」

「穂次は僕との戦闘時は手を抜いていたのかな？　アハハ」

「ヒッ……お二人様、その笑顔が恐ろしいデスヨ！　助けて一夏！」

「鈴にパス」

「じゃあ箒よろしく」

「吐け」

「ひぇッ……俺に、俺に味方はいないんですか!?」

「アンタの味方は今保健室よ」

「あ……」

　ドコから持って来たのかしっかりと編みこまれた縄に胴体を腕ごと巻き込んで縛られている俺。丁寧なことにしっかりと手首で腕同士も縛られている。もしも俺が忍者であってもコレは逃げれないだろう。つーか、小市民的にはセシリアさんが縄を持ってきた時にちょっとだけ期待したんだぞ!!　そういうプレイかと思ったわ!!

「つーか、なんで縛られてんのさー。ここまで縛られるのって久しぶりなんですけどー」

「むしろ前に縛られたことがある事がドン引きなんだけど……」

「クックックッ！　政府のヤツらがこの俺様を恐れてしまってなッ!!」

「あ、そう」

「ふぇぇ、もっと構ってよぉ！　鈴音さぁぁぁん!!」

「うっさい。変態」

「縛られてるのは本意じゃねぇんですけどー。むしろ俺を縛った人達の方がそう呼ばれて然るべきなんじゃないッスかねー!!」

「現行犯なら何をしてもいいんだよ?」

「魔女裁判もビックリな理論を突然言わないでくれますかね!?　流石に現行犯逮捕でもコッチの人権とかあるんだぞ!!　俺に人権はありますか?」

「ないだろ」

「ないわ」
「あるわけがないだろう」
「ひぇっ……」
「さあ、穂次さん。さっさと色々教えてくださいますか？」
「……いやぁ、セシリアさんにソコまで求められると男冥利に尽きるといいますか、照れると言いま――」
「穂次さん費やす時間はあまりありませんので」
「あ、ハイ、ゴメンナサイ」
　果たしてこれ以上引っ張ると実力行使という名のソレに行き着くのだろうか。セシリアさん相手に俺が勝つ事が出来るのだろうか。無理だ。開始五秒以内で消し炭にされる。
　というか、ロープのチクチクが肌に当たって痛いんですけど。もっと受け手の事を考えてほしい。いや、コレも新しいプレイなのだろう。そうなんですね！
「穂次さん？」
「何も考えてませんよー。やだなぁー。俺は常におっぱいの事しか頭にありません!!」
「……」
「うへぇ。女性陣の視線が痛いよォ！　つーか、俺が答えれることなんてないッスよぉ」

「武装は盾だけではなかったんですの？」
「盾だけだよぉ。俺は悪い変態じゃないよぉぷるぷる」
「ねぇ、穂次。一発だけ殴ってもいい？」
「ふぇぇ……貧乳じゃなかったら二つ返事だったよぉ」
「殴るわ」
「待て鈴、落ち着け」
「離しなさい一夏！　アタシはアレを精一杯殴るのよ!!」
「やーい！　やーい！　ホモに止められてやんのー!!」
「全部話し終わったら四発ぐらい殴っていいから」
「……そうね。我慢するわ」
「俺の安全保障とかってないんですかね……リアルサンドバックは怖いんですけど」
「安心しなさい。ちゃんと見えないようにお腹を殴ってあげるから」
　いい笑顔で恐ろしいことを吐いてるぞ、あの貧乳め。つーか、発想が苛めっ子のソレなんですが……。
　未来の予定が一つ決まって胃の内容を思い出している俺の目の前に可愛らしい顔がドアップで見えた。その顔は少しだけムッとしていて、やっぱりイイ匂いがした。
「穂次さん？　わたくしの質問はちゃんと答えて下さいまし」

「へ、へい！　つーか、近いッス！　綺麗な顔が近くて俺の心臓がドクドク言ってっから！」
「へ、きゃぁ！」
「ふべっ」
乾いた音が響き、俺の頬に何かが炸裂した。目の前に居たセシリアさんが手を振りぬいて、更にはしまったという顔をしている。
「え、あ、申し訳ありません！　その、今のは――」
「もっと！　もっと叩いていいんですよ!!　グエッヘッヘッヘヘ」
「……」
「おぉおう……マジで汚物でも見てるような目になってる」
「セシリアも悪いけど、基本的には穂次も悪い」
「ソレを一夏が言うのもだいぶ問題だと思うんだけど？」
「え？」
「それで、えっと、隠し剣『鬼の爪』だっけ？」
「ああ、アレのことか。クックックッ、良くぞ聞いてくれました！」
「どうせ禁則事項とか言うんだろ」
「ネタバレいくない！」

「話すつもりはありませんのね……」
「待って待って、ちゃんと説明するから。　そもそも村雨のシールドって特殊兵装なんだよ」
「……そういえば、以前もそんな事を言ってましたね」
「そうそう。セシリアさんを助けた時ね。　シールドの機構の詳細は説明出来ないけど」
「まあソレは機密だろうし」
「いや、俺が馬鹿だからさっぱりわからん！」
「穂次だもんな」
「どうしてソレで納得するんですかね……まあ、いいんだけど」
「それで？　あの盾は何なのよ」
「ビックリドッキリギミックシールドだな！」
「……」
「ヒッ……真面目に説明するよぉ……」
　そろそろふざけ過ぎたのか篠ノ之さんの額に四つ角が浮かんでいる気がする。本当に恐ろしい。具体的に言えば織斑先生半分ぐらい怖い。ギリギリ人のラインかもしれない。

「あのシールドは――衝撃を全部エネルギーに変換して貯蓄してるんだよ」
「は？」
「もっと正確に言うと、エネルギー物を吸収して村雨のエネルギーとして溜め込んでる」
「ちょっと待ちなさい。という事は、アンタに攻撃すればするだけ」
「シールドで防げば全部俺のエネルギーだッ！」
実際はもう少しややこしい制約もある。エネルギーの吸収量だとか、還元率だとか……。そもそもセシリアさんを守る時に盾が使えなかったのは貯蓄量的な問題とかもあった。いや、大半が俺の力量不足だろう。そんな理由は隠しておこう。
「まあ、理論上では負けない機体ってのが村雨だなー」
「理論上？　エネルギーが尽きなきゃ負けないだろ」
「無理無理。もう一回言うけど、盾で防がなきゃエネルギーも回復しないし、俺のお粗末な機体制御だったら後ろ取られて即オチ2コマだな！　相手には勝てなかったヨ！」
「おいやめろ」
「一夏が反応した……だと!?」
「お前は俺のことをホモか何かだと……思ってたなコノ野郎」
「というより、あのＩＳを相手出来てた穂次だったら簡単じゃないの？」
「あー、まあアレはほら。うん。俺に封印された邪龍とかが」

「はいはい、嘘はいいから」
「ひぃ、鈴音さんがノッてもくれないよぉ」
「……僕との戦いでは手を抜いてたって事だね？」
「それは断じて違うぞ。俺はずっと本気だった。つーか、シャルルってスゲーわ。こっちの攻撃全然あたんねーし、スグに距離取られるし、近付いたと思ったら簡単に捌かれるし。いやー、勝てる気しないッスなぁ」
「お世辞で逃げれると思ってるの？」
「ヒェッ……まぁ本当に俺の実力はアッチなんだよー。ボーデヴィッヒさん(仮)を相手に出来たのは――」
「出来たのは？」
「……村雨のお陰かな」
「所詮は性能か」
「アッハッハッ、そゆことー」
どこか納得をしてなさそうなセシリアさんと鈴音さん。篠ノ之さんは興味を無くしたのか、それとも別の何かを考えているのか、アゴに手を当てている。おっぱいが腕で寄せられてて最高だと思う。思わない？
へらへら笑って周りを見れば一人だけ俺のことをジィーっと見ているシャルルがい

た。そんなに見つめると、穴が空いちゃうぞ！」
「ん？　どうしたのさ」
「ふふ、別にー」
「ソレよりさ、この縄を解いてもらえないツスかね？　事後処理とかでピリピリしてる鬼に見つかったら死ぬかも知れな――」
「ほう、随分といい格好だな、夏野穂次」
「ヤツベー!!　チョー美人な織斑先生じゃないツスかー!!　カッケー！　スゲー！」
「コレを持って行くぞ」
「あ、ハイ」
「俺の許可は!?　ねぇ!!　俺の許可は!?」
「待って下さい織斑先生！」
「なんだ凰」
「さっすが鈴音さん！　助けて！　今背凭れ持たれて連れ去られそうな俺を助けて!!」
「穂次を一発、いや、七発ぐらい殴ってからでいいですか？」
「あっるぇ!?　殴られるのはいいけど何か増えてないですかね!?　つーか、止めるのはいいけど他にあっただろ！」
「……明日にしろ。生憎コレに振れる仕事が結構残ってる」

「わかりました」
「俺に振れるって事は山田先生でも対処出来るじゃないッスかヤダー!!　つーか、俺が殴られることは確定なんスかね!?」
「当然でしょ」
「アッハイ……」
「もういいな。持って行くぞ」
「あ、完全に荷物扱い、っていうか引き摺らないで!?　ケツが！　段差でケツが死んじゃう!?」
「そうか」
「そうですよ!!　くっそ、誰か！　誰か鬼語に翻訳して下さい!!」
　俺が先ほどまでいた部屋の扉は無情にも閉じられた。誰も俺を助けてくれない！
ちくしょうめ!!

「……さて、阿呆。お前も治療せねばならんだろう」
「いやん。俺は何も問題ねーッスよー」
「阿呆。全身の筋肉をあれほど酷使して何を言うか」
「あっはっはっ。お陰で痛いのなんのって」

「何の準備もなく閉じるからだ」
「そうッスねぇ。でもそうしないとアレは対処出来なかったでしょー」
「……それで、過去の私と戦ってどうだった？」
「あー、やっぱアレってブリュンヒルデだったんスか？」
「……さぁ、どうだったかな」
「ソウデスヨネー。　まあ、アレですなぁ。何処かの鬼の特訓のお陰で対処は出来た、って感じです」
「ふんっ。幾ら物覚えが悪くても身体に叩き込めば問題なかったか」
「いやー、明らかにトラウマレベルなんですがソレハ……」
「知らん」
「アッハイ」
　この鬼のお陰で勝てた、というか、なんとか引き分けにもっていく事も出来た。たぶん、初見だったら全部回避不可能だったと思う。いや、どうだろう。なんとか全部防ぐ事も出来たかも知れないが、ソコは俺の知るところではない。
「しっかし、負けちゃいましたー」
「……」
「シャルルも強いし、あのまま続けてたら一夏にだって負けてたでしょうねー」

「……」
「いやーアッハッハッハッ……悔しいッスなぁ」
それだけは確かであった。
どれほど頑張っても、ソコまでにしか到達出来ない。コレでも一夏の動きは全部見ていたつもりだった。それでも追いつくことが出来なかった。
コレでも血を吐き出す程度には特訓を繰り返した。それでもシャルルに攻撃を一度すら当てる事が出来なかった。
相性が悪い？
機体性能差？
おいおい、そんなモノは理由にならねーぜ？
「あー……ホント、悔しいッスなぁ」
ガリガリと椅子の足が擦れる音の中、俺の弱音だけが廊下に小さく響いた。

「ただいまー。いやー、あの鬼。マジで仕事沢山振りやがった」
「あはは……おかえり」
穂次がぐったりとした様子で部屋に戻ってきた。あの口からは鬼斑血冬様への恨み言を吐き出しているのだが、それら全ては鬼の耳に届くことはない。たぶん。
シャルル……いいや、シャルロット・デュノアは苦笑してふと数分前の山田先生の言葉を思い出した。
「そういえば大浴場が使える様になったんだって」
「ほう……つまり女の子の残り湯で一風呂浴びれる訳ですな！」
「穂次のそういう所、嫌いだよ」
「おぅ……そうやって真顔で言われるのが一番ダメージあるわ……」
「そっか。覚えとくね！」
「ヒェッ……」
穂次はあのＩＳと戦えた事の理由を『ＩＳの性能のお陰』と言ったけれど、シャルロットは彼の努力を知っている。そもそも彼を教えているのは織斑千冬であって、そして今日戦ったのはその織斑千冬のコピーである、という事は一夏が証明をしている。
そこから導き出される答えは、結構簡単で、それこそ穂次の努力全てがあの戦いに出

◆◆

ていたのかも知れない。
　けれど、そうなれば自身との戦いに納得がいかなくなる。なんとも、ちぐはぐだ。
　努力を隠す様に、テキトウな理由を言った穂次をシャルロットは不思議に思う。きっと何か特別な理由でもあるのかも知れないが、ソレならば織斑千冬がアノ場を自分に見せる事は無かっただろう。
「穂次は大浴場に行かないの？」
「まあ、シャルロットさんも行かないんだったら、同室の俺が行くのも変だろ」
「今なら一夏と一緒に入れるんだよ？」
「その情報で一気に行く気が無くなったんですがソレハ……」
「逆に考えて、穂次が行けば私も行くしかなくなる訳で」
「ソノ手があったかッ!!」
「行くの？」
「……まあ、また次の機会でー。シャルロットさんのおっぱいは見たいけどなー」
「……ふーん」
「何、その複雑な顔」
「別にー」
　本当は入りたいくせに、とはシャルロットの口からは出なかった。その全てではない

だろうけど、穂次の言葉は冗談めいているがシャルロットの為を考えて言っている事が大半だったりする。実際に行かない、と言ったのもシャルロットが不審に思われない為だろう。

冗談が混ざっているお陰で素直にお礼は言えないけれど。本当に、わからない人だ。

そんなワカラナイ人がふと、何かを思い出した様に自分のポケットの中を弄る。

「何してるの？」

「いや、えっと。あったあった」

「記録メモリ？」

「クックック……」

「……盗撮は犯罪だよ？」

「違う!?　断じて違うから!?」

「弁明は織斑先生が聞きます」

「魔女裁判になっちゃう!?」

「それで、被告人。それは何かな？」

「聞いて驚きたまえ。コレはシャルル君の罰ゲームの為に用意したモノだ！」

「……？」

「あ、ホントに忘れてるヤツだな、コレ」

「罰ゲーム？」
「忘れたとは言わせんぞぉ。俺を女装させて登校させようとした事実を!!」
「……ああ、え？　ホントにしてくれるの？」
「違ぁう!!　どうして賭けに勝ったのに俺が女装するんだよ!?　男だぞ！　男に女装させて誰が喜ぶんだよ!?」
「いや、穂次は線も細いし、化粧もしたら意外と……。あと一夏は喜びそうだけど？」
「いや、喜ばねぇだろ……アレは男が好きなホモなんだぞ!!」
「穂次も一夏のことが……ほら、あの戦いで息の合った行動してたし」
「いや、アレは、うん。まあソレはいいんだよ！　そっちじゃなくて、シャルロットさんには女の格好をして登校してもらいます!!」
　何言ってんだ、コイツ。というのがシャルロットの反応である。当然である、なんせシャルロットは自身の所属する企業、更には自身の名前を連ねる家の命令で男装までしているのだ。ソレが単なる口約束で覆る訳がない。
「無理でしょ。一応、命令だし」
「クックックッ！　罰ゲームは絶対だ！　古事記にもそう書いてる」
「書いてないから。というより、ソレとその記録媒体に何の繋がりが――」
「俺のデータがこの中には入ってます！」

「……は？」
「俺のデータがこの中には入ってます!!」
「いやいや……えええ？　うん、ちょっと待ってね？　ふぅ、危ない危ない、殴りそうになった」
「えぇぇ……どうしてそんな選択肢が出てきたんですかね……」
シャルロットの言葉に怖がっている穂次は放置して、シャルロットはどうにか頭を落ち着ける。ついでに溜め息をしっかりと吐き出した。
何かの空気を感じたのは穂次は既に正座の体勢である。
「あのさ、私が言うのもオカシイけど君のデータは国家機密でもオカシクないの。わかる？」
「セカンドだもんね！」
「わかってるならどうしてそのデータを軽々と人に渡すのかなぁ」
「……殴る選択肢はどこから出たんですかね」
「愛の鞭」
「俺、愛されてたのか……ちょっとキュンツてした」
「家畜にも愛は必要でしょ？」
「あ、ソウッスネ……」

「それで、なんでそんなモノを軽々と渡そうとするかな……馬鹿なの？」
「馬鹿ですよー」
「……」
「まあまあ。落ち着くんだシャルロットさん。ＩＳの拳は流石に死ねる！」
「それで？」
「罰ゲームだし、仕方ないよね!!　待て待て、死ぬから！　アサルトライフルも死ぬから!!」
「……次は無いよ？」
「ハィ……。　まあ、アレですなぁ。シャルロットさんが女の子として学校に通うにはどうしたらいいかと愚考した訳ですよ」
「それで？」
「とりあえず、シャルロットさんが男装している理由を考えた訳ですな。　まあ俺か一夏と仲良くなってデータゲットだぜ！　ってのは前の愚痴でボロボロ出てたし」
「あー……」
「それで、コレをプレゼンツ!!　やったね！　シャルロットちゃん！　女の子で登校できるよ！」
「いやいや、その理屈はオカシイ」

「何がおかしいのさー。コレでも必死で考えてたんだぞー」
　ソレは……ちょっとだけ嬉しかったりする。
　このふざけた存在が、努力をし続けている人が、自分の為だけを考えてくれていた事はとても嬉しい。けれど、ソレが余計に辛い。
「でも、穂次はソレでいいの？」
「何が？」
「穂次のデータが誰かに流れるんだよ？」
「んー、まあ、ソレはどうでもいいんじゃない？」
「は？」
「シャルロットさんが気にする内容じゃねぇって事ッスよ。つーか、俺はシャルロットさんがちゃんとスカート履いてる姿が見たいだけなんだゼ☆」
「ホント……台無しだね」
「そうそう。だから気にせずに持っていけばいいんだよ。コレでシャルルは消えて、シャルロットさんに戻ってみんなハッピー。俺もスカート姿のシャルロットさんを見れてハッピー。ほら、何も問題ない。
　だから、泣かなくてもいいんですよー」
「泣いてなんか、ないよ」

「そうだなー。まあきっと裏切るって辛いと思うんだよ。だからそんな重荷はココで捨てて、普通の女の子としてＩＳ学園に通えばいいさ」
「……でも」
「デュノア社への言い訳？　んなモノ、セカンドは女の子が好きでハニートラップにチョロイとか言ってれば問題ねーですなぁ」
「ふふ……そうだね」
「おう。実際チョロイしな。おっぱいとか見せたら情報ボロボロ出て行くよ！」
キリッと格好をつけたように顔を決める穂次。その穂次の胸で溜め込んでいた気持ちを瞳から緩やかに流すシャルロット。
果たしてこのままシャルルのまま進んでいて彼女の精神は保つことが出来たのだろうか、いいや、きっとドコかで壊れてしまうだろう。綻びが生まれない様に気を張り続け、そして得た情報を流していく。正しくソレは裏切りであり、精神的に落ち込んでしまうだろう。結果的に綻びが生まれてしまい、そして壊れてしまっただろう。
「ありがとう、穂次」
だからこそ、シャルロットは夏野穂次という人物に惹かれてしまった。
最初は感謝だったのかも知れない。けれど、ソレは確かにプラスの感情であり、そして彼の事をもっと知りたくも感じた。不恰好なヒーローは驚く程に滑稽で、けれども

やっぱり格好良かった。

「おう。俺もありがとう！　ただありがとう!!」

「？」

「この柔らかい感触をありがとう!!」

「……」

やっぱり、不恰好な変態は格好悪かったのかも知れない。

ヘタレ

「み、皆さん、おはようございます……」
　山田先生の気のない返事が教室に僅かに響いた。元気がない、という事はないのだが、何か問題が起こった事は確かである。
「どうしたんスか？　山田先生。もしかしてまたおっぱいが大きくなったんですか!?」
「……ハァ」
「溜め息は辛いですよ！」
「……」
　スゲージト目で見られてるんですけど。怖いとかよりも可愛いという感想が出てくる辺りやっぱり山田先生は最高だぜ！
　見つめられて照れている俺に今一度溜め息を吐き出して、気を持ち直す様に深呼吸をした。おっぱいが揺れた。
「えー……今日はですね、皆さんに転校生を紹介します……、というより既に紹介しているんですが、ええと」
「美少女ですか!?」

「……はぁ」
「ホント、どうしたんスか？　いつもの様に俺を罵ってもいいんですよ!!　つーか、罵って下さい!!」
「ちょっと、黙りましょうね？」
「あ、ハイ……ゴメンナサイ」
　怖い。普段優しい人がマジでキレると怖いってのがよく分かった。
「じゃあ、入ってきてください」
「失礼します」
　入ってきたのは金髪の美少女であった。爽やかな笑顔を張り付けて、教壇の近くに立つ。ちゃんとスカートを履いている。実に、肌色の足が眩しい！
「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」
「デュノア君はデュノアさんでした、という事です……ハァ、また部屋割りを考える作業が待ってるんですね……」
　疲労が蓄積しているだろう山田先生。その疲労にはきっと各国の対応だとかもあったのだろう。
　シャルロットさんがコチラを向いて少しだけ微笑んだ様な気がしたので肩を竦めて見せた。どうだ、クールだろう。

「え？　デュノア君って女？」
「おかしいと思った！　美少年じゃなくて美少女だった訳ね！」
「……ん？　同室の夏野君が知らない訳が――」
「まあ待ちたまえ麗しい少女たち。君たちには俺が彼女を襲ったと、そう思うかもしれない」
「……え？」
「あれ？　いやいや、なんでそんなに皆ありえないみたいな顔をしてるのさ」
「だって……ねぇ」
「夏野君にそんな度胸ある訳ないじゃない」
「ヘタレ受けの夏野くんが？　無いでしょ」
「というよりはむしろ夏野君が襲われた可能性も……？」
「あれ……目から汗が」
「なつのん、それは涙っていうんだよ～」
　ドコをどうして俺がそんなキャラになったのだろうか。そもそも一夏とのイケナイ本が悪いので。総じてその全ては俺が受け手だった気がする。
　頭痛が痛くなってきたぞ……！
「僕が穂次に手を出す訳がないじゃないか」

「そうだそうだ！　……いや、それもそれで悲しいんですけ――」
「穂次は一夏の嫁だからね！」
「――――」
「あ……」
皆納得したように察した声を出した。
俺は声も出なかった。一夏も出なかった。奇しくも俺と一夏の表情は似たようなモノだった。
頭痛が、痛い！
「穂次さん」
「セシリアさん……助けて、俺を慰めて……」
「あとでお話しがあります」
「コレは折檻されるヤツだな！　俺だってワカルゾ!!」
もうマジ無理……不貞寝シヨ……。

「それで、どういう事か説明していただけます？」
「あの、セシリアさん。美しいお顔が怒りで怖いですヨ……」

「何か？」
「いえ、それでもお美しいデス。ハヒ」
「……ふん」
休み時間になり、セシリアさんが俺の前で腕を組んで睨んでいる。その顔は怒りに染まっていた先ほどよりも幾分か和らいでいたりするが、それでも怖いモノは怖い。
というよりは腕を組んでる事でおっぱいがやや強調されてる方が俺としては重要だ！
「別に何もシテネーですよー。ホント、ヤマシイことはまったく」
「本当ですのね？」
「マジマジ。神様なんて信じてないから誰に誓ったらいいかわかんねーけど」
「ふーん……」
「あ、信じられてねーですなぁ。というよりも俺としてはそんな性格だと思われていたことの方が悲しいんですけどー」
「だって穂次は人と話すときずっと胸ばっかりみてるじゃない」
「そりゃぁ、見るだろ」
だってここの学園の女の子たちって皆可愛いんだぜ……。見るだろ、普通。というか、俺がオカシイ訳じゃなくてまったく反応してない一夏がオカシイのだ。アレの感覚

が狂ってるのだ。

その一夏はホームルームでボーデヴィッヒさんに嫁宣言とキスをされたことで篠ノ之さん辺りに「灰燼に帰す」とか言われてた様な気もする。気のせいであったらよかったけど、そのお陰でシャルロットさんが言った「穂次は一夏の嫁」宣言は流されていたりする。つーか、ソレは何を当たり前の事を言ってるんだ、みたいに流された。ＩＳ学園はもう手遅れかもしれない。

「デュノアさん――」

「シャルロットでいいよ。オルコットさん」

「ではわたくしもセシリアでよろしくてよ」

「よろしくね、セシリア。――色々と」

「……ええ、――色々と」

「その女性間での変な争いとか怖いんですけどー。もっと穏やかに行こうぜ！」

「……」

「……」

「えぇ……なんで俺が睨まれてるんですかね……」

コレガワカラナイ。

まあ美少女二人に睨まれるってのも中々に素敵な体験だと思うので甘んじて受ける

けれど、本当に俺が何かをしたのだろうか……まさか、シャルロットさんの下着を拝借してしまったのがバレたのだろうか……。いや、まさか、そんな……。
「というより、穂次はどんな魔法を唱えたのさ」
「俺はまだ魔法使いじゃないぞ!?」
「意味が分からないよ……。今朝に織斑先生のところに出頭したら変に納得されてこの制服を渡されたんだけど?」
「ああ、ソレか。俺は別に何もしてないんだよなぁ……」
「……ふーん」
「ホントなんだけどなぁ。対外向きの対応は全部織斑先生に一任してるし。まあ笑顔になれるならそれでいいんじゃね?」
「何かありましたの?」
「んー、……実は俺が超有能なエージェントだって話?」
「ありえませんわ」
「そうだね」
「ノッてもくれないのか……ま、いいけどさー」
一夏ならば何か言い返してくれたかも知れないが、その一夏は今針の筵に座っている様だ。むしろ巻かれてる状態かも知れない。ともかく、篠ノ之さんとか鈴音さんがス

ゲー怒ってるのはよく分かる。
「まあちゃんとスカート履いてるって事はアレが役立った様で何よりかな」
「うん。アッチも納得してくれたよ」
「アレ？」
「俺のデータだッ！」
「……穂次さんのことを馬鹿だ馬鹿だと思っていましたが、本当に馬鹿でしたのね」
「アハハ……私もそう思う」
「奇遇だね！　俺もそう思うよ!!　つーか、俺のデータって実はクソデータなんだよなぁ」
「は？」
「バイタルデータも何もかも、普通の極々一般市民と一緒。特殊なＤＮＡを混ぜられてる訳でもないし、何か特殊な能力がある訳でもない。ＩＳに認証される前と後での変化もなし。むしろ特殊な事が何もないから今回データを貰えたんだけど」
「……あの、穂次さん？」
「何？　あ、もしかして俺に惚れちゃったかぁー。いやー！　困っちゃうなぁ!!」
「……ソレって他人に渡してよかったモノなんですか？」
「え？　ダメなの？」

「……」
「……」
「えぇぇ、どうして二人共頭を抱えてるんですかね……。俺のモノだし、誰に渡しても問題ナシ！　価値も無し！」
「国際問題まで発展してもオカシクないですわよ？」
「いやいや、無いって……無いよな？」
「あのカッコ良かった穂次はどこに行ったんだろうね……」
「俺はイツだって格好いいだろ！　いい加減にしろ！」
「穂次さんが格好良かったことなんて……まあ、何度かありましたけど」
「ほら、やっぱりカッコイイ俺は存在したんですよ!!　やったね！」
「普段は格好悪いからね？」
「そうですわね」
「ふぇぇ……二人して俺を苛めるのか……ちょっと嬉しいなぁ」
二人の瞳が一気に冷たくなった気がした。きっと気のせいじゃないだろう。人間は慣れる生物である。だからきっと俺もこの極寒にも似た視線に慣れてしまったのだろう。ゾクゾクする。
「まあ、国際問題とかにはならんでしょ」

「何を根拠に言ってるのかな？」
「そりゃぁ、データの持ち主だからな！　そんな心配無用だって。楽しく生きようぜー」
「はぁ……そのお気軽な時が無ければ本当にカッコイイのですけど」
「わかるよ、セシリア」
「フッ、俺の格好良さに二人とも惚れてしまったか……！」
「無いから」
「そうですわね」
「即座に否定されるとソレはそれで傷つくんですけど……」
まあ肯定されても緊張して何を喋ればいいか分からなくなってしまうからいいのだろう。いいのだろうか？
いや、とにかくおっぱいを触っても怒られない関係になる事を喜ぶべきなのだろう。二人共おっぱいおっきいもんね！
「まあそういう面倒な問題は起きないって」
「ドコにそんな自信があるのかな……」
「むしろ政府がソコまで俺に意識割いてるとは思えないって話。だって俺なんだぜー？」
「穂次さんだからこそだと思うのですが……」

「うーん、まあ大丈夫デショ」

そう、コレに関しては問題は無いと断言できる。渡したデータが偽物とか、偽造データだとか、そういう事ではなくて。

ちゃんとしたルートで手に入れたデータであるからこそ、何の問題も無い。そもそも俺のデータには本当に価値なんて無い。コレが村雨のデータとかになればきっと話は変わってくるんだろうけど。

「故に、心配無用！　シャルロットさんはスカート姿を俺にしっかり見せれば問題なし!!」

「穂次さん？」

「ヤダナァ！　セシリアさんの制服姿も素敵ですよ！　その黒いストッキングに包まれたおみ足が素敵です！　踏まれたい！」

「……」

「ソレは夏野穂次じゃなくて、養豚所の豚を見る目だよぉ……」

とにかくとして、俺としては美少女が減ることは嫌だし、この日常を楽しみたいのだ。つーか、セシリアさんに踏まれるにはどうすればいいのだろうか……マッサージとか適当に言って踏まれるのが一番なのだろうか……。

「お疲れ一夏！」
「お前は結局俺を助けてくれなかったな……」
「いや、鈴音さんと篠ノ之さんからスゲー重圧掛けられてたのは知ってるけど、アレに立ち向かう勇気はないッス」
　シャルロットさんの引越しという事で手伝おうとして、いの一番にタンスに向かったら部屋から放り出された。俺の優しさをどうして受け取ってくれない！　決して下着を物色しようとしていた訳じゃないんだぞ!!　拝借しようとしていただけだ！
　ともあれ、部屋を追い出されてちょっとだけ女の子たちの会話に混ざってから、一夏の部屋へとやってきた訳だ。部屋をノックすればぐったりした一夏が見えたのだから思わず労わってしまった。
「……お前も色々言われてたみたいだけど？」
「ああ、大丈夫大丈夫。つーか、ヘタレ扱いされてたことの方がキツイ」
「お前は泣いていいと思うぞ」
「涙が出チャウ！　だってオトコノコだもん！」

「キモい」
「ソレな」
二人してノリには乗ったけれど、溜め息を吐き出して一夏の淹れてくれたお茶を啜る。温かい緑茶が美味しい。
「それで、実際はどうなんだ？」
「何がだよー？」
「シャルル？　と何日も一緒の部屋にいたんだろ？」
「まあ、そうだなー」
「何もなかったのか？」
「じゃあ聞くけどさー。篠ノ之さんと何日も一緒にいた織斑一夏くんは何かあったのかなぁ？」
「箒と俺はそんなのじゃないだろ。単なる幼馴染だし」
「……篠ノ之さんが草場の影で泣いてるぞ」
「箒は死んでねぇよ。本当に何も無かったのか？」
「いや、なんでそんなに気にして……」
「なんだよ、急に身を引いて」
「お前……俺の身体に興味が!!」

「帰れ」
「いやん、嘘だって。つーか、マジで何も無かった……？」
「何かあったんだな」
「いや、一緒の布団で寝たぐらい？」
「……」
「いや、そんな意外そうな顔をされても困るんだけど？」
「お前の貞操は、もう……」
「うっせぇ!!　童貞だよ！　うわーん！」
「手も出せなかったのか……普段の変態さはドコに行ったんだ」
「変態でも紳士なんですー!!　つーか、あの時は変に安心しきってるシャルロットさん見て、襲う気も出なかったんですー!!」
「……本音は？」
「マジで後悔してる……あそこで弱味握って襲ってれば俺は今頃天国を味わってただろうな……」
「ああ、千冬姉の手によって天国に逝ってただろうな」
「マジでソレな……つーか俺、織斑先生に女子寮行くときに、ヤマシイ事したらこの机の様になるからな、って脅されてたからな……」

「机？」
「真っ二つの机だ」
「……よく我慢したな！」
「ああ！　俺だって命が惜しい！」
　よくよく思い出せばそうなのだ。手を出すことにより、俺はきっと織斑先生に真っ二つにされていた事だろう。スプラッターとかゴア表現とかも真っ青だぜ……。
「というよりも部屋割り変わるんだったら、俺と穂次が一緒になるのか」
「ソレは無いんじゃね？」
「なんでだよ。男同士だぞ」
「そりゃぁ、俺だって身の危険ぐらい感じるからな」
「やっぱ帰れよ、お前」
「嘘だって。まあ、冗談を抜きにしても俺らが同室はねぇよ」
「そうなのか？」
「一緒になる様ならそもそも最初から一緒の部屋になるだろ。そうじゃないって事は何かしらの理由でもあるんだろ」
「……穂次って偶に頭が良くなるよな」
「褒めるなら美少女になってからにしてくれ」

「基本的には馬鹿だけど」
「頭が馬鹿な方が人生楽しいんだって。色々考えなくて済むし、なにより女の子も可愛いし、おっぱいも見つめ放題だからな！」
「いや、最後は違うだろ」
「触りたい放題なのかッ!?」
「いや、ソレも違うから」
　じゃあ何だよ。変に期待をさせるんじゃぁ無い。
「そういやおっぱいで思いだしたんだけど」
「穂次ってソレで全部思い出しそうだよな」
「何？　天地創造から説明しろって？　流石に覚えてねーよ？」
「お前は何歳なんだよ……」
「一夏と一緒ダヨ！」
「ウザイ」
「ひぇっ……。で、臨海学校があるじゃないか」
「……ああ、そういえば」
「水着姿の篠ノ之さんが見れる！」
「……」

「うわ、スゲー複雑そうな顔された」
「なんというか、幼馴染をそんな目で見られるのに怒りを覚えた」
「ふーん……ま、篠ノ之さんは俺としては対象外なので実際はどうでもいい。でも是非ともおっぱいは拝見したい」
「……」
「睨むなよー。男の性だろ？」
「まあそうだけど……というより、セシリアとかはどうなんだよ？」
「楽しみで仕方ない！　普段は服で隠されてる肢体が全部日の下に晒されるとか素敵！　きっと下半身も素晴らしいのだろう！　ああ、楽しみで仕方が無い!!」
「……お前、ソレをセシリアの前で言ったのか？」
「言えると思うか？　言ったら絶対に俺に見せてくれなさそうだけど？」
「そうだな。というか、臨海学校あるなら水着買いに行かないとだな」
「一応日程的には余裕あるけどなー」
「一緒に行くか？」
「……んー、休日は全部詰まってるんだよなぁ」
「マジかよ……」
「ほら、俺ってモ、テ、る、からネ！」

「はいはい」
「もっと構えよー、寂しいだろー」
「構ったらお前ホモとか言うだろ」
「い、い、い、言うよ！」
「せめて隠せよ」
「いやー無理ッス」
　このやろう、と笑いながら言ってくる一夏に対してケラケラ笑いながら適当に対応する俺。
　やっぱりノリがいい同性はなんとも素敵である。ちなみに女生徒皆さんが想像しているような展開は決してない。

これは荷物持ちであってデートではない

セシリア・オルコットは深呼吸をした。

そんな事をした所で緊張はさっぱり収まらないけれど、それでも幾分かはマシになった。何度も深呼吸を繰り返しているというのに、一向に収まってくれない心臓。

こうまでして緊張するモノなのだろうか、と昨晩から何度も考えているのだけれど、結局答えは出ずに朝になり、こうしてとある部屋の前に立っている訳である。

部屋の主の名前は夏野穂次。セカンドと呼ばれる、男性ＩＳ操縦者の二人目である。

休日の朝。確かに時計の表示は未だにＡＭであるし、デジタル時計は無限の記号を横に倒した形を表示している。そもそも穂次は起きているのだろうか、という疑問もあるが、以前は起きていたという点からきっと起きているだろう、とセシリアは推測した。

当然、ココに至るまでに食堂を通過して、しっかりと彼がいない事を確認してから、ここまでの最短距離を移動してきたのだから、きっとまだ彼はこの部屋にいる筈なのだ。

もしも、彼が未だに眠っていたならば。とセシリアは想像して少しだけ顔を赤くする。乙女の様に妄想をして、その妄想を振り払う。眠っている穂次を見て、眺めて、きっと自分は慈愛に満ちた笑みを浮かべるだろうけれど……いいや、それではまるで自分が

彼に恋をしているみたいではないかッ！

そんな事はありえない。ありえる訳がない。

そう、アレである。自分のことを愛らしいとか、可愛いとか、美しいとか、色々言ってるから、仕方なく、本当に仕方なく起こしに来てあげたのだ。

いや、違う。目的を見失うな、セシリア。違うのよ。

そもそも起こしに来た理由は彼を買い物に誘うためにあるのだ。別にデートではない。デートじゃない！

必要最低限の、それこそ臨海学校で着る水着を買う為に行くのだ。決して、デートなんかじゃない。

だからもう少し落ち着くのよ、セシリア。

あの変態の事だから、きっと水着を買いに行くと言えば二つ返事で了承して着いてきてくれるに決まってる。そのついでにカフェでちょっとだけ休んだり、小物を見て回ったり、それでいて夕暮れで――。

「――――ッ!!」

一気に顔が熱くなる。いやいや、そんな訳が無い。これではまるで自分が彼を意識しているみたいではないか。ありえない。無い。無いったらない。

あんな変態で、お調子者で、口が軽くて、いつもへらへら笑って、それでもちょっとだけ格好良くて、何かと手伝ってくれたりして、自分のことを可愛いなんて言ってくれて……。

頭の中の理想をバタバタと振り払う。というより、あの変態は誰に対しても可愛いなんて言うし、美少女だと言うし、ここ最近は全然構ってくれないし、シャルロットさんの近くにいたりするし！

もっと自分の事を構ってくれてもいいんじゃないか？

もっと自分のことを見てくれてもいいんじゃないか？

「ふぁぁ……ん、おはよ、セシリアさん。今日もお美しい！」

「――ふんっ」

「えぇぇ……扉開けていたから挨拶したらそっぽ向かれたんですけど。まあ頬を膨らませてるセシリアさんも可愛いけどさー」

扉が開いて出てきた彼は本当に寝起きの様で欠伸を手で隠しながらいつもの様にへらりと笑う。自分の悩みも知らないで、こうして軽口の様にコチラを褒めてくる変態に不機嫌を見せてしまう。怒ってます、と形でわかる様にしているのは、彼が困っている姿が見たいからだったりする。当然、コレは秘密。

「ほらほら、朝からそんな不機嫌だと気が滅入っちゃうゾ☆」

「……穂次さんは朝から元気ですわね」
「そりゃぁ、まあ朝はゲンキじゃなきゃ！」
「？　含みがある言い方ですわね？」
「ソンナマサカ。おっと、もしかしてこれから朝食かな？　一緒に食べる？」
「いえ、その」
「ん？」
「一緒に街に行きませんこと？　そう！　荷物持ちに！　最近買いたいモノも増えてきた事ですし！　どうせ、どうせ暇な穂次さんを誘いに来てあげた訳ですわ!!」
「……あー、えっと、ゴメンね。今日はちょっと用事が――」
終わった。終わってしまった。振り絞った勇気は結構空回りしていたけれど、断られてしまった。
「あー、あー！　うん、待った。うん、ちょっと待った。えっと、ほら、昼から、昼に街で集合しよう。ね？　だからそんな泣きそうな顔をしないでくださいお願いします」
「別にそんな顔してませんわ……」
「うん、うん。そうだね！　えっとさ、ほら、俺もセシリアさんと一緒に買い物に行きたかったし！　荷物持ち？　するする！　でも朝はちょーっと予定があるんだよ」
「……わたくしよりも大切な用事なのですか？」

「その言い方は卑怯ですよ！　セシリアさん！　内容は言えないけど、まあ必要な事だから……」
「……誰にセクハラをしにいきますの？」
「俺、すっげぇ不当な扱い受けてる気がするんだけど？　あのさ、俺が誰彼構わずセクハラつーか、変態発言してると思う？　俺はおっぱいの素晴らしい人にしかセクハラしに行きません!!」
「……」
「コレで真っ当な扱いだぁ……」
　冷たい瞳で睨んでやればへらへらとした笑いを変わらず浮かべながら確信したように言葉を漏らす。こうしてちゃっかりと話がズラされているのだけれど……。まあ許してやろう。
「では、昼に待ち合わせを致しましょう」
「そうッスね！　遅れない様にガンバリマス！」
「……遅れたらスターライトｍｋⅢですので」
「ヒェッ……脅しとしてでもＩＳ武装を使うのはどうなんですかね……」
「ホントに遅れては嫌ですわよ？」
「ハッハッハッ！　この俺が美少女を待たせる訳がないデショ！」

「……まあ信じてあげますわ」
「信じられてなかった!?　ま、集合場所とかは駅前でいいかな」
「それでわかりますの？」
「ご安心を！　セシリアさんほどの美少女だったら目印無くても問題なくドコにいるかわかるよ!!」
「……ちょっとだけ、期待してあげます」
「ヤッター！　期待されてるゾ☆　ちゃんと見つけれたら頭でも撫でて貰えるんですかね……」
「……そうですわね。頬を思いっきり引っ叩いて差し上げますわ」
「ソレはご褒美とは言いませんよ！　セシリアさん！」
　でもちょっとだけ魅力的かも、なんて呟いている彼を再度冷たい瞳で見つめてやればカラカラと笑った。
　きっと彼の業界では叩かれることもご褒美なのだろう。どこの業界かは知りたくも無い。

やってしまった。コレは本格的にマズイかも知れない。

手首に止めた腕時計を確認すれば、予定していた時刻から短針が一つ動いている。

ちょっとした準備をしていた。まあ外に出るという事もあって少しだけ気合を入れた。決して穂次と一緒に買い物が出来るという事で気合が入ったわけじゃない。そんな訳がない。

ともかくとして、そんな自分を見て誰も何も思わない訳もなく、時間よりも余裕を持っていた筈なのに、気が付けばそんな足止めにより遅刻してしまっている。

駅に到着して、駆け出て改札を通過する。心の中で彼が遅れてしまっている事を願いはしているけれど、ソレはきっと無理な話だろう。なんせ自分があれほど脅しを掛けたのだから。

駅を出てすぐのロータリーをぐるりと見渡し、彼が居ない事を確認する。

いない事を確認してしまった。流石に一時間も待たせてしまったのだ。帰ったかも知れない。

いいや、そんな彼に限ってありえない。そんな訳があるわけが無い。でも、もしかしたら――

「あれ？　もしかして待たせちゃった？」
「ひゃぁっ!?」
「えぇぇ……そんなに驚かれると俺も流石に傷つくんですが……」
　後ろから掛けられた声に思わず叫んでしまい、振り返れば情けない表情の穂次が立っていた。そんな情けない表情もへらりと笑いに変化して駅に敷設されてる時計に視線を向ける。
「いやー、ゴメンゴメン。コッチの予定が立て込んじゃって……ホント、許してください。スターライトｍｋⅢだけは勘弁してください！」
「ま、まあ許してあげなくもありませんわ！」
「ハハー！！　セシリア様ァ！」
　実際の所、自分も遅刻しているのだけれど、彼がこうして謝っているのならばソレにノッてあげよう。自分のミスを棚に上げる訳ではないけれど……まあ彼が言うのだから、仕方ない。
　それにしても――。
「……」
「え？　何、そんなに見つめて。もしかして格好良すぎてホレちゃったとか？　イヤー困っちゃうなぁ」

「今すぐ服を買いに行きますわよ」
「いやいやＩＳ学園の制服でもないし、何も問題は――」
「いいですわね？」
「あッハイ……」
　どうして彼はこんなにセンスが無いのだろうか……いや、そもそも自分の隣に立つ男がこんな服装でいいのだろうか、いやよくない。外見は普通ぐらいなのだから、もう少しオシャレをしてもいいのではないだろうか。というか、しろ。
「この格好のドコが悪いというのか」
「少なくとも全部ですわね」
「ふぇぇ……多いよぉ」
「荷物持ちであろうと、このセシリア・オルコットの隣に立つのですから、もっといい格好をなさい！」
「へいへい……お姫様の言うとおりに」
「行きますわよ！」
　彼の手を引っ張って駅前のショッピング・モールへと向かう。少しだけ驚いたような声を出した彼は少しあとに何やら考える様に、「あー」だの「うー」だのと唸っていた様な気がするが、きっと空耳なのだろう。

「ふう、こんなモノですわね」
「はぇぇ……。セシリアさんってホントセンスがあるんスねぇ」
「少なくとも穂次さんよりかは自信がありますわ」
「いやー、ハッハッハッ」
「……」
「スイマセン、そっちの勉強もしときます」
「よろしいですわ」
彼を少しだけ自分好みに変える、というのは実に心が弾んだ。ジトリと彼を見てやれば両手を上げて情けない顔をする。
今の彼を見て、数分前まで見事なまでにセンスの欠片も無い格好だったとは思わないだろう。その服たちは既に彼の持つ紙袋の中へと封印されている。もう出てこなくてもいい。
「それよりも……お金はよろしかったのですか？」
「あー、問題ねぇッスよ。ほら、コレでも俺って、セ、レ、ブ、だからねッ☆」
「……？　確かに有名ではありますけど、それとお金は関係ありませんわよね？」

「え？」
「え？」
「ナニソレコワイ」
「セレブはｃｅｌｅｂｒｔｙ　の略ですわ」
「お、おう……ん、日本特有の誤用か」
「なるほど……日本は奥が深いですわね」
「わびさびわさびなんて言うからな」
「わさびまでありますの!?」
「なんと、セシリアさんはソコまでは知らなかったのか……」
「わびざび、までは知っていましたが……まさかわさびまであるなんて……」
「しまった!?　コレは日本に伝わる秘伝だったのか!!」
「……嘘でしたのね」
「あの俺の嘘にもちゃんとノッてくれた純粋なセシリアさんはドコに行ったんだ!!」
「元々そんなわたくしは居ませんでしてよ」
「なん……だと……」
　ガックシと言わんばかりに肩を落とした彼は少しして顔を上げていつもの様にへらへらとした笑いを浮かべる。彼としては一つの段落が出来たのだろう。

「さ、んじゃま。さくっと水着を見に行きますか！」
「そうですわね」
「是非ともセシリアさんの水着姿をいっぱい見たい！　ああ！　夏ってやっぱり最高だな！」
「アチラで待っていてくださいますか？」
「他意はない！」
「むしろ悪意しかないのですね」
「悪意とは失敬な。下心しかないんだよ！」
「悪意の方がまだマシでしたわ……」
「欲望には忠実に生きないと死んじゃう！」
「では試着せずに適当に買いますわ」
「死んじゃう!?」
　しょんぼりとした彼が足を止めている。ジトリと見てやっても何も反応は無い。こういう所を見ると、ある程度の良識はあるのだろう。常識は無さそうだけれど。
「何をしてますの？　わたくしの水着を選んでくださるのでしょ？」
「行きます！　生きます！　いや、イくかも知れんな……」
「訳のわからない事を……」

「ソレより俺が選んでいいんスかね……？」
「……透明の水着、とかは流石に言わないですわよね？」
「いや、水着姿として見るからソレは絶対ない。ソコは安心してほしい。俺はセシリアさんの水着姿が見たいのであって、全裸は……見たい！」
「……」
「ジト目はやめて！　いや、まあ透明な水着（意味深）は別にいいよ。それよりも問題がある」
「？　何かありまして？」
「そう、俺のセンスの無さだ!!」
「……」
　ああ、ソレは忘れてはいけない事だった。彼のセンスの無さはよくわかった。わかってしまった。
　彼に選んでもらう、という事は、つまりそういう事なのだろう。いっそ透明な方がいいかもしれない。いや、ソレはそれで問題だけれど。
「……はぁ、わたくしが選んだモノから選べば大丈夫ですわ」
「なるほど……セシリアさん、天才だな！」
「……馬鹿にされているようにしか聞こえませんわ」

「かなり本気なんだけどなぁ……ほら、セシリアさんは勉強も出来るし、可愛いし、ＩＳだって操縦できるし、可愛いし、そして何より可愛いからね！」
「……まあ許してあげます」
「ちょれー」
「は？」
「いえ、何にもないですよ！　セシリアさん！」
何か聞き捨てならない言葉が聞こえたような気がするが、彼が何も言ってないという事は何も言ってないのだろう。でもちょっとだけイラっとしたからジトリと睨んでやろう。

あっさりと水着は青色のビキニに決定した。あっさり、というには彼による「全部可愛いッス」という一悶着があったりしたのだけれど、それでも彼が一番反応出来なかった、と言った青色のビキニを購入した。
「いやー、眼福でしたね……」

「あの、本当によろしくて？」
「え？　何が？」
「いえ、水着代も勝手に支払っていたようですので」
「あー、別にいいよ。ほら、お金だけはあるから、こういう時に消費しないと溜まっちゃうんだよー」
「……ふーん」
「信じられてないッスねー。まあ、ここは俺の顔を立てると思って、お気になさらずに。というよりは綺麗なセシリアさんをずっと見れるだけで俺は満足ですッ！」
「威張って言うような事ではありませんわね……」
「店員さんにもニッコリされて彼氏扱いされてた事が一番嬉しかったゾ！　まあ、その後に即否定入れられたけど……」
「あ、あれは……その」
「まあ、俺如きがセシリアさんの彼氏っていうのもアレだしね。　きっと未来ではセシリアさんと彼氏さんは仲睦まじい生活をしてるんだ……妬ましい！」
　未来、と彼が言った時にオルコット家に婿養子として来た彼を想像してしまう。当然、ソレは実の父親の様に多少弱腰ではあるけれど、今よりも幾分か年齢を重ねている未来の彼はしっかりと決める所は決めてくれるし、自分の目から見れば十二分にカッコ

……。

「――ありえませんわ！」

「えぇぇ、急に独身宣言ッスか……最近の女の人はスゲーなぁ」

「ち、違いますわッ！　あの、その！」

「まあまあ、落ち着いてセシリアさん。安心してくれ。たとえセシリアさんがずっと独身でも、俺たちズッ友だよッ☆」

「……」

「あの、せめてツッコンでもらえると嬉しいかなーって」

「……」

「あー、穂次知ってる！　コレは死ねって言ってる目だね!!」

　コチラの気持ちも知らないで、好き勝手言っている馬鹿者をただただ睨んでやればわたわたと慌てている彼が見れる。いや確かにイラつきもしたけれど、まあこんな彼が見れるのもちょっとだけ嬉しかったりするので、いいだろう。許してあげよう。

「もういいですわ。許してあげます」

「ヤッター！　セシリアさんの機嫌が直ったぞ！」

「ただし、次にいらない事を言ったら――」

「スターライトｍｋⅢッスね！　知ってますよー!!」

「ブルー・ティアーズ付きですわ」
「防げないヤツじゃないですかヤダー！」
「ふふっ」
　少しだけオカシクなり笑ってしまう。ソレを見てようやく彼もへらりと安心したように笑う。いつもの彼の表情だ。やっぱり彼はこういう表情が一番似合っているのかも知れない。いや、真面目な顔も、幾分か、彼にしては、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけカッコイイけれど。
　コレは彼に言わないちょっとした秘密だったりする。

「コレってチョー可愛くない？　かわいーいー！」
「……」
「あの、セシリアさん。流石に反応もないと俺が凄い馬鹿みたいなんですけど」
「馬鹿ですわ」
「そうだった！」
「はぁ……」

並べられている商品を見て彼がふざけていたので冷たく睨んでしまった。ついでに溜め息も出た。

彼はどうしてか照れた様にしているが、いったいどこに照れる要素があったのだろうか。問いただすと面倒そうなので何も言わないけれど。

彼の見ていたネックレスは確かに可愛かった。小さなチェーン、雫型のシルバーに透明の石がはめ込まれている。ちょっとだけ欲しくなったけれど、値段を見れば気が引ける。

「こういうセンスはいいんですわね」
「可愛いモノを見極めるのは自信がある」
「凄く不純に聞こえるあたり、もっと普段をマトモにした方がよろしくてよ」
「マトモなんだけどなぁ」
「セクハラ発言してるアナタのドコがマトモなんですの?」
「アレが俺のマトモだ!」
「警備の方はドコにいるのかしら……」
「本気で探すのは怖いからやめてッ!」

少しキョロキョロとすれば彼から制止の声が掛かった。どうやら自覚はあるようだ。それならもう少し真面目にしてればいいのに。それなら自分だってもっと彼に、いやい

や、何を考えているんだ。
「ねえ、そこのアンタ、ちょっとこの荷物を持っててくれないかしら?」
「は?」
「会計の間だけだから、頼むわよ」
「まあ、別にいいッスよー」
「ちょ、ちょっと!　この方はわたくしの連れでしてよ!?」
「まあまあ、セシリアさん。たった数分だから。俺たちも来てすぐに出て行く訳じゃないし」
「穂次さん!?」
「あー、何?　イイ訳?　ダメなの?」
「別に――」
「ダメに決まってますわ!　行きますわよ!」
「あーあー、まあそういう事で、スイマセン」
「穂次さん!」
「ハイ!　ゴメンナサイ!!」

「セシリアさんセシリアさん。どーしてそんなに不機嫌なんですかー」
「……別になんでもありませんわ！」
「あー、そうっすかぁ……」
イライラする自分を彼は誘導するようにこの喫茶店に座らせた。勝手に紅茶を頼んで、ついでにケーキも頼まれているけれど、やっぱりイライラしてしまう。
「……どうしてキッパリ断らなかったのですか？」
「え？　何が？」
「先ほどの事です！」
「あー、さっきの？　荷物持ってーってヤツか」
「そうですわ！　あんなものハッキリと断ってしまえばいいのです！」
「時間とられるの嫌だったかぁ、ソレは断るべきだっ――」
「違いますわッ!!」
「あー、セシリアさん。お客さん皆コッチに視線向けてるから、ちょっと落ち着いて、ね？　ほら、ココのケーキは美味しいよ」

話が全く噛み合わない。なんだというのだ。コッチはイライラしているというのに、どうして彼はこんなにヘラヘラと笑っているのだ！

コチラが不機嫌を示してやれば困ったように笑っているけれど、本当にどうして不機嫌なのかを理解できていないのだろうか。

「アナタは男としてのプライドはありませんの？」

「あー……あったらＩＳ学園での生活は耐えれないんですが、ソレは……」

「……」

ソレは……うん、何も言い返せない。不機嫌も引っ込んでしまう。基本的には自分も含む女生徒が悪い、いや、彼も相当悪いけれど。

「まあ、俺の男としてのプライド云々は置いといて。ちょっとだけ落ち着きなって。ほら、紅茶も美味しいよー」

「……むぅ」

少しだけ唸ってから、カップに手をやる。湯気と一緒に昇ってきた香りに頬が緩み、褐色オレンジの液体を飲み込めば口の中に香りと甘み、そして少しの渋みが広がった。

「……美味しい」

「そりゃぁよかった。紅茶だと、後は反対側にある喫茶店とかも美味しいッスなぁ」

「？　何度か行ってるんですの？」

「まあ、ほら、休日はコッチにいる事の方が多いし」
「……そういえば前の休日もわたくしの誘いを断りましたわね」
「あー、まあ、ほら、用事が立て込んでるのさ」
「……ふーん」
「信じられてないなぁ……まあいいけど。さて、話を戻すけど、さっきの事ね」
「そうですわ。言い返してやればよかったんです」
「アハハ、ブーメランかな？」
「？」
「いや、コッチの話。　まあ、荷物持ちに関してはホントに気にしてなかったんだよなぁ」
「……お知り合いでしたの？」
「いや、初対面。まあ世間の一部女性が男のことを使い勝手のいい何かだと思ってるのは仕方ない事でしょ」
「……納得いきませんわ」
「まあまあ。ついでにセシリアさんが居なくて俺が歯向かったとしたら、ものの見事に俺は逮捕だったんだぜ……！」
「……初対面でもセクハラするから」

「違ァう！　基本的に司法も女性が有利なの。あることないこと言われてサヨナラ、ってのも結構ありえるらしいよ」
「……」
「あー、納得いかないって顔してるなぁ。　まあ、世の中そんなモノだって。受け入れなきゃやってけねーです」
　へらへらと笑ってそう言った彼は「よっこらせ」とわざわざ声を出して立ち上がる。ソレを目で追いながら見ていると、彼はキョトンとする。
「え？　何？」
「むしろわたくしの言葉だと思うのですが……」
「あー、ほら、ちょっとお花摘みに」
「……聞かなかった事にしてあげますわ」
「そいつはどうも。ゆっくり紅茶を飲んでてよ。スグに戻ってくる……筈」
「……」
「あ、目線が冷たくなったゾ！」
　本当に、どうしてこんなに格好悪い男に気持ちを向けているのか、時折自分でもよくわからなくなる。
「ホント、カッコ悪い人」

呟きは紅茶の湯気を少しだけ揺らして、誰にも聞こえずに溶けていった。

「いやー……買いましたね」
「そうですわね……」
アレから鬱憤を晴らすようにショッピングは続いた。彼は何も言わずに荷物持ちに徹していたり、時折ふざけた事を言ったりと、ちょっとしたデートみたいになってしまった。念を押すようだが、コレはデートではない。
会計全てを彼が支払っていたり、歩くときは常に自分を壁側にされていたり、自分のリクエストに応じる店を案内されたり、そんな事があったけれど、これは決してデートではない。デートじゃない！
デートだったら恥ずかしすぎる。マトモに彼の顔を見れなくなっていたかも知れない。
しっかりと部屋の前まで送ってくれた彼はやっぱりへらへらと笑って荷物を渡してくる。

「流石に部屋に入るのはマズイでしょ」
「？」
「あー、ほら、ルームメイトさんもいるし。荷物持ちはココまで！　ハイ！　解散！」
慌てるように、荷物を渡した彼はパタパタと逃げていく。あんな様子で逃げなくてもいいだろう。
少しだけ膨れてしまう。
「おかえりー、セシリア」
「ただいまもどりましたわ」
「それで、夏野君とのデートはどうだった？」
「べ、別にデートではありませんわ！」
「ふーん、それにしては随分と嬉しそうじゃない」
「そ、そんな事は……」
頬が熱くなる。いやいや、デートじゃないから。そんな、あんな変態と一緒にデートだなんて、そんなまさか。
ルームメイトの軽口も程ほどに買い込んだ荷物を出していく。我ながら随分と買ったものだ。いや、買ったのは彼なのだけれど。
「あら？」

はて、買った覚えのない箱が一つ出てきた。長方形のソレを手に取り、眺める。包装にリボンまで結ばれたソレ。どれだけ思い出そうと、いっこうに中身が思いつかない。

丁寧にリボンと包装を解き、白い箱を開く。

小さなチェーン、雫型のシルバーに透明な石がはめ込まれたネックレス。部屋の照明にかざして見れば、石が少しだけ青みを帯びているのがわかる。

「へぇ、可愛いね」

「……そうですわね」

数秒ほどネックレスを眺めていたセシリアはソレを首に着けて鏡で確かめる。

チェーンを指で絡めればチャリリと小さな音が響く。

「ホント……カッコイイ人」

セシリアは赤くなった頬を綻ばせた。今回の呟きは紅茶の湯気に溶け込むことはなかった。

ウサミミは地面で採れる

トンネルを抜けると、そこは海であった。
青い空。ソレを反射する青い海。白い砂浜。可愛い女の子達。実に、実に素晴らしい！
コレが現実だったならば俺は昇天していただろう。けれど、俺は知っている。知っているんだ。コレは儚い夢であり、そしていつか俺は現実へと戻るのだ。
「いや、逆に考えて夢なら手を出しても問題ないのか……」
「穂次、ココは現実だよ」
「いや、そんな訳がないだろ。いいか、シャルロットさん。君みたいな美少女が俺の隣に居て、更にはきっと海では水着姿を披露してくれる。まるで夢の様な出来事が俺には待っているだろう。なんせ、夢なのだから。だったら今スグに触っても、何も問題はない。そうだろ？」
「別に触ってもいいけど、織斑先生が睨んでるよ」
「現実は厳しいッスなぁ」
「おかえり、穂次」

出来るのならばずっと夢の中に居たかった。夢に鬼なんて出てくる訳もないので、きっとコレは現実なのだ……。

ともあれ、長時間バスに揺られてようやく海が見れる場所まで来たのだ。到着はもうスグなのだろう。シャルロットさんが隣にいるというこの現状が崩れるというのは少しばかり悲しいけれど、ソレは仕方がない。なんせ水着が見れるのだ。そう、水着である。水着。

「いやー、今から楽しみですな」

「そうだね。セシリアは君が選んだ水着を着るらしいから、楽しみだろうね」

「ひぇ……急に不機嫌になるのは怖いからやめてくれないですかね……」

「別に不機嫌なんかじゃないよ」

「笑顔が怖――いやー！　とてもステキな笑顔ですね！　冷や汗かいちゃうほどステキッス！」

「ありがとう」

ニコリと笑っているシャルロットさん。けれどソコに温かみなど決してない。笑っているのに、スゲー冷たい怖い恐ろしい。なぜこんなに恐ろしいのだろうか。きっとソレは俺にやましいことがあるからなのだろう。靴下を何足か拝借している事に気付かれたのだろうか……いいや、それとも別の何かに。

「ネックレスまで買ってるし……」
「ん？　何？　もしかして何かお土産でも欲しかったとか？」
「……はぁ」
「呆れられた!?」
「……じゃあ、今度私もどこかに連れて行ってよ」
「デートってヤツですか!?　緊張するなぁ！」
「……荷物持ちだよ」
「アッハイ」
「……ふん」
　そっぽ向いかれたけれど、どうやら幾分かは機嫌が直ったらしい。一体何が楽しくて俺の様なヤツと買い物に行くのだろうか。理解に苦しむ。セクハラされたいのだろうか……いや、セクハラされたいに決まっているそうだな！
「そろそろ目的地に着く。全員席に座れ。そこの馬鹿の様になりたくなければな」
「センセー！　座る以前に、なんで俺は搭乗早々縛られたんですか!?　見せしめですか!?」
「お前の様なヤツをこの密室空間で自由にしてみろ――」
「やっぱり見せしめだったのか……」

「私がお前を殴るかもしれんだろ？」
「俺の身の安全の為に……！」
「穂次、まず殴られることに疑問を感じようよ」
　ホント、コレが現実なら昇天しそうです。
　バスが到着して、俺の拘束を速やかに解いてくれたシャルロットさん。どうして彼女が雁字搦めの俺を素早く解けたのか、どうして慣れた手付きだったのか、俺には聞けなかった。聞く必要も無く、席順が決まった瞬間に織斑先生による縛り方講座をしていたのだから知っていたのだ。講座に出席していたのは俺とセシリアさんとシャルロットさん、そして織斑先生の教えという事もありボーデヴィッヒさん。ちなみに俺は縛る方ではなくて縛られる方として講座に出席させられていた、と言った方がいいのだろう。
　果たして俺はどうしてそんな講座に疑問を一切持たずに参加していたのだろうか……。いや、アノ時点では美少女に縛られるという変な優越感に浸っていたのだ。なるほど、コレは巧妙な罠だったんだな！
「それでは、ココが三日間お世話になる花月荘だ。全員……特にそこの阿呆は従業員の仕事を増やさないように注意しろ」
「俺だけ何で名指しなんですかね……」
「むしろ阿呆が定着してる事に疑問を感じろよ、穂次」

「俺としては夏野穂次って名前よりも嬉しいかもなー」
「いや、ねぇだろ」
「そこの阿呆と馬鹿者。私の面子を潰して楽しいか？　ああ、楽しいだろうな」
「ヒッ……」
　一夏と話していると非常に重圧の篭った瞳の千冬様がコチラを見ていた。実際怖い。一夏なんて背筋を伸ばして既に謝る体勢だ。甘いな、一夏。こんな重圧にそんな態度だなんて……。土下座の体勢が最適解だとなぜ知らない!!
「あらあら、こちらが噂の」
「――ええ。まあ。今年は男子が居るせいで浴場分けが難しくなって申し訳ありません」
「はえー……女将さんは若くてお綺麗で、なんともステキですね」
「あらあら、ありがとう。でも、そういうのはアナタを想ってくれている女の子に言ってあげるべきよ？」
「言いたいんですけど相手がいないのでー」
「――あらあら」
　何がおかしいのか、女将さんはクスクスと笑っていた。その視線は俺ではなくてその後ろの方へと向けられていたのだけれど、よもや幽霊か何かでも見えているのだろう

か。或いは怨念的な。生霊かもしれない。
「それじゃあみなさん、お部屋の方へどうぞ」
「いやー、旅館なんて初めてだから楽しみッスなぁ」
「ああ、夏野。お前の部屋だが」
「まさか織斑先生と一緒ですか!?　……命日かも知れんな」
「命日にしてやってもいいが、残念ながらお前は私と一緒の部屋ではない」
「なら山田先生!?　ヒャッハー!!　神様！　信じてました!!」
「それも違う。当然、女生徒達とも違う」
「一夏と一緒かよ……ペッ」
「おい、反応悪すぎるだろ」
「残念ながら、お前の好きな織斑と一緒でもない」
「って事は一人部屋ですね！　やったぜ！」
「そう、お前は一人で離れに部屋を取ってやったぞ」
「……え？　マジで一人なんスか？」
「そうだ。特別扱いだぞ、嬉しいだろう」
「ワーチョーウレシー……完全に危険人物扱いかよ……神様なんてもう信じねぇ」
皆ガヤガヤと楽しそうなのに、俺一人で離れか……ホント、隔離状態か何かかな……

？

　いや、それでも俺は女生徒達の姦しい姿を見に来るだろう。例え織斑先生に見つかろうが関係ねー！　臨海学校だぞ！　旅館だぞ！　風呂を覗かねば!!

「ちなみに、何か仕出かしてみろ――」

「ヤダナー、俺が何かすると思ってんですかー？　アッハッハッハ、いやいや、そんなまさか」

「お前は現実を越える事になる」

「臨界学校だったのか、たまげたなぁ……」

　殺されるのだろうか……はたまた限界ギリギリまで圧縮されたりするのだろうか。怖い。でも覗きたい。女の子の裸を、おっぱいを見たい！　水着があったな。期待しよう。決して俺は命が惜しくなった訳じゃない。そう、もっと、こう……利己的に生きる事を心がけるのだ。そう、決して鬼の折檻が怖い訳じゃない。

　怖い訳じゃ、ないんだからねッ!!

「よっす、一夏。さっきぶり」

「お、おう。穂次」
「どした？　つーか、何。そのウサミミ……」
「いや、まあ。なんというか」
「篠ノ之さんがスッゲー厳しい顔で俺の横を過ぎてったのと何か関係あんの？」
「あー……まあ」
「……え？　まさか世界の篠ノ之博士が埋まってるとか？　つーか、ウサミミが地面から生えてる時点でだいぶ意味不明なんだけど」
　もしかして地球はバニーさんだった……？　また一つ世界の謎を解明してしまったぜ！　いや、冗談はともかくとして。
『引っ張って下さい』とわざわざ書いている辺り、天才の仕業とは到底思えないのも事実だ。天才と馬鹿は紙一重というから何も問題ないのだろうか……。
「で、引っ張るのか？」
「まあ、こんな紙を張られたらな」
「マジかよ。俺は絶対に引っ張らないぞ！　こんな感じに引っ張らないからな!!」
「あー……」
「……ふっ、流石は天才の罠と言った所か！」
「いや、お前が馬鹿なだけだろ」

「それな……つーか、根元？　も無いんだけど。篠ノ之博士が埋まってるとか思ってたんだけど？　あのおっぱいの！　素晴らしい！　美人な！　篠ノ之博士は一体ドコ!?」
「知るかよ」
「あら、穂次さんと一夏さん……兎の耳？」
「おお、セシリアさん。このウサミミを見てどう思う」
「……穂次さんがしますの？」
「しねぇよ!?　どうして俺の周りの人間は俺に女装させようとしたり、ウサミミを付けさせようとしたり、ホモだったりするんだ!!」
「俺はホモじゃねぇから最後の奴は別の誰かだな！」
「お前に決まってるだろ……！　俺達、友達だろ!!」
「友達をホモ呼ばわりするような友人いらねぇよ！」
　そんな一夏のツッコミを受けながらへらへら笑っているとどこからともなく高い音が響いた。この音には聞き覚えがある。山田先生がＩＳで突っ込んできた時も同じ音がしたからな。
　つまり、この甲高い、耳を突き刺すような音は高機動の何かが迫っていることを示す。
　え？
「うひゃぁっ!?」

轟音と激震。俺の背後に突き刺さった何かがソレを地面に伝わらせ、俺が飛び跳ねて驚くに足る脅威を伝えた。

俺はその脅威を睨むよりも前に、俺の前に居た二人を睨んだ。

「う、うひゃぁ、って……ぷっくく」

「うひゃぁっ、フフフ、フフ」

「あのさ！　お前ら、人が驚きで出た素っ頓狂な声を笑うってどうなの!?　スッゲー恥ずかしいからやめて！」

「『うひゃぁっ!?』」

「何録音してんで――すか、ね？」

「いやはや、ツマラナイけどいっくんが笑ってくれるとってもいい物が録れたよ！」

その人はドレスだった。正確に言うなら、エプロンドレス。腰ではなく腹部に巻いたベルトにより細さが強調されている。頭には機械式のウサミミがあり、流れるような長髪が実に綺麗だ。顔も何度も資料で見たことがある。

そして、何より、なんだ、このおっぱいは。いいや、ソレこそバランスが良過ぎてデカく見える。ここまで素晴らしいバランスを見せられると、流石に唖然とするしかない。

「素晴らしい、おっぱいですね」

「ああ、私に話しかけないでもらえるかな？」
「あ、一夏の言う通りの人だわ……」
「いや、今のは世間的にも普通の反応だぞ」
「なんですと!?　この天才的人災である束さんが世間と一緒の反応をしてしまったなんて……!!」
「なんで束さんが落ち込んでるんだよ」
「篠ノ之博士。安心してください。世間の考えなど、アナタの頭脳と比べれば塵芥と燃えるダイヤモンド！　全く別モノです！」
「……あー、俺だとツッコミが追いつかない」
「その別モノな頭脳、奇抜な発想。そう、世間如きと同じ反応など、篠ノ之博士に似合わない！　俺におっぱいを触らせることにより、その世間と同じというレッテルを剥がすのです!!」
「し、仕方ないなぁ！　この天災、篠ノ之束が世間と同じ反応なんてする訳ないね！　このおっぱいを、君に！」
「うっひょおぉ――フベッ」
「あ、ゴメン。用事があるからまた今度ね！」
「そ、そんな……俺に、俺に救いはないんですか!!　スカートの中を覗けるとか！　そう

いう特典があってもいいじゃないですか!!」
「穂次さん？　ちょっとだけ黙っててていただけますか？」
倒れた俺の背骨に圧し掛かる何か。感触からして硬いのと、後ろを振り返ればセシリアさんが足を僅かに上げてることからきっとセシリアさんが俺の背中を踏んでいるのだろう。
なんで俺が踏まれなきゃならないんだ！　特典か!?　特典か!!　特典だな!!　うひゃぁぁぁあ!!
「セシリアさん！　やめて踏まないで！」
「……踏むなら素足で、とか言いませんわよね？」
「何故ばれた!?」
「……」
「それで、いっくん。箒ちゃんはどこかな？」
「え？　あー……」
「篠ノ之博士！　俺知ってますよ！　本館の方です！」
「うーん？　私の箒ちゃん探知機だと本館じゃなくてアッチなんだけどなぁ？」
「壊れてるんじゃないッスか？」
「そっか、元々君は壊れていたね。イヤッハッハッハ、束さんも忘れてたよ☆」

「なんだろ、スゲー不当な扱い受けた気がするゾ☆」
「こんな美人に不当な扱いを受けれるなんて、君は実に幸せだなぁ」
「なるほど！　やっぱり篠ノ之博士って天才ッスね！」
「そうでも、あるかな！」
「アッハッハッハッ！」
「ハッハッハッハッ！」
「……一夏さん」
「何も言うな、セシリア。俺はもうツッコミはしない」
　へい、そこの友人！　俺達だってドコまで突き進めばいいかわかんないんだから、いい加減に止めてくれ！
「ま、いいや。それじゃ、またね、いっくん」
「あ、はい。出来れば千冬姉の居るときに戻ってきてください」
「うんうん！　勿論だよ！　なんせ、ちーちゃんと私は親友だからね！」
「美人同士の絡みか……鼻から熱い何かが迸るゼ！」
「……」
「アァ！　踵でグリグリするのやめてぇ！　筋肉のスジに入ってるから！　痛いから！」

「……」
「無言!?　セシリアさん！　無言はいけませんよ！」
「それじゃ、そこで這い蹲ってるヒトもまた後でね！」
「助けて篠ノ之博士！　せめてこの状況に一言何か言って下さい！」
「うーん……？　野外でそういうプレイはイタダケナイゾ！」
「な、な、な、何を言ってますの!?」
「ぐへあっ！」
「穂次……いいヤツだったな……」
「じゃ、また後でね！」
　ステップでも踏むようにスカートを翻しながら走り去った篠ノ之博士。果たして鼻歌でも歌っていたのだろうか。そんな事よりもどうしてスカートの中身が見えなかったのか、鉄壁にも程がある。もう少し守備を弱めてもいいだぞ……！
　スカートも見れないのなら仕方ない、という声を「よっこいしょ」に変換して立ち上がる。少しだけ痛む背中を押さえてしまう。
「アテテテテ……」
「その、穂次さん大丈夫ですか？」
「セシリアさんの全体重が掛かった程度で別に問題ねーです。つーか、軽かったし。踏

まれて嬉しかったし。あの状態になると苦しいが気持ちいいになるって、エロい人が言ってた。な、一夏！」
「急に俺に飛び火させるのはやめろ。セシリアも信じるな。コッチを凄い冷たい目で見るな。そういう目は穂次にしてくれ」
「照れるぞ！」
「……」
「スッゲー冷たい目だぁ……」
「それより、穂次も泳ぎに行くのか？」
「俺の場合は泳ぎに行くというよりも、女の子を見に行くと言った方が正確、かな」
「それ、キメ顔でいう事じゃないぞ」
「穂次さん？」
「ゴメンナサイ!!　……なんか最近、俺の説教ポイント多くね？　気のせい？」
「気のせいじゃないかも知れないが、お前のせいだから問題ないな」
「なるほど！　俺のどこが悪いんですかね……」
「頭の中？」
「直しようが無い！」
　果たして俺の頭の中が悪いのならばどうすればいいのだろうか。やっぱり真面目に

するべきなのだろうか……でも、真面目におっぱいを求めている俺としては今こそ真面目な訳であって、なんだ真面目じゃないか。
「セシリアも海に行くのか？」
「！　そ、そうですわ！　わたくしも海に、い、行くのですが」
「なんかスゲー挙動不審になってんですけど、大丈夫ッスか？」
「お黙り！」
「ヒッ……急に女王様みたいな口調になったんですが……最高だと思う。思わない？」
「知るか」
「ふぅ……それで、その。背中にはサンオイルが塗れませんので、その――」
「なるほど。一夏、ご指名だぞ」
「俺？」
「いえ、その……で、できればなのですが。穂次さんに……」
「……一夏、俺を殴ってくれ」
「任せろ」
「痛い！　何の躊躇もなし!?　もっと何かあるだろ!!」
「お前が殴れって言ったんだろ？　それで？」
「痛かった。夢じゃない……え？　夢だろ。いや、むしろ夢でオールオッケー。何も問

題ない！」
「……なあ、セシリア。穂次にソレを頼んでよかったのか？」
「少しだけ反省してますので、ちょっとだけ待って下さいまし」
　殴られた俺を見下すように立っている一夏とセシリアさん。額に抱えるように手を置いたセシリアさんが溜め息を吐き出してコチラを見た。青の瞳がコチラを貫き、スッと細められた。
「まあヘタレなので問題ありませんわ」
「ぐはっ」
「穂次！　大丈夫か!?」
「お、おのれ、セシリア・オルコット……！　この恩はちゃんと返すからなぁ!!」
「待ってますわ」
「穂次の中ではさっきの発言がいい出来事として認識されてるのか……え？　どういうこと？」
　混乱する一夏を放置する様に、鼻歌混じりにステップを踏んで歩き出すセシリアさん。
　やっぱりスカートの中身は見えなかった。

脳内には特殊なフィルターが存在している

「海だ……」
「今更だな」
「海……水着、女の子……ウッ、股間が！」
「……さて準備運動をするかな」
「無視はやめてッ！」
はいはい、と言わんばかりに面倒そうな顔で準備運動をしながら俺の方を向いた一夏。というか、コイツはどうして準備運動なんかしてるんだ……。
「お前……なんで準備運動なんかしてるんだよ……」
「準備運動は大事だろ。足がつって溺れてもカッコ悪いだけだろ」
「海にまで来て泳ぐのか……」
「お前は海に何をしに来たんだ、いや、聞きたくない」
「ふっふっふっ、聞きたいか、織斑一夏ァ！」
「いや聞きたくないって言ってるだろ」
「……じゃあいい。もう言わん！」

「ああ、そうしろ」
「なあ、一夏。ノリ悪いぞー。もっと構えよー」
「俺は束さんとお前のボケ倒しに疲れたんだ。ちょっとは休ませろ。というか、お前も準備運動しとけよ」
「ふっふっふっ。俺は問題ない。なんせ海に入らないからな！」
「……ああ、なるほど。うん、それなら仕方ないな」
俺の言葉に何かを察したのか、一夏は可哀想なモノを見る目で俺を見た。俺はヘラヘラと笑ってなるべく冷や汗を見せない様にする。
泳げなくっても、女の子は見れるから（震え声。
「い、ち、か！」
「うわっ」
遠目でドコかを見ていた俺は声でようやく一夏の方向を見る。そこには一夏へ乗っている鈴音さんがいた。オレンジと白のタンキニを着ている彼女は自身の良さである快活さを遺憾なく発揮し、そしてまるで猫の様に一夏にじゃれ付いている。羨ましい。
「アンタは真面目ねぇ。穂次を見なさいよ。何もしてないわよ？」
「いやー、鈴音さんに見惚れてただけッスよー。実に可愛らしいと思う。つーか、イイネ！」

「ふふん！　そりゃぁ、あたしだからね」

いやー、ホント！　おっぱいありゃぁ完璧だったと思いますよ！　とは口が裂けても言わない。言えば口が裂けるどころか身体が裂けそうだ。

それにしても程よく引き締まった腹部である。愛らしい臍まで見えて実に素晴らしい。やはり海は最高だ。

「お前もちゃんと準備運動しろよ。溺れても知らねぇぞ」

「あたしが溺れたことなんてないわよ。前世は人魚ね」

「人魚？　……いやいや、無いだろ」

「穂次、ドコを見て言ったのか教えてみなさい？　もしくは黙って殴られる？」

「どちらにしても殴られると思うんですが、ソレは……」

貧乳な人魚なんている訳ねーです。貝殻の水着を着こなせる様な胸になってから言うんだ。

けれど、そんな彼女が傷つくような事は言わない。なんて俺は紳士なんだ！　バレてっけど。

鈴音さんから視線を外してボンヤリと女の子達を眺める。あのおっぱいの大きな子なら、きっと似合うかも知れない……いや、あの子だろうか。なんだろうか、胸がドキドキする。なるほど、コレがトキメキというヤツか……!!

「穂次さん？」
「トキメキじゃなかったんだな、って……」
「どうしましたの？」
「いや、なんでも――」
息を飲みこんだ。
果たしてコレは夢なのだろうか。少なからず現実ではないのだろう。砂浜に反射した光か、それとも彼女の金髪が光を反射しているのか、もしくは彼女自身が輝いてるのか。白い肌を青いビキニで隠したセシリアさんはとにかく素晴らしかった。
小首を傾げているその姿も。パラソルを持っている事すらも。実に夏らしくてグッドである。
熱い何かを鼻の奥に感じながら、上を向く。空は素晴らしい青空だ。
「ほ、穂次さん？」
「……いやー、空が青いッスなァ」
「え？　はぁ、まあ、そうですが」
「ふぅ……」
なんとか熱を遠ざけた俺は今一度セシリアさんに向く。煌びやかな淡い金髪から視線を下げていき、整った美貌を過ぎる。扇情的とまで言えるおっぱい。その谷間には先

日プレゼントした雫型のシルバーの飾りが付いたネックレスがアクセントとして乗っている。羨ましい。更におっぱいは青いビキニにより強調されてはいるが、それほどの下品さは感じない。果たしてソレは彼女の雰囲気のなせる業なのか。

更に下へと視線を動かす。括れている柔らかそうなお腹。腰にはパレオが巻かれておりその奥にあるであろう秘境を実に心躍る。パレオの先から伸びた足は健康的であり、そのおみ足に踏まれたいとすら感じてしまう。つーか、踏まれたい。

さて、視線をおっぱいに戻そう。谷間まで強調されたそこに潜りたい。顔を突っ込みたい。けれどそんな感情を言ってしまえば彼女に嫌われてしまうかも知れない。ここは我慢だ。我慢の時である。

「おっぱいを触らせて下さい！」

「……」

「……」

「あれ？　なんで黙られるの？」

「いや、むしろなんで大丈夫だと思ったんだよ」

「コレでもだいぶ妥協に妥協を重ねた願いだったんだけど……」

「よし、穂次。お前はもうこれ以上喋るんじゃない！　もう手遅れかも知れないが、傷を広げることはないんだ！」

「なんでだよ!?　あんなステキな格好してんだぞ!?　一瞬女神かと思ったわ！　むしろ触らなきゃ失礼だろ！　了解取ってるだけマシだろ!?」
「お前の考えがオカシイ事はよくわかった」
「オカシイのはお前だろ!?　――あ、いや、うん、なんでもないゾ！」
「待て穂次。お前絶対に俺のことをホモだとか思ってるだろ、違うからな?」
「こ、コホン」
「ヒッ、セシリアさんゴメンナサイ！　出来心なんです！　下心しかねーです！」
「ま、まあ許してあげますわ」
「ん?　そりゃぁ、ありがたいけど……なんか耳赤くないッスか?」
「!?　た、太陽が暑いんですわ！」
「お、おう……」
「ん?　なんで鈴はニヤケてるんだ?」
「なんでもないわよ。そうね熱い熱い」
「鈴さん！」
「はいはい。それじゃ、一夏泳ぎに行きましょ。穂次も後から来ていいわよ?」
「あっはっはっ。行けたら行くさ」
来てもいい、とは言われたけれど、鈴音さんの目は来るな、と言っていた。流石に俺

はソコまで空気の読めない男ではない。フッ、俺は察しのいい男なのである。

さて、セシリアさんからパラソルとシートを奪って適当なところにシートを広げる。太陽を見上げて影の位置を調整しながらパラソルを砂浜に差し込む。手を放して動かない事を確認してから頷く。

「さて、どうぞ。セシリアさん」

「あ、ありがとうございます……」

「いえいえ。つーか、マジで眼福状態なんで。むしろお礼を言うのは俺の方だ。ありがとう！　ありがとう!!」

「……はぁ」

一つ溜め息を吐き出されて俺をジト目で睨んでいるセシリアさん。そんな様子も可愛いのでむしろご褒美である。

「あー！　夏野くんがセシリアに何かしてる！」

「なんですって!?」

「どういう事!?　夏野くんには織斑君という嫁がいる筈でしょ!?」

遠くから声が聞こえた様な気がする。いや、気のせいじゃないだろう。振り向いて、手を軽く振っておこう。いつもの様にヘラヘラ笑っていれば問題は先送りに出来るだろうし。

何より、否定するのも面倒で、面白くない。
「あー……いや、まあいいか」
「よかったんですの？」
「ま、訂正は後でも出来るし。セシリアさんのサンオイル塗りはセシリアさんの気分とかが変わらない内にしないと出来ないと思うからなー……というよりも、サンオイルって、肌でも焼くの？　白くて綺麗なのに」
「……」
「おーい、セシリアさん？」
「あ、いえ、申し訳ありませんわ」
「いや、いいけど。大丈夫か？　熱中症なら早く言うんだぞ？　介抱なら任せろーバリバリ」
「いえ、大丈夫ですわ」
本当に大丈夫だろうか。少しばかり上の空な気もするけれど。もしも熱中症だったならば、俺はセシリアさんをおんぶして旅館に戻るだろう。旅館までの道のりでは背中におっぱいを感じながら帰るんだ……！
「それで、肌を焼く訳じゃありませんわ」
「そうなの？　オイルって言うぐらいだからてっきり」

「日焼け止めとしての効果が高いものなので……」
「はへぇ……んじゃ、セシリアさんの肌はそのままなのか」
「う、嬉しいですか？」
「へ？　別に」
「……」
「えぇ……急に不機嫌になるのもどうかと思うんですが」
「ふん……」
「あー、まあ、あれッス。セシリアさんの肌が白かろうが、黒かろうが、俺にとってセシリアさんはセシリアさんなんで、可愛い事は変わらねーですなぁ」
「そ、そうですか！」
　チョロいなぁ。可愛い、と一言混ぜただけでこの機嫌の戻りようである。変な男に騙されないか非常に不安だ。いや、むしろ俺のせいで手遅れなんだろうか。
「で、では、お願い致しますわっ！」
「へいへい。微力を尽くします、女神様。　つーか、オイルのことを聞いたから分かると思うけど、初めてだから何かあったら言ってくれ」
「わかりましたわ」
「あとおっぱいに手が滑るかもしれないけれど、決して故意ではない。そう、つい、手が

滑るかも知れない。でも故意じゃないから――」
「……」
「そんな腐った魚でも見る目で見ないで下さい。気をつけます」
「よろしいですわ」
「触っても!?」
「死ね」
「スイマセン。絶対にしません」
　というよりは、恐らく出来る度胸は出ないだろう。ヘタレと言われようが関係ない。それこそラッキースケベでもない限り本当にする気は無い。むしろそんな余裕はない。
　こうして水着姿のセシリアさんを見ているだけでだいぶ下半身がイケナイ事になっているというのに、こんな状態でおっぱいに触ってみろ。絶対に俺は賢者タイムに入れる。
　こうしてセシリアさんがパレオを脱ぎ、ブラを抑えながら首紐を器用に片手で外す仕草を見ているだけでだいぶキている。
　うつ伏せになったセシリアさんの体重によって潰されたおっぱいが僅かに歪んで脇の下から見えている。更に視線を動かせば無防備な背中。その沈んだ背骨を辿れば、発育のいいお尻が見える。果たして桃源郷はここにあったのだ……。

生唾を飲み込んだ。果たして動いた喉の音が彼女に聞こえていない事を願う。
暑さだけではない口の渇きを幾らか誤魔化して、なるべく彼女に悟られないように口を開く。
「あー、じゃ、じゃあ揉むからな」
「穂次さん？」
「すいません、真面目にします」
セシリアさんの冷たい声でようやく俺の自制心が働き出す。深呼吸を一度だけして気持ちをちゃんと落ち着ける。とにかく、俺の下半身が完全に臨戦態勢な訳であるが、鎮める前にバレる事は本気で避けたい。本当の意味での変質者になるべきではない。手遅れかも知れないが、それでも俺だって守るべき尊厳はわかっているつもりだ。
頭の中でＩＳの初期理論を唱えながら、サンオイルを手に出す。粘りも無いオイルの冷たさが俺を冷静にしてくれる。冷静になった俺はまた目の前に横たわる美女を見てエレクトしそうになる。
なんだ、この幸せ無限ループは……!!
いや、果てれないことを考えれば生殺し以外の何物でもないけれど。
今一度、再度深呼吸をして、手にオイルを延ばしていく。果たしてコレが合ってるかどうかなんて俺には既にわからない。今の俺が正常に思考しているのはセシリアさん

に危害を加えない事だけだ。
　背中に触れる。
「んっ」
「わ、ごめん。冷たかったとか？」
「い、いえ、その驚いただけですので……そのまま」
「オッケーッス。お姫様のご要望のままに」
　自分の軽口にこれほど感謝した事はない。普段からヘラヘラ笑って軽口を言ってることが幸いした。
　セシリアさんの声に驚いて離してしまった手をもう一度背中へと向け、触れる。
　オイルによる滑りではない。こういう肌がきめ細かいと言うのだろうか。スベスベでずっと触ってても飽きないだろう。ずっと触ってるなんて出来ないけれど。
　セシリアさんの体温と僅かに感じる鼓動。触れている肌は柔らかく、スベスベで、ああ、ヤバイ。何も考えれなくなってきた。ヤバイ。スゲー。女の子ってスゲー。いや、この場合はセシリアさんがスゲー。マジスゲー。
「――次さん？　穂次さん？」
「あ、うん。どうした？」
「その、せっかくですし……手の届かないところは全部お願い致しますわ」

「……と、言いますと？」

「脚と、その……お尻も」

俺は目の前が真っ白になった。

まてまて、俺の意識ちょっと待つんだ。まだ意識を飛ばすには早い。もう少しだけ頑張れ。

無意識で吸い込んでしまった空気を小さく、細く吐き出していく。相変わらず煩い心臓と、ソレと同期でもしてるのか炉に火をくべたように熱を持っていく。

頭の中で解法していたＩＳの理論を思い出す。果たして欲望に塗り潰されたソレはどこまで進んでいたのだっけか。

軽口も一つ二つ言いながら俺は脚へと視線と手を伸ばす。実に肉付きのいい脚である。むっちり、というべきなのだろうか。いいや、コレは言葉に出さない。

そもそも軽口の一つ二つを言いはしたけれど、そんなモノ五秒も経たない内に忘れてしまった。俺は目の前の魅惑的な脚の方が大切に決まってる。

ふくらはぎに詰まった柔らかい感触にゾクリと何かが走る。僅かに揉む様に力を込めればしっかりと筋肉の感触もするのだけれど、何より肌が気持ちよすぎる。

膝裏を通過して、太ももに。コチラも触り心地のよい、素晴らしい脚だ。挟まれたい。入念に、けれど決して本格的な下心は隠し、一息。

さて、俺の目の前には魅力を詰め込んだのか、魅惑的なお尻がある。発育のいい、柔らかそうな、いや確実に柔らかいであろう、お尻である。

大きく、息を吐き出す。いつの間にか止まってた呼吸をどうにか起動させて脳に酸素を送る。口に溜まりもしない唾液をどうにか喉に押し込んで、決して魅惑に負けない心を持ちながらお尻に触れる。

「んぅっ」

セシリアさんの艶かしい声が耳に聞こえる。けれど俺を止める様な声はない。

ふにゅりと俺の手の力によって歪むお尻の形と手に広がる何にも例え難い感触が俺の脳内と下半身を蝕んでいく。もしかしたら俺はココで死ぬかもしれない。幸せで死ぬことはあるのだろうか。腎虚とか？

ちょっとした賢者モードである脳内がそんな結論を出してきたが、賢者であろうが、愚者であろうが、俺はこの柔らかい感触を堪能する。堪能したい。むしろすべきである。

少しだけ力を込めて尻たぶを揉む。柔らかい感触が手に広がると同時に自分の中にある黒い感情がフツフツと湧き上がる。

「――ッ」

「あ……」

それは本当に小さな声だった。けれども確かにセシリアさんは痛みを訴えるように声を出した。

次第に冷えていく頭が今の現状を嫌になる程伝えてくる。

息を飲みこんだ。次は彼女が綺麗であった、という理由ではない。

「わ、悪い」

「あ、いえ――」

「――頭冷やしてくる。悪かった」

立ち上がった俺をチラリと見たセシリアさんは何かを否定したい様な顔をしていたけれど、ソレはそれ。俺は決して彼女を振り返らずに海へと向かった。

なんとも格好の付かない、敗退である。

水着姿の騎士と第二王女

砂浜。波打ち際に座った穂次。周りには人は居らず、喧騒はそれなりに遠くから聞こえもしている。一人になりたかった、という目的で移動していたのだから穂次の目的は達成したと言えるだろう。

穂次は後悔をしていた。それこそ自身の定めたラインを容易く自身が越えてしまった事に。ぼんやりと空と海の境界を眺めながら頭の中では自身を咎めることばかり考えている。いや、その一抹にはセシリアの悩ましい声がリピートされ、手に広がった柔らかい感触を味わい尽くしている自身もいる。尤も、ソレこそが咎められるべき彼なのでもあるのだけれど。

「……はぁ」

「どうしたのさ、そんなに落ち込んで」

「ああ、シャルロットさん」

一つ、大きく溜め息を吐き出した所で声が聞こえた。数日も同じ部屋にいたシャルロットの声である事は穂次にとってスグに分かる事だ。

振り返ることすらも億劫なのか、身体を後ろに反らして、顔を向ける事で穂次の視界

には天地の逆転したシャルロットが見えている。
　シャルロットは少しばかり心配そうな視線を穂次に向けており、黄色の水着がその肢体を隠している。男性と偽った時はどうしていたのだと言いたくなる小さくは無い乳房。惜しげもなく晒し出している腹部。
　そんな頭を空に向けて下げているシャルロットを穂次は目を細めて見る。
「あー、実に可愛い水着姿ですねー。でももうちょっとだけ待ってくれ。色々ありすぎて軽口も回らない感じなのです」
「そうなの？」
「いえーす。このまま海に帰りたい。いや帰りたくない」
「どっちなのさ」
「どっちでも。つーか、一応人の少ないところを選んで来たんだけど、なんでいるんスか？」
「あー、アハハ……えっと、私も人の多いところはちょっとだけ苦手で」
「そうッスか」
　よっこいしょ、と言いながら穂次の横へとしっかりと座ったシャルロット。シャルロットがここに来たのは『穂次がぼんやりとココに向かっているのが見えた』からなのだ。当然、そんな事本人には言えない。

こうして相対すれば穂次の元気がない事はよくわかる。序でに言えばココに来るまでに幾らか女生徒達とすれ違ったけれど、穂次はそれに対して軽口を叩いて変わらずへらへらと笑っていた。ソレはシャルロット自身は確認している事で、穂次の言う「軽口が回らない」というのは嘘なのかも知れない。

少しだけむっとしてしまったシャルロットが悪いという訳ではない。それこそ意中の相手に褒められない、という事とその意中の相手が他の人を褒めている事を考えれば多少の不機嫌も仕方の無い事だろう。

けれど今の穂次の状態を見ていれば、本当に軽口も回らないのだろう。ソレぐらいはシャルロットが察することは出来る。

他の女生徒達への軽口は本当に元気を絞り出したソレだったのかも知れず、既に尽き果てた、という事なのかもしれない。

「それで、どうしたの？」

「別にィ。でもちょっとだけ落ち込んでるのですよー」

「……もしかして、セシリアに何か言われたとか？」

「むしろセシリアさんに粗相を働いてしまった、と言いますか。なんと言いますか」

ふむ、とシャルロットはアゴに手を当てて考える。

これは、もしかして、いいや、もしかしなくてもチャンスなのではないだろうか。

穂次を狙っているセシリアと自身を大きく引き離すチャンスなのではないだろうか。悪評を言う訳ではない。セシリアのことを忘れてしまう様に、自身に集中させれば何も問題など無いだろう。

「何があったか聞くよ。吐き出せば楽になるかも知れないしね」

「あー……」

「ほら、前に色々と聞いてもらったし。そのお返し」

自分は何をしているのだろうか。きっとこの穂次の悩みの種を解決してしまえば、穂次とセシリアはいい感じになってしまうかも知れないというのに。

つまり、ソレは自身の想いが叶わないという事にも繋がるというのに。どうしてか、ほっとけなくなった。

多少、穂次が言い渋ることもあったけれど、一連の行為が穂次の口から吐き出され終わった。当然、常識は無いけれどある程度の良識を持ち合わせた穂次により「俺の股間がスターライトｍｋⅢ！」なんて冗談は飛ぶことは無かった。

その全てを聞いたシャルロットは心に湧き上がる「なんて羨ましい行為をしてるんだ」という感情に蓋をした。なんとなく自身をセシリアに置き換えて、触れられる事を考えると、それこそセシリアの声の意味は分かる。分かる気がする。

果たしてソレを彼に伝えるべきなのだろうか。いいや、きっとソレは伝えるべきでは

ないだろう。それこそ自身と彼女の為に。
「なるほど」
「って事で、まあ、セシリアさんに嫌われました」
「？　セシリアに直接言われたの？」
「いや。つーか、流石に自重出来なかったし……」
「いつもの冗談言ってる穂次はどこに行ったのさ」
「その穂次は現在反省中でーす」
「……まあ、セシリアは穂次のことを嫌ってはないと思うよ？」
というよりも、たぶん今頃後悔しているのではないだろうか。
シャルロットが苦笑いをしながら視線を穂次から喧騒の聞こえる方向へとズラす。
きっと悩んでいるだろう彼女を思い浮かべて、珍しく弱っている穂次へと視線を戻した。
戻してから、ようやく気付いた。
どうして穂次は私の前でこんなに弱々しいのだろうか。
元気がない、と言えばソレまでなのだけれど、ソレでも彼ならば空元気で自身を適当にあしらって消えることも出来たかもしれない。
「まあ嫌ってなかったとしても、俺としてはアレは咎められるべき行為だったのですよ」

「ふーん……いつもの穂次らしくないね」
「その穂次君は海の底で反省してるから」
「じゃあ君は誰なのさ」
「ホント、誰でしょーね。俺もわかんねェッス」
冗談みたいなシャルロットの問いかけに対して、ようやくヘラリと笑うことの出来た男は息を吐き出して立ち上がる。
「よし、色々聞いてくれてサンキューです」
「もう大丈夫？」
「あー、まあ、なんつーか、変に弱い所を見られた方がちょっと辛いッスなぁ」
「私は別に気にしてないけど？」
むしろ、ちょっとだけ弱い彼を見れることに優越感を覚え始めた。
穂次としては秘密にしたい事を自分だけは知っている、という事は非常に心にくる。
まあその秘密にしたい事が別の女が原因というのは頭にくるが。
「ホント、シャルロットさんには頭があがらねーッス」
「ほら、穂次は私に仕えてるからね」
「第二王女様の御心のままに……てか、よくその設定覚えてたな。何気なく吐き出した設定だったんだけど」

「それは、まあ」
　そっぽを向いて空笑いをするシャルロットに疑問を感じる穂次。その疑問を問いただすことは無い。問いただした所で答えはまともに返ってこないだろう。
　そんな何度か夢に出てきた『騎士な彼と王女様な自分の禁断の恋』のせいで覚えていた、なんて事は決して無い。ないったら、無い。
「セシリアさんに謝らないとなぁ……許してくれるといいんだけど」
「でもほら、セシリアにも冷静になってもらわないといけないから、ちょっとだけ時間は必要だよ」
「そうですなぁ……お昼時にでも謝りますかね」
「そうだね。それじゃ、……お昼までわたくしと遊んでくださらないかしら？」
「……謹んでお受けいたします、姫様」
　立ち上がっていた彼に対して手を弱く差し出せば、彼は少しだけ間を空けてから手首を優しく掴んでシャルロットを立ち上げる。そして頭を垂れた辺りで二人同時に噴き出した。
「プッ、ふふふ」
「アハッハッハッハ！　二人とも水着だから格好もつかねーッスなぁ」
「そうだねー。それに穂次は騎士としての忠義よりもおっぱいを見そうだし」

「そりゃぁ、欲望には忠実に生きないとネ！　ああ、シャルロットさんシャルロットさん――」

「おっぱい触るとか言ったら灰色の鱗殻だよ」

「風穴が一つ増えそうですね……」

風穴どころの話ではないのだけれど、ソレはともかくとして。

穂次はようやくシャルロットの姿を再確認する。セシリアほど白くはないが、それでも十二分に魅力的な肌を晒し、穂次に見られている事を認識して隠すでもなく、少しだけポーズを決めてみせたシャルロット。

「どう？」

「――……うん」

「いやいや、なんで海の方を向くのさ」

「まあまあ。神様に近しい存在を直接見ると障るって謂われてるからっい」

「なにそれ」

「天使だって直接見てると気が狂うかも知れないだろ？　そういう事」

「ふ、ふーん」

「あんまり褒めなれてないんだから、俺にこういうのを求めるのも間違ってるんだゾ☆」

「軽口ではスグに出るのにね」

「そういえばそうだな……なんでだろ」
「なんでだろーね。ふふ。さ、泳ごう？」
「……え？　泳ぐの？」
「だって海だよ？」
「いや、海だけど……あー、ほら、準備運動しなきゃいけないから」
「ほら、そう言わずに。行くぞー！」
「あ、待って待って！　腕持って行かないで！　うっひゃぁ！　柔らかいおっぱいが俺の腕に当たってますよ！」
　穂次の分かりにくい褒め言葉とソレが本人も理解出来てない軽口否定の言葉を受けて少しだけ上機嫌になったシャルロットは穂次の腕を抱いて歩き出す。
　抱き締められた腕に当たる柔らかい感触にテンションが急に上がっている穂次。けれども目の前に広がる海と『泳ぐ』という単語に身体は引け気味である。
　さて、おっぱいを押し当てる事は成功したシャルロットであるけれど、彼女とて乙女であるそれなりに常識を持った人物である。当然、それは羞恥心もある事を意味して、露骨におっぱいを押し当てている事を明言されれば流石に恥ずかしくなる。
　穂次相手に恥ずかしがる、というのはなんというか釈然としない。照れ隠しに繋がるのだけれど……変に照れ隠しをするよりも、穂次が相手ならば簡単な照れ隠しの方法が

ある。

「もう、穂次の変態！」

「ちょ、押し出すのは、がぼがぼ」

「え？　ちょ、大丈夫!?」

冗談ではない明らかな溺れ方に焦るシャルロット。不運なことは彼の居た位置から変に水底が深くなっていた事だろうか……。

いいや、そもそも彼が泳げないことを言っていれば問題は起きなかったのかもしれない。

どちらにせよ、彼は溺れてしまったのだからもう遅い話なのだろう。

少しの間、溺れてぐってりした穂次を膝枕をする。というシャルロットが砂浜で見れるのだけれど、ソレは語るべきではないのだろう。

喜劇の少年

時刻は午後七時を回り、短針は八への旅路を半分程過ぎた辺りである。
昼食時に出会ってしまったセシリアさんに対して、流れる様に土下座をした俺はアッサリと、本当にアッサリと許された。むしろ、俺の土下座に対して慌ててるセシリアさんが見れた。おっぱいが揺れていた。
かくして謝った俺はアッサリと、それこそ当然の義務の様に「ナイスおっぱい！」と言ってしまったのだ。俺は悪くない。そう、魅力的なそのおっぱいが悪いのだ。
いつも通りの冷たい視線に晒されたことは俺の記憶に新しい。というよりも、精々七時間程前の話なのだから覚えないと変である。
「穂次は座敷じゃなくていいの？」
「へ？　なんで？」
「ほら、アッチには一夏もいるよ？」
「一夏が目的で座敷には行かねーよ！」
イイ笑顔で俺の隣で爆弾を投下しやがったシャルロットさん。
件の一夏はこの部屋に居らず、隣の大宴会場にいる。隣にはたぶんボーデヴィッヒさ

んと鈴音さんが居る事だろう。どうせあの空間は時空が歪むような嫉妬とか色々渦巻いてるから見たくも無い。

さて、今一度隣にシャルロットさんを見る。浴衣を着用している彼女からはシャンプーのいい香りが漂い、僅かに開いている胸元が実にセクシーである。いいや、セクスィだ。

胸元を見ているのがバレタのか、手で浴衣の胸元を直しながらコチラを睨んでいるシャルロットさん。それは逆効果というモノだ。

「穂次さん?」

「イタイイタイ。耳を引っ張らないでセシリアさん！　芳一みたいになっちゃう！」

「ホウイチ？　誰ですの?」

「日本の物語の一つだね」

「日本で生まれた超美形のエルフの話だ。そう、俺の様な超美形にな」

「はいはい」

「そうですか」

「二人共俺の扱い酷いくないスかね？　もっと構ってもいいんダゼ！」

冗談と分かられているモノをツッコまれずにスルーされるというのは辛い。

あの何にでも反応してくれるセシリアさんやノリのいいシャルロットさんはドコに

行ったんだ!?　貴様ら、偽物だな！　あ、スイマセン、睨まないで下さい。
「昼は座敷だったのに、夕食は座席なんですわね」
「え？　あー、まあ正座ってどうにも苦手で」
「その割りには長時間説教されてる時の穂次は正座だけどね」
「まあ正座だと説教を思い出す、って事で」
　へらりと笑って理由は隠しておく。別に正座が苦手、というのは嘘という事でもないし。夕食も一緒に食べるという約束をした手前、辛そうに食べられるのも嫌だし。
　それにしても、刺身が美味しすぎる。刺身といえば女体盛りとかを思いついてしまうのだが、人体で熱されたソレは結構問題があるので良い子はマネしちゃいけないゾ。
「それにしても」
「なにかな？」
「いや、セシリアさんはともかくシャルロットさんはワサビいけるのかなぁ、と」
「ちょっと、どうしてわたくしは度外視しましたの？」
「前のサンドイッチに入ってたから、味見をした筈のセシリアさんは問題ねーでしょ」
「え？　入れた覚えはありませんが……」
「ナニソレコワイ。ワサビだと思ってたあの味は一体なんだったのか……いやぁ、隠し味を考えるだけでドキドキするなぁ！」

このドキドキはきっと身の危険を感じてるソレである。え？　あの辛味がワサビじゃないって……え？

いやいや、今はソレはいい。直ちに命に影響は無いから問題ない。いや、問題はあるけど。

スゲー可哀想なモノを見る瞳で俺を見るシャルロットさん。その視線はセシリアさんに向けられるべきかも知れない。知っても食べる俺も大概だけれど。

「お昼も思ったけど、穂次って意外とちゃんとしてるよね」

「意外、は余計だ。俺ほど規則正しく、自分を律して生きている人間を俺は見たことないぞ」

「ああ、穂次の目がガラス球って事かな？」

「酷いッ！」

「確かに、普段から穂次さんの食事風景を見てますけど、お箸も器用に使ってますし」

「大豆も摘めるよ！」

「そこは小豆じゃないの？」

「じゃあソッチもいけるって事で。つーか、別に普通じゃねぇの？　俺としては食べてる時に喋ってる時点で結構な無作法なんだけど」

「そうなの？」

「って、政府に居るときに叩き込まれた。ホント、あの期間は常識とか良識とか色々叩き込まれたから」
「それでも常識は覚えませんでしたのね……」
「何を言うか、セシリアさん。俺は美人に対して美しいと、可愛い人に対して可愛いと、おっぱいに対しては触りたいと言ってる超常識人だゾ☆」
「普通は全部正直に言いませんわ」
「捻くれて、キザっぽく言った方がいいって事？　花束でも持って俺が登場して手の甲にキスとかするのか……」
「……」
「……」
「どーして二人共黙ってるんですかね。　そのキモ過ぎて黙られると俺もどうしていいかわからないんだゾ☆」
　俺から顔ごと視線を外した二人に対して少しだけおどけてみせる。果たしてキザでキモチワルイ俺に対して引くのも構わないが、現実世界の俺ごと引くのはどうかと思う。つーか、被害者が俺ってどういう事なんだ……。
「ほらほらー、ちゃんと反応してくれよー。その零れんばかりのおっぱい揉んじゃうゾ☆」

「少しぐらい真面目にしてもいいんですわよ？」
「俺はいつだって真面目です！」
「……真面目が間違ってますわ」
「常に真剣におっぱいを求めてる。俺はおっぱいの為に死ねる……」
「なら死んでいいよ」
「シャルロットさん、キツいッスよ！」
　ニッコリ笑ったシャルロットさんの一言が俺の胸に突き刺さる。ニッコリ笑っているというのに、どういう訳か笑顔と認識出来ない。黒い、というか怒ってるのがわかる。
　おっぱいを触ろうとしたセシリアさんが怒るのはわかる。けれどどうしてシャルロットさんが俺に対して怒りを向けるのだろうか。優しいシャルロットさんのことだから世の女性の為に俺を殺そうとしていると考えれば辻褄があう。悲しいけど。
　……！　なるほど、わかったぞ！
「シャルロットさんも俺におっぱいを触られたいと、そういう事ですね！」
「穂次さん、命がいらないようですわね」
「どうしてセシリアさんが怒るんですか……解せぬ」
　ホントに、理解できない。怖い。何コレ怖い。
　俺は一体何を求められているんだ……両方のおっぱいを触ると問題しかないし。い

や逆に考えるんだ、両方のおっぱいを同時に触ってから考えれば何も問題はない。つーか、浴衣姿で妙に肌色が増えて俺の理性がキツい。
「さって、ご馳走様でした」
「？　どこかへ行きますの？」
「腹ごなしに散歩」
「つ、着いていってあげてもよろしくてよ？」
「ぼ、僕も行っていいかな？」
「あー……出来れば一人がいい、つーか、男しか来れないというか」
「……あ、そっか」
「そうですか……」
「そんなに落ち込まれると困るんだけど……。食事時だから一応濁して言ってるだけで、まあ、なんつーか、お察し下さい、いや察してもダメなのか」
流石に俺だって言える事と言えない事ぐらいの分別は出来ている。出来ているだけで言わないとは限らないけれど。
それでも二人は察してくれたようで、少しだけ赤くなって、怒ったように俺を追い出した。
さすがに美人二人に挟まれての食事は緊張したぜ……。さって、心を落ち着ける為に

散歩に行こう。それこそ、俺は正直に散歩に行くと言っているのだから、何も問題はないだろう。

日は海に沈み、耳には波の音が聞こえる。

いくらか花月荘から離れれば喧騒も緩やかになり、明かりも疎ら。いいや、空には明るい月が昇っているのだから弱く砂浜を照り返している。

昼前の事は今でも悔んでいる。シャルロットさんに吐き出した所で解決できるような事でもなく、セシリアさんから許された所で俺の中ではやはり許せないことなのだ。

だからと言って、俺は自分を咎める事は出来ない。その方法も思いつかないし、ソレこそ自己満足に当たるのだから、意味も何も無い。

「やあ、少年っ。　何か悩み事かなァ?」

声に立ち止まる。

ようやく顔を上げた俺の前にはおっぱいがあった。いや、うん、もうちょっとだけ視界を広くしよう。

タレ目な瞳に機械式のウサミミ。エプロンドレスを押し上げるおっぱい。スカートに隠されているというのに、しなやかであると容易く想像できる脚。全てにおいて全人類を凌駕していると自称している篠ノ之博士がそこには居た。
「どうしたんスか。篠ノ之さんはたぶん花月荘に居ると思いますよ」
「いやいや、悩める少年の助けになるのもワタシの役目なのサ！」
「実はおっぱいが揉みたくて、揉みたくて!!」
「なるほど！　ちーちゃんが揉ましてくれるってさ！」
「ちーちゃんなる人は一体どんな人なんです!?　おっぱい大きいですか!?　美人ですか!?」
「当然美人だよ！　黒髪でツリ目で、とっても強いよ！」
「ブリュンヒルデじゃないですか！　ヤダー！」
「アッハッハッ。ちーちゃん以上の美人をワタシは知らないからねぇ」
「篠ノ之博士もいい勝負だと思いますよ！」
「むっふっふぅ、トウゼンだね！　だってワタシは篠ノ之束様なんだからッ！」
「んじゃ、とりあえず織斑先生に通報してきます！　不審な兎を発見したって言えばたぶん通じるデショ」
「アッハッハッ、君はそんな事をしないよ」

「はっはっはっ、わかりません――」
「だって君は篠ノ之束の情報を欲しているからね」
「――」
「いいや、正確には君は私の情報じゃなくて、協力が得たい、かな？」
クスクスと笑う篠ノ之博士に何も言えない俺は少しだけ息を吐き出して苛立たしげに頭を掻く。
そんな何も言わない俺に何を思ったのか、篠ノ之博士の言葉はスラスラと吐き出されていく。
「当然の事を言うけれど、実は私は君に興味が沸いているよ。なんせ、君はいっくんに続いて現れたＩＳ操縦者なんだから。
ん、ああ、この言い方は正しくないかもしれないね。なんせ、夏野穂次という人物は関係者的に言えば、三人目のＩＳ操縦者の名前なんだから。
まあソレは私にとってそれほど重要じゃない事だからどうでもいいけれど。
それにしても相変わらず政府の人は私の理解の及ばない事をするね。まさか君にあんな事を強要するなんてね。人の心はそれほど理解出来てないけれど、私でも拷問と言えるかもしれないね」
「……ま、ドＳが居たって事で」

「ハッハハッ。私の目線で世間の立場なら、いっくんよりも君を保護すべきだったと言えるけどね。むしろ、君は保護されて然るべきだったのかもしれない。尤も、ソレはもう遅いことだけれど。

だって、私で言う一人目はもう存在していないんだから。そうだよね？」

「知らないッスよ。俺はアナタが言う三人目なんですから」

「いいや、ソレも勘違いしているよ。私にとっての三人目なんてこの世界に存在する筈の無い、それこそ未だに居ない存在なんだから。だから私にとってソレは重要じゃない。

きっと三人目が出てくるとしたら、

私の様にイカシた頭の持ち主か……

或いは、君の様にイカレた頭の持ち主だろうね」

「俺は平凡ッスよ、篠ノ之博士。何の取り柄も無ければ、人に言える様な事もない。平凡で、もしかしたらソレよりも劣ってるかもしれないッスねぇ」

「それでも君は選ばれた。選ばれてしまった、って言った方が君の為かもね」

「……ホント、国家機密も何もかもあった物じゃないッスな」

「それこそ愚問だね。私は篠ノ之束だよ？　平凡な君じゃない」

「まあご尤もで。それで、俺をどうこうしようって話ですかね？」

「……そうだね。それもいいかもしれない。でも、それじゃあ君が嫌がるかもしれないじゃないか」
「そのおっぱいに包まれながら攫われるなら、歓迎ですよ！」
「私はエンリョするよ！
　まあ私は君の喜劇を見ていてあげよう。いつまでその調子でいられるのか。笑いながら見ていてあげよう。それこそ、喜劇だからね」
「……それは、どうも」
「いえいえ。ただし、君の喜劇は見ていてあげるけれど、彼らの演劇は見もしなければ、助けもしない。それこそ、君たちで勝手にしてろ、って事だねッ！」
「……ホント、形無しッスなぁ」
「ハッハッハッ。まあ君の助けにはなってあげるよ。一つ条件があるけれど」
「……今の内に聞いときます」
「私の研究材料になってくれないかい？」

「はぁ……生き返るぅ」

湯に浸かれば随分と情けない声が出てしまった。数分前まで美人博士に色々と言い寄られていたのだからきっと心労が溜まったのだろう。ソレを一度以上は確実に味わっている一夏に対して少しだけの申し訳なさを感じる。尤も、それでどうこうするつもりは無いけれど。

篠ノ之博士の条件に対して、俺は答えることが出来なかった。答える前に篠ノ之博士が消えてしまったのだから、答え様がなかった、と言えばそれまでなのだが。

「……はぁ」

「なんだよ、珍しく溜め息を吐いて」

「別にぃ。それよりも何でお前が入ってくるんだよ、一夏……はっ、まさか!?」

「ねぇよ。というか、男同士なんだから別にいいだろ」

「……まあいいか」

「アレか、疲れてる時の穂次だな」

「疲れてるよー。腹ごなしに散歩に出たら篠ノ之博士に会ってさー」

「あぁ……ご愁傷様」

「ホント、何なのアノ人。国家機密を日常会話みたいに喋って、挙句の果てに好きです結婚してくださいだなんて」

「最後のヤツはないから」
「だよな……あんな美人に言い寄られたい」
「俺が言うのもアレだけど、束さんだぞ？」
「篠ノ之博士に言い寄られたい訳じゃなくて、あのレベルの美人に言い寄られたいだけだから」
ふーん、と興味無さそうに声を漏らした一夏は体を流し、俺の隣へと座る。
「ふぅ……」
「いい湯ですなぁ……」
「そうだな……」
「……ちょっと前まで女生徒が入ってると思うと、素晴らしいよな」
「お前さ、そういう事言ってるからシャルロットとかセシリアとかに怒られるんだぞ」
「お前にだけは言われたくない。つーか、俺のコレは仕方ないの。欲望に忠実に生きてる結果なの！」
「もう少し隠そうとしろよ……」
「隠したところでイイ事なんてないからなぁ……つーか、時間よりも遅かったけど、何かしてたのか？」
「ん？　ああ、千冬姉にマッサージをしてた」

「ああ、筋肉硬そうだもんな」
「穂次……短い人生だったな」
「馬鹿野郎……お前も一緒だぞ！」
「嫌だよ」
「俺だって嫌だ」
「というか、束さんと話したって、よく話せたな」
「ほら、俺って？　特別じゃん？　つまり、スゲーわけよ。わかる？」
「あーはいはい。それで？」
「男性ＩＳ操縦者だから興味持ったんだってさ。あの格好で月をバックに『君の助けになりたい』とか言われた。綺麗でカッコよくて惚れそうになりました」
「穂次ってチョロいんだな」
「でも篠ノ之博士はないです。あんなイカシた脳内の人は無理。マジで」
「ちなみに見たと思うけど、肉体スペックも凄いから、あの人」
「ああ、美人だもんな」
「そっちじゃなくて。千冬姉と真正面から立ち向かえる人だから」
「……え？　人外？」
「お前ってやっぱり死ぬんだな」

「ヒェッ……そんなまさか。男湯を盗聴してるなんてそんな事はないだろ。ハッハッハッハッ……え？」

「お疲れ、穂次」

いや、無いから。冗談が上手いなぁ、一夏君は。ハッハッハッハッ……え？

いやいや、とにかく風呂場にいる間は何も問題は起きないはずだ。それこそ一夏がいるのだ……何かあれば一夏を盾に逃げるしかない。

「それにしても、国家機密って、お前が知ってるような事で国家機密とかってあるのか？」

「んー、無いんじゃね？　おっぱい見せられて漏れる機密とか有って無い様なモノだろ」

「自分で言うのか」

「そりゃぁ、俺のことを一番わかってるのは俺なんだから、当然だろ」

「まあ、それもそうか」

「……その筈なんだけどなぁ」

「……大丈夫か？」

思わず漏れでてしまった言葉に溜め息が溢れ出た。心配そうにコチラを見ている一夏に対して軽く手を上げるだけで応対する。

何も心配なことなどない。それこそ何もないのだ。

「俺のことが一番わかってないのも、俺かもな」
「なんだよそれ」
「別に、なんでもねーよ。相棒」
肩を竦めてみせれば織斑一夏は口をへの字にして、それ以上追求してこなかった。
追求されたとしても、俺の口からは何も言えないし、誰かの口からも何も言えない。
俺のことが一番わかっていて、それでも一番わかっていないのは、俺自身なのだから。
「つーか、一夏ってデケーのな」
「なっ!?」
「ん、いや、スマン。つい出来心で……」
「お前、散々人のことホモホモ言っといて、ソレかよ
……流石に引くぞ」
「いいか、男の象徴に対して賛辞を送っただけだ。俺は決してホモじゃない。いいか、もう一回だけ言う、ホモじゃない！」
「俺だってホモじゃねぇよ!!」
「じゃあお前は不能だな！」
「不能でもねぇよ!?　どうしてそうなったんだよ!!」
「そりゃぁ、あんだけの美少女達を前にして――、あー、いや、この話は止めよう。うん」

「ん、珍しいな」
「いや、昼頃にソレで失敗してるから……うん、スマン」
「お、おう……何があったんだ。どうせ穂次が悪いんだけど」
「当然だ。俺が悪い。悪いから……もうマジで、なんであんな事したんだろうね！」
「まて穂次！　沈むんじゃない!!」
「うっせぇ！　気持ちいい温泉で溺れてやるー！　女生徒達の出汁で溺れてやるんだ!!」
「凄い嫌な言い方してるな！　お前！」
ある意味幸せな死に方かもしれない。
いや、どうだろうか。どうせ、ココから上がると鬼が待ち構えているのだろうし。俺の死亡は免れない……やっぱり一夏を盾にするしかないな！

柔らかくて、イイ匂い

セシリア・オルコットは息を潜める。
辺りを始終キョロキョロと見渡し、誰もいない事を確認して小さく息を吐き出す。
頭の中にある教員達の見回りルートを思い出し、刻一刻と変わるルートを計算し尽し、比較的人の目の無いところを通り抜ける。
なんとも簡単な事である。尤も、その簡単な事の相手が織斑千冬とかいう障害を除いての話だけれど。

「セシリアは夜這いとか行かなくていいの？」
「なっ!?」
時間にして数分前。セシリアと同室になった女生徒の言葉にセシリアが狼狽するのは何もオカシナ所などなかった。
それこそ女生徒はにやにやとした笑みをセシリアに向けていたのだけれど。
「どうしてわたくしがそんな……それに、わたくしと穂次さんはその様な関係じゃあり

ませんわ！」
「誰も夏野君のことって言ってないんだけどなー」
「ぐっ……」
「まあまあ落ち着きなよ、セシリア」
肩を腕で抱き寄せ顔を寄せる女生徒。その顔はイケナイオクスリを売りつける存在の様にニヤニヤとした笑みを浮かべており、そして懐からイケナイオクスリ……ではなく一枚の紙を取り出し、広げた。
セシリアはソレを一目見て、何かはわかった。花月荘の見取り図である。その見取り図によく分からないラインと矢印が引かれているからこそ、セシリアは眉を寄せたのだ。
「……これは？」
「先生達の巡回ルート」
「どうしてソレをアナタが持ってますの……」
「いやぁ、女将さんから渡されたんだよー」
セシリアの脳裏に若々しい女将さんが浮かぶ。穂次と話している最中にコチラを見て優しそうに笑っていた姿は記憶に新しい。
むぅ、と唸ってからセシリアは迷う。今朝の事もある。自身はそれほど引き摺っても

ないし、穂次自身もいつもの調子に戻っていたけれど、それでもやはり事件はあったのだ。

　時間が解決する、というよりは既に解決しているのだけれど、僅かに残るシコリは時間が流してくれるだろう。

　ともすれば、穂次とセシリアの関係を急ぐ理由もなく、それこそ彼の競争率なんて物は低いのだから何事も問題なし。じっくりと、自身の魅力で落とせば問題は無い。ない筈。

「そういえば、コレをシャルロットも受け取ってたような」

「寄越しなさい」

「あ、ハイ」

　コレは決して穂次に夜這いをする為ではない。そんな事をしようとしているシャルロットを抑える為の行動なのだ。

　決して居なければ、穂次と夜を過ごすだとか、そういう妄想は抱いてない。

　見取り図を数秒程睨めたセシリアはソレを女生徒へと返す。

「え？　持って行かないの？」

「覚えましたわ。それと、一つだけ赤いラインがありましたが……」

「女将さん曰く、強敵だってさ」

「……理解しましたわ」

頭に浮かんだ漆黒の髪を持つ世界最強。門番にしては強すぎる彼女を思い浮かべて、スグに振り払う。最短ルートを頭から除外して新たにルートを構築していく。

「じゃあ頑張ってね！」

「べ、別に、シャルロットさんを抑えるだけですわ」

「うんうん、そうだね！　大丈夫、朝までちゃんと見回りの先生達を騙すからね！」

「もう！　だから違うと言ってますわ！」

少しだけ怒ったように口調を激しくしてみた所で女生徒はめげずにニタニタと笑ってセシリアを見送る。

部屋から出たセシリアはとりあえず深呼吸をして、自身の胸に手を当てる。

思ったよりも鼓動は激しかった。

そんな数分前のやり取りを思い出しながらセシリアは予定していたルートを歩く。

浴衣姿で何事もなく歩いているのだけれど、頭の中はルート構築などで一杯だ。

ソレで一杯にしておかなければ他のモノでパンクしそうなのだから、ある意味は順当

とも言えた。彼女とて人間で、それでいて乙女なのだから。仕方ないとも言える。

「あっ」

「あっ」

さて、丁度曲がり角、セシリアの目の前にシャルロットが現れた。お互い目を合わせて、ニッコリと笑う。いや、笑っていたのだろうか。ニッコリと擬音が付くぐらいなのだから、笑っていたのだろう。

ともかくとして、ニコリと笑い合う二人は同時に一歩を踏み出した。

「ねえセシリア。こんな夜半に出歩くなんてエリート様としてはどうなのかな？」

「あら？　優等生様も同じ事は言えましてよ？」

バチリと何かが二人の間に走る。

そして、更に一歩、一歩、二人はいつの間にか競うように、けれども決して急かず、同じ方向へと移動をしている。

目指す場所は離れである。そしてソレは同時に穂次の部屋であり、二人の目的が同じである事を示す。

いいや、彼女ら乙女の為に少しだけ補足するとするのならば、それこそ健全たるこの物語において不必要な行為はするつもりはない。いや、もしも穂次に迫られたなら……いやいや、あのヘタレにその様な甲斐性も度胸も無いのだから論じるに値しない。

よくて一緒の布団で眠る程度だ。もしくは夜の旅館という少しばかり淫靡な空間に酔いたいだけかもしれない。ちょっとだけ甘えたり、あわよくばキスなんてしたり。

まあその程度の願いなのだ。

閑話休題。

「ねえセシリア。そろそろ諦めたらどうかな？」

「あら？　シャルロットさん。アナタだけなら見つかっていたと思いますが？」

「セシリアも何度かルートを間違っていた気がするけれど？」

コソコソと言い争うという中々に難しい芸当をしている二人は少しだけ睨み合い、何かに反応して身を隠す。

彼女らの視線の先にいるのは黒い髪をした戦乙女。元、と頭に付いてはいるが世界最強を冠した女。織斑千冬その人である。

――どうして織斑先生がいますの!?

――わかんないよ！　巡回ルートは？

――ココは通らない筈でしたわ！

――そうだよね。僕もそう記憶してる。

二人の秘匿通信による会話は実にアタフタとしたものである。当然、最低限とは言えない高すぎる警戒度を持ち合わせての会話だが。

さて、普通の巡回ルートではいない筈の織斑千冬がどうして最後の関門の様に立っているのか。理由は簡単である。夏野穂次が居るからだ。

セカンド、夏野穂次は世界的に見れば一夏に続いて保護されるべき対象である事は間違いない。あんな阿呆だけれど、それでもアレがセカンドである事は間違いない。阿呆だが。

二人がアタフタとしている中、織斑千冬は小さく溜め息を吐き出した。それこそ隠れた二人の存在は気付いているし、その隠密性の甘さに溜め息が溢れた。

どうしてか痛くなった頭を抑える事もせずに、次は二人に分かる様に溜め息を吐き出した。

「……ふむ。ココは異常なしか」

ワザとらしく声を出して、千冬は二人とは別の方向へと足を進めて、少し歩いてから足を止める。

「ああ、コレは独り言だが。阿呆の部屋には朝食前に行くぐらいで、もう今夜は行くことは無いな」

と意味の無い様な、大きな独り言を呟いて、これまたワザとらしく「まあ独り言だが」と付け加えて足を進めた。

見逃されたのがわかった二人は冷や汗を拭って、ようやく息を吐き出した。緊張感に

よってどうやら忘れていたようだ。
「ば、バレてたね」
「そう、ですわね……」
「どうする？」
「……どうするも何も」
ココまで来て、逃げるなんて選択肢は無い。ソレはお互いのようで目を見合わせて自然と握手を交わした。
「今夜だけは共同戦線って事で」
「そうですわね。まあ精々頑張ってくださいまし」
「アハハ、穂次の事を理解してないクセに」
「あら、穂次さんを魅了出来もしないクセに」
「……」
「……」
空気が停止して、握手している手がギリギリと音を立てている。
お互いに表情は笑顔であるのに、どうしてか四つ角が浮かんでいる。共同戦線とはいったい……。

ともかくとして、こんな所に立ち往生していても時間の無駄でしかない事は理解出来ていたのか、二人は数秒も経たない内に握手を解いて、外へと出た。

カラリ、と石畳に歯の無い下駄で音を鳴らして二人は歩く。あの織斑千冬が最終ラインだと直感していた二人はある程度の警戒心は持っていたけれど、花月荘本館に居たとき程警戒は無い。

それこそ、巡回ルートに含まれていない、という理由が頭に過ぎっている。まあその巡回ルートは従来のモノであり、織斑一夏と夏野穂次の存在のお陰でかなりの変更を有したのだが、ソレを二人は知る事もないし、知る必要もない。少なからず、情報を渡した花月荘女将は「あらあらどうしましょう」と困ったように頬に手を当てていることだろう。尤も、顔は決して困ったようには見えず、明らかに楽しんでいる様な、「若い子っていいわねぇ」と追加で呟きそうな顔だ。

カラリ、コロリ。

「セシリアはさ」

「はい？」

「……穂次の事、好きなの？」

「――……」

「変態で、どうしようもなくて、ヘタレで」

「いつも胸を見てくるような変な人で」
「冗談を言って、からかって……そんな人だよ？」
「そうですわね……こうやって考えても、わかりませんわ」
「ホント、どうしてなんだろうねー……」
「でも、気付いたら目で追ってて」
「そうだね……やっぱりちょっとだけカッコイイのかもね」
「ほんのちょっとだけですわ」
「そうだね。だから、そんな穂次が――」
好き。
お互いにその言葉は言わずに、微笑む。いつかの穂次が目の前に居た時にした暗黙の宣戦布告ではなく、互いに互いを認めた上での、宣戦布告。
燃える様な感情でもなく、冷たい拒絶的な感情でもない。どうしてか温かく、けれども同時に黒い何かも燻る様な、苦く、甘い感性。
微笑んでいた二人は何かが可笑しくなって、少しだけ噴き出す。
「でも、穂次なんだよねぇ」
「そうですわね、穂次さんですわ」
「え？　俺がなんて？」

「――」

ギギギギ、と音が鳴りそうな、まるでブリキの玩具の様に首を動かした二人はどうしてか後ろに居た件の男を視界にいれた。

湯気立つ男の髪は僅かに濡れており、彼の性分なのか肌蹴てしまっている浴衣からはそれなりに鍛えられた胸板が僅かに見えている。首に掛けられたタオルと抱えられた桶。なるほど彼は風呂上りだという事は分かる。

そんな事はどうでもいい！　この男には聞かれてはいけない事が聞かれたかもしれない！

いいや、結局は聞かせないといけないのだけれど、今はそんな時じゃなくて、もっと、こう、ロマンチックな感じに、出来るならこのヘタレに言われたかった!!

目を白黒させている二人にキョトンとしながら穂次は頬を掻く。

「何喋ってたか知らないけど、お二人さんが急に噴き出して俺としてはその疑問が尽きないんだけど？」

「いいから！」

「気にしなくてもいいですわ！」

「アッハイ」

馬鹿でよかった！

二人は安堵した。安堵の仕方が随分とアレなのだが、ともかくとして二人の矜持は守られたのだ！

「つーか、お二人さんはこんな夜半に散歩ですか？　仲イイッスね！」

「そ、そう！」

「月が綺麗でしたので！」

「何を慌ててるんですかね……ハッ!?　まさかお二人は――」

「――ッ」

「実は他には言えない恋人同士……なるほどなるほど、夏野穂次はクールに去るぜッ！」

「無いから」

「無いですわ」

「全否定ですかそうですか……百合の花はないんだなって」

分かる様に落ち込んだ穂次は溜め息を吐き出した。彼の妄想している様なことは決してない。金髪娘と金髪娘との絡みなんて、そんな！

果たしてどちらがお姉様なのだろうか。受けは？　攻めは？　穂次の中で広がる世界。その世界は受け入れられないし、スグに終結するのだが。

「そういう穂次はこんな時間にお風呂？」

「そ。汗かいちゃったから二度目のお風呂。ちなみにちゃんと織斑先生とかには許可を

貰ってるから覗きとか、混浴とか、そういう事はありませんでした！　ありませんでした……」
「どうして落ち込んでるの」
「汗？　何か運動でもしてましたの？」
「……いやー、織斑先生に馬鹿してたらそんなに元気なら走ってこいって言われて」
「また何かしましたのね……」
「アッハッハッ。あの超絶美人教師めー」
「……ふーん」
「あの、シャルロットさん？　どうしてそんなに意味深な瞳を俺に向けてるんですかね……」
「べっつにぃ」
「む……シャルロットさん、何か知ってますのね！」
「ふふ、秘密だよっ」
「穂次さん！　何を秘密にしていますの!?」
「えぇ……シャルロットさんの秘密なんて俺はわかんねーです。男装してたぐらい？」
「もう秘密でもないねー」
「あとはおっぱいがちょっと成長した事ぐらいだな！」

「……穂次のえっち」
「男はみんなエッチなのさ！　ね、セシリアさん！」
「どうしてわたくしに振りましたの……そんな事知りませんわ」
「……いや、色々墓穴掘るからいいや。この話はオシマイ！」
「……まだ午前中のことを引き摺ってますの？」
「そんなマサカハハハ。引き摺ってる人がセシリアさんに向かっておっぱい触らせてくださいとか言わないッスヨーヤダナー」
「引き摺ってるねー」
「引き摺ってますのね」
「ホント、申し訳無いです」
　土下座でもする勢いで頭を下げた穂次に対して困ったように二人は息を吐き出した。
　面倒くさい男、というのは確かに二人の共通の認識だった。まあその面倒な男に惚れてしまったのも二人なのだけれど。
「まあ良いですわ。部屋に案内してそれなりにもてなしていただければ」
「へ？　部屋に来るの？」
「そうだね。夏って言っても寒いし、ほら、穂次も湯冷めしちゃうよ」
「さぁ行きますわよ」

「美少女二人が男の部屋に行くのかぁ……え？」
　果たしてキョトンとした穂次は両腕を二人に持たれて、半ば引き摺られて部屋へと向かう。その頭の中には疑問符が大量に乱舞し、どうしてかお茶を淹れてもてなしている所でようやく混乱から脱した。
「いやいやいや！　おかしいから！　もっと危機感持とうぜ！」
「だって穂次だし」
「まあ穂次さんですし」
「どうして俺が傷つく返答が来るんですかね!?　ほら、コレでも男だから！」
「そういえばそうですわね」
「男として見られてなかった!?」
「……そういえば本国にはハニートラップって言ってたんだっけ」
「ハイ、この話はヤメ！」
「えー」
「据え膳食わぬは恥、という諺があった様な気もしますわ」
「どうしてそういう事は知ってるんですかね……。恥でいいから。お二人さんは美人なんだからもっと自分を大切にしなさい！　お兄さんとの約束ダゾ☆」
「……」

「……」
「何？　二人ともジト目で見て。可愛いから別に気にしないけど」
「ヘタレ」
「根性なし」
「普通に落ち込むから……」
　部屋の隅で三角座りをした穂次を眺めながら二人はお茶を啜る。少し薄めのお茶が喉にすんなりと入る。
「つーか、マジで何しに来たのさ。俺を虐めて楽しみにきたの？」
「それもいいですわね」
「虐めるなら踏む感じでお願いします！」
「絶対に、嫌ですわ！」
「ぐぬぬ……どうすれば踏まれるのだろうか」
「いや、穂次。悩むところがおかしいから」
「シャルロットさんも気が向いたら踏んでもいいですよ！」
「また今度ね」
「あ、コレは次が無いヤツだ。俺は知ってるんだ……」
「そうですわね……穂次さんの事が聞きたいですわ」

「そういえば穂次の事は何も知らないかもね」
「俺の事？　何もねーぜ？」
「それでも聞きたいよ」
「ふーん。まあいっか。んじゃドコから話しましょうかね」
　部屋の隅から部屋の真ん中に置かれている机に戻ってきた穂次は二人の対面になるように胡坐をかき、お茶を少し啜る。
「んー。ホント普通の人生なんだけどなー。ＩＳを起動する前は普通に学校行って、馬鹿やって、友達と遊んで、みたいな？」
「本当に普通だね」
「もっと何かありませんの？」
「何かって言われてもなァ……」
「そういえば穂次さんのご実家はドチラに？」
「……あー、うん。実は実家も何もないんだなー」
「え？」
「あ……申し訳、ありません」
「まあまあ。普段の失言レベルだと俺はずっと謝り倒さないといけなくなるから、問題なし！」

「……問題無い訳ないじゃない」
「問題なんてねーですよ。政府が俺の戸籍を抹消してたり、実家とも言える家にもう帰れなかったり、挙句の果てには両親って言える人達にもう会えなかったり。アッハッハッ。笑えるー」
「笑えませんわ！　どうしてそんなにへらへら出来ますの!?」
「そうだよ！」
「あー、なんで怒ってんの？」
「怒りますわ！　そんな、そんな――」
「うーん、嬉しい、んだと思うんだけど。別にそういうのはイイよ。ほら、終わった事だし」
へらりと穂次は笑った。笑ったからこそ、セシリアとシャルロットは言葉を飲み込んだ。
どうして彼はソレを受け入れる事が出来たのか。どうして彼はソレを受け入れてしまったのか。
理解出来ない。いいや、理解なんてしたくない。少なからず怒りを顕わにしていたならば理解も出来た。けれど、穂次はその表情を笑みで隠した。
「穂次は……大丈夫なの？」

「大丈夫も何も、仕方ない事だからなー。現状にも満足してるし、おっぱいも見放題だぜ、やったね！」
「……無理してませんこと？」
「してないしてない。欲望に忠実で、へらへら笑えて生きてればそれで俺は満足です」
また、へらりと笑った穂次。その表情をどう思ったのか、セシリアとシャルロットの中にある彼が虚空になる。ポッカリと彼に穴が空いて、いつしか彼が消えてしまうのではないかと不安になってしまった。
二人は顔を見合わせて同時に立ち上がり、穂次の隣へと座った。
「え？　おっほ」
「少しだけ黙っててくださるかしら？」
「そうだね、うん。ちょっとだけ黙っててね」
「アッハイ」
だからこそ、二人は穂次を抱き締めた。彼がドコかに行かない様に、しっかりと胸に抱き締めた。
からっぽな彼がフザケタ事を言う前に封殺し、カラッポを埋めていく。どうしようもなく、愛おしさが溢れる。
柔らかい四つの乳房が穂次の顔面に当たって穂次としては気が気ではないのだけれ

ど、どうにも手を出せる雰囲気でもなく、とりあえずその柔らかさに脳内で「ありがとう！　ありがとう!!」と唱えるばかりである。柔らかく、どうしてイイ匂いがする。ゆっくりと脳が溶けていきそうだが、穂次は頑張って意識を保った。手を出す雰囲気でもないが、手を出さないのは彼がヘタレであるからである。

果たして浴衣の生地越しに伝わる熱と柔らかさに浮かされた穂次とからっぽな彼に愛おしさを注ぎ込む二人の極めて奇妙な耐久戦が始まった。

当然、負けるのは決まって穂次である。

無色透明

目が覚めたのは随分と早い時間だった。

気がつくと眠っていた、という訳もなく言い包められて複数の布団を用意して同じ部屋で眠った。

どうしてか抱き締められていた俺はその柔らかい感触に顔をただただ緩めていたのだが、頭を撫でられたあたりで子供扱いされているのでは無いかと不安を感じ出した。そう考えれば男である俺と一緒の部屋で眠る事も説明がつく。決して理由の一部に俺がヘタレだとか、そういう理由がある訳が無い。

欠伸を噛み殺して、溜め息の様に一つだけ息を吐き出した。

俺の布団と挟んで眠っている二人の様子を見て思う事は寝顔が可愛いという事と寝相がいいな、という事ぐらいである。いや、それこそセシリアさんの布団を押し上げているおっぱいだとか、僅かに肌蹴た布団から伸びるシャルロットさん生足とかはドギマギするのだけれど。

かといって狼狽した所で何の意味も無いので俺としては素晴らしい、という観賞的な感想しか沸いてこないのだ。いや、ホント、素晴らしい。

触って起こすのも気が引けるので、眠っていた事で肌蹴てしまった浴衣を直して俺は朝の空気を吸いに外へと出る。

「ふぅ……」

夏であるが、太陽が薄らとしか出ていない時間であり、少しばかり冷えた空気が肺の中へと入り込んで、溜まった空気を入れ替える。

抱き締めてくれていた時、二人は何も言わなかった。ただ抱き締めて、撫でていただけである。顔に押し付けられていた柔らかい感触を思い出せば今でもニヘラと顔が蕩けてしまう。いやはや、役得だ。

どうして二人が俺を抱き締めたのかはさっぱりわからない。ソレこそ、俺に何かしらの感情を抱いているのだとすればきっとソレは哀れみなのだろう。

ＩＳ操縦者という称号を得る代わりに戸籍も抹消され、両親には会えず、所謂日常から逸脱させられた悲劇的な俺。哀れむには十分すぎる理由だ。

その哀れみによって二人は優越感を得て、俺は極上の柔らかさと甘い香りを得た。Ｗｉｎ―Ｗｉｎだろう。

「ハハッ、笑えるー」

まったくもって、笑える事だ。ちょっとだけ勘違いをした。もしかして、なんて事も思った。

そんな訳がある筈もない。有り得ていい訳もない。
なんせ彼女達は美少女なのだ。俺としては触れれるだけで満足できる程の、それこそ高嶺の花と言ってもいい。
会話できるだけ幸せ。触れ合えるだけで幸せ。それ以上なんて求めるつもりはない。
なんて日常とは素晴らしいモノなのだろうか。へらへら笑うだけの、簡単で、素晴らしい日常。
もう一度、溜め息を吐き出す。
伸びをして、体に始動の命令を送っていく。鏡は無いけれど、きっと俺の顔はへらりと笑っている事だろう。
「さぁってと、お二人さんの寝起き姿で興奮しなきゃ」
ちょっとした使命感を覚えた俺はやっぱりにへらと笑って部屋に戻った。
慌しくセシリアさんとシャルロットさんが俺を折檻するまでにそれほど時間を要する事も無い。

◆
◆

臨海学校二日目。朝から夜までＩＳの各種装備試験運用のデータ取りが行なわれる。専用機持ち達は億劫になれるぐらいのデータ量が必要であり、セシリアさんの目が少し細くなる程度には大変だそうだ。

「ようやく全員集まったな――おい、遅刻者」

「は、はい」

本当に珍しく遅刻者と呼ばれているボーデヴィッヒさんは背筋を伸ばして織斑先生の声に返事をした。

織斑先生の鋭い瞳は本当に怖い。俺は知ってる。あの瞳で人を殺せるらしい。ネットで見た。

ボーデヴィッヒさんによるＩＳのコア・ネットワークの説明を聞き流しながらボンヤリと周りを見回す。四方を崖に囲まれた、まるで自然の作り出したアリーナの様な場所。そんな場所よりも海がある事でより水着に見えてしまうＩＳスーツは素晴らしい。

健康的でむっちりとした太ももや、胸の大きさがはっきり分かる。果たしてこうして一学年全員を視姦する事なんて滅多に無かったので今の内に見ておく。

高嶺の花であっても、見るのはタダなのだ。見ていて損は無い。

「おい、阿呆」

「ゴメンナサイ！　痛い！　頭が割れる!!」

「さて、それでは各班に振り分けられたＩＳの装備試験を行なうように」
「織斑先生！　大切な教え子の頭が割れそうッス!!　手を放して！　今回、まだ俺は何もやってないでしょ!!」
「……専用機持ちは専用パーツのテストだ。各員、迅速にな」
「迅速に行ないたいのに頭を掴まれてて何も出来ません！　サー！」
「阿呆と篠ノ之はコッチに来い」
「……私もですか？」
「ああ。コレとは別件だから安心しろ」
　安堵したように息を吐き出した篠ノ之さん。デカイってスゲーですな……。
「アダダダダダ!!　痛い！　スゲー強くなった！」
「篠ノ之。今日からお前には専用――」
「箒ちゃんには今日から専用機に乗ってもらいます！」
　突如聞こえた声に織斑先生は反応した。いいや、元々気付いていたのかも知れないが、声の方向へと俺が投げられた。
　地面が流れ、投げられた方向を見れば篠ノ之博士がニコリと笑って両手を広げている。俺を抱き締めてくれるのか!!　そのおっぱいで俺を包んでくれるのか!!
「おっと」

「ふべッ!!」

ヒョイと俺を避けた篠ノ之博士の横を通り過ぎて俺は砂浜へと顔面を打ちつけた。砂の抵抗力により、一メートル程進んでから俺は停止した。

顔を勢いよく上げれば心配そうにこちらを見下しているセシリアさんとシャルロットさん。

「俺の首って折れてないよね？　自分で言うのもアレだけどギャグ漫画みたいな顔面スライディングしたんだけど？」

「そうですわね。大丈夫ですわ」

「大丈夫？　穂次？」

「いや、そこまで心配されると俺が不安になるんですけど……え？　何、ドッキリか何か？」

「は？」

「イエ、スイマセンデス」

明らかに威圧をしてきた二人に対して両手を高く上げて首を横に振る。折れて無くてもコレで折れるかもしれない……。

溜め息を吐き出した二人にへらへらと笑って無事を示してから、件の超絶美女の方向を見る。織斑先生にアイアンクローをされている篠ノ之博士が見えた。

「……あれ？　デジャビュ？」
「先ほどアナタがされていましたわね」
「さっき？　う、頭が！」
「記憶がないのか、普通に頭が痛んでるか、わかんないね」
　確かに。実際、普通に頭が痛いのだけれど。
　それにしても織斑先生のアイアンクローを容易く抜けている篠ノ之博士が普通に凄い。一夏の言っていた肉体スペックが人外染みているというのも間違いではないのだろう。
「というか、誰？」
「篠ノ之束博士。篠ノ之さんの実姉でＩＳの創造主。そして見て分かるとおり素晴らしいボディをした超絶美人だ！」
「……」
「あれ？　普通に説明したよね？　俺。シャルロットさんはどうしてジト目なんですかね……」
「穂次さんにとっての普通でしたわ」
「あ、なるほど……ん？」
　普通の説明だったのにジト目で見られるなんて、どうかしてるゼ！

スカシたように肩を竦めてみせればセシリアさんからも溜め息が聞こえた。解せぬ。
それにしても山田先生のおっぱいを鷲づかみして揉みしだく篠ノ之博士が実に羨ましい。いや、むしろイイ。超絶美女と巨乳メガネ先生との絡み。実に、イイ。
「穂次さん。顔が弛んでますわよ?」
「だからって耳を引っ張らなくてもいいと思うんですよ!! お二人さん!」
「あ、ゴメンネ。つい」
「とか言いつつも放してくれないのはどうしてなんですかね……!!」
痛くは無いけれどね! むしろ美少女に引っ張られてると思うと、おっとIS理論を解法して落ち着けよう。ISスーツは素晴らしいけれど、もう少し男の身になってほしいモノである。いや、男が俺と一夏しかいないから考えても生産性は無いのか。
「あー、ちなみに篠ノ之博士に話しかけようとか思わない方がいいぞ」
「……どうしてですの?」
「基本的に拒絶的だそうで。一夏の情報だからたぶん正しいんじゃね?」
「そうですのね……」
「やや! そこに居るのはセカンド君じゃないか!」
「……随分と拒絶的ですわね」
「ほら、俺は研究材料的なソレだから」

思いっきりコチラを見て大きく手を振っている篠ノ之博士。子供みたいに目をキラキラとさせているが、織斑先生に頭を叩かれた。天才は理解出来ないというけれど、篠ノ之博士はソレを体現している。

イライラした様子の篠ノ之さんが俺を睨みはしたけれど、姉が取られて、という線はないだろう。尤も、一夏の話を間に受けるのならば、だが。

「それで！　頼んでいたモノは？」

「うっふっふー。ソレは既に準備済みだよ！　さあ大空をご覧あれ！」

空を指差した篠ノ之博士にならい、視線を上に上げる。既に耳に慣れてしまった、高い音が鼓膜を揺らし、地面に何かが墜落した。

『紅（アカ）』だ。ソレは赤よりも赤い、紅だった。

「ばばーん！　コレこそ箒ちゃんだけの専用機！　その名を『紅椿』！　全スペックが現行ＩＳを上回ってる機体だよ！」

「コレが……」

息を飲みこんだ様に、ＩＳに魅了された様に、ふらふらと手を伸ばした篠ノ之さん。

それにしても、全スペックが現行ＩＳを上回ってるって、チートか何かかな？　いや、篠ノ之博士がチート染みてるから間違いじゃないのか。

まあ、別に気にする事でもないか。

それこそ後ろの方で不平不満を漏らしている女生徒諸君の方が気になる。
篠ノ之博士の妹だから、という言葉も。
不公平、という言葉も。
心に嫌な感触が触れる。ヘラリと笑って踵を返す。
「どうしましたの？」
「いんや。離れて専用パーツの確認をしとくよ。それこそ上の人を怒らせる訳にもいかないしー」
なるべく顔を見せない様に、後ろに向かって手を振る。
別に理由に嘘は無い。本当に、確認をしてある程度の報告を挙げないといけない。現実逃避でもしたい気持ちを溜め息で流す。
「うーん。どうにも変な感じだなー」
呟いた言葉は誰にも聞こえず、村雨を起動した俺の一歩にかき消された。
生まれた疑問が解消されることもなく、ボンヤリと村雨を動かしていた俺が慌しく山田先生に呼び出されるのは、少し後の話だ。
その山田先生のおっぱいが揺れてるのも少し後の話である。

何も柔らかくない首極め

事の発端は二時間前。

ハワイ沖で試験稼動に当たっていたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走。そのまま監視領域から離脱したらしい。

ぶっちゃけた話、非常にどうでもいい。俺がこの作戦会議室に充てられた部屋にいる事すら場違い感がヤバイ。

スゲー皆真剣な顔をしてる。ポカンとして状況を飲み込めてないのは一夏ぐらいだ。俺はハッキリ言ってさっさとこの場所から何処かへ消えてしまいたい。

この部屋から出たら出たで、別の所から俺への御達しが来ると思うし。それならば、やっぱり美人な織斑先生から頼まれたい。

「穂次、頼んだぞ」とか言われたい。というかさっきから俺を見てる山田先生の目がスゲーキツイ。

そんなに睨むとおっぱい触っちゃうぞッ☆　まあ冗談を言うと本格的に拘束されそうだから言わないけど。

「それでは、作戦会議を始める。意見のある者は挙手する様に」

「はい。目標ＩＳの詳細スペックデータを要求します」
セシリアさんの手が上がる。要求も真っ当なモノだ。織斑先生による忠告と警告の後、データが開示される。
スペックデータに目を通して、ふむ、と一つだけ唸ってみせる。どうしてスリーサイズは書かれていないのだろうか。
それは重要な事だろう。何よりも重要視すべきではないのだろうか！　むしろバストサイズだけでも、いやＢＭＨの三つはいるな!!
「はい！　織斑先生！」
「……夏野、現状でふざけた事を言ってみろ。外すぞ？」
「――――、データは機体スペックだけなのですか？　乗っている人のデータも少なからず必要なんじゃ？」
「……いいや。ＩＳは暴走している。装備者に関しては考えなくても問題ない」
「そッスか」
いったい何が外されるのかさっぱり分からなかったが、顎か、肩か、全関節か。どちらにせよ、データは貰えないらしい。うーん、おっぱいはデカイのだろうか……。でも軍用機って事は危険だしな……。
超音速で移動している様だし、偵察も無理。接触は一度きり。

なら、結局は一撃で落とせるだろう一夏が適任だろう。
「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」
　という山田先生の一言で俺を含めた全員が一夏の顔を見る。一夏は目をパチクリと動かして、慌てた様に現状を把握した。
「え……？」
「一夏、アンタの零落白夜で落とすのよ」
「やったぜ一夏！　お前がナンバーワンだ！」
「待ってくれ。穂次の鬼の爪だってそれだけの出力はあるだろ！」
「どうなんですの？」
「あー、まあ出るな」
「じゃあお前だって選択肢の一つだろ」
「あのさ、俺の武装は盾にエネルギーを溜め込まないとダメなの。お前みたいに簡単に出せる訳じゃねーの」
　そう、盾にエネルギーが無ければ俺は単なる木偶も同然なのだ。俺だって無条件で攻撃を喰らい続けるなんてイヤだ。俺はマゾじゃない。
　じゃあ、エネルギーが溜まるまで攻撃を受け続ければ、と言われるだろうが、広域殲

滅型の福音さんの攻撃を捌き続けるなんて俺には無理だと思う。
「織斑、コレは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟が無いならば無理強いはしない」
「――、やります。俺がやってみせます」
「さすが一夏！　いいぞいいぞー！」
「夏野。わかっていると思うが」
「へいへい。俺も追従しますよー」
「結局お前も来るのかよ」
「そりゃぁ、お前だけにいい格好はさせないさ」
「……本音は？」
「ココでお前の安全を待ちたい。　まー、無理なんだけどな」
「？　なんでだ？」
「俺だって、ヒーローになりたいんだぜ」
　ニヤリと冗談の様に言ってのけた俺に対して呆れたような溜め息がそこらから聞こえる。冗談、では無いのだけれど。
「ま、俺はいいんスよ。役割の認識もしてるんで。　とりあえず一夏を送る為に超音速機の足を選出しましょーよ」
「足って、アンタ……」

「というより、お前の役割って？」
「まあ、単なる保険だよ。お前が決められなかった時用の保険だ」
　いつもの様にへらへらと笑っていると織斑先生に睨まれて両手を上げる。外すのは勘弁して下さい。
「では、具体的な作戦を立てる。この中で最高速が出せる機体は？」
「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが……けれど、わたくし一人でお二人を運ぶとなると」
「夏野は問題ない」
「は？」
「フッ……俺の機体は音をも越える……」
「穂次がカッケー……」
「いや、一夏。アレはイタイって言うのよ」
「鈴音さんヤメテ！　その口撃（コウゲキ）は俺に効くから！」
　ふざけて話を流したけれど、俺を送り運びをする問題は何も無い。村雨のスペックなら、それなりに速度も出る。
　なら一夏を運べるのか、と聞かれれば否である。保険が保険としての役割を果たすのには無理なのだ。

「オルコット。超音速下での戦闘訓練時間は？」
「二〇時間です」
「そうか……ならば適任――」
「待った待った待ったァ！」
突如と響いた声に織斑先生の眉間が寄せられる。スゲー嫌な顔をしている。実際ここまで織斑先生が感情を顕わにしている姿はソレほど見ない。
「とぅ！　シュタッ！」
天井裏からクルクルと舞い、畳に着地した謎の物体。
「誰だ！　お前は!?」
「ふっふっふっ！　よくぞ聞いてくれました！」
「束、出て行け。あと夏野、ノるんじゃない」
「ぶぅーぶぅー！　もっと私を丁寧に扱ってもいいんだゾ！」
「そーだそーだ！　おっぱいを触らせろー！」
「あ〃？」
「ヒッ……篠ノ之博士！　怖いですよ！」
「今のは君が悪いんじゃないかなー？」
「裏切られた……もう何も信じれない！」

「夏野、ちょっとだけ、いや、永遠でも構わないが呼吸を止めておけ」
「――――」
呼吸を自分で止めた訳じゃない。止まってしまったのだ。
呼吸は止まっているのにガタガタと体が震えるのはきっと寒いからに決まっている。
イヤー、冷房が効きすぎカナー！
「ちーちゃん、ちーちゃん！　私の中でさっきの作戦よりももっといい作戦があるよ！」
「もう一度言っておくが、出て行け」
「ここは断☆然、紅椿の出番だよ！」
「……なに？」
「紅椿ならパッケージがなんかなくても超音速機動が出来るんだよ！」
織斑先生を囲むように現れたディスプレイ。そこに映し出されたのは紅椿のデータなのだろう。
篠ノ之博士の口からスラスラと出てくる聞きたくない言葉の数々。第四世代だとか、展開装甲だとか。
あっるぇ？　確か今って試験稼動してた第三世代ＩＳを止めに行くんですよね？
「ちなみにぃ、展開装甲は紅椿だけじゃなくて白式の雪片弐型と村雨にも実装されてまーす！」

「え？」

　驚きの声は一夏だけではなくて他の面々の口からも出ていた。唯一出ていなかったのは頭を抑えていた織斑先生だけだ。

「まあ村雨はまた別方向なんだけどねー。『パッケージ換装しない万能機』って第四世代の理論だけれど、村雨は別ベクトル。第三世代とも言えないけどねー。アッハッハッ」

「あー、篠ノ之博士。一応国家機密なんですが……」

「ん？　ああ、大丈夫だよ！　私にはどうでもイイ事だからね☆」

「アッハイ」

　ダメだ、この人。早くどうにかしないと！　織斑先生！　あ、頭を抱えてドコか遠くを見ていらっしゃる！

　やばい、俺まで頭が痛くなってきたぞ……コレは早々にどうにかしなくては。

「それに君は――」

「そう、俺はおっぱいが好きなのだ！」

「……はぁ、話を戻すぞ。　束、紅椿の調整にはどれぐらいの時間が掛かる？」

「えー、ここはホラ、彼の秘密を暴いて、皆で一緒に『な、ナンダッテー!?』って言おうよー」

「束」

「ぶぅーぶぅー。　紅椿の調整は七分もあれば大丈夫だよ！」
「ならすぐに開始しろ」
「織斑先生!?」
「なんだ、オルコット」
「わ、わたくしのブルー・ティアーズなら必ず成功させてみせますわ！」
「ん？　今、性交って言った？」
「穂次、アンタはちょっと黙ってなさい」
「あ、い、」
　後ろから鈴音さんに首を絞められる。ちくしょう！　何も柔らかくもねーゾ!!
もっと、こう、ほら!!　あるだろ！
　どうしてか締める力が強くなったので腕をタップする。極まってる、極まってますよ！
「では、夏野と篠ノ之を除く専用機持ちは織斑に高速戦闘をレクチャーしていろ。篠ノ之は紅椿の調整が終わり次第ソレに合流。作戦開始は三〇分後。では各自準備にかかれ」
「穂次はどうするんだ？」
「俺は織斑先生から正式に役割の説明を受けるんだろ」

「今じゃダメなのか？」
「まあ、簡単なバックアップの確認だし。ソレよりもお前が高速戦闘に関してレクチャー受ける時間の方が大事なんだよ。ホラ、さっさと行って来い」
俺から押し出された一夏は訝しげな視線をコチラに向けたが、それだけに終わり俺に何も言ってこなかった。
俺はソレに苦笑して、溜め息を吐き出す。
「夏野」
「へいへい。大丈夫ですよー。上からも命令がきてますからねー」
「……そうか」
「ええ。まあ俺は自分の役割を自覚してますよ。何も問題ありません」
「……本音は？」
「本音ツスよ。それこそ、俺はセカンドですから」
へらりと笑ってみせる。なんてことは無い。
ヒーローになりたいのは本当だし、今も憧れている。けれど、俺はきっとヒーローにはなる事は出来ないだろう。
「何かあった時は俺がフォローします。まあ二人を逃がすぐらいの時間は稼ぎますよ」
「……すまん」

「んじゃ、俺が無事に帰ってきたらおっぱいを揉ましてくださいよ」
「ああ。山田先生が揉ましてくれるようだ」
「ふぇっ!?　どうして私になったんですか!?」
「なんだって!?　ソレは頑張らないと……ガンバリマス!!」
「ソレでやる気を出さないで下さいよ!!　イヤですよ!?」
「マジっすか……山田先生がおっぱいを揉ましてくれないんですか……鬱だ、どうしよう」
「ほら、山田先生。困っている生徒を助けるのも教師の役目だろう?」
「それこそ夏野君自身が困った生徒じゃないですか!」
ぷんすかと怒る山田先生を見ながら和む。大丈夫何も問題は無い。
ざわつく心を落ち着けて、なるべくいつもの状態を保つ。何も問題は無い。
「まあ、なるようになりますよ」
やっぱり、俺はへらへら笑ってテキトーにしておこう。だって、ソレが夏野穂次なのだから。

全てはソレの為に

時刻は十一と十二の間を差す。
熱い太陽に文句を言いたい気持ちを溜め息に変えて吐き出した。その溜め息に目敏く気付いたのか篠ノ之さんコチラを横目で睨んでくる。
「夏野。嫌ならば逃げてもいいんだぞ」
「逃げられない理由がなけりゃぁ逃げてるよ」
「ハッ、あまり私たちの邪魔をするんじゃないぞ」
「へいへい。俺はバックアップだからお気になさらずに」
「おい、箒。何言ってんだよ」
「ふん。私と一夏がいれば出来ない事はない」
「うんうん。俺もそう思うよ。マジで」
それでも俺は着いていかなければいけないのだけれど。まあ、ソレはいい。
篠ノ之さんの言葉も冗談には聞こえない。それこそ、第四世代である白式と紅椿があれば今回の問題は全く生じないのだ。
それでも保険は必要だろうけれど。

　へらへら笑う俺とふふんと腕を組んでいる篠ノ之さんを見ながら一夏が溜め息を吐き出した。
「穂次、悪い」
「気にしてねぇよ。事実を言われただけだしな」
「当然だ」
「箒。先生たちも言ってただろ？　コレは訓練じゃない。実戦だ。だからこそ、俺たち三人の連携が重要に――」
「わかっている。ふふ、どうした？　怖いのか？」
「そうじゃねぇよ。あのな、箒――」
「まあまあ。お二人さんの夫婦漫才は帰って見るって事で」
「夫婦漫才ではない！」
「はっはっはっ。まあそろそろ時間だし、準備をしようぜご両人」
　へらへら笑う俺に対して目を細めた一夏は手を軽く上げて俺に謝罪の意を向ける。別に謝られることは無いのに。
　向けられた謝罪を断るのも可笑しいので適当に手を軽く上げてソレに反応する。
「行くぞ、紅椿」
「来い、白式」

ＩＳを展開した二人に倣い、俺は左手の薬指に収まった鉄製のフィンガーバンドに触れる。決して、指輪なんかじゃない。

「村雨」

一言だけ、名前を呼んでＩＳを展開する。

光に包まれた体が浮遊感を覚え、収まると俺の視界はクリアに変化した。息を吐き出して、調子を確かめる。事前に何度も確認もしたけれど、やはり問題は無い。

「しっかし、紅椿と白式はカッケーツスなぁ」

「ふふん、そうだろう」

「ホント、素晴らしいッスねー。そのおっぱいを下から持ち上げてる感じ。俺は最高だと思ってます！」

「一夏、夏野はどうやら再起不能になるらしいから作戦には参加出来そうにないな」

「待て待て！　刀から手を放すんだ箒！　穂次も煽るな！」

「揉みたいだけで俺に煽る気持ちなんて一切ない！」

「余計に悪いじゃねぇか!!」

「一夏！　退け!!　ソレを叩き切ってやる！」

『馬鹿共、聞こえるか？』

ややイライラしている織斑先生の声に俺たちは停止する。コレは説教コースかも知

れん。織斑先生に説教されることを考えると夜も眠れません。つーか、マジで怖くて寝れない。

キッと俺を睨んだ篠ノ之さんに対していつものようにヘラヘラとした笑みを浮かべて両手を上げる。

『はぁ……今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「織斑先生。私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『――そうだな。だが、無理はするな』

織斑先生が僅かに〝間〟を空けて篠ノ之さんに反応をした。表情はいつものように落ち着いているけれど、声にはドコか喜色が混じっている篠ノ之さんに思うところがあるのだろう。

オープン・チャンネルでの作戦概要も終わり、一夏が少しだけ反応した。どうやらプライベート・チャンネルで何かを言われているのだろう。

『では、はじめ！』

オープン・チャンネルで言われた織斑先生の一言に各自が反応する。

一夏を乗せた篠ノ之さんは一気に空へと飛翔した。ハイパーセンサーでようやく見える程度の所で停止し、更に速く移動を開始した。どうやら問題は無いらしい。

「さて、俺たちも行こうか。村雨」

対して俺はノンビリと村雨に声を掛ける。当然、応えなんてないけれど。

膝関節を曲げて、海面を睨む。紅椿の位置情報を得ながら、瞼を閉じる。

浮遊感が強くなり、ジンワリと力が抜けていく。

砂浜の少し上、何もない空間を蹴り飛ばし、一気に加速する。間延びした景色を一瞬で見送り、より鮮明になった視界を感じる。

海面の少し上の空間を更に蹴り、更に加速していく。

丁度、上空にいる紅椿を捉えた。生憎と『銀の福音』の位置を知れない俺は二人が攻撃をしないと何も出来ない。篠ノ之さんが俺に対して情報を提示し続けてくれていればいいのだが、初めて乗る機体でソレも求めるのは無理だろう。

そもそも俺は保険なのだから、何も問題は無い。

ドクリと心が跳ねる。

小さく呼吸を再開して、瞼を上げる。速度を維持したまま、いいや少しだけ遅くなってしまったけれど、紅椿との距離はそれほど開いていない。

◆◆

紅椿を駆る篠ノ之箒と白式に包まれた織斑一夏の最初の一撃は回避されるに終わった。

白式とは別の白。銀を冠するＩＳはまるで歌う様にマシンボイスを震わせた。

「Ｌａ――」

頭部装甲から生えた一対の翼が開き、その羽一つ一つが二人へと狙いを定める。

開いた羽――砲口に僅かに光が溜まり、その光が射出された。ソレは羽の形をした高密度のエネルギー弾であり、翼を形成する羽の数だけの弾丸。

問題はソレが休まる事を知らず二人に向けて射出されているという事だ。

まるで天使が無知な人間を罰する様に、暴を振るう。

幸い、というべきか。それとも壁にも似た弾幕の影響か精度自体はよろしくない羽達。しかし当たれば圧縮されたエネルギーが収縮を緩め、相応の爆発となって襲う。

一夏と箒は複雑な回避運動を繰り返し、二面攻撃を行なう――が、福音はソレを容易く回避し、更に反撃まで行なう。

射撃、回避に特化した実用レベルが高すぎる翼。

「一夏！　私が動きを抑える！」

「わかった！」

言葉と同時に箒が空を飛翔し、福音へと迫る。二刀を握った腕を振るえば、腕部装甲が開きエネルギー弾が福音を追い詰めていく。

軍用であろうと、所詮は一般人が製作したＩＳ。そのＩＳに生みの親であり『天災』と謂われる篠ノ之束が製作した紅椿が、現行最高スペックと謂うソレが負ける道理など無い。

道理が通れば、理屈などどうでもなる。箒は福音を追い詰め、福音に回避ではなく防御せざるをえない状況を作り出した。ソレは同時に回避からの反撃という福音のリズムを崩した瞬間でもあった。

そのタイミングを逃す一夏ではない。雪片弐型を握り、機を窺った。

同時に福音が動き出す。

大きく開かれた翼。そのウィングスラスターが全門開き、光弾を放った。問答など必要の無い全方位への攻撃。

けれどソレは先ほどまでの密度は無い。つまり、隙が自然と生じてしまう。

「――押し切る！」

箒は回避運動を繰り返しながら福音へと接近を果たし、隙を作り上げた。

そして、ようやく気付いたのだ。

「うぉおおおお！」

一夏が福音の放った光弾の一つを追いかけているという事に。

光弾を雪片で消し去った一夏。その先には船が一艇。封鎖した筈の海域にいる、異分子。

「一夏ッ！　くっ!?」

「Ｌａ……♪」

翼で二刀を弾かれ、箒は体制を崩す。箒は身構える。当然である。ソレは何度も繰り返された反撃の為の防御である。

けれど、砲口は箒へと向いていない。

砲口は、白い騎士に向いている。

「Ｌａ♪」

銀の福音はまた歌う様にマインボイスを震わせた。そして壁とも言える弾幕を一夏へと向けて振りかざした。

光弾の壁が一夏へと迫る。一夏に回避するという選択肢など無い。あったのならば密漁船など最初から放置している。

「一夏ァ!!」

箒の叫びとは裏腹に、高圧縮されたエネルギーは破裂し、爆発した。

エネルギーの残滓と僅かに蒸発した海水を煙にしてその場が包まれる。
箒は一瞬だけ脱力して、そして歯を食いしばり福音へと視線を向けた。
「貴様……貴様ぁぁあああああああ!!」
ソレは正しく怒りである。
喉が張り裂けんばかりに叫んだ箒は不恰好に刀を振るう。ソレすらも面白いように回避しつくす福音はピクリと何かに反応して箒から距離を置いた。
瞬間、福音が居た位置に何かが高速で通過した。
「外したかー」
間延びした声はオープン・チャンネルで聞こえた。飄々とした声の主はへらへらと笑いながら煙の中から現れた。
黄色の騎士。翼も、剣も、何も持たない騎士。盾が装着されている筈の左腕には細長い何かが装着されているだけで、代名詞とも言える彼の盾はその姿を消していた。
彼の後ろには織斑一夏がいた。
安堵。怒りに茹っていた頭が急激に冷え込み、涙が溢れてくる。
「一夏……」
だから、きっとコレは油断だった。
隙と呼べるモノであった。

ソレを逃す敵など、この場にはいない。
「Ｌａ――」
「箒ッ！」
「え……？」
本当に一瞬だった。一夏が箒と福音の間に入り込んだのも、その一夏に向かって幾重の光弾がぶつかったのも。
激痛。いいや、そんな言葉すらも生易しい痛みが一夏を襲った。
それでも一夏は箒を見て、箒の安全を確認して、少しだけ笑った。
力の抜け、海へと落下しそうな一夏を支えたのは穂次だった。
一夏はなんとなく理解していた。途中から痛みが熱だけになったのはこの親友のお陰だという事を。
視線だけを穂次へと向けた一夏に対して穂次は変わらずにへらへらと笑った。
「任せな、相棒」
問いなど無かったけれど、穂次はそう言って支えていた一夏の意識が落ちるのを確認した。
「一夏っ、一夏!!」
「篠ノ之さん。一度撤退だ」

「どうして――、どうして!?」
「篠ノ之さん、しっかりしてくれよ。マジで」
「なんで、お前は一夏を守ってくれなかったんだ!!」
ソレは、篠ノ之箒の叫びであった。心の底から出てきた、感情であった。
ソレに対して穂次は何も言わずに、やはりヘラリと笑った。激情をその身に受けた所で夏野穂次は決して揺らがなかった。
「俺のせいで一夏がこうなったから。さっさとココから逃げようぜ」
「――っ」
納得など、出来る訳がなかった。
目の前でヘラヘラしたヤツが正常でいて、そして一夏がこの状態である事に。
歯を食いしばり、箒は穂次を睨んだ。睨みながらも、箒は一夏を受け取り、一夏を労わる様に抱き締めて背を向けた。
「ま、殿(しんがり)はするさ。無事に帰れたらおっぱいでも揉ましてくださいお願いします」
「――死ね」
「辛いッスなぁ」
箒の一言にも穂次はへらへらと笑って肩を竦めて、息を吐き出した。
行きよりも少し遅い程度の速度で動く箒を見送りながら、穂次はようやく福音へと視

線を向けた。
福音は先ほどから砲口を穂次へと向けて、そしてしっかりと光る羽を幾重にもして放っていた。
当然だ。悠長に会話をしているぐらいだったのだ。
ソレは正しく隙であった。
けれどどうだ。その攻撃の全ては〝何か〟によって妨げられ、穂次に当たる事は無いどころか、砲口の近くで暴発する。
ようやく砲撃の危険を認識した福音は砲口を閉じて、距離を開ける。自身の得意とする距離で停止し、じっくりと黄色い騎士を認識した。

ふわりと、騎士を中心に何かが集まる。
八つのソレが騎士を守るように、決まった軌道を巡っていく。
「〝ヤツクビ〟、なんてカッコイイだろ？」
誰に言うでもなく、ニッと歯を見せて笑った穂次は瞼を閉じる。
精々一時間が限界かな。と思考しながら、感じる頭痛を噛み締める。
保険として、セカンドとして、そして自身を友人だと言ってくれる人間の為に。
「こっから先は通さないぜ？　なんせ――おっぱいが俺を待ってるからな！」

ちょっとした裏技だ

「どういう事ですの!?」

セシリア・オルコットは息を巻いてディスプレイ越しに居る織斑千冬を睨めた。

そんな怒りを受け流す様に千冬は鋭い目をセシリアへと向けて冷静に事実を突きつける。

「作戦と決まっていた事だ」

冷酷とも言える事実を淡々とセシリアへと突きつけた千冬はディスプレイに映る黄色と銀を見つめる。

数分前。

篠ノ之箒が織斑一夏を抱えて帰還した。

専用機を保有しているセシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒは換装装備（パッケージ）のインストールもそこそこにスグに出迎えへと向か

い、息を飲みこんだ。
意識を失っている一夏とソレを抱えた箒が視界に入ったのだ。
実戦である、という事は頭で理解していた。けれど、身近な存在がそうなる、という事は頭の中の理解だけでは足りなかった。
一夏はすぐさま医療班へと持ち込まれた。
重症といっても一夏の肉体的には損傷は無い。それは絶対防御を謳うＩＳだったからこそであり、同時にＩＳであったからこそ意識は深く落ちてしまっているのだ。
危険である。そんな事は専用機を持っていなくてもわかってしまう。
医療班へと一夏を受け渡した安堵か、それとも精神的な疲労からか、張り詰めていた糸が切れる様に箒も膝を崩した。
ソレを受け止めた鈴音は呼吸の正常さと幾分か速いが一定間隔の動悸を感じて眠っているだけと判断して安堵の息を吐き出した。
一夏だけでなく、箒までも、とは誰も考えたくはなかった。
当然の判断として、箒は医療班へと一時受け渡される。結果を言えば彼女は極度の疲労で眠っているだけである。
眠っている箒を見て、安堵の息を吐き出してようやくセシリアは気付いた。
どうして二人しかいない？

弾かれた様にセシリアは廊下を走り、会議室に充てられた部屋の襖を開いた。
空中に投影された薄明るいディスプレイが部屋を照らすだけの部屋。部屋にいるのは教員のみであり、乱暴ともとれた襖の音に驚いていた山田真耶が大きな瞳をパチクリと動かしてセシリアを見た。
「お、オルコットさん？」
「お前には待機を命じていた筈だが？」
そんな真耶の疑問にも応えずに、千冬の確認にも反応を見せずに、セシリアはディスプレイを見つめて、目を見開いた。
何故、穂次がビット兵器を使っている？
何故、穂次が暴走した軍用ＩＳと互角に戦えている？
そんな事、そんな些細な事、どうでもいい。
「コレは……コレはどういう事ですの!?」
どうして穂次がまだ戦っているのだ!!
どうして穂次がまだあの場に残っているのだ！
事実を受け入れるべきだ。けれど現実など受け入れる訳が無い。
開いた襖から専用機持ち達が姿を見せ、セシリアから睨まれた千冬がようやく口を開いた。

「これは作戦で決まっていた事だ」
そう淡々と言い放った千冬。感情も何もなく、怒りを顕わに出していたセシリアへと冷たい現実を突きつける。
セシリアの頭の中に作戦会議が巡る。
確かに穂次は自身に役割があると言っていた。
確かに穂次は自身を保険だと言っていた。
けれど、けれど、けれど！
「夏野はセカンド・チャンスを作る為に戦っている」
「……つまり、それは囮、という事ですの？」
「ああ、そうだ」
「ッ」
頭の中には先ほどの一夏がフラッシュバックし、その姿が穂次になるかも知れないという喪失感に犯される。
何度か言葉にならない音を吐き出して、セシリアは震える声で頭に浮かんだ推測を確認するように、言葉を繋げる。
「それは、穂次さんが、一番弱いから、ですか？」
「一番適任だからだ」

否定は、されなかった。
絶望で膝は崩れなかった。喪失感が増える事はなかった。
代わりに、まるで沸騰するように、頭が怒りで満たされた。
歯を食いしばり、自然と手に力が入る。足を踏み出した所でセシリアの動きはラウラによって拘束されてしまった。
「っ!?　放してくださいまし!!」
「冷静になれ、セシリア」
「冷静!?　コレが冷静になれる状況ですの!?」
羽交い絞めにされて尚セシリアは千冬へと食って掛かろうとする。
どうしてこんな作戦を立てたのだ。どうして穂次なのだ。どうして、どうして――!
「――ぷっ。アッハッハッハッハッハッ!　ヒー!　ヒッハ、はは、痛い、お腹痛い!」
唯一の存在が遂に堪えきれずに吹き出し、笑い声を上げる。
何が面白いのか、腹を抱えて笑う天災が息を絶え絶えにしながら、ようやく視線が向いてる事に気付いた。
「ああ、何が面白いのか、って顔をしているね?　何が面白いってこの茶番が面白いの。本当に、笑えるね!　思わずこの束さんを笑い殺す為のモノかと思っちゃった!」

「……束、少し黙っていろ」
「えー、ほらほら、笑わせてくれてお礼をしなくちゃぁいけないでしょ?」
畳の縁を無遠慮に踏みながら、束は羽交い絞めにされているセシリアへと近付く。ニンマリと笑っている顔が鼻先に触れそうにぐらい、吐息が感じれる程にセシリアに寄せられた。
「君のＩＳ適合率はどのぐらいかな?」
「適合……?」
「ああ、ＩＳ適性って言った方がいいのかな?　まあどちらでも構わないよ。精々高くてもＡ止まりでしょ?」
まあちーちゃん以外の人間としては高い方だよー、と言った篠ノ之束はニンマリとした顔を崩さずにセシリアから少しだけ距離を取る。
「ＩＳとの適合率が高ければどうなるのか。君は知っているかな?
適合率が高ければ高いほど、ＩＳを動かすのに違和感を感じる事が無くなる。まるで自身の肉体の様に、ね。
まあ、人間がＩＳを操る限りその性能には振れ幅が確実に存在する。ＩＳ適性っていうのはその振れ幅を小さく、そして上限に近付く為の数値だね。
さて、ココで発想を逆転させてみよう!

もしもＩＳ適性……いいやぁ、適合率を強制的に上げる事が出来る事が出来たなら？
ＩＳの意思により、ＩＳの為の、ＩＳによる、適合率の上昇。
普通の人はソレを暴走という言うし、イカれた頭をしたクソ共もソレを暴走と呼んだ。乗った人間は廃人になるんだから、正しくソレは暴走と呼べるだろうね。
普通のＩＳ達はそう成らない様にある程度のリミットが調整されているから、君たちは安心してもいいよ！」
ケラケラと笑いながらソレを論じる束。千冬は頭を抱えて溜め息を吐き出し、四人はチリチリと何かを察しそうになり、ソレを否定し続ける。ラウラに至っては既にセシリアの拘束を解いている。
そんな事はお構い無しに束は更に言葉を紡いでいく。まるでソレが当然の様に、事実をスラスラと述べるように、詩を歌う様に。
「どうしてこんな話をするかって？
そんな事もう頭で分かってるよね？
でも認めたくない？　事実だよ？　現実だよ？
じゃあ、私を、篠ノ之束の口から言ってあげよう！

村雨は、暴走を起こす為の機体だよ!!」

その為に話をしたのだから、当然である。そう言わんばかりに言い放った束の言葉にセシリアは膝の力が抜け、座り込んでしまう。

暴走。説明されただけで大凡のソレは想像出来る。

ソレを人為的に起こし、適合率を上昇させる。

ソレは確かに正しく、そして大きく間違っている。利に叶い、非人道的だ。

「束。そこまで言ったのだ。もう全部言ってやれ」

「えぇー。いやん、ちーちゃん睨まないでよー」

これ以上にまだ悲観すべき事実があるのか。

セシリアが目の前が真っ暗になりそうになりながら束を見上げた。相変わらず束はニンマリと笑いを浮かべて、セシリアを見下した。

「彼はその村雨を乗りこなしているよ」

「――は？」

「適合率が高いまま、乗っている。〝コレ〟は事実だね。

だからこそ、私は君の発言が滑稽で、それでいて茶番にしか見えなかった。笑っても仕方ないよね」

思考がさっぱり追いつかない。けれども穂次が無事である事がわかった。それだけで安心は出来る。

誰が、とは言えない安堵の息が吐き出された。

それにも束はクスクスと笑いを浮かべ、冷たくセシリア達を見下した。

「――ああ、本当に君たち人間って言うのは都合のイイ事にしか目がいかないんだね。実に、滑稽だ」

笑うことも疲れた様に息を吐き捨てた束はゆっくりと、事実を叩きつけていく。

「どうしてＩＳの適合率にリミットが設けられてるのか。リミットを越えるとどうなるのか。

暴走？　ああ、確かにソレも一つの要因ではあるよ。けれど、彼は暴走を起こしていない。どうしてか、なんてのはどうでもいいよ。君らに言う意味なんて無いし。

適合率が高い筈の彼は――君たちよりも弱い。それはどうしてだろうね？

もしかして彼の適合率は何かの裏技でもあるんじゃないかな？　一時的に彼の動きが良く〝成り過ぎる〟事はあった筈だよ。

その裏技を用いなければ、彼は君たちよりも弱い。

じゃあどうして彼はその〝裏技〟を用いないのだろうか？

メリット以上のデメリットがあるんじゃないのかな？

脳の破壊？　廃人化？　意識の乗っ取り？

残念。それらは暴走で引き起こる原因でしかないよ。
正しく、適合しているんだよ。彼と村雨は。
彼と村雨は一心同体である。と今は言えるね。言えちゃうんだよ？
君たちは自身のバリアエネルギーが削られる感覚を知っているかい？
もしも知りたければ彼を訪ねればいい。きっと答えは返ってくるよ」

夏野穂次は自身の唇を噛み締める。そうでもしなければ意識が落ちそうだった。
舌に広がり続ける鉄の味と転がる何かを無理矢理喉に通して敵を睨む。睨む、と言っても穂次の瞼はずっと閉じられ続けているのだが。
”ヤツクビ”を動かし続ける事は苦でない。ヤツクビ自体はビット兵器であるけれど適性など必要としない、半自律兵器である。

ジンワリと、小さな穴の空いた風船の様に、虚脱感が穂次を支配し続ける。
既に一時間は経過した。
力は抜け続けているというのに感覚はハッキリしているという矛盾。
『どうしてお前は一夏を守ってくれなかった!?』
穂次の眉間が歪み、ヤツクビの動きが鈍る。その瞬間を見逃す福音ではない。
高圧縮のエネルギー弾が空を穿ち黄色の騎士へと迫る。けれど空間を舞うヤツクビに妨げられ騎士には届かない。
『どうしてお前は一夏を守ってくれなかった!!』
守れなかった。ソレは言い訳になってしまう。
穂次にとっては守れたかもしれないのは事実だ。
もっと早く気付いていれば。
もっとヤツクビを上手く操ることが出来ていたなら。
もっと早く到着出来ていたならば。
一時間自問自答した所で正しい答えなど返ってこない。
返ってきたところでソレはやはり穂次を責める声にしかならなかった。
もっと自分が上手ければ!!
もっと自分が速ければ!!

穂次の中で何かが弾けた。
意識が持ち上がり、穂次は瞼を上げた。
上げてしまった。
視界とハイパーセンサーで確認出来る銀の福音と何度も認識した羽の形の高圧縮エネルギー弾。
弾は幕となり、壁となり。隙間など一切許さないソレは容易く穂次を包み込み、弾ける。
爆炎の中から自然落下していく黄色の何かを見下した福音。高く上がる水柱をハイパーセンサーで捉え、胎児の様に膝を抱えて、頭部を守る様に翼で包み込んだ。

白骨と武器と女のセカイ

篠ノ之箒は意識を浮上させ、古めかしいアナログ時計へと視線を向けた。
短い針は四を示し、長い針はそろそろ十二へと到達しそうだ。
まだ一夏は眠っている。意識の無いまま三時間も眠っている。

目が覚めて半分程無意識で一夏の眠る部屋にやって来た事は、おぼろげに覚えている。
こうして眠る一夏の横で項垂れてしまったのも、箒は覚えていた。
一定の間隔で鳴る電子音だけが、今も一夏が生きている事を辛うじて教えてくれる。
一夏がどうしてこんな目に遭わなくてはいけない。
どうしてアイツは一夏を守ってくれなかった。
どうしてアイツは無事なんだ。
頭の中で囁かれる声達が箒を締め付ける。息が詰まり、呼吸が滞る。
『俺の所為で一夏はこうなった』
違う。それは、断じて違う。

箒の中であのお調子者がいつもの様にそう言った。それは正しく彼の言葉であり、そしてソレを責めたのは自分の言葉だ。

『お前はどうして――』

私はどうして一夏を守れなかったのだろう。

頭に血が昇っていた箒といつもの調子であった穂次。もしも穂次が糾弾していたならば、箒はソレを否定して、食い付いただろう。

けれど、あの場は正しく、戦場だったのだ。

否を認めた穂次はまるで何事も無い様に箒を戻した。そう誘導された。

箒にしてみれば、ソレが全てだった。

もしもあの場で反論でもされていれば、自身が意地になる事は確かだっただろう。故に、箒は自身を許せる訳が無かった。

力を手に入れて、ソレを使いたくなる衝動。

感情が浮つき、流される。

ソレを律する為の剣術だった筈なのに。

箒は拳を強く握り締める。血流が通ることもないように、強く、強く。

守る事が出来たのは、自身とて一緒だ。

それなのに、自分は夏野を責めてしまった。

夏野だって私が悪いと知っていた筈だ。
それなのに、私には何も言わなかった。

襖が滑る音が鳴り、とよほど乱暴に開いたのか柱にぶつかり盛大に音を立てた。
髪を二つ括りにした凰鈴音は部屋の中を見て舌打ちをする。
「分かりやすいわね。アンタ」
小さな足音を立てながら鈴音は箒の背後に立ち、見下す。
項垂れている箒は振り返る事もせず、そんな気力も無く、ただ頭を下げているだけ。
「アンタさ、そうやって落ち込んでれば誰かが助けてくれると思ってんの？　箒ちゃんのせいじゃないよー、とでも言ってほしい訳？」
「……ちがう」
「あっそ。なら怒られたい訳？　アンタのせいで一夏がこうなったのよ！　って言われたいわけ？」
「……」
「落ち込んだポーズしてりゃ、怒るか慰めるかしてくれると思ってんの？　悲劇のヒロイン気取って、わぁー箒ちゃんかわいそー、とか願ってんの？

アンタにそんな暇はないわよ。落ち込むのは後でも出来る事よ」
「……わたしは、もう……ＩＳを、使わない」
「つざけんじゃないわよ!!」
鈴音は背後から箒の胸倉を掴み、無理矢理に顔を上げさせる。激昂とも言える程の怒りを見せている鈴音の表情に箒は目を逸らした。
「何の為にアイツがアンタを逃がしたと思ってんのよ!!　その全部を無駄にするつもりなの!?」
「もう、嫌なんだ……私のせいで、誰かが落ちるのは」
「ッ――!」
鈴音の平手が箒を捉え、乾いた音を鳴らす。胸倉掴まれたほうきは力無くソレを受け、そしてもう一度胸倉を引っ張られる。
「甘えんじゃないわよ……。ふざけんのも大概にしなさいよ……!!　まだヒロインぶってるつもり!?　そうやって自分の殻に閉じこもって、現実から逃げて、白馬の王子様でも待つつもりなの!?」
「ではどうしろというんだ!!　私だって精一杯やった！　その結果がコレだ！」
「精一杯!?　じゃあもっと気合入れなさいよ！　精一杯やってんのはアンタだけじゃないのよ!!」

「――、それでも私は――、もう取り返しが――」
「逃げるな！　篠ノ之箒！　アンタはまだ戦えるでしょ!?　なら立って、無理矢理にでも結果を手に入れなさい！」
「その結果がコレだろう！」
「まだ結果と決まった訳じゃない！」
「……どういう、事だ?」
呆然とした。けれども篠ノ之箒は自身の力で立っていた。
その事を確認した鈴音は至極面倒そうに溜め息を吐き出して口角を吊り上げた。
「今ラウラが――」
「出たぞ。ここから三〇キロ離れた沖合上空に目標を発見した」
「流石はドイツ軍特殊部隊」
「――が、悪い知らせもある。セカンド――、夏野穂次の乗る村雨の信号が途絶えた」
「……そう」
「あまり反応しないのだな」
「あの馬鹿は散々あたし達に死ねなんて言われて生きてるのよ。ここで死ぬようなヤツじゃないわ」
「そういうモノか?」

「だから言ったでしょ？　鈴は大丈夫だって」
「そうですわ。あの穂次さんが簡単に落ちるなんて思えませんもの」
「お前らは私に食って掛かって来ただろう」
「それは、ホラ、ね？」
「オホホ」
　黒い軍服を纏うラウラの後ろからセシリアとシャルロットがドコか青い顔をしながら姿を見せる。
　少し前にラウラに事実を突きつけられて、蒼然とし、ラウラに真実を言うように迫った、なんて事はない。決して。
　そんな二人を容易く想像出来たのか鈴音は溜め息を吐き出して箒に向き直る。
「で、アンタはどうするの？　穂次はアンタ達を逃がして、チャンスを作った。まだ蹲っていたいならそうしなさい」
「戦う――私は戦って、勝つ！」
「あたし達の誰かが落とされるかも知れないわよ？」
「もう落とさせない。絶対に、私の前では！」
「上等ね。そもそもアンタに守られるほど弱くもないわよ」
　まるで冗談の様に鈴音は肩を竦めた。入り口ではラウラ達が苦笑をしている。

それでこそ、知っている箒なのだ。
鈴音は一度息を吐き出して、真剣な顔付きへと変える。
「じゃあ、作戦会議をしましょう。次は無いわ。ココで確実に、墜(オ)とすわよ」

◆◆

両足に少しだけささくれた何かが刺さる感触が広がった。耳がカラリと乾いた音を拾い、俺は瞼を開いた。
空は黒。地面は白。そして鉄格子を境にして、その先には何も無い世界。
俺がこの世界に入るのは三度目になる。
だからこそ驚きもしないし、辺りを見渡すだけの余裕もある。同時に後悔も。
「のぉ、主(あるじ)。また負けてしまったようじゃなぁ」
俺にそう声を掛けてきたのは彼女だった。
濡羽色の髪を揺らし、対極とも言える白の着流しを纏った女。透き通るような肌に鋭い黒い瞳、柳の様に美しい眉、冷たさを覚える様な貌(かお)の彼女とも、コレで三度目の出会

いとなる。
　鉄格子の向こうにいる彼女はまるで無駄を感じさせない足取りで鉄格子に近付き、握り締めた。
　白い着流しを押し上げるおっぱいが鉄格子に押し付けられて僅かに歪む。着流しも少しだけ肌蹴て鎖骨と谷間が目に眩しい。
　更には着流しの間から覗く肉厚な太ももが実に素晴らしく俺の理性を削り取っていく。
　そんな俺がオカシいのかクツクツと喉で笑い、その美しい貌にも笑顔を浮かべる彼女。
「のぉ、主。また負けてしまったのぉ」
「本当に、ごめんなさい。いや、でも今回は仕方ないと思うんだよ」
「別に怒っとりゃぁせんよ。だって妾は主だけのモノじゃからのぉ。おお、怒っとりゃぁ、せんさ」
　絶対嘘ダゾ！　怒ってるゾ！
　彼女とちゃんとした会話をするのはコレで三度目になるけれど、それでも分かる。つーか、笑ってるその口角がスゲーピクピク動いてる。
　この鉄格子が無けりゃ、絶対俺はあの素晴らしい腰にある刀で両断されてたね、間違

いない。

ふぅ、と溜め息を吐き出した彼女は少しだけ目を伏せて呟く。

「本当に心配したんじゃよ?」

「あー、ソレは申し訳ねーです」

「本当じゃよ? もういっそこの鉄格子なんて格子状に斬り断って、主に代わり世界を滅ぼそうとする程度には心配したんじゃよ?」

「スケールがデカ過ぎて急に分からないようになってきたゾ」

ともあれ、目の前の彼女がこの鉄格子を越える事はしないだろう。ソレは絶対だと思っている。

「まあ俺は無事だよ」

「無事な訳がないじゃろ。あの時に妾が主との繋がりを希薄にせねば死んどったぞ?」

「でっすよねー……そこらはマジで感謝してるよ」

「主は調子がよいのぉ」

「あっはっはっ。俺だからな!」

「よぉ言うもんじゃな。戯言もここまで貫けば歌舞伎のようじゃなぁ」

「褒めるなよ。照れるぜ!」

「褒めとりゃぁせんよ。主」

それは残念である。彼女の様な美人に褒められるのは嬉しく感じる。当然、彼女は除く。

溜め息混じりに俺を見つめた彼女はクルクルと指を動かしながら呟く。

「あのヤツクビとかいう玩具（ガング）じゃが、アレはいかんのぉ。主を守れるという事は非常に好い（よい）が、それだけじゃ」

「お、おぉう」

「絡繰（カラクリ）の様で愉しくもあるが、主がさっぱり動けないというのも問題じゃの」

「いや、ホント、弱くてスイマセン」

「否定はせんぞ？　文字通り主は弱いのじゃから」

「精進します」

「主は頑張っておるよ。ソレは妾が主の次に知っとることじゃ」

「それでも俺はまだお前をちゃんと操れてないからな」

「努力すれば努力するだけ、妾を完璧に乗りこなす事から離れていく。というのは実に矛盾的で滑稽じゃがのぉ」

「ソレは言っちゃいけないゾ！」

「しかし主は努力を続けるんじゃろ？」

「まあ俺だけなんか卑怯だし」

「それで負けては世話が無いがの」
「ぐぬぬ……」
「妾はそんな主も好きじゃよ？　妾をしっかりと受け入れてくれたのじゃからな」
「いやん。まるで俺が入れられる方みたいじゃないか！」
「……主にその趣味があるのなら」
「いやマジですいません冗談です」
「ツマランのぉ……。まあ妾は生娘の設定じゃからある程度は恥らっている方がいいのかも知れんがの」
「設定とか言うなよ」
「仕方あるまいて。妾は〝いんふにと・すらとす〟じゃからのぉ。主の道具であり、武器じゃ」
「こんな感情溢れる武器が居て堪るか」
クツクツと意地悪く笑っている彼女（村雨）に思わず溜め息を吐き出してしまう。
彼女、つまり村雨であり、ソレは俺のＩＳの名前であり、同時にソレは彼女になる。
ＩＳコアには女の子が居たのだ!!　居た、という表現はおかしいのだけれど。というよりは村雨程感情が豊かな女の子は居なかったけれど。
「のお、主。妾との繋がりなんじゃが、もっといい方法はないかのぉ」

「これでも頑張って村雨の動きに任せてるんだけど？」
「赤子の遊びかと思とったんじゃがアレで真面目じゃったか」
「スゲー落ち込むんですが……」
「冗談じゃよ。が、アレでは主がいつか壊れてしまうじゃろうて」
「まあ戦闘終わった後の筋肉痛とか色々は覚悟してるけど……」
「肉体的にではなくて、精神じゃよ」
「自我崩壊エンドか、乗っ取りエンドって事か」
「〝えんど〟は分からんが、少なくとも妾が殺す気が無くとも主の意識が勝手に妾に混じってしまうのぉ」
「ナニソレコワイ」
「妾に言うでないわ。妾にそういう因子を埋め込んだ阿呆共に言うてくれ」
「だな……で？」
「断片的な繋がりを恒久的な繋がりにしたいのじゃよ」
「……ん、それって変わらなくないか？」
「そんな事はないぞよ」
「おい、言葉遣いが可笑しくなってんぞ」
「ひゅー、ひゅー」

鳴りもしない口笛を吹きながら顔を背ける村雨をジトリと睨んでみる。そうすれば口を尖らせて不満顔に変化した村雨が渋々と声を紡ぐ。

「妾だって主との繋がりを深めたいと思うのは普通じゃろ？　第一、元々深く交わっていた繋がりをここまで薄めたのは主じゃろう？　それは酷というモノじゃろう？

だから妾と深く繋がろう、主。先っちょだけ、先っちょだけじゃから」

「最後で台無しだな、おい」

「これだけ深く受け入れてくれる癖に自分には一切触れさせない主が悪いんじゃよ……。妾に銘を与えてくれたんじゃから、甲斐性ぐらい見せてほしいのぉ」

「当初のカッコイイ村雨はドコに行ったんだ！」

「さてのぉ。主の腰にでも差さっておるんじゃろうて」

クツクツと笑ってみせた村雨。

彼女の言っている事は本当だろう。いや、俺の腰には刀も何もないけれど。

適合に関してはきっと真実である。ソレはなんとなく分かる。そもそも村雨は俺に嘘を吐けない。そんな機能が無いのだから、当然と言えば当然なのだけど。

「それで、何かしらの悪影響もあるんだろ？」

「必然と適合は深くなるよって、以前よりも痛みを明確に感じるじゃろなぁ」

「えぇ、スゲー怖いんですけど」
「安心せい。直に悦くなる」
「安心できる要素が一切ないんですがそれは……」
「問題ないじゃろ。元々それほど気にもしとらんかったくせに、今更囀ることもなかろう」
「ひぇっ……」
「ああ、それと――」
「まだあるのかよ、もうライフが少ないんですけどー」
「いい加減に妾を抜いてもよかろう」
「……」
「幾分も切れ味は落とすつもりじゃし、問題なかろうて」
「……はあ、わかった。どうせ抜かなきゃ怒るんだろ」
「主のそういう所、妾は好きじゃよ」
ニンマリと笑った村雨はチョイチョイと俺を手招きする。
カラリと骨群を鳴らしながら歩き寄る俺が鉄格子の前まで来ると、蛇の様に素早く俺の襟首を掴み鉄格子へと寄せた。
顔面に強い衝撃と唇に柔らかい感触と何か別の硬い衝撃。

「ツテェ！」
「ふむ、初接吻は檸檬とか言うとったが血の味じゃな。妾らしい、と言えばそうじゃが」
「主の心配ィ！　見て！　お前が思いっきり鉄格子にぶつけたからスゲー痛がってる主が居るよ！」
「主のそういう所も妾は好きじゃよ」
「ああそうかい！　愛してるぜ、チクショウめ！」
捨て台詞の様に吐き出した言葉に身を捩る美女。鉄格子越しに指を一本立てて意識の落ちそうな俺に懇願している。
当然、俺は何も言わずに意識を落とし、白骨の絨毯に眠るのだ。

パチリと目が覚めた。

水の中という事はスグに理解できた。深海である、というのもなんとなく理解できる。

水の中に居るというのに、呼吸が出来る。深海であるのに水圧に押しつぶされない。

ＩＳ様様だ。

全く力が入らないのは、村雨のエネルギー残量が僅かだからだろう。生命維持に費やしすぎである。それで生き延びた俺が言えたセリフじゃないけど。

意識して、変らず空を舞っているだろう八つのソレに帰還命令を送る。村雨が上手く操ってくれるからこそ、である。

コレを言い始めるとセシリアさん辺りは俺を卑怯だと罵りそうだけれど、まあ実際に卑怯だと思う。

ＩＳに全てを委ねる俺は卑怯者だろう。自分で判断せず、自分で行動せず、自分で戦えない。俺はきっと卑怯者だ。

だから俺は努力を続けよう。俺は天才じゃないから、努力するしかない。

そうじゃないと、俺は一夏の隣にも立てない。

いや、ホモ的な意味じゃなくて。友人的な意味で。

ヤツクビが黒い粒子を吐き出しながら左腕に収まる。

体が浮上する感覚と思考が清んでいく。高揚感と有り余る力を持て余し、エネルギー

として蓄積していく。
まるで自分の様な感覚。
いいや、正しくコレは自分なのかも知れない。
「さあ、リベンジだ」
海底を蹴り、俺は空へと戻る。
水圧を突破し減るエネルギーを知覚しながら、ようやく海水から飛び出せた。
目は開いている筈なのに、まるで閉じている様に明瞭に世界がわかってしまう。
戻れない。という事はないだろう。ただ意識してやっていたことが無意識に出来る様になっただけだ。それだけ。
一つだけ深呼吸をして先ほどから煩い通信を受信する。
『夏野くん！　無事だったんですね！』
「死んでたみたいに言われてやんの」
『夏野。話せるか』
「そうじゃなきゃ通信出ませんよ。なんなら移動しながらでも今は大丈夫ですよ、織斑先生」
『――、そうか。では改めて命令を出す。馬鹿者共を止めるついでに、銀の福音を停止させてこい』

「了ー解！」

息を飲みこんで一拍置いて俺に命令を下した織斑先生。きっと織斑先生の中での俺の好感度が上昇したに違いない。コレは織斑先生を落とせる日も近いかもしれない。

宙を蹴り飛ばし、行きよりも速く移動する。

世界はやはり明確に理解できた。

銀は福音を奏でる

銀の福音は空に浮かんでいた。胎児の様に膝を抱え、その翼で頭を抱きこんで、空に漂っていた。

機械的な感覚で、ただ異常を感じて、顔を上げた。

砲弾を認識。超音速で飛来したソレを避ける術など無く、頭部に衝撃が走り、同時に砲弾が爆発を起こした。

弾かれた頭につられ、体がブレる。

「ヘッドショット、ヒット。次の砲撃を開始する」

小さく、状況を認識させるように呟いた黒いＩＳ――シュヴァルツェア・レーゲンを纏うラウラは業務的に次弾の狙いを定める。

相手が動き出す前。反撃など論外。

肩に装着された八〇口径レールガン〝ブリッツ〟の狙いを再度定め、トリガーを絞る。

バチリと砲口に走った稲妻が同時に弾丸を吐き出した事を意味し、音速を超えた弾丸が福音へと迫る。

「――――」

体を巻き込むように翼が閉じられ、福音が急落下をする。弾丸が福音の居た位置を通過し、福音は翼を広げて急停止をした。

俯いていた福音の顔が、上がる。

表情などない。フルフェイスである頭部装甲に僅かに文字を流し、確かめる様に指を折り曲げて、ゆっくりと開かれる。

ラウラは息を飲みこむ。覚えのある緊張感がラウラを再度支配して、自然に、トリガーを絞った。

弾丸が放たれたのを合図の様に福音は動き始めた。まるで迫る砲弾で遊ぶように、白いエネルギー跡を残して翔んでいる。

数発ほど砲弾で遊び、そして飽きたのか、それとも覚えたのか福音はラウラに向かい加速を始める。

ラウラは思わず舌打ちをした。予想していたよりも福音の速度が速すぎるのだ。

いくら砲撃を行なったところで避けられ、避けた位置への偏差射撃を行なおうと羽型のエネルギー弾により相殺される。

砲撃パッケージである『パンツァー・カノニーア』を装着した弊害で、砲撃による反動相殺の為に速度を落としているラウラが高速で移動し続けるなど不可能だ。

一〇〇〇メートルを越え、距離がスグに縮まる。残り三〇〇メートル地点で更に福音は加速し、その右手をラウラへと伸ばした。

同時に、天から高速で飛翔した何かがその手を弾き飛ばした。

青。一瞬だけでも十二分に捉える事の出来るハイパーセンサーで捉えたのは青であった。空にいなかった筈の何か。けれど、ソレは居た。

僅かに気が逸れた福音の隙を逃す訳も道理も無い。ラウラはブリッツを福音へと向け、トリガーを絞る。

音速を越えている砲弾を回避した福音を待っていたのは青からの狙撃だ。

「あら、つれませんのね」

バイザー越し、超高感度ハイパーセンサー〝ブリリアント・クリアランス〟を通して福音へと鋭く視線を向けたセシリアの周囲にはＢＩＴ兵器である〝ブルー・ティアーズ〟は存在しない。その全てはスカート状の腰部へと収まりスラスターとして役割を果たしている。

手に持った大型ＢＴレーザーライフル〝スターダスト・シューター〟で狙いを定め、光速に近しい弾丸が福音へと接近した。

グリン！　と大きく体を捻らせて機動を無理に変えた福音がその狙いを定めるべく体勢を立て直し、翼を開く。

「いらっしゃい！」

まるで音符でも付きそうな声が空気を震わせて福音に反応させた。

福音の背後に現れたシャルロットは両手に持ったショットガンを躊躇うこともなく放った。

意表をついた一撃目は命中。二射目からは速度に追いつく事が出来ずに外れ、速度を維持したまま翼が開かれる。

射出された羽達は容易く二枚の実体シールドと同じく二枚のエネルギーシールドにより防がれる。弾雨などモノともしないシールドに福音は思考を戦闘から一時離脱へと変更する。

各自の速度を計算したところで、自身に追いつくことは青のＩＳのみになり、各個撃破ならば何の問題もない。

三機による包囲戦を掻い潜りながら、福音は奥の手とも言える全方位への砲撃を行なう。少なからず、防御か回避はしなくてはいけない攻撃。

攻撃を狙うのならば僅かにラグが生じるが、移動ならばソレは更に小さくなる。全スラスターを開き、福音は一気に速度を得ようとした。

「させるかぁ！」

飛び込んで来たのは橙でも青でも、黒でもなく、紅だ。鋭い剣撃が福音を襲い、その

移動を封じた。

防御をされてしまった。篠ノ之箒は事実を理解した。

――それでいい！

思考は防御された事への悔しさではなく防御させる事が出来たという事実だけを認識した。

刀を振り、数秒程度だが時間を稼ぐことが出来た。それだけでよかった。

箒は福音を蹴り、その動きを僅かに制限した。空中で器用に回転し、身を反転させて起こした福音が認識したのは焔であった。

鈴音――甲龍はより攻撃に特化していた。速度でも、防御でもなく、ただただ火力へと重きを置いた。

衝撃砲に炎を纏わせ、単純火力を強化した。ＩＳの性質上、パイロットの身を守る為に害意は全て遮断しなくてはいけない。つまりソレは行き過ぎた熱も含まれる。

「やりましたの!?」

「――まだだ！」

水蒸気と熱により歪んだ空間に銀の福音は確かに立っていた。

その全て、煩わしいソレらを振り払うべく両腕を広げ、翼を大きく広げた。風圧により水蒸気と熱が霧散し、正しく福音を視認する事が出来た。

出来たのは、ソコまでだった。
瞬間に広がったのは羽型の高圧縮されたエネルギー弾の壁。
「箒！　僕の後ろに！」
「ああっ！」
箒はシャルロットの言葉に従い後ろへと下がった。コレは決められていた役割分担だ。
展開装甲により消費するエネルギーの多い紅椿のエネルギーを節約する為の、集団戦である事を活かした行為だ。
「コレは、結構キツイね……穂次は毎回こんな気持ちだったのかな？」
「……すまん」
「謝るのは僕に、じゃないよ」
決してシャルロットのやや棘を含んだ言葉を箒が受ける為の行為ではない。決して。
シャルロットとて箒の気持ちは分からないでもない。置いていかれた穂次の事は心配であるし、信号がロストしている事も気がかりだ。今も、こんな戦闘が無ければ探したい気持ちで一杯だ。
思考が順繰りし、何かを言いそうになった所で物理シールドの一つが壊れてしまう。
「悠長には喋れないみたいだね」

「ああ。文句も恨み言も帰って聞くさ」
「ソレは覚悟してもらわないとね」
シャルロットがクスリと笑い、意識が戦闘へと改めて向く。
引き下がったシャルロットと等に代わりラウラの砲戦仕様の交互連射とセシリアによる移動射撃が福音を襲い、その動きを鈍くさせる。
動きが鈍くなれば、隙が出来る。
「動きが止まれば、コッチのもんよ!!」
直下から鈴音の突撃。双天牙月による斬撃。少しでも距離が開けば衝撃砲を浴びせる。
無闇な攻撃ではない。目的は攻撃と加速を担う、翼。
けれど距離が開けば福音とて攻撃は出来るのだ。翼を展開し、鈴音へと向けて弾幕を張る。回避運動をしながらだったならば福音は追いつかれることはない。
そう、回避運動をしながらならば。
「うぉおおあああああ!!」
エネルギー弾を全身に浴びながら鈴音は突撃した。機械である福音に驚きは無い。けれど、ソレは確かに思考の停止であった。
回避をし続けられた攻撃。防御をされた攻撃。その攻撃に突っ込んでくる事など、理

解出来なかった。だからこそ、思考は一瞬だけ停止した。その一瞬だけが鈴音にとっては必要だった。

振り上げた双天牙月は片翼の中程に当たり、ソレを切断した。

姿勢を崩した福音に対して鈴音はようやく息を吐き出して肩で呼吸を繰り返す。

「はっ……はっ……どう――」

その言葉は途中で止まった。姿勢が崩れた福音は片翼になりながらも体勢を戻し、鈴音へと回し蹴りを決めた。

脚部スラスターで加速された蹴りは鈴音を防御の上から蹴り崩した。

「ッ」

――腕部装甲がイッた。けれど、まだ戦う事は出来る。

ゾクリ、と鈴音の背筋に冷たい何かが走った。足を振り上げた福音が自身の頭の上に居たのだ。

咄嗟に、半分以上無意識で鈴音は両腕を頭の上でクロスさせた。瞬間に衝撃。

「鈴！」

箒の叫びなど無意味だと言わんばかりの速度で鈴音は海へと、水柱を上げた。

箒の頭の中に一夏がフラッシュバックし、ソレを振り払う。手招きする悪夢から逃げる様に、箒は両の手に刀を握り締め、福音へと斬りかかる。

制止状態からの急加速に福音は箒を僅かに見失い、箒の刀は左右の肩へと食い込む。けれど、ソコから刃が進む事は無い。福音は刃を手で掴み、放たれるエネルギーによる装甲の損傷などお構いなしに掴み続ける。

福音の顔が、箒を捉える。

――引けない。

箒は息を飲みこんで、歯を食いしばる。

片翼が箒を捉えて、その砲口に光が収縮していく。

――引くことなど許されない。

――私は力を得たのだ。だからこそ、力を奮う。

――何の為に？

「誰かの為だろうがッ!!」

少なくとも自分ではない誰かの為に。

暴力は昇華する。ガチリと何かが箒に、そして紅椿に嵌る。

エネルギー弾をグルンと一回転し回避する。同時に爪先の展開装甲が、主に望まれるままに開きエネルギー刃を形成する。

「はぁぁぁあああ!!」

踵落としの形で福音の前を通過した箒の脚。その踵は命中などしなかった。けれど、

それで何も問題は無い。
ズルリ、と残った片翼がズレ、切断される。
両翼を失った福音が崩れるように海へと落下していく。
「はっ、はぁ……はぁ、」
「無事か!?」
乱れた呼吸を整えるように、大きく呼吸を繰り返す箒にラウラは近寄る。
そのラウラを手で制止させた箒は自身に問題が無い事を同時に示した。
「問題ない。それよりも、福音は――」
どうなった、という言葉は続かなかった。
盛大に響くＩＳの警告音がソレを妨げた。強烈なエネルギーの反応。示す場所は海であり、そして福音が落下した地点だ。
その場には白い光があった。海面を半球状にヘコませ、体を抱えた銀の福音がその場に浮いていた。
「これは……？　いったい何だというのだ」
「!?　マズイ！　コレは『第二形態移行』だ！」
ラウラの声に反応するように顔を上げた銀の福音。
フルフェイスである装甲には何も感情などは無い。けれどソコには明確な敵意が

あった。証明をする様にＩＳの警告音がさらに喧しく鳴り響く。
『キェェアアアア!!』
獣の咆哮にも似た電子音が辺りに響き、ソレを皮切りに福音が動き出す。
反応が遅れてしまったラウラの脚を掴んだ福音は腕を引き寄せてラウラを無理矢理近くに寄せる。
ラウラが攻撃したところで何も動じず、変化が起こる。
切断された頭部から、ジワリと白いエネルギーが溢れる。
ゆっくりと、ソレは形を形成し、
ゆっくりと、蛹から孵る様に、
ゆっくりと、エネルギーの翼が完成し、確かめる様にソレは大きく広げられた。
落ちた羽の様に、エネルギーの残滓が広がり、無慈悲に美しい翼がフワリとそのラウラを包み込んでいく。
「ラウラッ!」
「よせ!　にげろ!」
シャルロットを手で制止させたラウラはソレだけの言葉を残し、翼に包まれ、白い繭が完成した。
瞬間、僅かに光が漏れる。

零距離による高圧縮エネルギー弾の掃射。ボロボロになったラウラが繭から落とされる。

繭が解かれ、福音はその顔をシャルロットへと向けた。

「よくもっ!!」

シャルロットは手にショットガンを呼び出し（コール）福音へと向け、引き金を引き絞った。

ベキリと、福音の装甲が音を立てて割れる。至る所からあふれ出したエネルギー。ソレらは小さな翼を形成し、エネルギー弾を放つ。

途端にシャルロットは後ろに引かれる力によって福音の前から大きく離れてしまった。

「え？」

迫るエネルギー弾達は何かによって防ぎきられシャルロットに当たる事もなく、爆散した。

八つの何か達は黒い粒子を吐き出してシャルロットを中心に――

いいや、その後ろの主に従う様に巡る。

「随分変ったけど、アレって福音さんでいいのかねぇ？」

「ほつぎ？」

「ん？　呼んだ？」

「生きて――」
「そりゃぁもうピンピンしてますよ。ま、色々冗談言いたいけど、ソレは後って事で」
「え、わぁ!?」
穂次は抱えていたラウラをシャルロットへと渡す。そしてシャルロットの前に立った。
「まあシャルロットお嬢様は後ろで見てて下さい」
「――はい」
「ありゃ、まあお淑やかなのはいいけどさ。セシリアさんも、篠ノ之さんも損傷してるだろうし、後ろにいてもらっていいッスよ！」
大きく手を広げて、冗談の様にそう呟いた穂次の左腕にヤツクビが集まり、盾へと戻る。
同時に、漆黒とも言える粒子が噴出し、穂次は躊躇うこともなくその粒子の中へと手を入れる。
腰元に左腕を構え、まるで刀でも抜く様に穂次はソレを引き抜いた。
引き抜かれたソレは正しく刀であった。漆黒の刀身の刀。
「銘刀（メイトウ）――〝村雨〟。さて、推してまいろうか」
穂次はへらりと笑いながら切り伏せる敵をその両の目に捉えた。

代償

自身、ＩＳであるその名前を冠する刀。
漆黒の刀身は一寸のブレもなく、刃を形成している。
穂次はゆっくりと息を吐き出し、柄を握りなおす。瞼は閉じられることもなく、真っ直ぐに銀の福音を見ている。
福音の翼と穂次が動き始めたのはほぼ同時であった。
愚直に、ただ真っ直ぐに踏み込んだ穂次。
何重にもエネルギー弾を張り接近を拒絶する福音。
爆発。エネルギー弾は穂次へと命中した。けれど福音は絶えずエネルギー弾を撃ち込み続ける。
何度も巻き起こる爆発。けれど、その爆発は前へと進んでいる。ただ前へと、爆発によるエネルギーの残滓から黄色の騎士が現れる。
左腕に供えられた盾を前にし、全ての攻撃を防いでいた。
エネルギー弾による弾幕を抜けた穂次は盾を下げ、宙を蹴り飛ばし、急激に速度を上げる。

福音に確認出来たのは黒い点だった。その点が自身に迫っている事だけは正確に認識する事が出来た。僅かに漏れ出した黒い粒子により、福音は気付き、身をズラしソレを回避するに至った。

漆黒の刀身が福音に回避された事に穂次は何も反応はしなかった。なんせ、攻撃はまだ終わっていないのだから。

突き出した右腕をスグさま戻し、腕を反し横に一閃。

身を守るように翼で身を抱き込んだ福音は自身の失態に後悔する。

白い繭。その繭を容易く侵食するように黒の刀身がヌルリと姿を現す。エネルギーで形成された繭を貫き、一部分を斬り飛ばした。

理解などする前に、福音のセンサーは黄色の騎士を認識した。

ヘラリなど笑っていない。口を真一文字にしている訳でもない。口角が吊り上がり、喜悦に歪んだ笑み。

伸ばされた左手が福音の頭部装甲を掴み、力が込められる。

危険と判断する前に、咄嗟に福音はその装甲全てに亀裂をいれ、小さな翼を生やす。エネルギー弾を射出し、拘束を解く為に暴れる。

容易く拘束は解かれ福音は黄色の騎士から距離を取る。

小さいとは言え羽をもろに喰らっている筈である穂次は刀身に纏わり付いていたエ

ネルギーの残滓をまるで血を払う様に腕を振るう。
　刀身が僅かにブレ、黒い粒子が撒き散らされる。しかし、刀身は綺麗な形ではなく、乱れ、歪み、結合が解けるように黒い粒子へと変化して霧散した。
「あー」
　まるで気が抜けた様に声を出した穂次に対して福音は警戒を解くことは無かった。刀身が消えた瞬間に、盾が夥しい程の黒い粒子を吐き出したのだ。
　柄を器用に手で回し、逆手で握り直した穂次は鞘に収める様に盾の頭へと柄を押し当てる。
　夥しい量の粒子は一気に盾へと集束し、柄を一息に引き抜けば先ほどよりも長い刀身がソコには在った。
「さあ、楽しもうぜ？」
　へらり、などとは既に形容できない。
　アレは気の抜けた様な笑いなどではない。
　戦闘を純粋に楽しむ様な、殺し合いを目的とした狂人の様な、我慢していた事を漸く許された様な、嗤い。
　穂次は宙を踏み、一足飛びに福音へと接近する。
　逆手で握られた刀が振るわれ、翼を掠り、斬り削られる。

連撃と言える猛攻。一振り一振りが福音の首を狙う一撃。
だからこそ、福音は防御し続ける事が出来た。
だからこそ、福音はエネルギーを犠牲に唯一得たデータを元にソレを実行し続けた。
五度、翼を斬り削られようやくソレは起きた。
綺麗に刀身を保っていた黒い粒子たちが揺らぎ始める。ソレを見逃す程福音に余裕など無い。
揺らぎと同時に穂次はバックステップを踏む。更には天を踏み、海へと垂直に加速する。
コレを逃す訳にはいかない。これ以上アレにエネルギーを削られる訳にはいかない。
福音は翼を大きく広げて、エネルギーを溜め込み、羽を穂次へと飛ばそうとした。
穂次が嗤っているのを見なければ。
甲高い音が空気を揺らし、福音にソレの接近を教えた。瞬間に福音は翼を防御へと回し、けれど繭に強烈な衝撃がぶち当たり大きく吹き飛んでしまう。
福音は体勢を立て直し何かが飛んできた方向へとセンサーを向ける。
ソコには白が在った。
荷電粒子を放った影響か、稲妻を僅かに纏わせた白の騎士がソコには在った。
「よぉ、ヒーロー。遅かったじゃねぇか」

「登場が遅れてこそのヒーローだろ？」
　まるで登場を知っていた様に織斑一夏の隣に夏野穂次が移動し、へらりと笑いながら軽口を叩く。
　その軽口に乗るように、一夏も笑う。
「前と一緒さ。
　締めは任せるぜ？　相棒」
「ああ、任せろ。相棒」
　いつかと同じ様に、柄を握り締める穂次の右拳に変形――進化をした一夏の左拳がぶつかった。
　穂次が一歩目を踏み出す。その一歩こそ村雨の至高であり、同時に穂次の特異点である。
　戦術が自然と溢れる。夏野穂次は異常だった。
　戦略が自然と成せる。夏野穂次は異常だった。
　圧倒できる力を得た。夏野穂次は嗤っていた。
　盾に柄頭を乱暴に押し当てた穂次は先ほどよりも幾分も短い刀身を抜いた。
　けれどソレは驚く程に美しかった。
　二本目ほどの脅威は感じない。

一本目ほどの威圧感も無い。

ただただ美しく。刀身に浮かんだ波紋まで認識できる程――ソレほどまでに圧縮された刀身がソコには在った。

福音は大きく翼を動かし、羽で壁を作り上げた。

けれどソレは黄にも、白にも届く前に何かによって封殺された。

飛来する八つの〝何か〟を福音は知っていた。忘れていた訳ではなかった。

「エネルギーをありがとよ、ハニー」

軽口を叩いた穂次はやはり嗤いを口に浮かべていた。

接近した穂次から福音は翼で身を守る。けれどソレは容易く破られる。

黒の刀身がスルリと、ソコに何もないように滑り、翼を斬った。一度だけでは飽き足らず、二度、三度と刀を反し連撃を行なう。

翼を大きく削られた福音は獣の咆哮を上げた。ソレすらも面白いように穂次は嗤いを深め、更に一撃を加える。

けれどもその一撃は回避される。いいや、刀身が消えたのだ。黒い粒子が霧散し、その残滓が宙を舞った。

一瞬の間。

福音は右腕を敵へと伸ばした。右腕は容易く穂次の首に食い込み、そして動きを停止

させた。
　穂次はその右腕を掴み、息を吐き出した。
「おいおい、死ぬかと思ったぞ、相棒」
「お前が簡単に死ぬかよ」
「今のお前にだけは言われたくねーよ」
　福音の背後に居た一夏が軽口を叩けば、穂次は少しだけげんなりした様に言葉を吐き出した。
　福音は頭部装甲に文字を流し、ソレを確認した穂次は少しだけ眉を寄せる。
「お前の願いなんて知らねーよ」
　そう呟き、福音の装甲が粒子へと変化してスーツ状態の搭乗者が穂次に右腕を掴まれる形で宙吊りで現れた。
　その搭乗者をしっかりと横抱きにして溜め息を吐き出した穂次。
「さ、帰ろうぜ」
「――だな」
「なんたって帰ったら山田先生のおっぱいが待ってるんだ!!」
「おい」
「穂次さん！　要救護者をその様な抱き方で!!」

「ふぇぇ……セシリアさんが虐めてくる」
「まあまあセシリア。穂次が困ってるじゃないか」
「シャルロットさんも浮かれてないでくださいまし!!」
「えへへぇ」
「ま、落ちてる鈴音さんも拾って、サクッと帰ろうぜ。そう！　おっぱいの為に！」
「穂次さん!!」
「アッハッハ。すげーアラート鳴ってんですけどー。流石に今射撃とか受けるのは洒落にならないですよ!!」
「――ッ。そ、そうですわね……」
「？　いや、逆にそこまで恐縮されると俺も困るんだけど……」
「い、いいから早く戻ろうよ！　穂次も落ちてたんだから！」
「そ、そうですわ！」
「ん？　穂次も落ちたのか」
「いやーアッハッハッ。ホント、面目ないッス。
……ん？　篠ノ之さん？　どうしたのさ。スゲーションボリしてっけど」
「あ……いや……」
「箒？」

「……」
「まあ、ささっと帰ろうぜ。別に今話さないとダメって事も無いだろうし。落ち着いてからでも問題ないだろ。つーか、俺以外の全員は覚悟しとけよ……」
「なんでだよ」
「織斑先生が命令違反でお怒りだ。俺はちゃんと通信開いて命令されてから行動してるからお咎めなし！　ざまぁみろ!!　一夏の事は……ん、一夏って誰だっけ」
「忘れるのが早ェよ!!」
緩やかに夕日が人の影を伸ばし、世界は夕闇に優しく包まれていく。

◆◆

「不満そうだな、阿呆」
「いや、俺以外が説教食らってるのはわかるんですけど。なんで俺も説教食らってるんですか!!」
「お前が山田先生に不必要な事をしたからだろう」
「いやいや、俺が無事に帰ったらおっぱい揉ませてくれる約束だったじゃないッスか!!」

「ほう、お前は一度落ちていたが無事だったか。どうやら訓練の時もそうした方が良さそうだな」

「スイマセン！　無事じゃないです！　体中が痛いなァ!!」

満身創痍で正座をしている一夏を含む六人は俺を蔑む様に見つめ、織斑先生に至っては呆れた様に溜め息を吐き出している。

山田先生はその豊満なおっぱいを両腕で隠して、涙目で俺を睨んでいる。可愛い。

帰還してスグに俺たちを出迎えてくれた山田先生のおっぱいへと手を伸ばした俺に悪意は無い。当然の様にその手は『シュッセキボ』により弾き飛ばされた。正直に言えば腕が吹き飛んだかと思った。

体中が痛いと主張しているのに、誰も俺の心配をしてくれない。いったい俺は何を間違えたっていうんだ。

「そうか。体中が痛いか」

「え？　織斑先生が心配してくれるとか逆に怖いんですけど……」

「あ〝？」

「感謝で白目を剥きそうダナァ!!」

「ではお前だけ別室で診断だ。さっさと行って来い」

「くっ……優しさになんて負けないんだからね！」

「怪我を増やされたいか?」
「スイマセン嘘デス、スグ、イキマスデス、ハイ」
キビッと直立して敬礼をした俺は手と足を一緒に出しながら歩き、部屋を出る。
しっかりと襖を閉めてから、息を吐き出す。
「ツッツ――――!!」
痛い！　痛い！　痛い!!
歯を食いしばって、その場に蹲るのを耐える。我慢できるのは出来るけど、痛いものは痛い。
少しでも気が緩むと意識がそのまま持っていかれそうになる。
村雨の動きに自身が追いつけていない事を証明するように筋肉が裂け、骨が軋み、体の稼動部分全てが悲鳴を上げる。
脂汗を手で拭い、呼吸を落ち着かせる。
別室に行き、部屋に戻れば、鍵を締めて幾らでも呻ける。ソコまでの我慢だ。
一歩進むごとに足から激痛が走り、連動して筋肉が痙攣を起こす。涙目になりながら歩き、ようやく指定された別室に到着する。
襖を開ける前に、涙を拭い。へらりと笑みを作り上げる。何も問題は無い。
「失礼しまーす」

「お、やっと着たね。待ってたよ、君ィ」
「……すいません、間違えました」
襖を閉めて、激痛とは別に頭痛がしてきた。
落ち着ける様に深呼吸して、もう一度指定されていた部屋かどうかを確認して、襖を開く。もしかしたら夢だったかも知れない。
「……失礼しまー」
「お、やっと着たね。待ってたよぉ、君ィ」
「……うわぁ」
「その反応は少し失礼じゃないかな？　いくら天災の私でも泣いちゃうよ？　世界を破壊しちゃうよ？」
「いや、ソレで世界が壊されても困るんですけど」
「兎は寂しいと世界を壊しちゃうのだよ」
「ナニソレコワイ……つーか、なんで篠ノ之博士がいるんですか」
「そりゃぁ、今の君の状態を最も知っている存在だからだよ」
「……ああ、そうツスか」
「まあまあ、立ってるだけでも辛いでしょ？　布団を用意したから、ソコに寝てて」
「……やばい、ドキドキしてきた」

「え!?　解剖しようとしたのがバレちゃった!?」
「ドキドキの意味が急に変ったんですけど……」
「ソレは、恋だね！」
　キュルルン（はぁと
　なんて効果音が付きそうな篠ノ之博士を見て、俺は意識を手放したかった。いや、逆に今落ちると絶対バラサレル。
　一つしか枕の無い布団に横たわって、篠ノ之博士を見上げる。おっぱいスゲー……マジで体は感動的なバランスしてるな、この人。
　性格がぶっ飛んでるけど。
「さぁて、どうして君の体が悲鳴を上げてるか、理解してるかな?」
「……村雨の動きについていけてないんでしょ。わかりますよ」
「ありゃ。一応、わかってたんだ」
「これでも村雨に乗ってるんですから、わかってますよ。ラウラ……ドイツのヴァルキリートレースシステムとも戦いましたし」
「ああ、あの欠陥システムと、ね。本当、どうして人間は目に見える〝最強〟を模倣するのかなぁ。やっぱり欠陥的だよ。
　〝村雨〟と比べれば天と地の差があるねー」

「……そうですね。痛ッ」
「ん？　ああ、痛み止めを注射するよー」
「普通は言ってから刺すんじゃないッスかね」
「だって言ったら身構えるでしょ？」
むしろ、今しがた体に入れられた液体が痛み止めとも思えないんですけど。
血流の中が冷たくなり、ソレが体に広がっていく。鼓動に合わせて、ゆっくりと。
「マジで何射れたんですか……」
「え？　痛み止めだよ。やだなー、信用してよ。コレでも君の事は世界的な財産として認識してるんだから。解剖させてよー」
「怖いわ!!」
「まあまあ。それで、体はどう？」
腕を持ち上げてみれば、鋭い痛みは無い。違和感自体はあるけれど、それでも痛みはかなりマシになったと言える。
「痛みは無いッスね。ありがとうございます」
「え!?　解剖させてくれるって!?」
「誰も言ってねーよ！　どれだけ解剖したいんだよ!!」
「だってだって世界的には二人目の男性ＩＳ操縦者だよ!?　分解しなきゃ」

「解剖よりも怖くなったんですがソレは……」
「安心して。大丈夫。跡形もなく、しっかりと分解するから！」
「安心できる要素がねーよ！　何それ怖い!?　どうなるの!?」
「先っちょまで、先っちょまでだから!!」
「それって全部だよな!?　明らかに全部分解する気ツスよね!?」
「今ならおっぱいを触れるよ！」
「……マジですか？　もう騙されたくないんですけど」
「私としてはソレで分解を許しそうな君が色々と怖いよ」
「おっぱいは全てに勝る！」
「むぅ……おっぱいか。でも分解、解剖……うーん」
　いや、流石に嘘ですよ。篠ノ之博士。そこまで本気で悩まれると俺も困るんですけど。
　頬を掻こうと手を動かそうとすれば、身動きが取れないことにようやく気付いた。
「ま、別に今じゃなくてもいいかな」
「あー、そうツスか。というか動けないんですけど？」
「思ったよりも相性がイイみたいだけど大丈夫そうだね。別に君が人間じゃなくなろうとそれほど変わりはないだろうし」

「スゲー怖いんですけど。内容も動けないのも怖いんですけど!!」
「問題ないよ。私から言えば、君は元々人間じゃないんだから。身体データはちゃんと人間だけどね。
やっぱり君はイカレてるね。実に、素晴らしい」
ニンマリと口元を歪めた篠ノ之博士の吐息が俺に降りかかる程、完璧とも言える顔が俺に近付く。
ああ、おっぱいが！　おっぱいが俺の胸でつぶれてるよ!!　スゲ！　柔らかい！　揉みたい！　でも動けない！　身も捩れない！
「ん？　……ああ、薬品の調整を間違えたかな？　血流での身体操作だったけど、海綿体へのソレは抑え切れなかったか。でもこれ以上増やすと生殖機能に問題が出ちゃうしなぁ」
「スゲー不穏なことが聞こえたんですけど!?　え!?　俺の息子が起立してるだけですよ！」
「……まあいいかな。よっこいしょ」
「あふんっ」
「ああ、ゴメンね。足で擦っちゃった。
まだ動けないと思うけど、数分で動ける様になるから。その頃には体もある程度直っ

てるよ」
「いや、もっと擦って、いいや！　踏んでもいいですよ!!」
「残念だけど、ココから先は有料だねー。お代は君の解剖だけど」
「ぐぬぬ……」
「ちなみに先払い」
　死んでるじゃないか!!
　ちょっとだけの期待を返して下さいよ!!
「ふふ。一応、人らしく忠告しといてあげるよ。無理はしない事だね」
「その本心は？」
「パーツは幾らでも代えはあるけれど、君は代えのきかないパーツだからね」
「人らしくとは一体……」
「ソレを応えるのも私なんだから、何も問題は無いね」
　つまりこの世界には超絶美人しかいないって事だな！　解剖を求めるとか勘弁してほしいけど。
　じゃあね。と軽く手を振って襖から消えた篠ノ之博士を目だけで見送り、俺は溜め息を吐き出した。
　体は動かないけど、どうにか欲望を吐き出したい。くっそ、刺激が強すぎるんだよ！

あの美人！　ありがとうございます!!

わたくしの騎士様

じんわりとお湯が俺の体を温めていく。
思わず吐き出した息と一緒に力も抜けていく。溺れる様な深い湯船でも無いので、縁と床に体重を掛けて、脱力していく。
白い湯気が昇るのをボンヤリと見つめて、天井の明かりを視界に入れる。
体の痛みは僅かに残る違和感に変化した。動く事にも、お調子者を装うことも苦ではない程に鈍化している。いったいどんな薬品が俺の体の中へと流し込まれたのか、気になる所だけれど知りたくは無い。絶対に。
確実に言える事は普通に流通しているだろう治療薬品ではないだろう。いや、もう考えないでおこう。
「ふう……」
再度息を吐き出して、瞼を閉じる。脱力した体に感じる僅かな浮力に身を任せた。
銀の福音との戦い。まるで自分が自分でない感覚に支配され続けた、そんな戦い。
純粋に戦う事が楽しく、動く事に喜びを感じ、自然と体が動いた。
村雨との繋がりが深くなった、と言えばそれだけの話でもあるけれど。

刀なんて使ったことも無かったのに、自然と構えが取れた。それも以前よりも操られている感じもせずに。ただ当然の様に。まるで元々知っている様に。

一応、感覚的なオンオフは出来ると思うけれど、オフの時でも影響は出てしまうだろう。まあ出てきたら出てきたで対処をすればいいだけか。

カラカラと扉が開く音が鳴り、ソチラに視線を向けると男が居た。

「よ」

「おう」

手を上げる軽い挨拶をして俺は変らずに脱力し続ける。

ボンヤリと、なるべく何も考えずに天井を向いてゆっくりと呼吸を続ける。

「それで、大丈夫なのか?」

「何がだよ」

体を洗い終わったらしい一夏が俺の隣へと座り、そう問いかけてきた。主語もさっぱりない言葉であるし、きっと俺の体のことは一部の人しか知らない筈である。

「お前の体の事だよ」

「あー……ん?　異常らしい異常はねーよ?」

「適合率が高くてＩＳへのダメージがフィードバックするって聞いたけど?」

「……誰に聞いたんだ?」

「セシリア達から。束さんに色々教えられたらしいぞ」
「マジかぁ……」
「それで、どうなんだ？」
「……別に今は問題ねーよ。戦闘中はアドレナリンが出てるのか痛みは感じねーし、ＩＳを外しても実際に怪我がある訳じゃないから普通よりちょっとだけ疲れるだけだよ」
「……本当だな？」
「信じてねーのかよ」
「シグナルロストまでしてるんだから、心配にもなるだろ」
「一夏が俺のことを心配してくれてる……きゅんっ」
「冗談で終わらせようとするなよ」
「いやー、アッハッハ」
どうやら逃がしてくれないらしい。
束さんがどの程度まで言っているかは分からないけれど、ダメージ関係ならばそれほど問題はないだろう。
「降参。我慢できる程度だけど今もそれなりに痛みはあるよ」
「……診断とかは？」
「命に別状はなし。筋肉疲労が短時間で蓄積しすぎたらしい。休めば治るさ」

「はぁ……あんまり無理するなよ」
「女の子の前じゃなけりゃ無理もしないさ」
「今更格好をつけても意味無い気がするけど？」
「それでも格好がつかないよりはいいだろ？」
「……そうだな」
「……それで、一夏はどうなんだ？」
「俺も異常とかはねぇよ」
「誰もお前の体なんて興味ねぇよ。ホモじゃあるまいし」
「ちょっとは心配ぐらいしてくれよ」
「大丈夫って信じてたから心配もねーよ。今も寝たままなら心配ぐらいしてやったけど」
「……なんというか、ありがとう」
「ドウイタシマシテ。つーか、俺としてはお前を守れたのに無理だった、って事も結構悔いてるんだから」
「あー……スマン。俺が急に動かなかったら」
「お前が動かなかったら篠ノ之さんは落ちてたよ。お前の行動に追いつけなかった俺が悪い」

もっと俺が上手ければ。いいや、あの時点で村雨との適合を深めていたならば……。
大きく息を吐き出して頭を振る。
「まあその話はどうでもいいんだよ。今日は篠ノ之さんの誕生日だろ？　何かプレゼントしたんですかい？　うぇっへっへ」
「……気持ち悪い笑いはやめろ。というかなんで知ってるんだよ」
「篠ノ之さんの誕生日を知ってるのは女の子の情報だから。　プレゼントに関しては勘だよ、相棒」
「察しがいい相棒だよ、まったく」
「それでそれで、俺としては何か進展とかあったのか聞きたいんだけど？」
「進展も何もある訳がないだろ。　俺と箒は幼馴染な訳だし、誕生日を祝うのも当たり前の事だろ？」
「……ま、それもそうか」
「なんだよ。何が言いたいんだよ」
「別に。俺がとやかく言う事じゃねぇよ。秋の空を語れる言葉は持ち合わしていねーよ」
「今は夏だろ」
「だな」

コレで会話を切り捨てておく。どうせ鈴音さんかボーデヴィッヒさんが篠ノ之さんと一夏の空気をぶち壊しにした、なんて事もあったんだろう。知った事じゃないけど。

立ち上がり、湯船から出る。

「んじゃ、お先に」

「おう」

「ああ、俺の体のこと、あんまり言うなよ？　俺の頑張りがさっぱり無駄になるんだから」

「わかってるさ。信じてくれよ、相棒」

「信じてるさ、親友」

互いに背を向けて、相手の顔は見えないけれど、小さく笑い声だけが聞こえた。

軽口を叩けるだけ叩いて、俺は湯殿から退出する。

体の違和感を確かめる様に体を動かして、空気を吐き出す。痛みは感じないが、体の各所にシコリを感じる。

もう暫く眠っていても罰は当たらないだろう。明日になればいつもの様にへらへら笑えるだけの元気も出てくる筈だ。たぶん。

鏡の夏野穂次はへらへら笑っているのだから、問題はないだろう。

「あー……ヤバイな」

こうして思考をしていれば、自身がかなり追い詰められている事はわかる。後ろ向きの思考はキャラではないのだ。

浴衣をテキトーに着て、鏡の前でへらりと笑ってみる。大丈夫、きっといつもの様に笑えているだろう。

「さ、って。サクッと戻って寝ようそうしよう」

欠伸を一つ、大きく口を開いて分かりやすくしてみせる。

鏡に映る夏野穂次は、やはりへらへらと笑みを浮かべていた。

◆◆

セシリア・オルコットは座っていた。

慣れない正座を崩し、横座りでどうしたモノかと悩んでいた。

目の前には、想い人が眠っている。

夏野穂次が、規則的な寝息を小さくたてて、眠っていた。

特殊な出来事なんてなかった。眠っている彼を夜這いする気持ちもなかった。いや、どうだろう。

そんな事は重要じゃない。

セシリアはただ彼の様子を見に来ただけなのだ。そこに何らかの下心の有無など問いただされる様な事ではないのだ。

織斑一夏に穂次の事を伝えたことに後悔はない。穂次の性格も考えて、相変わらず自分達には見栄を張る彼が弱音を言える一夏に伝えた。

どうやら風呂場で交わされたらしい会話で穂次に何も問題が無い事は一夏が証言してくれた。何かを言い澱んでの言葉であったけれど、確かに証明はされたのだ。ついで、という言葉を付け足して、まるで軽口の様に「見舞いに行ってほしい」という言葉も追加された。

別に一夏の言葉に従った訳ではない。一夏の言葉がなくてもセシリアはこの場に居ただろう。

それほどに、心配をした。信号が亡くなった、と聞かされた時は目の前が真っ暗になったかと思った。

覚えのある喪失感が自身を襲い、上手く呼吸が出来ない程に動転していた。

だからこそ、彼が自分達を助けに来てくれた時は安堵した。きっと彼は見て無かったけれど、涙まで流れた。

「……何が、『シャルロットお嬢様』ですのよ」

指を一つ立てて彼の頬を突いてみる。頬肉が柔らかく指に抵抗をみせる。
少しだけ眉を寄せはしたけれど起きる気配の無い彼に悪態を吐いてみせる。
どうして自分ではなかったのだろう。
別に不満なんか無い。いいや、不満はある。けれど、同時に理解も出来ていた。あの時点で危険だったのはシャルロットだったのだから。
けれど、もしも自分が危険だったならば……彼はわたくしを助けてくれたのだろうか。
いいや、それこそ考えるだけ無駄なのかも知れない。彼は助けてくれるのだろう。それこそシャルロットを守った時の様に、格好良く、まるで騎士の様に。
「……」
自分の頬が熱くなる。今一度部屋に自分と彼だけしかいない事を確かめて、ほっ、と息を吐き出す。
こう言うのもアレだけれど、〝シャルロットお嬢様〟はこの場にいない。回避ではなく、防御へと徹していた彼女にはそれなりの損傷があったらしく、恨めしそうに自分を見ていた彼女は記憶に新しい。
一歩リード、とは思えないのは、相手がこの眠っている騎士だからなのだろう。
「……本当に、心配しましたのよ？」

えいっ、と小さく言葉にしてみせて、セシリアは頬を再度突く。感触が指に心地いい。ちょっとだけ楽しくなってしまったセシリアの甘い攻撃に気付いたのか、騎士の瞼がぼんやりと開く。

開いてから天井を数巡し、ようやく隣にいるセシリアへと視線が向いた。

「……、なんでセシリアさんがいるんだ？」

尤もな意見であった。

頬を突いて事もあり、セシリアは僅かに視線を逸らして乾いた笑いを漏らす。決して彼女には咎められる様な事も無いのだけれど。

半身を起こした穂次が僅かに眉間を顰める。僅かに歪んだ顔を見てセシリアが心配そうに穂次の背に手を当てる。

「大丈夫ですの？」

「問題ねーッスよ」

僅かに肌蹴た浴衣の隙間から彼の肉体が見え、セシリアは少しだけ鼓動を速める。

寝起きだからか、へらりとも笑わず、情けない顔でドコかをぼんやりと眺めている穂次。その穂次を見ながら鼓動を速めるセシリア。

「それで、なんで居るんだ？」

「一夏さんに言われて……」

「あのお節介め」
「あ、いえ、一夏さんに言われなくても来ましたわ」
「……別にどっちでもいいさ」
「その……怒ってますの？」
「あー、怒ってはねーよ。イマイチ冗談を言う気分じゃないだけ」
「そ、そうですのね」
セシリアは己の佇まいを直す。どこか調子の違う彼を見るのは初めてかも知れない。佇まいを直したセシリアを横目で見た穂次は疑問を顔に浮かべながら溜め息を一つ吐き出して薄い掛け布団をセシリアの膝へと放るように掛けた。
「こ、コレは？」
「浴衣の都合上、素晴らしい太ももがチラチラ見えて俺が気が気じゃない」
「そ、そうですのね。ありがとうございます」
「ドーイタシマシテ」
調子が違うだけでこれほどに緊張するモノなのだろうか。セシリアはシーツを手繰り寄せつつ頭の中を白黒させた。
いつもの様なお調子者な彼と今の様に落ち着いている彼。比べる意味は無いけれど、後者も実にいい。グッドである。

「それで？　俺に何か用でもあったの？」
「？　用はありませんが？」
「……じゃあ何しに来たんだよ」
「普通に心配して、お見舞いに来ただけですわ」
「ソレはどうも」
「本当にいつもの調子ではありませんのね」
「ご希望とあらば冗談の一つでも飛ばしましょうか？　セシリアお嬢様」
「別にいりませんわ」
「それは残念で」
「……本当に大丈夫ですの？」
「逆に、大丈夫じゃなかったらどうするのさ」
「大丈夫じゃありませんの!?」
「あー、待った。大丈夫だから。おーけー、少し落ち着いてくれ」
降参するように両手を上げようとした穂次の動きが途端に停止し、何かに耐えるように拳が握られる。
「穂次さん!?」
「冗談だよ、じょーだん。そんなに訝しげな目で見ちゃいやん」

「……」

　へらりと笑いだした穂次が無茶をしている事はセシリアでもわかった。眉を寄せ、穂次に伸ばそうとしていた手が宙で停止し、戸惑う。

　セシリアは溜め息を吐き出した。

「もう横になってくださいまし」

「ん、いや、まあ寝ろって言われるんなら寝るけど、なんで枕元で正座してるの？」

「……別にいいでしょう？」

「いや、枕を退かされながら言われると、どうでも良くないんですけど」

「このわたくし、セシリア・オルコットが膝枕をしてあげると言っているのです!!」

「わ、わーい……でも真っ赤になって無理してやる事でもねーよ？」

「もう！　いいから黙ってくださいまし!!」

「アッハイ」

　セシリアの声に穂次は怯えるように、セシリアの膝枕に頭を乗せる。天井を見ようとすればソレを妨害する山。その向こうには顔を赤くしているセシリアの顔が見える。

「……」

「……」

「あー……」

「何も言わなくてもよろしくってよ」
「ハイ」
寝心地がいいですね、という発言は封殺された穂次は口を噤みながら弾力のある枕の感触を瞼を閉じて楽しむことにした。
そんな穂次の見ながら、セシリアは自然と手が動いて、彼の頭を撫でてみる。自然と微笑みが零れた。
撫でられている事に対してドコか気恥ずかしさを覚え始めた穂次は瞼を上げるに上げれなくなり、ゆったりと侵攻してきた心地よい眠気に身を任せることにした。

きっと十分も経たずに彼は眠った。
静かに寝息をたてる彼をセシリアは撫で続ける。
「お疲れ様ですわ。わたくしの騎士様」
冗談のように、彼を労わる言葉を呟いたセシリア。その顔には慈愛に満ちた微笑みが浮かんでいた。

夏野穂次

翌朝。久しくちゃんとした睡眠がとれた俺は清清しい気持ちで撤収作業に携わっていた。

随分と寝心地のいい枕であった。程よい弾力と甘い香り、じんわりと温もりが伝わる、そんな素晴らしい枕であった。ヌクモリティ……。

当然、という言い方もオカシイのだけれど、俺が寝入った時から少しして、セシリアさんは俺への膝枕を止めたらしい。頭を動かされても動かなかった俺は容易く普通の枕に寝かされた訳である。正座が苦手って言ってたから仕方ないのである。

さて、そのセシリアさんの寝起き姿という極めて稀なモノ――いや二日連続で見ているのだけれど――ソレを見て俺はヘラヘラとした笑みを浮かべ、冗談の一つや二つを感謝の気持ちと一緒に言った訳だ。

うん、俺ってこんな美少女と同衾するようなキャラじゃないんだけどな。

それこそ目が覚めて隣で眠っていた美少女を見て俺は目を白黒させた。夢かと思った。夢じゃなかった。

しっかりと胸の谷間に集中させた視線を俺は反省していない。触らなきゃ、バレない

！

　いいや、ともかくとして、そんな事は重要ではない。いや、確かにあの柔らかいおっぱいの感触についてはとても需要があり重要極まりない情報ではあるのだけれど、決して意図して触ってない俺はその感想を言える訳がないのだ。そう、アレは事故である。幸運な、事故なのだ。

「何デレッとしてるのさ……」

「いやー、ハハハハ。そういうシャルロットさんは朝から随分とお怒りの様ですが」

「自分の胸に手を当てて考えれば？」

「まさか下着を盗もうとしてるのがバレた……？　いや、そんなまさか……バレる訳がない!!　まだ実行に移してない筈だぞ！」

「たった今計画がバレたよ!!　とんでもない事が発覚したよ！」

「くっ、コレじゃないとすると一体何なんだ！　アレか……!?　いいやもしかするとアレかも知れない！」

「……僕に対しての疚しいことがありすぎるんじゃないかな？」

　顔を真っ赤にしてジト目で睨むシャルロットさん。なんて可愛いのだろうか！

　作業の影響かジンワリと額に汗を浮かべる彼女が眩しい。浮かべている表情はジトリとコチラを責めるようなモノだけれど、だがそれがいい。

「そんな、シャルロットさんへの隠し事なんてそんなに無いよ。むしろ常にオープンだ」
「下心はもっと隠しなよ……セシリアも抜け駆けするし」
「え？　何か競ってたの？」
「……商品を巡って少し、ね。一歩リードされちゃった」
「ほほう。まあ競い合うのはイイ事だな」
「ハハハ……コッチの気持ちも知らないで」
「まあ相手がセシリアさんだからなぁ。何で競ってるかは知らないけど、ガンバ☆」
「じゃあ穂次、デートの話をしようか」
「え？　どういう経緯でその話に移ったんですかね……」
　セシリアさんとシャルロットさんが何かを競っている。そしてどういう訳かデートの話に移った。つまり、なるほど、わかった。
「なるほど、二人は俺を取り合っているんだな。フッ、まったく。モテる男は辛いぜ！」
「……自分で言ってて可能性があると思ってるの？」
「微塵も感じてないッスなぁ……」
　ホント、無いだろ。俺が二人に対して好意を抱くのは分かる。可愛いし、綺麗だし、美人だし、優しい……よな。うんヤサシイし。なによりおっぱいもあるし。やっぱりおっぱいは重要だな！

ソレが逆転して二人が俺に対して好意を抱くかどうかとなれば全く別だ。むしろ無い。

悲しい事にお調子者的で軽口を叩いて彼女らにセクハラしている俺に好意を抱くなど、催眠術にでも掛かってるか、夢か、ハニートラップの何かだろう。

ともあれ、やっぱりデート――というよりは荷物持ちの話題へと移ったのは謎のままである。

「ま、まあ、穂次は気にしなくてもいいよ？」

「そっか。じゃあ気にしない事にする」

「いや、ちょっとぐらいは気にしてもいいんだけど」

「どっちなんですかね……」

「えっと、ほら、うん。デートの話をしよ！」

「まあ別にいいんですけどー。というよりはデートじゃなくて荷物持ちなんだよなぁ……」

「え？　……ああ！　うん！　そうだね！」

「いや、そこで強烈に肯定されると俺は大変傷つくんですけど……」

「いや、ハハハハ。ほら、それで出来れば早く行きたいんだ」

「んー……っても、一番近い休日は俺の都合で無理だしなぁ」

「え……あ、ゴメンね。体、大丈夫？」
「そっちは問題ねーッスよ。皆が心配してくれる方が俺としては調子が狂ってオカシクなりそうデス」
「それもそれで失礼だよ」
「まー、俺の損傷具合に関してじゃなくて、ちょっとだけ人に会う約束があるんだよ」
「……そういえば毎回休日になるとドコかに行ってるよね？」
「街に出かけて女の子を引っ掛けてるんだ！」
「……ふーん」
「いや、スイマセン。嘘です」
　だからその蔑んだ目をやめてください！　感じちゃうだろ!!
「あー、まあ予め連絡を入れれば大丈夫なんだけど、一番近い休みは無理かなー」
「……そっか。じゃあ都合のいい日が出来たら教えてよ」
「おっけーデス。なるべく早くに空けます」
「楽しみにしてるよ」
　ニッコリと笑ったシャルロットさん。爽やかで愛らしいとも言える笑顔の筈なのに、どうしてだろうか背後に蛇の幻が見えてしまった。俺、疲れてるのかな……？

撤収作業も滞りなく終わり、時刻は十時を過ぎている。
クラス別に分けられたバスの中、一番前の席では一夏がぐったりと背凭れに体重を預けている。最後にバスに入った俺はそこで立ち止まり「フンッ」と軽く鼻で笑ってみせる。
「軟弱者めッ！　それでも男か！」
「……穂次、疲れるから箒のマネである事にツッコミは入れないぞ」
「入れてるんだよなぁ。つーか、どうしたのさ、重労働ではあったけどソコまでのモノじゃなかったろ」
「あの後に千冬姉から説教を受けて睡眠時間が短かったんだよ」
「あー、それはご愁傷様。説教の内容は？　誰にセクハラをしたんだ!!」
「お前じゃないんだし、するかよ。勝手に旅館から抜け出したのがバレたんだよ」
「自業自得だな。まあ次はバレないように抜け出せよ」
「抜け出すなよ、とは言わないんだな」
「俺は善人じゃねーからな。それこそ俺が善人で規律を守る存在なら、世界はもっと素

敵で平和さ」
「冗談を言わない穂次なんて想像できねぇな」
「そういう事さ」
もっと素敵で、平和な世界なんて想像できないのと一緒だ。何よりも日常とは大切なのである。今は女の子もいっぱい居るし。
へらりと笑った俺を見て体を起こした一夏。どうやら軽口の叩きあいで少しだけ元気が出たらしい。バスに乗ってる途中に寝れば問題ないだろう。
自身の席に向かうべく一歩踏み出した所で誰かがバスへと入ってきた。首を動かして振り返れば、織斑先生ではない。
鮮やかな金色の髪。カジュアルスーツを押し上げる胸。サングラスを外した女性はバスを見渡し、俺に視線を合わせる。
「織斑一夏君？」
「――は、そっちの男」
「あら、じゃあ君が噂のセカンド君ね」
「どーも、夏野穂次デス。それで、銀の福音の操縦者さんが何用で？」
俺の問いかけに答えることもせずに彼女は一夏を興味深そうに見つめる。胸元の開いた服装なのに前屈みに膝を折る彼女。是非とも一夏と場所を代わりたい。

「あ、あの、」
「ああ。私はナターシャ・ファイルス。君にお礼を言いに来たの」
「え――？」
ファイルスさんは自己紹介を言い終わると一夏の頬に顔を近づける。小さくリップ音がして、一夏の顔が真っ赤に染まっていく。
「ありがとう、白いナイトさん」
「え、あ、」
「それと黄色のナイトさんもありがとう」
「俺にもキスしてくれるんですかね!?」
「そうね。思ったよりも普通の男の子みたいだし」
「ヤッター!!」
「おい、阿呆。席に着け」
「待って下さい織斑先生！　俺にはキスされるという重大な任務が――」
「地面にキスでもしていろ、阿呆。それとファイルスもバスから出ろ」
「ブリュンヒルデの言葉なら仕方ないわね。バーイ、ナイトさん達」
「ガッデム！　俺に救いは無いのかッ!!」
どうして一夏にはキスがあり、俺には無いのか。やっぱり顔か、顔なのか!!

ファーストとセカンドの差がありすぎじゃないですかね……ドコにクレームを入れれば解消されるんですか！　もっと、もっと俺は女の子にキャーキャー言われて、おっぱい触り放題とかしたいだけなのに!!
「穂次さん」
「穂次」
「おぉ、セシリアさんにシャルロットさん……どーしてそんなにお怒りなのですか?」
「バスにいる間に考えれば?」
「見境の無い方は反省すればよろしくてよ」
「見境が無いだなんて……俺は美人か可愛い子にしか迫ってないゾ！」
「穂次、ソレはそれで問題だと思うぞ」
「一夏さんは黙っていてくださるかしら?」
「アッハイ」
ともあれ、自然と正座の体勢になった俺はバスの通路で何が原因かを考える。さっぱり分からない。いいや、確かに考えてることが吹き出しで出ているなら問題だけど、ソレはないし。
俺の目的もない反省は織斑先生がバスに入ってくる少し後まで続いた。

◆
◆

「……ふぁぁ」

俺は欠伸をしながら街へと到着した。臨海学校も終わり、最初の休日である。

ボンヤリと景色を眺めて、少し路地に入ったところにある喫茶店へと入る。

個人店なのか、少し古ぼけた扉を開き、ベルが鳴った。

カウンターの中には誰も居ない。

コレもいつも通りである。

対して何も考えずに近くの椅子に座って、背凭れに体重を預けて、息を吐き出す。

「珈琲でよかったか？　クズ」

目付きの悪いスーツ姿の女性が俺の前に珈琲を置き、そしてテーブルを挟んだ向こう

側に座った。
　珈琲を口に含んで、苦味を味わい、喉へと通す。目の前の目付きの悪い女性がコチラを睨んでいる。
「どーしたんスか。そんなに睨んで」
「さっさと報告を終わらせろ。私だって暇じゃねぇんだ」
「まあまあ、せっかく美人が目の前にいるんだから珈琲ぐらい楽しませてくださいよー」
「チッ……」
　舌打ちを一つして、足を組んだ女性は机をコツコツと指で叩き、イライラしています、と看板でも背負っているようだ。
「それで？　収穫はあったのか？」
「織斑一夏の白式がセカンド・シフトをしましたね。残念ながらデータはまだありませんけど」
「……使えねぇ奴だな」
「これでも頑張ってる方ですよ。溶け込む様にお調子者を演じてますし、イギリスの専用機とも戦って力量を示しましたし、所属不明機のパーツを幾らかソチラに渡してもいるじゃないッスか」
「私ならもっと上手く出来る」

「織斑千冬の監視下で？」
「ふん……あのドイツの機体に関してもデータがそれほど無い様だが？」
「アレは戦っただけツスよ。戦闘データは渡したでしょ」
「……ブリュンヒルデを模したモノでは無い、と言ったのもお前だったな」
「むしろブリュンヒルデと戦って俺如きが無事だとは思えないツスよ。そこからの推測ですよ。真実は知りません」
「……それで、お前のデータを渡したがソレはどうした？」
「ちゃんと許可は貰った筈ですよ。報酬、という事で貰いましたし。別に流れてもいいデータだった筈ですけど」
「流れてもいいデータだが、流してもいい、とは言ってなかった筈だぞ」
「そりゃぁ情報の行き違いってヤツですなー。まあ、俺は餌さえ与えられればソッチの言うとおりに情報を流しますよ。
　俺は政府の犬なんですから」
「……ハッ、まあいい。ほら、今回の餌だ」
　机に投げられた茶封筒を手に取り開く。そこには大量の紙幣が詰め込まれている。
「どうも。これからも変わらぬ忠誠を」
「言ってろ、クズ」

「俺は欲望にチュウジツなだけッスよ。お金、大好きですし」
「それで仲間を売るとは、お前を信じているだろうファーストが悲惨だな」
「信じる方が悪いんですよ。そう思いません？」
言ってろ、と捨てる様に吐き出した女性は扉を鳴らして喫茶店から出て行った。
俺は溜め息を吐き出して、茶封筒を上に投げて弄ぶ。手に伝わる重さが実に素晴らしい。
「お金大好き、ねー。チョーウケルー」
ガラスに薄らと映った夏野穂次はヘラリと笑ってみせた。

これはデートであって荷物持ちではない

パチリと目が覚めた。
自然と起き上がった体を伸ばして、鳴りそうになっている時計を停止する。
デジタル時計に表示されている時間と日付。ソレを見て、心が躍る。まるで子供みたいだ、と自分でも思ってしまうけれど。
ベッドから降りて、準備をしていた服を着ていく。姿見の前に立ってみせ、少しだけ考える。もう少しいい格好があるんじゃないか、と。
「んぅ……」
服を色々と漁っていれば同室である銀髪の少女、ラウラが目を擦りながらコチラを見ている。そうして私のしている事を確認して少しばかりゲンナリとした表情を作った。
「また服装選びか……」
「うん！　ほら、可愛いって言ってもらいたいからねっ」
「アイツなら何にでも可愛い、と言いそうだがな……ふぁぁ」
「それでも一番可愛いと思わせたいじゃないか」
「……そういうモノか？」

「そういうモノだよ。ラウラだって一夏に可愛いって言われたいでしょ？」
「む……むぅ」
こうして人の感情、特に恋や愛などのイイ感情に疎い同居人は簡単に顔を赤くする。
どうやら一夏に「可愛い」と言わる事を想像したようだ。
本当に初々しくて可愛い。
二着目を着てみる。少しだけ清楚に魅せる服。
「うーん、もう少し露出が」
「……さて、朝食を食べに行くか」
「あ、待ってラウラ」
「先に言っておくが、シャルロットのファッションショーを見るつもりはないぞ？」
「そんな事言わずにぃ。もっと服買うから」
「私を着せ替え人形にしたいだけだろう」
まったく、と溜め息を吐き出してベッドに座った彼女はどうやら私に意見をくれるらしい。やっぱりラウラは優しいなぁ。
何着かを着直して、ようやく今日の服装が決まる。淡く色の付いたチュニックに八分丈のパンツ。首には待機状態のラファールがあるから――……
「決まったようだな。では私は行くぞ」

「あ、待ってよ」
「……まだ何かあるのか？」
「今日は犬着ぐるみのパジャマを買ってくるからね！」
「……一番聞きたくない情報だった」
頭痛でもするのか頭を抑えたラウラが溜め息を吐き出す。
私、シャルロット・デュノアはそれに微笑んで、彼女にお礼を言った。さあ、待ちに待った荷物持ち（デート）だ。

デート、いや、彼から言えば荷物持ちでも待ち合わせというのはあるらしい。そもそも彼曰く「朝はちょっと予定が入っちゃうから昼からで許してくださいなんでもしますから」という言葉があったのだからこうして待っている訳である。
手首にした時計を何度も見る。先ほど見てから時間は二分も経っていない。
そもそも待ち合わせ時間には余裕がありすぎる。流石に一時間も前に来てしまったのは間違いだっただろうか。
それでも楽しみだったのだから仕方がない。今日の予定を頭の中で何度も繰り返す。

ショッピングに行き、彼の大義名分を満たしてやる。コレは確定事項だ。
その後、クラスの皆からオススメされていた恋愛映画を見て、適当に小物を見て回って一緒に帰宅する。
大雑把な計画で十分だ。あとは臨機応変に対処すれば何も問題はない。ゆっくり深呼吸をして落ち着こう。
時計を見る。先ほどから時間は一分も進んでいない。
「ん、シャルロットさん。随分と早いお着きで」
「お、おはよう！　穂次！」
「おはよう。一応、待たせない様に早く用事を終わらせてきたけど、待たせちゃったか……」
「ぼ、僕も今来た所だよ！」
「お、おう……。しかし、私服のシャルロットさんを見るのは初めてだけど、やっぱり可愛いですなぁ」
「あ、ありがとう。その……穂次もカッコイイよ」
穂次に似合っている、というのが正しいのだろうか。何にせよ、いつもの穂次よりも二割増しぐらいで格好良く見える。いつもの穂次に格好よさがあるかどうかは置いといて。

「ありがとう。やっぱりセシリアさんのセンスがイイんだなって」
「え？」
「ん？」
「……セシリアが選んだの？」
「前の買出しの時に色々と選んでくれたんだよ。俺に服装のセンスは皆無らしいから」
「ふーん……」
「どーして不機嫌になるんですかね……」
「別に、怒ってないよ」
「不機嫌かどうかを聞いたのに、返答が怒ってないって、あ……（察し」
怒っているのは察してくれても、どうして怒っているかは察してくれないのが彼である。知られればソレはそれでちょっとだけ困るけれど。
ジトリと彼を睨んでやれば困ったように頬を指で掻き、いつもの様にへらりと笑う。
「まあどうして怒ってるかはさておき、荷物持ちの本業は果たします許してください」
「……そういえばなんでもするって言ったよね？」
「いや、ソレは言葉のアヤというか」
「言ったよね？」
「ハイ。無理そうなこと以外なら、死ぬことまでダイジョウブデス」

「むしろ死ぬのが大丈夫なことに驚きなんだけど……」
「ほら、シャルロット様の為ならこの命などー、って感じ」
「……じゃあ先ずは手を繋いでもらおうかな？」
「じゃあ、って事はこの先も要求されるんですか……」
「不満かな？」
「シャルロットさんの命令に従える喜びがこの先も続くのか……やったぜ！」
一歩だけ退いてみれば、やはり彼はへらりと笑って「冗談だ」と言った。その後に小さくたぶん、と付け足されたのを私は聞き逃さなかったけれど。
何にしろ、どうやらお願い（命令）は聞いてくれるようで、彼はコチラに手を伸ばしている。しっかりと溜め息を分かる様に吐き出してからその手を握り締める。
「おっほ、やわらけー」
「そういうのは言わないでいいから……」
「スベスベですね！」
「ソレも言わなくていいから!!」
握った手をどうこうするつもりはないけれど、肌の感想とかを言われるとどうにも意識してしまう。
汗とか、あとは近いから匂いとか、色々。こうして隣にいると分かるけれど、自分よ

りも身長が高いのだ。
「ん？　どうしたのさ、俺をジッと見て」
「やっぱり穂次って男の子だったんだなぁって」
「え……ソレは俺を男として見てなかったって事か……俺は女の子であった可能性が？」
「ないから」
「でっすよね！　おっぱい無いし！」
「女性かどうかの判断基準がソレ基準はダメだと思うよ？」
「他の判断基準か……ふむ」
「……ッ！　な、何を言おうとしてるのさ!!」
「筋肉量とか？　あれれぇ、顔を赤くしたシャルロットさんは何を想像したんですかねぇ？」
「さぁ、何かを食べてから買い物に行こうか」
「スゲー強引な話のすり替えだぁ……」
「なにか？」
「いいえ、シャルロットお嬢様のご命令に従いますよー。それこそ犬の様にね」
へらりと笑って言った彼の手を引いてデパートへと向かう。少し前にラウラと来て

はいるから道も覚えている。
　ラウラに「必需品は買ったのではないか?」と言われそうだけれど、ソレはそれ。コレはこれなのだ。

「いやぁ、秋物の服って高いッスねー」
「ゴメンね、何か全部買ってもらってる様な気がする」
「問題ねーですよ。むしろ会計の度に店員の人からニッコリされるのが俺としては嬉しい限りだ」
　そのニッコリが微笑ましい物を見るような目だったからこそ、私は気恥ずかしさに満たされている訳だけれど。
　見るだけならタダ、という至言の下。秋物の服を見て、試着して、やっぱり買おうか悩んでいると彼が会計を済ましていた。何を言ってるかよく分からないけれど、本当の事だ。
「それに綺麗なシャルロットさんを見れて俺は役得だし。そのお礼って事で」

「……ありがと」
「おう。だからもっとキワドイ服でもいいんですよ！」
「じゃあ下着も見に行こうか」
「やめてください俺が死んでしまいます！」
「……穂次なら喜んで来ると思った」
「幾ら俺でもランジェリーショップに突貫するのは無謀って分かってるから。つーか、俺を連れていってどうするのさ。試着して魅せてくれるの？」
「……見せてほしい？」
「そりゃぁ、まあ見たいけど。そういうのは意中の男にしなさいな。お兄さんとの約束だゾ☆」
「……ばぁか」
「どうして馬鹿にされたんですかね……馬鹿だからいいけど」
口をへの字に曲げて不満を顔に出した穂次を横に見ながら更に小さく「鈍感」と呟く。コレは彼に聞こえてないみたいで反応はなかった。
鈍感な彼に気付いてもらいたい。でも素直に言うのはまた違うのである。
「それで、着ぐるみパジャマも買ってたようだけど。アレ、着るの？」
「着ない物は買わないよ。買ってくれてる私が言うのもアレだけどね」

「ふーん……つまり、イヌロットさんになるのか」
「飼ってくれるの？」
「……」
「いや、真剣に悩まれると私も反応に困るんだけど」
「あ、いや。むしろ飼われたい派である俺はどうしたらいいのかと思って」
「ナニソレコワイ」
「誰かに尻尾を振り続けないと生きていけないッ！」
穂次にイヌ耳を付けて、首輪も着けて、どこか虚ろな瞳でまるでイヌの様に甘えてくるのか。線の細い彼を改めて見て、妄想を広げる。
「いや、そこで黙られると俺も困るんですけど」
「あ、いや、鎖よりもリードの方が好きそうかなぁって」
「……」
「……いや、その、今のは違うくて」
「あー……まあ落ち着け、落ち着くんだシャルロットさん。俺は何も聞いてない。聞いてない事にする。おーけー？」
「お、おーけー……」
自分でも何を口走ったか思い出せない思い出したくない。ただリードの先を握って

いたのは一夏じゃなくて私だったという事はよく覚えている。間違いない。アレは一夏ではなかった。

　果たして彼は私のナイト様なのか、それとも私の愛すべき犬なのか。ソレが問題だ。いいや、もう同じ失敗はしないけれど。

「それで、今からどうする？　荷物持ちとしてはもう持てない訳ですが」

「それじゃあ映画でも見に行く？」

「この荷物を持ってですか……」

「じゃあ荷物は送っちゃおう」

「え？」

「え？」

「なにそれこわい。俺の荷物持ちとしての尊厳がッ！」

「荷物持ちに尊厳なんて無いから」

「辛辣ゥ……って映画って何かやってたっけ？」

「恋愛映画が見たくてね」

「そういうのは女友達と……あ、スイマセン」

「まるで私に女友達がいないみたいな言い方はやめてくれるかな？　それに穂次を誘ったのにはちゃんと理由があるんだよ」

「……ふっ。ようやく俺の魅力に――」
「はいはい、ソレはもう気付いてるから。それで男女一緒だと割引されるみたいだからね」
「なるほど、割引は重要だな……なんだろうか、いつもみたいに冷たくあしらわれるより辛い気がする……」
「ハハハ」
どうしてか落ち込んでいる彼から目を逸らして作った笑い声を出しておく。随分と棒読みになった気がするけれど、これでもちょっとだけ勇気を出した方なのだ。
魅力のある彼はやっぱり気付いていないようだけれど。

恋愛映画はとても面白かった。とてもありきたりな内容だった、とも言えるけれどソレも良かったと言える。
ストーリーは本当にありきたりで、『好きでもない相手と任務の都合で恋人関係になった男が相手に惹かれていき、そして任務と彼女の選択を迫られる』というモノだ。

結果的に男はヒロインを選び、勤めていた組織を捨てた。
「いやー、良かったッスなぁ」
「そうですなぁ」
ちょっとした余韻を彼と味わう。意外な事に彼は眠らなかった。こういう映画は苦手かツマラナイと思ってそうだったのに。
自分の偏った知識で何かを言うモノではないけれど、チラチラと彼を確認していると、穂次はしっかりと映画に集中していた。
「うーん、映画館とかで見たことなかったけど、これからは見ていくかな」
「え？　なかったの？」
「コレがハジメテ。特に洋画だったからスゲー新鮮」
「……普通に字幕を選んじゃったけど大丈夫だった？」
「問題ねーですよ」
「ならよかったよ」
ついつい当然だと思ってチケットを購入したけれど、なんとも危ない橋を渡っていたらしい。
ツマラナイからと言って彼が不満を漏らすとは思えないけれど。『だからイイ』という訳でもない。どちらも楽しんでからこそのデートなのだ。

「ん、シャルロットさん。ちょいとココで待っててね」
「え？　あ」
少しだけ広くなっている場所で彼の手が離れて、彼が人ごみに消えていく。
もう、と少しだけ零してベンチに座る。自分の手を眺めて、笑みが零れる。そういえばずっと握ってたんだなぁ。
何かとエスコートしてくれるし。話に夢中になっている時でも何かにぶつかりそうになった時には軽く手を引いてくれるし。その度に私の心はどぎまぎするのだけれど。
かなり無意識でやっているのか、ヘタレな彼が私を寄せても何も反応をしない。ヘタレの癖に。
「あれれ？　もしかして彼に振られっちゃったかな？」
「え？」
顔を上げると男性が三人。不恰好に染められた髪とニヤつく顔。
「俺らと遊ばね？」
「いえ、結構です」
「まあまあそう言わずにさ」
「いえ、彼氏を待っているんで」
「こんな可愛い子を一人で待たせる彼氏なんてイイじゃん」

「ッ、やめてください！」
「おーこわっ」
片手を引っ張られ、思わず身構えてしまった。へらへらと下品に笑いながらコチラを見ている三人に睨む。
「警察を呼ぶよ？」
「どーぞ、ご勝手に？　つーか、マジで。そうやって何でもホーリツに頼るとかやっぱ女ってクズだな」
「そーそー、一人じゃ何もデキネー癖に。マジウゼぇわ」
「んじゃ、君が呼んでる間に俺らカトーな男は君にイタズラしちゃうよ！」
「ハッハハハハ、ケーサツさんとテレフォンセックスとか、燃えるゥ」
腕を再度取られて、引き寄せられる。周囲の人は見て見ぬ振りだ。誰も助けようとはしない。
「あー、えっと、すいませーん。ちょーっといいッスかね？」
「穂次！」
人ごみの中から現れた穂次。その手にはクレープが二つ握られている。
男達から逃れようと踏み出したけれど、腕を掴まれて逃げれない。何度か振り払おうとしたけれど、掴まれている力が余計に強くなって、痛みを顔に出してしまう。

「あ？」
「誰お前？」
「アナタ達が手を取ってる女の子の連れですけど？」
「悪ィな。お前の彼女が俺達と居たいってさ」
「そんな風に見えないんですけど」
「うっせぇよ」
　穂次の一番近くに居た男が穂次を殴る。鈍い音が鳴り、穂次の体が少しだけズレた。殴られた顔を上げた穂次は相変わらずヘラヘラと笑って、いつもの様に声を出す。
「あー、まあ殴ってもいいけどその子は放してください」
「ぷっ、アッハッハッハッハ！　マジかよコイツ！」
「おいおいナイト様かよ！」
「誰が放すかよバーカ！」
　その一言と一緒にまた男が穂次を殴ろうとした。拳を振り切った。そこまでは、さっきと同じだった。
「は？」
「え？」
　驚いた声を出したのは殴った男と穂次だった。

呆気に取られている男とは別に、穂次は何かを察した様に、少しだけ眉間に皺を寄せた。けれど、その表情もスグに消えていつものへらりとした笑いを浮かべた。
「あー……じゃあいいや。潰すから」
「一発避けれたぐらいでイイ気になんじゃ――」
男の言葉は続かなかった。代わりに響いたのは何かが折れる鈍い音と男の絶叫だった。
振りぬくはずだった腕は逆に曲り、立っている男に対して穂次は淡々と膝を蹴り抜いた。
「あぎゃぁあああ!!」
「テメっ！」
「……」
迫る拳をしっかりと手で受け止めた穂次の顔にへらりとした笑いはない。ただ冷たく、まるで雑草でも見ている様な、ただただ冷酷な瞳があった。
受け止めた拳を引き、男の顎が上がり、地面に伏した。倒れた男を見下した穂次は男の腕を掴み肩を踏み抜く。嫌な音が響いた。
「なんだよ……お前……」
「別にどうでもいいだろ？　お前らはここで潰れるんだから」

「わ、わかった。わかったから、この子は放す。な？」
「え、わ、」
放された私は押し出され、つんのめりそうになったけれど穂次がしっかりと受け止めてくれた。
少しだけ戸惑ってから、穂次の顔を見る。いつもの様な笑いではない。けれど、穂次は嗤っていた。
「シャルロットさん。ちょっとだけ待っててね。スグに終らせるから」
「え？」
「ま、待てよ。放しただろ？」
「そうだな。で？」
「べ、別に何もしちゃいないだろ？　ほら、悪ふざけだから」
「じゃあ俺も悪ふざけさ。抜いた刀が収まらない。それだけだ」
「ひっ」
怯えた男などどうでも良かった。とにかく今の穂次を抑えなくてはいけないと感じた。
だからこそ、後ろから彼に抱き着いて、動きを制限した。
「穂次、もういいから、ね？」

「……」
「穂次」
「……あー、うん。じゃあココから離れよう。クレープも落ちちゃったし」
降参と行った様に両手を上げてクルリと踵を返した穂次の後を追う。彼はどうにも疲れた様に溜め息を吐き出して髪を掻く。
男たちは喧騒の中へと紛れていった。

「それで、どうしたのさ穂次」
「あー……うん。変に昂ぶった」
少し離れた公園のベンチに座った穂次は瞼を閉じて、大きく息を吐き出した。
「昂ぶったって……」
「今は大丈夫だから」
「大丈夫じゃないでしょ？」
「いやー。アハハ……」
「いつもの穂次みたいじゃなかったから、ちょっとだけ怖かったかも」

「……あー、まあ、うん。俺もビックリしてるから」
「どうして本人が驚いてるのさ」
「ちょっとだけ混乱してる。いや、マジで」
　また大きく息を吐き出した穂次を見るに、どうやら本当に混乱しているらしい。いつもなら「俺に秘められた力が暴走した」とか冗談を言っている筈なのに。
「……何か原因が思い当たるの？」
「……いや、まったく」
「思い当たってるんだね」
「何故バレタし」
「やっぱり」
「えぇー……シャルロットさんに騙されたー」
「騙された方が悪いんだよ」
「ご尤もで」
「それで？　何が原因なの？」
「あー……シャルロットさんって村雨の事を知ってるんだっけ？」
「……暴走を起こすって事は」
「……んー、俺が適合率高いって事も知ってるんだよな。まあソレが原因っぽい」

暴走、という文字が頭にループして先ほどの出来事と穂次の顔が浮かんでくる。

笑いもせずに、ただ冷酷なだけの穂次。鋭利な刃の様な、まるで全てが敵である様に。

「まあ変に村雨のアレやソレが俺に影響してるだけで、普段の生活には問題ねーッスよ」

「問題はあるでしょ！」

「あー、まあ俺のことなんだから、そんなに辛そうな顔をされると困るんだけど」

「穂次の事は心配だよ！」

少なくとも、あの時の穂次は異常だった。どうしようもなく遠くに彼を感じてしまった。

穂次はキョトンとした顔を私に見せて、眉尻を下げてヘラリと情けなく笑う。

「まあもっと気軽に考えようぜ。俺が急に死ぬとか、別人格になるとか、そういう事は無い訳だし」

「そんな保障ないじゃないか……」

「俺が保障みたいなモノさ。夏野穂次はいつもの様にへらへら笑って、女の子が大好きな、変なヤツなのさ」

「だからスマァイル」と、両指で口角を上げてみせた穂次。その顔が少しだけ可笑しくて、笑ってしまう。

「なにそれ」

「笑顔は大事だからなッ！　笑う門には、って言うだろ？」
「じゃあ穂次は幸せでいっぱいだろうね」
「そりゃぁ、毎日可愛い女の子見れてますし、適度に罵られてるし、なんと素晴らしい日常！　できればもっとおっぱい成分があってもいいんですよ！」
「……はぁ、心配した私が馬鹿みたいじゃない」
「まあ俺の心配なんて必要ないんですよー」
「勝手に心配するから別にいいでしょ」
「……物好きだなぁ」
「仕方ないじゃないか」
貴方に好意を抱いているのだから。
そんな言葉は決して口からは出なかったけれど、つい穏やかに笑みを浮かべてしまう。
そんな私を見て彼は口をへの字に曲げて、さっぱり分からない様に小さく呟く。
「いったい何が仕方ないんですかねぇ」
「私が物好きって事だよ」
「なるほど……え？　どういう事？」
「さあ？　どういう事だろうね」

決して答えは言わないけれど、彼に気付いてほしいというのも本当の気持ちだ。
その気持ちを言わない様に彼の手を取ってニコリと笑ってみせる。
「さあ、帰ろうか」
「いったいどういう事なんだ……」
「まあまあ」
「というか、腕に柔らかい感触があるんですが……」
「まーまー」
「……嬉しいから気付かないフリをしていよう！　そうしよう！」
「……穂次のえっち」
「それは冤罪みたいなモノじゃないッスかね……」
眉尻を下げた彼のそんな苦言など聞こえないフリをしよう。そうしよう。
笑ってみせていれば、彼もへらへらとした笑いを浮かべ、軽口と冗談、映画の感想とかを言いながら僕達は帰路に着く。
寮に着けば、不機嫌です、と言わんばかりのセシリアがきっと迎えてくれるのだ。ソレを「ふふん」と鼻で笑うまでが今日のデートである。
困り顔の彼を二人で見るのは、きっと日常なのだ。

メイドさん、お困りですね!

耳に聞こえるアップテンポの曲と自身の呼吸音。地面を踏む音と感触。
頭の中が考え事でいっぱいになる。先日のシャルロットさんに絡む男達を倒した時の事。
男の拳を避けた瞬間に自覚した。自覚した瞬間に血が沸騰した様に頭へと駆け上がり、同時に落胆したのを覚えている。だからこそ、血は急激に冷え、まるで男達が雑草に見えてしまった。
いいや、確かに人の形はしていた。ただ、人の形をしていただけ。それだけなのだ。
村雨との繋がりが深くなった。
ソレは十二分に理解できた。同時に自覚したくもなかった症状が頭にチラつく。
戦う事に対して『楽しい』と思ってしまっている。前の福音との戦いもそうだ。俺自身は福音の操縦者、ナターシャ・ファイルスさんへ攻撃が通らない様に思考していた筈だった。その思考はあった。けれどもソレよりも戦闘という行為に対しての『楽しさ』を覚えていたのも事実だ。
戦闘技術に関してもそうだ。

素人同然の俺があれほど容易く関節を蹴り抜ける訳がない。攻撃の回避や防御は散々織斑先生から叩き込まれているけれど、対人戦となればまた別だろう。

けれど、俺は自然と、まるでソレが当然の様に動く事が出来た。

足を止めて、深呼吸をする。

流れる汗をジャージの袖で拭いながら眩しく輝く太陽を向いて、呼吸を落ち着けていく。

難しく考えるのは止めよう。考えても答えは出ないし。いっそ村雨に聞くのが一番早いかもしれないけど、前のことを思い出すとあの世界に閉じ込められそうなんだよな……。

「……まあその時にでも考えるか」

ともあれ、今にはさっぱり関係の無い事である。

頭で考えた所で終わってしまった事であるし、結果だけを見ても俺に力が付いた、と喜ぶべき所なのだろう。

左手を見ながら、思い切り握り締める。あの時の感覚はない。シャルロットさんに言った様に昂った時だけの症状ならば……。

大きく溜め息を吐き出す。

夏野穂次らしくない。もっと簡潔に、簡単に、それでいて適当に考えよう。

「さいきょーの力を手に入れた、やったぜ！　アーッハッハッハッハッ!!」

高笑いをしてみせ、感情を振り払う。ニヤリと笑ってみせ、事態に流されてやる。

成るようになれ。ちくしょーめ。

高笑いを収めて、ランニングからウォーキングへと変更する。

夏休みに入っているからか、ＩＳ学園の敷地内に人影はそれほどない。部活動に勤しむ女生徒の大半は自国に戻っていたりするのだから、当然と言えば当然かもしれない。

こう、もっと運動している女の子がいてもイイと思う。流れる汗、張り付く服、そして体のライン！　実に素晴らしい。

「ん？」

足を止めたのは、あまり意味は無い。ソレこそ目の前に全裸の女性が居たから、なんてとんでもない理由ではない。

いや、まあ、理由としてはとんでもない理由なのだと思う。どうしてメイドさんがＩＳ学園の正面ゲートにいるんだ……。

イヤホンを外してメイドさんへと近寄る。

「メイドさん、メイドさん。お困りですか？」

「はい？」

疑問符を頭に浮かべて随分と重そうな荷物を持ったメイドさんがコチラを向く。俺

の姿を見て、頭の先から足までしっかりと見たメイドさんは微笑んだ。
「――ええ、少しお嬢様に渡す荷物がありまして」
「なるほどー。お手伝いはいりますか？」
「ありがとうございます。もし手が空いている様でしたらお願い致します」
「見て分かる通りですよー。アッハッハ」
「……夏野様。お気を遣わずに口調を崩していただいても結構ですので」
「俺って名前を言いましたっけ？」
「世界に二人しかいない男性操縦者の名前を知るのもメイドの勤めですから」
「メイドってスゲー……っても流石に美人なお姉さんに敬語なのは許してください。緊張しちゃいます」
「まぁ。美人だなんて」
「いやいや、十二分に美人だと思いますよ」
へらへら笑う俺と綺麗に微笑むメイドさん。何、このメイドさん。スゲー美人なんですけど。つーか、メイドさんって美人だけしかいないのだろうか。メイドさんスゲー!!
「申し遅れました。チェルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」
「ご丁寧にどうも。知っているとは思いますが、夏野穂次と言います。次は是非ともお仕事ではない時に会いたいです」

「ふふっ。聞いた通りご冗談がお上手ですね」
「アハハ」
　冗談なんてとんでもない。こんな美人さんなら是非ともプライベートで会いたい。出来るならもっと親密な関係になったりして、優しくされたい。
　でも冗談ではない、とは決して言えない。その一言を言うのが急に怖くなったのだ。決して俺がヘタレである事の証明ではない。
「ときに、夏野様。陰で頑張る女性はどう思われますか?」
「へ?」
「例えば……両親を失くし、家督の責務を一身に背負い、ソレを一切見せない様な気高い女性はどう思いますか?」
「スゲー具体的な例えッスね……」
「あくまで、例え、です。よろしければご参考までにお聞かせいただいても?」
「何の参考にするんですかね……。まあ特に思う事はないですかねー……」
「……そうですか」
「いや、まあスゴイと思いますよ。俺の想像が追いついていないだけなんで。たぶん、重圧も有っただろうし、それでもその女性は気高いままなんですよね」
「そうなんですよ!　誰にも弱い所など見せずに、一人で背負い続けて――」

「あー、ブランケットさん？」
「……失礼致しました」
「いや、別にいいんですけど。まあ知り合いにも似たような人がいるんで、やっぱり凄いと思いますねー。完璧っぽい癖に料理ヘタでチョロいですけど」
「……、どんな方ですか？」
「そうッスねー。普通はしてない事まで完璧にこなしてて、でも努力した事に関しては何も言わないで、ちょっとだけ胸を張って……うーん、言葉だと上手く言えないですね」
「なるほど。夏野様はその方の事がお好きなのですね」
「好き、なんですかね？　自分ではよく分からないんですよねー。でも隣に居てくれると落ち着きますし、嫌いではないんだとは思います」
「そうですか、そうですか」
「どうしてそんな微笑ましい物を見る感じなんですかね……」
「いえいえ、そんな。ふふふふふ」
ニコニコと、優しい微笑みを浮かべたブランケットさん。実に美人である。
メイドで美人でお姉さん。これだけで最強かもしれない。いいや、最強だろう。さいつよ。
「というか、ブランケットさんって誰に仕えて――」

「ありがとうございました。ココまでで大丈夫です。
それと、女性のことを詮索するのはご法度ですよ」
唇に人差し指を押し当てられて言葉が詰まる。実に素晴らしい魅力的な笑顔のブランケットさん。美人な顔が近くに来た事に放心している間に荷物を掠め取られ、ブランケットさんは深く頭を下げて踵を返した。
「……メ、メイドってスゲー……」
俺の口からはそんな感想しか出なかったのである。
まるで夢の様な出来事だった。美人メイドのお姉さんが魅力的な微笑みを俺に向けてくれた。現実的ではないけれど、僅かに残った紅茶の香りだけがソレを現実だと教えてくれた。

改めて走り直してから俺は自室へと戻り、シャワーを軽く浴びた。
うむ、中々筋肉が付いてきたな。鬼の訓練による影響だろう。さすが千冬様である。
千冬様？　……う、頭がッ。
ノックが聞こえて抑えていた頭を上げる。下は履いているから何も問題ないだろう。

「はいはーい」
「……」
扉を開けるとセシリアさんが立っていた。何かを言おうとして驚いたのか、口をパクパクと動かして声は出ていない。
「どーしたんスか？」
「服を着てくださいまし!!」
顔を真っ赤にして背を向けたセシリアさんにキョトンとしてしまう。なんと初心なのだろうか。
以前にシャルロットさんが叫んだ時に半裸で応対していたけれど、こんな反応してくれる女の子は居なかったぞ。
タンスの中からジャージを取り出して羽織ってから改めて扉を開く。
「いやー、まさかあんな反応をされるとは……」
「当たり前ですわ……。というより、どうして、その、半裸でしたの？」
「走ってきたからシャワー浴びてたの」
「……また何かしましたの？」
「その俺が走ってる＝（イコール）何か仕出かした、みたいに言うのやめてください。今回は何もしてないから」

「まあイイですわ」
「それで、今日はどうしたのさ」
「ええ、その……いい茶葉が手に入りましたので」
「お茶菓子ならキッチンの戸棚にあるよ!」
「ありがとうございます」
セシリアさんが持ってくる茶葉は本当にイイ物が多い。いや、それこそ銘柄とかを全く知らない俺が言うのもアレだけれど、持ってくる度にセシリアさんによる知識を披露されれば流石に覚える。
ぼんやりとお湯を沸かしていれば隣にセシリアさんが近寄ってくる。
「……村雨が暴走したんですの?」
「あー……もしかして、シャルロットさんに聞いた?」
「ええ」
「そっか。一応、自分で確認を色々してみたけど感情の昂りで変に適合率が上昇するっぽいんだよなぁ」
「……大丈夫ですの?」
「問題ねーですよ。エッチなことを考えなけりゃ、いつもと一緒さ」
「誤魔化さないでくださいまし」

「アッハッハ。まあ問題ねーよ。日常生活には影響がないし、戦闘になっても俺の武装関係で攻めには転じれない訳だし」
「……穂次さんがＩＳを得てからワタクシ達と戦おうとしなかったのは、そういう事でしたのね」
「あの時点では弱すぎたからなんだけどなぁ……。まあ、今も弱いけど」
「……少しは心配させてください」
少しだけ不機嫌顔でムスッとしたセシリアさんに苦笑してしまう。本当にどうしてこれほど優しいのだろうか。
「まあ成る様に成るしかねーッスよ。問題が出てきたらソコで対処しましょ」
「もう問題があるのですが」
「なんですと!?」
「穂次さんの事ですわ」
「俺自身が問題になる事だ……ッ！　みたいな？」
「意味がわかりませんわ」
「意味がわかったら問題も解決してそうだ」
「……それもそうですわね」
溜め息を吐き出して納得してくれたらしいセシリアさんにへらりと笑い、紅茶の準備

に取り掛かる。
　沸騰したお湯で一度カップとポットを温め、ポットの中のお湯を捨ててから茶葉を入れる。
　以前に適当に入れたら怒られたのを覚えている。怒り方がいつもの様な激怒ではなくて、自然と間違っていることの指摘だったので非常に怖かったのも覚えている。もう俺は紅茶の淹れ方をマスターしたぜ……!!
　紅茶をカップの中に注げば立ち上る香りが鼻腔を擽る。本当にイイ匂いがする。
「……ん?」
「どうかしましたの?」
「いや、何か嗅いだことのある香りだなぁ、と……」
「?　普通のカフェに置いてあるような銘柄ではありませんが……」
「喫茶店とかじゃなくて……」
　俺の頭の中に一人のメイドさんが微笑みかける。ああ、なるほど、あの人に着いていた香りか。
　……。
「――――!?」
「ど、どうしましたの?　急に蹲って」

「スイマセン。今は触れないで下さいお願いしますマジで!!」

顔が熱い。どうしてだ！　ちくしょーめ！

え？　何？　俺はセシリアさんのメイドさんに向かってセシリアさんの総評を下していた訳ですか!?　ふぁぁｗｗクッソワロタｗｗｗｗ死にたい。

セシリアさんの反応を見る限り俺のことは言ってないんだろう。でも顔が熱い。ヤバイ。何がヤバイか分からないぐらい、ヤバイ。

セシリアさんが性悪じゃなくてよかった。でもそうやってスゲー心配そうに、不思議そうに俺を見るのはやめて下さい死んでしまいます。

「いや、あー……ホント、メイドさんってスゲーですね」

「は？」

「いや、スイマセン戯言です。ちょっとだけ落ち着かせてくださいお願いします」

心に盾を

「なあ穂次。夏祭りに行かないか？」

　食堂で夕食も食べ終わり、ノンビリとお茶を啜りながら変哲の欠片も、魅力なんて一切無い極々普通で素敵な日常会話の中、織斑一夏は夏野穂次にそう言った。

「夏祭り？」

「ああ。地元であるんだよ。帰るついでに一緒に行かないか？」

「そういうのは鈴音さんとか篠ノ之さんとか、ボーデヴィッヒさんとかに薦めればいいだろ……あ（察し」

「いいか、お前の口からホから始まってモで終わる言葉を言ってみろ。ぶん殴るからな」

「ホ、ほ、ほ……何かいい言葉とかあるか？」

「本ししゃも、とかか」

「ほ、ほんししゃも？」

「本ししゃも。あー……ほら、本マグロとか言うだろ？　そういう繋がりだ」

「なるほど……つーか、なんでお前は本ししゃもとか知ってるんだよ」

「昔、千冬姉の肴（さかな）……つまみを作った時に覚えたんだよ」

「一夏はいい嫁になるな……」
「お前さ、俺の事をホモホモ言ってるけど、お前の発言も大概だと思うぞ」
「フッ、気付いたか……」
「なっ……まさかお前……！」
「そう！　俺はお前を狙う（意味深）刺客だったのだッ!!」
「じゃあな、夏野君。俺たちの交友もココまでだ」
「冗談だぜ、一夏。俺は女の子、そう、おっぱいが大好きなんだゼッ!!」
「知ってた」
「知られていた……だとっ!?」
「ふっ……俺はお前のことならなんだって知ってるんだぜ!!」
「じゃあな、織斑君。俺たちの交際はココまでだ」
「冗談だよ、穂次」
　お互いに笑い合い、お茶を啜ってから会話を再開する。
「それで、俺じゃなくて鈴音さんとかボーデヴィッヒさん、篠ノ之さんを誘えばいいだろ」
「鈴は予定があるらしいし、ラウラは軍関係でいない。箒は誘っても意味がないだろ」
「……え？　何、お前って篠ノ之さんの事嫌いなのか？」

「どうしてそういう話に――……あー、スマン。夏祭りをする場所が篠ノ之神社なんだ」
「だから篠ノ之さんを誘っても意味が無いと」
「ああ、手伝いに呼び出されてるらしい」
「らしい、って事は篠ノ之さん本人に聞いたわけじゃないのな」
「ああ。雪子さん。箒の叔母さんが『箒が演舞をするから是非見に来ないか』ってさ」
「……篠ノ之さんが可哀想になってきたな」
「なんでだよ」
「コッチの話だ。それで一応聞いておくんだが、巫女さんは存在しているんですかね？」
「ソレって重要な事なのか？」
「お前……。巫女さんと言えば看護師さんと同じ、いいや、それよりももっと希少価値を含んだ存在なんだぞ!?　巫女さんだぞ！　巫女さん！」
「うーん。箒が売り子として出てるんだったら巫女服を着てるのかな」
「俺は今夏祭りに行くと決めたぞ、一夏。俺は絶対行く。カメラの準備しなきゃ……！」
「おう。箒がマジで怒るからやめろ」
「安心しろ。俺は盗撮のプロだぜ!!」
「警察か、千冬姉か。どっちがいい？」
「前者がいい、と思える不思議……。まあ冗談はさておき、一緒に行くぞ」

「……カメラは禁止だぞ」
「おいおい。俺だってソコまで落ちぶれちゃいねぇよ」
「本心は？」
「ククク、俺のＩＳには録画機能があってだな」
「ホントに付けたのかよ……」
「村雨に拡張領域（バススロット）が無い理由？　聞きたいかね」
「この流れだと聞きたくねぇよ」
「いけずー！　もっと俺のことを知っても、いいんだぜ？」
「はいはい。ドヤ顔してもノらねぇぞ」
「ぐぬぬ……」
「あとはセシリア達も誘ってみるか」
「あんまり大人数だと移動とか面倒じゃないか？」
「大人数って言っても俺たち含めて四人だから大丈夫だろ」
「セシリアさんとシャルロットさんはしっかりしてるから問題ないな」
「一番の問題が何を言ってるんだ」
「ハッハッハッ。安心しろ。迷子センターの場所は一番最初に確認するぜ！」
「お前……変態って意味で言ったのに、方向音痴まで追加するのかよ」

「俺は悪くないんだ。目的地が急にドコかに行くんだ。俺は悪くない」
「場所は動かないと思うぞ」
「それな」
「まあいいか。んじゃ、俺は二人を誘ってくるから」
「ご苦労。俺には仕事がある。ククク、健闘を祈るぞ、織斑一夏」
「はいはい。千冬姉の手伝いだろ。早く行かないと怒られるぞ」
「ひっ……イッテキマス」
穂次は時計を見て、顔を真っ青にしてから慌てたように席を立ち、決して走らずに早足で移動した。その姿を見て一夏は苦笑を浮かべて席を立つ。
食堂を出て廊下を歩いていれば都合のイイ事にシャルロット・デュノアが歩いており、一夏の存在に気が付いた。
「やあ、一夏。こんばんは」
「こんばんは、シャルロット」
「ところで穂次を知らない？　部屋に行っても居なかったんだけど」
「穂次なら千冬姉の手伝いに行ったよ」
「この時間なら……なるほど、ありがとう」
「何か用事でもあったのか？」

「えっ!?　いや、一夏には関係ないよ！　大丈夫ダヨ！」
「お、おう、どうして慌ててるのかはわからないけどわかった」
　慌てふためきながら両手を前にして何も無い事を示したシャルロット。言い方がかなり問題なのだけれど、実際、実在している一夏には関係の無い話だ。求めていた本にもちゃんと『実在の人物には関係が無い』と記載されている訳であるし。
　架空の織斑一夏と架空の夏野穂次がイチャつく本の存在をしらない実在する一夏は首を傾げて疑問を感じる。けれども聞かれたくない事を聞くような性格でもない一夏はその疑問を放り捨て、自身の用件を伝える。
「そういえばシャルロット。夏祭りに行かないか？」
「……そういうのは箒とか鈴とか、ラウラを誘ってあげればいいんじゃないかな？」
「鈴は予定が入ってるらしいし、ラウラは軍関係でいない。箒は――行く神社が篠ノ之神社だからな」
「なるほど」
「と、いうか。シャルロットも三人を誘ったかどうかを聞くんだな」
「まあ、それは……ん？　僕もって？」
「穂次を誘ったら同じ事言われたんだよ」
「あぁ、なるほどね」

「……もしかして俺ってその三人に何か仕出かしてるのか？」
「うーん、むしろ何もしてないから問題なんだけど」
「なるほど、さっぱり分からん」
　困ったような顔をして、自分の言葉に頷く一夏にシャルロットは苦笑を浮かべて「まあ一夏だしね」と呟いた。
　片思いというのは実に一方的で、そして他者から見れば面倒である。さっさとくっ付けばいいのだ。とはシャルロットは口が裂けても言えないのである。なんせ彼女も片思いの真っ最中であり、意中の人物はやはりサッパリ気付いてくれないのだ。なんとも、片思いとは面倒である。
「それで、夏祭りはどうする？」
「うーん、誘いは嬉しいけど――」
「そうか。まあ俺と穂次で行くか」
「――予定があるけどスグに終らせるよ。行く」
「お、おう……無理には来なくても」
「行く」
「アッハイ」
　ニコリと笑っている筈なのに、どういう訳か一夏はシャルロットが怖くなった。思わ

ず一歩引き下がった一夏などお構い無しにシャルロットはニコリと笑って「こうしてはいられない」と言わんばかりに踵を返した。

果たして彼女の向かう場所はドコなのか。少なくともバラの咲き誇る場所ではない事を願おう。

シャルロットの背中を見送った一夏は少しだけ頬を掻いて小さく息を吐き出した。

「穂次も大変だな」と一つだけ呟いて足を進める。

この場に穂次が居たのならば「一夏にだけは言われたくねーよ」と言っていた事だろう。ドングリの背はどちらが高いのだろうか。そんな事はどうでもイイ事なのである。

足を進めて一つの扉の前に到着する。部屋の番号を確認してからノックを三つ。

扉を開けたのは金色の髪を揺らしたセシリア・オルコットである。

「あら？　一夏さん。ごきげんよう」

「ゴキゲンヨウ。こんばんは」

「どうかしましたの？　通信でない、ということは急ぎの連絡でもない様ですし」

「夏祭りに誘いに来たんだよ」

「……そういうのは――」

「鈴音は予定が入ってて、ラウラは軍関係でいない。篠ノ之神社での祭りだから箒は

誘ってない」
「そうでしたの。それにしても察しがいいですわね」
「俺だって二人に言われてたら流石に気付くから」
「二人、といいますと穂次さんとシャルロットさんですわね」
「ああ。それで、どうする？」
「そうですわね……申し訳ありませんが――」
「そうか。じゃあ俺と穂次とシャルロットで行くか」
「――以前から日本の夏祭りに興味がありましたの。行かせていただきますわ」
「別に無理に来なくても」
「行く、と言いましたわよ？」
「アッハイ」
やけに威圧感のある笑顔で「御機嫌よう」と一言。閉じられた扉の前で一夏は溜め息を吐き出して指で頬を掻いた。
「穂次も大変だなぁ……」
この場に穂次が居たならば「お前には言われたくねーよ」と言っていただろう。五十歩逃げた者と百歩逃げた者、果たしてどちらが臆病者なのか。そんな事はどうでもいいのだ。

かくも片思いというのは面倒である。

◆◆

幾らか電車を乗り継ぎ、ようやく俺は一夏の地元へと到着した。

そう、ようやくである。いいや、決して電車の乗車時間が長かっただとか、乗り継ぎが多かったとか、そういう事は無かった。

「ココが集合場所？」

「そうらしいですわ。時間は……少し早く着いたみたいですわね」

「そっか。じゃあドコかで時間でも潰そうか」

「そうですわね。あら？　穂次さんどうかしましたの？」

「……スイマセン。心の準備が出来てなかったのでちょっと休ませてクダサイ」

セシリアさんとシャルロットさんが俺を挟むようにしているのだ。いいや、嬉しい。確かに美少女が隣にいる事は嬉しいんだ。でも、荷物持ちっていう大義名分も無くこの美少女二人の隣にいるってのはスゲー辛い。何が辛いって周りからの視線が辛い。

美少女二人に挟まれる形でいるイケメンでもない俺。心にダイレクトアタックだッ！的な。

ともかくとして『荷物持ち』という鉄壁の盾を失った俺は周りからの視線に串刺しにされた。心の言い訳はやっぱり必要である。
「酔ったの？」
「ハハハ、俺は常に君の瞳に酔ってるのさシェリー」
「――ッ、そ、そっかー、フフフ」
「穂次さん、殴りますわよ？」
「ハハハ、やめてくれハニー。俺が傷つくことよりも君の綺麗な手が傷つくことの方が俺には重要なのだよ」
「――ッ、そ、そうですか。フフフ」
「ハハハ……ちょれー」
どうして頬を赤らめてるんですかね？　こんな気障ったらしい言葉で頬を赤らめるとお兄さん君達の将来が不安で仕方ない。悪い男に捕まらないかスッゲー不安。いや、ソレを言い始めると俺に関わってる時点で不安は当たってるのだろうか。
いや、どうでもいいか。とりあえずコチラに近付いてきたヤツに文句を言ってやろう。
「悪い。待たせたか？」
「ハハハ。会いたかったぜ、ダーリン。ぶち殺してやろうか？」

「ハハハ。返り討ちにしてやるよ。あとダーリン言うな」
「つーか、二人が来るなんて聞いてないんですけどー」
「誘うって事は言ってただろ？」
「誘った後に報告ぐらいは欲しかったって話だよ、バカヤロウ」
「そんなにわたくし達と一緒は嫌でしたの？」
「ハハハ。照れ隠しってヤツさハニー。チョロい君の事はとても好きだよ」
「騙されませんわよ」
「チョロくないセシリアさんは怖いぜ……」
　両腕を上げて、力無く手は下げてみせる。どうにかイケメンな一夏が来てくれたので俺に向かっていた視線が一夏へと向いた。一夏は視線なんて気にした様子もない。果たしてコイツは慣れているのか、それともただ鈍感なだけなのか。後者だな。絶対そうに決まってる。
「おい、穂次。変なこと考えただろ」
「ナニ？　やっぱり俺の頭の上って吹き出しか何か出てるの？」
「なんとなく分かる」
「……やっぱり俺たちは以心伝心なんだな。愛してるぜ、ダーリン」
「その愛は一方通行だよ、ハニー」

「やっぱり一夏と穂次はそういう関係だったんだね!!」
「シャルロットさんはちょーっと黙っておきましょーね」
「不潔ですわ」
「セシリア、勘違いだから。違うから」
どん引きしているセシリアさんは一夏に任せて、俺はシャルロットさんを黙らせておこう。本を貸さないとでも言えばきっと黙るだろう。改善しているか、という事はドコか遠くへと放り出そう。

昼時も程ほどに過ぎ、俺たちは篠ノ之神社の境内に居た。
沢山の人に囲まれて、神楽を舞った一人の巫女に少なくとも俺は目を見開いていた。
「はへー。スゲーっすね」
「そうだろ?」
「やっぱりおっぱいだな！　ッタイ！　二人同時に足を思いっきり踏むってどうなんですかね!?」

「少しは考えたらどうかな？」
「セクハラ男にはいい薬ですわ」
「一体何が悪かったんだ……俺にとって最大の賛辞だったのに……」
「いや、本気で悩むなよ……」
「なるほど、わかったゾ!!　お尻も最高でしッダ！」
　腹部に二つの肘がぶつかった。痛い。スゲー痛い。フンッと二つの声が聞こえて、俺は助けを求める様に一夏に手を伸ばした。一夏はソレを一瞥して首を横に振った。この世界に救いはないんですかッ！
「さて、箒に会いに行くか」
「そうだな。俺の最大の賛辞を――」
「痛みが足りないかな？」
「送るのはヤメマス」
「いい判断ですわね」
「二人が怖いんですが……一夏センセー、どうしてなんですか……」
「お前がヘタレだからだろ」
「なんだ、その心にクる理由……俺はヘタレだなんてッ」
「ヘタレですわね」

「ヘタレじゃないか」
「……この世界に救いなんてないんだなって」
「売り子をしてるだろうから、ソッチに行くぞー」
「ほら、穂次行くよ」
「行きますわよ、穂次さん」
「ハイ……ヘタレ、行きますッ！」
「お前って前向きだな……」
「笑いは大切だろ？　なんせ俺は喜劇の主人公だからなッ！」
「お前が主人公の劇って……一般放送は無理だな！」
「青少年の皆！　お兄さんが君たちの救いになってやろう！」
「ダメなヤツだろ、ソレ」
喜劇な主人公である俺はお供に連れられ売り場へと到着した。何かオカシイ事があるような気がするが、俺の手を引いているお二人の手がスベスベ柔らかなので何もオカシイ所は無い。
はてさて、売り場にはかなりぎこちない笑顔を浮かべた篠ノ之さんが巫女服を着て売り子をしていた。
まあ笑顔が苦手な篠ノ之さんだから仕方ないね。

「よっ」
「なっ、い、一夏ッ!?」
「俺らも居るんですけどー」
「な、夏野にセシリア、シャルロットまで……!!　夏野ッ！　お前だな!?」
「ちょっと待った！　俺は今回何もしてねーから!!　確かに巫女服見たいって言ったけど俺が言いだしっぺじゃねーから!!」
「嘘を吐くな！」
「コレでも俺は自分に正直に生きてるから嘘は吐いた事ないんだゾ☆」
「それこそ嘘ですわね」
スゲージト目で俺を睨むセシリアさんとシャルロットさん。本当なんだけどなぁ……まあいいか。
ともあれ、明らかに慌てふためいている篠ノ之さんを眺めながら迷う。
「それにしても、神楽舞、様になってて驚いた。なんというか……キレイだった」
「――っ」
「スゲー、人間ってこんな感じで固まるんだな」
「夢だっ！」
「は?」

「いやいや、篠ノ之さん落ち着くんだ」
「な、夏野。コレは夢だろ？　夢に違いない！」
「じゃあ俺がおっぱいを揉んでも問題は無いな!!」
「ああ！」
「よっしゃぁ!!」
「穂次さん？」
「穂次？」
「腕が折れる！　俺の腕はソッチには曲りませんよッ!!」
「曲りますわ」
「曲げるからね」
「アダダダダダダ!!」
「まあまあ、随分と賑やかだけれど……あら？」
　売り場の奥から出てきた妙齢の女性。その女性が篠ノ之さんと一夏、そして俺とセシリアさん、シャルロットさんを順繰りに見る。
「ああ」
　ぽん、と手を打ち得心した女性は優しげに微笑んだ。
「箒ちゃん。あとは私がやるから、夏祭りに行ってらっしゃいな」

「なっ!?」

恐らくこの女性が件の『ユキコ叔母さん』なのだろう。そう考えてみれば、先ほどの「ああ」と手を打ったことや、優しく微笑んだ事が随分と黒く見えてしまった。全てはユキコさんの手の平の上で動いているのだろう。いいや、そういう事はなるべく気付かない振りをしておこう。深淵を覗くとき深淵もコチラを覗いているらしいのだから。

ともあれ、ユキコさん（仮定）と篠ノ之さんの軽い漫才を見てからユキコさん（暫定）が改めてコチラを見てニコリと微笑む。

「そちらのお嬢さん方もせっかくの夏祭りですし、浴衣でもどうかしら?」

「え、いいんですか?」

「ええ。せっかくの夏祭りですもの。彼氏の為におしゃれするのも彼女の務めよ」

「か、彼氏……」

「彼女……」

「フッ、じゃあ俺も一夏の為にオメカシするかな」

「お前さ、馬鹿なの?」

「馬鹿ダヨ!」

「知ってる」

「じゃあ聞くなよ」

それもそうだ、と漏らした一夏と一緒に母屋へと向かったセシリアさんとシャルロットさん、そして篠ノ之さんを見送る。「待っているのも彼氏の務めよ（はーと」なんて言われたから、という訳でもないけれど放置する気も起きない。

が、けれども時間は少しばかり掛かるだろう。

「どうするよ？」

「そうだな……じゃあ参拝でもしてくるか」

「参拝の作法とか覚えてねーぞ……」

「むしろお前が覚えてるとは思ってねぇよ」

「一夏、失礼って言葉知ってるか？」

「穂次じゃないし知ってるに決まってるだろ」

「よし！　じゃあ問題ないな！」

「……自分で言うのもアレだけど、問題しかないな」

「ソレな」

二人でケラケラ笑いながら賽銭箱の前へと立つ。幸いな事にそれなりに人は疎らでスンナリと前に立つ事が出来た。

ガランガランと鈴を鳴らし、財布に入っていた小銭をテキトーに賽銭箱へと入れて、手を合わせる。

「穂次、何を願ったんだ？」
「んー、願いよりも、日頃の感謝ぐらいかなー」
「……お前、本当に穂次か？」
「なんだよ。コレでも阿修羅様を信仰してるんだぞ」
「それって千冬姉って言わないよな」
「……ああ！」
「スゲー間が開いてたけど、気にしないぞ。俺は気にしない」
「まあ冗談はさておき。俺の願いは俺が達成すべき目標だからな。神様は頼らないことにしてるんだよ」
「おお。穂次の癖にカッコイイな」
「ふふん。穂次の癖に、は余計だ」
「それで、その目標とやらは？」
「聞きたいかね、一夏君」
「是非聞かせてくれ、穂次君」
「俺の願いはただ一つ、そう世界平和である!!」

「あ、ふーん」
「急に興味失くすのやめてもらっていいッスかね？」
「お前が世界平和とかないから。むしろ世界征服とか言ってるほうが納得する」
「ククク、甘いな一夏ッ！　俺は世界を総て、そして平和にするのだッ！」
「その正義の味方にやられそうな悪のトップみたいな発言やめとけって」
「俺が敗れても第二、第三、とんで百ぐらいまでの俺がッ！」
「怖いわ！」
「冗談だよ」
　へらへらと笑って空を見上げる。日が落ちて夕焼けに染まる空。かれこれ無駄話をして一時間ほど経過しようとしている。
　夏祭りの喧騒も増えて、同時に人が増えている事を意味する。
　鳥居の下というなるべく分かりやすい位置にいるがコレで三人が気付くか、という話になれば話は別だろう。
「んー、ちょっと探してくるかな」
「俺も行くぞ？」
「いや、一夏はソコで待っててくれよ。ちょっとしたら戻ってくる。そう、俺が迷わない程度になッ!!」

「スゲェ不安になる発言だな……」

大丈夫だ。問題ない。本当に迷った時は俺は恥ずかしさなんてなく迷子センターに駆け込むつもりだ。

人ごみに紛れてテキトーに歩く。幸い見つけようとしている頭は金色二つと黒いポニテ一つなので見つけやすいだろう。

屋台を見渡しながら人ごみを抜けてしまう。果たして三人はさっぱりいないのである。どうしたモノか。これ以上離れてしまうと、俺は本当に迷子センターに行くかもしれない。

「あら？　アナタ、迷子かしら？」

振り向いた先は雑木林。提灯や夕焼けの明かりに照らされない影の中。僅かに差し込んだ光を反射する淡い金色の髪に赤い瞳、そして素晴らしい体をした美女が俺に声を掛けた。

クスクスと笑いを浮かべた美女にいつもの様にヘラリと笑う。

「そうなんスよ。もしかしてお姉さんもですか？」

「そうね。実はアナタを待っていたの」

「……美女に待たれてるなんて、光栄ッスけど」

「あら、美女だなんて。口が上手いのね。セカンド」
「……誰ッスか？　アンタ」
「そうね、亡霊とでも言っておこうかしら？」
「……その亡霊さんが俺に何の用ッスかね？　お盆だからって俺の前に出てくるような美人な幽霊さんは覚えがないッスよ」
「アナタ、織斑一夏に勝ちたくはないかしら？」
「……別に、興味ないッスね」
「あら、本当に？」
「何が言いたいんですかね……」
「コレは勧誘よ。セカンド――、いいえ、『　　』君？」
美女の口から出てきた言葉に思わず目を細めてしまう。何度も聞いた名前であり、同時にもう聞くことのない名前だ。
溜め息を吐き出してから言葉を選んで繋いでいく。
「……残念ながら、その名前の少年はもう居ないッスよ」
「そうかしら？　まあアナタがそう言うのだから、そうなのね」
「それで、勧誘って言ってましたけど」
「ええ。でも今日は顔合わせだけにしておくわ」

「……もうお盆も終わるから出てこなくてもいいッスよ」
「善処してあげる。それこそアナタの機嫌を損ねるつもりはないもの」
ニタリと笑んだ美女を中心に突風が起きる。腕で顔を庇い、風が止んだ時には既に美女は消えていた。亡霊、と言っていたから本当に幽霊だったかも知れない。
空を見上げて、溜め息を一つだけ吐き出す。
「はぁ、久々に呼ばれてビビッたわ……」
もう呼ばれる事の無い名前。既に居なくなった人間の名前。
もう一度溜め息を吐き出して、落ちていた紙を拾う。簡素に名前であろう単語だけが書かれた名刺。裏を見れば恐らくホットラインであろうアドレスと真っ赤なキスマーク。ちょっとだけドキドキしてきたぞ……。
ともあれ、こんなモノを他人に見せる訳にもいかないので、ポケットの中に隠しておこう。

自分を落ち着ける様に深呼吸を繰り返して、人ごみに紛れながら鳥居を目指す。
到着したソコには一夏と顔を赤くした篠ノ之さん。そして涼しげな青い浴衣を着こなしたセシリアさんと淡い水色に朝顔の描かれた浴衣を着こなすシャルロットさん。
「どこに行ってましたの!?」

「あー……ちょっと迷子に」
「よし、やっぱり穂次に首輪をつけよう」
「シャルロットさん、とんでも発言してるから落ち着いてください死んでしまいます」
「おう、おかえり穂次」
「む……居たのか、夏野」
「あのさ。現実に戻ってきたのはいいけど、夢じゃないって事は俺もいるから」
「……そうだな、すまん」
「そうやって落ち込まれると困るんですけど……それにしても……スゴイッスね!!」
「穂次さん?」
「穂次?」
「アデデデデ!!　両耳引っ張らないでください!　イケメンの俺がエルフになっちゃう!」
「ヨカッタネ」
「ソウデスワネ」
「二人共目が笑ってないから!」
俺の耳を引っ張りながらニコリと笑って、笑っているのだろうか……確かに顔は笑っていると言えるのだけれど、目が怖い。いや、笑顔なんだよ、でも怖い。何コレ怖い。

そんな二人は篠ノ之さんに目配せをして、篠ノ之さんも一つ頷く。そんな動作を見てさっぱり分からない俺と一夏は目を合わせて疑問を浮かべる。
「よし、じゃあ僕らは穂次に案内してもらうから」
「そうですわね。箒さんは一夏さんをお願い致しますわ」
「ま、任せろ！」
「いや、俺は地元だし、皆で一緒に回った方が――」
「行くぞ、一夏！」
「わ、待て箒！　腕を引っ張るな！」
「一夏っ！　くっ、絶対助けてやるからな!!」
「穂次ッ!!」
「穂次、あっちに射的があるってさ」
「マジかよ！　行こうぜ！」
「穂次ィィィイイイ!!」
一夏、お前の犠牲は無駄にしない。あれ？　一夏って誰だっけ？

闇夜に咲く華

「私が一夏と？」
「ええ」
篠ノ之箒は少しだけ頬を赤らめてセシリアの言葉を繰り返した。浴衣の着方を雪子から教えられながら、細かい所は修正してもらいながらではあったけれど、どうにか着用する事が出来た三人は顔を突き合わせて簡単な作戦会議を開いていた。
その少し後ろでは雪子が微笑ましく頬に手を当てて「あらあら」と嬉しそうに漏らしているのだが、ソレは敢えて気にしない事にしておこう。
「それは嬉しいが、全員で回る方がいいのではないか？」
「それもいいんだけどね。穂次が変に気にしそうだから」
「……そうか」
「アナタと穂次さんに何があったかは知りませんが、仲直りなら早くしてほしいですわ」
「……すまん。全部私が悪いんだが……」
箒が思い出すのは銀の福音の時に夏野穂次に放った言葉だ。全ての責任を彼に押し付け、そして彼はソレを否定せずに自身と一夏の為に殿（シンガリ）を務めた。

結局謝れていない箒は視線を少しだけ落とす。決して彼女とて穂次の事を毛嫌いしている訳ではない。いや、セクハラは程ほどにしてほしいとは思っているけれど。

彼と話しているとどうにも怒ってしまうのだ。恋心ではない事は明らかなのだが、いつのまにか彼の愉快な空気に巻き込まれている。

「はぁ……まあ穂次さんに謝りにくい、というのはわかりますわ」

「そうだろう？　いや、だからといって謝らない、というのは間違っている事は分かっているんだが……」

「まあ箒が分かってるなら、適当なタイミングでいいんじゃないかな？　穂次だって、別に謝ってほしいって訳じゃないんだし」

「……そうなのか？」

「遅くなれば余計に謝りにくくなりますわよ」

「ハイ……」

顔を上げた箒に視線を少しだけ鋭くしてセシリアは言葉を放つ。その言葉にしゅん、と体を小さくした箒に二人は苦笑する。

「まあ今日は夏祭りだし、穂次の息抜きも兼ねてるから」

「そうなのか？」

「変に気負ってる、というか」

「微妙に違うと言いますか……」
「……いつもの夏野だったと思うが」
「全然違うよ！」
「そうですわ！」
「お、おう……そうか」
　顔を迫らせてきた二人に思わず一歩引いてしまった箒。コレが恋の力というのだろうか。
　そう言えば今日の一夏も夏野によく構っていたな、と考えればなんとなく辻褄は通る。通ったと同時に嫌なビジョンが箒の脳裏を駆け抜けた。いいや、そんな事は無い。鈴音やラウラならまだしも夏野に負けるなんて事は無い筈である。
「と、言う訳ですので謝罪に関してはまた今度にしていただけるかしら」
「わかった」
「代わりに今日は一夏と二人きりにするからっ！」
「――あ、ありがとう」
「わたくし達の利害は一致していますわ」
　三人の手が合わさり、目を合わせる。
「あの鈍感男達に気付かせてやりますわ！」

「うん！」
「お、おう」
燃えあがる二人にやや置き去り気味な箒がその場に居たが、頭の中ではすでに夏祭りデートをしている一夏と自身がいるのだから、比べるのもオカシイだろう。

「ねぇねぇ！　穂次！　綿菓子があるよ！」
「穂次さん穂次さん！　アチラにはりんご飴が！」
「あのさ、お二人さん。いつもの冷静で戦術的な君らはドコに行ったんだよ」
時間は進む。
見事に、というには随分と不恰好ではあったけれど、セシリアとシャルロットは作戦会議の通りに穂次と一緒に屋台を練り歩いていた。
作戦に不都合があったとするならば、思った以上に祭りの雰囲気に彼女らが呑まれてしまっていることだろうか。
ともあれ、二人にすればデートであるのだから浮かれるのも仕方がないのであろう。

もう一方が邪魔であるけれど、そもそも相手がデートとすら思っていない事も問題である。

綿菓子とりんご飴を購入した穂次はソレラを美味しく食べている二人を眺めてへらへらと笑みを浮かべる。文句は色々と出るであろうが穂次にしてみれば二人が笑っているのなら満足なのだろう。美少女の笑みとは金よりも価値があるのだ。

もふもふと綿菓子を唇で挟んでその甘みに顔を緩めるシャルロットとリンゴ飴の底部分の平たく出た飴を噛んで割り顔を綻ばせるセシリア。

その二人を見て、小さく溜め息を吐き出して口の中で「まあいいか」と零す穂次はいつのもようにヘラリとした笑みを浮かべた。

「ん？　どうしふぁの？」

「なんでもありゃぁしませんよ。綿菓子が美味しそうだなーって」

「ちょっと食べる？」

綿菓子を穂次の方へと傾けてみせたシャルロット。何気なくやった行為ではあったけれどシャルロットの心の中は熱でやられている。

片手をシャルロット、もう片手をセシリアに掴まれている穂次は少しだけ考えた後にシャルロットの顔色を窺う。ニコニコと笑っていた。どこか顔が赤い様な気がしたけ

れどきっと提灯の明かりだろう。
「んじゃ、ちょっとだけ」
もふり、と綿菓子に近付いて柔らかすぎる実を噛む。抵抗も何もなく千切られた果実を器用に口の中に収めて溶ける甘さを舌に広げる。
何か飲み物が欲しいなー、とか考えている阿呆は置いといてシャルロットはニコニコとしながらも心では羞恥心に苛まれている。それならば、そもそもするな、という話ではあるのだけれど、それはソレである。
シャルロットの視線に気付いた穂次は一拍間を置いて冷や汗を流す。
「え？　俺、何か悪い事した？」
「全然！　大丈夫だよ!!」
「あ、新しい綿菓子とか買ってこようか？」
「いいから！　何も問題なんてないから」
慌てた様に自身の行為を咎める穂次を鎮めてシャルロットは一息吐く。綿菓子の一部分を見つめて、ゴクリと喉を鳴らした。
「ほ、穂次さん。わたくしもリンゴ飴をあげますわ！」
「いや、気を使わなくてもいいんですよ、セシリアさん」
「……食べませんの？」

「ワー、スゲーリンゴ飴食いたいナー！」
　どこかしおらしくなったセシリアを見て穂次はリンゴ飴を迷わずに齧った。口の中に広がる飴の甘みと僅かに広がる果汁を舌に広げてから「その言い方は卑怯ですよ」という言葉と一緒に飲み込んだ。
　甘い、何か飲み物が欲しい。とか考えている阿呆は置いといてセシリアはリンゴ飴を見つめている。赤い飴にコーティングされた一部分にリンゴの白い果肉が見えている。
　深く息を吐き出して、意を決してから行動をしよう。
「しかし、二人ともはしゃいでるなー。夏祭りってスゲー効果ですね」
「そういう穂次は全然はしゃがないね」
「もしかして、楽しくありませんの？」
「いや、楽しくないなんて事はないッスよ。浴衣姿のお二人さんがキレイだし、はしゃいでる二人は可愛いし」
　相変わらずスラスラと褒める言葉が口から出て行く穂次は暗くなってきた空と提灯を視界にいれながら、「あー」と声を漏らす。
　そして徐々に顔を赤くしていき、言葉を口から出さない様に閉じ込めた。
「まあ、十二分に楽しんでるので、二人は気にしないでください、マジで」
「どうしてそんなに顔が赤いのかなぁ？」

「提灯だよ、提灯。あー、夏だから暑いなー！」
「夜も近いのですから、それほど暑くもないと思いますけれど？」
「フッ、熱い男である俺は常に燃えているんだぜ……!!」
「さすが穂次だね！」
「格好いいですわ！」
「やめてっ！　いつもみたいに流して!!　別の羞恥心が俺を襲うから！」
両手で顔を隠したくなった穂次であるが、残念なことにその両手は花に持たれているので顔は隠せない。
そんな顔を真っ赤にした穂次を見てシャルロットとセシリアはクスクスと笑みを浮かべる。恥ずかしければ言わなければいい、という訳にもいかないのだ。
決して二人の顔には合わせずに穂次は空を見上げた。さっさと顔の熱が冷める事だけは神様に祈ってやってもいい、なんて考えたけれど残念ながら叶うことはないのである。
「――ッ」
「わっと、っ？」
前のめりに転けそうになったセシリアに驚きながら、握られていた手を引いた穂次は何かに躓いたのだろうか、と足元へと視線を向けて眉を顰めた。

「あー、鼻緒が切れたのか」
「その様、ですわね」
「大丈夫？　セシリア」
「ええ」
「うーん。歩けそうにないッスね」
「大丈夫ですわ」
「無理でしょうが……浴衣で背負う訳にもいかないか。よいしょ」
「ひゃっ!?」
穂次は淡々とセシリアを横抱きにして人ごみの少ない方向へと歩き出す。ポカン、と呆気に取られたシャルロットはスグに意識を戻してソレを慌てて追う。

到着したのは喧騒から少し離れた広場であり、祭りの休憩の為かベンチが疎らに設置されている。
「はい到着」
「――――」
「セシリアさん？」
「ひゃ、ひゃい！」

「あー、抱き上げた事はゴメンナサイ。イイ匂いしたし軽かったですよ！」
「……そういう事は言わなくていいですわ」
「もう穂次、急に移動しないでよ」
「スイマセン。つーか、思ったよりも俺がはしゃいでたっぽくて、あー、うん、まあ、ハイ」
何かを言葉に出そうとした穂次は結局何も言わずに溜め息を吐き出した。
ソレに対して疑問を頭に浮かべたセシリアとシャルロットは顔を見合わせて首を傾げる。
「とりあえず、お二人は座って休んでて」
「え？　私は大丈夫だよ？」
「俺が歩くのシンドイから休みたいんだよ」
よっこいしょ、とベンチの横に座った穂次。ベンチに座っていたセシリアの横に顔をキョトンとさせて座ったシャルロット。
穂次はポケットの中からハンカチを取り出して引き千切る。ビリビリと布の破れる音が響き、セシリアが顔を驚かせる。
「何をしてますの？」
「鼻緒の修理ですよー」

壊れたセシリアの下駄を手元で弄りながら答えた穂次は破いたハンカチを鼻緒部分に通して長さを調整する。
手である程度の長さを決めてから結び、セシリアの足元に直した下駄を置く。
「ほい、応急処置だけど」
「あ、ありがとうございます……」
「すごいね穂次。こんな事出来るんだ」
「……あー、まあ、知り合いに教えてもらったんだよ」
言い出しにくそうにそう漏らした穂次は立ち上がり、ズボンに着いた土を軽く払い落とす。
「んじゃ、ここで待っててくれ。お兄さんはお腹が空いたのです」
「じゃあ、私も」
「シャルロットさんはセシリアさんと一緒に居ていいッスよ。歩くのも痛いだろうし」
シャルロットが立ち上がる前に断りを入れた穂次。その穂次の言葉にシャルロットは立ち上がるのを諦める。
穂次がテクテクと喧騒へと向かっていく姿を眺めながらシャルロットとセシリアは溜め息を吐き出した。
「どうしてバレたんだろ」

「申し訳ありませんわ。わたくしがあそこで転けなければ」
「いや、セシリアは悪くないよ。アイテテテ」
下駄を外したシャルロットは眉を寄せて痛みを顕わにする。下駄で歩き慣れてない二人は少しだけ自由になった足を労わりつつ息を吐き出す。
「でも穂次ってスゴイね。あんなに簡単そうに直しちゃうなんて」
「そうですわね。ハンカチも一つダメにしてしまいましたし」
「……お姫様だっこは羨ましいなー」
「公衆の面前でしたので、嬉しさよりも恥ずかしさの方が強いですわ」
「でも嬉しかったんでしょ？」
「……――ちょっとだけ」
「いいなぁ」
「ソレを言いますと、臨海学校の時に穂次さんに守られたシャルロットさんも羨ましいですわ」
「あれは、ほら、えへへ」
お互いに照れる様に顔をほんのりと赤くしてによによと笑みを浮かべる。幸い今は件の男がいないのだ。
お互いの惚気話に花を咲かせて数分。ようやく戻ってきた穂次はヘラヘラとした笑

みを浮かべる。
　両手にもった袋の中には焼きソバだったり、たこ焼きだったりと、不味い筈なのにどうしてか美味しい屋台特有の料理が入っている。
「おかえり穂次」
「おまたせ。んで、はい」
「えっ、冷たっ！」
「何ですの!?」
「氷嚢。ってもビニール袋に氷と水を入れただけだけど」
「ありがとうございます」
「というより、よく鼻緒のところが痛いってわかったね」
「歩き方が変だったしなー。まあ気付くの遅れて申し訳ないです。この罪は腹を掻っ捌いて罰をぉぉ……」
「そこまでしなくてもよろしいですわ！」
「そうだよ！」
「お、そうだな」
　アッサリと演技するのを止めた穂次はケロリとしてベンチの横へと座った。
「そんな所に座らないで、コッチに座ればいいじゃないか」

「そうですわ」
「俺にはこの位置にいる理由があるのだよ、お二人さん」
「どういう理由ですの？」
「この位置、実はお二人さんのお尻に視線を寄せやすいのですよッ!!」
「……聞いたわたくしが馬鹿でしたわ」
「穂次にマトモな理由があるとちょっとでも思った私も馬鹿だった」
「理由的にはマトモなんだよなぁ……。実際重要」
うんうん、と神妙に頷く穂次に対して溜め息を吐き出した二人はジト目で穂次を睨んでやる。
当然、睨みはご褒美と言わんばかりの穂次の言葉に再度二人は溜め息を吐き出した。
「それにしても、箒の神楽舞は凄かったね」
「いつもの箒さんとは思えない雰囲気でしたわね」
「本人の居ない所で褒めても何もないと思うんですが」
「そういう穂次は本人がいないから褒めないの？」
「上辺だけみたいに言わないでほしいけど……まー、しいて言うなら扇じゃなくて小太刀とかだったらよかったなー、とか」
「？　どういう事ですの？」

「え？　アレって二刀の舞だっただろ？　足運びもそんな感じだったし」
「……穂次って武道とか門外漢だと思ってたけど」
「門外漢だぞ。ただ見てると違和感とかがあってだな」
「それって凄い事じゃありませんの？」
「……あー、今の無し。忘れて」
「穂次さん？」
「実は知ってただけだよ。知り合いがそういうの詳しいんだ」
「それは無理があるんじゃないかなぁ」
「格好つけようとしてマズイ方向に進んだんだ。察してくださいお願いします」
　両手を上げて降参のポーズを取る穂次にシャルロットはジト目で睨んだ。嘘である、というのは非常に分かりやすい事であったが、ソレを追求しようと口を開こうとすれば、口笛の様な気の抜けた音が響き、一拍置き、盛大に空に華が開いた。
　空に咲いた華は花弁を闇夜に散らしていく。
　視線を奪われ、口を少しだけ開けて空を見上げているセシリアとシャルロットを横目で確認した穂次は安心したように息を吐き出して同じく空を見上げる。
　華はもう一度咲き誇る。

紅茶淹れのタツジン

俺は高鳴る動悸を押さえ込んで、深呼吸をする。目の前に建つ一軒家をしっかりと見据え、インターホンを押した。

数秒程して扉が開き、扉を開いた存在は俺の顔を確認した。流れる汗を拭うこともせずに、なるべく笑顔を浮かべて、少しの恥じらいを見せながら俺は口を開いた。

「来ちゃった☆」

バタン、と織斑家の扉は閉じられた。

俺はめげずにインターホンをもう一度押した。するとスゲー嫌そうな顔をした一夏が扉を開く。

「おいおい、閉じるなよー」

「いや、今のは誰でも閉じるだろ……」

「えへへ、来ちゃった☆」

「……」

「待て待て待て！　閉じるな！　俺が悪かった！　暑いから入れてくれ」

「……はぁ、入れよ」

しっかりと溜め息を吐き出した一夏が苦笑を浮かべて、大きく扉を開いた。ココは織斑家。そう、人外魔境である。

「お前さ、今変なこと考えただろ」

「ひっ……やっぱり吹き出しが出てるんですかね……」

やっぱり一夏はサトリ妖怪か何かなのだろうか。いいや、それだと普段の唐変木な振る舞いが嘘になってしまう……。

いや、俺の考えが透けて見えるだけなのだろう。たぶん。

「というか、なんで息切れしてるんだよ」

「いやぁ、恋してる気持ちとか分からないからとりあえず心臓を高鳴らせる為に走ってみた」

「馬鹿だろ、お前」

「ああ！」

「肯定されても困るな」

「あ、コレはツマラナイモノですが」

「あ、どうも」

「駅近くで評判だったケーキと織斑先生にお酒な。ちなみにお前の好みは分からなかったから全種類を買ってきた」

「……は？」
「全種類だッ！」
「……穂次ってやっぱり馬鹿だったんだな」
「まあ、全種類買ってきたのにはちゃんと意味があるんだぜ、相棒」
「一応、聞いとく。なんでだ？」
「ククク、俺は貴様に復讐をする為に今日ココに来たのだっ!!」
「……」
「スッゲー冷たい目をされてるんですが……だが、今日の俺は一味も二味も違う!!　そう！　買ってきた三層のプリンの様に！」
「美味そうだな」
「ククク、織斑一夏！　俺は夏祭りに行く時に心の準備もなく美少女に囲まれるというちょっと嬉しいハプニングがあった！　その仕返しをしてやる!!」
「……ああ、皆来るのか」
「ああ！」
「というか、ソレって今言うと意味無くないか？」
「……」

「……」

「おのれェ！　謀ったな！　一夏！」

「何もしてねぇよ」

「まあ冗談はココまでにして、一応冷蔵庫に入れといてください。いつ来るかわかんねーし」

「そうだな……というか、お前、走ってきたんだよな」

「フッ、恋心が知りたくてな」

「いや、ソレはどうでもいいんだけど。ケーキは無事なのか？」

「安心したまえ、織斑一夏。この夏野穂次、細心の注意を払い、ケーキの箱は揺らさずにダッシュをした。箱を開けてみればわかるだろう」

「……マジでズレてもないな」

「どうだ、スゴイだろー」

「おう。確かに三層のプリンが美味そうだな」

「あのさ、一夏。せめて話のキャッチボールはしようぜ」

穂次、悲しい。

シクシクと泣いている振りをしていれば冷蔵庫にケーキを入れたであろう一夏がグ

ラスを持ってきた。
　中には麦茶が注がれ、氷がグラスを鳴らす。
「麦茶でいいよな？」
「ありがとう。つーか、お前って熱いお茶派じゃなかったっけ？」
「そうだけど。他人に押し付けるような事でもないだろ」
「そりゃぁそうか」
　グラスを持ち上げて、茶色の液体を飲み込む。冷たい液体が喉を潤し、冷たすぎたのか少しばかりの頭痛がした。美味しい。
「あー、美味い」
「走ってきたからだろ」
「恋心はさっぱり分からなかったけどな」
「それで分かると思ってるお前はやっぱり馬鹿なんだな」
「ふっ、天才にしか理解出来ない方法、と言ってくれたまえ」
「はいはい。じゃあ束さんに聞いとくから」
「本物を出されると困るんですがソレは……」
　テキトーな会話をしながらお茶を啜る。幸い、と言うべきか、俺の到着は早かったようで他の五人が来るにはまだ時間があるようだ。

俺と一夏、二人だけの時間はまだ続くんだなって。まるでホモみたいな感情になってしまった。決して俺はホモではないのである。俺は善良に女の子が好きなのだ。おっぱいが好きなのだ。

ああ、おっぱい、素晴らしい。

「……あ」

「どうした？　穂次」

「織斑先生の部屋ってドコだ？」

「……入ると殺されるぞ」

「安心しろ……俺だって命は惜しい」

「そうだよな……」

「布団に入って深呼吸するぐらいはバレないだろ」

「いや、バレる。穂次は千冬姉のことをまだ侮ってる」

「なんだよ、あの人。鬼か何かなのか？」

「戦乙女（ブリュンヒルデ）だよ」

「ハッハッハッ、乙女って歳でも」

チャイムが鳴る。

俺と一夏は咄嗟に身構え、逃げる体勢へと移り、扉を注視する。いや、そんなありえ

ない。あの人は今仕事中で、ＩＳ学園にいる筈だ。

一夏に視線を合わせ、力を抜く。ハハハ、ありえる訳が無いじゃないか。

「この話はココまでだ、一夏」

「ああ……。というか、なんで俺まで身構えたんだろ」

「連帯責任だよ、相棒」

へらりと笑ってみれば一夏は肩を落として溜め息を吐き出した。

そのまま疲れた様子を見せながら玄関へと向かった一夏を見送り、俺はのんびりお茶を啜る。美味しい。

扉を開く音が聞こえ、女の子達の声が聞こえる。目を閉じて、足音を感じていれば扉の開く音がし、瞼を上げる。

「アンタ、早いわねー」

「一夏の家って聞くとドキドキしちゃって、早く起きちゃった☆」

「キモいわよ」

「ああ、このツッコミが久しぶりに感じる……ハッ！　コレが恋か！」

「はいはい」

「穂次さん？」

「ひえっ……どーしてセシリアさんはそんなに俺を睨んでるんですかね？」

「自身の胸に聞いてみればよろしいのでは？」
「……うーん、いや、アレはバレていない筈だし、それともアレか……いや、もしかして」
「どれだけヤマシイ事があるんだ、コイツは」
「いいかい、ボーデヴィッヒさん。生きている限り、人は隠し事をするのだよ」
「ラウラで構わない。なるほど……いい言葉だな」
「ラウラ、穂次の言葉を真に受けない方がいいよ？」
「そうなのか？」
「シャルロットさん、言い方が酷くないですかね……」
「夏野だから仕方ないだろう」
「篠ノ之さんも酷いッスよ！」
「む……そうか」
「いや、そこで引かれても落ち着かないんですが……」
もう一度、「……そうか」と呟いた篠ノ之さんを疑問に感じて、何かしたかと考える。
少なくとも彼女との接触はあまりなかったと思うし、夏祭りの事を思い出しても、テキトーに煽っただけで屋台周りも別行動だったし……。
それにしては随分と変である。煽りの内容を思い出しても、いつもとそれほど変わらない。差し障りない、とは言えないけれど。

「……あー、この時間だし、全員昼食って食べてないよな？　人数多いし蕎麦でもするか。穂次、手伝ってくれ」
「ん、あいよ」
「わ、わたくしも手伝いますわ！」
「セシリアさんは座っててください！　お願いします!!」
「……そこまで強く言われるとは思いませんでしたわ」
「悪気はないけど、他意もない。ま、まあ女の子達はついさっき着いたんだし、な、一夏」
「お、おう、そうだな」
「……そうですか。ではお言葉に甘えて」
セシリアさんが座ったのを確認して思わず息を吐き出してしまう。同じように安堵の息を吐き出した鈴音さんはコチラを向いて頷いた。セシリアさんを台所に立たせてはいけない……。備えよう。

◆◆

「と、言うか。アンタはどうしてこんなにケーキを買ってきてるのよ」

「そう言ってる割には顔がニコニコしてますよ、鈴音さん」
「パーフェクトよ、穂次」
「感謝の極み」
何も問題は無く蕎麦も食べ終わり、食後のデザートと言わんばかりに穂次はケーキの箱を開けてみせる。
ケーキの群を見て頬を緩める女子諸君。銀髪の少女だけは相変わらず表情は薄かったけれど。
「お前ら仲いいよな」
「まあ俺は鈴音さんの事好きだし」
「な、なんですって!?」
「ど、どういう事かな穂次!?」
「え？　俺って今変なこと言ったのか？」
「いや別に普通だったと思うけど」
迫ってきたシャルロットとセシリアから視線を外した穂次は一夏に助けを求めてみた。残念極まりないが、一夏にはさっぱり理解出来ない無い様である。相手が悪い。
穂次はスグに助けを求めるのを諦めて鈴音へと視線を向ける。その視線を受けた鈴音は溜め息を吐き出してしまう。

「穂次、コッチを向くとややこしくなるんだからちょっとは自重しなさいよ……」
「鈴音さん！　どういう事か説明してくださるかしら!?」
「別に、普通のことでしょう？　友人として！　ゆ、う、じ、ん、として好きってだけでしょ」
「いや、つーかソレ以外に鈴音さんを好きになれる要素がないんですが……」
「アンタ、今ドコを見て言ったか言ってみなさい」
「言うと殴られるから言わないッス」
「そ、そういう事でしたのね……オホホホホ」
「セシリアさんが変な笑いをしてるんですが……」
「今は放っておきなさい」
　はぁ、と要領を得ない様に声を漏らした穂次はお茶を啜りながらケーキをボンヤリと眺める。
　その後にセシリアを視界に収めて、パチクリ、と瞬を動かした。
「……あ。紅茶淹れないと」
「茶ならあるだろう、穂次」
「フッ、甘いな、ラウラさん。ケーキには紅茶で、紅茶を淹れるなら俺に任せてくれ！　なんせ俺は紅茶淹れのタツジンだからなッ！」

「……セシリア。アンタ、アレに何かしたの？」
「ど、どうシてわたくしでスの？」
「変に声が裏返ってるわよ」
「セシリア、何かしたのかなー？」
「しゃ、シャルロットさん。笑顔が、笑顔が怖いですわ！」
セシリアはシャルロットから目を逸らし、ちょうど視線の先に居てしまった一夏に向く。
一夏もその視線に気付いた様で持っていた湯呑みを机の上に静かに置いた。
「穂次！　俺も手伝うぜ！」
一夏は逃げ出した。それはきっと正しい選択だったに違いない。少なくとも、誰も咎めはしないだろう。
「酷いなー。でも抜け駆けはもっと酷いなー」
「ぬ、抜け駆けじゃありませんわ。そ、そう！　交友を深める為のお茶会であって」
「ふーん……いいなぁー」
「そ、それを言いますと穂次さんと一緒に寝泊りしてたシャルロットさんに言われたくありませんわ！」
「スゴイ惚気合戦ね」

「私たちも嫁の話をしている時は大概じゃないのか？」
「ラウラ、ソレは言わない約束だ」
「ん？　そんな約束はした覚えがないが……」
「じゃあ今からの約束よ」
「そうか。むぅ……わかった」

「スゲー向こうが姦しいんですが……一夏が逃げ出すのも理解出来るな」
決して話の内容を頭の中に入れない様にしてた穂次がお湯を沸かしながら言葉を漏らした。やいのやいの、と内容自体は聞こえないけれど騒がしいのは伝わるのである。
隣にいる一夏は可哀想なモノを見るように穂次を見て溜め息を吐き出した。お前も一緒なんだぞ、とココに他の人物が居たならば言った事だろう。
「それにしても、お前って箒のことが苦手なのか？」
「俺が篠ノ之さんの事を？　なんでだよ」
「ほら、他の皆は名前で呼んでるし」
「コレでもちゃんと名前を許されてから呼んでる訳で。許されなけりゃ呼べねーだろ」

「変に律儀だよな、穂次って」
「普通だろ。つーか、俺からよりも篠ノ之さんが俺に苦手意識持ってるんじゃねーの？」
「……そうなのか？」
「なんつーか、変に距離を感じるからなぁ……やっぱりおっぱい触らせてとか言うのが悪いのだろうか……」
「いや、ソレは悪いだろ」
「くっ……じゃあお尻にするしかないか」
「余計に悪くなった気がするぞ……」
　冗談の様に言っているが、一夏は箒が変に穂次を意識している事は分かっている。何か理由がある、という訳ではないけれどなんとなく、そんな感じがするというだけなのだが。それでも一夏は確信を持って言える程度には分かっていた。
　遠慮もなく、ベシンベシンと穂次を叩いていた箒が穂次をまったく叩かなくなったのだ。……いや、こうして見ればいい方向に転がっているのだが……。
「何かしたとかないのか？」
「普段してるような事以外はさっぱり」
「……その普段してる事が問題なんだな」
「いや、ソレだったら前からだろ……なんか臨海学校終わった時辺りから変になったん

だけど」
「臨海学校か……」
「あ！」
「わかったのか？」
「篠ノ之さんの水着みるの忘れてた……」
「お前な……」
「でも臨海学校での接点ってあんまり無いぞ？　まさか臨海学校であんまり構わなかったからか？」
「それは違うと思うぞ」
「んー……じゃあマジで思いつかん」
「……そうか。まあお前が箒のことを嫌いとかじゃなくてよかったよ」
「むしろ好きな部類なんだよなぁ」
「今ならお前の考えてることを一言一句間違わずに言えそうだよ、相棒」
　ヘラリと笑った穂次を見た一夏は疲れたように溜め息を吐き出してカップを用意し始めた。

「なんだ騒がしいと思ったらお前たちか」
「ヒッ……」
　騒がしくも楽しい時間を過ごして数時間。バルバロッサという色粘土で何かの形を造り、その何かを当てるというボードゲームを興じていた七人は開かれた扉を見て、私服姿の織斑千冬に暫し見惚れる。一名だけ怯えたように声を出していたが。
　その怯えた声をした人物を睨んだ千冬が口を開く。
「……怯えるという事は、何かを仕出かしたんだな、夏野」
「いえ、そんな、滅相もありません！　お、織斑先生。きょ、今日もお美しいです！」
「……まあいい」
「そういえば穂次がお酒買ってきたって」
「ふむ……ソコの紙袋か」
「織斑先生に合うモノを買ってきましたよ！」
「……ほう、コレが、か」
　紙袋から取り出したる瓶。
　そのラベルにはイヤに達筆で二文字。『魔王』と描かれている。
　肩を揺らす六人。噴出さなかった事は不幸中の幸いであろう。

買ってきた本人は冷や汗をダラダラと流している。決して他意はなかったのだ。本当に焼酎もいける口である事は夜の鍛錬で知っていた。だから少しばかり値の張るモノを買ってみた、それだけなのだ。

まさかこんな言い回しになるなんて、穂次は予想してなかったのだ。

「お前がどう思ってるか、よくわかったよ、夏野」

「ヒッ、魔王様！　ち、違うのです！」

「ぶはっ」

「ひっ……ふふ」

「お腹痛いッ」

「ッ、……ッ」

「息ッ、息出来ないッ」

絶対零度の睨みと口をスラスラと滑らせる穂次。その後ろには笑いを必死で堪える六人。いいや、堪えているとは最早言いがたい状態なのであるが、ソレはいいだろう。

あれよあれよと墓穴を掘りまくる穂次とソレを淡々と聞いている魔王様。そして外野はその状況に腹筋を引き攣らせている。

「まあいい。ああ、一夏。私は今日は帰らないから好きにしても構わない。ただし、女子

は泊まるんじゃないぞ」
「わ、わかったッ」
「あと、夏野。ノってやったのだから他にも何か買ってくるように」
「了解ですッ！」
「……ただし、次は無いからな」
「ハイッ！」
バタン、と扉が閉じられようやく全員が深呼吸をして呼吸を整える。ヒーヒー、と鳴らしていた呼吸をどうにか戻し、笑いにより溜まった涙を指で拭う。
「穂次、不意打ちはやめてくれ」
「悪気は無い。つーか、俺も織斑先生がノってくれるとは思わなかった。反省はしてる」
「というか、アンタどうやってお酒なんて買えたのよ……」
「贈与の為、って事で頼んだら包んでくれたゾ☆」
ヘラヘラと笑って答える穂次に溜め息を吐き出した一同。そしてまた先ほどの場面を思い出し、もう一度笑いを堪えるのである。

「んじゃ、おじゃましましたー」
「おう。また学校で」
「そうだね」
夕食も食べ終わり少ししして、日も落ちて街灯が街を照らす時間になり六人は織斑邸を後にする。
ノンビリと歩きながら適当な雑談に花を咲かせる。なんてこともない、いつもの会話だ。
「それにしても、夏野。大丈夫か？」
「何がッスか？」
「いや……まあ、ホラ」
「……あぁ！　大丈夫ッスよ。お腹が痛いよりも何か変な汗が出てきた辺りで死ぬ覚悟が出来たから」
「穂次さん、大丈夫ですの？」
「ダイジョウブ、ダイジョウブ」
穂次には言えなかった。その大元の原因はアナタなのですよ、セシリアさん。という言葉は決して言えなかった。

ともあれ、彼の胃袋は彼女の料理の腕が上がる前より早く耐性をつけた様である程度の料理は問題なく胃袋に押し込めることが出来る様になった。ソレが悲しい事なのか、喜ばしいことなのかは彼にしか分からないが……。

「穂次も頑張るわね」

「俺はいつだって頑張ってますよ。鈴音さんの胸部と一緒にしないでください」

「あ〟？」

「スイマセン、冗談デス。許してください」

「デザートを何日かで許してあげるわ」

「やったぜ。つまり何日か後でもう一回言えるって訳ですね！」

「何日を永遠にしてあげてもいいわよ？」

「ヤクザの所業じゃないですかヤダー」

ヒッ、と怯えたように声を出した穂次の顔は相変わらずヘラヘラと笑っている。

その穂次の足が突然停止する。

全員がソレに気付かずに一歩だけ進み、穂次の異変に気付いたのか後ろを振り向いた。

「穂次？」

「穂次さん？」

首を傾げてセシリアとシャルロットが声を掛けると穂次は何かを口篭り、「あー……」と言い迷いながらも声を出し、結局言葉が思いつかなかったのか、指で頭を掻いて溜め息を漏らした。

その視線は前を向いていて、ソコには黒塗りの車が何台停まっている。そこから現れた黒スーツにサングラスまでしっかりと着用した存在達は六人を囲む。

鋭い目付きでソレらを見渡したラウラが舌打ちをする。

「セカンドだな。我々に着いてきてもらおうか」

「……夏野穂次はＩＳ学園が身柄を預かっている筈だが？」

「そんな事を我らが知らないと思っているのか？」

「……チッ」

「抵抗は無意味だ。セカンドをコチラに渡してもらおう」

「あー、まあまあ。ラウラさん落ち着いて。この人たち政府関係の人だから」

「……何？」

「んで、このタイミングで来たって事は学園側からの了承は？」

「セカンド、お前には嫌疑がかかっている。抵抗した後に連れて行かれるか、抵抗せずに連れて行かれるか。選べ」

「あたし達が抵抗してココから逃げるって選択肢もあるんじゃない？」

「あー、鈴音さん。ソレは色々問題になるから……ちなみに嫌疑にはまったく身に覚えがねーんですが？」
「それはコチラが判断することだ」
「そうッスか……」
　穂次は溜め息を吐き出して空を見上げて瞼を閉じる。舌打ちを一つだけして、瞼を上げる。どうにも心配そうな顔をしているセシリアとシャルロットを見てヘラリとした笑みを浮かべた。
「大丈夫だよ。身の潔癖を証明すればソレで終わりさ」
「安心しろ。吐きたくなる様にしてやる」
「わーい、嬉しくねーな」
「ちょ、ちょっと待って下さいまし！　正式な手順を踏んでないのでしょう？」
「……セシリアさん、だからマズイんですよ」
「は？」
「スゲーッスよね。ココに居る人達がカモフラージュで遠距離に狙撃手がいるとか。俺を捕まえるのにどれだけの人使ってるんですかねー」
「まだ足りない、と思っているが？」
「そりゃまた過大評価な事で……まあそんな感じ。だから抵抗は無駄って事」

「そんなっ」
「まあ俺が連れてかれるだけですしー、なるようになるでしょ」
「セカンド」
「はいはい！　行きます、行きます。んじゃ、ミナサンココでオワカレって事で」
「また学校で会えるんでしょ？」
「……んー、どうだろ？　まあサヨナラにならないようには頑張ってみるさ」
「穂次さん！」
穂次はヘラリと笑って黒塗りの車の中へと入り込んだ。
セシリアの伸ばした手は無情にも空を掴み、車は走り去る。

責任は空中分解させよう

「――ッ、……ッ」

熱を持つ指を視界に入れて顔を歪める。縛られていなければ俺はソコらでのた打ち回っていた事だろう。

青黒く変色し、赤に染まった手を視界から外し、俺は目の前を睨む。ソコには何も無い。無機質な空間が広がり、真っ黒なガラスだけが正面にあるだけだ。

『さて、いい加減に吐いてもらうか』

「ッから！　何の事なんだよッ！」

少しのノイズに含まれた声に反応する。これも何度も繰り返した行為であり、そして同じ数だけの痛みが俺を襲っている。

『君が接触したであろう、女の話だよ』

「ハッ……！　沢山居すぎて、わかんねーですよ！」

『身に覚えがないと？』

「だからっ、何度も、言ってんだろッ」

『……そうか。まだ吐かない様だな。残念だよ』

椅子から伝わる僅かな振動と拘束された手の一部分、指先の部分が持ち上がる。既に何度も体験している事であり、俺を息を飲みこんで歯を食いしばる。

ゴキュリ、と何かが外れる音とミチミチと何かが引き千切れる感触が俺の脳を突き刺す。

薬指の爪が手の甲に当たる。押し付けられている訳ではない。外れかけて、だらしなく垂れ下がっている爪が触れているだけだ。

『さて、どうすれば君は情報を吐いてくれるのだろうか?』

「知らないモノは、知れるかよっ」

『いいや、君は察している筈だ。君の資料を見させてもらったが、実に素晴らしい。非才の身であり、何も持たず、ＩＳを動かせ、難も無くその立ち位置に立てた。非常に、素晴らしい。

友人をお金で売っている、という事も含めてね』

何がおかしいのか、ノイズ混ざりの声がクスクスと笑いだした。俺は眉間に皺を寄せて、ガラス窓を睨んでみせる。

『苦痛による平伏はしない。友人を裏切る事も出来る。親族に関しても、アナタの発言を見た限り脅迫の材料には成り得ない。

さて、アナタはどれだけ積めば私たちに忠誠を誓ってくれるのかしら？」

◆◆

夏野穂次が政府に攫われた、という情報があの場にいなかった一夏の耳に入ったのは翌日の朝。寮の自室に一夏自身が戻ってきた時である。

唖然とした一夏だったが、政府所属であると公言していた穂次が『政府に連れ去られる』という事に関してはそれほどの何かを感じる事はなかった。

けれど、話を詳しく聞いている内にその認識が大きく覆されていく。

「……それって、ヤバくないか？」

「だから何度もそう言ってるではありませんかっ！」

「ちゃんと聞いてたの!?」

「お、おう。スマン」

金髪二人組の迫力に思わず身を引いてしまった一夏を責める人間など居ない。そもそも一夏にとってセシリアとシャルロットの二人は基本的に冷静な人物なのだ。

それこそ激情家と言える篠ノ之箒など比べ物にならない程、という認識である。その二人が慌てた様子で脈絡もなく、ただただ『穂次が危険』という情報を一夏に叩きつけてきたのだから、一夏の把握が遅かった、という訳ではない。

問題は既に穂次が連れ去られてから一日が経過している、という事だ。一日、という時間の中で穂次が何かしらの連絡を彼女らと取っていたならば状況は変わっていたかもしれない。

けれど穂次からの連絡はない。もっと言えば、穂次に送った連絡もさっぱり応答が無い。常時であるならば、あの女好きと公言している穂次がセシリアとシャルロットの連絡に応えない筈もなく。逆転して、連絡が出来ない状態である事を示し、状況を鑑みれば十二分に穂次が危険であると結論付ける事は出来た。

当然、彼女らもただ青褪めて一日を過ごしていた訳ではない。ソレを証明するように一夏の部屋に入ってきたラウラ。

「ラウラさん！　どうでしたの!?」

「……隊を使い穂次の形跡を追ったが、手詰まりだ」

「そんな……」

「何か情報はあったのか？」

「ああ。穂次を攫ったのは政府である事は確かだ。尤も、その政府は公式にアイツの事

を発表していないが……」
「どうして、政府が……」
「ソレは分からん……が、何にしろ、穂次の行方がわからないともなれば学園も動く筈だ」
　ラウラの一言にセシリアとシャルロットの顔が余計に青褪める。昨晩からまるで恐怖を煽るように脳に囁きかける「吐きたくなる様にしてやる」という言葉が大きくなる。
　穂次が冗談の様に言っていた「監禁」などの言葉がもしも冗談でなければ。ゾクリと二人の背筋が凍り、穂次がいつもの様にへらりと笑って言った言葉がこだまする。
「千冬さんに聞いてみましょ」
　青褪める二人を横目で見た鈴音がそう発言する。とにかく安心させる為であり、自分達の手では負えない可能性が出てきたからだ。
　そもそもラウラの隊（黒ウサギ隊）を使用する事も問題なのだ。尤も、黒ウサギ隊の皆様は『隊長の頼みとか聞くしかないだろｊｋ』とやる気に満ちてはいたのだが。

「夏野が？」

ラウラと一夏の表情だけで他の教員も居らず、監視の目も無い指導室へと各自を誘導した千冬は事のあらましを聞き「ふむ」と一考する様に顎を撫でる様に手で口を隠した。

「この件に関して、お前らが動く事を禁じる」

「なっ!?」

「ど、どうしてですか!?」

千冬の一言に噛み付いたのはセシリアとシャルロットだった。その二人を見て千冬は目を細めて、スグにソレを睨みへと変化させた。

「夏野穂次はＩＳのメンテナンスの為に研究施設へと身柄を移している」

「――っ」

「と、コレが表向きの言い訳だ。実際はその嫌疑とやらを追求する為に尋問でも受けているのだろうがな」

「なら、助けに向かうべきですわ！」

「……お前らは戦争がしたいのか？」

「――ッ」

「歯痒いだろうが、納得しろ」

「千冬姉」

「……なんだ？」
「穂次が攫われた事って問題にはならないのか？」
「そ、そうですよ！」
「残念ながら、アレに関しては問題にならない」
「どうしてなのですか!?」
「そう突っかかるな、オルコット。大人というのは汚い物でな。責任を誰に被せるか、という点で常に空中分解しているんだよ」
「それってどういう事ですか？」
「問題を公には出来ない、という事だ。今回の様にアイツが攫われたとしても、大手を振って学園側は動けない」
「――ッ！　それでも政府は」
「ああ、確かに政府が法外な方法でアイツを攫った。が、アチラは責任を逃れる為に言い訳を作った。まるで言葉遊びの様だが、そういう事だ。納得しろ」
　冷たく切り捨てる様に説明した千冬。
　つまり学園側も責任を逃れたいのだ。預かっていた穂次を攫われた事に関して。政府はソレに対して「夏野穂次はメンテナンスの為に預かっている」と学園側に事後ではあるが通達をしたのだ。

だからこそ、学園側の身動きは封じられた。ココで学園が動いてしまえば関係にヒビが入ってしまう。関係が悪化してしまえば問題は余計に多くなる。

「納得なんて、出来る訳がありませ――」

「――わかりました」

「箒？」

「そうか。ようやく分かってくれたか。私もコレで安心して仕事が出来るな」

セシリアの言葉を遮り、千冬に対して応えた箒はただ真っ直ぐに千冬を見ていた。その瞳を見て千冬は息を吐くように笑い席を立った。

「ああ。一応言っておくが、治療の準備はしておいてやろう」

「ありがとうございます」

「礼には及ばん。――大人の責務だ」

まるで皮肉の様にそう零した千冬が指導室を出た。扉が完全に閉められたのを各自が視認して、視線は箒へと向く。

「箒さん、どういう事か説明してくださるかしら？」

「まさか穂次の事が嫌いだから」

「どうしてそうなる。幾ら私と夏野の関係が悪くても、私は友人を捨てる様な人間ではない」

「そ、そうだよね……ごめん」
「それで、箒。説明してくれ」
「ふん。簡単な事だ。コチラも法外な方法でアイツを助ければよかろう」
「……ちょっと待った。アタシの聞き間違いかしら？　ごり押しって聞こえるんだけど？」
「ある意味ではごり押しだな」
　ふんっ、と胸を張った箒をニヤリと笑い、そして手段を思い出して疲れた様に落ち込む。
　一夏だけはその様子を見て気付いた様に顔を明るくして、そして同時に箒に同情の視線を送っている。
「嫁。どういう事だ？」
「箒はジョーカーを握ってるんだよ」
「ジョーカー？」
「ああ……。法外な手段を取れて、尚且つドコにも所属していない存在。……あの人なら夏野がドコにいるかも知っているだろうし、私が頼めば助ける為の手助けもしてくれる……と思う。たぶん」
　随分と自信が無いのか、語尾にしっかりと付け足したソレで肩を落とした箒。ソレに

対して一夏は「あー……」と声を出し箒の肩に手を置いた。
「もしかして……」
「先に言っておくが、あまり期待をするな。その……知ってると思うが、あの人は……えっと、つまりだな、その……」
「無理に言わなくてもよろしくてよ……？」
「すまん……本当に、スマン」
どうしても言葉が出なかった箒に対して全員が哀れみの視線を送った。この世界は実に優しいのだ。
一度の溜め息と深呼吸を二回した箒は指導室を出て携帯を耳に当てる。
『ハロー！　どうしたのかな箒ちゃん！』
1コールもしない内に取られた通話。耳に聞こえる声とテンションで掛けたにも関わらず箒は通話を切りそうになった。
電話越しでも分かる程度に大きく溜め息を吐き出した箒は意を決して口を開く。
「助けてください」
『おっけー！』
「……内容は聞かないんですか？」
『やだなー、箒ちゃん！　私が箒ちゃんの考えていることが分からないと思うの？』

是非とも分からないでいてほしい。そう切実に箒は願った。願ってみたいけれど、電話相手はソレをきっと無視することも知っている。

『今回私が出来る事は本当に手助けぐらいなんだけどねー。いやー残念極まりない』

「それで十分です」

『えへへ、ありがとうって言われたよー！　嬉しいなっ！』

「……」

言ってない、とは言えない箒は少しだけ言葉を詰まらせて、息を吐き出した。

『彼の居るところを教えてあげよう。ついでにアポイントメントもね』

「あ、ありがとうございます」

『うんうん。素直な箒ちゃんも大好きだよ。あ、一応言っておくけど、いっくんと箒ちゃんの分は取ってあげるけど、その他は知らないよ』

「……わかりました」

『うんうん。箒ちゃんの頼み事だしねっ！　私は出来る範囲で助けてあげるよ！　だって私は箒ちゃんのお姉ちゃ――』

箒は通話の途中で切った。決して何の躊躇も無い行動であった。切ってから数瞬して「しまった」と後悔できるぐらいに無意識の行動であった。

少ししてから紅椿に通信が入り、位置情報とその場所にある企業に関する情報が送ら

れてきた。

ソレをさらりと確認した等は小さく感謝の気持ちを呟いてから、指導室への扉に手を掛けた。

肯定する武器

「お待ちしておりました、篠ノ之箒、織斑一夏」

ＩＳ学園の校門で控えていたのは一人の女と車であった。髪を纏め上げた女の顔は真剣な表情で塗り固められ、元々なのか随分と目付きが鋭い、というのが一夏と箒の第一印象であった。同時にそれは少しばかりの疑念を含んだモノにもなる。

女はソレを察してか、息を一つ吐き出して口を開く。

「私は織斑千冬に頼まれてあなた方を送りに来ただけです」

「千冬姉が……？」

「ええ。セカンド――いえ、夏野穂次を救出に行くのでしょう？　そのフォロー……という程ではありませんが、手助けを頼まれたので」

箒と一夏が顔を合わせて秘匿通信で会話を交わす。確かに篠ノ之束からは場所とアポイントメントは取ったと連絡があった。同時にソレが一夏と箒、二人だけのモノである事も連絡を受けている。

場所はわかれど、そこまでＩＳで移動する訳にもいかず、更には結構な距離がある。途方に暮れていた訳ではないが、女の言葉は二人にとって渡りに船ではあった。

更に言えば、「織斑千冬」の名前が出てきた事によって二人の警戒心はある程度下がっていた。

「私は構いませんが、アナタ方……いいえ、セカンドには時間がないのでは？」

「ッ……」

「一夏、行こう」

「……ああ」

「よくぞ決断してくれました。さあ、乗ってください」

女はその鋭い瞳を幾らか下げて微笑み、後部座席を開く。一夏と箒は促される様に車に乗り込み、そして後部座席は閉じられた。

運転席へと乗った女は口を閉じて車を走らせる。

既にＩＳ学園も見えなくなって少ししてから女はバックミラーに映る二人を確認して、口を開く。

「お前らは馬鹿だな」

吐き出された言葉は先程までの丁寧な口調ではなく、随分と荒っぽいモノで、一夏と箒を驚かせるのには十分な口調であった。

驚いた二人を見て、舌打ちを一つ漏らした女は説明するように口を開く。

「織斑千冬の名前を出したからと言って簡単に車に乗ってくれるな。あと状況理解が遅

い。織斑千冬は何をやってんだか」
「……アンタは？」
「……私は政府の人間だ」
「ッ」
「おっと、まあ落ち着けよ。今は味方だ。こうしてタネまで証してお前らの信用を取ってんだ」
　ハッ、と鼻で笑う様に吐き出した息が一夏と箒の鼓膜を揺らした。腰を浮かし、ある種の戦闘態勢へと意識を持ってきた二人を確認して女は舌打ちをまた零した。
「ま、信用しろってのは無理だろうが、あのクズを助けたいんだろう？　私に案内されろ。私に許されているのはそこまでだしな」
「……クズ？」
「ん？　ああ、セカンドだよ。クズみたいなもんだからな。お前らは知らないだろうから教えておいてやろう、アレはお前らのデータを政府に売り渡している奴だぞ」
「ッ、嘘だ！」
　女の言葉に否定をしたのは一夏であった。当然、箒とて女の発言に眉間を寄せ否定の意思を見せている。そんな二人を見て、女は口を歪めて鼻で笑ってみせる。
「本当だよ。お前らがアレの前で見せた事は全部政府に渡っている」

「……証拠、証拠はあるのかよ」

「証拠なんざある訳がねぇだろ。それこそ織斑千冬を前にしてソレをやってのける男だ」

一夏と箒の背筋に何かが走る。あの千冬を前に隠し事などできるのだろうか。ソレも彼女の家族である一夏のデータを売る事など千冬は是としない筈だ。

証拠はない。けれどその証拠がない事こと夏野穂次を疑うに足る事実となってしまう。

「さて、選択肢だ。お前らには選択肢がある。このまま予定通りに裏切り者を助けるか、それとも私とドライブを楽しんで帰るか。私としては後者をオススメするね」

バックミラーで確認した二人の顔を見て、女は口角を上げる。二人の表情は確固たる意思があった。例え友と呼んでいる存在が裏切り者と言われようと、二人にしてみればその言葉に憤怒しようが彼を恨むという要因には成り得ない。

なんせ、アイツはそんな事を器用にできる人間ではないのだ。

「ハッ……まあ私はどっちでもいいさ。お前らがアイツを助けようが、助けられまいが」

「そういや、アンタは政府の人間なんだよな？」

「年上に敬語なしとはいい度胸じゃねぇか、ファースト。まあ気にしないけどな。それで、政府の人間たる私に何の質問だ？」

「政府が連れ去った穂次をどうしてアンタが助けようとしているんだ？」
「実はアイツに恋をしているんだ」
「は？」
「なんて冗談だよ。クズに恋なんざする訳もねぇ……。
まあ政府も一枚岩じゃねぇって事だ。今回だって偶々、織斑千冬とかの天災様が企てた計画に乗っかってるだけだ。だから私はお前らを送る程度しか手を出せない」
舌打ちを一つしてから女は運転に集中するように速度を上げた。
結局の所、夏野穂次が裏切っている、データを政府へと渡しているという情報の正誤は不明のままだ。アレが器用な人間ではない、という事は重々に理解している二人からすれば、女が言った嘘、という事にもなるのだが、嘘を吐き出して得をする訳もない。
いいや、二人の把握を超えた先に得があるのかもしれないが、それこそ二人にしてみれば考える意味など出てこないし、考え得ない事だ。
思考的に真っ直ぐである二人は『裏切り者』である夏野穂次より『友人』である夏野穂次を救助する思考に切り替わった。
問題である『裏切り者』どうのこうのなど、アイツを突けばボロボロと出てきそう、というある意味の信頼が二人にはあった。セシリアやシャルロットに突いて貰えればアッサリと吐き出しそう、という一夏の思考はスグに何処かへと放り投げられた。

「着いたぞ」
かなりの時間車に揺られていた二人に声を掛けたのは女であった。未だに移動を続ける車の前には一つの建物がある。周りを見渡せば木々の生い茂る森である。
鬱蒼とした森の一角に建てられた近年にしてみれば背の低い建物。何処か場違いであるにも関わらずに、随分と自然とそこに在る。
「私はここまでだ。何、帰りも送ってやるから安心しろ」
車を止めて女はそう口から吐き出した。至極面倒そうではあったけれど、一夏達は女の行動にある程度の信用を置いていた。少なくとも、現時点では。
「ありがとうございました」
「ハッ……ファースト。そういうのはセカンドを助けてから言ってくれ。その為にコッチは身を削って根回しをしたんだ」
一夏と箒はソレに答えずに車から降りた。
ふぅ、と同時に二人は息を吐き出して、目の前の建物を見上げて、ガラス製の扉へと視線を向ける。
「やぁ、ようこそ。篠ノ之箒。そして織斑一夏」
ニッコリと笑みを浮かべた女性がソコにはいた。ダボついた服を白衣で隠した女性

はメガネの奥に少し垂れた瞳おき、その瞳をより一層蕩けさせながら一夏と箒に近づく。箒は何かを察した……というよりは身内にそんな人間がいるからこそ一夏の背へと流れる様に隠れた。

対して一夏は隠れた箒に慌て、ペタペタと来客用であろうスリッパを鳴らした白衣の女性に寄られ、頭の先から足の先までを見られ、むっふっふ、と笑われる。

あ、これは束さんと同じ属性の人だな。

一夏は納得した。所謂天才肌の存在である事を理解した一夏は溜め息を吐き出して、とりあえず両手を上げた。

「あー、えっと」

「ん～、なるほどねぇ、なるほど」

「すいません」

「むむむ、腹筋はどうなってるんだろ？」

「おい」

「ほぁっ!?　何奴!?」

「アンタがさっき言ってた織斑一夏だよ」

「ああ、なるほど……いやー、ゴメンネー。ＩＳを現行で動かしている人間を見るとどうしても調べたくなっちゃって、テヘッ」

頭を手に置いて笑顔を浮かべた女性は一夏が溜め息を吐き出した所で「さて」と言葉を漏らす。
「それで、君達は何をしに来たのかな？」
「……穂次に会わせてくれ」
「それで、彼をここから救い出すつもりかな？」
白衣の女性はニンマリと口を歪めて一夏の顔を見る。一夏は思わず息を飲み込んだ。女性に見つめられたからではなく、図星を突かれたからだ。
女性は悪意のある笑みを穏やかなソレに変換させてむっふっふ、と声を漏らした。
「まあ君らの目的はわかってたから別に驚かなくてもいいよ。こうやって聞いたのは、ほら、名分が必要って事」
「名分？」
「そう。これでも政府に繋がってる企業だからねー。好き勝手に彼との繋がりが切れちゃうと拙いんだよー。どーでもイイけどね」
「は、はぁ……」
「一夏。この人の話は話半分で問題ないだろ」
「なんでだよ」
「経験談だ」

「あ……」

　一夏は頭の中で一人で不思議の国を体現する天災と目の前でヘラヘラ笑っている女性を重ねる。僅かに女性の方が人間味があるような気もするが、比べようはないだろう。

「さて、君らの目的はわかったけれど、コチラの大義名分の為に試験を受けてもらう」

「試験？」

「いえーす。とっても簡単な試験だよー。ソレに合格すれば、君らは彼を連れて帰って、彼は晴れて政府との繋がりが切れる」

「合格しなかったら？」

「今のままだと廃人一直線かなー」

「廃じッ、穂次に何かあったんですか？」

「別に彼にとっては特別な事はないよ。拷問されて両手の指がボロボロだけどねー」

「ッ」

「あ、もしかして怒ったかな？　むっふっふ、怒り顔も素敵だねー。でもでも、ワタシに恨みをぶつけるのは変な話だよー。コッチに連れてきた段階で彼は拷問の後だったんだからね」

　飄々とソレを語る女性はニンマリと笑みを深めて一夏と箒の顔を観察する。

拷問と聞いて、具体的なソレを聞いて二人は眉間を顰め、そして怒りを表に出した。その様子も可笑しい様に更に笑みを一層深める。

「……それで、試験というのは？」

「んー、戦闘データが欲しいから適当に戦って貰おうかな。彼が送ってきたデータだけだと不十分だからねー」

「……夏野はやはり政府にデータを売ってたんですか？」

「んー？　あー、そうだね。彼は政府関係にデータを売っていたよー。まあ詳しい事は彼から聞きなよ。誤魔化す様な事じゃないし。何よりもう意味が無い話だからね」

「意味が？」

「おっと、ちょっと喋り過ぎちゃったかな？　むっふっふ、詳しい事は全部終わってから彼に聞けばいいよ。さ、じゃあ移動しようかー」

くるりと白衣を翻してペタペタとスリッパを鳴らして女性は移動する。その後姿を少しだけ見て、一夏と箒は気持ちを固める様に息を飲み込んで足を進めた。

『あーあー、てすてすー。　聞こえるかなー？』

林の中、ＩＳの研究用に場所を開けているのか、アリーナと同じ様にバリアの発生装置が備えられている。

そんな中、オープン回線で先ほどの女性の声が響く。一夏と箒はＩＳを纏う事もせずに顔を合わせる。

『うんうん、聞こえてるねー』

「それで、戦闘データって、俺と箒が戦えばいいのか？」

『ん？　ああ！　なるほどー。君たち同士では戦わなくていいよ。コッチで相手を出すからさ』

むっふっふ、と聞こえた笑いの後、地面が開き、相手が現れる。

黒い装甲に黄色いラインを走らせ、左腕には盾を装着した特徴の在るＩＳ。

一夏と箒は息を飲み込んだ。なんせ、彼こそが目的なのだから。

「穂……つぎ」

「夏野……」

震える声で当人に問いかけた二人。けれども彼はソレに反応することはなく、ゆっくりと顔を上げた。

頬に走る何かの基盤の様な模様。黄色い模様が脈動するように、明滅する。

上がった瞼に隠されていた瞳は虚ろで、目の前に二人がいるというのに、一切の表情を浮かべていない。

『さ、じゃあ戦ってもらおうかー』

「ッ待ってくれ！　なんで、穂次が!?」

『んー？　何を当然の事を言ってるのかなー？　まあ別に応える意味は無いよね？　君たちは選択肢が無い訳だし、コッチは戦闘データが欲しい。ほら、利害は一致してる』

じゃあ、頑張ってね。

と一言を残して、バツリと通信が切られた。一夏は狼狽し、目の前にいる穂次に再度声を掛ける。

「おい！　穂次！」

「……」

けれど穂次は何も答えない。ただ虚ろな瞳を揺らして前だけを見つめる。

主を肯定する武器は盾へと右手を伸ばし、現れた柄を握りしめ、一息に引き抜く。

引き抜いた端から荒く吐き出される黒い粒子。多大なエネルギーを収縮すらさせないソレを強く握りしめた。

黒と極光と紅

「一夏ッ！　しっかりしろ！」

一夏はようやっと目の前にいた紅い鎧を纏った箒に気づいた。時間にするならたった数秒の出来事であったけれど、それでも十二分に遅いと言える時間だった。

箒はハイパーセンサーで捉える想い人がいつもの状態でない事を悟った。手は震え、目の前の事実を否定しているのだろう。

荒々しいエネルギーの刃と物理刀である《雨月》と《空裂》がかち合い、箒は舌打ちをして目の前にいる馬鹿者を睨む。

「夏野ッ……！」

ソレは虚ろな瞳を揺らし、顔に表情の欠片すら無い男。

常ならば、一言の調子のいい言葉でも吐き出されるだろう。箒の胸部に関して一つや2つ言葉を漏らしてへらへら笑って見せただろう。

けれどソレを目の前の存在に求めるという事は無理なのだ。体を伝い、頬に走る基盤の様な線。ソレらが十二分に彼の状態を通常から程遠いモノだと理解させた。

箒は刀を引き、相手の体勢を僅かに崩して一閃。真一文字に引かれた斬撃を盾でしっ

かり塞いだ彼は大きく後ろに下がった。
「一夏！　しっかりしろ！　アイツを助けるのだろう！」
「箒……」
「思い出せ、アイツのＩＳをッ！　今の状態はソレが原因な筈だ！　だからッ」
箒は言葉を全て吐ききる前に空へと急速に移動をした。その後ろを追従するように八つの何かが空を舞う。
一夏は改めて穂次を見た。虚ろな瞳。黄色く明滅する頬の基盤模様。穂次のＩＳ、《村雨》。
一夏の頭に殴られた様な衝撃が走る。現状を把握した。同時に解決する方法も理解した。
『戦闘データを得る』と言ったあの女性の言葉が本当だったならば、ソレは一夏と箒のデータではない事を理解した。
ああ、畜生め。一夏は自身の察しの悪さを呪った。アレが穂次な訳が無い。ならば、アレは何であるのか。
「《村雨》かよ……ッ」
答えはない。けれどそうでなければ説明が出来ない。何故そうなったか、どうして暴走しないと言われていた穂次があの状態になったのか、そんな事はわからない。

けれど、ソレは正しく現実だと理解した。だからこそ一夏は白式を纏い、伸ばした右手で柄を握りしめる。

極光が柄から溢れ剣を象る。

その剣に気づいたのか、夏野穂次――村雨はゆらりと織斑一夏へと視線を向けた。

互いに右手に握りしめた剣を握りしめ、一歩目を踏み込む。急速に二人の距離は縮まり、エネルギー刃同士がぶつかり合った。

かち合う衝撃により、二人を中心に空気が揺れ、粒子が舞い散る。

先ほどの箒との鍔迫りよりも素早く村雨は刀を引き、空へと逃げた。

その判断は当然である。村雨の持つ《鬼の爪》はエネルギー刃で構成された武器であり、そしてそのエネルギーをゼロにするのが《雪片弐型》なのだから。

その村雨を追うようにして一夏は空へと昇る。

「一夏」

「箒」

互いの存在を確認するように名前を呼び、二人は並んだ。

逃げていた村雨がかなりの距離を置き、停止する。緩やかに左腕を伸ばして八つに分離した盾達を回収した。

一夏には多機能武装腕に備わった荷電粒子砲。そして箒には打突と斬撃をエネル

ギーとして放出する《雨月》と《空裂》。二人にとってあの距離で停止した村雨は脅威ではない。

なんせ、攻撃方法が無いのだから。

けれど、それでも村雨はソコで停止をしたのだ。圧倒的に不利と思える遠距離で。刀の届かない位置で。

村雨は右手に握った柄を霧散させ、象徴とも言える盾へと触れる。

彼の頬に刻まれた基盤線が強く光り、盾から黒々と粒子が吐き出された。

盾が割れ、その両端を広げ、弧を描き、粒子が消えてようやくソレが形を表す。

「弓……？」

一夏の言葉を肯定するように、弧の両端が黒い粒子線で繋がり、その弦を右手で乱暴に引き絞る。

弓の備えられた左腕は一夏達の方向を向いている。同時に、一夏と箒……白式と紅椿はアラートをけたたましく鳴らした。

一夏と箒は息を飲み込み互いに距離を離した。

それとほぼ同時に黒の矢が空へと疾る（ハシル）。

矢は粒子を軌跡として残し、村雨と一夏達の間で分裂し数を増やす。

「ッ」

機体性能にモノを言わせ、箒は複雑に絡みあう矢達を回避していく。林へと身を滑らせて矢達を無駄に終わらせていく。

対して一夏は大きく距離を開けて多機能武装腕を矢に向けて伸ばし、その機能の一つを開放する。

彼の腕から溢れ出す白い粒子。展開された粒子群に矢がぶつかり、消えていく。

雪羅と呼ばれるソレは雪片と同じ性能を発揮し、ソレは白式が白式たる能力だ。零落白夜を用いた防御法。エネルギーの武装を全て無力化するという違反染みた能力。

けれど、その対価も大きい。

林へと逃げた箒にはそこそこに、一夏に対し一点集中の矢を放ち続ける。

エネルギーを無力化、というモノは決して吸収という訳ではない。

「エネルギーがッ！」

結果として示されるのはエネルギー切れ。

ソレを見計らったように、確実に敵を落とすために村雨は矢を止め、一歩を踏み出した。

宙を踏み、弓を盾へと戻し、柄を握りしめる。引き抜いたソレは正しく刀であった。

黒い刀身と僅かに漏れ出す粒子。ＩＳですら両断する刀。自身の銘を打たれた刀。

一夏はソレを見てゾクリと背筋を凍らせる。いいや、刀を見た訳ではない。口角を歪

めた彼の顔に背筋を凍らせたのだ。
戦闘の中であるというのに、彼は嗤っていた。いいや、きっと正確には村雨が嗤っていたのであろう。
一瞬の恐怖と同時に、一夏はソレを振り払う様に刀を握りしめた。
「俺が、俺が助けてやる！　俺が！　お前をッ!!」
ソレは友としての宣言であり、
好敵手（ライバル）である彼が得た力の否定であり、
相棒を救う為の言葉であった。
主の感情に呼応するように、なけなしだったエネルギー以上に極光の刃を象る白式。
「帰るぞ、穂次ッ！　俺たちの日常に、馬鹿みたいに平和な日常にッ!!」
一夏は吠える。更に極光は強く輝き、その鋭さを増していく。
斬り下ろされた黒い刀を防ぐ様に斬り上げた白い刀がぶつかり合う。瞬間に黒い粒子が解け、撒き散らされ、形を失う。
失うと同時に村雨は盾を自身の間に滑り込ませ極光を防ぐ。
「うぉおおおおおおおおお!!」
一夏は叫び、更に力を込めていく。主の命令に従う武器はより一層に光を込めていく。

けれど、無から有は作り出せない。
ソレを証明するように極光が解ける。白い粒子が霧散し、一夏の顔が苦悩に歪む。
もう少しだった。盾を破り、彼へと剣を当てればソレで終わった筈だった。
彼の左腕、盾から粒子が吐き出される。強く、強く、強く、強く。
「一夏ッ」
箒は一夏へと叫ぶ。逃げろと伝えた。
一夏が逃げれる程のエネルギーを保っているとは思えなかった。それでも箒は逃げろと意味を込めて叫んだ。
一夏は動かない。いいや、動けない。
助けないと。助けないと。助けないと。
箒の頭の中に言葉と思考がループする。足りない。足りない。
力が足りない。
時間が足りない。
エネルギーが足りない。
何もかもが足りなかった。
一夏も、夏野も、助けたい。馬鹿みたいな日常に戻る為に。

自身の暴力の為ではない。誰かの為に、誰かを救う為の決意を箒は完了した。
ガチリとソレが嵌め込まれた。歯車が回転し始め、主の問いに、ソレは応えた。
ただ望む様に。望まれる様に。主の為に。主だけの為に。
「一夏！　落ちろ！」
「――ああ！」
箒の言葉に何かを確信したのか一夏は素直にソレに従った。空で返り地面へと一直線に向かう。
ソレを逃す村雨ではない。引き抜いた黒刀を構えて空を蹴り飛ばす。
振りかぶり、一夏へと振るった刀は空を切り裂き、村雨は宙を二度蹴り、ソレから距離を取り正面に捉えた。
村雨の正面に在ったのは一夏の手を取った箒である。展開装甲が開きエネルギーを溢れさせている紅椿がソコには在った。
「箒、コレは？」
「わからん！」
「は？」
ハッキリと自身の力が疑問ばかりであると吐き出した箒は真っ直ぐに村雨を睨んでいる。

一夏はある意味ぶっ飛んでる幼馴染に溜め息を吐き出して、同じく村雨を睨んだ。
「詳しい事はわからない。が、使い方はわかる」
「それで大丈夫なのかよ……」
「問題ない筈だ」
「む」だの「ん？」だのと小さく漏らしながら箒はソレをしっかりと起動した。
白式に流れ込むエネルギーに一夏は小さく驚きの声を漏らした。すげー、と単純に零す。
「行けるな、一夏」
「ああ」
「夏野……穂次を助けるぞ」
「っ、ああ！　やってやろうぜ、箒！」
箒が二刀を握りしめ、一夏が改めて極光を握りしめた。
ソレに対して村雨は黒い粒子刀を握りしめ、嗤う。
一歩目は同時だった。
箒の二刀による連撃を一振りの刀で防ぎきった村雨は左腕を伸ばし盾を弾け飛ばす。
八つに分裂した盾達が空を駆ける。
箒へと攻撃を仕掛けた村雨を狙うのは一夏だった。その極光を村雨へと向けて振り

かぶった一夏は舌打ちをしてその軌道を変化させる。その後ろを追うヤツクビ。
「一夏ッ」
「大丈夫だ！」
移動のベクトルはそのままに体だけを反転させた一夏は多機能武装腕を後ろへと伸ばした。
収束する光が弾けた。荷電粒子砲が真っ直ぐと伸び村雨へと向かう。当然の様に防ぐ為に盾達が集まり荷電粒子砲が止められる。
それこそが狙いだった。
粒子砲を辿る様に一夏が動き、盾を追い越す。そのまま進めば村雨へと辿り着く。
村雨はソレを察してか、刀を翻して箒を払い、刀を構え直す。
「させるかッ！」
箒が我武者羅に放った蹴りが村雨の柄へとぶつかり刀を弾き飛ばした。
柄を手放したというのに村雨は噛っていた。何も持っていない右手を左腕に残った長い棒へと向けて動かす。
ゾクリと一夏と箒の背筋に悪寒が走る。けれど、それでも、例えそうであっても。
「うぉっっぉおおおおおおおおおおお!!」
再度、一夏が吠えて呼応する極光。

村雨に触れて、バリアが削られ、穂次の顔に刻まれた基盤線がゆっくりとその光を失っていく。

ブワリと村雨が粒子へと還元されていく。黒い粒子が巻き起こり、その中から穂次が吐き出された。

「穂次！」

正面に居た一夏が穂次を抱え、その手を見て眉間を歪めた。青く、黒く歪んだ指。

「うっ」

「穂次、大丈夫か!?」

「一夏、下に行くぞ！」

「お、おう」

「いやー、ご苦労様。良いデータが取れたよー」

「……」

「むっふっふ、そんなに睨まないでよー。お姉さん怖いなー」

「穂次は俺たちが連れて帰ります」

「うんうん、そういう約束だったもんね。こっちも約束は守るよー？　政府との繋がりは彼から切った」

「……」

「あ、信じられてないなー。ま、いいけどねー。それにしても、どうして彼に入れ込んでるのかなー？

ＩＳにパーツと認められる程に自意識が希薄な彼なのに」

記憶喪失の直し方

目を、覚ました。

眼前には天井。綺麗な板で出来ていて、継ぎ目など無い。

瞬きを一度。大きく息を吐き出して、視線を下に向ける。ソコには金が在った。二つの金だ。ベッドに横たわっている俺を挟むように、座った彼女達が頭をベッドに押し付けて眠っていた。

色合いの違う金を視界に入れて、俺は彼女らに手を伸ばしてみせる。まるでソレが否定された様に、手が痛み出す。

「イ゛ッ」

漏れだした声を無理やり止めて、続く痛みを食いしばり、押し黙る。指だけではなく、ソレに連なる様に腕の筋肉が引きつる。

痛みで叫ぶ事も出来ず、息を飲み込んで、ゆっくりと吐き出して、力を抜く。

「うん……？」

俺の身動ぎに反応したのか、濃い金色の少女がゆっくりと顔を上げ、ぼんやりとした目で俺を見つける。目が合う。

一秒

2秒

少女の瞳に水が溜まり、何が嬉しいのか口角がゆっくりと持ち上がる。

「穂次！　目を覚ましたんだね!!」

「アデデデデデデ!!」

大きく目を開けた彼女が俺に飛びつき泣き始める。その泣いた声で起きたのか、淡い金色の少女も目を覚まし、俺を視界に入れて涙を瞼に溜め込む。

そんな事はいい、痛いです！　痛いですよ!!

少女二人が盛大に泣いて、ようやく泣き止んだ頃を見計らったかのように同い年程度の男が一人と三人の少女が入ってきた。

「起きたのか」

「あ、ああ……」

「大丈夫か？　何かオカシイとか……」

「……いや、スマン。誰だ？　アンタら」

沈黙した。全員が目を見開き、俺を見る。男が何かを決した様に、代表して口を開く。

「覚えて……ないのか？」

「何を……、くっ、頭がっ！　……どうしてだ、お前の顔を見てると……！　うっ」
「穂次！」
「一夏さん、と、とにかく保健室から出て行ってくださいまし！」
「あ、ああ」
「穂次、大丈夫？」
「すまない、誰かのおっぱいさえ揉めばきっと記憶喪失も治ると思うんだ……!!」
沈黙。保健室を出ていこうとしていた一夏も含めて俺の事をスゲー睨んでいる。
なるほど、聞こえなかったんだな！
「誰かのおっぱいさえ揉めれば！」
「聞こえてたわよ、馬鹿！」
この後無茶苦茶ボコボコにされた。

「いやー、あっはっはっはっ」
「アンタね、言っていい冗談と悪い冗談があるってわかってる？　いや、分からなかったわね」
「鈴音さん、鈴音さん。スグに否定されると俺も困るんですが」

「あ？」
「スイマセンデシタ！」
　溜め息を吐き出されて鈴音さんが肩を落とした。俺はいつもの様にへらへらと笑ってだらし無くベッドの頭に凭れる。
　ボコボコにされた、と言っても皆ちゃんと俺を怪我人だという認識はあったのかベシベシと頭を叩く程度の物だったりする。ちなみに力が強かったのはセシリアさんとシャルロットさんである。
「それで、本当に大丈夫なのか？」
「ご安心を篠ノ之さん、俺は正常だゼ！」
「……本当ですの？」
「信用ないッスねぇ……まあ仕方ないか。
　俺は裏切り者ですからなぁ」
「は？」
「え？　……おいおい、一夏！　なんで情報共有してねーんだよ！」
「いや、ソコをお前に怒られるのは俺は意味がわかんんねぇよ」
「えぇ……。俺自滅？　よし、じゃあ無かったことにしよう。俺は君らの情報を売りつけてない。オーケー？」

「ノーだ、馬鹿者」
「デッスヨネー……」
「というよりもソレも本当だったのか……」
「そりゃぁ、事実だな。つーか、俺は何処まで説明すりゃぁいいの？」
「全部ですわ！」
「全部だね」
「ヒェッ……俺はおっぱいが好きです！」
「ソレはどうでもいいですわ！」
　ええ……。全部っていうから一番知ってほしい事を言ったというのに！　なんて理不尽な世界なんだ！
　このやろう、おっぱい揉むぞ！　揉ませてください！　でも指がマトモに動かないんだよなぁ……。
「んじゃ、まあ、俺は政府に雇われたスパイみたいなモノで。国家代表候補と一夏、後は今は篠ノ之さん、あとはＩＳ学園の情報を集めて政府に売ってた。ここまではオーケー？」
「むしろ了承出来る所が無いのだが？」
「ソレな。うーん、事実だからどうしようも無いんだけどね」

「……どうして、売ってましたの？」
「そりゃぁ、金の為？」
ヘラヘラ笑ってそう言えば全員が俺を見つめ、視線を鋭くしていく。
実に、心地いい。
「む、なんだ、全員揃っていたのか」
「千冬姉」
「織斑先生だ、馬鹿者め」
「……教官は、穂次が政府に情報を売っていた事は知っていたのですか？」
「当然だろう」
「は？」
「あー、まあそういう事ッス」
「どういう事だ？」
「俺は二重スパイだったのさ！
な、なんだってー！」
「穂次、一人でやってて悲しくないか？」
うるせー。誰もやってくれないから一人でやるしか無いんだよ！
俺だってやりたくてやった訳じゃねぇよ！　この野郎！

「えっと、つまり？」
「俺が政府に渡してた情報は全部織斑先生の了解をとったモノだけって事。ある程度のフェイクも込みで送ってるから実際安全」
「……お前、本当に穂次か？」
「失礼だな、相棒。俺は凄腕のエージェント、なんだ、ゼ★」
「うぜぇ」
「酷いよぉ……まあ、冗談は置いといて。二重スパイってのはホント、そこらは織斑先生が証明してくれるさ」
「こいつは単なるスパイだ。誰か捕縛してくれ」
「待って！　織斑先生!?　つーか、どうしてセシリアさんとシャルロットさんはそんなに嬉々として俺を捕縛しようとしてるんですかね!?　怪我人！　俺、怪我人だから！」
「……そうでしたわね」
「怪我してないみたいに振る舞われると」
「えぇ……まあ美人に縛られるのは吝かではない」
　セシリアさんとかに縛られて足でフニフニされるのも、シャルロットさんに緩く縛られて顎クイとかされるのも、実に素晴らしいと思う。ゾクゾクするな（確信
　ともあれ、織斑先生がアッサリと俺が二重スパイであることをバラしたという事は、

大丈夫なのだろう。
「まあ、もう政府との繋がりも切れたっぽいし、皆の情報を売るとかはしないよ」
「ホント？」
「つーか、元々俺がそんな事出来る程器用に見える？　二重スパイとかカッケー！　とか思ってたけど実際は織斑先生の言う事聞いてただけだからな？」
「そうよね……アンタがそんなに器用な事が出来るなんてあり得ないわ」
「あのさ、鈴音さん。鈴音さんの中での俺は何なんですかね？　スゲー杜撰な扱いを受けてる感じがするんですが」
「友人だけど？」
「キュンッ」
「キモいわよ」
「お、そうだな」
「それで……自意識が希薄とはどういう事だ？」
「ん？　俺がＩＳに乗れる理由だけど？」
「……どういう事ですの？」
「どういう事って言われても……」
コレばっかりは感覚でしか分からないからどうしたものか、と考える。織斑先生の方

を向いても腕を組んで壁に凭れてコチラには助けを出してくれないらしい。
　鬼！　悪魔！　ヒェッ、コッチ見た……。嘘ですよ。ハハハ……。
「あー……うーん、俺自身はコレが普通だからよくわかってないんだけど。ＩＳが俺をパーツとして認識してるらしいッスよ」
「……は？」
「俺自身がＩＳパーツと成ることだッ！」
「いや、冗談はやめなさいよ」
「冗談だったらよかったね。いや、まあコレはどうでもいいか」
　本当にどうでもいい。表向きでそうなっているだけである。流石にＩＳコアが語りかけてきてソレを聞いて、動かす手助けをしてもらっている、なんて頭のぶっ飛んだ事は言えないだろう。
　篠ノ之博士からしっかりと「頭のイカれた存在」とか言われてるもんね！　あぁ、ラファールちゃんかわいいよラファールちゃん。くっ、左薬指がッ！
「どうでも、いい訳ありませんわ！」
「？　いや、なんでセシリアさんが怒ってるの？」
「ッ……、もういいですわ」
「あ、待ってよセシリア！」

コチラを一睨みして出て行ったセシリアさんを追いかけるシャルロットさん。急に怒りだしてどうしたってんだ。

「……えっと、俺？」

「そりゃぁ、アンタでしょ」

「えぇ……つーか、俺が怒られる理由は結構わかるけど、あんな感じにセシリアさんが怒る理由がわからないんですが……」

「……アンタ、ソレ本気？」

「結構マジなんですが……つーか、どうして皆も俺をびっくりした様に見てるんですかね……俺はウーパールーパーだった可能性が？」

「うーぱーるーぱー？」

小首を傾げて俺の言葉を繰り返したラウラさんがスゲー可愛い。くっ、俺はロリコンじゃないんだ……はっ！　彼女は同い年って事はロリの枠組みには入らないんじゃないだろうか……！

あぁ、美少女が可愛いんじゃ～。

「さて、こいつの事はある程度理解しただろう。面会時間は過ぎているんだ、さっさと寮に戻れ」

「よっし、戻ろうぜ一夏！」

「お前はまだ安静にしておけ、阿呆」
「安静とか言いながらアイアンクローってどうなァダダダダ!!」
「……お前達にも、こいつにも時間が必要だろう」
俺は絶対安静だしな！　頭痛がヤバイ。この頭痛が物理的に痛いってのもヤバイ。
一夏達は俺を一瞥してから、保健室から出て行った。残ったのは俺と織斑先生の二人だけ。
ダメです、先生！　俺とアナタは教員と生徒なんですよ！
「アダダダダダダ!!」
「いらない事を考えるな、阿呆」
「どうしてわかったんスか!?　読心術もびっくりのスピードですよ！」
脅威と生徒の関係だったなんて、聞いてませんよ！
俺の頭を離して溜め息を吐き出した織斑先生が近くの椅子に座り腕を組む。スーツに上からでもわかるおっぱいが、おっとこれ以上はやめておこう。死ぬ。
「まったく、お前だってわかっている事だろう」
「皆が心配してたって事ッスか？」
「ああ」
「まあ状況自体は理解出来ますけど、心情はさっぱりッスね。卑屈に言うなら俺を見下

したい、って思いますけど、皆の事だから普通に心配してるんでしょーね。どちらにしろさっぱり意味がわかりませんけど」
「……一応、フォローはしておけよ」
そんなに睨みながら言わなくてもわかってますよ。
事実を事実として言っただけなのだから、それほど怒る事もないだろう。どちらにしろ、怒らせてしまったのだから、どうにかしないと。
「それで現状はどうなってんスか？」
「お前を攫った集団は政界からは消えたよ」
「あー、あの人が頑張ってんスね」
「ああ。それで、お前の方はどうなんだ？」
「ご覧の通り拷問をされましたけど、織斑先生の事は一言も言ってませんよ」
「ソレに関しては信用しているさ」
「俺、織斑先生に信用されてたのか……」
「何の為に何度もお前の頭を掴んでいると思っていたんだ」
「あ、痛みの耐性つけてたんスね……ナニソレコワイ」
こう、もっといい方法とかが在ったんじゃないだろうか。いや、この阿修羅様がそんな素晴らしい事が出来るなんて思わない。

出来たとしても、どうせアイアンクローからは逃れられない……。
もうマジ無理。ふて寝したい。
「お前と村雨だ」
「ん、ああ、それッスか。大丈――」
織斑先生の腕が伸ばされ、出席簿を鋭く俺へと振り下ろしてくる。
俺はソレを目で追ってしまう。
ビタリと俺の頭スレスレで停止した出席簿に安堵の息が出た。面じゃなくて背表紙だったのに風を感じるとかどういうスピードが出てるんですかね……。
「何するんスか」
「……手っ取り早いだろう」
「まあそうッスけど。当たってたらどうするつもりだったんスか……トマトみたいに頭が潰れてますよ、絶対」
「当てるつもりはなかった。それに当たりもしなかっただろ」
「結果論じゃないッスか……」
「推論だ、阿呆。それで、体に違和感とかは無いのか？」
「まあ無理やり村雨との繋がりは深くされましたけど、別に問題らしい問題はありませんよ。

ククク、今なら織斑千冬だって倒せるかもしれないな」
「ほう」
「いや、冗談ツスよ？　そんな獰猛な笑みをされても困るんですよ」
「吐いた言葉は飲み込めないぞ」
「ひぇっ……」
　怪我人には手を出さないとか言ってた人はどこに行ったんですか！　あ、怪我が治ったら？　……怪我を治さない方法を探さなきゃ（使命感。
「まあ良いだろう。だが無理はするな」
「へいへい。無理なんてしたことねぇツスよ」
「だろうな」
「俺、織斑先生に理解されてる……！」
「お前の事など一片の理解もしてる訳がないだろう」
「ひぇっ……ソレが教師の言葉なんですか」
「ああ、教師の言葉だ」
　ナニソレコワイ。
　こんな教師がいて良いのだろうか……いや、いいんだろう。いいから睨まないでください織斑先生！　怖いです！

「お前は検査の結果が出るまでは絶対安静でいてもらう」
「授業がサボれるだって!?　なんて不運なんだ！」
「補習があるから安心しておけ」
「……ヤッター」
　いいや、山田先生と二人きりならまだ大丈夫だろう。おっぱいを眺めながら補習を受けて、偶に分からない事があったらあの柔らかい二つのお山があぁぁぁあああああ!!
「ちなみに私の担当だ」
「ぁぁぁ……夢は、やっぱり夢なんだなって……」
　そして、人の夢は儚いのである。神様は死んでしまったのだ。

自己淘汰

意識が浮上した。ぼんやりと目を覚ます。
ソコは漆黒に染められていた。寝ていた筈なのにハッキリとした視界。
ソコは白が積もっていた。アクビすらも出ずに溜め息を吐き出す。
ソコには壊れた武器が捨てられていた。立ち上がりカラリと鳴る地面を踏む。
弦の千切れた弓が捨てられていた。白い絨毯の切れ目を目指して歩いて行く。
刃の欠けた斧が捨てられていた。絨毯は鉄格子で遮られている。
柄が中ほどで折れた槍が捨てられていた。目の前には仏頂面の彼女が居た。
「のぉ、主。また負けたのぉ」
「ああ、また負けた」
黒い髪をユラリと伸ばした彼女が鉄格子に凭れながら、少しだけ不機嫌そうにそう言った。
負けた。負けてしまった。ソレは事実で、ソレは覆しようがないモノで、ソレは現実だった。
よっこいしょ、と声を漏らして骨の絨毯に座り、鉄格子に背を預ける。

「そもそもじゃ。玩具で満足しおる主が悪いんじゃ」
「今の俺にはアレが限界」
「むぅ……まあ妾も主と交われてよかったとは思うがのぉ」
「すげーエロい言い方でグッドだと思います」
「そうかそうか」
　きっとグッドの意味はわかってないだろう村雨が俺に褒められたと感じたのかクツクツと喉を鳴らす。
　彼女はスルリと鉄格子を抜けて骨の絨毯に足を付けた。透き通るような肌に赤が差した。
「どうしてお前がコッチに来れてるんですかね」
「そもそも、どうして妾が鉄格子を越えられないと思っていたんじゃ？」
「あ、そうツスか」
「思考を放棄しおったのぉ……まあ主が気にするなら戻るが」
「別に気にしねぇよ」
「そうじゃろうそうじゃろう。妾の様な美女を目の前にしとるんじゃから」
「あーはいはい」
「イケズじゃのぉ」

俺の顔を抱きしめてクツクツと皮肉を込めて嗤っている村雨に溜め息を吐き出す。
柔らかく、温もりがあるけれど、喜びはさっぱり湧いてこない。
溜め息を吐き出す。
「それで、俺に負けた事を知らしめに来たんじゃないんだろ？」
「おお！　そうじゃった。主の為の武器である妾が主の為に玩具を作ったんじゃよ」
「……が、アレッスか」
目の前に広がる骨の世界。そしてソコに刺さっている壊れた武器達。
ソレを視界に入れていた俺の視界に彼女の黒い髪が揺れて、夜を内包した瞳が俺を見つめる。
「どうじゃ？　凄いじゃろ」
「ソウッスネー」
「じゃろう！　妾も頑張ったんじゃよ！」
むふふん、と胸を張って誇る村雨を見て思わず笑いが漏れてしまった。
武器のくせに感情豊か過ぎやしませんかね……。別に良いけどさ。もっと打鉄みたいに静かな感じが――。
「主、今他の女の事を考えとったろう」
「……考えてない」

「嘘じゃの。妾は主と繋がっておるんじゃ。もう離さんぞ」
「えぇ……」
「主の武器は妾だけで良い。妾も主だけの武器でよい。ソレでよいではないか」
まあ、そう言われれば、そうなのかも知れない。
少しだけ不安そうな顔をしている村雨の頭に手を置いて、溢れた笑いをそのまま口から出す。
「そうだな」
「じゃろう？　じゃから、全世界の武器共を破壊するんじゃ」
「いや、その理屈はオカシイ」
鋭い瞳を少しだけ蕩けさせた俺の武器は口角を持ち上げて、その顔を愉悦へと染める。
更に空気を溜め息で薄めて、俺はゆっくりと立ち上がる。
「んじゃ、始めようか。俺の武器」
「任せい。妾の主」

◆◆

自意識。自己に対する意識。

ソレが薄ければどうなるのか。結果はもう味わった。嫌という程に。

『なんでセシリアさんが怒ってるの?』

彼の口から吐き出された言葉が心を締め付けていく。

コチラを理解していない訳ではないだろう。

わたくしを考えていない訳ではないだろう。

そんな事、今までの彼を見ていれば十分にわかる事だ。わかっている事なのに。

彼にはきっと理解出来ていない。自分がどれほど彼の事を心配したかなど、わかってくれない。

いいや、わかっているのかも知れない。それでも、彼はきっと「何故自分が心配されているか」をわかっていないのだろう。

ゾクリと背筋に冷たいモノが走る。

彼が生きている世界を僅かに垣間見て、想像して、そして普段の彼を見て、余計に締め付けられていく。

全部が敵だと思っていた頃の自分よりも、きっと彼は辛い。けれど彼はその辛さを理

解していない。理解出来ていない。

彼の世界に敵は居ない。味方も居ない。なんせ自分すら居ないのだ。

ああ、彼がへらへらと笑いながら、まるで他人事の様に語った身の上話。その時は彼が自分を取り繕って、心配させない様に語っていたのだと思っていた。ソレでも理解なんて出来ない事なのに。

彼は自分を取り繕ったりはしていなかった。彼はただ当たり前の事を、当たり前に吐き出しただけなのだ。

彼が消えていく感覚。ソレはきっと正確ではない。

ぼんやりと視界が開ける。デジタル時計に刻まれた時間は自分が起きるには早過ぎる時間だった。当然の様に眠っているルームメイトも居る。

ボサボサになった髪を一撫でして、セシリア・オルコットは息を吐き出した。

嫌な夢を見た。

口から出る事もなかった呟きの代わりに出た息を静かに見送り、セシリアはベッドから立ち上がった。

「ん、おはよう。セシリアさん」
「……はぁ」
「えぇ……挨拶も無しに溜め息は傷つくんだゾ！」
コチラの気持ちも知らずにへらへらと笑った夏野穂次がソコには居た。相変わらずの表情に若干苛立ちを覚えてから、挨拶をしておく。
彼の手には包帯が巻かれ、彼は両手で四角の紙パックを挟みストローを咥えていた。
「絶対安静ではありませんでしたの？」
「診察結果は概ね良好だからね。手以外は健康そのものだし」
「……そうですか」
「自分で聞いたのに素っ気ないッスねぇ」
セシリアの返事に対して穂次は肩を落として、またへらへらとした笑いを顔に貼り付けた。
「まあ絶対安静から開放されただけで、手の方で検査とか、リハビリとか、そこらは色々残ってるんだけどね」
「……」
「何？　そんなに見て……まさか！　この俺の超カッケー顔に何か付いてるとか？」

「はぁ」
「溜め息での対応はヤメテクダサイ」
情けない顔になった穂次を見て、改めてもう一度溜め息を吐き出したセシリア。
そんなセシリアを見ても変わらずにヘラヘラと穂次は笑った。
「……――穂次さんはＩＳにパーツとして認識されてていいんですの？」
「ん？　あー、まあ良いんじゃない？」
「……」
「どうして睨まれてるんですかね……いや、まあ倫理的に問題だけどさー」
そういう事ではない。心配しているのだ。
一夏や箒から話は聞いた。戦闘になった事も聞いた。その時のアナタの状態も聞いた。
そして極めつけの様に、パーツ宣言だ。
「どうしてそうやって自分を蔑ろにするんですの……」
「実際どうでもいいから、って素直に答えたら睨むし」
「当然ですわ」
「じゃあ言葉を変えよう。俺よりも皆の方が大切なのさ」
「一緒ですわ」

「そりゃぁ、言葉を変えただけだし。皆の笑顔が見たいから、なんてヒーローみたいだろ？」

ニッと歯を見せて笑う穂次を見て、セシリアは眉間を寄せた。

彼にとって彼自身はとても低い位置にいるのだろう。きっと誰にも認識されない様な場所にいる。

どうでも良くなんてない。

私は彼が大切なのだ。私が彼を必要としているのだ。

味方も敵も居ない、彼さえも居ない世界で。私は彼の横に並び、笑っていたいのだ。

「穂次さん」

「ん？」

「好きですわ」

「……は？」

「え？」

たっぷりと沈黙をもって、彼は意味が分からない様に言葉を吐き出して、わたくしも同様に意味が分からないように言葉が出てきた。

理解していくと顔が熱くなっていく。落ち着け、冷静になるのよ、セシリア。ココで慌てては意味がない。

心の中で大きく深呼吸をして、真っ直ぐに彼を見る。

そこには珍しくへらへらと笑わずに、唖然としていた彼が居た。

「今は返事を求めませんわ。ただわたくしが想っている事を覚えていてくださいまし」

「お、お？　うん、はい」

「では失礼致しますわ」

席を立ち上がり、優雅な足取りで食堂をあとにする。

ああ、食器を戻すのを忘れてしまった……。いや、そんな事はどうでもいい。いや良くない。

徐々に早くなる足取りで自室に戻ってきて、急いで扉を閉めた。

心臓がバクバクと鳴っている。

ルームメイトがコチラを驚いた様に見ている。

「どうしたの？　セシリア。そんなに慌てて」

「え、ええ。あぁ、ハイ」

赤くなる顔を意識しながら、ぺたりと膝を着いてしまった。

ロマンチックとは程遠いソレだけが、自分を呪い殺す様に頭の中で反復した。

怪我＋食堂＋……＝

夜の訓練。俺としてはその言葉の後に『（意味深）』なんて文字を付け足したい気持ちでいっぱいであった。

つーか、夜は魑魅魍魎が跋扈する時間であって、ソレらの王である鬼が牙を剥く時間である。つまる所、夜の訓練ではなくて鬼の訓練なのだ。わかるか？　俺はわかりたくなかった。

俺は怪我人なのだ。それこそ意気揚々と休みを満喫するつもりだったのだ。あろうことか鬼本人がやってきて「おい、何をサボろうとしている」と言われるまで。

いや、そもそも俺が阿修羅様に頼んだ事だから俺がソレに文句を言うのは間違っている。ああ、ソレはわかっている。でも手が満足に使えない奴を訓練に出すなんて事は鬼の所業である。まさに鬼。

『夏野、無駄な事を考える余裕がまだあるようだな』

「ひゅい!?」

通信に対して変な声が出てしまい、そして迫る攻撃が激化していく。回避出来るスペースがギリギリであり、更に言うならソレが変動し続ける。

前の俺ならコレは無理ゲーだと言っていただろう。今の俺？　ハハ、無理ゲーだよ！

「無理！　無理ですって！」

『む、まだ回避出来る余裕があるな』

「当たったらバリア削られるんスよ!?　俺のバリアって精神的にキツイんですって！」

『そうか。ではもう少し弾幕を厚くしよう』

「鬼！　悪魔！　千冬！」

『そうか』

「ヒッ!?　嘘です！　女神さま！　イヤー！　織斑先生程の美人に訓練されてるなんて嬉しいーナー!!　クッソ！」

『そうか。ではスピードをもう二つ上げるぞ』

ダメだ。絶対死ねる。さっきから掠ってるレーザーが増える。無理、絶対無理!!

かと言って盾を使うと織斑先生に怒られる。手が壊れてるのに無茶をするな、とか理不尽な怒り方をされるのだ。どういう事だってばよ……！

この後無茶苦茶回避した。

「おう、夏野。随分動きがマシになったな」

「うっす……なんかソレって人間として逸脱してるって聞こえるんですけど？」
「ア？　まだ代表候補程度の訓練だろ。イケるイケる」
　天国にですね、わかります。とは俺の口からは出なかった。
　ケラケラと笑っている褐色肌の先生に溜め息で応えて肩を落とす。
「夏野君はスゴイねー、お姉さん驚いちゃったー」
「酒臭いっすよ」
「えへへへへ」
「助けて、ヘルプ！」
「あたしは下戸だから嫌だ」
「私も嫌だわ」
「阿呆を助ける意味はあるのか？」
「無いッスけど！　こう、もっとこの人を抑えるとかあるでしょ!?　青少年に酒飲まそうとしている人に言う事あるでしょ!?」
「……。ああ、胸を押し付けられてよかったな、夏野」
「そうじゃない！　嬉しいけど、そうじゃない!!」
　ココに俺の味方は居ないのか！　世界に俺の味方なんて居ないのだ！
　エヘエヘとだらしなく笑っているロシア先生を剥がし、転がってる酒瓶を片付けてい

く。
「つーか、夏野、オメェ告白されたらしいじゃねぇか」
「あー……らしいッスね」
「あら、女の子が好きな貴方なら泣いて喜ぶと思っていたけど？」
「いや、そりゃぁ、まあ……」
「歯切れが悪いなー。お姉さん達に相談してみなさいな」
「お姉さん？」
「あ？」
「スイマセン。なんでもナイデス」
「政府との繋がりも切れたんだろ？　なら後はテメェの都合で考えりゃいいじゃねぇか」
「いや、まあそうなんですけど……なんつーか、セシリアさんに自分が相応しくないと言いますか」
「……お前、難儀な性格してんなぁ」
「難儀、なんスかね？　そもそもセシリアさんが俺に告白したのだって何かの間違いだと思ってますし。いっそ知的興味からの告白とかって言われた方が俺としては納得出来るんですよね」

うん。そっちの方が理解出来る。
二人目の男性ＩＳ操縦者として、ＩＳにパーツとして見られている人間として、興味が出てきて、ソレを好意と勘違いして告白した。しっくり来る。
俺が神妙に頷いてると複数の溜め息が聞こえた。
「えぇ……なんで皆さん頭を抑えてるんスかね」
「いえ、いいわ。貴方が奇怪な性格をしてるって事は十分に理解したから」
「こう、もっとあるだろ。相手の事を想うと心が暖かくなるとか」
「……貴女って意外に乙女なのね？　もしかして酔ってる？」
「酔ってねぇよ!?　下戸だよ！　悪ィか！　乙女で！」
「いえ、悪いという話じゃないわ。運命の人が迎えに来てくれるまで待ってなさいな」
「ふ、フフン。アタシには彼氏がいるし」
「ちょっと待ちなさい。そんな話聞いてないわよ」
「婚約中の彼氏がいるんだよねー」
「ちょっと詳しく聞かせて貰おうかしら？」
「どうしてそんなに怒ってるんだよ!?」
「怒ってなんて無いわ。ええ、怒ってる訳がないでしょ？」
「お、おう。夏野！　助けてくれ！」

「お疲れ様でしたー」
「夏野オ!?」
なるべく急いで管理室から出て行く。逃げなければ（使命感。
満足に動かない手を見つめて溜め息を吐き出す。
俺がセシリアさんを好き。否定はしない。美少女だし、料理が不味い以外は欠点らしい欠点はない。けれど、相手が俺という時点で間違っているのだ。
高嶺の花なんてモノじゃない。天と地下ぐらい差があるし、むしろ俺がセシリアさんにお願いして奴隷にしてもらう位がちょうどいいかも知れない。
奴隷になりたい。そのまま命令されて、失敗して、罵倒されて、踏まれたい。踏まれたくない？

セシリアさんを思うと心が暖かくなる？　ならない。ただソコにはセシリアさんという存在が浮かぶだけだ。ソレ以外に何を思えというのだろう。
恋愛という感情は理解出来る。だからこそ一般知識として鈴音さんのフォローは出来る。
けれど、自分に向けられるなんて意味の分からない事は知らない。
上辺だけの感情を言えば、セシリアさんに好きと言える。そりゃぁ、美少女だし。頭

もイイし。

けれどソレはセシリアさんの為にはならないだろう。だからと言って酷く振るという選択肢は無い。

いや、そもそもセシリアさんは「今は返事を求めて無い」と言っていたし……。きっと俺への興味は自然と薄れるだろう。うん。そうに決まってる。

そうに、決まっている。

◆◆

九月三日。二学期初めての実技訓練は一組二組で合同で行われた。

空で戦いを繰り広げている一夏と鈴音さんを眺めながら戦闘のデータを纏めていく。

以前も言ったけれど、一夏が鈴音さんに……というよりは白式が甲龍に勝つには必殺の一撃が必要であり、ソレを入れる為にはある程度のフェイクが必要であり、ソレだけに賭けて戦えばいい。けれど、ソレには相応に操縦者の技量が必要になる。

結果は言うまでもない。一夏の負けである。

「よ、負け犬！」
「お前さ、もっと遠慮とかしようぜ」
　前半戦と後半戦を終えて、俺たち二人はロッカールームへと入った。データを纏めて織斑先生に渡した俺は少しばかり遅れて入ったので、着替えていた負け犬と目があったのだ。
「つーか、お前はもっと学べよ。マジで」
「何がだよ」
「何回同じ方法でエネルギー尽きてるんだよ……データ取ってた俺の気持ち分かるか？
　あーはいはいイツモのイツモの」
「ぐっ……仕方ないだろ。零落白夜も新しく出来た雪羅も消費が激しいんだから」
「だからもっと考えて使えって話だよ。ほい、データ」
「穂次の癖に正論を言いやがって。ありがとう」
「伊達に政府のスパイはやってねぇ、って話だよ」
「……お前さ、俺らを切り離そうとしてないか？」
　一夏の言葉に俺はキョトンとしてしまう。
　そんな俺に対して一夏は構わず言葉を繋げていく。
「そうやって政府のスパイだからって理由で嫌われようとしてないか？」

「そそそそんな訳ナいヨ!?」
「おう、分かりやすいな」
「まあ冗談はさておき。別に嫌われようとはしてねーよ。嫌われるのは当然だと思ってるけど」
「千冬姉の頼みだったんだろ?」
「ってもデータを売ってたのは本当だしな。つーか俺としてはこうやって変わらずに接される方が謎なんだけど?」
「穂次を嫌うなんてあり得ないだろ」
「……なるほど。やっぱり貴様ホモか!?」
「どうしてそうなった……」
　呆れた様に溜め息を吐き出した一夏に対してヘラヘラと笑いを浮かべてしまう。
　内心ではさっぱり意味がわかっていない。織斑先生の命令で、二重スパイとは言え政府に情報を売っていたのは本当だし、ある程度の警戒は持ちあわせてもオカシクはない。けれど、一夏の対応は変わらず、以前と同じである。
「普通、もっと警戒するとかあるだろ」
「穂次を警戒して何になるんだよ。というか、もう裏切らないんだろ?」
「裏切る意味が無いし、裏切った後に行く場所も無いからな」

「じゃあいいだろ」
「そういうモンか？」
「穂次は変な所で考え過ぎなんだよ。いつもみたいにもっと軽く考えろって」
「軽く、ねぇ」
「逆にお前は俺が裏切った後に戻ってきたら普通に受け入れるだろ」
「……いや、とりあえずボコボコにする」
「ヒデェ」
「でもまあ、一夏なら何かしらの理由もあるだろうし、納得もする」
「じゃあソレでいいさ」
一夏は俺の頭をベシリと一発叩いて、爽やかな笑みを浮かべた。このイケメンめ……。
俺は叩かれた頭を包帯の巻かれた手の平で撫でて、一夏に溜め息を吐き出す。
「ほら、制裁も終わっただろ。コレで万事問題無しだ」
「お前、馬鹿だろ」
「お前にだけは言われたくねぇよ、馬鹿」
「なんだと!?　馬鹿って言ったやつが馬鹿なんだよ！　ばーか！」
「お前が最初に言ったんだろ！　バーカバーカ！」

「俺は馬鹿じゃないですー！　阿呆ですー！」
「お、おう。墓穴掘ってるぞ、穂次」
「はっ!?」
「素かよ……頼むぜ、親友」
「任せろ、相棒。お前がホモだって事は一部女生徒に広めとく」
「ソレは広めちゃダメな人に広めるつもりだよな！」
「当たり前だろ！」
　俺は何かから逃げる様にロッカールームから飛び出した。一夏も何かを追いかける様にロッカールームを飛び出した。
　よくわからないけれど、顔は自然と笑えていた。

「あたしの二連勝よ、ほらほら何か奢りなさいよ」
「うぐぐぐ」
「くっ、俺も鈴音さんに何か奢りたかったなぁ！　残念だなー！　一夏は二連敗しちゃったもんなー！」
「煽るのはやめろ！」
「別に穂次も奢ってもいいのよ?」

「一夏が払ってくれるってよ」
「コイツ、逃げやがったな」
当然である。コレは一夏の権利なのだから、一夏が使うしかないのだ。
あー、残念ダナー。
食堂までやってきた俺たちを呆れ顔で迎えたいつものメンバー。そう、いつものメンバーである。
「穂次さん？」
「ん？　どうしたの？　セシリアさん」
俺はセシリアさんに顔を向けてヘラリと笑ってみせる。至って自然に、いつもの様な動作だったと自負する。
そんな俺をジトリと見たセシリアさんは少し満足気に微笑んで「なんでもありませんわ」と言葉にした。何処か弾んで聞こえたのは気のせいだろうか。
「それで、シャルロットさんはどうして俺を睨んでらっしゃるので？」
「別に睨んでる訳じゃないけど？」
「いや、物凄く視線がキツイんですが？」
「睨んでる訳じゃないけど？」
「アッハイ」

絶対ウソダゾ！

コレが睨みの中に入らなかったら織斑先生の睨みも普通の視線に早変わりだ。いったいどうしたというのだ。

「ふっ、まさか俺に惚れてしまったんだな！」

「はいはい。惚れてるから食券を買いに行こうね」

「なんだろう、ぞんざいな扱いを受けてる気がするぞ」

「むしろ穂次が適当な扱いじゃない時があっただろうか……いや、無いな」

「おう、一番キツイ扱いをしてた篠ノ之さんの言葉じゃないんだぜ！」

「……そうだな。スマン」

「いや、謝らせたかった訳じゃないんですが」

「そうか。まあ受け取っておけ」

「アッハイ」

「あと、私も名前で構わないぞ」

「ありがとう！　モッピー！」

「殺す」

「申し訳ありませんでした！」

刀も何も差してない腰に手をやった瞬間に滲みでた殺気が俺に刺さる。実際怖い。

あの腰には無色透明の刀がきっとあるのだ。不可視の刀とか怖すぎィ！

へへっ、見ろよ俺の脚、震えてるだろ？　トイレに行っててよかったぜ。

「穂次は何を食うんだ？」

「一夏と一緒のモノがいいな（はぁと」

「日替わりだな。俺はサバ味噌煮定食にしよう」

「流すのが上手くなったなぁ」

「お前の所為だよ」

俺に食券を渡して来た一夏に日替わり定食分のお金を返そうと財布を出せば「別に構わない」と言われた。精神面までイケメンかよ、コイツ……。

「ありがとう一夏」

「お前の部屋で入り浸ってる時に色々貰ってるからな、そのお礼だよ」

「お、おう。別にソレは気にしなくてもいいんだゼ！　俺も一夏に料理を軽く教えてもらってるし」

「なんだと？」

「ふぁっ!?　ラウラさんどうしたんだ!?」

「嫁よ、穂次に料理を教えているとはどういう事だ？」

「時間が空いた時にちょっとな」

「穂次、詳しく聞かせてもらおうか」
「ひえっ、ラウラさんも箒さんも人を殺せる目をしてますよ……！」
　この二人は絶対に人を殺せると思うんだ……！　おっとこれ以上は絶対に思考がバレるから考えないようにしよう。
　つーか、やっぱりデケェな、箒さん。
「穂次さん？」
「穂次？」
「痛い痛い！　腕を引っ張らないで！　怪我してるから！」
　俺の手を引っ張ったセシリアさんとシャルロットさんによって俺は席に座る。半ば強制的に俺の両隣にはシャルロットさんとセシリアさんが居るわけで。
「アッハッハッ、美少女に囲まれるなんて嬉しいなー」
「声が震えてますわよ」
「スゲー緊張してるから許して」
　誰だよ、美女も三日見れば飽きるとか言った奴は。飽きるどころかまだ緊張するんですが……。
　そんな俺に何を思ったのかセシリアさんとシャルロットさんの距離が詰まる。触れそうになって怖いからやめてほしい。

「あのー、近く無いッスかね？」
「あら？　近くて何か問題があって？」
「そうだよ、穂次は手が使えないんだし僕達が食べさせてあげるよ？」
「恐れ多いんですが……つーか、指の間で挟む程度は出来るからフォークとかはギリギリ使えるんだぜ」
「僕達が食べさせてあげるよ」
「あ、提案が確定になった」
俺に逃げ道は無いんだなって。
俺の日替わり定食と自身のサバ味噌煮定食を持ってきた一夏が俺の状態を見て何かを察した。
助けて一夏！　俺は視線で訴えた。一夏は神妙に一度頷いた。フォークは二つに増えた。
裏切り者め!!
「ほら、穂次。あーん」
「いや、自分で食べ――」
「あーん」
なんだ、この有無を言わせない感じは……。怪我人だからか？　くっ、美少女に「あー

ん」されるとか嬉しい限りだが、俺が求めているのは誰にも邪魔されず、自由でなんというか救われてなきゃあダメなんだ。二人で静かで豊かで……。

　俺は口を開き、シャルロットさんはソコに解した鮭の身を入れた。美味しかった。

「穂次さん。あ、あーん」

「セシリアさんもですか……」

「羨ましいぞ、穂次」

「鈴音さん、やってほしいそうですよ」

「い、一夏、あーん」

「いや、怪我してなイタタタタタ！　ラウラ！　俺の手はそれ以上曲がらないぞ！」

「そうだな」

「ラウラ!?」

「ざまぁ」

「穂次さん?」

「すいません、口開きます」

　有無を言わせない様な圧力が腕に掛かった。いや、柔らかかったけど、コレは圧力なのだ。ふにゅりと温かい何かに腕が挟まれたけど、これ以上考えてはイケナイ。俺の村雨がエレクトしそうだ。

「ん、シャルロットさん。俺をそんなに睨んでどうしたんスか？」
「別に」
「えぇ……」
何も無くても睨まれるのかぁ。俺が一体何をしたというのだ。皆を裏切ったな、そうだったわ。
「それにしても、穂次にも言われたけど、やっぱりエネルギー運用をちゃんと考えた方がいいのか？」
「シールドエネルギーを使う武装が二つに増えたんだからそりゃそうでしょ」
「つーか、改めて白式のデータを取ったけど、大型スラスターも結構数値出てたぞ」
「速度の数値か？」
「消費エネルギーの話だろ？」
「だよなぁ……」
「ま、まあそんな悩みも私と組めば万事解決だな！」
「何も解決してないと思、いや、何でもねーです」
箒さんにスゲー睨まれた。俺は両手を上げて降参を示しておく。
一夏の問題は消費エネルギーであり、紅椿ならばソレを解決出来る。けれど、ソレは一夏の悩みを解決している訳ではない。

「何を難しそうな顔をしているか。お前は私の嫁だろう。故に私と組め」
「……一夏ってロリコンだったのか」
「おい、穂次。ラウラも同い年だからな？」
「ざんねん、一夏はあたしと組むの。幼馴染だし甲龍は近接も中距離もこなすから、白式と相性はいいのよ」
「……一夏はロリコンだな！」
「おい穂次、今あたしの何処を見てそう言ったか言ってみ？」
「し、身長ダヨ！」
　声が裏返ってしまった。本当に身長である。いや、うん、決して鈴音さんのちっぱいを見て言ったわけじゃない。ホントダヨ！
「んー……でもなぁ。別に最近ペアのトーナメントがある訳じゃないし」
「まあ近日中には無いな」
「ん？　先にはあるのか？」
「少なくとも来年にはタッグマッチがあるだろ？」
「来年かよ……まあ来年なら穂次と組むかな」
「……お前、」
「ホモじゃねぇよ」

「返しが早いなぁ……つーか、なんで俺が睨まれてんの？」
「俺に聞くなよ」
お前が原因なんだよ。
まあ理由を一夏に聞いた俺が悪かった。
「穂次さんは誰と組むんですの？」
「別に誰でも。どうせ俺の出来る事は相方を守って、鬼の爪か村雨で相手を叩き斬る事だけだし」
「アッサリ言うんだね」
「身の程を弁えてますから」
自分の出来る事だから言える。自信がある、という訳ではない。出来るから、言うのだ。
「ま、言うなら中遠距離で射撃出来れば御の字かなぁ」
「中距離……」
「遠距離……」
「近距離は？」
「刀だけの奴は勘弁しろください」
「今なら荷電粒子砲もあるぞ！」

「ぶっちゃけ、村雨と白式の相性は悪いんだよ。相方にするにしても、相手にするにしても」
「そうなのか？」
「村雨の武装はほとんどエネルギー武装だから白式には効かない。逆に村雨の盾で白式の攻撃は無意味。相方だったとしても戦闘方法が真逆なんだよ。短期戦型の白式と長期戦型の村雨だし」
「……臨海学校の時はいい感じだったけど？」
「アレはお前が途中で入ってきたからだよ。両方共初期状態だったらチグハグって話」
だからお前とのコンビはノーである。
あと俺の両隣の美少女二人はどうして無言になってるんですかね……。コレガワカラナイ。

冠する少女

学園最強。この称号を手にする者は生徒会長として知られている。いいや、正確に言うなら、生徒会長という称号を手にするのに学園最強でなければいけない、らしい。らしい、というのは人伝に聞いたから正しい表現だろう。あとは政府からの諸注意に織斑先生と一緒に生徒会長様の名前も送られてきたのだから、きっと情報は正確なのだろう。

「おかえりなさい！　ご飯にする？　お菓子にする？」

いや、うん。どうして俺の目の前にはその学園最強様がいらっしゃるのだろうか。

ああ、美人だ。更に言えば制服にエプロンという実にツボを抑えた格好であるし、その制服とエプロンを押し上げているおっぱいは実に素晴らしい。慎ましやかという訳でもなく、デカイと一言が言えるという訳でもない。ただソコに在って、ソレが当然であり、ソレが美しいと言える程に、素晴らしい。

スカートからスラリと伸びる脚。瑞々しい太もも、膝小僧、黒いソックスにスリッパ。

ＩＳと共有している視覚を、ハイパーセンサーを用いてその全てを一瞬で把握し、悔やんだ。

なぜＩＳには透視機能が無いのだろうか。篠ノ之博士に相談してみたら付けてくれるだろうか？　いや、そもそも村雨には拡張領域が無い。

ならばどうすればいい。考えろ、考えろ、考えるんだ、夏野穂次。その全てを賭けて、この美しい女性のおっぱいやパンツを見るのだ！

「あら？　聞いていたよりもノリが悪いのね」

「あ、スイマセン。どうしたらおっぱいを見れるか考えてました。つーか考えてます」

「お姉さん、そこまで正直に求められると困っちゃうなぁ」

「お姉さん?!　なぜ生き別れのお姉さんがここに……逃げたのか？　自力で死から脱出を!?　お姉さん！」

「私に弟は居ないわ」

「あ、ハイ……スイマセンデシタ」

思わず正座になってしまった。つい癖の様に土下座までしてしまった。我ながら自然な動作だったと思う。

……白か。

「いやぁ、そこまでされるとお姉さんどうしていいかわかんないなぁ」

「いえ、俺がしたくてしてる事なので、お気になさらず！　スイマセンデシタ！　パンツ

素敵です！」

「……」

何かに感づいたのか、二歩ほど後ろに下がられてスカートが抑えられた。くっ、しかし悔いる事はない！　既に目的は達成されたのだ！

美女に近しい美少女の恥じらう顔とパンツ。これだけで十分だろう。おっぱいもあれば十二分だったな！

「あー、どうしてそんなジト目で見てるんですかね？」

「ある程度知っていたけど、その物言いはどうなのかしら？」

「……おパンツがとても素敵で俺の目には眩しく映りました」

「ちょっと待ってくれるかしら？」

眉間を指で抑えて何かを耐えるようにする学園最強のお姉さん。まるで頭痛を耐えている様だ。

とりあえず、立ち上がって紅茶の準備をしておこう。俺はこの制服エプロンのお姉さんから選択を与えられて、『お菓子』を選ぶのだから。

「美味しいわね……」

「そりゃぁ、どうも。なんせ詳しく教わりましたからね」
　一口飲んだ紅茶に対して納得いかない様に呟いた学園最強のお姉さんは相変わらずその朱色の瞳を細めて俺を見つめていた。美人にここまで睨まれていると、なんというか、照れるぜ。
「さて、じゃあ本題に入りましょうか」
「遂に俺がお姉さんと結婚するって話ですね！」
「君なんてお断りね」
「じゃあ妹さんを口説くしかないか……」
「ぶっ飛ばすわよ？」
「スイマセン、本気で殺す気にならないで下さい死んでしまいます」
　席からやや腰を上げていつでも逃げれる準備だけはしておく。目の前にいるのは俺の知っている鬼ではない。けれどもその領域に踏み込んでいる存在である事は確かだ。鬼達に毎日殺されかけてる俺が言うんだ、間違いない。
　ビビってる俺に対して少しだけ愉快そうに、そして呆れた様な顔つきになったお姉さんは威圧感を鎮めた。どうやら許されたらしい。
「次に簪ちゃんの事を言ったら、わかるわね」
「はイ」

許されてはなかったらしい。

そもそも目の前のお姉さんの妹さんとの接点はそれほど持っていない。以前に出向いた時もスゲー引かれてたし。

「それで？　本題って何ッスか？　心当たりがそれほど無いんですけど」

「あら。あるにはあるのね」

「そりゃぁ、こんな夜半にお姉さんみたいな美人が、制服エプロンで俺を迎えてくれたんですから。本題がソレでも俺は驚きませんよ。心臓は煩いぐらいにバクバク鳴ってますけど」

「織斑君に上手く取り次いでもらおうと思って」

「……ロッカールームで会ったんじゃないッスか？　午後の実技終わってから一夏から聞きましたけど」

「あー……ソレね」

随分と歯切れが悪そうにそう言ったお姉さんは目を少し逸らして、言葉を探す様に口をモゴモゴと動かした。

「実は、ロッカールームに入って目隠ししたら凄く警戒されちゃって……」

「……自業自得って知ってます？」

「だって、ほら！　ミステリアスな感じで、こう、秘密多きお姉さんをしたかったのよ！」

「自業自得じゃねぇか！　自分のミスを他人で尻拭いさせんなよ！」
「私だってまさか織斑君が私の事を忘れてると思わなかったもん！」
「いい年して「もん」とか言うなよ！　可愛いな！」
「君と一つしか違わないわよ！　ありがとう！」
　互いに食いかかる様に言い合い、少しして落ち着いて紅茶を飲む。
　一息。
「ほら、君が政府側に攫われたじゃない？　それで人を簡単に信じるなー、とか言われたみたい」
「……いや、学園側の人間なんだから信じろよぉ。不器用か、アイツ」
「あら、実は嬉しかったり？」
「なんでツスか……」
「ほら、愛しの織斑君が君の為に人を簡単に信じなくなった、なんて独占的で素敵じゃない？」
　駄目だ、遅かったんだ。この学園は……!!
　何処で間違えた、何処がおかしかった！　どの選択が選ばれた!!
　俺が頭を抑えていると前からクスクスと愉快そうに笑う声が聞こえた。
「一応言っておきますけど、俺と一夏はそんな関係じゃないッスよ」

「そうなの？　学園ではもっぱらの噂だけれど」
「そもそも一夏が俺に見向きする訳もねーでしょ」
「……あ、そう」
「なんスか、意味深な」
「別に。それで、一夏君との橋渡しはしてくれるのかしら？」
「報酬次第ッスね」
「現金ね……」
「そりゃぁ、お金が大好きで仕方ないッスからね。最近、政府を裏切って報酬が無かった所ッスから」
「……そうね。私の下着を見た事をチャラにしてあげる」
「……もっとちゃんと見たいです」
「欲望に忠実すぎない？」
「人間ですからね。欲望の為に動いてからこそでしょ」
「……まあいいわ」
「マジっすか!!」
「どうせ録画してるからソレで我慢してなさいな」
なぜバレているのだろうか。俺のＩＳの機能は決して知られていない筈なのに……。

少し考えた素振りをしてみれば、大きく溜め息を吐き出された。どうやら謀られたらしい。
「ま、任務了解ッス。一夏には生徒会長さんの事をよく伝えときますよ」
「美人で優しいお姉さん、ってよろしくね」
「あの美人のパンツは白だって」
「……ブラも同色よ」
「超絶美人で強さも兼ね備えた優しきお姉様だって伝えさせていただきます」
「よろしい」
スマン、一夏。俺は欲望には勝てないのだ！
出来るならば柄とかも見せていただきたいが、ソレを求めるにはコレ以上のお願いを聞かなければイケナイ。ソレは、困る。
くっ、どうすればいい。どうすれば俺は目の前の美人の下着を取得する事が出来るんだ……!!

◆
◆

翌日。意外にもアッサリと一夏は俺の言葉を信じた。
「へイ！　一夏！　昨日お前が会った超絶美人で強さも兼ね備えた優しきお姉様と話したぜ！」
「は!?　どういう事だよ！」
「つーか、生徒会長じゃん！　どうして知らないんですかね……」
「大丈夫か穂次、何もされなかったか？」
「怖いぐらいに過保護だな。あの人はそれほど警戒を抱く意味はねーよ。保証する」
「……そうか。穂次がそういうなら」
「……お前」
「ホモじゃねぇよ？」
「ああ！」
そんな会話だった。ああ、間違いない。ただ付け加えるとしたら、その会話の後よく喋る女の子に拝まれながら「ごちそうさまでした！」と言われたぐらいだろうか。複数人に言われたのがなんとも言えないけど。
ともあれ、早朝から一夏を待ち、偶然を装って食堂で鉢合わせた俺は宛ら恋する乙女の様だったと、その女の子に言われた。いや、違った。
ともあれ、早朝に一夏の疑念や警戒を解いたのには訳がある。今月の半ばにある学園

祭の説明にＳＨＲと一限目の半分程を使った全校集会があるからだ。
　壇上に立つのは当然、学園最強の称号であり、生徒会長である超絶美人で強さも兼ね備えた優しきお姉様が立っている。
「やあみんな。おはよう」
　一瞬だけ俺と、その隣にいる一夏に対して目を合わせた彼女がニンマリと笑みを浮かべる。
　だから怪しまれるんじゃないッスかね……。内心溜め息を吐き出したい気持ちでいっぱいだった。
「なあ、穂次。本当に問題ないのか？」
「あー……イタズラ好きな猫みたいな人、ってのが俺の印象」
「……それ大丈夫なのか？」
「大丈夫だろ」
　たぶん。
　いや、一夏にとっては無害に等しいだろう。そもそも昨晩彼女が俺を尋ねたのだって色々と思惑があるのだろうし。俺にはさっぱり分からないけれど。
　生徒会長、学園最強、超絶美人で強さも兼ね備えた優しきお姉様こと更識楯無さんの自己紹介も終わり、話は学園祭の話へと移っていく。

「今年は特別ルールを導入するわ！　名付けて
『各部対抗織斑一夏争奪戦　～今ならオマケもついてくる～』！」
ざわめく周囲を他所に一夏は俺の腕を肘でつつく。
「……なあ、オマケ。ホントに大丈夫なのか？」
「まあ待て景品。大丈夫かどうか俺も疑問に感じてきた」
互いに顔を見合わせて溜め息を吐き出した。当然の様にその溜め息は姦しいを超えている周囲に容易く掻き消された。
がらじゃない事をしたから、というか更識会長のお願いを変に行使したからか、それともセシリアさんとシャルロットさんが俺を睨んでいるからだろうか。何にしろオマケにされる事は俺のキャラじゃない。
むしろ俺がお願いして女子クラブに入る。コレだろう。
「一夏、思い出したぞ……ッ！」
「なんだよ、穂次」
「制服エプロンは、イイな！」
「今の話と関係無さすぎるだろ!!」
一夏、安心しろ。お前に味方なんて居ないのだ！俺は美少女の下僕だぜ！

第二王女の決意

学園祭の出し物に関して俺は一切関与していないとココに明言しておこう。
本当だ。敢えて言っておくとすれば名前を『ご奉仕喫茶』にしたぐらいである。ソレには深い訳があるのだが、今はいい。
「お前の入れ知恵だろう？」
「俺じゃないッス。マジで」
「お前じゃなければどうしてラウラがメイド喫茶などと発言したんだ！」
「マジで俺じゃないですって！　可愛い教え子が俗世に染まったからって俺の責任にするのはどうなんですかね、織斑先生」
ともあれ、俺は絶賛尋問中なのだ。ちなみにする方ではなくて、される方である。
元々その血液に白血球ではなくて鬼の成分が含まれているであろう尋問官、織斑千冬は〝まだ人類〟である弟の報告を受けてすぐさま俺を職員室に呼び出した。
まあソレで見事なまでに俺は無実の罪で怒られそうになっている訳である。あまり言いたくもないけれど拷問にも似た何かを短期間で味わっている俺としてはこんな尋問屁でもない。足が震えているのは目の前にいる人外への武者震いだ。決して怖いか

らでじゃない。
　俺は数分前の過去の俺を褒めただろう。なんせトイレに行ってなければ別の理由で怒られていただろうからだ。
　怖い。
「まあいい。いや、よくはないが。ボーデヴィッヒが世の中の事を知ることはいい事だろう」
「俺が怒られ損な気がするんですが……」
「怒られ得だろう」
「アッハイ」
　イヤー得シタナー。こんな美人に怒られるなんて俺はなんて幸せなんだろーなー。
……ハハハ。
「それで、ラウラさんの件で怒る為に呼んだんじゃないんでしょ？」
「……ん？」
「ええ……」
「残念ながらお前に任せる仕事は無い」
「そりゃぁ残念ダナー。やったぜ」
「ああそうだ、コレをやろう」

「……有るんじゃないスか」
「仕事ではない」
　受け取った厚みの無い茶封筒を開けばチケットが複数枚ある。手にとって数えれば二枚。
「デートの誘いッスか？」
「学園祭の入場券だ。どうだ、中々いい出来だろう」
「……ああ、なんだ仕事が出来た自慢でしたか」
「何か言ったか？　夏野」
「いいえ何も。織斑先生」
　両手を上げて降参を示せば織斑先生は「ふん」と鼻を鳴らした。
「それで？」
「ソレはやる」
「……嫌味か何かッスかね？」
「ああ」
「ヒェ……まあ貰えるなら貰っときますけど」
「では話は以上だ。戻れ」
「ハイ」

廊下に出て思わず溜め息を吐き出してしまう。
手に持った茶封筒を見つめ、誰に渡したものかと考えてしまう。
一応、俺によくしてくれた政府の方々の連絡先は知っているけれど、ソレは拙いだろう。
もう一度、小さく息を吐き出して前を見る。水色が居た。目が合う。逸らされた。
「えっと……」
「あー、コンニチハ。更識さん」
「こ、コンニチ、は……夏野君」
「俺の名前を覚えてくれていた様で何より」
「姉が……更識会長に要注意って言われて」
あの美人は一体妹に何を教えたのだろうか……。別にイイのだけれど。
肩を落として落ち込んでみせれば小さく笑い声が聞こえて、更識さんを見れば、しまった！　という顔をしている。
「おっと、職員室に用事だっけか」
「えっと、うん」
「そりゃぁ失礼。退くよ」
扉の前から退いて、窓に背を預ける。そんな俺をちらりと見た更識さんは職員室の前

に立ち、一つだけ深呼吸をしてから職員室に入っていった。
　更識会長が入れ込むのも分かる気がした。いや、行動や容姿で一般論を自身に説いた俺と妹を愛している更識会長とはまた別の感情だろう。
　そんな物思いに耽っていたら職員室から水色が出てきた。
「あ……」
「奇遇ですね更識さん」
「えっと……」
「あー、ごめん。君とちょっと話をしたくてね」
「……？」
「ほら、可愛い女の子とは是非お近付きになりたいじゃないか」
「可わッ!?」
　酷く驚いた様に目を見開いた更識さん。言われ慣れてないのだろうか。まあ姉が姉だから仕方ないのかも知れない。
「まあ提案もあってね」
「……提案？」
「ああ。更識さん、一夏の事を良く思ってないだろ？」
「……」

「スゲー警戒されてるんですが……。まあ合ってた様で何より」
「どう、して……知ってるの？」
「実は俺、魔法使いなんだ」
「嘘」
渾身のドヤ顔がジト目で睨まれる事で崩れてしまう。
肩の力を抜いてヘラヘラと笑いを浮かべておく。
「否定が早い事で。ま、一夏の事は色々調べてたからな。更識さんの事を知ったのはソコが初めて」
「……調べてた？」
「おっと、言い過ぎたかな」
ヘラリと笑いを張り付けて言葉を止めれば、俺を睨みつける更識さん。
更識会長を基準に考えるのは間違っているだろうけど、それでも目の前の更識さんの頭はイイ方なのだろう。
「何が、目的？」
「目的？　……そうだな、更識さんとデートがしたい、かな」
「ふぇ？」
「可愛いなぁこの人」

俺の一言に呆気に取られたのか変な声を出した更識さんは目をパチクリとさせて俺を見た。

思わず出てしまった言葉に嘘はない。更識会長も納得の可愛さである。

「じゃあ次の休日に街の駅前で待ってるよ」

返事は聞かずに歩き去る。ついでに茶封筒でも落としておけば完璧だろう。

周りの評価と彼女本人と話して大体の性格は把握出来たし。デート、と一応は言ったけどまったく俺にそんなつもりは無い。

来るにしても、来ないにしても。彼女は俺に会いに来るだろう。

あとはコレをセシリアさんやシャルロットさんにバレない様にしなくては……。殺されるかも知れない。

来るかも知れない未来を考えてゾクリと悪寒が感じたけれど、どうしてか窓に写る夏野穂次は笑っていた。

◆◆

彼の部屋の前で一つ深呼吸をしておく。

夜も深まり、そろそろ日を跨ぐ時間であるけれど、彼はきっと起きている筈だ。なんせ夏野穂次はずっと隠れて努力し続けているだろうから。

きっとソレは彼が怪我をしていても変わらないだろう。たぶん。

私しか知らない穂次、というのは優越感もあるけれど。私の知っている穂次、という言葉はあまり好きじゃない。

意を決して、扉をノックする。出来るなら返事も何も無ければいい、と心のドコかで思っているのは仕方の無い事なのかも知れない。

「はいよぉ……シャルロットさん？　こんな夜中に何用で」

開かれた扉から顔を出した穂次の頭の上にはタオルが乗っていて、短い髪の先からは雫が今にも落ちそうだ。いつか匂ったボディーソープの香りと少しだけ覗いている彼の肌。見た目や雰囲気とは違ってちゃんと筋肉が付いているのは彼の努力の成果なのだろう。

おっと、これ以上はいけない。

「ちょっと、ね。入ってもいいかな？」

「あー……まあどうぞ」

「お邪魔します」

ブツブツと「女の子がこんな時間に男の部屋って……あ、俺は男として見られてなかったな」とか呟いている穂次は放置しておく。

一応、言っておくが私だって緊張するんだ。あと私は何度もアナタに惚れてるとは

言ってるんだけどなー……。まあ彼はどうせ認めていないのだろうけど。
「さて、説明してもらおうかな」
「あー、えっと、シャルロットさん？　何を説明すればイイんスかね？」
ニッコリとちゃんと笑顔を作れているか我ながら分からない。穂次が私を見て引きつっているからきっと私の顔はさぞかし素敵な笑顔になっているのだろう。
穂次は悩む様に両腕を組み天井に顔を向けている。果たして彼は私に幾つの秘密を持っているのだろうか。いや、彼の事だから秘密なんて無いのかも知れないけど。
簡素なキッチンから質素なマグカップを取り出して、机を挟んで彼の前に座る。
「いる？」
「ありがとう」
そんなやり取りをして穂次は私のカップにポットから紅茶を注がれる。一口飲めば、舌に広がる僅かな苦味と通り抜ける香り。相変わらず紅茶を淹れるのは上手い。
「さて、何か思い当たる事は？」
「ありすぎて困ってるんだけど」
「……最近、私の下着が無くなってるんだけど知らない？」
「最近なら俺じゃない。まったくケシカランな！」
「過去なら穂次なんだね……はぁ」

「シマッタ！」

嘘を言えば聞きたくもない事実を知ってしまった。ちょっとだけ恥ずかしい。無くなった下着を思い出して、余計に顔が熱くなる。

いや、違う。こんな事を聞きたくてセシリアが居ない時に来た訳じゃない。

「セシリアに何か言われたの？」

何か、と言いはしたけれど、内容は知っている。流れていた噂は信じるに値しなかったけれど、どうにも二人を見ていると事実なのだろう。

二人、と言うよりは穂次が問題なのだけれど。

どうにも違和感がある。セシリアにだけ一歩引いている様な、無理やりいつもの様に振舞っている様な。

私に問われた穂次は困ったように頬を掻き、視線を私から外して、一つだけ息を吐き出してから口を動かした。

「あー、告白された？」

「……ふーん」

「いや、俺だって何かの間違いだと思ってるから」

嘘だ。少なくとも、ヘラリと笑った彼が言った〝何かの間違い〟というのは嘘である。

セシリアは確かに穂次に告白をした。ソレは事実だろう。本人に聞いてないから真実かは知らないけれど、恐らく本当の事。

穂次自身はきっとソレを間違いだと思ってないのだろう。思おうとしているのかも知れないけれど。

私の知る穂次、なんて嫌いな言葉はあまり使いたくはないけれど。〝何かの間違い〟だと思っているのなら私の知る穂次は『告白された』という事実すら私に言わなかっただろう。なんせ、間違いなのだから。

そういう勝手に決めつけた穂次の人物像に穂次自身が当て嵌まるかなんて分からないけれど、少なからず穂次がセシリアを意識しているのは見て分かる。

羨ましい。

「えーっと、シャルロットさん？」

「え？　あ、うん。何？」

「いや、急に止まったから電源でも切れたのかと」

「私は充電式じゃないよ」

「ドコかに電池の蓋があるのかッ!?」

「違うそうじゃない」

セシリアの事を羨ましいと感じる反面、セシリアの事を尊敬してしまう。
こうして穂次と軽く喋る事すら出来なくなるかも知れない。そう思うと結構怖い。居心地の良い場所が無くなる。やはり怖い。
きっとセシリアはかなりの勇気を振り絞って彼に告白したのだろう。スゴイなぁ、セシリアは。
「それで、どうするの？」
「どうするって？　現状、どうにかするつもりはねーですなぁ」
「ふぅん……」
「どうしてそんなにジト目で見てるんですかね」
「別にィ」
好き、という感情を向けてもソレを理解されなければ意味は無い。自意識が薄いと言った穂次にしてみれば自身を好きになる理由がなければ納得も出来ないのだろう。たぶん。
告白に関してはちゃんと考えている癖に答えは出すつもりはない、というが彼だ。考えている分ドコかの唐変木よりも質（タチ）が悪い。
「それで？　その事実確認をしに来たのか？」
「ソレも、ある……かな」

「〝も〟？」

「ライバルに負けてられない……って言うのはちょっと卑怯かな？」

机に手を置いて身を乗り出す。

狙いを定めた後に瞼を強く閉じて、唇に柔らかい感触が当たる。

もっと硬いかと思ったけれど、男の子も柔らかいんだなぁ。なんて沸騰しそうな頭のドコかで冷静な感想が出てきた。

僅かに伝わる紅茶の香りと味を感じて、ようやく顔を離して、瞼を上げる。呆気にとられた穂次の顔が見えて、笑いそうになる。

セシリアに負けていられない、というのも本心だ。けれど、ソレを理由にするのは彼女に対しても、彼に対しても、自分に対しても卑怯なのだろう。

「何回も言ってるけど、好きだよ。穂次」

「……へ？」

熱くなる顔の熱を感じながら彼をジッと見つめてみせる。こうしないと、穂次は逃げてしまうだろう。だから、私は逃げてあげない。

自分すら見ない彼の視界にしっかりと私を映す為に。

彼の顔を眺めて数秒。赤くなる彼の顔を確認して私はやっぱり笑ってしまう。

いつもの関係になんて満足が出来なくなったのだ。だから決心した。だからに逃走

するつもりはない。
　これでも私だって、緊張するんだ。
「あー……」
　顔を片手で覆って天井を向いた穂次は弱々しく声を出す。隠れた顔はさっぱり分からないけれど、耳が真っ赤な所を見ればちゃんと私の言葉は届いた様だ。
　私だって顔は赤いのだろう。お互い様、というのは違うだろうけど。
　紅茶を飲んで心を落ち着ける。やっぱり美味しい。
「ぇー、何かの冗談とかじゃなく？」
「うん。私は穂次が好きだよ」
「マジか……ぇぇ……あー……冗談とかじゃ――」
「冗談でも、セカンドとしてのアナタに興味がある訳でもなくて。私、シャルロット・デュノアは夏野穂次の事が好きなの」
「……ちょっとだけ頭の整理をさせてくれ」
　両手で顔を覆って、ぁー、だの、ぅー、だのと唸りだした穂次を眺めながら紅茶を飲み込んでいく。
　こうして見ていれば分かるのだけれど、やっぱりコチラが向ける感情に関してはちゃんと悩んでくれる様だ。こう言うのもアレだけれど、こうして顔を隠しているのに何と

なく表情が分かる穂次は可愛いと思ってしまう。可愛く、愛おしい。
　微笑みをマグカップで隠しながら彼を眺めて数十秒。ようやく頭に整理が着いたのか、それとも整理を諦めたのか、大きく息を吐き出して穂次は紅茶を飲み干した。
「理解は出来ない」
「だろうね」
　スッパリと言い切った穂次に対して私はアッサリと言葉を返した。穂次は口をへの字にしている。
　冗談も出ない、という事はある程度彼は真面目にこの会話に意識を割いているのだろう。
「つーか、なんで俺なんだよ。一夏とか、一夏とか、一夏とか、居るだろ」
「ほら、一夏には穂次がいるから」
「その理論だと俺には一夏が居るんですがソレは……」
「ハハハ……まあ穂次がちゃんと考えてくれてるみたいでちょっとだけ安心したかな」
「流石にコレをテキトーにするつもりはねーですよ……」
「ありがと」
「……あー、どーも。俺って今上手く喋れてる？　自信無いんですけど」
「まだ大丈夫だよ」

「そりゃぁ重畳。出来れば全部冗談であってほしいけどな」
「ソレは無理だよ。私はアナタに惚れてるんだもん」
「……ぁー……うん」
小さく声を出した彼は私から視線を外して息を吐き出した。耳はやっぱり赤い。
「話してる限りで言うんだけど、俺がそういった感情に関してさっぱり理解出来てない事とか、シャルロットさんの告白が今も嘘だろとか思ってるとか、わかってると思うんだ」
「うん」
「あー、それでも?」
「そうだね。気にしない、とは言わないけど。私はアナタの事が好きだよ」
「……失礼、お嬢様。あんまり好き好き言われると俺の何かがガリガリ削れていくんですが」
「ふむ……理性なら願ったり、かな?」
「むしろ意識とかそういうレベルだ」
「えー。ちゃんと勝負下着を着てきたのに?」
彼の顔が真っ赤になる。コレは、ちょっと面白いかもしれない。
冗談めかして着ていたシャツのボタンを真ん中から外していくと彼は慌てた様に私

にタオルを投げてきた。
「な、な、何してですカ?!」
「冗談だよ。冗談。八割ぐらいは本気だけど」
「いいから隠して。目に毒だから」
「えぇ、酷いなー。ほらほら、可愛くない?」
「えぇい！　見せるんじゃありません！」
「穂次、逆に考えるんだ」
「何を」
「私の告白に答えを出すと、今スグにおっぱいを触ったり、それ以上が出来たり――」
「その為に答えを出すつもりはないから！」
「……そっか」
ちょっとだけ意外、というのは穂次に失礼なのだろうか。少し拍子抜けで、ちゃんと彼が考えてくれている事を理解して嬉しく思う。
シャツのボタンをしっかりと止めて、彼のベッドに横になる。
「……何してるんですかね」
「ほら、勇気を出したご褒美がちょっとぐらいほしいなーって」
「マジで襲うぞ……」

「ソレはそれで望む所だし、穂次はそうしないって知ってるよ」
出来ない、って言うと彼は普通に傷つくから決して言わない。溜め息を吐き出してガシガシと頭を掻いた彼は大きく息を吸い込んで吐き出すと同時に肩から力を抜いた。
「あー、それで？　その勇気を出したご褒美は何をお望みで？」
「うーん……抱きしめて欲しいかな？　ほら、前みたいに」
「あー……俺の理性が保つんですかね、ソレ」
「理性が無くなっても大丈夫だよ」
「問題しか無いんだよなぁ」
「ダメ？」
「ベッドでそういう物言いはいけませんよ、お姫様」
何度目かになる溜め息をもう一度吐き出して、穂次は明かりを消してベッドへと入り、私を優しく抱きしめた。
随分躊躇なく行動に移した彼だけれど、やはり何かを思ってなのか抱きしめる力は強くもないし、私に触れている部分はかなり少ない。
だから、ちょっとしたイタズラ心で彼に身体を寄せて密着してみる。少しだけ圧迫される胸と彼の体温を感じる。
瞼を閉じて呼吸してみれば、彼の香りとボディーソープの匂いを強く感じて、心が強

く脈打つ。
寝不足になるだろうなぁ、とドコかで考えながら、心地良い居場所を堪能する。
私だって緊張するんだ。心臓が高鳴っているのがその証拠だ。

助けてヒーロー！

更識簪は非常に迷っていた。迷い、悩んでいた。

怪しさしか出ていない夏野穂次という人物に関してだ。決して恋だとか、愛だとか、少なからずいい感情ではなく、ソレこそあんな奴に恋している人なんてきっと居ないだろう、というのが簪の彼の印象である。

意外に彼の情報というのはアッサリと集まった。曰くヘタレである、と。いやいや、どうして人と成りを聞いたのに十人中八人が彼の事をヘタレと称したのだろうか。自分の感じた胡散臭さは一体何だったのだと言わんばかりに馬鹿みたいな彼の評価が自分に集まってきた。

ヘタレ、お調子者、気軽、ヘタレ、受け、などと怪しんでいる自分が心配になるぐらいに夏野穂次という人間は散々な評価を受けていた。大丈夫なのだろうか。

ソレに加えて姉が『夏野穂次には注意しなさい』と電子メールが送られてきたのだから、余計に簪は夏野穂次という人物がさっぱり分からなくなった。

怪しい、という印象は拭いきれないドコロか怪しすぎる彼。お門違いな恨みを抱いている織斑一夏を調べ、そして自分をも調べたらしい夏野穂次。

様々な要素を加味して、更識簪は彼をスパイなのではないだろうか？　と判断した。尤も、まだ不確定な判断である事も自覚している。

ならばどうするべきか。

姉に伝えるべきか？　否。そんな事をして姉の仕事を増やす訳にもいかない。それに、不確定な情報にきっと完璧な姉は眉間を顰めるだろう。

ならば、自身の友人であり従者に伝えるべきか？　否。本音（トモダチ）を巻き込むのは気が引ける。それにヘタレだと評価したのは本音だ。

ならどうするか。どうすればいいのか。

簪はしっかりと迷った。迷ったのだ。

その結果として、休日の今、駅前で時計を見ている。

電子メールで伝えられた時間にはしばらく時間があるのは既に何度も確認をした。

私が、暴くのだ。彼を、夏野穂次を。

「お、更識さん早いッスね」

ヘラヘラと笑みを携えた男、夏野穂次はやってきた。制服ではなくて私服で、あまり頓着しない自分でもカッコいいと思えるぐらいにオシャレな彼を見て、彼の言葉がリフレインする。

――更識さんとデートがしたい、かな

「お、おひゃょうごザイます！」
「……」
「あぅあぅ」
リフレインした言葉と自分が盛大に噛んだ事に対して羞恥心が肥大していく簪は下唇を緩く噛んで自身の失態を呪った。
対して穂次は少しだけ停止し、なるべく小さく、簪に聞こえない様に息を吐き出して、言葉を選ぶように声を出す。
「あー……更識さん早いッスね？」
「う、うん……。夏野君も、早い、ね？」
「女の子を待たせた時点で遅いッスよ」
「でも、ちゃんと、時間前だよ」
「まあホラ、待つのも男の仕事って事で」
ヘラリと笑った穂次は戯ける様に両手を少し広げた。
ともあれ、二度目になればなんとか素っ頓狂な声も出ず、噛みもせずになんとか言葉を繋げれた簪は心のどこかで一安心である。
安心すれば、自分の目的が改めて浮上してくる。今日はこの男が何であるのか暴くのだ。気持ちはさながら物語の主人公である。

「そういや、茶封筒は持ってきてくれた?」
「あ、うん」
　簪はポーチに入れていた茶封筒を手渡し、中身を確認した穂次は安心した様にホッとしてソレを受け取り、ジャケットの内ポケットの中へと仕舞いこんだ。
「いやーよかったよかった」
「……それ、中身は?」
「知りたい?　つーか中身を見なかったのか……」
「その、悪いかなって」
「そりゃぁまあ、素晴らしい心掛けで。
　中身は……そうだなぁ、じゃあ機密文書でいっかな」
「いいかな、って」
「まあまあ、その辺りは後で教えてあげるから、今は急がないとダメなんだ」
「え?　と、いうか。ドコに、行くの?」
「まあまあ、その辺りも着いてきてからのお楽しみって事で」
「……」
　訝しげに目を細めた簪に対して穂次はヘラヘラと笑いを浮かべて歩き出す。ソレに慌てて着いて行く簪は意外にスグに追いついて、ソコから距離が開くことはなかった。

「クククッ！　このデパートはこの俺様、ディープワンのモノだ！」

簪の目の前で出来の悪い半魚人の怪人、ディープワンが盛大に吼える。ギョロリと動く目が実にチープだ。

そんなチープさも味を深める要素でしかなく、簪は手を強く握りしめて子どもたちと一緒にハラハラする。尤も、こんなアリキタリな展開は腐るほど簪は知っている。

「皆！　私達と一緒に助けを呼ぼう！　せーの！」

助けてー！　ボウケンシャー！

幾人もの子供達と簪の隣から聞こえた穂次の声。ちなみに簪も小さく呟いている。

呼ばれれば出てくる、いいや、誰かが危機となれば出てくるのがヒーローであり、そしてこのアリキタリな展開を盤石にする為の要素である。

「とうッ!!」

現れたのは三人の冒険者だった。赤と青と黄の三色。ちなみに簪は後々にこの三人以外にも黒色のちょっとニヒルな冒険者が加わる事も知っている。

もっと言えば、その黒色の冒険者が打倒すべき敵である組織『クトルー』の元幹部で

ある事も知っている。本当の名前は確か来週放送予定だ。タイトルは『貌無き黒』だ。今日の放送で知った。

敵を打倒していくボウケンシャー達を手に汗握りながら見ていた簪はハッとした。

どうして自分はヒーローショーにのめり込んでいるんだろうか?

それは誰にも分からない。

でもそんな事よりも今はボウケンシャーと握手出来るかどうかの方が大事だ!　とアッサリと簪はその疑問を捨てた。やっぱりヒーローはいい。

「いやぁ、よかったよかった」

「うん!　やっぱりボウケンシャーはいいね!」

「だよな。個人的には前期もいいと思います」

「いいよね!　レッドが敵だったクラウリーと手を取り合ってボスを倒すのも、その後にクラウリーとの最後の戦いも最高だったね!」

「急に饒舌になったなぁ……」

しっかりと、とは言いがたいがかなり挙動不審になりながらも穂次に連れられてちゃんと握手をした簪。

今も尚、目を輝かせて以前放映されていた物や、現在放映されている物を語る簪を穂次は止める事は出来なかった。するつもりもなかった。

ヘラヘラと笑いを浮かべながら適当な相槌を打ちながら、簪の話を聞いていく。

「それでそれで、」

「へぇ、っと」

よそ見をしていた、というよりも簪との会話に集中していたのか穂次は目の前にいた人にぶつかってしまう。

尻もちを着いた相手と一歩後ろに足を動かして踏みとどまった穂次を見て、ようやく簪が現実に戻り、慌て出した。

「だ、大丈夫？」

「俺は問題ないッス。そちらさんは大丈夫ッスか？」

「……ああ」

フードを目深に被った、声からして少女は小さく頷いて穂次の手を借りて立ち上がった。

ヘラリと笑った穂次を見て苛立ったのか一つだけ舌打ちをして手を払いのけた少女は穂次を一瞥し人混みの中へと消えていった。

「ありゃ、俺のイケメンに照れてしまったか……フッ、我ながら自分の美貌が恐ろしい」

「そ、そうだね!」
「あ、更識さん。ここツッコむ所だから」
「なんで、やねん?」
「惜しい!」
　悔やむ様に声を出した穂次はヘラリとした笑いを改めて浮かべて、考える様に顎に手を置いた。簪は首を傾げて彼を見つめた。
「どうしたの?」
「いや、そろそろ更識さんの疑問に応えようと思ってさ。ちょっとお腹も空いてきたし」
「……疑問?　……はっ!」
「えぇ……」
「わ、忘れて、ないよ?」
「お、ソウダナ」
「ホントだよ!　忘れてなんかないよ!」
「おっソウダナ」
　一向に聞こうとしない穂次をペシペシと弱く叩き否定をする簪。顔は真っ赤であるが、ヘラヘラと笑う穂次を見て、少しだけ顔を綻ばした。

「それで、何だっけ？　俺がスパイって話だっけ？」
「……えぇ……」
言うのかよ。と簪は目の前でパスタを食べる穂次をジト目で見た。もっと、こう、熱い精神攻撃の末にスパイと暴く、という出来事は無いのだろうか。残念ながら無い。
あっけからんとソレを言った穂次は手に持ったフォークを揺らしながら相変わらずヘラヘラとした笑みを浮かべている。
「まあ事実だし」
「もっと、ほら……えっと」
「ちなみにもうクビになってるから」
「えぇ……じゃ、じゃあ、どうして、今日は」
「ヒーローショーが見たかった」
「えぇ……」
それだけの為にアレだけ意味深な発言をしたのか、この男は。いや、まあマトモに誘われた所で自分が行っていたか怪しいかったけれど、そもそも私じゃなくてもよかったんじゃないだろうか。それこそ織斑一夏が居ただろう。クラスには二人の、その……

カップリングもあるんだから。
「と、まあここまでが表向きの話」
「表向き……」
「更識さんが一夏を恨んでる、つーか、白式の所為でＩＳの開発が遅れてるのは知ってるから、ちょっとだけテコ入れでもしよーかなーって」
「……」
「おおぅ、そうやって睨まない睨まない。ケーキは奢りだから」
「そうじゃ、ない」
「おっそうだな」
あっさりと否定を肯定した夏野穂次はヘラヘラと笑いながら頬杖をつく。
一つだけ溜め息を吐き出して、ヘラヘラとした笑いをドコか穏やかな笑みに変化させて言葉を吐き出す。
「あんまり一夏を恨まないでほしい、ってのが目的」
「……」
「まあ、アイツも大変だから更識さんも我慢してくれ……なんて事は言わねーよ」
「言わ、ないんだ」
「そりゃぁ一夏の苦労も更識さんの苦労も別物だからな。ソレを言い出すと俺なんて皆

を恨まないといけないしな」

　またヘラリと笑みを浮かべて穂次を見て簪は目を細める。集めた彼の情報の中には無い、彼が目の前に居るのだ。

「わ、私も？」

「そりゃぁ、更識さんもスゲーと思うよ。ＩＳのソフト部分の開発をしてるし、何より可愛いしな！」

「……皆に言ってる」

「ＩＳ学園の皆が可愛いから仕方ないね」

　決して悪びれずにそう言い放った穂次。本心ということは普段の言動を情報として聞いたからよく分かる。

　だからこそ、その前に言った私の事をスゴイと言った事も本心なのだろうか。

「お、お姉ちゃん、」

「更識会長だっけ？」

「うん……お姉ちゃんがスゴイから、私も」

「いや、ソレは関係無いっしょ」

「関係、無い？」

「そりゃぁ、更識さんが『私は更識楯無の妹ですドヤァ』とか言ってたら関係あるけど、

更識さんは言わないじゃん」
「……うん」
「じゃあ、関係無いでしょ。更識さんの努力とか才能は全部更識さんの物で。ソレを更識会長が盗ろうとしてるんだったら倒しちゃえ」
「そ、そんな事できないよ!」
「出来る出来る。案外、『お姉ちゃんなんて大っ嫌い』とか言ったら一発かもよ」
穂次が冗談の様に「妹に嫌われたよー」なんて言っている姿がどうにも姉に重ならず、だからこそ余計に面白く映り、簪は吹き出してしまう。
そんな笑いに対して穂次はヘラリと笑って肩を竦めた。
「で、話を戻すんだけど。更識さんを手伝っていいかな?」
「……でも、私がしないと駄目だから」
「つーか、俺の能力でソフト部分の開発とか手伝いも出来ないから。安心してくれ!」
「安心出来る要素、ない」
「そうだな。でもほら、コレでも元スパイだから他のＩＳの情報とかあるし、何かの足しにはなるぞ」
ソレは非常に魅力的な提案だった。
少しだけ滞っていた開発が進むかもしれない。でも、けど、

「でも、」
「……分かった。仕方ない。俺も本当の目的を言おう」
溜め息が吐き出され、夏野穂次は真面目な顔つきへと変貌する。ドコか冷たさも感じるその表情に簪は思わず萎縮してしまう。
「!? ほ、ホントの、目的……？」
「ああ……可愛い女の子に顎で使われたいんだ」
「……」
「可愛い女の子に顎で――」
「な、なんでやねん！」
「いいツッコミだ！」
アッサリと真面目な表情は崩された。ヘラヘラと笑いを浮かべてケラケラ笑う穂次に簪は溜め息を吐き出してしまう。
「まあ、ほら。俺は情報提供をする。更識さんは俺を顎で使って、不必要になったらポイすればいいよ。ポイするときはニーソで踏んで貰えればなおいい」
「……」
「そのジト目もグッドだ」
「はぁ……」

「ま、俺に目をつけられたのが運の尽きだと思えばいいんじゃね?」
「ソウダネ」
　ガックシと肩を落として彼を見ればやっぱりヘラヘラと笑っていた。彼の言っていたのを真似するように言葉を出せば、どうしてかオカシクなって笑いが込み上げてきた。
　クスクスと二人で笑い合って、変に警戒していた自分が馬鹿みたいになる。
「それ、じゃあ、よろしく」
「任せてくれ、ボス!」
「ボスは、やめて!」
「じゃあなんて呼べばいいんだ……マスター?」
「それはちょっと良いけど、普通に呼べば、いいよ?」
「……更識様!」
「……」
「おぉう、なんか地雷踏んだな。スマナイ……だらしない協力者でスマナイ」
「簪、でいい」
「じゃあ俺も穂次でいいさ。よろしく、簪さん」
「う、うん……よろしく、穂次、君」

「任せな！　ボス！」
「ボスはやめて！」

ケーキの買い方

「よ、お疲れだな。相棒」
「おう……お前が言ってた意味が分かる気がするよ、相棒」
「なら大丈夫そうだな」
「イタズラ好きの猫って意味だよ」
　すっかりと更識会長の訓練に疲れているのか、教室でぐったりしている一夏。
　訓練内容はある程度知っているけれど、アレならまだ大丈夫だろう。アレ以上の事を毎夜している俺が言うんだから確実だな。
「なんだよ、シューター・フローって」
「あぁ、アレか。美味しいよな！」
「……」
「冗談だよ。そんな目をすんなよ、照れるぜ」
「お前も出来るのかよ……」
「まあそれなりに、な。コレでも、て、ん、さ、い、ですから」
「はいはい」

「おざなり過ぎないッスかね」

　渾身のドヤ顔を完スルーした一夏に落ち込んだ様に声を出せば、溜め息を吐き出された。

「それで、天才な相棒は俺が楯無会長に扱かれてる間、何をしてるんだよ」

「更識会長にシゴカれてるだって!?　なんてうら、うら、……羨ましい!!」

「そっちじゃねぇよ!?　疲れてるんだからツッコませるな!」

「ツッコむ元気はあるんだから頑張れ」

「休ませろよ……夜もあの人俺の部屋にいるんだぞ」

「そりゃぁ、羨ましい限りで」

「……何も言わないんだな」

「何か言って欲しかったか?」

「いや、穂次なら『あんな美人と暮らしてるなんて！　廊下で滑ってコケろ!』ぐらい言いそうだけど」

「仕方ないな、ご期待に応えてやろう。どうして俺じゃなくてあんな美人と暮らしてるんだ!　廊下で滑ってコケろ!」

「おい一気に変になったぞ!」

「くっ俺とした事が、つい面白いと思ってうっかり!」

「本音が漏れてるから！　よく分からないけどあっちの女の子達がスゴイ目を輝かせて俺たち見てるから！」

　一夏の目線の先を終えば女生徒三人と目が合う。ニッコリ。

「大丈夫だ、一夏。あの人達は何も問題ない」

「……本当か？」

「ああ。大凡の噂の発生源だから問題ない」

「問題しか無いだろ！」

「面白くなるだけだろ！」

「ソレが問題って言ってんだよ！」

「なっ!?　スマナイ一夏……俺はお前が愉快になればソレでいいと思って……！」

「俺は一切面白くないヤツだから！」

「そうだな。だが俺は楽しい！」

「お前、最低だな！」

「褒めるな褒めるな」

「褒めてねぇよ！」

　ヘラヘラと笑ってやれば、忌々しげに俺を睨んでからようやく疲れを吐き出す様に息を吐き出して一夏は力を抜いた。

「俺ってそんなに疲れて見えたか？」
「クラスの女の子達が俺に相談する程度には、かな」
「そりゃどうも。いらない疲労のプレゼントはいらねぇよ」
「俺の気持ちが篭った贈り物さ」
「押し売りでももっと良い物を売るだろ……」
「ま、変に気負ってるよりマシだろ。つーか、一夏は考えすぎだな。アレもやって、コレもやって、なんて考えたモノが出来る訳ねーよ」
「そうか？　シャル達は出来るらしいぞ」
「難しく考え過ぎって事だよ」
「というか、穂次も本当に出来るのかよ」
「疑ってるのか？　コレでも俺は冗談と必要な嘘以外はお前に全部ホントの事を言ってる正直者なんだゾ（はぁと」
「キモい」
「次からはキャピキャピしながら言ってやるよ」
「余計に聞く気を無くすからな、ソレ。必要な嘘ってなんだよ」
「お前がホモって事かな」
「おう、ソレは必要じゃないだろ！」

「必要なんだよ。ファーストがホモでハニートラップが効かないとなると、セカンドである俺にハニートラップが来る。必要だな！」
「お前しか得してないんだよなぁ……」
「まあそのハニートラップも無いわけですが……」
「……穂次、この話は止めよう！」
「そうだな！」
俺の容姿が優れすぎてきっとハニートラップさんも恋をしない様に心を決めているに違いない。そうに決まってる。ああ、そうだ。うん。悲しいなぁ。
冗談はさておき。
「ま、お前が疲れてるから皆が気を遣ってる訳だよ」
「お前もちょっとは気を遣えよ」
「まあソコらは置いとこうぜ！」
「……悪い」
「謝られても困るんだよなぁ」
「ありがとう。ちょっとだけ元気出た」
「そうか。男と話して元気が……」
「ホモじゃねぇよ？」

「そうだな」

どうやら本調子に戻ったらしい。ヘラヘラ笑った俺に対してもう一度溜め息を吐き出して相変わらずイケメンな笑顔になった一夏。

あと俺たちがこうやって笑顔だと後ろの方の女の子達がスゲーメモを取ってる。ちなみに一夏は背中に目が付いてないから見えないらしい。当然、俺は聞かれてないから教えない。

また薄い本が厚くなるんだな……。

「そういえば楯無さんが穂次を呼んでたぞ」

「更識会長が？　……まだ何もしてないけど？」

「何かする予定なのか……」

「ほら美人だし」

「ソコが理由なのかよ」

「ソレ以外に理由はねーだろ。それで要件とかあるのか？」

「特訓の巻き添え」

「くっ、手が傷んでなければ喜んで行ったのに！　残念ダナー！」

「穂次さんも訓練に参加しますの？」

「……」

「穂次?」
「あー、いや、まあ、織斑先生の頼まれ事もあるし」
「そうですか」
話しにスルリと入ってきたセシリアさんが少し残念そうに女の子達の集団へと戻っていった。
一夏がスゲー俺の事を睨んでるんでいる。
「お前、セシリアと何かあったのか?」
と小声で聞いてくる辺り、俺が変だったみたいだ。
「別に、何でもねーよ」
「……早く仲直りしろよ?」
「喧嘩してる訳じゃ……まあソレでいいわ」
「おい、説明するの諦めるなよ」
「うっせーヘタレめ」
「お前にだけは言われたくない」
俺がヘタレなら世界の半分ぐらいはきっとヘタレに違いない。そうに決まってる。
ともあれ、シャルロットさんのアレの所為で変に二人を意識してるのは確かだ。いや、シャルロットさんがそうだったからと言ってセシリアさんもそうだとは言えないの

だけれど。変に可能性を考えてしまう。
「穂次、耳真っ赤だぞ」
「……うっせーバーカ」
「風邪か？」
「……お前のそういう壊滅的に察しの悪い所、嫌いじゃねーよ」
「褒めてないだろ」
「褒めてるよ。今はな」
普段の察しの良さが少しでも恋愛とかに向けられればきっと救われる人も居るだろう。
恋愛という言葉も意味も分かるけど、精神的な部分はさっぱり分からない俺にも言えるかも知れないけれど。

◆◆

もしも前のわたくしが今のわたくしを見れば、半狂乱になって「何をしているんだ」と言葉を漏らしたかもしれない。
今の自分を今の自分が見ても「何をしてるんだ」と迷うんだから、たぶん言うだろう。

辺りを今一度見渡し、ゆっくりと深呼吸をする。寝間着の上からブランケットを軽く羽織り、気分としてはパジャマパーティの様である。パーティを開催している場所が男性の部屋で、更には自分と彼の二人だけしか居ない、もっと言えば招かれてすらいないしパーティなんて開催すらしていない。

ルームメイトから少し煽られて、まあ、つまり、夜這いに来た訳である。我ながら自分の煽りの弱さは問題だと思う。

ともかくとして、やたらめったら煩い心臓を服の上から抑える。

リップは薄めに塗ったし、キツめの香水はつけていない。身体もちゃんと余すところ無く洗ったし、恥ずかしい所は何も無い。下着だって、勝負下着であるし。だから彼に脱がされても――。

背筋を伸ばして、少し力を抜く。顔は真っ赤だろうけど、彼なら勘違いしてくれる筈だ。うん、大丈夫。もしそうなっても何も問題は無い。問題はあるけど。

ともあれ、時間は刻一刻と過ぎてしまう。彼が眠っているとは考え難いけれど、それでも会話をする時間は削られてしまうだろう。

今一度深呼吸をして、手を何度か開閉して、軽めにノックをする。

もしも、も想像した。それに至った時の覚悟もした。大丈夫である。

扉が開かれた。心が高鳴る。コレ程に自分を突き動かす感情が彼に一部でも伝われ

ばいいのに。
「ご、ごきげん――」
「あれ？　セシリア？」
「……ごきげんよう、シャルロットさん」
――コレほどに自分を焼き焦がさんばかりの嫉妬が彼に全部伝わって、彼を殺してしまえばいいのに。

あっさりとシャルロットに部屋に招き入れられたセシリアは心を焼く感情とは全く別で顔に笑顔を貼り付けていた。
そんなセシリアをチラリと視界にいれて、なんとなく感情を察したシャルロットは乾いた笑いを漏らす。立場が逆なら同じ反応をしていたかも知れない。
「部屋を間違えた、という訳ではありませんのね」
「そうだね。ココは穂次の部屋だよ」
「……それで、どうしてシャルロットさんがココに？」
「セシリアと一緒の理由だよ」
「――、そうですか」

「あと、私も穂次に告白したよ」
「……そうですか」
セシリアはシャルロットを睨む事もせずに、視線を下げて唇をつぐんだ。
客観的に考えれば、自分はシャルロットに劣っている。いや、負けている、と言った方がいいかも知れない。
精神的なモノだったり、こうして彼の部屋で紅茶を飲む彼女を見ていれば、なんとなくそんな気持ちに見舞われる。それでも、彼女に負けたくはなかった。
「だから、うん、フェアにしようと思ってさ」
「先に穂次さんと寝て、公平（フェア）なんてよく言いますわね」
「平等じゃなくて、公平だからね。何ならセシリアを追い出す事も私には出来るんだよ？」
「……やめましょう。わたくし達が言い争いをしても意味がありませんわ」
「そうだね。あと彼と寝たって言っても別に何もされてはないからね？」
「――わかってますわ」
嘘である。ブラフを張って、否定されなかった時点で察したけれど、羨ましいと同時に妬ましいと思ってしまった。何事も無ければ、それはそれで自分としても困るのだけれど。

とにかく、炙られ続けた心は幾分か落ち着いたし、ある程度の冷静な思考が戻ってきた。そうして冷静になれば、彼が居ない理由を考える事が出来る。

少しだけ目を細めてシャルロットを見つめれば、両手を上げて首を横に振られた。

「そう睨まないでよ。穂次がココに居ないのは私が理由じゃない」

「それがフェアの理由ですの？」

「うん。セシリアにも知ってほしい……というかいつかバレると思うし」

「……実は穂次さんが女の子だった、とか？」

「どうしてそうなったのさ……」

「シャルロットさんが言う秘密でしたので」

他意はありませんわ。なんて付け足したけれど、冗談にしては随分性格が悪いモノである事は理解している。

肩を落としてジトリと睨んでくるシャルロットを無視してセシリアは椅子に座る。溜め息を一つ吐き出したシャルロットもソレに倣う様に対面の椅子へと座った。

「それで、穂次さんの秘密って何ですの？」

「今も穂次が必死で訓練してるって事」

「……そうですか」

「あれ？　あんまりびっくりしないんだね」

「驚いてはいますわ。けれど、納得はしてますわ」
「そっか」
セシリアの頭の中でようやく彼のチグハグさが少しだけ解消される。
彼のＩＳが彼の力の要因だったなら、初めて彼が戦った時の動きが証明出来ないからだ。なんだ、彼も努力してるんじゃないか。
穂次の評価をちょっとだけ上げたセシリアは頬が弛むのを感じて、手で両頬を抑える。ソレを見たシャルロットは苦笑して、加えて口を開く。
「隠してる理由はカッコ悪いから、なんだって」
「努力はいい事ですわよ？」
「それでも努力してる姿は見られたくないんじゃないかな？　ほら、男の子だし」
「……意味はわかりませんわ。ソレにシャルロットさんにバレている時点で」
「あ、私が穂次の努力を知ってる事は知らないから」
「だから秘密ですのね」
「うん。秘密の共有。フェアでしょ？」
「……それで、シャルロットさんは何がしたいんですの？」
真っ直ぐにシャルロットを見ながら言えば、口角を上げてニンマリと笑うシャルロット。

「私だけじゃ無理だから、二人で穂次を落とそう」
「ケーキじゃありませんのよ？」
「そうだね。分けて食べれないけど、独り占めするには高すぎる」
「そこまで美味しそうなケーキでもないのに」
「ホントだよ。でも、そんなケーキが好きな私達がココにいる」
「……わかりましたわ。期間は？」
「ケーキが買えるまで、かな」
ニッコリと笑ったシャルロットに対してセシリアも微笑んで、お互いに手を組んだ。
ケーキが買えた後の事は喋らない。ソレはきっとケーキも混ぜて決めなくてはいけない事であるし、何よりケーキをそのつもりにさせなくてはいけない。
「それで、穂次さんはいつ帰ってきますの？」
「もうそろそろじゃないかな」
「わたくし達が部屋に居たら驚くでしょうね」
「だろうね」
「……一緒に寝ると分かれば目が飛び出そうですわね」
「手を出す事はない、って断言出来ちゃうのはいい事なのか、悪い事なのか」
「少なくとも今のわたくし達には後者ですわね」

互いに溜め息を吐き出して、顔を見合わせて笑い合う。

さぁ、扉は開かれたぞ。

パーティの為にケーキを買おう。

裏切り者、織斑一夏

「ほあぁ……」
「はあぁ……」
先に言っておけば、コレは俺の声ではない。もっと言えば俺の斜め後ろでやり切った顔をしている一夏の声でもない。
俺の目の前にはクラスの皆がいる。その皆が俺へと視線を集めている。ハッキリと言えば冗談を言える様な余裕は俺には無く、いっそ逃げ出したい気持ちでイッパイなのである。
その逃げ出したい気持ちを上乗せする様に、最前列で俺を見て、更には口を情けなく開いた美少女二人が目を輝かせているのだ。
「いい、スゴく、イイ」
「ええ、そうですわね」
コレがシャルロットさんでなければ「原始人かな？」なんて俺も言えただろう。シャルロットさんでなければ。
とにかくとして、締まったネクタイを少しだけ緩めてどうにか心に余裕を与える。緩

める動作をすれば一夏の顔が顰められたが許してくれ。ネクタイを締めた時はそれほどだったけど、今は息苦しいんだ。

「ヘタレの無い夏野君なんて夏野君じゃないわ！」

「だがソレがいい！」

「もっと、こう、ヘタレな執事が出来上がると思ったのに！」

「つまり何が言いたいかって!?」

「織斑君！　グッジョブ！」

「おう！」

クラスメイト達が声を合わせて一夏を称える。後ろで仕事を完遂した裏切り者は満足気に頷いている。

一方俺は執事服に着られ、髪をセットされ、小道具である縁の無い四角い伊達メガネと白い手袋までしっかりと着けられている。

そう、執事である。

学園祭まであと数日。俺の頭の中ではご奉仕喫茶で忙しく駆けまわるメイドの格好をしたクラスメイト達を妄想していたのに、服を調達したシャルロットさんはニッコリと俺を捕まえて執事服を渡してきたのだ。

有無を言わせない笑顔であった。震えた声で後退りしながら「一夏がイルヨ」と言え

ば、もう片方の手にもう一着見せられたのだ。そう、執事服は二着だったのだ！

ネクタイの締め方を知らない俺はソレを理由に逃げようとした。俺は一夏を恨んだ。

「つーか、俺じゃなくて一夏でもよかったんじゃないッスかね……？」

「織斑君も着せようと思ったけど、夏野君の着替えの手伝いをするって言って逃げられたの」

「穂次が困ればいいと心から思った。他意はないぞ」

「悪意だけなんだよなぁ……」

「思ったよりもなつのんが似合ってて皆驚きだけどね～」

「小道具が仕事しすぎなんだよ、のほほんさん」

とにかく、いい加減に目の前で壊れたラジオみたいに「イイ」を一定間隔で言ってるセシリアさんとシャルロットさんを誰かどうにかして下さい。俺の何かがガラガラ崩れていってるから。

「というか、シャルロットさんに言われて執事服は着たけど、何かするんスかね？」

「……」

「え？　この沈黙は何なの？」

「ほ、ほら！　接客の確認とかしないといけないから！」

「執事服を着てやる意味はないんだよなぁ」

「マニュアル作らないといけないし！」
「執事服を着る意味はないんだよなぁ」
「ほら～、ご奉仕されたいし～」
「ソレは執事服を着る理由になるけど……まあいいか」
「夏野君のそういう所、嫌いじゃないわ！」
「皆欲望に忠実ならイイんじゃね？」
「そうですわね！」
「いや、セシリアさん達はもうちょっとだけ落ち着け下さいお願いします」
ともあれ、接客の確認という大義名分があるのならば仕方ない。俺だって接客の確認というソレがあるのならばメイド服を是非見たいのだ。
その役割が俺に回ってきただけだ。メイド喫茶という名目だったなら、俺は執事服ではなくてメイド服を着ていたかも知れない。それだけは良かったと思う。ホント、マジで。
「それで、接客の確認ってのはイイけど。お客さん役とか誰がするんだ？」
「是非、わたくしがッ！」
「僕がするよ！」
「……」

「ん？　どうした穂次？　そんな顔で俺を見て」
「もういい。相棒を信じた俺が悪かった」
「いきなり辛辣だな」
「つーか、メイド服と執事服を調達してきたシャルロットさんとメイドがご自宅に居るセシリアさんは評価側に回った方が良くないッスかね？」
「評価はわたしがするよ～。わたしもメイドさんだからね～」
「……布仏さんがメイド？」
　皆のドジっ子メイドがソコには居たのだッ！　布仏さんは絶対に変なドジをする筈だ。パンチラとかするんだろ？　俺は知ってるゾ！
　だがしかし、俺はそんな嘘には惑わされない。フッ、コレでも元ポンコツスパイなのだ。嘘に惑わされる様な事があってはならない。
「フッ、俺は惑わされないぞッ！　布仏さんの様なドジっ子メイドが現実にいる訳がないだろ」
「ホントだよ～。更識家にいるもんね～。おりむー」
「のほほんさんはなんで俺に同意を求めてるんだ？」
「ほら～、おりむーの言葉ならなつのんも信じるんじゃないかな～って」
「まあ、楯無会長からは聞いたけど」

「なん……だと……」
「それにわたしだって仕事はちゃんとするんだよ～？」
「ソレは嘘だ」
「なるほど……ドジっ子メイドに見せかけたスゲー敏腕メイドなのか……実にイイ」
「穂次さん？」
「ヒッ……ゴメンナサイ」
　キツイ目をしたセシリアさんに謝ってしまう。その隣では同じく俺を睨んでいるシャルロットさんがいるのだ。二人が恐ろしいデス。
「あー……じゃあ二人が客役でいいとして、まあ間違った事とかがアレば止めて訂正するって感じでイイんスかね？」
「それでいきましょ。セシリア達もそれでいいよね？」
「わたくしは構いませんわ」
「僕も」
「じゃあ教室から出て、入店からしましょ」
　二人が教室から出たのを確認して、適当に椅子や机を移動させて、仮設テーブルを作成する。
「紅茶とかの準備って出来てるのか？」

「穂次が嫁とお色直しに行っている間に用意した」
「……あー、ラウラさん。ただ着替えに行ってただけだから」
誰だ、このイタイケな少女にそんな言い回しを教えたヤツは。お兄さん許さないぞ。
ともかくとして、一つだけ息を吐き出してネクタイを締める。緩やかに意識を集中させていき、メガネを上げる。
クラスメイトの何人かが息を飲み込んだ様な気もする。あと一夏が俺をスゲー見てるのが心から怖い。なんだよ、お前やっぱりホモかよ！
立ち振舞から変化させれば何も問題は無い。そんな事はずっと繰り返してきた事なのだから、容易い事なのだ。
扉が開かれ、色合いの違う金色の頭が二つ並んでいる。俺を一目見て、目をパチクリとさせているのが実に印象的だ。
俺はヘラヘラとした笑いを浮かべて一歩前へと進む。
「ヘイ！　可愛いネ！　この俺様とオ☆チャ、していかない？」
「ハイ、カットー」
そんなクラスメイトの声が聞こえた。目の前の二人はスゲー冷たい目で俺を見下している。俺が何をしたっていうんだ。
「夏野君。そういうの、いいから」

「俺は真面目にやっ――」
「穂次？」
「穂次さん？」
「嘘です冗談です。マジスイマセン。次からちゃんとしますから許してください」
見下していた二人から冷たい声で名前を呼ばれてしまった。くっ、俺に変な性癖が出来たらどうするんだ！
謝りながらヘラリと笑ったみせれば更に溜め息を吐き出されてしまった。
「次にフザケたら、わかりますわね？」
「な、何があるんですかね……」
「……そうですわね、何かさせますわ」
「ヒッ……わからない分余計に怖いんですが」
一体俺は何をされるんだろうか……いや、何をさせられるんだ。この上でメイド服とか流石に俺は嫌ですよ？　つーか、男にメイド服着せて何が楽しいのだろうか。アレは女の子が着るモノであって、男が着るものじゃない。

◆
◆

「穂次に何をさせるつもりなの？」
「色々と思いつきましたけど、一般的にはご褒美と言われそうですわね」
「なんとなく、その気持ちは分かるよ」
セシリア・オルコットとシャルロット・デュノアは教室の扉の前でクスクスと笑いながら先ほどのやり取りを思い出していた。
彼がいつもの様に振る舞っていればソレで話しは終わったかもしれない。けれど彼はいつも以上に軽薄に振る舞ってみせた。
だからこそ、余計に揺さぶりを掛けたかった。もっと、もっと、彼の感情が揺れればイイ。
「さて、じゃあ仕切り直しといこうか」
「そうですわね」
「別にフザケてても問題ない、ってのが本音だけどね」
「いつもの調子でも、ソレはソレでイイですわ」
普段は見ることが出来ないだろう執事姿の彼なのだ。更に言えば、意外にもソレが似合いすぎていたのも原因だろう。
どうにかして自分の後ろに着いてくれないだろうか。なんて考えてしまうのは二人がお嬢様であるからなのだろう。

二人は顔を合わせて笑って、扉を開いた。
ソコには執事が居た。先ほどまでの軽薄な雰囲気など欠片も見つからない、執事が居た。
軽く下げていた頭が緩やかに上がる。
「御帰りなさいませ、お嬢様方」
執事は微笑みを携え、二人を出迎えた。
彼の執事姿を見た時の様に二人は口をだらし無く開けて、言い様のない感情をどうにか声を出そうと頑張った。結果的に「ほあぁ……」となんとも情けない声が出たのだが。
そんな様子にもニコリと笑った執事は二人を促して仮設テーブルへと案内した。当然、二人が座る前に椅子を引く完璧っぷりを見せた。
セシリアとシャルロットはとにかく周りを見渡した。全員が口を開いていた。どうやら現実らしい。
「どうかなさいましたか？」
「い、いえ！」
「だ、大丈夫だよ！」
「何か不足があればお申し付け下さい」
香りの高い紅茶を淹れて、二人のテーブルから一礼し、下がった穂次。

二人は心を落ち着ける様に紅茶を一口。飲み慣れている味、というべきなのか。近頃はよく飲む味だからすんなりと舌に馴染んだソレは喉に通った。

「誰だおまえは!?」

ようやく、と言ってもいい程時間を掛けてから一夏の言葉が教室に響いた。他の皆も頷いている。

対してその問いかけをされた穂次は軽く首を横に振り、困ったように微笑んだ。

「我が友。私を忘れてしまうとは……私の不足を呪うべきなのかね?」

「穂次、戻ってこい！　お前はそんなヤツじゃないだろ！」

「それはソレでスゲー評価が気になるんだけど?」

アッサリと微笑みはいつもの様なヘラヘラとした軽い笑いへと変化した。先ほどまでの立ち振舞の欠片も見当たらない。

全員が安心した様に息を吐き出す様子を見て、穂次は分かるように肩を落とした。

「えぇ……総意なのかよぉ。俺だって頑張ればアレぐらい出来るんだぜ?」

「マジかよ。穂次スゴイな……」

「フッ、この夏野穂次。演じる事に関しては誰にも負けないと自負しているッ!」

「常に演じてろ」

「箒さん、スゲー辛辣な言葉ッスね。普段の俺が何をしたって言うんですか!」

「何から言えばいいのかわからないが、とにかく胸に視線を向け過ぎだ」
「そりゃぁ、おっぱいがありゃ見るのが男の性だ」
「……一夏を少しは見習え」
「……ほら、アレはホモだから」
「小さい声で喋っててもホモだけは聞こえたぞ！」
「ホモ特有の地獄耳かッ！」
「ホモじゃねぇよ！」
　いつもの様に一夏との軽口の言い合いをしている穂次はもう執事の演技は終わったと言わんばかりに首を締めていたネクタイを少しだけ緩めた。
「それで、接客に関してはアレが基本でいいんですかね？」
「振る舞いもよかったね～」
「わーい、布仏さんに褒められたゾ！　頭とか撫でてイイんですよ？」
「やだ！」
「スグに断られると俺も悲しくなるんですが……」
　余計に肩を落とし、ワザとらしく悲しんでみせる穂次。その顔はやはりヘラヘラとした笑いは浮かべられている。
　カチャリと、陶器が擦れ合う音がして穂次はそちらへと顔を向けた。

「おかわりはいる？　っても、あんまり美味く淹れられてないと思うけど」
「穂次さん」
「はひっ」
　立ち上がったセシリアが穂次の手を包み込んで真面目な顔で彼を見つめる。その動作に驚いたのか、まるで乙女の様な声が出てしまった男は目をセシリアから逸らしている。
「是非、オルコット家でバトラーをしませんこと？」
「セシリアずるい！　デュノア家でもイイよ！　というか、ウチにおいでよ！」
「む、無職になったら考えます」
　シャルロットも参加した事が原因なのか、穂次は震えた声でなんとも情けない事を口にした。
　このヘタレめ……。というのは一夏を含めた全員の総意であった。
　ヘタレはセシリアに加わり空いた手を握ったシャルロットのお陰でマトモな思考は捨てられてしまった。
　つまりヘタレが加速するだけだ。

貧乳三人組

「つー感じで、一組はご奉仕喫茶になりました」
「だから髪が、そんなのなんだね」
「まあ直すなって言われたから今日だけだけどな」
　俺の髪を見てクスクスと笑っている簪さん。決して俺はハゲてない。そうさ、少しばかりも後退なんてしていない。
　へらへらと笑いながら固められた髪を少しだけ撫でる。直そうとしたらスゲー顔で怒るんだもの。俺に直せる訳がない。
「それで、そっちの調子はどうッスかね？」
「うん……ぼちぼち」
「流石（さっすが）ボスだぜ！」
「ボスは、やめて」
「手近の工具を握るのは怖いからヤメテ！」
　スパナを握りしめた簪さんが溜め息を吐き出して、腕を下ろした所で改めてヘラヘラとした笑いを浮かべる。

ソレにしても、簪さんはスゴイ。与えられた情報は政府に送っていた情報の一部……言ってしまえば誤情報も含まれているモノである筈なのに、取捨選択がスゴイ。一応、全部データとしての間違いはないから〝正しい情報〟って言えるのに、真実の情報だけが抜き取られていく様は本当に凄い。

俺の視線に気付いたのか簪さんがいつものジト目で睨んでくる。

「何？」

「簪さんがスゲーと思って」

「……普通」

「じゃあ普通がオカシイんだな！　俺がおっぱいを触ろうとするのも普通だから問題ない！」

「普通、じゃない！」

「はっはっはっ！　投げた工具なんて当たる訳がなかろう！」

伸ばした手をはたき落とされ、手当たり次第投げられてくる工具達を捕まえながらヘラヘラと笑ってみせる。

メンテルームだからって好き勝手してると怒られるんだぞ！　俺はよく怒られるから知ってる！

「データは貰ったから、でてって」

「そんな……俺との関係はデータの受け渡しだけだったのか!?」
「うん」
「ひっ……そういう所は冷静ッスね、マスター」
「……穂次君のご主人様、じゃない」
「俺はいつでも歓迎です！」
「……」
「無視はいけないと思うゾ！」
俺の言葉なんて一切耳に届いてません、と言わんばかりに画面に注視している簪さん。ても同様に工具は握らずにキーを叩いている事からかなり集中しているのだろう。
画面の向こう側、決して二次元の世界ではなくてルームに吊られている機体。ＩＳ、打鉄弐型。
コアに障ってみれば、どうにも未完成のままで登録された事を悔やんでいるらしく、かなり落ち込んでいたのが印象的だった。
苦笑していると後ろにいる簪さんが首を傾げて俺を見ていた。振り返ってヘラリと笑いを浮かべておこう。
「どうしたのさ、首を傾げて」
「何してるの？」

「……フッ、俺には特殊能力があるのさ！」
「ホントッ!?」
「おぅ……思った以上の食いつきにビックリだ」
「風とか起こせる!?　ハッ、炎が出て――」
「待て待て、落ち着くんだ簪さん。深呼吸をするんだ、おーけー？」
両手をギュっと握りしめて大きく息を吸い込み、吐き出した脱力に従って手は緩められる。
「落ち着いた？」
「落ち着いた」
「よろしー」
「それで、特殊能力って？　こう、〝死〟が見えるとか」
「そういうスゲー能力とか、幻想染みた能力はネーです」
「そうなんだ」
「うわっ、興味失ったなこの野郎」
「だって……ううん、なんでもない」
「ま、いいさ。俺だって幻想には憧れてるさ。こんなくそったれな世の中だし」
「……楽しそうなのに？」

「そりゃぁ、俺は今憧れの中に生きてるからな」
「？」
「だって、考えてみろよ。ＩＳに乗れる二人目として女の子ばっかりのＩＳ学園に入ってるんだぜ？　俺にとっては日常が幻想そのものだって」
　そうだ。俺は夢の中にいる様なモノなのだ。女の子だらけのＩＳ学園に入った事も、美少女達に告白された事も。全部幻想で、夢で、あり得ない事なのだ。
　だからこそ、この普通が夏野穂次にとってはとても素晴らしい。だからこそ、全ての出来事が夏野穂次にとって理解は出来ない。受け入れる事は出来るし、相応に反応も出来る。
　けれど、きっと、今の感情で二人に応えるのは間違いなのだ。釈然としない。だから応えれない。
　夏野穂次は不安なのだろう。うん、そうだ、俺は不安なのだ。
「穂次君？」
「――……まあ、俺にとってはこの非日常がスゲーって事。今も隣に美少女がいるしな！」
「……ッ！」
「ヘイ、ボス！　無言で俺を殴りかかるのはヤメテくれ！」

「避ける、くせに！」

へらへらと笑って褒めてみれば、戯けた俺に拳を振るう簪さん。可愛いって発言は本気なんだけどなぁ……。

しかしながら、拳が鋭い。コッチもワザと隙を作っているのだけれど、どうにも狙った攻撃がこない。ハイキックを是非してほしい。そのまま下着の確認とかが出来る、ハイキックを！

「ハァ、アンタら……というか、穂次はこの子に何をしたのよ」

「あ、鈴音さン〝ッ!?」

眉を下げて呆れ気味に現れた鈴音さんに反応すれば、腹部に衝撃が走った。俺の腹部には腕が植えられている。先を辿れば簪さんがビックリした顔に。

「あ……当たった……」

「な、ナいス、ぼデー。世界を、とろう、ぜ……！」

グッとサムズアップしてみれば、鈴音さんの溜め息が聞こえて腹を抑えながらヘラヘラとした笑いを改めて浮かべる。

その様子にようやく鈴音さんへと視線を移した簪さんが首を傾げている。

「えっと、」

「あー、二組の凰　鈴音さん。それで、コッチは更識　簪さん」

「ふーん、よろしく。更識さん？」
「ど、どうも……凰さん」
「ん？　簪さんって鈴音さん知ってた？」
「代表、候補生、だから……」
「……」
「何よ？　穂次。その目は」
「別に何でもネーですよ？」
「まあいいわ。それで？　アタシに何の用なのよ、穂次」
「簪さんを手伝って欲しいなーって」
「!?」
「痛い痛い、無言で叩かないで！」
　俺の背中をベシベシと結構な力で叩いている簪さんを放置して鈴音さんへと視線を向ける。考える様に目を細めて、溜め息を一つ。
「嫌よ。アタシに得が無いじゃない」
「得ならある。と言っても情報だけだけど」
「その情報って？」
「文化祭での一夏の休憩時間。あとは誘導補助とか。まあそんなモノ」

「乗った」
「判断が早エこって……って事で簪さん」
「い、嫌……」
「あー……アンタ、この子に説明もせずにアタシを呼んだわね？」
「ああ！」
鈴音さんの溜め息が聞こえた所で俺はヘラヘラとした笑いを抑えて簪さんへと向き直る。
なんとも困惑した顔だ。しっかりとドコかの学園最強と似た色の瞳を覗く。
「いいか、簪さん。君の目的は何なんだ？」
「目、的……」
「俺が推測する限り、簪さんは本格的に一夏を恨んじゃいない。そりゃ、ある程度は恨んでると思うけど、そこまでじゃない。
かと言って、第三者、不特定多数に認められたい訳でもない。
んじゃ、君は特定の誰かに認められたい訳だ」
「……ッ」
「どうやら当たりみたいだな。それで特定の誰かに認められる為にはこのＩＳを完成させないといけない。ハッキリと言えば、このＩＳは絶対に完成しない」

「ッ、そんな事、無い！」
「いいや、完成する訳がない。コレは簪さんが悪いだとか、そういう話じゃない。つーか、知識量で言ったら簪さんがこの中じゃ一番だろうし」
「穂次、軽くアタシを馬鹿にして無い？」
「気のせいッスよ。
　知識だけ、データだけじゃ補えない部分は確実に出てくる。一人だけじゃ絶対に誤差が出てくる」
「でも、穂次君が」
「俺は眉みたいなモノだからカウント無し。ソレに俺をカウントするなら別に鈴音さんをカウントしても問題ネーでしょ？」
「……うぅ」
「……んじゃ、もっと考え方を簡単にしよう。皆別の目的があって、ソレの為に協力する。それだけさ。簪さんは特定少数に認められる為に、鈴音さんは俺が与える情報の為に」
「……穂次君、は？」
「俺？　俺は美少女と仲良くできりゃぁソレで満足ッ！」
「うわ……」

「アンタ、もっとマトモな理由を言いなさいよ」
「俺は至って真面目だ！」
「マトモじゃないって言ってんの」
ジト目で睨む鈴音さんを見ながら簪さんを視界に入れる。目を伏せて考えている簪さんの手が少しだけ震えているのが分かる。
「ほら、悪役だって目的の為なら力ぐらい合わせるだろ？」
「せめてヒーローにしなさいよ」
「ヒーローにはなれないさ。そういう役は一夏に丸っと投げる」
「ああ、一夏の溜め息が聞こえた気がするわ」
「相思相愛だな！」
「え？　そ、そうかな？」
「いや冗談ツスよ？　そこまで照れられると困るんですが……」
「殴るわよ」
「ヒェッ、確定じゃないツスか」
「……ちょっとだけ」
「ん？」
「ちょっとだけ……考えさせて」

「ん。わかった。　考えが纏まったら教えてくれ。ちなみに断ったら悪いとか、そういう事は考えなくていいぞ。鈴音さんは見た目と違って寛大だからな！」
「おい、ヘタレ。今アタシのドコを見て言った？」
「そりゃぁ、身長デスよ？」
「……フンッ！」
「ガファッ……！」
　鈴音さんの拳が正しく俺の鳩尾を捉えた。息が詰まって息が中々出来ない。
「コイツの言う通り、断った後とか考えなくていいから。更識さんは好きな様にしなさい」
「う、うん……」
　俺の心配とかって無いんですかね？　別にいいんですけど。
　俺の襟首を掴んだ鈴音さんがそのままメンテルームから出て、引きずっていた俺を廊下に落とした。
「ハベッ」
「それで？」
「ゲホゲホ……それでって？」
「アタシの理由よ。こういうのはシャルロットの方が適役じゃないの？」

「ハハハ、自覚あったんスね」
「もう一発必要かしら？」
「冗談だよ、冗談。はっはっはっ」
あの拳は拙いのでヘラヘラと乾いた笑いを鳴らしながら立ち上がりホコリを払う。
「それで？　ホントに完成しないの？」
「完成はする。ただホントに形だけみたいになっちゃうから」
「ふーん……」
「鈴音さんに頼んだのは利害関係だけで動いてくれそうだったから。ほら、シャルロットさんって、なんか陰謀企てそうじゃん」
「……あー、まあ、いや」
何かを言いかけて、鈴音さんはその言葉を飲み込んだ。ソレは正しい判断だったと思う。いや、俺の後ろにも鈴音さんの後ろにもシャルロットさんの影が無いけど。
きっと言ったら、シャルロットさんが突然現れたに違いない。俺は知ってるゾ！
「それで？」
「ん？　もう全部言ったと思うけど？」
「セシリアとシャルロットと喧嘩してるんだって？」
「一夏か……」

「うん。まあ喧嘩じゃないみたいだけど」
「あー……まあ、えっと、ハイ」
　ニンマリとした笑顔で俺を見ている鈴音さんから視線を外して頬を掻く。
　どうにも全部では無いけれど知られてそうだ。
「アンタがどうするかは知らないけど、相談ぐらいなら乗るわよ？」
「あー……まあ相談って段階じゃないんデスけどね……」
「……ごめん」
「いや、別に謝られても困る訳ッスけど。ま、この話は後々って事で」
　どうにも皆が俺に気を使いすぎてる気がする。別に俺なんてテキトーに扱ってくれればいいのに。そっちの方が俺も気が楽なんだけどな。
　まあ自意識薄いとか言われた相手が目の前にいて恋愛話とか出来ないわな。
「そういえば、アタシのフォローは出来るのね？」
「まあ一般論に基いて動いてるからな」
「ふーん、じゃあソレで自分の感情とかが分かるんじゃないの？」
「いや、感情が無いわけじゃねぇから。俺にとってコレが普通だからなんとも言えねーけど」
「……あっそ。アタシのフォローが出来るんならなんでもいいわ」

「鈴音さんのそういうサバサバしてる所、いいと思います」
「アンタの前で乙女してても意味ないからね」
「一夏の前で乙女が出来てたら印象悪い女の子なのに、なんつーか、ツンデレは大変だなぁ」
「うっさいわね！」
アタシだってちょっと素直になれば、なんてブツブツと呟いている鈴音さんは落ち込んだ様に壁に凭れている。
こういう時には魔法の言葉を言うしか無い。スマナイ、一夏。俺にはこの方法しか思いつかなかったんだ……！
「全部あの唐変木が悪いんじゃないツスかね？」
「そうよ！　全部一夏が気づかないのが悪いのよ！」
「スマナイ、スマナイ一夏！　俺の力不足が原因で……！」
「いくわよ！　穂次！」
「へいっ姐さん！」
ズンズンと肩を張って歩き出した鈴音さんの後ろでヘラヘラ笑いながら舎弟の様に俺は歩き出す。
隣の組の代表を倒すために……。いや、俺は同じ組だったな。

望まれたモノ（閑話

織斑一夏は目を覚ました。

眉間を寄せた理由はカーテンから差し込む光が原因ではない。加えて、鍵を新調したからか、ラウラ・ボーデヴィッヒが全裸で布団に入っていなかったからでもない。

ややボヤケた頭でも分かるノックの音。それが何度も何度も繰り返され、一夏はアクビをしながら布団から出た。

一体誰だ？　という疑問は当然頭の中にあった。ソレに自分の知り合い達を列挙しても部屋にノックして入ってくる様な知り合いはいない。ノックをしてくれるセシリア・オルコットやシャルロット・デュノアならばこんな早朝に来訪しないし、予めに連絡がある筈だ。

ノックをしない人間代表であるラウラならば既に部屋の中にいるし、箒なら扉は既に無い。鈴音ならノックしてくれそうだが、力加減を間違えて扉は無残な姿に変わっているかも知れない。

そんな寝ぼけた思考で妄想しながらも織斑一夏は少しだけ時間を掛けて鍵を開けた。

「ふぁぁ……誰だ？　こんな時か――」

一夏の言葉が止まった。そこに居たのは見知らぬ女の子であった。いや、そもそも自分と夏野穂次を除けばこのＩＳ学園に男性は居ない。だから女の子なのは当然だ。そこは問題じゃない。

女の子はシャツを着ていた。シャツに描かれた何かよくわからない――何かの破片からデフォルメされた犬が飛び出ているイラストが胸によって歪められている。胸の所為でシャツが上がっているのか臍が見え、引き締まった括れまで見えている。

男物のトランクスから伸びる瑞々しい太ももが僅かに揺れて、ようやく少女は顔を上げて一夏へと向いた。

艶やかな黒い髪が額を流れ細い眉が覗く。茶色の混ざる瞳は僅かに潤んで、少しばかり童顔な印象を受ける。数々の美少女を普通に見てきた一夏にも「可愛い女の子」と言わせるぐらいの美少女が居た。

「助けてくれ、一夏」

「……は？」

たっぷりと間をとって、一夏はようやく声を出した。疑問の声であったけれど、声を出した。

対して少女はあたふたとして、纏まらない言葉をどうにか絞り出そうとした。あぅあぅと声には出なかったけれど。

ここ一年で結構な事件に見舞われた一夏はなんとなく察した。コレは厄介事だと。
「あー……何処から逃げ出した実験体か何かか？」
「違ぇよ！　いや、実験体ってのは間違ってないかも知れねーけど！」
「じゃあ、アレだ。魔王様から逃げるお姫様とか？」
「簪さんじゃねーんだからいい加減に現実に戻ってこい！　つーか、助けろください、この唐変木！」
「ヘタレに言われたく……ん？　穂次か？」
「どうしてソレで気付いた!?　俺は最初から言ってただろ！」
「言ってねぇよ。というか、マジで穂次なのか？」
「そうだよ、ホモのお前の友人してる夏野穂次だよ！」
「違うな」
「待て待て待て！　嘘だから、ホモじゃないから、助けて！　相棒！」
一夏は眉間を寄せた。確かに、なんとなく、この美少女が相棒である夏野穂次だと言える。ソレは自分の感覚によるものだから、なんとも確証はないが、確実に。
けれど、少なくとも、厄介事であることだけは一夏にはわかった。コレは確証を持って言えた。

「いや、マジで助かる」
「というか、その格好なんだよ」
「俺の寝間着だ」
「ダサいな」
「ソレはお二人にも言われたから……」
しょんぼりしながら紅茶を入れた穂次（♀）はカップを一夏と自分の前に置いてクッションの上に座った。
淹れられた紅茶を一口飲んで、一夏はようやく目の前の女の子が穂次である確証を得た。
「それで、なんでそんな姿なんだ？」
「起きたらこうなってた」
「……」
「目が覚めたらこうなってました！」
「言い方の問題じゃねぇよ！　原因とか心当たりとかあるだろ」
「マジで心当たりとかねーから……ハッ、まさか俺は元々女の子だった可能性が？」

「ねぇよ」
「だよな……」
「昨日何をしてたから一から言ってみろ」
「昨日……朝起きて、いつもみたいに過ごして……ん、そういえば」
「何かあったのか？」
「いや、いつもみたいに訓練終わった後に、ウサミミをしてる美女に出会って、疲労回復の薬を貰ってソレを飲んだぐらいだ。何も問題はなかった」
「ソレが問題だ。絶対ソレだ。というかソレしかねぇだろ！」
「おま、人の良心を疑うとか……」
「いいか、あの人の良心は自分が楽しければ何でもいいって言う自分に対しての良心だ」
「くっ……美女だから油断したぜ」
　悔やんでいる様に指を鳴らした穂次に対して一夏は溜め息を出した。原因はわかった。その原因が明らかに解決させるつもりの無いモノだって事もわかった。
　一夏は改めて穂次をチラリと見た。紅茶を飲んでいる姿はどうにも形になっている。シャツが残念でしか無いが。
　そんな一夏に気付いたのか穂次はニンマリと笑いを浮かべた。
「一応言っておくけど、この胸は本物だぞ」

「なんで言ったんだよ……」
「胸ばっかり見てるからだ。ちなみに感度も良好だった」
「必要ない情報をありがとう」
「どういたしまして。俺の一日がオナニーで潰れそうだった事も教えておこう」
「なんでソレを言ったんだよ!?　というかお前その姿でそんな事言うなよ！」
「うっせー！　女の子になったらとりあえずオナニーするだろ！」
「はぁっ!?　なんでそうなるんだよ!?」
「テンパるだろ？　どうしていいかわからなくなるだろ？　おっぱい触るだろ？　興が乗るだろ？　オナニーだ！」
「お前の思考がオカシイ事が証明されました！　バーカ！　バーカ！」
「フッ、俺は阿呆だ！」
「威張る所じゃねぇよ！　というか、なんで俺に助けを求めに来たんだよ。ほら、セシリアとか、シャルとかいるだろ」
「……」
　二人の名前を出した途端に黙りこむ穂次。何か拙い事でも言ったのかと、一夏は少しだけ息を飲み込む。
「あの二人に今の俺を見せてみろ」

「……」
「絶対に着せ替え人形にして遊ぶか、襲われるに決まってんだろ！」
「お前のその自信は何処から来るんだろうな」
「この美少女を見ろ！　俺は男になったらとりあえず自分の身体で二発は抜くネ！」
「お前さ、そういう事言うのは止めようぜ、マジで」
「お、やんのか!?　見るか、素晴らしいこの肉体を」
「脱ぐな脱ぐな脱ぐな！　というかブラジャーぐらいしとけよ！」
「俺がブラなんて持ってる訳ねーだろ！」
「おうソウダナ、でも脱ぐのは止めろ。俺は知ってるぞ、お前が脱いだら絶対に誰か来るんだ。たぶん、警あたり」
「……そうだな、脱ぐのはやめる」
「そうしてくれ」
どうしてかションボリした様子の穂次が紅茶を飲み直して、一夏が一段落したように溜め息を吐き出した。
それにしても脱ごうとした穂次の腹部は実に素晴らしかった。僅かに浮き出た腹筋は彼女が彼であった名残なのだろうか。いや、あまりこういう事を考えないでおこう。
一夏は浮かんだ妄想を振り払う。

「紅茶のおかわりはいるか？」
「頼む」
「はいはい」
立ち上がり、鼻歌を奏でながらポットにお湯を注いでいく穂次の背中を一夏は眺める。むっちりとした太腿と男モノのトランクスを僅かに押し上げる臀部。
数秒ほど眺めて、ハッとした一夏は自身のタンスを漁り始める。
「どした？」
「ジャージを着てろ。寒いだろ」
「いや、別に」
「寒いだろ」
「アッハイ」
投げられたジャージを受け取り、穂次は数秒考えた。天井を向いて、ふむ、と唸った。
よっこいしょ、と声を出しながらシャツに手を掛ける。
「待て！　どうして脱ぐんだ！」
「いや、ほら、裸ジャージの方が魅力的だろ？」
「なんで魅力を求めるんだよ！　男だろ、お前！」
「今は女だ！」

「そうだったな！　でも上から着てもいいから」
「なんでだよ！　いいだろ、裸ジャージ！」
「そういう事じゃねぇよ!?　男の俺が居るんだからせめて気を遣え」
「攻めて気を遣えって!?」
「圧倒的に何かが違う！　違うそうじゃない！」
「わかってるよ。安心してくれ」
「安心出来る要素は一切ないんだけど……」
「お前が襲ってくれるまで、私、我慢するから！」
「……死ね」
「ヒェッ……冗談だよ、冗談」

ヘラヘラと笑ってジャージを着ていく穂次を見て一夏は溜まった疲労を吐き出した。同時にヘラヘラと笑う穂次を見て、いつもの穂次を感じるので。やっぱりコレに性的欲求を感じる事なんて一生無いと思う。

まあコレが一生続くなんて事はないか。

と一夏が思い直した辺りでノックが響いた。穂次に目配せをしてから一夏は扉へと向かう。

数秒程掛けて鍵を開けて、扉を開く。そこに居たのは金髪だった。しかも、二人。

「おはよう、セシリア、シャル」
「うん、おはよう一夏」
「おはようございます、一夏さん」
「こんな朝から何か用か？」
「穂次いる？」
「部屋に行っても居なかったので」
「あー……居ないけど？」
「ホント？」
「ああ、嘘じゃない」
「一ヶ月分の食券をあげますわ」
「穂次なら部屋の中にいる」
「一夏アッ！　裏切ったな！」
　あっさりと裏切った一夏に対して声を荒げた穂次。その声に思考が停止したセシリアとシャルロット。それもその筈、今の穂次は女の子声であり、いつもの様な低い声ではないのだ。
「穂次さん？」
「穂次、なの？」

「ワタシホツギジャナイヨー」
「穂次さんですわね」
「そうだね」
「なぜバレた!?」
「お前って嘘吐けないよな……」
「くっ、俺は女の子になっちゃったんだ……もう一夏に嫁ぐしかないんだ！」
「どうしてそうなった」
「別にわたくしは穂次さんが女性になっても気にしませんわ」
「そうだね、別に何の問題もないね」
「へ？」
「むしろ勝手知りたる女性の身体と申しますか……」
「ほら、女の子って男の子より凄いらしいよ。薄い本で見た」
「ＨＥＬＰ!!　一夏助けて！　いけない扉開いちゃう！」
「もう開いた後だろ」
「アッサリしすぎぃ！　ほら見て、相棒の俺が困ってるから！　助けてください！」
「俺の相棒は……くっ」
「生きてるよ！　まだ死んでないから！」

「ほら、穂次行くよ」
「まって、シャルロットさん。俺は男だから」
「ウンソウダネー。大丈夫大丈夫。いつもとそれほど変わらないから」
「ふぇぇ……二人が俺を苛めてくるよぉ！」
「ああ、あんまりそんな顔をしないでいただけますか？　こう……ソソります」
「わかるよ、セシリア」
「ヒッ……助けて一夏！」
「お前の事は忘れ……ん、君は誰だっけか？」
「いつかの仕返しかテメェっ！」
腕をしっかりと両方から組まれた穂次がズルズルと引き摺られていく。
扉が閉まり、一夏は疲れた様に息を吐き出した。
せっかくの休日を寝て終わらせるつもりは無いけれど、もう少しぐらい寝ても問題無いだろう。
アクビをして、一夏は布団の中に潜り込んだ。
ゆっくりと意識を手放していき、

一夏は目を覚ました。

カーテンから差し込む光でもなく、ラウラが居ないからでもなく、ノックの音で眉間を寄せた。

時計を見る。まだ早朝だ。

一夏は溜め息を吐き出して、布団に潜り込んだ。

きっと全ては夢なのだ。

瀟洒な執事

学園祭当日となり、ＩＳ学園にいる男二人は同時に溜め息を吐き出した。
予め執事服を着た穂次とは違い、前々日にこっそりと穂次の部屋で衣装合わせをした一夏がこうして公衆の前で執事姿を見せるのは初めてである。
「ほぁぁ……」
「うむぅ……」
声を出したのは篠ノ之箒とラウラ・ボーデヴィッヒである。この二人もメイド服を纏っているのだが、穂次はソレを弄ることはなかった。決して執事としての振る舞いを演じているという訳でもなく、ただ弄るタイミングを逃したからだ。
小道具込みの穂次とは違い、魅力を十二分に発揮出来る一夏は困った様に引きつった笑いを浮かべている。
「なあ穂次」
「無理だから」
「断るのが早過ぎる。俺はまだ何も言ってない」
「いいか、俺にはどうしようも出来ない。つーか、今の状況は俺も被害者だ。この時間が

一刻も早く終わる事を願ってるよ」
「ああ……」
小さく話していた一夏と穂次が今一度溜め息を吐き出した。
「ほらほら、二人とも！　もっと笑顔で」
「寄り添ってもいいよ！」
「ああ〜執事二人が微笑んでるんじゃ〜」
「どうしてわたくしはカメラを忘れてしまったんですの！」
「任せてセシリア。僕は動画も撮ってるから！」
「流石はシャルロットさんですわ！」
「しゃ、シャルロット……その」
「任せてラウラ……皆に無料配布するよ！」
「流石はシャルロットだ！　私に出来ない事を簡単にやってのける！」
「痺れて憧れてもいいよ、箒！」
一夏と穂次に当たるフラッシュ。その向こう側から聞こえる聞きたくない言葉の応酬。幼馴染が壊れている様な気がしないでもないが、フラッシュの向こう側は幻想とか、そういう物だと信じて止まない一夏は考えるのを辞めた。
穂次に至っては既に諦めているのか、それとも演じる事に徹しているのか、ともかく

として執事としての温和な微笑みを浮かべている。クロスの掛けられた腕がどことなく腹部を抑えている様な気もするが気のせいだろう。
「なあ穂次」
「くっ、俺の胃に封印された邪龍が暴れやがる……！」
「それたぶんストレスっていう龍だから」
「逃げ出したいぜ、相棒」
「俺もだよ、親友」
「ほら！　二人とも笑って笑って！」
「いっそいがみ合ってもいいよ！」
穂次と一夏は天井を向いて、深く、深く息を吐き出した。
どうして自分達は接客前にコレほど疲れているのだろうか……。その答えは当然出てこない。
因みに写真は学園祭の裏側で大量に販売されることになる事を織斑一夏は知りはしない。

学園祭が始まり、一年一組の『ご奉仕喫茶』も滞り無く開店した。
数分程で長蛇の列が出来上がったのは男性生徒である一夏と穂次が執事服を着ているからだろう。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
「誰!?　この人!」
「ハハハ、私はお嬢様方の忠実な僕(シモベ)でございますよ。では、コチラのテーブルへご案内致します」
ニッコリと笑みを浮かべた完璧な執事たる穂次はその振る舞いを保ったまま来店した女生徒――お嬢様達を開いているテーブルへと案内していった。
尤も、穂次の普段は知れ渡っているので今の穂次を見たお嬢様方が同じ事を言うのだが、その対処も既に慣れた物である。
立ち振舞いから洗練された動きをしている執事とは違い、なんともチグハグに頑張っている執事が一人。
「いらっしゃ――、お帰りなさいませ。お嬢様」
コチラは未だに姿に慣れていないのか、何度か言葉に詰まりながらもお嬢様方の相手をしている。

元々のポテンシャルが高いのか接客自体はそれ程問題もないのだが、やはりドコかチグハグであった。

「アチラのお嬢様方にご要望は聞いたかね？」

「あ、悪い……」

「ふむ、私が行きましょう。あと言葉遣いは気を付けたまえ」

「お、あー、ハイ」

なんとも調子が狂う、というのは一夏の思考なのだが、予め穂次がキャラの設定を執事服を着た一夏に伝えていたのでそれ程の違和感はない。いや、違和感自体はあるが。

成りきる事にさっぱり違和感を覚える事のない穂次は設定通りに演じきっている。設定の対象が以前出会ったメイドさんとセシリアから聞いた理想の執事像を混ぜた物である事は穂次しか知らない。

ともあれ、瀟洒な執事はメガネを掛けて落ち着いている姿や立ち振舞いから幾分か年上に感じてしまう。そして逆にチグハグな執事は完璧な執事に窘められてバツの悪そうな顔をして仕事を変わらずにチグハグに頑張っている。

コレは、イイ。

誰とも言わず、全員が思った。設定を考えたヤツを呼び出してよくやったと褒めてやりたいぐらいにニーズに沿った物であるとお嬢様方は認めた。

設定を考えたヤツは実に瀟洒に執事をこなしている存在なのだが、ヘラヘラと笑いながら一夏と人間関係の設定を決めた事はお嬢様方には決して言えない事実であった。深夜テンションだったのだ、と後々に一夏は語るだろう。

当然、この場に居る女生徒はお嬢様方だけでなく、パタパタと動いているメイド諸君もそうだ。

メイド達はある程度の設定を穂次から聞かされていたが、まさかここまで完璧に演じるなんて事は思いもしなかった。

お嬢様の案内から注文、一夏のフォロー、メイドのフォロー。更にはお嬢様方のニーズに応える。瀟洒な執事はコレを完璧にこなした。数分前まで「俺の胃に封印された邪龍が……！」なんて言っていた本人とは思えない。

「お帰りなさいま――」

「……何よ」

「いえ、素敵なお召し物だと。いえ、失礼、鈴音様」

「つーか、何？　アンタそのキャラで行くわけ？」

「ハハハ、仕事ですので」

「あっそ。で、執事さんはアタシをどう接客してくれる訳？」

「暫しお待ち下さい。お気に召す様、微力を尽くします故」

軽く頭を下げた執事はクルリと踵を返して一夏へと視線を向けた。困った様に接客をしていた一夏はその視線に気付いた。

――何かあったのか？

――ご指名だぞ、色男！

――ホモじゃねぇよ！

見事に噛み合ってない二人のアイコンタクトが交わされた。

ムッとした表情のまま入り口へと来た一夏はソコにいた鈴音の姿を見て暫し停止する。

「何してるの？　お前」

「……それ、アタシも言っていいかしら？」

片や執事服を纏った男。片やチャイナドレスを纏った女。

穂次は頭を抱えて溜め息を吐き出した。唐変木とツンデレの会話はここまで酷いのか、と改めて思った。自分にも言える事なのは見ないことにした。

「では鈴音様。私はコレで」

「ええ。ありがとう」

「いえ、実に素晴らしい臀部だと私は言っておきましょう」

「ぶん殴るわよ!?」

「ハハハ、因みに我が喫茶のオススメは『執事にご褒美セット』ですので、是非に」
「あ、穂次テメェ！」
「ありがとう、じゃあソレで」
「承りました。少々、その執事をご堪能下さい」
　少しだけ執事の仮面を剥がしていつもの様にヘラリと笑った穂次はまた瀟洒な仮面を被って注文を通しに行く。
「さ、席に案内しなさいよ。執事君？」
「はぁ……コチラへどうぞお嬢様」
「おじょ……ああ、だからアイツはアタシの事を様付けだった訳ね」
「執事長が何か？」
「別にィ。というか執事長って？」
「そういう設定らしいデス」
「ふーん……で、アンタは？」
「新米デスので言葉遣いは許せ下さい」
「ふーん」
　何かを考える様に手で口元を隠した鈴音。正確には口元の笑みを見せないようにする為なのだがこの新米執事はそういう事に疎いのでさっぱり気付いていない。

「お待たせいたしました、鈴音様」
「パーフェクトよ、穂次」
「感謝の極み」
「お前ら息合うよな」
恭しく頭を小さく下げた穂次に対して一夏は溜め息混じりに言葉を放つだけで精一杯だった。
そんな様子を一瞥してから穂次はそのテーブルから離れた。なんせお求めは気に入る空間なのだから、自分が居ては邪魔になってしまうのだ。
「穂次さん、二番テーブルの注文なのですが」
「――……」
穂次の時間が止まる。金色の髪のメイドを見たからだ。なるべく意識しないように仕事をしていた穂次だが、こうして目の前にすると思わず見惚れてしまう。通常であるのならば「ナイスメイド！」なんて言ったことだろう。今の自分が演じておらず、更には相手がセシリアで無ければの話だが。
時間が止まって様に固まった穂次を訝しげに見て、セシリアは小首を傾げる。
「どうかしまして？」
「いえ、特には。それでセシリア、何かありましたか？」

「いえ、何かという訳ではありませ――……」
セシリアの思考が少しだけ止まる。二番テーブルに執事にご褒美セットを注文された様な気がするが、そんな事よりも何か大事な事を見落とした様な気がする。いや、絶対に聞き逃した。
次は穂次がキョトンとしてセシリアを見る番である。
「何か？」
「いえ、何でもありませんわ」
「……マジで何かあったか？」
「突然戻られても困りますわ……」
「ヒエッ……まあ何かアレば言ってください。こんな格好だし、相応に振る舞えるさ」
「その、少しは格好いいですわよ」
「ハイそこ、イチャイチャしない」
メイドと執事の仲を邪魔する様に音を立てて、アイスハーブティーと冷やしたポッキーが置かれたトレイが置かれた。
少しだけムスッとした顔でセシリアを睨んでから、穂次にジト目を向けたシャルロット。一応メイドの格好はしているが午前中はキッチン担当である。
「穂次はアッチに執事にご褒美セットを持ってく」

「へいへい。従順な執事は瀟洒に持っていくさ」
「立ち振舞い」
「――失礼、ご主人様」
しっかりと立ち振舞いを直した穂次はトレイを片手で持ち上げて背筋を伸ばして歩き出す。その後ろ姿をちょっとだけ見惚れてから二人は再起動を果たした。
ご奉仕喫茶は実に順調なスタートを切った。

時間は進むもので、一夏と穂次の為だけに用意された小さな空間で穂次は溜め息を吐き出した。幸い、もう一人は現在自分に代わってわたわたと動いている筈だ。
首を締めていたネクタイを緩めて、改めて大きく息を吐き出した。小さく積もっていた疲労を吐き出して、首の骨を鳴らす。そこには瀟洒な執事など居らず、執事の格好をした穂次がいるだけだ。
小道具であるメガネと白手袋を置いて、穂次はその空間から出て行く。

少しして、その空間を開いた存在がいた。二名程。

メイド服のシャルロットと同じくメイド服を着たセシリアである。標的がドコにも居らず、着替える空間に突貫したというのに、やはり居ない。
「せっかく休憩を合わせたのに！」
「探しますわよ！」
慌ただしくスカートを翻して走りだすメイド二人。
だたでさえ男気の少ないＩＳ学園で執事姿の穂次を探すのは実に簡単な事だろう。とりあえず騒ぎがありそうな所を見れば居るはずだ。

穂次は予想通りにスグに見つかった。その穂次をバレない様に曲がり角の影に潜んで睨む二人。
決して彼女らが恥ずかしがって穂次の元に行かない訳ではない。
「――誰ですの、あの女」
「――知らない女だね」
バッチリと目のハイライトが消え失せた二人の視線の先には穂次がいる。
コチラはヘラヘラといつもの様に笑みを浮かべて会話をしている。コレは問題ない。だが相手が問題なのだ。
スーツをはち切れんばかりに押し上げた胸にタイトなスカート。スカートから伸び

るスラリとした脚。金を細くしたような髪が波うち、遠目からでも分かる美女である。
そんな人が穂次と話している。
視線と思考で人を殺せるのならば二人は彼女を千回程は殺せただろう。二人合わせて二千回だ。
そんな様子を睨んで数十秒程、その金髪の美女の視線と二人の死線がかち合った。
少しだけキョトンとした美女は何かを察した様に勝ち誇った笑みを浮かべて穂次へと向き直った。そして両手で穂次の両頬を抑えて、顔を近づけていく。
何かが切れる音が二つした。
「何をしてますの!?」
「あら、残念ね」
声を荒げて自身の怒りを露わにしたセシリアと無言で怒りを表しているシャルロット。その二つの怒りを受けても何のそのと言わんばかりにニッコリと余裕の笑みを浮かべる美女。
穂次と言えば何が起こっているのか理解出来ていないのかポケーッとしている。
威嚇するメイド二人を数秒ほど視界に収めた穂次はようやく再起動を果たして声を出した。
「あー……えっと、二人ともどうしたのさ?」

「穂次、この人を紹介して貰えるかな？」
「いや、別に」
「紹介してもらえるかな？」
「アッハイ……」
　ニッコリと笑っている筈なのに怖いシャルロットに気圧され、穂次は震えを取る様に適当な声を出した。「あー」だの「えー」だのと言っている最中に美女が口元を笑みで象る。
「ねえ穂次君。彼女達はガールフレンドか何かかしら？」
「ふぁっ!?」
「そうじゃないなら私達の関係には口出し出来ないわよね？」
「あ、いや、えー、どうしてそうなってんですかね」
　穂次の腕を引いてその大きな胸に抱き寄せた美女は余裕を笑みに変換させて二人を見下した。物理的な意味ではなくて、精神的な意味で。
　ムッとした二人は空いている穂次の腕を引っ張り、戻ってきた穂次を両方から抱きしめて美女を睨む。
「わたくしは穂次さんの、こ、婚約者ですわ！」
「私は穂次の恋人だから」

「ふーん……」
「あー……えっと、あんまり二人で遊ばないでもらえます？」
「穂次さん！　いい加減にこの方が誰かを教えていただけますか？」
「そうだね、どういう関係か私スゴく気になるなー」
「ヒェッ……」
セシリアの震えが伝達するように、握られた腕が僅かに揺れる。
シャルロットの怒りが伝達する様に、握られた腕が僅かに揺れる。ついでに痛みも走る。
穂次は神様を呪い殺したい気持ちであった。少しだけ息を吐き出して、思考を纏め上げる。
「えー、コチラ。政府から脱退した俺の後見人である、ミューゼルさん。二人が思ってる様な仲じゃないです」
「あら、ツレナイわね」
「そ、そうでしたのね……」
「す、すいませんでした」
「いいのよ。私も揶揄うような事をしたんだし」
穂次の後見人である、と聞いて二人は少し身を引く。対してミューゼルはニッコリと

二人を見てから穂次へと視線を向けた。
「それにしても、こんなガールフレンドいたなら言ってくれればいいのに」
「ガッ、!?」
「あら、違うのかしら？　さっきは婚約者と恋人って聞いたけれど？」
「そ、そういえば！　穂次って学園に権利とかがあるんじゃなかったっけ？」
「スゲー急な話しの切り替えツスね」
「ん？」
「何でもネーです。まあややこしい事はさっぱりわからないけど、卒業後の事も考えて後見人がいる方がいいって事を教えてくれたから、知り合いのミューゼルさんに頼んだって訳です」
「そうなんだ」
「それで、三人はどこまでイッたのかしら？　キスはした？　まさかもう！」
「無いですから。つーか、時間ヤバイんじゃないツスか？」
「ん？　ああ、そうね。じゃあ二人とも邪魔をして悪かったわね」
腕時計を見て時間を確認したミューゼルはそれだけを言い残して人混みの中へと消えていった。
ソレを確認した穂次は息を小さく吐き出した。

「んで、お二人サンは何をしに？」
「そうだった。穂次一緒に回ろうよ」
「わたくしと一緒に学園祭を回りませんこと？」
「俺の身体は一つなんですが……」
「三人一緒に回るから大丈夫だよ」
「なるほどなぁ。つーか、近くないですか？」
「気のせいですわ」
「なるほどなぁ。柔らかい何かが当たってるんですけど？」
「当ててるんだよ」
「なるほどなぁ……ん？」
穂次は首を傾げてみたがソレを二人を言及することはなかった。ならば自分の感じた矛盾はきっと取るに足らない事なのだろう。
穂次はもう一度、小さく溜め息を吐き出してへらへらとした笑いを浮かべる。
ソレが夏野穂次なのだから。

乱暴する気でしょう!

「や!　穂次君。ちょっといいかしら?」

俺と一夏の休憩は入れ替わりであり、俺は絶賛にわか執事を演じている訳だ。

その執事たる俺に対して目の前の――、おっぱいのデカイ方の水色はニンマリして俺の手を掴んだ。白手袋をしているが、その内は包帯が一応巻かれているんですよ?　知っててやってます?　知っててやってるんだろうなぁ……。

そして、なんでこの人はメイド服なのだろうか。まさかこの人も布仏さんと一緒なメイドさんなのだろうか。美人は何着ても似合うって事がまた証明されてしまったか……。

ともかく、頭の中に有名RPGみたいな選択肢が現れる。コマンド方式でどうしてか選択肢が『逃げる』とか『言い逃れる』とかばかりだ。

大丈夫、落ち着け。落ち着いて、このターンを凌げばきっと一夏が来て、そっちに意識が向くに違いない。

「ちょっと穂次君借りてもいいかしら?」

「オッケーですよー」
まあ戦闘がターン制でなくてＡＴＢシステムって事を除けばって話しだった。
俺に味方って居ないんですかね？
「失礼、お嬢様。私の主張とかは――」
「ん？　ん～……ほら、午前中に仕事手伝ったじゃない？」
「いや、俺も一緒に仕事してたんですけど……つーか、更識会長が面白がってドジっ娘メイドとかするからフォロー大変だったんですけど？」
「可愛かったでしょ？」
「まあ更識会長は美人ですからね」
「だから生徒会の仕事を協力しなさい」
「夏野穂次　は　逃げ出した！」
「しかし　まわりこまれてしまった！
更識楯無　は　生徒会長権限　を使った！」
「夏野穂次　を　捕らえた！　……ハッ！」
「よし、行くわよ！」
なんて罠なんだ！
冗談はさておき、どうせこの人だからココに来た時点で逃げ道なんて無いんだ。穂次

知ってる。
「ちょ、ちょっと待って下さい！」
「助けてシャルロットさん！」
「あら、シャルロットちゃん。いい所に来たわね。アナタも来なさい」
「ふぇっ!?」
「おねーさんがキレイなドレスを着せてあげるから」
「キレイな、ドレス……」
「これダメなヤツだ。ハッキリわかんだね……」
こういう言葉の戦いで強い常識人なシャルロットさんがアッサリと陥落した。目の奥が輝いてるから俺には分かる。
やっぱり俺に味方なんて居ないんだ！
「穂次？　何してるんだ？」
「一夏！　助け……いや、いいわ。どうせお前じゃ無理だし」
「なんで俺は話し掛けたら即効否定されたんだ？」
「相手が穂次だからだろう」
「なるほど……ん？」
箒さんの言葉に頷いて、少ししてからようやく疑問が湧いたのか一夏が首を傾げた。

首を傾げてから、ようやく俺の腕を掴んでいる更識会長へと視線を向けた。
更識会長はニッコリした。一夏もニッコリした。
「じゃあな、穂次。お前はいいやつだったよ」
「待っでぇ、待っでぇぇぇ」
「怖いわ！　ゾンビかお前は！」
「うっせー！　この際お前も巻き添えだ！　ココはお前に任せるゼ！」
「それ両方共死ぬヤツだから！」
「あら、よくわかったわね」
更識会長が一夏の腕を掴んだ。ニッコリ。
俺を睨んでくる一夏。まあ待て一夏。俺は悪くないんだ。そう、全部このスカイおっぱいブルーが悪いんだ。
「で、コレは何なんですか？」
「あら、無抵抗ね」
「抵抗して逃げられるなら穂次も逃げてますよ」
「信頼されてるわね……おねーさん妬けるわー」
「俺と穂次の間には切っても切れない友情の絆がありますからね」
「さっき俺を残して逃げようとしたヤツの言葉とは思えねーな……」

「それで、生徒会で演劇をするからその役に二人が必要なのよ」
「ん？　それならなんでシャルロットさんも誘われたんですか？」
「観客参加型演劇だから」
「……なるほど」
「知っているのか、穂次！」
「この美人が生徒会長だったのか！」
「そこかよ！」
「冗談だよ、相棒。まあ大丈夫だろ。つーか、話を色々聞いてるとドレス姿の女の子が見れそうだから俺は賛成デス！」
「お前はそういうヤツだったな……」
「ねえ穂次。その、私のドレス姿、見たい？」
「……見たいッスねー」
「そっか。うん、よし。任せて！」
何を任せればイイというのだろうか。
でも、シャルロットさんのドレス姿は見たい。第二王女などと色々言っていたけれど、ドレス姿は妄想でしかなかった。ソレが現実になるのだ。見たい。
「おねーさん、凄い疎外感を覚えるわ。まあ聞き耳を立ててる、箒ちゃんもセシリアちゃ

んもラウラちゃんもゴーね！」
「鈴音さんが涙を流してそう」
「鈴ちゃんならもう誘ってるわ」
「俺達が捕まらなかったらどうするつもりだったんですかね……」
「え？　捕まらなかったら捕まえるだけでしょ？」
「なあ一夏。俺がアホだから理解できないのか？　それとも更識会長がぶっ飛んでるのか？」
「千冬姉と同じ感覚だ」
「なるほどなー……」
きゃっきゃっと騒いでいる女の子達を尻目に俺と一夏は警戒態勢に入る。幸いな事に反応はしなかったようだ。
いや、しかし、あの人……人？が反応しない訳が無い。どうせ学園祭が終わったら俺と一夏の命は風前の灯火、いいや、水中のマッチ。終わる事が決定しているのは火を見るより明らかなのだ。

◆◆

「一夏君、穂次君、ちゃんと着たー?」
と言いながら部屋の中へと入ってきた更識会長。一夏はスゲー細い目でソレを見ながら溜め息を吐き出した。
そんな一夏を見て何かを察したのか更識会長は納得顔。
「開けるわよ」
「開けてから言ってるじゃないですか……」
「まあまあ、二人とも着てるしいいじゃない」
「他に言うことがあるんじゃないッスかね……」
「似合ってるわよ!」
「違うんだよなー……」
俺と一夏が疲れた様に溜め息を吐き出し、お互いの姿を確認して、更に溜め息を吐き出した。
一夏は王子であった。ドコか頼りなさを感じるが、優しい王子様と言っても相違は無いだろう。いっその事、なんだっけ、あれ……ドロワーズ?でも着ればいいのに。
俺は執事服から一転し、騎士の様な格好をしている。肩と胸には甲冑があり、ベルトには細めの西洋剣を帯びている。当然、模造鎧と模造剣である。加えて盾もしっかりと

準備されており、ソレと甲冑には紋章が描かれている。
「いいわね。王子とソレを守る騎士！　両方ともヘタレっぽいのが残念だけど」
「あー、やっぱり一夏の配下なんですね……」
「穂次、わかってたのか？」
「甲冑とお前の着てる服に同じ紋章ありゃぁ気付く……つーか、一夏の配下かよー」
「……不満か？　我が友よ」
「滅相も無い。精々、俺に後ろから刺されない様に、我が君」
「怖い騎士だなぁ」
「相手が女の子だと俺はアッサリ寝返るからな」
「確定かよ……」
「ま、演劇だし。戦うなんて事はないっしょ……」
「楯無さんが凄い冷や汗流してるけど？」
「あの完璧な更識会長が図星を突かれた所で冷や汗なんか流す訳がないだろ。きっと演技だ。俺達を不安にして困らせようとしてるんだ」
「なるほど、流石穂次だ」
「そそそそそｓ、そうよ！　ええ、ええ！」
「凄い吃ってるけど？」

「あの完璧で美人な更識会長が隠してた本当の事を言われた所で吃るわけがないだろ。演技だ。俺達を不安にして笑うつもりに決まってる」
「なるほど、流石穂次だ」
「ハッハッハッハッ！」
「ハハハ！」
二人して笑っていると更識会長の冷や汗が少しずつ増していく。目が泳ぎ、何かを言おうとして、何度か口を開いては閉じる。
「あー、えっと、それじゃ――」
「おーっと！　更識会長、待ってくださいよー」
逃げようとした更識会長の前に立ちふさがり扉を後ろ手で閉じる。
俺はニッコリした。更識会長も冷や汗を流しながらニッコリした。
「そうですよ。俺達は演劇の事なんてさっぱりなんですから」
更識会長が振り向き、一夏の方を向いた。
一夏はニッコリしていた。更識会長も顔色を悪くしてニッコリした。
改めて俺の方へと向いた更識会長がニッコリしながら俺の腕を絡め取ろうとした。けれど、俺はその腕を掴みアッサリと更識会長を捕らえた。
「くっ」

「王子！　謀反者を捕らえました！」
「うむ」
「ヤメテ！　乱暴する気でしょう！　エロ同人みたいに！　エロ同人みたいに！」
「うわぁ……」
「おい、一夏。もっと反応してやれよ」
「そうよ一夏君。こんな美人が囚われてるのよ？」
「なんで俺が悪いみたいになってんですか……」
「それよりも穂次君凄いわね。結構本気だったんだけど」
「ほら、俺って天才じゃないですか。更識会長如きの攻撃は見切れるし、捌けますよ」
「えーん、一夏君。私如きって言われたよー」
「おい穂次！　楯無さん如きで天才を気取るなよ！」
「おっそうだな」
「いけない！　私が不利になっていく……！」
　悔しそうに下を向いた更識会長。一夏からは俺が腕をキメて捕まえている様に見えているのだろうけど、実際は既に拘束なんて無い。
　所詮はお遊びである。だからこそ俺が更識会長の攻撃も捌けた訳だ。
「それで、どうなんです？」

「――王子の一夏君に足りない物があります……、はい穂次君」
「威厳！」
「即答でソレってどうなんだよ……」
「そう、威厳よ！」
「しかも合ってるんですね」
「その威厳を得る為にこんな物を用意しました。というよりは衣装の一部だけどね」
「王冠？」
「一夏君はこの王冠を着けてもらいます」
「はぁ」
「それで、俺は？」
「穂次君は一夏君の後ろに着いて、騎士らしく振る舞う事」
「……あー、ヤバイ、なんとなくわかってきた」
「穂次、説明してくれ」
「いいか一夏。俺は騎士で、お前は王子様だ。そして俺は騎士らしく振る舞わないといけない。王子を守る騎士らしくな」
「……楯無さん。ほら、脚本とか台本とか一回も見てないんですけど？」
「え？　一夏君って無いものを見れるのね。それって、とても凄いと思うわ！　基本的

にコッチからアナウンスするから、あとはアドリブでお願いね！」
　先ほどの仕返しなのか、更識会長はスゲーいい笑顔で俺達を煽ってから扉から出て行った。
　王冠をクルクルと弄りながら、一夏が不安そうに俺を見てくる。
「なあ穂次」
「安心しな相棒。何かあってもフォローしてやるよ」
「頼むぜ、親友」
「任せてくれ、我が君」
　一夏は王冠を、俺は剣と盾を持ち、舞台袖へと移動する。

　――むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました。
「ん、一夏がシンデレラじゃないのか」
「お前さ、今の俺を見てどうやったらシンデレラに見えるんだよ」
「ほら、こう、王子の転落人生を描いたシンデルワとか……？」
「シンデレラに謝れ馬鹿」

――否、ソレはもはや名前ではない！
幾多の舞踏会（戦場）を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことすらいとわぬ地上最強の兵士たち！
彼女らを呼ぶにふさわしい称号――ソレが『灰被り姫（シンデレラ）』!!
「俺よりも謝らないといけない人がいると思うんですけどー」
「というか、なんだよ、今の解説」
「つまりそういう事なんだろ。シンデレラはか弱い女性じゃなくて織斑先生の可能性が……？」
「いや、それだと虐める継母が居ないだろ……」
「篠ノ之博士とか？」
「継母が凄いシンデレラを溺愛してそうだな」
――今宵もまた血に飢えたシンデレラたちの夜が始まる。
王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という死地に少女たちが舞い踊る!!
「一夏、大丈夫か？　胃薬いるか？」
「持ってるのか？」
「しまった！　着替えと一緒に置いてた。ちょっと取ってくるわ」

「待て、逃さねぇぞ」
「チッ！　勘のいい王子め！」
「完全にセリフが悪役のソレじゃねぇか！」
「もらったぁぁぁ!!」
いがみ合いをしている一夏を狙い何者かが姿を現した。一夏の腕を引き、守る様に前に出て盾で攻撃を防ぐ。
相手は俺を見て驚いたのか、すぐさま距離を開けた。
盾を退けて相手を見れば、白地に銀のあしらいが美しいシンデレラ・ドレスを纏った鈴音さんであった。幸い、胸を開いた大胆なドレスでもなく、その慎ましやかな胸板が見える事はなかった。
「なんで穂次が居るのよ!?」
「格好を見て察して下さい」
――王子には一人の騎士がいました。その騎士こそ王子の無二の友人であり、王子の守護者です。
「そういう事ッスよ」
「あっそう。でも両方倒せば問題ないんでしょ!!」
投げられた飛刀を盾で防いで俺と一夏は冷や汗を流す。

「殺す気か！」
「死なない程度に殺すわよ！」
「殺されると人は死ぬ。ハッキリわかんだね……」
「うっさいわよ！　ア穂次！」
蹴り上げられた盾を手放し、しっかりと鈴音さんを見る。残念ながらスパッツが履かれている。なぜスパッツなんてあるのだろうか……いや、スパッツもイイな。
ゾクリと変な感触を覚え、一夏を後ろ手で押し出し、鈴音さんの脚を払って俺も上体を逸らす。
俺の顔があった場所を通過した銃弾は舞台にぶつかり小さな穴を開けた。
「ヒェッ……なんで一夏じゃなくて俺を狙ってるんですかね」
「何かしたんじゃない？」
「えぇ……」
「それで？　盾の無くなった騎士様はどうやって私の攻撃を防ぐのかしら？」
「――、ハッ、ハハハハハハ!!」
唐突に笑い出した俺を訝しげに睨んだ鈴音さん。移動中なのか、それともスコープで様子を見ているのか、まあどちらでも構わない。
鈴音さんが言うのだ。仕方ない、演じてみせよう。

「我が君、オーダーをくれ。俺はソレを十全に応えてみせよう」
「――脅威から俺を守れ、我が騎士」
「ああ、了解した」
俺は笑みを浮かべ、一息に剣を引き抜く。模造剣である事はわかっているけれど、どうにでもなるだろう。
俺と一夏のやり取りを聞いて湧き上がる客席。これってギャラとか入るんですかね……。

舞台の騎士

一人の騎士が居た。

ドコかヘタレな王子を背後に置き、鞘に収めた剣を握った騎士がソコには居た。

口元には笑みを携え、目の前にいる敵に視線を合わせた。そのまま、一歩目を踏み込んだ。

剣先を僅かに床に擦り付け、一気に振り上げる。容易く初撃を回避したお姫様（敵）は少しだけ驚いた顔をした。

なんせ、目の前の騎士の事はよく知っていたからだ。何かの間違いがあるかも知れないが、決して二人は恋人関係だとか、そういう事実は全く無い。当然、家族という訳でも決して無い。

「流石ッスねぇ」

「当然でしょ」

小さく交わされた言葉に互いに笑みを浮かべる。騎士による攻撃など物ともしないように、回避し、捌き、強化ガラスの靴で防いだ。

決して互いの力が拮抗している訳ではない。コレは演技なのだ。

少しばかり穂次(騎士)が冷や汗を流しているのは演劇の延長にしては随分と目の前の鈴音(お姫様)と今しがた狙撃地点に到着したセシリア(お姫様)が本気すぎるからだ。

当たらない攻撃に肩を竦めてみせた騎士は足元に落ちていた盾を拾い、王子(一夏)の頭へと投げた。幸いにも盾は王子の頭にぶつかる前に飛んできた〝何か〟に衝突して弾き飛ばされる。

「俺が居る限り、王子には一切触れさせんよ」

少しだけ演技染みた言葉と構えた剣。沸く観客。どういう訳か『格好いい!』という黄色い声ではなくて『やったぜ!』というドコか芳しい歓声であったが、穂次はなるべく気にしない事にした。一夏は黄色い声にしか聞こえていないだろう。

鈴音が一夏に対して残念そうに目を向けていた。ソレに一夏は気付いて、真剣な表情になった。

「流石は俺の盾だ。俺も誇らしく思うよ」

更に黄色い声が沸いた。鈴音の残念そうな目が強くなり、穂次は肩を少しだけ揺らして笑いを堪えている。一夏はキョトンとしているので、状態に気付いていないのだろう。人生、気付かない方がいい事もある。

「つーか、なんでアイツは狙われてるのに遮蔽物に隠れないんですかね……」

「騎士様が守ってくれるからでしょ?」

「身を守らない王子様の御守りなんて最悪だな」
「ま、遮蔽物に隠れろって言わないアンタもどうかと思うわよ？」
「それもそっか」
　剣を一振りして三歩程下がって武闘派なお姫様から距離を取った騎士。佇まいは警戒し続けているが、既に演技の仮面は外れているのかヘラリとした笑みが顔に浮かんでいる。
「なあ穂次。俺はドコかに隠れてた方がいいのか？」
「おいおい、主役が隠れてどうするんだよ」
「そうだよな」
「ついでに言うと、頭を下げな相棒」
　一夏の頭を抑えつけて穂次は振り下ろされたナイフを防いだ。防がれたソレに僅かに目を見開いた銀髪のお姫様は構わずに蹴りを放った。
　脇腹を狙ったその蹴りを左手で防ぎ、掴もうとすれば容易くも蹴り足は抜かれてしまった。
「なるほど。本当にお前を倒さなくてはいけないのか」
「まあ一応騎士だからな。コレの」
「コレって言うなよ」

「へいへい、失礼。王子様」
ベェと舌を出して外方を向いた穂次に一夏は溜め息を吐き出した。
「ま、そこにお姫様は守ってくれるみたいだし、俺は戦いに集中するよ」
「お姫様？」
「え、えへへ……やぁ、一夏」
「シャルもか」
「うん。ちょっとね」
人懐っこい笑みにドコか困った様な気持ちを織り交ぜながら盾を持ち、そして今しがた何かを弾いた。金属音が響き、盾が大きく動いた。
騎士は小さく、まるで息の抜ける様な口笛を吐き出し、笑みを浮かべ、その顔を正面へとお姫様達へと向ける。
王子の背筋に悪寒が走る。冷たい何かが背中を這い、急激に口が乾く。一夏は顔を上げた。シャルロットの先、穂次の向こう、ラウラの奥、鈴音の更に背後。
ゆらりと影が揺れた。長いポニーテールを揺らし、白のドレスを纏った少女。お姫様達と同じように透明のガラスの靴がコツコツと舞台を鳴らす。誰もがその登場に押し黙り、その少女へと視線を集中させた。
左手には鞘に収まった刀。チキリと高い音と何かが擦れる小さな音が静かな舞台に

大きく響く。
　穂次はソレを見つめて肩を竦めた。彼女と会話をしていた限り、こういった舞台は苦手である事は分かる。ソレを確かめる様に一夏へと視線を向ければ、その視線に気付いた王子は首を横に振る。その顔は真っ青だ。
「――王子だ。王子だろう？」
「あ……（察し」
「なあ！　王子だろ、お前……っ！　王冠を置いてけ！　その王冠だっ!!」
　穂次は箒の瞳を見た。なんか、こう……ぐるぐるしてる。耳が真っ赤な事を考えると恥ずかしすぎて限界突破した事はなんとなくわかった。
　穂次がそんな状態である箒を見るのは二度目である。二度目は今で、一度目は売り子をしていた巫女姿の箒である。実におっぱいが素晴らしかったと、穂次は思い出した。
　少しだけ身をズラして後から飛んできた盾を手に取る。盾を投げたお姫様は凄くニッコリしていた。
「なにかな？」
「あー、いえ、別に。サンキュー、プリンセス」
　改めて盾を腕に装着した騎士は剣を構えて、ニヤリと前を見た。
　ソレを見たお姫様達も同じく構えた。日本刀の鞘が舞台に落ちると共に型の決まっ

ていない殺陣が始まった。

事の始まり、いいや、原因は確かにあった。

そもそもどうしてシンデレラ達が頑なに王冠を狙うのか。演技と同じ様に隣国の軍事機密があの王冠に秘められている訳ではない。

王冠には権利が秘められていた。何でも出来る、という程自由ではないが、たった一つ確約されている事があった。

『織斑一夏、夏野穂次と同室になれる権利』

ソレがシンデレラの求める権利であった。当然、両名と同室になれる訳ではなく、どちらか一方と同室になれる権利である。

織斑一夏を狙う少女達はその逞しい妄想を広げた。

夏野穂次を狙う少女達は少しだけ悩んだ。極々偶に穂次の部屋へと襲撃しに行っていた二人にしてみれば魅力としては劣るモノであった。

けれど、魔法使い(更識楯無)はしっかりとその事を予測し、まるで最初の蛇の様に少女達を誑かす。

『会長権限』という如何にも一夏と穂次が弱そうな言葉に少女達は釣られた。

一人は防弾ガラスの靴を。
一人はサプレッサー付きのスナイパーライフルを。
一人はナイフを。
一人は防弾盾を。
一人は日本刀を。
魔法使いは一人ほくそ笑む。
もしもこの舞台に悪が在ると言うならば、ソレは間違い無く魔法使いの事を言うのだろう。

その魔法使いは目を細めて舞台を睨める。ソコには一人の騎士がやや引きつった笑みを浮かべながら、まるで必死に攻撃を捌ききっている。
日本刀の一撃を流し、
ナイフによる素早い連撃を必要最低限だけ弾き、
鋭い蹴りを軽々と手で防いでいる。
挙句に視線を向ける事もなく、狙撃手の一撃を回避してみせる。
その動きの全てを注視していた楯無が目を細めて、小さく、細く息を吐き出した。
「穂次君頑張りすぎー」と冗談めかして言って、顔に笑みを浮かべておく。このままで

は自分の目的も達成する見込みも無く、そして舞台としても失敗になるかも知れない。
だから、コレは、そう、仕方ない事なのだ。決して自分が面白そうとか、そういうアレではない事は確かだ。更識楯無は後にそう言い訳をする予定だ。
マイクのスイッチを押し、楽しげに告げる。魔法使いの言葉はこの時点では絶対なのだ。
「さあ！　ただいまフリーエントリー組の参加です！」
「ふぁっ!?」
「は？」
攻撃を捌ききった穂次の声から素っ頓狂な声、一夏の口からはさっぱり意味がわかってない様な言葉が漏れだした。
そして分からなかった意味はスグに理解する事が出来た。
地響き。まるで軍隊……いいや軍隊程の統率はない群が走って一夏並びのその前にいる穂次の前に現れた。
「穂次！」
「は、ハハハ……無理！　逃げるぞ一夏！」
「おう！」
「待ってよ一夏。せめて王冠を」

「スマナイ、シャル……。俺には威厳が必要なんだ」
「は？」
　シャルロットはさっぱり意味がわからなかった。威厳ってなんだよ、と口に出したかったけれどソレは飲み込んだ。
「一夏！　白式に脱出ルート送っとくぞ！」
「生きて会おう、我が騎士よ！」
「絶対に警戒を解くなよ、王子様！」
　王子と騎士はまるで打ち合わせをしていたかのように弾かれる様に動き始めた。呆気に取られていたシャルロットはようやく一夏へと一歩を踏み出したがその手は穂次に引かれ、アッサリとシャルロットは穂次の胸の中へと収まった。
「ふぇっ!?」
「ハーッハッハッ！　お姫様共、このお姫様がどうなってもいいのか！」
「――えぇ……」
　現状に真っ赤になったシャルロットは穂次の言葉に呆れを混ぜた戸惑いの言葉を吐き出した。
　剣をしっかりと胸に抱いたシャルロットへと向け、三流悪党の様な言葉を吐き出した騎士。先ほどまでの格好良い騎士の姿は最早無いのである。

「ねえ穂次」
「何だ？　おーっと、俺を籠絡しようたってそうはいかないぜ！」
「いや、まあ籠絡してもイイけど……。よく考えなよ」
「ん？」
「お姫様達は皆ライバルなんだよ？」
「だろうな。あの三人がしっかり連携してたらこの天才である俺だって危なかった」
「ソレはどうでもいいんだけど。皆ライバルだから私は人質としての価値は無いよ？」
「……はっ!?」
　仰々しく驚いてみせた穂次。緩んだ拘束からスルリと抜けだしたシャルロットは穂次の顔をしっかりと捉えてニッコリと笑う。
「ちょっとだけトキメイたよ」
「は？　あでででで!!」
「よし！　騎士は捕まえた！　あとは王子だけだよ！」
　うぉぉぉおおお！　と決して野太くない声が響き広い舞台をお姫様達が駆けまわる。決して騎士を捕らえてるシンデレラの方は見ない。
　シンデレラに関節を極められている騎士はちょっとだけダラしない笑みを浮かべて、ソレを隠す様にいつものへらりとした笑みを浮かべる。

「んじゃ、俺の仕事は終わったから舞台を降りようか」
「え？」
「王子が居ないし、捕まった騎士は仕事は出来ないだろ」
「そうだけど……アッサリしてるなぁ」
「演技だからな。　くっ殺せ！　とか言ったほうがいい？」
「ん？　今何でもするって言った？」
「言ってないんだよなぁ」
舞台を降りたシャルロットはクスクスと穂次と軽口を言い合い、手を放した。肩をぐるりと回し、穂次はシャルロットへと向き直る。
「そういや、シャルロットさんは王冠を狙わなくてもいいの？」
「あ」
「行ってらっしゃい！　何があるか知らないけど俺は応援してるよ！」
本当に知らないんだろうなぁ、とシャルロットは苦笑しながら穂次と別れて、王子様を探しに走りだした。どうせ穂次に聞いても適当にはぐらかすのは目に見えていた。
シャルロットの姿を見送った穂次は目を細めて小さく息を吐き出し、天井を向いた。大きく溜め息を吐き出し、

「……やっぱり、辛くないッスねー」

そう一言呟いて、いつも様にへらりと笑みを浮かべ、手を強く握りしめてみた。

痛みは思ったほど感じる事はなかった。

助言の効果

オータムと呼ばれる女性は心の中で毒づきながらＩＳ学園の敷地を走り抜けていた。舌打ちをして、奥歯を噛みしめる。全ては順調であった。そう順調だった。

ＩＳ学園の侵入は思った以上に余裕だったし、織斑一夏もすんなりと罠の中へと入り込んだ。失敗した理由はこの計画を立てたのがあのいけ好かない少女だという事だけだろう。

剥離剤（リムーバー）を準備したのも、潜入計画を用意したのもあの少女であった。そして失敗した。いいや、失敗すべくして、失敗したのだ。

オータムは忌々しさを噛み殺し、ようやっとＩＳ学園から離れた公園に到着している事に気付いた。

そして、ソコに居る男を睨んだ。

「セカンド……」

「コンニチハ、お姉さん。いいや、オータムって言った方がいいのかねー」

ＩＳ学園の制服を着た男はセカンドと呼ばれる男。男はへらりと笑みを浮かべ、オータムを視界へと入れる。

「さて、オータム。アンタには黙秘権があるが、話さない事はアンタを不利にするかもしれない」
「ハッ。刑事か何かかよ。もう私を捕まえたつもりか？　セカンド」
「ＩＳもない。武器もない。そんなアンタが俺達からどうやって逃げるって言うんだ？　近くに味方でもいるなら別だがね」
「……チッ」
　少しだけ首と瞳を動かしたオータムが後ろにいるラウラ・ボーデヴィッヒを視界に入れて、穂次へと視線を戻す。
「穂次。よくやった」
「わーい、ラウラさんに褒められちゃったぞ☆　おーっとセシリアさん、スコープは俺じゃなくてソッチの女性に向けるべきだ」
　ドコか焦った様な穂次は両手の人差し指をオータムへと向けてへらりと笑い、わざとらしく安心したように溜め息を吐き出した。
「動くなよ、亡国機業。お前たちには聞きたい事が沢山ある」
「チッ……」
「とりあえず、名前とスリーサイズから言ってみ――、だからスコープは俺じゃなくてソッチの女性に向けてセシリアさん！」

「穂次、ちょっと黙ってろ」
「ふぇぇ……ラウラさんに怒られたよぉ」
　呆れを僅かに混ぜたラウラの声に穂次は相変わらずオチャラケて応えた。
　溜め息を吐き出したラウラは再度オータムへと視線を向けた。
「お前のＩＳはアメリカの第二世代型だな。ドコで手に入れた、言え」
「言う訳ねーだろうが！」
「アンタのそのＩＳスーツ、汗がよく染みてるな。ください」
「やる訳ねーだろうがッ！」
「……穂次」
「はいはい、黙ってる、黙ってるよ、おーけー。だからセシリアさんもスコープはソッチに向けろって」
　不貞腐れたように肩を落とした穂次は近くにある水飲み場へと体重を預けた。見て分かる程度の警戒は残っているが、ソレは素人当然の警戒だとラウラは判断する。
「言わないつもりなら言わせればいい。拷問の心得も多少はある。長い付き合いになりそうだな」
「ラウラさんと長い付き合いだなんて……」
「……穂次」

「おーらい、もう口出しはしねーッス」

両手を挙げて降参の格好を取った穂次に溜め息を吐き出したラウラはオータムへと接近しようと足を踏み出し、その足を止めた。

止めたのはプライベート・チャンネルから聞こえたセシリアの言葉であった。

『離れて！　一機来ますわ！』

「何？」

「……」

ラウラがセシリアの言葉に反応してセンサーの範囲を拡大した次の瞬間に、その右肩がレーザーに撃ち抜かれた。

「ぐうっ！」

「ラウラさん！」

「来るな穂次！　その女を見張ってろ！」

眼帯を外し、その金色の瞳を晒したラウラは続けて打ち込まれて来たレーザーを二発かろうじて回避した。

「……チッ」

「お迎えが来てるってのに、随分と不機嫌そうッスねー」

「テメェには関係ねェ事だよ、セカンド」

「何なら取引しましょ。お迎えを落とすから、俺らに捕まるってどうッスかね？」
「死ね」
「断り方も過激ッスね。まあどうでもイイッスけど」
「あ？　どういう事だよ」
「二度も言うつもりはネーですよ」
　息を吐き出して黄色いＩＳを展開した穂次はへらへらとした笑いを浮かべながら盾を変形させ、大きな弓に。そしてエネルギーの弦を引き絞った。
「あー、遠距離から狙撃してる女の子に告げる。それ以上攻撃をしてみろ、俺の目の前のドSっぽい女性はさよならッスよ」
「……おいおい、マジにやる気かよ」
「ん？　ああ、別に。ただ人が死ぬだけだろ？」
「……」
　へらりとした笑みに一切の変化などなく、感情は伺えない。オータムの背筋に冷たいモノが這い、口の中が乾く。
　穂次の勧告に反応するように、オープン・チャンネルで通信が開かれる。
『セカンド。状況はわかっている筈だ』
「そりゃぁまあ。だからこうして弦を引いてるんスよ。お互いに損傷の少ない選択をし

ましょーよ」

弦を引き絞りながらも、変わらずに気の抜けた言葉を吐き出した穂次。その言葉に反応したのは他ならぬラウラである。

「おい、穂次。何を言っている！」

「この二人を逃がす。つーか、俺らが時間を稼いだとしても誰かは絶対に落ちるし。それに狙撃してる機体のスペック考えると色々と不利なのはコッチなんスよ」

「ッ、それでも――！」

「満身創痍になって死体を一つ転がすか、ラウラさんが負ってる怪我だけで二人を逃がすか。今はその決断スよ。まあアチラさんが一人で逃げてくれるのが一番ッスけど」

『逃げると思うのか？』

「だそうです」

「まあ目の前の美女さん死ねば逃げるかもッスねー」と漏らした穂次に対してラウラは肩を庇いながら思考する。

そして歯を軋むほどに噛み締め舌打ちをした。追加でプライベート・チャンネルを通して穂次から送られた言葉は「エネルギー足りなくなる可能性もあるから状況がこれ以上悪化しない内に決断ヨロ」というなんとも人任せな情報だった。

穂次の弓が状態を維持出来なければ、余計に状況は悪化するだろう。けれど、目の前

にいる情報を逃がすべきではない事は分かる。
「まあ平和的にイきましょーよ」
「生身の人間に兵器を向けて平和もねーだろうが」
「お互いに戸籍もねー存在だぜ？　炉端の石が壊れる事に人間様の平和は揺らがないッスよ」
「ハッ、ちげーないな」
「ま、何にしろ。コレ以外の選択肢はねーッスよ。アンタが情報を言うにしてもアンタは死体に早変わりだろうし」
「おいおい、捕虜を守る努力ぐらいしろよ」
「わあ、目の前で悪人が死んじゃったー。残念だなー」
　変わらずに矢をオータムへと向けながら軽口を飛ばす穂次。その語調に変わりはなく、軽薄な感情しか伺うことはできない。
　ラウラの舌打ちと空を飛んでいた少女の舌打ちが重なる。片や不甲斐なさ、片や同僚が状況を気にせず軽口を飛ばしている事に。
　ともあれ、状況は穂次の言うとおりに進む事になる。少女は常にビット兵器を動かしセシリアへの牽制を行っているし、穂次は少女とオータムに向けて矢を向けている状態

ではあるが。
「迎えに来てやったぞ、オータム」
「呼び捨てにすんじゃねぇよ、クソが」
「さっさと撤退してくれねーッスかね？　コッチとしては俺らを人質に色々要求される方が面倒なんスよ」
　ＩＳ――サイレント・ゼフィルスを纏った少女は大型のヘッドバイザーで顔を隠しながらも、穂次へと顔を向けた。
　二秒ほどで穂次へと向けた顔を背け、オータムを俵担ぎにする。
「おいテメェ!!　っざっけんな！」
「なるほど！　文字通りお荷物って事ッスね！」
「ツメェ！　セカンド！　殺す！　お前絶対殺すからな！」
「騒ぐな」
　少女の冷たい声でオータムは余計に身動ぎしたがＩＳの出力に勝てる訳もなく、数秒も経たずに舌打ちをして脱力した。
　そんなオータムの服を弄った少女は穂次へと何かを飛ばした。
「コレは返すぞ、セカンド」
「そりゃぁ、残念」

受け取ったソレを変わらずヘラヘラとした顔で見た穂次は溜め息を吐き出し、少女は飛来した方向へと離脱していく。

矢が黒い粒子へと変換され、弓が盾へと戻り穂次は溜め息を吐き出した。

『穂次さんはラウラさんを学園に！　わたくしは追跡しますわ！』

「無理ッスよ。俺達で追いつけたり、勝てるなら俺もこんな案を出してねーッス……ソレにセシリアさんが行くって言うんなら俺は全力で止める」

『なぜですの!?』

「向こうが荷物を背負ってもセシリアさんが負けるからに決まってんでしょ」

まるで事実の様にそう吐き捨てた穂次はＩＳを解き、手に持った少女から投げられた小さなモノを握りつぶす。

「穂次。ソレは何だったんだ？」

「盗聴器付き発信機。見つかりましたけどねー」

「そうか……」

「ラウラさんの治療もあるし、さっさと戻りましょ」

相変わらず気の抜ける様な口調とへらへらとした笑いを改めて浮かべた穂次に肩を庇っているラウラは呆れを混ぜた溜め息を吐き出し、同意した。

◆◆

「と、まあ大凡は秘匿事項らしいから何も言えねーッスけど、面倒な事がありました」
「た、大変そうだね……」
「ふぇぇ……労りの言葉を普通に貰ったのは久々――……ん？　初めてか？」
「え〟？」
「いや、そんな事無いはずだ……そうだよな、ボス」
「ボス禁止」
学園祭も終わり、相変わらず自身のＩＳを弄っていた簪さんへと今日あった事をある程度を隠しながら雑談代わりに伝えておく。秘匿しないといけない、という事自体は簪さんが納得しているらしくそれ程詳しく伝えなくても聞いてこないのが非常に楽だ。
ともかく、一通りの報告を終えて、なんとなくセシリアさんやシャルロットさんに会いたくなかった俺は簪さんの所へと逃げこんだ訳である。いや、会いたくない訳じゃないけど……。なんというか、執事の演技をしてる時に色々とやらかしたので、今会うと、たぶんアビャーってなるのだ。あびゃー。
「それで、鈴音さんはどうする？」

「……手伝って、もらう、事にする……たぶん」
「ん、伝えとくよ」
随分と歯切れ悪く言った言葉にへらりと笑って俺は簪さんの頭を撫でる。すっげ！サラサラだ！
手触りのいい髪を堪能していれば、少しムッとした顔で俺を睨んできた。ムッとしても可愛いとか流石だと思う。
「やっぱ簪さんってスゲーわ」
「……何が？」
「ちゃんと人の手を取るじゃん。助けてくれる人の手って、なんか怖いんスよね」
「わかる。でもソレを穂次君が言うの？」
「ん？　……あー、そっか。俺、助けてる側じゃん。まあ助けてる気がまったくしねーッス」
「確かに……」
「ソコは否定してほしいかなー」
「……でも、私は助けられてる、よ？」
「キュン」
「ヒツ……」

「怯えられるのは予想外なんだよなぁ……」
　へらへらと笑ってみせれば、簪さんもクスクスと笑う。
「穂次君が、いるから……手を取れる」
「簪さんの力だよ」
「穂次君のお陰、だよ？」
「フッ、俺に惚れちまったか……」
「ないから」
「あっはい……」
「でも、ちょっとだけ、憧れてる」
「……そうッスか。難儀なこって」
　簪さんから視線を外して息を吐く。どうしてか簪さんの笑いがクスクスと聞こえる。
くっ、甘い言葉なんかに負けないんだからね！
「完成させて、更識会長をぎゃふんと言わせてやろう」
「おーっ」
「私が何だって？」
「ヒッ……」
　突然掛けられた声に簪さんが怯えた様に背筋を伸ばして俺の陰へと入っていきた。

なんだこの可愛い生物は……。
　そんな妹に怯えられたお姉様は数秒ほど表情を固まらせて、わかりにくい再起動を果たして俺を睨んだ。
「まあ、いいわ。それで、穂次君。要件はわかってるわね？」
「さぁ？　さっぱり」
「あらそう。とにかく私の妹から離れなさい」
「いやー、簪さんが俺の服をスゲー引っ張ってるんで無理ッス」
「簪ちゃん。ソレから離れなさい」
「い、いや！」
「ハハハ、落ち着けハニー達。俺を取り合うんじゃない」
「ソレは単なる変態よ！」
「スルーした挙句にスゲー不当な扱いだぁ」
「う、うぅ……！」
「返す言葉も無いとは事のことか！」
「……いいわ。お姉ちゃんも考えがあるわ」
「わ、私だって」
「！　ソレはいけない簪さん。それだけは絶対にいけない！」

「なんだって言うの？　私を撃退する何かがあるっていうのかしら？」
「お姉ちゃんなんて――――大っ嫌い!!」
涙目になって叫んだ簪さんは息を荒げて、少ししして我に返った様にハッとして更識会長を視界へと入れた。
その更識会長は目を見開いて、その目をスッと鋭くして簪さんを睨む。その睨みに簪さんは俺の背に隠れてしまった。
「あら、そう。ええ、そうね……」
「あ――」
「更識会長。後で行くんで、今は出て行ってください」
「……そう。わかったわ。ええ。それじゃあ御機嫌よう」
目に見えて落ち込んで、頭が正常に機能してい無さそうな更識会長がメンテルームから出ていき、俺と簪さんからは溜め息が溢れた。
「お姉ちゃん……怒ってた」
「いや、アレは怒ってたというよりビックリして、意味を理解して落ち込んでただけだろ」
「怒ってた、怒らしちゃった、どうしようどうしよう!!」
「あー、落ち着け、落ち着くんだ簪さん。大丈夫大丈夫だから」

「全然大丈夫じゃないよ、どうしよう！」
「……簪さんのお陰で俺は助かったから。ありがとう」
「え、……うん」
「簪さんは困った俺を助ける為に更識会長にあんな事を言っちゃっただけで、簪さんは悪くねーッスよ。ソレに、更識会長だってちゃんと話して、謝れば許してくれるだろ」
「そう……かな？」
「そうさ。なんたって、簪さんのお姉さんだからな」
「……うん、でも」
「まあ時間は必要だから。もうちょっと落ち着いたら、謝ろう。そん時は俺も一緒に行ってやるさ。なんたってボスの為だからな」
「……ボス禁止」
「そりゃぁ失礼」
どうにか弱々しくも笑みを浮かべた簪さんにへらりと笑ってみせる。
髪を乱す様に、少しだけ強く簪さんの頭を撫でてぽんっと軽く頭を叩く。
「んじゃ、ちょっと行ってくるわ」
「ほんとに、大丈夫？」
「悪いことは……いや、アレがバレたのか？」

「あるの？」
「変態だからな！」
「ひっ……」
「ウェッヘッヘッヘ」
「へ、へんたい！」
「変態いただきましたー」
　へらへらと笑ってみせ、簪さんに手を振ってからメンテルームを出て扉に凭れる。
　チラリと視線を横に向ける。項垂れてる水色が居た。
「何してるんスか」
「簪ちゃんに嫌われた簪ちゃんに嫌われた簪ちゃんに簪ちゃんに簪ちゃんに簪ちゃんに簪ちゃんに簪ちゃんに簪ちゃん簪ちゃん簪ちゃん」
「ナニコレコワイ。
　あー、ほら、簪さんも本気じゃないッスから」
「ホント？　本当!?　嘘だったら串刺しにするわよ!?」
「本当ッスから。つーか、俺を連れていこうとしてましたけど？」
「ああ、どうしよう！　簪ちゃんに好かれる為にはどうすればいいのかしら!?　もっと素敵なお姉ちゃんになれば、きっと」

「スゲー行き違いしてる姉妹だなー……」
　あとスゲー面倒な姉である事はわかった。簪さん、ゴメン。変な事を吹き込んだ俺が悪かった。
　ともあれ完璧なお姉様はグッと拳を握って輝かしい目を虚空に向けている。果たしてドコを見ているのだろうか、このお姉様は。きっと輝かしい未来だな。俺には見えないからわからないけど。
「あら？　穂次君、居たのね」
「……もう突っ込まねーッスよ」
「ツッコむなんて過激ね！」
「……それで、俺に用って何スかね？」
「部活中の生徒からアナタが覗きをしたと報告があったのよ」
「……待ってください。俺は無実です！」
「アナタには黙秘権があるわ。でも黙ったままだと織斑先生がアナタの頭を潰すから注意してね！」
「魔女裁判じゃねぇか！」
「証言は懲バ……指導室で取るわ」
「待って！　今絶対懲罰室って言おうとしたよね!?　今回はマジで俺じゃないッスよ

！」

「織斑先生の前で言ってね。さあ行くわよ」

「絶対この人さっきの事怒ってるじゃん！　ちくしょう！　俺じゃない、俺じゃないんだあああああぁぁぁぁぁぁぁ……」

必殺技は叫びたい

「そういや一夏。誕生日に何か欲しいモノとかあるか？　俺の童貞とか処女以外ならあげるぞ」

学園祭から数日。夕食を食べる食堂にてそう口にした俺に対して一夏は目を鋭くして睨んだ。どことなく鬼を思い浮かべた辺り、やっぱり血は繋がっているんだろう。

「両方とも全然要らないから悲しくもなんともねぇな」

「おいおい、自分の気持ちには正直な方がいいんだゼ☆」

「わかった」

「おーけー、すていすてい。その強く握った箸で俺をどうするつもりだ」

「アンタら、食事中よ」

鈴音さんの呆れた様な声で俺達二人は席に座り直す。ちゃっかりと一夏の隣に座っている鈴音さんはやっぱり流石だと思う。

そして箒さんはなんで俺を睨んでるんですかね……？

「え？　一夏の誕生日って今月なの？」

「おう」

「そっか。じゃあ僕も何か用意しておこうかな」
「マジか。ありガッ!?」
「デレデレするな」
「箒！　急に足を踏むなよ！　俺が何をしたっていうんだ」
「ぶっちゃけ言えば何もしてないのが悪いんじゃね？」
「はぁ!?　なんだよそれ。というか皆も頷いてるし」
「……それを穂次さんが言いますのね」
「ホら、俺ハ、チャんと行動シてるから」
「声が上擦ってるよ？」
　俺の隣にいるシャルロットさんとセシリアさんが俺の顔を覗き見てくる。ついでに柔らかい。当ててるんですかね？　当ててるんですね！　何も考えなけりゃ、おっぱいの感触も楽しめるけど、無理ッス……。
「セシリア達と仲直り出来たのか。よかったな、穂次」
「一夏、お前……」
「え？　なんで俺が残念そうな顔で見られてるんだ？」
「アンタが残念だからよ」
「鈴も酷くないか？」

むう、と一つ唸った一夏は口をへの字にしながらだし巻き卵を口に入れた。一口貰ったけど、スゲー美味い。

会話が一段落したのを見計らい、腕を組んで難しい顔をしていたラウラさんが口を開いた。

「それで、おまえはどうしてそういう情報を黙っているのだ？」

「別に大した情報じゃないかなって」

「……それで、私達ではなく穂次には言っていたのか」

「ん？　――いや、俺は穂次にも言ってないぞ？」

「は？」

「フッ、愛すべき一夏きゅんの情報は全て集めて当然だろう!!」

「うわっ、凄い鳥肌立った」

「やっひゃひっ!?」

「穂次さん？」

「穂次？」

「なんで俺は脇腹を抓られたんスかね!?　すげー変な声出たわ……」

「それで、ソコの知っていて黙っていた二人は？」

「うっ」

「まあ待てラウラ。私は決して情報を秘匿していた訳ではない」
「ほう……」
「当然の事は当然だからこそ口に出す必要も無いだろう？　ＩＳの操縦は女性だけだと、今更口にする必要もないようにな」
「俺と一夏がいるからもう女性だけとは言えないんだよなぁ」
「黙ってろ」
「ひぇっ……」
「というか、スルーされてるけど、俺の誕生日ってそこまで当然で重要なことなのか？」
「黙ってろ」
「アッハイ」
　俺と一夏は身を縮めて食事を再開する。こういう時は何も言わないに限るんだ。穂次、知ってる。
「ま、とにかく。誕生日に一緒に祝えばいいんじゃね？」
「ああ。中学のときの友達も俺の家に集まる予定だし、皆も来るか？」
「任せろ。次は大魔王という焼酎をだな」
「千冬姉が怖くなるからやめろ！」
　何を言うか。あの人は既に大魔王なのだからこれ以上怖くなる事はないだろ！　口

に出して言えないけどな。

　一夏の誕生日である九月二七日。食堂の壁に備えられているカレンダーを見れば赤い数字に大きく丸が描かれていた。

「つーか、二七日ってキャノンボール・フィストじゃね？」

「キャノンボール・ファストね。何その必殺技みたいな日は」

「叫びたくならない？　キャノンボール・フィストォオ、って」

「意味がわかりませんわ……」

　セシリアさんにスゲー呆れた視線をもらいながらへらへらと笑っておく。拳を飛ばしながら言いたい。キャノンボール・フィスト。

　競技であるキャノンボール・ファストはＩＳを用いた高速バトルレースであり、実際は国際大会である。今回するのは国際大会ではなくて、市の特別イベントとして催されるモノであり、ＩＳ学園の生徒のみが参加するモノだ。

　クックックッ、専用機持ちとなった俺が無双するんだ……。

「穂次、訓練機部門と専用機部門があるんだよ？」

「何ですと!?　つーか、なんでナチュラルに思考が読まれてるんですかね……」

「口に出てたからね」

「――、ソーッスカ」

チラリと一夏に視線を送ってみれば首を横に振られた。シャルロットさんがニッコリ。俺もニッコリ。思考を読まれる事はイイんだけど、ちょっと怖いですよ、シャルロットさん！

やっぱり俺の上には吹き出しがきっと存在しているのだ。そうとしか思えない。

「明日から高機動調整がはじまるんだよな？　具体的に何をすればいいんだ？」

「基本的には高機動パッケージのインストールだが、お前の白式にはないだろう」

「その場合は駆動エネルギーの分配調整とかに、各スラスターの出力調整とかが主になるかなぁ」

「……穂次」

「お前は調整よりも自分の力量を上げれば？」

「ぐぬぬ……」

はっは。ざまぁ。

何かと言って、どうせ一緒に訓練……というよりは一夏のデータ取りはするんだけど。調整ぐらいは手伝ってあげなくもないんだからねッ！

そんな事を考えてると両隣からジト目で俺を見つめる二人がいる。

「穂次の村雨にも高機動パッケージはないよね？」

「拡張領域（バススロット）が無いからなぁ」

「よ、よければわたくしが調整に付き合いますわよ？」
「フッ、俺は訓練なんかしなくても出来る天才だから何も問題無いッス」
「ふーん」
「そうなんですわねー」
「……どうして二人とも棒読みでスゲー温かい目で俺を見てるんですかね？」
一体何だと言うのだろうか。俺と鬼との訓練はバレていない筈だろう。追跡されたという事もないだろうし……つーか、夜に出てるからバレてる訳ないと思う。俺の撒くのも熟練してきたし、何より今なら絶対気付く。
逆にそれ以前だと分からないし、追跡されたかもしれないけど、そんな事も無いだろう。俺なんかを追跡して何も得ないし。
あとは先生達がバラしたとかだけど。バラす利点が無いから違うだろう。
え？　つまりなんでこんな目で見られてる訳だ？　ヤメテ！　そんな目で俺を見ないで！
「つーか、調整なら更識会長とか――スイマセンナンニモナイデス」
「なんで言葉を途中で止めたんだよ」
「俺だって命は惜しいって事」
俺だってこんな所で死にたくはない。何より誰かの恋路を邪魔して、馬に蹴られるど

ころか日本刀で叩き斬られるとか、衝撃砲で潰されるとか、レールガンで焼き貫かれるとか勘弁してほしい。

「まあ超音速機動ならラウラさんとか有利だし、妥当じゃね？」

「あら、わたくしではありませんのね」

「あー、まあ、ハイ」

セシリアさんに視線を合わせずに俺は答える。どういう訳か、セシリアさんの名前は出せなかった。当然、セシリアさんの力量が一夏を教えるに至ってないとかそういう問題ではなくて。

よくわからない理由を言える訳もなく、適当に誤魔化しておく。

「フッ、いいだろう。最近あの女にかまけているお前を、私が教育してやろう」

「ありがとうラウラ」

「あのさー、なんで俺が睨まれてるんスかね？」

「自分の胸に聞いたらどうだ？」

「俺におっぱいが付いてたら考えます。おっと、鈴音さんごめんなさい」

「なんで謝った！　ア穂次！」

「いや、ほら、他意はないから」

鈴音さんにもないおっぱいが俺に付くわけがないだろ！　将来的にも鈴音さんの

おっぱいが付くわけもないから俺におっぱいが付くことは未来永劫ないのだ。
　怒りを収めたのか、女の子らしくドカリと腰を下ろした鈴音さんが不貞腐れた様に口を開く。
「つうか、有利不利で言うなら白式も有利でしょ。機動力だけで言えば高機動にも引けをとらないし」
「でも搭乗者がお察しだから」
「あ……ごめんね、一夏」
「本当の事だから言い返せない……！　というか、穂次も煽る側じゃねぇだろ!!」
「スペック数値だせる俺を引き合いに出してもいいのか？」
「ぐっ……」
「はーっはっはっ！　織斑一夏敗れたりィ！」
「アンタのソレも普通に言える事じゃない筈なのにね」
「楽しんだ方がいいだろ。何より俺はソレを悲観してねーし」
　コレが普通なんだからどう悲観しろというのだ、という話。へらりと笑ってやれば、なんとも言えない顔になる全員。ラウラさんだけは溜め息を吐くだけだったけれど。
「つうかさあ、ウチの国は何をやってんだか。結局甲龍用の高機動パッケージは間に合わないし」

「ん？　甲龍の高機動パッケージならもうそろそろ開発終わるんじゃね？」
「……は？　なんでアンタが知ってんの？」
「試験データ見たから？」
「よし、ちょっと待て」
「ククク、誰も俺を止める事は出来ない！　国際法律も夏野穂次を捕らえる事は出来ないのだ!!」
「セシリア、シャルロット」
「はい」
「ゴメンネー、ホツギー」
「それは卑怯ですよ！　鈴音さん！」
「うっさいわ！　なんでアンタは国家機密情報を知ってんのよ」
「そりゃ、鈴音さんを調べると自然と甲龍を調べる事になるし。結果的にそういう情報も目にするだろ？」
「……アンタって本当にスパイだったのね」
「何を今更」
「でも繋がりはもう無いんだろ？」
「まあなー。実際、甲龍の高機動パッケージの開発は元々の開発速度からの予測だし。

細かい日程とかはわかんねーッス。
　なんでそんなに意外そうな顔で見られてるのさ」
「いや……穂次って優秀だったんだなーって」
「そう、ですわね。ちょっと意外ですわ」
「あー、まあ世界を敵にしても問題ないぐらいには情報を集めてるのさ。世界になんて負けないんだからね！」
「敵が大きすぎるんだよ……」
「ふぇぇ……」
　一夏の呆れた様なツッコミに戯けて声を出す。
　そしてへらりと笑って口を開く。これだけは言っておかなくてはならないのだ。
「まあ本当に世界が敵になっても負けるつもりはないよ。なんせ村雨は絶対に負けない機体なんだからな」
　尤も、今は負け続きで恰好がつかないのだが。それは黙ってて下さい。
　キリッとキメ顔で言ってやればスゲージト目で見られてるのだけど、俺には効かないぜ！
「おっと、もうこんな時間か！　先生方の手伝いに行ってきます！」
「逃げたな」

「逃げたわね」
「逃げましたわ」
「コレは逃走じゃねーー！　戦術的逃走だ！」
「やっぱアイツはアホね。ア穂次だわ」
何度も言うようだが、コレは逃走ではない！　決してジト目からの逃走ではないのだ！　俺には効かないんだからな!!　ふぇぇ……。

◆◆

夏野穂次には秘密がある。
その言葉を聞いた一夏は思わず眉間を顰めた。当然である。一夏は穂次の事を親友だと、相棒だと言える程度には信頼している。
だけれど、その言葉を面と向かって全否定出来る程、目の前の相手は信じられない相手では無い。

「信じ……られません。その……えー」
「亡国機業（ファントム・タスク）」
「その亡国機業に着いてるなんて」
「そうよね。私も信じられないわ」
そう言った更識楯無は溜め息を吐き出しながら紅茶を一口飲み込んで喉を潤す。
そんな自室にやってきた楯無には恩がある。それこそ信じる事の出来る人物である事は一夏は理解していた。対暗部用暗部である事も、自分を狙う組織が動いてことも、全部理解する事も出来た。
だけれど、その説明から数日。改めて部屋にやってきた楯無の言葉だけは信じられなかった。
「尤も、確証を持って彼が裏切り者という事は言えないわ」
「じゃあ――」
「けれど、彼は都合が良すぎるのよ」
「……それでも、穂次は」
「ええ。まだ推測の域は出てない。だから私はこうして一夏君の前にいるの」
つまり、確証が得れれば楯無はスグに穂次の所に行くのだろう。捕縛、或いは――。
一夏はそう考えて視線を鋭くする。そんな視線に楯無は苦笑して扇を開く。やけに

達筆で『愛』と描かれているが、余計に一夏の視線は鋭くなった。
「私だって、彼は怪しみたくはないわ。彼自身とも少し話をしたけれど、全部空振りした訳だし」
「なら、やっぱり穂次は裏切って無いんじゃ？」
「そうね。
学園祭の出し物でアナタが使った逃走経路、その終着点に亡国機業が待ってた事も。
亡国機業の構成員が逃げた果てに偶然待ち伏せしていた事も。
その構成員を逃がした事も。
きっと偶然なんでしょうね」
一夏の背筋に冷たいモノが走る。穂次の裏切りを感じたからではない。目の前にいる更識楯無の瞳にである。
自然と緊張し、汗が溢れる。口が乾く。
「どうして亡国機業が学園祭と言えどＩＳ学園に潜入出来たのかしら？　誰かがチケットを流したのかしら？」
「それが、穂次だって言うんですか？」
「いいえ。言わないわ。だって確証がないもの。因みに穂次君の事を怪しんで行動を追ったけど――」

「追ったけど？」
「――妹とのデートで外に出ただけよ!!　しかも！　どういう事よ！」
　バンバンと机を叩いて「うぅ～」と唸る楯無に一夏はポカンとする。頑張って頭を働かせて目の前にいる美女に対する言葉を探す。
「えー、あー……つまり穂次は無罪って事じゃ」
「そういう事じゃないわよ！」
「えぇ……」
「どうして私じゃなくて穂次君なのよ!!　あぁもう！　簪ちゃぁぁぁあん!!」
　一夏は頭痛のする頭を頑張って働かせた。なんというか目の前にいる人が先ほど自分を極度の緊張に追いやった人だとは思いたくなかった。きっとアレは錯覚だな。そうに違いない。
　ある程度喚き散らして満足したのか楯無は愁いを帯びた美女の様に溜め息を吐き出す。
「それで、穂次君は怪しいのよ」
「絶対私情を挟んでるでしょ、ソレ」
「そんなこと決してないわ。ええ、当然」
　絶対に嘘だ。それだけは面として言える。けれど一夏は言わなかった。言うと面倒

になりそうだったからだ。そして一夏の判断はきっと正しいだろう。
「まあ、私が穂次君を怪しんでいるのはホントよ。都合が良すぎる……いいえ、悪すぎるのかしら？」
「それは……穂次の運が悪かったんじゃないんですか？」
「そうかも知れないけれど、そうじゃ無いかも知れない。彼の元々の経歴からしてもあり得なくは無いことでしょ？」
「それは――」
「元々政府のスパイだった彼が別の所に鞍替えした可能性もある」
楯無の言葉に一夏は口を噤んだ。一夏は穂次が二重スパイだった事を知っている。だからこそ、その全ての行動がＩＳ学園の為だったと理解している。
けれど楯無の言葉はまるで穂次の真実を知らないかの様ではないか。学園最強を冠する生徒会長ですら真実を知らないのではないか？
「報酬さえあれば簡単に鞍替えしそうだしね」
「ソレは――無いんじゃないですか？」
「そうかしら？　政府所属していた時の情報も見たけど、随分と報酬にこだわっていたみたいよ。私も頼み事をした時に報酬を求められたし」
あの穂次が？

一夏の脳に穂次が思い浮かぶ。お金を渡そうとすると大きく両手をバツにして「おっぱい！」と言うようなヤツなのだ。ソレが夏野穂次という人物なのだ。

一夏が否定の言葉と、穂次の真実を言葉を口から出そうとすれば、その口には楯無の指が当てられた。

「一夏君が彼をどう思ってるか、知ってるわ。だって愛してるものね……」

「ねぇよ！」

コレだけは敬語も無しに言える事だった。

「まあ私から言える事は彼を余り信じないで、って事かしら。それだけよ」

「いや、大丈夫なんじゃないですか？」

「……そうね」

「それに……もしも穂次が裏切っても俺が止めます」

「愛する穂次君の為だものね！」

「おい」

やけに低い声に「いやん」と楯無は戯けて部屋から逃げ出した。

閉じられた扉に溜め息を吐き出して、一夏は思考を巡らせる。

千冬姉が情報開示していないという事は本当に穂次が二重スパイだったのは秘密裏

の事だったのだろう。ＩＳ学園に所属している楯無さんが知らないという事はＩＳ学園との契約ではなくて、千冬姉個人との契約だったかも知れない。

それはいくら考えても答えは出ない。

楯無さんが裏切っているという可能性は……たぶん無い。それなら俺を倒したり、白式を奪ったりする機会は何度もあったと思う。

けれどソレは同時に穂次にも言える事だ。白式を奪う機会はあっただろう。けれど今も白式は俺が持っている。ソレが証明だ。

本当に運が悪かっただけなのだろう。そう考えると楯無さんに怪しまれている事もまた運が悪い。

思考を纏めあげてから一夏は苦笑を混ぜて結論を導き出した。

夏野穂次が裏切っている事なんて無いだろう。というか、裏切らない、と彼の口から宣言されたのだ。

だから、絶対に、穂次は裏切ってなどいない。

ひきょうもの

我ながら卑屈だと、そう思う。

食堂の一席で既に冷めているだろう紅茶をぼんやりと眺めながらセシリアは頬杖とつきながら溜め息を吐き出した。

彼を考えれば、それこそ恋する乙女の様に色々と出来るだろう。大胆な事も、多少の恥ずかしさを持ちながら出来る。

けれどソレは彼に関わった事だけであって、自身の事になるとなんとも残念な状態なのだ。尤も、彼に関わっている事は恋愛であり、自分が許せない部分は戦闘部分だったりするので、また別なのだけれど。

織斑一夏に勝つことが出来ない。

許せない事の一つだったりする。機体の特性を考えれば当然の帰結であるけれど、それでも許せない。

エネルギー武装、ＢＩＴ武装の試作機であるブルー・ティアーズだからこそ、一夏の白式――雪羅を抜く事が出来ない。零落白夜の特性をそのまま盾に転用したソレはエネルギー武装を通すことはない。お陰でセシリアの黒星は増える一方だ。

努力をしていない訳ではない。武装で勝てないのなら戦術を練ればいい。物理武装であるナイフと弾道型もある。ラウラに頼んでナイフでの戦闘を教えてもらったりもした。尤も、白式に近接戦闘を仕掛けるつもりにはなれなかったが……。

その努力を覆すのが一夏だった。呆れる程の成長速度だと思う。コッチが必死で考えた戦術をその場で対応し、辛うじてと頭には付くが白星を勝ち取っていく。いいや、そこには一夏の努力もあるのだろう。

だからこそ、セシリアは自身が許せない。

偏向射撃が出来ない。

これこそ許せない。姉妹機を操っていたあの少女は確かに出来ていた。机上理論を、あの少女は出来ていたのだ。

ああ、許せない。諦めていた自身を許せない。努力を怠ったであろう自身が許せない。努力の足りない自身が許せない。

「ごきげんよー、セシリアさん」

「……」

「えぇ……挨拶したのに睨まれるってどういう事なんですかね」

へらりと情けない笑いを浮かべながら対面の席に座った夏野穂次を見て、セシリアは挨拶ではなく溜め息が溢れた。

この男に告白したことを後悔したことは無い。きっと未来でも後悔することはないと思う。

ちょっと残念に思うのは彼からの接触が減ったことだろうか。接触、と言っても彼は告白以前も肉体的な接触をあまりしてこなかったけれど。

「ごきげんよう、ヘタレさん」

「ほ、つ、ぎ。母音も被ってないんですがソレは」

「ニックネームですわ」

「スゲー不本意な愛称ダー」

正直な事を言うのなら、苛々している事を自覚しているからあまり彼を近付けたくはない。好きな相手に自分の汚い所を晒す趣味は無い。

へらへらと笑いながら持ってきたトレイに乗せた紅茶をセシリアの前に置いた穂次はセシリアの紅茶を自分の前に持ってくる。

「それで、悩み事は？」

「……別に悩んでなんかいませんわ」

「ふーん」

少しだけ図星をつかれて、ちょっとだけ意地になって口を尖らせて外方を向く。対して興味無さそうに声を漏らした彼は紅茶を一口飲んで、冷めた紅茶の苦味に眉を顰め

た。

こうして珍しく自分からわたくしに近付いてきたと思ったら、コレである。

相変わらず告白の答えはさっぱり言わない癖に、わたくしの事を気にかけてくる。卑怯者。

「いつから気付いてましたの？」

「へ？　悩んでないんじゃなかったの？」

「……」

「嘘だって」

冗談の様にへらへらと笑う彼を睨んでいるのは別に拗ねているからじゃない。彼がわたくしを見てくれていた事を軽く否定されたから、拗ねてる訳じゃない。拗ねてない。

へらりとした情けない笑顔を浮かべた穂次が悩む様に頬を指で掻いてから視線で宙をなぞる。因みに言えばわたくしの頭上には吹き出しはない。

「そうだなー……セシリアさんの感じが変わったのは夏休みが終わって、ちょっとしてからかな」

「……それは、告白した時からじゃありませんの？」

「ソレは別だから」

震えた声で否定した彼はやっぱり答えを出すつもりはないらしい。それよりも本当に告白した時ではないのなら、それこそ態度に出していたつもりは無いのだけれど。

そんなわたくしを見ながら彼は優しそうに微笑んでから、いつもの様にへらりと笑った。

「その頃に、鈴音さんとかにも確認したけど普通って言われたし。ただ俺が変だなーって思っただけ」

「穂次さんに変と思われるなんて……」

「ソコだけ言われると俺もどう反応していいか困るんですけど……」

眉を下げて情けない顔が余計に情けなくなった彼は分かるように肩を落として、冷めた紅茶を飲み込んだ。

「その時は別に大丈夫だと思ってたけど……ココ最近は変に無理してるし」

「……わたくしの何を知ってますの？」

少しだけ怒りの含んだ言葉だった。イライラしていた、という事もあったけれど我ながら自分の言葉に溜め息を吐きたい気持ちだった。

対して彼はそんな言葉にもケロリと——いいや、ヘラリと笑いを浮かべながら当然の様に言ってのける。

「そりゃぁ、セシリアさんの事ならある程度わかるよ」

イライラや、自分に対しての呆れが吹き飛んだ。瞼をパチクリと開閉して、今の言葉を頭の中で反復させる。

ヘラリと笑っている彼は自分が何を言ったかわかっているのだろうか？　いいや、きっとわかっていない。なんせ、きっと彼は当然の事を言っただけなんだから。

ヤバイ。顔が熱い。待て、待つのよ、セシリア。そう考えるとオカシクなる。ああ、待って。ええっと、つまり、あら？

確かに、夏休みが終わってから一夏さんに負け始めた。だから、彼の言っているわたくしが〝変〟になったのは間違いではない。ちょっと悩んだのも事実だ。

だから、その、つまり、え？　待って、待ってくださいまし。

少しだけ冷めた、ヌルい紅茶を一気に飲み干す。対面に座っている穂次さんはそんなわたくしにパチクリと瞼を動かして、はて？　と言う顔をしている。

「どうしたの？」

「いえ、その、えー……」

顔が熱いのが分かる。言葉が上手く出ない。頭がちゃんと動いてない。この事実が真実だったならば、わたくしとシャルロットさんは大きな勘違いをしている。そして、その事実を彼は知らない。知っていたならば、きっと彼は先程の言葉を言わなかっただろう。

大きく深呼吸をして、頭の沸騰をどうにか抑える。まだ顔は少し熱い。
「ん……俺って変な発言し――」
「してませんわ！　何も問題なかったですわ！」
「お、おう……」
とにかく、彼がその事を自覚していないのなら、そのままである方が良いだろう。まだドキドキしてる。
口をへの字に曲げて、首を傾げている彼を少しだけ放置して、自分を落ち着ける事に専念する。
「えー、そう、そうですわ。今晩、部屋に伺ってもよろしくて？」
「よろしくても何も、何も言わずに来る時あるじゃないッスか」
「よろしくて!?」
「よ、よくってよ……」
セシリアの言葉に穂次は少しだけ身を引きながら応えた。何か怒らせる様な事をしただろうかと、考えた。尤も、真実はその真逆にあたるのだが。
セシリアは席を立ち、急ぎ足に、けれど走らずに食堂から立ち去る。そして食堂の次ぐ近くの角を曲がり、そこに背を預けて両頬に手を当てて「うぅー」と小さく唸った。
「やっぱり、穂次さんは卑怯者ですわ」

不意打ちだ、と更に呟いてから顔の熱を感じながら夜に向けての心の準備をしに部屋へと向かう。

今のままでは、絶対に彼の話をマトモに聞けない。そもそも彼がマトモな話をするかは分からないけれど。

◆◆

「――」

「な、何か？」

「なんか、気合入ってないッスか？」

「べ、別に、そんな事ありませんわ」

「まあ綺麗なセシリアさんを見るのは嫌な事じゃネーですけど、仮にも男の部屋なんですが……」

「……男？」

「アッハイ、スイマセンデス」

こうして寝間着で彼の部屋に来るのは二度目になる。尤も、私服か制服なら何度かあるけれど。

磨ける所は全部磨いてきたし、僅かに香水も着けてきた。我ながら完璧だと思う。彼が襲ってくれれば言うことはないが、襲うとなると言うことも出てくるだろう。

果たして今の季節は春だったか。ともあれ頭の中に花畑があるのか。それとも常夏で開放的になっているのか。

どちらにせよ、今のセシリア・オルコットは頭のネジが幾分も緩んでいる事は確かだろう。

対して、夏野穂次の心境は穏やかではない。穏やかである訳がない。彼は言い換えれば自制心の高い男である。けれど、男である事は変わらない。

頭がトロピカルなセシリアは間違い無く美少女である。問題を上げるとすれば料理が下手すぎるぐらいだが、ソレは美少女と関係はないだろう。

ともあれ、美少女が――自分に告白までした美少女がしっかりと準備をして目の前にいるのだ。穂次の男としての部分が首をもたげる。

自身の欲望を感じ、ソレを溜め息で流す。頭の中では近接武装対遠距離武装の戦術理論が並べ立てられている。

シャルロットがやってきた時も欲望を感じるけれど、ソレも似たように穂次は流している。決して彼が聖人君子だから彼女達を襲わない訳ではない。

ともあれ、そこに何か、男女の間に生じる現実的非日常な事が起きる訳もなくセシリアはすんなりと穂次の部屋へと通された。

いつもの様に椅子に座り、やはり対面に座った彼を見つめる。セシリアは問題なく彼を見れる事に少しだけ安心した。

穂次に至っては慣れたモノで頭の中で理論武装を沢山装備しながらポットから紅茶を注ぎ入れている。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

実はコレもいつもの会話だったりする。

セシリアはこの紅茶が自身が実家でよく飲むモノである事を舌で判った。判った所で何を言うでもないけれど、ちょっとだけ嬉しいだけだ。

「それで？」

「？　何がですの？」

「いや、悩みを聞くって事で来たんだと思ったんですが……」

「――……そうでしたわね」
「ええ」
すっかり忘れていた。という訳でもないけれど、そんな事よりも重大なことがあったからすっかり頭から抜け落ちていた。決して忘れていたわけじゃない。
カップを置いて、一つだけ息を吐き出す。
「どうすれば一夏さんに勝てるんですの？」
「……あー。そっかセシリアさんの武装もエネルギー武装ばっかりだったもんな」
「ええ。本国も物理武装を送ってくれそうにもありませんし……」
「弾道型でどうにか――」
「わたくしがしてないと思っているのかしら？」
「いんや。むしろ、俺が考えた以上の方法は試してそう」
へらりと笑って紅茶を飲み込んだ穂次はうーん、と唸ってみせる。
そんな穂次を見ながらセシリアは少しだけ引っ掛かりを覚えた。
「先ほど、わたくしの武装も、と言いましたわね」
「え？　まあうん。俺の武装も大概だし」
「……そういえばそうですわね」
「因みに隠されたギミック盾の変形はあと四つぐらい残ってそう」

「スゴく曖昧ですわね……」
「出来るとは言ってない。けど、その四つもエネルギー武装だからなー」
「ん、俺も一夏に勝てねーじゃん」とへらへらと笑った穂次をセシリアは鋭く睨む。
「穂次さんは悔しくありませんの？」
「別に？　戦えば勝てないけど負けるつもりは無いし」
「勝ちたくはありませんの？」
「……うーん、そこらを言うと……勝ちたいよ。うん。俺って一夏に勝ちたいんだなぁ」
まるで無理やり吐き出す様に、確かめる様に、言葉は穂次の口から出てきた。
勝ちたい。その気持ちは確かにセシリアと同じである。けれど、セシリアはソレが同じでは無いことをなんとなく察した。
そんなセシリアを見て、ヘラリと笑った後に、椅子の背凭れに体重を預けて穂次は天井を見つめる。
「……俺は一夏をライバルみたいに見てるんだと思う」
「それは――一夏さんも同じだと思いますわ」
「どうだか。
少なくとも、ライバルとは思ってないんじゃないかなー。アイツの前で努力してねーし、何より負け続きだし」

と言った所で穂次は「負けるつもりないって、負けてんじゃーん」と戯けて言ってみせた。ついでにへらへらと笑みを浮かべて。

セシリアは言葉に詰まる。シャルロットの話の通りならば、穂次はちゃんと努力をしている。ソレを必死で隠しているのは意味が分からないけれど、隠している事は確かだ。

「そもそも一夏と俺は、たぶん本気で戦えないし」

「どういう事ですの？」

「一夏の性格上、俺を攻撃出来ないんだよ。バリアエネルギーを削るって事は俺の精神にダイレクトアタックする訳だし」

「ソレが雪片なら――」

「死ぬんじゃね？」

けろりと自分の死を言ってのけた穂次の言葉に感情は入っていない。「ＩＳだから死なないけど」と付け加えはしたけれど、やはりソコには何の感情も無い。

少しの間をあけて、穂次が息を吐き出した。

「ま、俺の事はどうでもいいとして。セシリアさんの悩みを解決しようぜ！」

「……はぁ」

「溜め息吐かれるのはよくわかんないんですけど……」

「相変わらずだと思っただけですわ」
「ええ……。んじゃ、他の悩みの解決を目指します？」
「他のって……」
「偏向射撃の撃ち方」
「知ってますの!?」
「のわっ!?」
机に手を付いて身を乗り出したセシリアに驚きを見せる穂次。その視線はしっかりと胸にいっている辺り結構冷静なのかもしれない。寝間着だから胸を支える下着をしていないのか、非常に柔らかそうな果実がソコには在った。
ゴクリと分からない様に生唾を飲み込んだ穂次は言葉を必死で選びながら口を開く。
「あー……知ってる、つーか、教えてもらう」
「どういう事ですの？」
「ん？　まあ、ちょいと失礼」
穂次は手を伸ばし、セシリアの髪を少し上げて耳にあるイヤーカフスに触れる。
セシリアの顔が熱くなり、その先の行為を予測して目を閉じる。穂次はその動作に疑問を感じながら、ブルー・ティアーズに触った。
「――へ？」

と穂次が情けない声を出すのに時間は掛からなかった。先に言う様だが、決してセシリアが我慢ならず彼の唇を奪ったわけではない。これだけ準備万端であるが、彼女は淑女（レディ）なのだ。

情けない声を出した穂次はブルー・ティアーズから手を離し、その手を机の上に置いた。

自身の肌から手が離れた事を感じたセシリアはどういう訳か潤んだ瞳を穂次へと向けた。もう一度言うようだが彼女は淑女なのだ。いいね？

「ど、どうしましたの？」

「偏向射撃なんで出来ないの？」

「はぁ!?」

「いや、ゴメンナサイ。今のは失言。悪気の欠片もないから」

潤んだ瞳など無かったかのように、怒りをしっかりと露わにしたセシリアに穂次は腰を僅かに浮かし逃げる準備をして、言葉の謝罪をする。

「出来れば悩みもしませんわ……」

「デッスヨネー。まあセシリアさんなら出来るよ」

「そんな何の理論もなく――」

「理論とか、常識とか、俺を前にして通用する訳などしない」

「……そうでしたわね」

なんせ目の前にいる男は世界で二人しか居ないＩＳ操縦者の一人であるし、更に言えばＩＳにパーツとして認識されている人間でもあるのだ。確かに理論も常識も通用しない。ドヤ顔で言ってるのがかなり苛立たしいが。

そんなドヤ顔にしっかりと溜め息で応えたセシリアはまた情けなく「溜め息での反応はいけませんよ！　セシリアさん！」と笑う穂次に今一度溜め息を吐き出した。

「それで、どうしてわたくしなら出来ると？」

「セシリアさんだから？」

「疑問形で言われましても困りますわ」

「力もブルー・ティアーズが知ってる。心はブルー・ティアーズも知ってる。努力はブルー・ティアーズが二番目に知ってる。じゃあ出来ない訳が無い」

ヘラリと笑う事もなく、それだけは確信があるように語った穂次の言葉。非科学的、非理論的、それなのに、どうしてかストンとセシリアは納得した。

納得したからこそ、一つ疑問が生じた。

「ブルー・ティアーズは二番目ですのね」

「一番目はセシリアさん本人らしいッスよ」

「ソコはあやふやですのね」

「俺も同じ事言われたからね」
やっぱり穂次は少しだけ情けなく笑った。

視点共有の有用な使用方法

「はい、それでは皆さーん。今日は高速機動についての授業をしますよー」
「はーい！　やまやせんせーー！」
なんとなく元気よく声を出して反応してみせれば、山田先生から睨まれた。解せぬ。
相変わらず、ＩＳスーツを身につけた山田先生は凄い。何がスゲーって、あのおっぱいだ。へへ、ビックリするぜ。
へらへらと笑っておっぱい先生の山田を見ていると、隣からキツイ視線が飛んでくる。
「おい、変態」
「スイマセン、俺は今生身なんで日本刀を向けないで下さい、シンデシマイマス」
「以前から思っていたが、お前は殺しても死なないんじゃないか？」
「ソレを実践しようとしないでもらっていいッスかね？　死ぬから、たぶん」
隣におっぱいさんから殺意の篭った言葉を頂戴してしまった。しっかりと目でおっぱいに視線を送ってみれば余計に強く睨まれる。
しっかりと両手を上げておかべ苛々したように舌打ちをした箒さん。まあ彼女が

怒っているのも無理は無い。
　高速機動の実演として専用機持ちはペアを組まされるのだが、一夏とペアになれなかった箒さんは諦めきれないのか、唸ったり小言を漏らしている。
　あとはどうしてか俺を睨んだりしている。ワカラナイナー。ナンデダローナー。
「何故、セシリアと一夏が……」
「そういうのはペアを決めた人に言って下さい」
「……仕方ないな」
　因みにこのやり取りも数える程度にはしている事だ。決めた人は実は人じゃない。あんな人を人と認めているのは弟と天災である幼馴染だけぐらいだろう。
　ヤバイ、日本刀を向けられたよりも命の危機を感じる。死ぬ。確実に、死ぬ。
　俺は収まらない動悸を表に出さない様にして一夏に近付く。
「一夏、頼みがあるんだ」
「遺言か？　誰に伝えればいい？」
「俺が死ぬ前提の話はやめるんだ！」
「それで？」
「お前の視点を共有したいんだよ」
「そういうのはセシリアに頼んだらいいんじゃないか？　俺の高速機動なんてセシリア

に比べるとお粗末だぞ？」
「バッキャロ！　セシリアさんの視界を共有してもセシリアさんのお尻は追えないだろ！」
「お前ってブレないな」
「安心しろ、ついでに白式のデータも取ったり取らなかったりするから」
「どっちだよ……」
「頑張って追いかけてくれ。俺はお前に期待してるぞ！」
「頑張りはするけど、その期待にだけは絶対に応えたくない」
とか言いつつもちゃんと視界情報の共有チャンネルを教えてくれる一夏は流石である。
チャンネルはあとで繋ごう。今繋いでもへらへらしてる俺の顔が見れる程度だし。
へらへらしながら一夏から離れればシャルロットさんが俺を迎えてくれた。
「お帰り。一夏に何か言ってきたの？」
「まあな。ほら、男同士の友情みたいな」
「なるほど！」
「あっ……。いや、シャルロットさん。たぶんきっと、絶対に確実に勘違いしてるゾ！」
「安心して！　僕は穂次が好きだけど、穂次を一夏から寝取るつもりは無いから！」

「俺が寝取られる立場なのか……」
　どうしてここまで腐ったのか。誰だ、シャルロットさんにＢＬ本とかを貸してるヤツは！　きっとへらへら笑ってるヤツに違いない！
　どうして俺が獲物役なのだろうか。別にいいけどさ。どうして俺の名前を特定の人物に聞くと「ヘタレ受け」などと言われるのだろうか。コレが分からない。わかりたくなんてない。
「そういえば穂次も今回の訓練は参加なんだね」
「俺だって実技はちゃんと出てるよ。見学とか、データ取りの方が多いような気がするけど」
「……手はもう大丈夫なの？」
「問題ないッスよ。包帯を一応巻いてるけど、軽い中二病みたいなモノだから」
「ちゅーにびょー？」
「根拠の無い全能感に支配されたりする流行病。発症するのが若年層、中学二年辺りになるから中二病っていうらしいッスよ」
「へー……お大事に」
「興味失せるの早くないッスかね」
　患ってるみたいに言うのもやめてほしい。俺は決して中二病患者ではないのだ。

否定するのもアレなので一夏の視点を共有する。高速で移動しているというのにクリアな視界が広がる。同時に追いかけているセシリアさんの魅惑的なお尻が見えた。

実に、素晴らしい。ハイパーセンサー越しの視界だからこそ、わかるこの素晴らしさ。

それにしてもやっぱりＩＳスーツってエロイ。実にエロイ。

お尻も然ることながら、そこから伸びる太腿もイイ。

少ししてから併走状態になったので、視点を切る。いやー、良かった。グッジョブ、一夏。俺はお前の事を忘れない。

「穂次、どうして鼻の下が伸びてるのかな？」

「ひょっ!?」

あとはこのニッコリと真っ黒い笑顔を浮かべたシャルロットさんを回避すれば任務完了だ。

土下座の準備は出来ている。任せてくれ!!

「どうしてお前はそんなにボロボロなんだよ」

「シャルロットさんに土下座したら笑顔で見下された挙句に言葉で責められたからだ。

ぶっちゃけご褒美だと思う」
「お前が変態ってことだけはよくわかった」
　何を今更言っているのだろうか、コイツは。
　いいや、そんな事はどうでもいいんだ。重要な事じゃない。
「それで、視界を共有した感想は？」
「お尻って……いいな！」
「違うそうじゃない」
「他に何を言えって言うんだ……」
「お粗末だけど、これでもちゃんと飛行したつもりなんだぞ」
「んー、セシリアさんが上手い事誘導してくれてただけじゃね？」
「ぐうっ」
　胸を抑えてわざとらしく怯んだ一夏にケラケラ笑ってやり、データを渡しておく。俺だってちゃんと仕事はするのだ。
「織斑くん。さっきの実演は素晴らしかったですよ！」
「山田先生……慰めはやめてください」
「夏野くん！　織斑くんに何を言ったんですか！」
「何も言ってないッスよ。なんでも俺の責任にするのもどうかと思います。うわー傷つ

いたなー、スゲー傷ついたなー」
「あわわわわ」
我ながらなんともバレバレな演技だと思うけれど、それでも山田先生は慌てて、混乱している。
そんなアワアワしている山田先生を眺めて、俺と一夏は吹き出して笑ってしまった。やっぱり山田先生は行動の一つ一つが可愛いのだ。
俺達に揶揄われている事に気付いたのか、山田先生はぷんすかと怒りだす。それもまた可愛いのだけれど。
「もう！　二人共、先生をからかっちゃダメですよ！」
「挑発してる、って意味なら山田先生のＩＳスーツも青少年には辛いデザインッスね！」
「や、やっぱり新調した方がいいんでしょうか」
「その胸元の空いたデザインを新調するなんてトンデモナイ。イイですか、山田先生。ソレは一種の武器なんです。見せてこそ輝く武器なのだから、隠す意味なんて一切無いんです。いっその事、もっと露出しましょう」
「新調します！」
どうしてか涙目でそう高々と宣言したおっぱい先生。どうして俺の意見は取り入れてくれないのだろうか。

悩んでいると頭を思いっきり叩かれそうになり、回避する。
「あでっ！」
「やーい、あたってやんのー」
避けれた俺とは違って当たってしまった一夏はＩＳを着用しているのにも関わらずに首元を抑えている。ＩＳのバリアを貫通するって、どういう威力なんですかね……それとも鎧通し的な技術なのだろうか。
ともあれ、鬼……かろうじて人類である織斑先生が俺を鋭く睨んでくる。
「避けるな、夏野」
「痛いのは嫌いなんでそりゃぁ避けるでしょ」
「ほう……これ以上を望みか」
「スイマセン当たります」
だからそんな獰猛さを兼ねた笑みを浮かべないで下さい。俺のダムが決壊して下半身に水溜まりが出来るかも知れないから、マジでヤメテクダサイ。
「まあいい。それより夏野。キャノンボール・ファスト想定の高速機動戦闘を実演しろ」
「別にいいッスけど、相手は誰がするんですか？　織斑先生だったら俺は今から切腹しますけど」
「残念ながら私ではない、山田先生」

「はい。任せてください！」

ふんす、とやる気に満ちあふれて息を吐き出した山田先生。両腕をグッとした時におっぱいがフルンッ、と揺れるし、両腕のお陰でその大きさが余計に誇張される。流石、無意識に自分の武器を分かっていらっしゃる。

「これで夏野くんに勝てば、きっと夏野くんも私を尊敬して、エッチな事を言わなくなる筈です！」

「……なあ一夏。俺は真実を言った方がいいのか？」

「ソレは山田先生を尊敬してるって事なのか？　それとも発言を改めないって事か？」

「どっちかといえば後者かな……」

「言わない方がいいんじゃないか？」

言えば「どうしてなんですか！」とか言いそうだし。またソレでおっぱいが揺れるのを観賞するのは好ましい事だ。

織斑先生をチラリと見れば外方を向かれた。鬼の甘言に惑わされたのだ……。

「まあ別にイイッスけど」

「本当ですね？　もうエッチな事を言いませんね？」

「山田先生。俺だって好き好んでエロイ事を言ってる訳じゃないんです。だからとりあえずもう一回、えっち、ってちょっと恥ずかしそうに言って下さい。録音します」

顔を真っ赤にしてぷんすかしてる山田先生の弱い攻撃をへらへらと笑いながら回避していく。

十数秒程攻撃したことで諦めたのか、山田先生は汗で少しＩＳスーツを湿らせて俺を恨めしげに睨んで「もう！」と吐き捨てた。

「さっさと準備をしろ、夏野」

「俺じゃなくて山田先生に言うべきじゃないッスか？」

「お前が準備をすればスグに出来るだろうさ」

「そうッスか」

肩を竦めて、左薬指に収まるフィンガーバンドに視線を送る。

一瞬だけ光に包まれて、ＩＳを装着する。左腕に大きな五角の盾が着けられたＩＳ。

「あれ？」

「どうした一夏」

「穂次のＩＳって黒ベースじゃなかったか？」

「村雨は黄色ベースに黒のラインだぜ？」

「……そっか。じゃあ俺の勘違いだな」

一夏はそれだけを言って追求をやめた。一応、俺はハイパーセンサーを用いて自身の姿を確かめる。やはり装甲は黄色に黒のラインが所々に走っているだけだ。

「それじゃあ、夏野くんはじめましょうか」
「はい！　先生のお尻を頑張って追いかけます！」
「夏野くん!!」
山田先生がぷんすかと怒るのはやっぱり可愛いと思う。

◆◆

穂次との視界を共有した一夏は思わず吐き気がした。
村雨の加速は踏み込みという動作を必要としている。いいや、踏み込まなくてもある程度の速度は出すことは出来るが踏み込む事で瞬時加速にも似た速度を出し、維持する事が出来る。
空中でありながら、少しだけ上下する視界に変に酔ってしまった一夏は眉間を顰めながらも穂次の視界で世界を眺める。
まず思ったのは、しっかりと攻撃を盾で受けているという事だ。当然と言えば当然なのだが、実際に銃口を向けられる前に穂次の手は動いている。まるで身体に染み付いている様に。
そして多角的な攻撃に至っては防御出来ない事を悟っているのか、即座に回避行動に

移っている。
銃弾を掠めるだけの回避運動。決して大きく動かずに必要最低限だけを見切り、僅かに動くだけ。
「は、はは」
一夏の口から乾いた笑いが出てくる。
流石、穂次だと。そう思う。なんせ、彼は親友だから。彼は相棒だから。
いいや、違う。
穂次が黒く荒い刃を吐き出す剣を取り出し、速度を上げる。
驚いた様子の山田真耶の顔が映り、山田真耶は咄嗟に回避行動をする。だからこそ、視界は大きく動いた。
黒い刃を霧散させて、穂次は攻撃もせずに踏み込んだのだ。
穂次は好敵手だから。
だからこそ、認めている。
だからこそ、勝ちたいと願うのだ。
「やっぱ、凄いな。穂次は」

だから同時に、穂次の事を羨ましく思ってしまう。へらへらと笑いながら、容易く追いつかせてくれない好敵手。

憧れている、と一夏は言えた。穂次本人には決して言わないけれど。

憧れているから、羨ましいから、親友だから、相棒だから、好敵手だから。

確かに心には火が灯っている。それは子供の頃に憧れたヒーローでも、今も尚憧れている姉の背中でもない。

隣に居て、笑い合える存在だからこそ、あの時の様な——村雨に操られていただろう決着ではなくて、穂次本人に。

勝ちたい。穂次に、勝ちたい。

ソレは一夏の確固たる意思であり、願いでもあった。

「俺が勝ったんで、とりあえず「えっちなのはイケません！」って言ってもらえますかね？」

「言いません！　絶対に言いませんからね！」

「ぐぬぬ……俺だけに要求して自分は逃げるんですか。山田先生ってそういう生徒の事を鑑みない教師なんですね……もう何も信じれません」

「そ、そうやって落ち込んでもダメなんですからね！」
「じゃあもういいんで」
「ヒドいっ」
　アッサリと山田先生をバッサリと切り捨てた穂次はへらへらと笑いながらコチラへと寄ってきた。
　おい、山田先生が涙目でお前を見てるぞ。ソレもしっかりと無視して穂次はドヤ顔をする。
「どーよ。この俺の素晴らしい高速機動戦は」
「正直に言ってもいいか？」
「ああ。俺を賛美する気持ちを正直に言うがいい！」
「参考にはならないよな」
「確かに。まあ村雨の特殊移動をコレでもかと言わんばかりに使ったからな。普通のＩＳだったら無茶な機動も出来るし」
「でも山田先生に勝てたのは凄いよ」
「山田先生も本気じゃねーよ。手加減されてるのは流石にわかるし」
　けろりとそう言ってのけた穂次は落ち込んだ様に肩を落とした。手加減されていた、とは言うがそれでも勝てるのはいい事じゃないのか。

「ま、いいさ。皆をやる気にする為のデモンストレーションだし」
「そうなのか？」
「実際、ラウラさんがスゲー俺の事見てるし。アレは後で戦闘訓練付き合えとか言う目だね。穂次知ってる」
「よし、俺も参加するぞ」
「違うそうじゃない」
「何がだよ」
「いいか？　俺はなるべく努力なんてせずに楽して生きたいんだ」
「ちょっとは頑張れよ……」
「つーか先生の手伝いで手一杯だから」
それこそお手上げ状態、と冗談の様に口にする穂次。
その後スグに穂次はセシリアやシャルロットに呼び出されて颯爽とそちらへと向かっていった。ぼんやりとソレを見ていると、最初は普通に喋っていたのか、いつの間にか穂次が正座をし始めた。
また何かしたのか、アイツ。と少しだけ呆れて意識を切り替える。
穂次のデモンストレーションは思った以上に俺をやる気にさせたようだ。

負けない機体

その日はよく晴れていた。空が遠く、まるで吸い込まれる様な秋晴れであった。

会場は既に満員で、その群が一斉に歓声をあげて空気を揺らした。

二年生によるレースは非常に盛り上がりを見せていた。抜きつ抜かれつのデッドヒートを繰り広げ、次になる一年生の――織斑一夏と夏野穂次を含む一年生専用機持ちのレースに期待が高まる。

その一人、織斑一夏はと言えばピットの中まで響く歓声に僅かに驚きつつも、迫る時間に胸を高鳴らせていた。

「あれ？　二年生のサラ・ウェルキンってイギリス代表候補生なのか」

「そうですわ。専用機はありませんが、優秀な方ですわ」

緊張を紛らわせようと世間話をしてみたが、やはり緊張はあまり解けない。尤も、一夏自身はこの緊張を心地よい物と感じれるだけの余裕はある。いいや、余裕というよりは訓練に裏付けされた自信か。

ともあれ、ピットを見渡すだけの余裕は幾らかあった。

既にＩＳを纏っている箒、ラウラ、鈴音、シャルロット、セシリアを見渡してから、ふ

と気付く。
「あれ？　穂次は？」
「え？」
一夏の出した声に全員が辺りを見渡す。そこに彼の姿はない。へらへら笑いながらＩＳスーツに関しての感想を言っている彼の姿はない。
シャルロットとセシリアは即座に彼へと通信を入れてみたが通じない。お互いに顔を見合わせて首を横に振る。その動作を見た面々が徐々に冷や汗を流し始める。
ある程度緊張を保ったピッチの中が別の緊張に満たされていく。そんな中、扉が開いた。
「いやー、迷った迷ったー」
へらへらと笑いながら緊張の原因が現れた。全員が安堵の息を吐き出した事で穂次は疑問を顔に浮かべ、なるほどと得心がいく。
「そんなに緊張しても、いい事なんてないんだゾ☆」
「アンタのせいでしょうが!!」
「ヒェ……俺はちょっと用事に行って、迷っただけなんですが……」
怒鳴り声を上げた鈴音に怯えながらも穂次は悪びれながら言い訳を口から吐き出した。

　その言葉に一夏は少しだけ引っ掛かりを感じた。
「用事？」
「おう。つーか、用事自体はスグに終わったんだけど、緊張でお腹が痛くなったんだ。あとは言わせるんじゃぁない……」
「そういえば穂次って前のタッグ戦の時もそんな事言ってたね」
「何なの、アンタ。自意識が希薄な癖に緊張なんてするの？」
「希薄だから緊張するんですよー。一定までは大丈夫なんだけど、ソレを越えると死にたくなる。つーか希薄ってより優先順位が低いからどうしても自分が見られるって思うと、こう……うん、お腹痛いんで、休んじゃダメッスかね……」
「無理だろ」
「でっすよねー……うぅ、頑張らねば」
　汗を額に浮かべて腹部を抑えた穂次は弱音を吐き出す。
　うぅ、と少しだけ唸りながらＩＳを展開した穂次。黄色の装甲に黒いラインを走らせ、左腕には大きな盾が着けられたいつも通りの村雨がそこには在った。
「穂次はいつも通りなんだな」
「ま、色々と仕込みはしてるけどな」
「ほう……」

「ラウラさん、そうやって戦闘者の目付きにならないでくれますかね？」
「お前とはちゃんと戦った事が無かったと思ってな」
「そりゃ俺が皆の模擬戦をサボってるからダナ！　データ解析はしてるから許して、許して」
「たまに参加してもデータ解析ばかりだからな」
「皆のスリーサイズが成長してるのはしっかり見てるから許してください！」
空気が凍った。へらへらと悪びれなく笑っている穂次と何を言ったか奇跡的に聞き逃していた一夏だけの時間が進んでいる。
各々が、自慢の武器、そのロックオンを穂次へと向ける。ピッチ内なんて関係は無い。
穂次は村雨から伝えられる警告音を聞きながら逃げる準備をする。一夏を盾にする算段だけは即座に立てた。
「みなさーん、準備はいいですかー？」
「準備万端ですよ！　山田先生！　よーし、穂次頑張っちゃうぞー！」
「ゴラァ待てぇ!!」
「ひえっ！　スリーサイズが成長してない鈴音さんやめてください！」
「殺す！　アンタだけは絶対殺す！」
山田先生ののんびりとした声が響き、穂次はソレをきっかけに逃げ出そうとする。追

いかけようとした鈴音の怒りにしっかりと油を流し込む事は忘れない。
　その姿に毒気が抜かれたのか溜め息を吐き出しながら他の面々もマーカーに合わせてスタート位置へと移動する。
　クルリと一夏を支点にして、鈴音からの睨みを回避した穂次とどうにか鈴音を抑えこんだ箒とラウラ。ドウドウ、と言っている辺り箒もラウラも鈴音を煽っている様な気がしてならないが……。
「あんまり鈴を煽るなよ」
「はっはっは。まあ緊張は解れただろ？　相棒」
「……まあな」
　へらりと笑ってみせた穂次に一夏は少しの驚きを含んで笑みを浮かべた。返事に何かを感じたのか「まあ意図してやってはねぇけどな」と冗談めかしてニヤリと笑った穂次に一夏は改めて苦笑を浮かべる。
『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します！』
「そうだ、一夏」
「ん？」
　各自位置に着いた状態でスラスターに火が灯る。低い音からゆっくりと高くなっていく音の中、一夏の隣にいる穂次が声を掛ける。

一夏は高速起動用のバイザーを下ろしながら、穂次の方を向いた。その穂次の顔はへらりとも笑ってなどいなかった――

「大丈夫だと思うけど――」

シグナルランプが点灯し、カウントダウンが開始する。そんな事もお構いなしに穂次の言葉は続く。

「警戒はちゃんとしとけよ?」

その言葉と同時に穂次が一歩目を踏み出した。それに続くように各自が飛び出し、一瞬だけ遅れて一夏も飛び出した。

吹き飛んだ景色の中で、真剣味を帯びていた穂次の顔が一夏の脳裏に焼き付く。何故、そんな事を言ったのか。疑問は残る。

けれど、一夏はその疑問と音を置き去りにして集団へと追いついた。

先頭には穂次が駆けている。その穂次は先程から迫る攻撃をクルリと前に回転して盾で防いでから器用に宙に着地して、また踏み込みを繰り返している。

「フーッハッハッハッハ! 盾持ちに通常攻撃など愚の骨頂!」

「一々イライラするわね!」

穂次に近い鈴音とセシリアの口が歪む。わかっている事はあまり穂次に攻撃をしてはいけないという事だ。コレは決して穂次の特性の都合ではなく村雨の都合だ。

攻撃し、防御されればエネルギーを蓄えさせるだけである。崩し難い護りだ。けれど、崩せない訳ではない。

セシリアに軽く目配せをした鈴音は加速し、穂次へと迫る。横を向いていた衝撃砲が前を向き、圧縮された空気弾が穂次へと連射される。

「――チィッ！」

それを最低限の動きで防ぎ、穂次は舌打ちをした。大型の盾で防げる攻撃は一方向のみであり、僅かにでも角度を変えられると回避をしなくてはならない。

鈴音の後ろから現れたセシリアの一撃を回避して、穂次は宙でたたらを踏んでしまう。

「お先ですわ」

「――甘いな」

速度を落としてしまった穂次を軽々と抜き去るセシリアが語尾にハートでも付けそうな口調とウインクをした辺りでその後ろに控えていたラウラに抜かされる。

ちょっとだけムキな顔をして「もう！」と小さな怒りを口にしながらもセシリアは自身を抜かしたラウラへと迫っていく。

鈴音も同時に向かったがラウアがクルリと反転しリボルバー・キャノンによる牽制射撃を行う。当たらずとも、掠るだけでいい。高速機動に置いて小さな誤差はそれだけで

大きな歪みに変化する。
大きく回避したセシリアと違い、小さく回避しようとした鈴音は掠ってしまいコースラインから大きく外れてしまう。
「おーこわ」
「最初にトップを悠々と走ってた穂次が言う言葉でもないよ」
「虎視眈々とトップを狙うシャルロットさんには言われたかねーですよ」
へらりと笑い合い、同時にカーブを曲がる。滑らかで綺麗な曲線を描くシャルロットとは違い、穂次は壁を蹴る様にやや角度の付いた曲がり方ではあるが。
ちらりと穂次は背後を確認した。最下位にはコースを外れた鈴音がいるが、その次はスペック上は上位にいてもオカシクはない一夏がいる。更に言えばカーブの度に前との差が広がり、後ろの差が詰まっている。
そんな誰かを見て穂次は小さく溜め息を吐き出してしまう。その溜め息に気付いたシャルロットはクスクスと笑みもらした。
「心配？」
「別に、一夏が遅いのは知ってたし」
別に一夏とは言ってないんだけどなー、と思いながらシャルロットは余計に笑みを深くする。その深くなった笑みに不満そうに口をへの字にした穂次はそれを振り払う様

に、前を向き目を細める。
「仕掛けるのは二周目か……」
「そうだね」
「ん？　ああ」
　小さく呟いた言葉を返されたからか、シャルロットの同意の言葉に驚いた様に応えた穂次。少しだけシャルロットは疑問を浮かべたが、それはアッサリと思考の底へと流されてしまった。
　二周目に入り、穂次は深く踏み込んで速度を上げる。その背後へ、スリップ・ストリームを利用してシャルロットも同時に速度を上げていく。
「来たか」
「来てやりましたよーっと」
「わっ！　防ぐなら全部防いでよ穂次！」
「次からはちゃんと防ぎますデス」
　トップを飛ぶラウラがリボルバー・キャノンを放ち、幾つかをワザと避けて他を盾で防いだ穂次の後ろから非難が声が飛ぶ。当然、そこに責任などは求めてないので穂次もへらへらと笑いながら適当な答えを返した。
　スリップ・ストリームから抜けて穂次の隣にいたシャルロットだからこそ、気付けた

――気付いてしまった。

穂次の顔が一瞬だけ苦々しく歪んだ事に。そしてその疑念が強制的に打ち切られる様に、シャルロットとラウラは天から落ちてきた光線に撃ち抜かれた。

些細な誤差が大きな歪みを生む高速機動において、ソレは無視する事など出来ない要素である。

「――ッ」

「シャルロットさん！　ラウラさん！」

更に穂次を撃ち抜かんばかりの光線をヤツクビで防ぎながら穂次はコースアウトしていくシャルロットとラウラを追い、盾へと戻したソレを構えた。

バイザーをしたそのＩＳ――サイレント・ゼフィルスはチラリと一瞥し、にやりと口元を歪ませてから一夏達へと顔を向けた。

「穂次ッ！」

「コッチは大丈夫だ！」

短い応答。通信越しに交わされたそれだけのやり取りで二人はある程度の意思疎通を熟した。非常事態ということもあり、一夏の声は幾らか緊張を含んでいた。

「二人とも、大丈夫ッスか？」

「スラスターはイカれてるけどね」

「コッチも戦闘には参加出来そうには無いな」
「無事で何より」
あからさまにホッと一息吐き出した穂次は顔を今も戦っている一夏と鈴音、セシリア、箒へと向ける。四人を相手――いいや、箒は戦力となっていないがそれでも三人の杜撰な連携を圧倒的な機動性を持って翻弄し、攻撃を加えている。
「イギリスの強奪機か」
「サイレント・ゼフィルス。ＢＴ武装の――ブルー・ティアーズの姉妹機だな。シールドビットが思ったより厄介そうだなぁ」
のんびりと言葉を吐き出しながら穂次はへらへらとした笑みを顔に貼り付けて戦場を見つめる。
彼の心情を表している様に、拳が強く握りしめられていた。

サイレント・ゼフィルスによるＢＴライフルの最大出力から一夏を守った鈴音は守った男へと拳を向けて気を失った。その鈴音を抱えながら一夏は歯を強く噛み締めた。
そんな思考もスグに後ろへと送られ、戦場へと意識はシフトする。けれど既にエネルギーは枯渇している。

サイレント・ゼフィルスから向けられた銃口に一夏は顔を顰めた。

「一夏さん！」

そんな一夏とサイレント・ゼフィルスの間に青を纏ったセシリアが入り込み、サイレント・ゼフィルスへと体当たりをする。

ただの体当たりと侮るなかれ。高速機動装備であるブルー・ティアーズの推進を用いた体当たりである。

「今のうちに箒さんから補給を！　その間――いいえ、戻るまでに終わらしてみせますわ！」

余裕を少しだけ含んだ物言いに一夏は落ち着きを取り戻す。落ち着けば冷静さも戻り、一夏は箒の元へと急いだ。

ソレと同時にその横を黒がすり抜けていき、一夏はソレを振り返る。

「穂次……？」

サイレント・ゼフィルスへと当たり、市街地へと追いやったセシリアであったが、一夏へと宣言した通りともいかず戦況は不利であった。

併走しながらもセシリアは相手の強さを認めた。認めたからといって相手が手加減してくれる訳でもないのだが。

だからこそセシリアは彼の言葉を思い出す。自分なら出来る、と根拠もなく言ってのけた。けれど確定事項を喋る様に言った彼の言葉を。愛しい男の言葉を信じた。

「ブルー・ティアーズ！」

機体はやはり何も応えてくれない。そもそもＩＳの言葉など、常人には聞こえない。曲がらない。当たらない。セシリアは舌打ちをして、サイレント・ゼフィルスは沈黙していた。

セシリアは自身に苛つきながらも冷静に頭を働かせていた。偏向射撃は今で無くてもいい。今は相手を落とす事を考えなければいけない。

戦術が頭に浮かび、ソレが消えていき、同時に回答へと辿り着く。僅かに眉間を寄せてセシリアは『インターセプター』を握りこみサイレント・ゼフィルスへと突撃した。

高速機動での接近戦は精神を大きく摩耗する。格闘戦の慣れていないセシリアにとってソレは余計に強く感じてしまう。

そんなセシリアを嘲笑う様にナイフを取り出したサイレント・ゼフィルスは簡単にセシリアの攻撃を防ぎきってみせる。

金属が当たる度に弾ける火花の一つ一つが情報解析され、置き去りにされ、更に新たに火花をあげる。

ドレだけ防がれようと食い下がるセシリアに痺れを切らしたのか、サイレント・ゼ

フィルスはインターセプターを弾き飛ばし、その銃口をセシリアへと向け、放った。
「ああッ！」
連続射撃によりブルー・ティアーズのバリアエネルギーは大きく削られ、左手で支えていたライフルは破壊された。
辛うじて地表に叩きつけられずに急上昇する程度が、今のセシリアには精一杯だった。
その様子を見たサイレント・ゼフィルス――エムはニタリと笑みを浮かべ宙で静止し、ライフルの先端に取り付けられた銃剣が青い光を灯す。
「私達の目的は？　と聞いていたな……」
「言う気に、なりましたの？」
息も絶え絶えに、セシリアは言葉を促した。情報を後へと繋ぐために。
エムもそんな事はわかっている。ソレも踏まえて、今回の作戦なのだ。
「ああ、今回に限っては言ってやろう……。
お前だよ、セシリア・オルコット」
冷たい声がセシリアの鼓膜を貫いた。対してエムは笑みを堪え切れない様に口元を歪めている。

「正確にはお前だけとは言わないが――まあソレは良いだろう。どちらか一人を狩れれば問題ない」
「何を……言ってますの？」
「コッチの話さ。そして、もうお前には関係の無い話だ」
ライフルを構えたエムに対して、セシリアは心の中にあるトリガーを絞る。これだけ油断している状態、この距離ならば外しはしないっ！
「ブルー・ティアーズ・フルバースト……！」
閉じられている砲口からの、パーツを吹き飛ばしての四門一斉射撃。空中分解というデメリットも含めた手段。
だから、避ける訳がないと思っていた。
「やはりコレが切り札か……」
「なっ」
「わかっていれば、避ける事も出来るだろう。尤も、あの程度は知らなくても避けれたがな……」
容易く回避された攻撃に目を見開き、セシリアは歯を食いしばる。
もっとわたくしが強ければ。
もっとわたくしが弱くなければ。

もっと、もっと、もっと、もっと。

銃剣で貫かれた二の腕の痛みがセシリアの脳を犯す。鋭い痛みが右腕から伝わり、喉を引き攣らせて叫んでしまう。

その叫びを聞いたエムは歪に嗤う。

まるで何かを求める様に、セシリアの左腕がエムへと向けられる。

自分の力だけでは無理だから。

自分だけなら立つことも出来ないから。

ああ、なんて弱いのだろう。

なんて、わたくしは弱くて、愚かだったのだろう。

「――お願い、ブルー・ティアーズ……」

だから、愚かだけど。弱いけど。

こんなご主人様だけど。

こんな相棒だから。

心の中に一滴の雫が落ち、水面に広がる。瞬間にセシリアは理解した。状況が状況なら泣いていたかも知れない。けれど、こんな状況だからこそ、セシリアは至る事が出来た。

いいや、ソレは誰かにとっては必然だったとも言える。

「何っ!?」
エムは突如として背後に浴びた四本のビームに驚き、セシリアから距離を取った。
セシリアは微笑みを浮かべる。一矢報いた事もそうだけれど、それ以上に彼が信じていた自分になることが出来た。
だから、痛みによる汗を流しながらもセシリアは後ろへと凭れた。背中に当たる感触と労る様に回された腕。
ボヤケた視界に誰かの顔が映った。
「見て、くださいました?」
「ああ。見てたよ」
力なく呟いた言葉にも、やはり彼はちゃんと返してくれた。その声はいつもの彼よりも何かを含んでいたが、彼に見てくれたなら、それだけでよかった。
「やっぱ、セシリアさんはスゲーわ」
「ふふ……でも、少しだけ、寝ますわ……」
「ああ。あとは任せてくれ」
セシリアの瞼が落ちていく。ボンヤリとした視界の中、黒をベースにした装甲を目にしながら、セシリアはゆっくりと安心して、意識を落としていった。
そんなセシリアをしっかりと抱きかかえた男は近くのビルへとセシリアを下ろし、

息を吐き出した。

「もう、負けない戦いはやめだ」

まるでソレがキーだったように、蠢いていた黒の粒子が装甲へと浸透していく。僅かに残った装甲が黄色のラインへと変化し、男はその顔をエムへと向けた。

「セカンド」

「アンタらの目論見通りだ。ハハッ。クッソ情けない俺をここまで呪った事は今まで無いね。どうもありがとよ」

自嘲を含んだ言葉とすぐ側まで迫っている戦闘への期待。左頬に刻まれた黒い電子線模様が激しく脈動し、徐々に瞳へと侵食していく。

左腕に装備された盾が戦いを待ち望んでいる様に黒い粒子を撒き散らす。

「でも、だから、決心した。いいや、気付いたって言った方がいいのか？」

決心した、と言いながらも男は——夏野穂次は少しだけ迷って、けれどハッキリと言葉を吐き出す。

「俺は——セシリアとシャルロットを愛している。

だから、アンタらにはもう手を出させない」

穂次はゆっくりと盾に手を当て、一振りの刀を取り出す。揺らぎなど決して無い、黒い粒子刀。ＩＳと同じ名前を冠した刀を構える。左目が黒に染まり、瞳が黄色へと発光

する。
「覚悟しな、亡国機業（ファントム・タスク）。俺達はもう勝つために戦うぞ」

勝つための機体

「おぉ、おお。主！　ようやっと、ようやっと心を決めおったか!!」
白い、ささくれた骨の絨毯が敷き詰められた世界で女は歓喜の声を上げる。
我慢などせずに嗤い、女は十二分に色香を漂わせる身体を抱きしめて熱っぽい吐息を吐き出す。
ようやく、ようやくである。
負けない為などと戯事を吠えていた男がようやく求めたのだ。
ああ、なんと、なんと、
「――なんと愚かしい」
自身の主だからこそ、自身の特性だからこそ、女は嗤いながらも男を罵った。けれど愚かだと罵りながらも、女はソレを求めていた。
それは自身が武器だからこそ。
自身が男の唯一の武器だからこそ。
男が自身の唯一の主だからこそ。
「クク、ククククク、ああ!!　愛おしい、愛おしい愛おしい愛おしいぞ、我が主！」

愛する男が自身を連れて堕ちていく様のなんと嬉しい事か。
愛する男を自身の元まで落とす事のなんと甘美な事か。
蕩ける瞳を空へと向けて、唇を舐める。
イビツなご主人様が、その歪さをようやく認めた。
もう既に鉄格子など在りはしない。
そもそもアレは女を閉じ込める為のモノではない。そもそもアレは女がココへと立つ前から既に在ったものだ。
「さあ、さあ！　戦うぞ、戦うぞ主よ！　妾を十全に使い、鬼を倒そうぞ！
ああ、歌舞伎の様に大立ち回りをしてやろうて!!」

◆◆

黒い装甲に包まれた穂次はジロリとその瞳をエムへと向けた。
頬に刻まれた、明滅する黒の基盤模様。目はその影響からか黒に染まり、瞳は黄色へと変化してしまった。
お陰で視界は非常にクリアだ。

穂次は悪態でも吐くように現状を理解した。同時にこの状態があまり長続きしては良くないモノという事も理解している。

穂次はゆったりと刀を構え直し、その一歩を踏み込んだ。一瞬でトップスピードに到れる踏み込み。村雨の特異とも言える移動。

「くっ」

「チッ」

苦々しく言葉を吐き出したエムと舌打ちをした穂次が相対する。エムが握ったナイフを離し、即座に肉弾戦を嫌うように飛翔した。

目に見えて接近戦を得意とするだろう村雨に付き合うつもりは無い、という風に。

ナイフを両断し、そのまま相手のバリアすら両断しようと考えていた穂次はコチラに狙いを定めているエムを睨み、嗤う。

エムがビームを撃つと同時に盾が展開する。いいや、ソレは最早盾と言うには無理があった。

持ち主を守れない程細長く変形した盾——弓が黒の粒子で弦を張る。

ビームを高速横回転移動（アーリー・ロール）で回避しつつ、放たれた矢。ビームに這うように疾（ハシ）しる矢は身体を反転させて射た影響か、しっかりとビームの陰に隠れていた筈であった。

エムはソレを容易く防御してみせた。シールド・ビットを動かし、次の攻撃にも備え

ながら完璧に。
対して穂次は偏向射撃には対応出来ずに僅かに身体に攻撃を受けてしまった。
穂次の顔が歪む。まるで自分の肉でも削がれた様な感触。けれどソレは現実ではない。自身の肉は全て残っているし、削られた訳でもない。
攻撃を食らった代償。精神的な肉体損失。
ＩＳとの適合率が高ければ高いほど、ソレは顕著になっていくだろう。だから、これ以上の攻撃はマズい。
「――だからどうしたってんだ」
穂次は嗤いを堪える事など出来なかった。
愚かだとは自分で思う。何故も、どうしても、既に過ぎた事だった。
自分を馬鹿にされても無視出来る。
肉を削がれるのも堪えれる。
指の骨を折られるのも堪えてやる。
自分を捨てろと言われても、まあ我慢してやろう。
だが、ソレの喪失だけは穂次の琴線に触れた。ソレだけは許してはいけない事だとその男の本能が叫んでいた。
だからこそ、男はようやく認めた。そして宣言までした。

だからこそ、男は幾らでも愚かになれる。
「おイ、村雨。足りねーぞ」
だからこそ、男は幾らでも堕ちる事が出来る。
「もっとだ……もっと寄越せよ」
だからこそ、武器は男に応えた。ただソレだけなのだ。
ドロリと粘質な液体が左頬に伝う。肩で無理やり左頬を拭っても、ソレは瞳から流れ続ける。
「は、ハハ、ハハハハハッハハハハハ!!」
男は狂った様に……いいや、狂っていた男は高らかに嗤いをあげる。存外に気分がよかった。
頭は平時よりも澄んでいる。ドクリと鼓動が鳴る度に痛みと一緒に悦びが拡がる。自分には足りなかったモノが埋まっていく。
心地良い息苦しさと身体を引き千切ぎられていく快楽が全てを後押ししていく。
「狂ったか……」
「狂ったァ？　俺は非常に冷静ッスよ。今ならアンタを血祭りにあげてやることも容易いぐらいに、冷静さ」
「やってみろ」

「お言葉に甘えて」

弓からは矢が放たれた。予備動作すらなく、瞬間的に放たれた矢は最短距離を疾り（ハシリ）、エムの眼前へと迫った。

そんな攻撃に当ってやれるほどエムは優しくも無い。軽々と回避したソレは直進する。男がニタリと嗤い、エムは舌打ちをし、加速する。

逃げ出すエムに追従するように黒の矢が空を疾りエムへと迫る。

ソレも迫っただけでありシールド・ビットにより遮断されてしまった。シールドに当たった矢は大きく弾け、黒の飛沫を散らした。

男は嗤う。喉を裂けんばかり引き攣らせ、口元に笑みを浮かべ、頬に流れた液体が口に入り、鉄の味が舌に広がる。ソレさえも、実に愉しい。

「やっぱ、ソレ（シールド・ビット）。邪魔ッスね」

「……ッ」

エムは息を飲み込み咄嗟にシールド・ビットを置き去りにして銃を狙いもせずに乱射した。正確には自身のシールド・ビットに向けて、とにかく撃った。

何かに当たった音と同時にシールド・ビットの奥から黒い粒子がこれでもかと言わんばかりに吐き出される。

淡々と放たれた言葉もそうであるが、真正面から両断されてしまったシールド・ビッ

トに怖気が走る。

叩き斬ったソレを見送り、男は血でも振り払う様に、刀を振るう。血の代わりに黒い粒子が僅かに撒き散らされ、揺らいだ刀身が静かに形を保つ。

「ああ、実にいい斬れ味ッスね。まあ及第点だけど」

シールドを真正面から叩き斬っていて、その斬れ味が及第点という男は刀を盾へと戻し、盾を弓へと変化させ、またエムへと向ける。

エムは男の事を怖がった。アレは本当に人なのか？　村雨の事はある程度知っている。元々何故作られたかも、エムは目を通していた。

だからこそ言える。アレは人ではない。アレを人と言えるのは同じ土俵に立っている人間、或いは同じ土俵に立ったことのある人だけだ。

「何だ、お前は……」

エムは問いかけてしまった。

そんなエムに対して、男はニタリと笑みを浮かべて口を開いた。

「知ってるでしょ？　俺は夏野穂次……探偵さ」

キメ顔で穂次はそう言った。それはもうキリっとした顔で言ってのけた。まるでコレでもかと言わんばかりの真面目さで言ってのけたのだ。

エムはそんな穂次をジロリと睨んだ。当然である。エムにとっては脅威であるにも

関わらず茶化されてしまったのだ。
　そんなエムを睨みを受けて穂次はヘラリと笑みを浮かべる。まるで戦闘は終わりだと言わんばかりに、けれど腕に装着されている弓は矢をつがえ、エムへと向けられている。
「まあ、どーせここまでツスね。どちらかが勝っているつーなら、そちらさんが勝ってるんでしょうねー」
「あら、諦めが早いのね」
「人質を取っておいてよく言う」
　弓は決してエムから逸らさず、穂次はジロリとその女を見た。ＩＳでは隠し切れない豊満な身体をした女は綺羅びやかな金色の髪をビル風に靡かせながら、銃を構えていた。
「御機嫌よう、セカンド」
「御機嫌よう、スコール」
　金色のＩＳを纏った女――スコールの照準はビルに横たわるセシリアへと向けられている。生憎とも言うべきか、その顔はバイザーで隠されどのような表情をしているかは定かではない。少なからず、これから人を撃つ、という事に忌避感は覚えていないであろう。

「――条件は？」
「私達の離脱よ。別にファーストを待って、ココで争ってあげてもいいわ。尤も、アナタもそろそろ限界でしょうけど」
「……チッ」
少しだけ思考した穂次は舌打ちをして苦々しく顔を歪ませた。
そろそろ限界、というスコールは間違えているが、穂次にしてみれば都合のいい誤算である。
「ああ、クソが。不甲斐ないね、まったく」
「そうかしら、格好良かったわよ、ナイト様？」
まるで揶揄する様にクスクスと笑ったスコールに穂次は余計に顔を顰めた。エムに至っては口元に表情も浮かんでないのでさっぱりだが。
「さあ、帰るわよ。エム」
「……ああ」
「あら？　不満そうね」
「別に……」
「あのまま決着をつけて、どちらが勝つかなんて分かりきっている事でしょう。このタイミングがベストなのよ。お互いに、ね」

企てが成功した様に、意地悪く笑うスコールに対してなんとも言えないエム。
セシリアとスコールの間へと移動した穂次は眉間を寄せて溜め息を吐き出す。
「さっさと消えてくれませんかねー後ろからブッパしてもイイんすよ？」
「あら恐ろしい。怖くてここからでもセシリアちゃんを撃ってしまいそう」
「防げばいい話ッスね」
「じゃあその間に逃げればいい話ね」
スコールからの視線を受け取ったエムは肩を落とし、セシリアへと向けてライフルを放つ。直線で進むソレを容易く盾で防いだ穂次、既に小さくなった二人を見て、溜め息を吐き出した。
「ああ、畜生め……」
誰に吐き出した悪態だったのか、穂次が小さく呟いたソレは風に流されてドコかへと行ってしまった。
「穂つッ――――！」
ようやく到着した一夏は思わず警戒をしてしまった。
黄色の装甲だった筈の村雨が黒く染まっている。それだけで十二分に警戒すべきである。当然だ。一夏がこの村雨を見たのは、村雨に精神を侵食されたであろう穂次と戦った時なのだから。

そんな一夏を見つけたのか、穂次は頬を少しだけ拭って、身体ごと一夏へと向けた。
頬に浮かんでいる基盤模様が激しく明滅し、同時に一夏は雪片を構えた。
「俺の戦闘力は五三万だッ！」
「なん……だと……!?」
緊張していても尚、思わず反応してしまうのが男の子である。
しっかりとポーズまで決めた穂次に対してちょっとだけ恥ずかしくなった一夏は雪片を投擲した。へらへらと笑いながら、穂次はしっかりとソレをキャッチして極光の刃を消す。
「いやー、あっはっは。ちょー強そうに見えね？」
「変な心配をさせんなよ……」
「へっへっへ。まあなんとか無事だよ」
軽くそう言ってのけた穂次は後ろに眠っているセシリアへと視線を落として、僅かに口元を緩める。大きな傷だが既にＩＳが止血をしているので、命に別状はないだろう。
頬に刻まれていた基盤模様がゆっくりとその光を消していき、名残すら見せずに通常の肌へと戻っていく。
既にエネルギーの無くなった雪片を一夏へと投げ返す。
「ちょーっと戦闘が長引いたから、早くセシリアをＩＳ学園に連れて帰ってくれ」

「っ、そうだな。ってお前はどうするんだよ」
「戦いで疲れってからちょっと休憩だ。すぐに戻るから気にすんな」
「お前もドコか」
「おいおい、よく見ろって。ドコに怪我があるんスかね？　疲れただけだよ」
　ＩＳを解除してビルに座った穂次はいつも通りに振る舞ってへらへらと笑う。
　そんな穂次を訝しげに見ながら、一夏はセシリアを抱き上げて空へと飛ぶ。
「じゃあ、先に戻るぞ」
「おう。出来れば安全運転で頼むな。任せたぜ、相棒」
「……はぁ、任された」
　そう言われれば断れないのも一夏である。しっかりと溜め息を吐き出した一夏は速度を上げてＩＳ学園へと飛翔した。
　そんな一夏をしっかりと見送った穂次は細く息を吐き出す。歯を食いしばり、叫びそうになる喉をどうにか抑えこむ。
「くっ、ヒヒ、ハハ」
　笑いが溢れた。
　脳に熱した棒でも突っ込まれような痛みも、肉の一つ一つを丁寧に削ぎ落としていくような痛みも、引き千切られる様な痛みも、溺れている様な息苦しさも。

痛みも苦しみも、全部が全部

愛おしい。

「くはっ、ふひっ」

冷や汗を流して、痛みを痛みとして受けながら、苦しさを苦しさだと認識しながらも穂次は笑いを吐き出した。

狂っているなんて自覚している。

歪んでいるなんて自覚していた。

だからこそ、この証明を甘んじて受けることが出来る。

宣言したからこそ、自覚したからこそ、もう戻る事など出来ないのだ。

「ハハッハハハハハハッハッハッハハ!!」

赤くはない液体を瞳から流し、男は空高く笑った。

コレは男が選択した事だ。だから、男は全てを受け入れなければならない。

男はもう、逃げる事をやめた。

王女様からのご褒美

部屋の扉を静かに開き、中へとゆっくりと足を踏み入れる。
急いで来たのが原因なのか、はたまたベッドで眠っている美少女が原因なのか、口の中で溜まってもいない唾を飲み込む。
キャノンボール・ファスト襲撃という事件も終わり、市街地でのＩＳ戦闘というかなりの問題を起こした俺が開放されたのは１７時を過ぎた所である。
結局、亡国機業へと責任を押し付けて俺とセシリアはお咎め無しになり、ついでに亡国機業を追い払った事への褒美もなくなって、残ったのは亡国機業を逃がしてしまった軽いお叱りと取り調べだった。
取り調べと言っても状況の正誤性を取る為のモノだったので、そこに責任が生じる事はそれほど無かった。
ともかくとして、実はまだ残っている面倒事を山田先生へと押し付けて俺はセシリアが入院している治療室へと走ってやってきた訳である。ＩＳのブーストは無かったけれど、我ながら結構な速さだったと自負している。
一夏の誕生日会に参加するという選択肢もあったのだけれど、俺にとってはセシリア

の方が重要なのだ。

薄い布団を上下するあのおっぱい。実に素晴らしい。しかも気絶したままだからセシリアはＩＳスーツを纏ったままなのだ。つまりほとんど下着みたいな物だなのだ。けれど下着じゃない。

下着じゃないから恥ずかしくないもん！　という実に男にとっては素晴らしい現状なのである。やっぱりおっぱいは最高だな。

近くにあった椅子を静かに寄せて、セシリアの近くに座る。ここに来るまでに状態を聞いたけれど、貫かれた腕は傷もなく一週間程度で治るらしい。朗報である。

もしも、傷が残るようなら俺は許す事が出来ないだろう。そもそも許すつもりも無い。

「……ココに居たか」

「どうしたんスか？　織斑先生」

扉の開く音とコツリとヒールを鳴らして入ってきた織斑先生の方へと身体ごと向く。織斑先生は壁に凭れて腕を組んでいる。おっぱいを少し腕に乗っている様な気がする。

「何、教え子が心配でな」

「セシリアなら大丈夫みたいッス。なんかよく分かんないッスけど、カッセイ化再生治療？　とかで一週間ぐらいで傷もなく治るらしいです」

「お前も入院すべき状態だろう」
「別に。全身が痛んでるだけッスよ。問題ねーです」
「十分に問題だと思うが？」
何を言うのだろうか。少しばかり身体が痛いだけなのだ。入院なんて必要ない。
織斑先生は盛大に溜め息を吐き出して真面目な顔をして俺を睨む。どうして睨む必要があるんですかね……。
「――お前が怪しまれている事は知っているな？」
「まあ亡国機業が逃げた現場にいますし、同時に取り逃してますからね」
「中にはお前が裏切っている、という話もあるが……何か言うことはあるか？」
「そりゃぁ、また……俺は裏切ってなんかいませんよ」
「そうか……」
「ちなみに織斑先生はドチラ側なんですかね？」
「こうしてお前に釘を刺してる事で気付け、阿呆が」
「アハハ、心強いッスね」
嬉しい限りである。睨みが呆れたモノに変わって溜め息を吐き出されるのも、馴れたものである。
へらへらと笑う俺から少し目を逸らして眉をピクリと動かして織斑先生がニタリと

笑ってみせる。
「それで、今回の戦闘で村雨との適合率を無理に上げたのだろう？」
「無理、つー訳でも無いッスけど。まあ今までよりは格段に」
「それで――左目の調子はどうだ？」
「あ、アハハ……スゲーっすね。気付かないと思ってました」
「阿呆め。普通に歩き方にも違和感があったぞ。次までに修正してやる」
「ハハハ……お手柔らかにお願いします」
「任せろ。それで、視力は？」
「無いッスね。最悪ハイパーセンサーでも使ってフォローするんで大丈夫ッスよ」
「お前は放っておくと無理をするきらいがある」
「無理した事なんてないッスけどねー。テキトーに生きてますし、何より『なるようになる』が座右の銘ッスよ？」
「……そうだったな」
少しだけ笑った織斑先生はいつものムッとした顔へと戻り、背を壁から離して扉を開いた。
「まあいい。精々頑張る事だな」
「これ以上何を頑張れっていうんですかね」

「お前の事じゃないさ」
そんな意味深な事を言ってから医務室から出て行った。
はて、と疑問を浮かばせながら身体をセシリアの方へと戻すとアッサリと疑問は払拭された。
「アハハ……おはよう、セシリア」
むすっとコチラを睨んでいるセシリアを見れば十二分に先ほどの会話を聞かれたのが分かる。果たしてどこから起きていたのだろうか。
適合率が上げた影響か、いつもの様にハイパーセンサーを常時起動出来てない俺からすると本当に分からない。だから、逃げるように笑って誤魔化しておこう。
へらへらと笑っていれば溜め息を吐き出されて、セシリアはその顔を少しだけ歪めながら身体を起こす。背中を支えて補助をしておく。決して背骨とか肌とか、髪に触りたかった訳じゃない。
「……本当に視力が？」
口をへの字にして、少しだけ言葉に迷う。「あー」と「んー」を使って迷った言葉をどうにか吐き出そうとして、溜め息が出た。
「そうやってセシリアに見られると嘘も吐けないッスね」
「そもそも嘘を吐く前提というのが――」

「まあ左目の視力は無い……ってどうしたのさ。そんな鳩がライフルで狙撃された時みたいな顔をして」
「それは死んでるみたい、と言いたいんですの？」
「まさか。冗談だよ、セシリア」
「また――」
唇を少し尖らせてむすっとしたセシリアが俺を見ては顔を逸したりを繰り返して、何度か口を開いては迷う様に口を閉じる。
ちょっとだけ心地いい空間でボンヤリとしていれば、セシリアが意を決したのか言葉を繋ぐ。
「その……呼び捨て、ですのね」
「嫌なら戻すよ、セシリア〝様〟」
「戻ってすらないですわ……それに、別に呼び捨てでも、よろしくてよ？」
「ソレはよかった。ありがとう、セシリア〝さん〟」
ニッコリとわざわざ笑顔を作って言ってみせれば非常に不機嫌そうに俺を睨んでくるセシリア。
顔を崩してへらへらと笑ってみせて「冗談ツスよ」と伝えておく。けれどもむすーっと愛らしい顔を歪めているのは、やはり可愛いく思う。美人がそういう事をしているの

は素晴らしい。
　あと、なるべく起きたからあんまり見ないようにしてたけど、ＩＳスーツを押し上げてるおっぱいがスゴイ。柔らかい事は知っているけど、見るのと触るのはまた別だ。
「ゴメンってセシリア」
「いいですわ。それにしても、随分と急ですのね……」
「もう逃げないって決めたからね。まあ遅かった、って言った方が正しいけど」
「遅かった？」
「あー、まー、それはあんまり触れないでください。お願いします」
　実は告白される前から好きだったとか、そういう話になるのであまり触れないでほしい。
　そんな俺に微笑んでるセシリアを見て、知ってるのか？　と考えるけれど、ソレは無いだろう。我ながら完璧に隠している筈だ。
「ふふふ」
「えー、あー、それで、何の話だっけ？」
「左目の話ですわ」
「ああ、そうだった。うん。　えー、まあ視力は無くなったよ。右目はなんとも無いから大丈夫だけど」

「大丈夫じゃありませんわ」
眉を寄せて、痛むだろう右手で左頬を撫でられる。俺はへらりと笑いながら彼女の右手に手を重ねる。
どうしてかちょっとだけ悲しそうな瞳が俺を映す。
「そんな顔をさせる為に頑張った訳じゃないッスよ」
「そう、ですわね」
「まあ俺なんか別にどうって事ないよあだだだっ」
「どうしてそうやって自分を大切にしませんの！」
「セシリア、痛い、痛いから！　ほっぺ引っ張らないで！」
撫でられていた左頬がそのまま抓られて引っ張られる。セシリアは怒りながら注意をしてくれるけれど、さっぱり意味は分からない。
どうやら気が済んだのか、果たして諦めたのか、セシリアは俺の頬から手を離して、疲れたように微笑んだ。
「……あまり、無理はしないでくださいまし」
「無理なんてしたことないよ。そんなキャラじゃないでしょ」
「ハァ……」
「そんな盛大に溜め息を吐かなくても……まあ約束するよ。俺、無理、しない」

「自覚してないなら意味ないですが……いいですわ」
「許された」
「シャルロットさんにもちゃんと相談するので、覚悟をしてくださいまし」
「シャルロットにまで言われると逃げ場が消されそうなんですが……」
「……シャルロットさんまで呼び捨てですのね」
「どうして不機嫌になるんですかね……」
「……確か穂次さんは一般論を基準にして世間を見ているのでしたね？」
「まあ一応は」
「では、質問ですわ。好きな相手から別の女の名前が出てきた時の恋人の行動は？」
ニッコリと、何か黒いモノを感じさせる綺麗な笑顔だ。不覚にもゾクゾクとしてしまい、下半身が熱くなる。いや、落ち着くんだ、俺。まるで変態みたいじゃないか。何も問題ないな！
そんな事を考えてる俺を見てむすっとしたセシリアは諦めた様に溜め息を吐き出した。
「いいですわ。もう……」
「許された」
「次はありませんわ」

「ハイ。気をつけマスデス」
「ふふ……ソレに、左目はわたくしの責任みたいなモノですし」
「それは違ェよ。コレは俺が弱い結果で、セシリアが責任を感じる事じゃないさ」
「……ちょっとぐらい、わたくしに分けてくれてもいいんですわよ？」
「別に責任があって、どうのってなる話じゃねーでしょ」
「ちょっともくれませんの？」
「そうやって上目遣いしても駄目ッス」
むぅ、と少しだけ唸ったセシリア。どうして責任がほしいのかさっぱり分からない。
弱い結果、なんて言ったけれど、俺にだって下心がある。セシリアを守って失ったのだ。俺にとっては勲章みたいなモノなのだ。だからセシリアには渡せない。ちょっと子供じみた意地だったりする。
上目遣いなセシリアも見たし、そろそろ面会時間も終わってしまうだろう。
「んじゃ、そろそろ帰るよ。セシリア」
「そうですか……わたくしも少し寝ますわ」
「そっか」
どうにも居心地の悪い、ドギマギとした空気が流れる。
頬を指で掻いて、見つめてくるセシリアに疑問をぶつける。

「えー、何かお求めで？」
「そうですわね。頑張ってくれた騎士（ナイト）様にご褒美を上げようと思いまして」
「やったーご褒――」
柔らかい感触と近すぎるセシリアの顔。
僅かに漏れた吐息が肌に当たり、小さく音を立てて離れる。薄っすらと見えた潤んだ碧眼をパチクリと見送って、何が起こったのか、理解するのに時間が掛かる。
体験の話をすると二度目になるのだけれど、美人に急にされると脳が停止してしまう。
「えー、えー……あー、」
そんな油も差されてないブリキに少しだけ頬を赤らめて微笑んでいる彼女に、何かを言わなければと、口を何度か開けて、閉じてしまう。
「何をしたかわかりませんの？」
俺は激しく頷いた。嘘である。何をされたかはよくわかってる。なんで、とかそういう部分はさっぱりわからないけれど。
セシリアは少し迷う様に瑞々しい唇に指を当てて考える仕草をして、微笑む。
両手が俺の頬を抑える。まったく力の篭っていない拘束だったが、コレを解く程の力は俺は無い。

「では、もう一度ですわね」

また唇には柔らかい感触が当たった。

こまめに上書き保存しよう

困った。

どうにも目の前の問題を解決出来ない。戦術を立てた所で俺の拙い頭で相手に勝てる気にもなれない。

ではいっそ武力行使をすればいいのではないだろうか。いいや、ソレは愚の骨頂であろう。愚かな俺だが、その手を取るわけにはいかない。

しかしながら、そうなれば困った。打つ手なしだ。鬼の訓練をクリアしてきた俺がこうもアッサリと負けるなんて……。

「シャルロット……恐ろしい子！」

「急に何言ってるのさ」

ジト目で俺を睨んでくるシャルロットにへらへらと笑いながらどうしようか迷う。

俺が部屋に戻ると『私、不機嫌です』という看板でもつけた様な彼女がベッドで三角座りをしていたのだ。スカートと太ももが作る鉄壁であり魅惑の空間に目が行ったのが悪かったのかもしれない。それでも俺はソレに関して感謝する言葉は出るが謝るつもりはない。見てしまうのは男の性なのだ。スカートが僅かに捲れて、健康的な太もも

の更に奥が見えそうだったのだ。俺は悪くない。いや、ちょっとぐらい悪かったのかもしれない。俺が悪かった許してください。

「えー、それで、あー……こ、紅茶でも淹れます」

「……よろしく」

少しばかり威厳を込めて放たれた言葉に俺の本質部分がゾクゾクと刺激されてしまう。股間にダイレクトアタックだ！　とはこういう事なのだろう。

いや、決して俺はマゾではないのだ。ただシャルロットとかセシリアに蔑まれるのが好きなだけで、決して被虐趣味という訳ではないのだ。むしろ俺は加虐趣味だから、ほら、ベッドでの俺はたぶん雄弁だから（震え声）。

カチャカチャと食器が擦れる音だけが部屋に響いて、本格的に俺が何をしたか思い返していく。これでもシャルロットの機嫌を悪くするような事はしていないと思う。

バレて問題な事は徹底して隠しているし、何よりバレたら俺はきっとこの場に居れないだろう。

お湯も沸き、紅茶を淹れて、椅子に座って足を組んでいるシャルロットの前に置く。机に置かれたカップに口を付けてちょっとだけ頬を綻ばせたシャルロットはスグにむすっとした表情に戻った。

「なるほど、お茶請け準備しなきゃ！」

「座って」
「アッハイ」
どうやらお茶請けが無かったから拗ねた訳じゃないらしい。
俺は背筋を伸ばして椅子に座る。なるべく視線を合わせないようにして、俺が仕出かしたであろう事を思い浮かべては否定していく。原因はさっぱりわからなかった。
相変わらずジト目で俺を見ているシャルロットが溜め息を吐き出して、机の上に肘を立てて指を組む。
「ヒント1。今日セシリアの食事の補助をしてたのは誰でしょう」
「俺です」
「ヒント2。セシリアの包帯を取り替えをしたのは？」
「お、俺です」
「ヒント3。私は非常に不機嫌です」
「み、見ればわかりま――」
「私は、非常（ひじょー）に、不機嫌です」
「ハィ……」
笑顔なのに、どうしてか真っ黒い。いや、彼女の顔は綺麗なままなのだけれど、何か、こう気付いてはイケナイモノに気付いてしまった感じがする。

頭の中で必死にヒントから答えを導こうとするも、さっぱり分からない。俺が悪い事はよく分かったけれど、果たして何が悪かったのだろうか。

「セシリアに何をされたのかなー？」

「な、何も」

「何を、されたのかな？」

「キ、キスされました……」

「ふーん……ふーん」

ニッコリとやっぱり笑顔なシャルロットが怖い。

キスをしたのは今俺が自白したからだけれど、どうしてセシリアに何かをされた事が分かったのだろうか。セシリアから聞いていたとすれば、キスした事をズバリ言い当てているだろうし。

怖いシャルロットが溜め息を吐き出して、怖さが無くなって可愛いだけの微笑みを浮かべる。

「やっぱり穂次は受けなんだね」

毒はまだしっかりと残っていた様だ。

男としての心にダイレクトアタックを喰ったけれど、俺はまだ大丈夫だ。大丈夫、大丈夫。

なんとも言えなかった俺の顔を見て、ようやく毒気も抜けたのか改めて紅茶を一口飲んだシャルロット。看板は降ろされたようだ。
「それで……セシリアを守って左目が見えなくなったのはホントなの？」
「視力は無くなったけど。別にセシリアを守ったのが原因って訳じゃないよ」
「ふーん……」
「なんでちょっと満足気なんですかね？」
「なんでだろうね？」
ヘタレだから分からない。と言えば満足してくれるのだろうか。いや、たぶん答えは教えてくれないだろうけど。
なんでか満足そうにニコニコして紅茶を更に一口。そこで何かに気付いた様に俺を見る。
「私達の事、呼び捨てになったんだね」
「まあ……その、一歩前進と言いますか……」
「随分遅い――ん？」
「どうした？」
「呼び捨てが前進なら、元々呼び捨てだった一夏はやっぱり」
「シャルロット、止めるんだ！」

思わず叫んだ俺を誰が責めるのだろうか。
「ごめんごめん」と笑いながら冗談である事を言う彼女だが、あの瞬間だけはきっと本気だっただろう。俺にはわかるんだ。
ニコニコと両手でカップを持っているシャルロットは小さく溜め息を吐き出してその表情に陰をさす。
「ちょっとだけ、セシリアが羨ましかったんだ」
「怪我してるのに？」
「怪我してる、からかな？　あとは穂次が守ってくれたのもあるんだろうけど」
「普通に守るだろ。まあ怪我させてちゃ世話ねーですけど」
「……もしも私が、って聞いちゃうのは卑怯かな」
「返事は決まってる事だよ」
「ふふっ、ありがとう」
何を当然の事を言うのだろう。別にいいけれど。
口をへの字にしていると携帯が震えて、画面を見る。どうやら一夏が来る様だ。
「どうしたの？」
「一夏が来るんだって。たぶん男同士の会話になるから」
「わかった。私は部屋に戻るよ」

「どうも。でもそんなに目を輝かせる様な事は起きないと思うなー」
「任せて！」
「何をだよ……」
　目を輝かせたシャルロットが席を立ち、扉へと歩いて行く。見送りにその後ろを歩いていると、彼女は扉に手を掛けて、「あ、そうだ」と忘れていたモノを思い出した様に声を出して振り返った。
　俺の肩に彼女の手が置かれ、俺の唇に僅かに紅茶の味が広がる。
　小さく音を立てから離れたシャルロットの顔をパチクリと見つめてしまう。
「ちゃんと上書きしとかないと。じゃあね」
　ニコリと微笑んだシャルロットが部屋から出て、扉の前には俺だけがいる。
　顔が熱くなり、脳が正常に動いていないのはよく分かる。落ち着け、落ち着くんだ、俺。そろそろ一夏が来るんだから、落ち着くんだ。
　深呼吸を繰り返して、椅子に座り、紅茶を一口。クールになれ、夏野穂次。
　クールに……クールに……。うぅ……紅茶の味が同じだからリフレインする。ちくしょうめ、ちくしょうめ……。

◆◆

「穂次、入るぞー」
「あいよー」
一夏は扉を開けて穂次の部屋に入る。
紅茶を常飲しているからだろうか、彼の部屋には紅茶の匂いがいつも充満している。
そんな印象を受けながら一夏は珍しく湯呑みを持っている穂次を見た。
「今日はお茶なんだな」
「うっせー、唐変木」
「なんで俺は今罵られたんだ？」
穂次の気持ちを知らない一夏とはしては当然の返しであった。対して穂次は急須から湯呑みへとお茶を注いで対面の席へと置いた。
「ありがと」
「どーいたしまして。お茶最高だわ……」
「だよな。つーか、俺の為にお茶準備してたのか？」
「自意識過剰かよ。自意識薄いって言われてる俺への嫌味か何かッスかね？」
「違うよア穂次」

「やるのか馬鹿一夏」
「……いや、やめよう」
「……だな」
お互いにお茶を一口飲んで、ふぅ、と一息吐き出す。
数秒だけ無言が続き、穂次がだらけた体勢を正すように椅子に座り直す。
「それで、相談事か？」
「よくわかったな」
「普段何も言わずに来るのに、今日に限っては連絡入れてきたからな。元々いたシャルロットにはご退場願いましたー」
「そっか……というよりセシリアもだけど呼び捨てになったんだな」
「なんだよ、悪いのか」
「別に悪いとは言ってねぇよ。なんというか、よかったな」
ズズッとお茶を飲んだ一夏に対して穂次はいつものへらへらとした笑みではなく、ドコか恥ずかしい様に笑いコメカミ辺りを指で掻いている。
「この唐変木はそういう感情に疎いって訳じゃねーんスね」
「なんだよ。これでも感情には敏感なんだぞ」
「その言葉、一言一句そのまま鈴音さん達に言ってみな。鼻で笑われるか殴られるか、だ

ろうぜ」
「なんでだよ……」
「まあ俺の話はいいだろ」
肩を竦めていつものようにへらへらと笑い出した穂次が一夏の言葉を促す。
一夏は少しだけ考えて、口を開いた。
「襲われたんだ」
「……俺より先に童貞卒業しましたって報告かよ」
「そうじゃねぇよ！　どうしてそうなった！」
「ＩＳ学園で襲われたとか聞いたらそうだと思うだろ！」
「なんでだよ！　昨日の夜に、亡国機業に襲われたんだよ！」
「は？」
重い口振りを一転させて。口を滑らせて。色々と言葉はあるけれど、一夏は事実をするりと吐き出してしまった。
その事実に穂次は驚きを隠すこともせず、眉を寄せ、確かめる様に口を開いた。
「マジか」
「ああ……あと、ソイツの顔が千冬姉にそっくりで、自分の事を『織斑マドカ』だって」
「……おーけい、ちょいと待て。ちょっと落ち着こうぜ、相棒」

顔を少し青くして昨晩の出来事を言う一夏に対して穂次はいつもの様にへらへらとした笑いを浮かべた。

真剣に聞いていない訳ではない、という事は一夏も理解しているので彼の言うとおりにお茶を飲み込み頭を冷静にする。

「あー、それで件の織斑マドカ氏が亡国機業だって証明でもあるのか？」

「サイレント・ゼフィルスの搭乗者みたいだ」

「みたいって……」

「本人が言ってたんだよ」

「……それはソレで。まあサイレント・ゼフィルス、織斑マドカ。あんまり名前を出すと情報規制に引っかかるかもだから、通称としてMとしよう」

「マドカだからか」

「マゾという可能性も込めて」

「いや、相対したけどスゴイSっぽかったぞ」

「Sも一皮向けばMになるさ」

たぶん、と後で付け足した穂次に一夏は肩を落とした。へらへらと笑いながら穂次は言葉を続ける。

「亡国機業が、つーより今回は件のM氏がお前を単独で狙ったんじゃね」

「……根拠でもあるのか？」
「計画性が無いんだよ。文化祭の時は剥離剤（リムーバー）を準備してたし、キャノンボール・ファストの時はわざわざバリアも解除した。ソコらを考えると、亡国機業ってのは結構計画を練ってから行動する組織なんだろ」
「つまり？」
「亡国機業が昨日にお前を狙ってるんならキャノンボール・ファストの襲撃は無かったって事。
　いや、織斑先生を離すって事を考えると襲撃はあったかな。まあドチラにせよ、Mがお前を狙ったのは単独である可能性が高い」
「穂次、もしかして眠いのか？」
「お前さ、俺が久しぶりに真面目に喋ってて疑問に感じるのはイイけど、確かめる事じゃねーよ」
　確かにちょっと眠いけど、と付け足した穂次はアクビを手で隠す。
　穂次が真面目に喋っている時は眠い時か疲れている時というのは一夏は知っていたから思わず言ってしまった。あまり穂次に無理はしてほしくない、という気持ちは一夏にも当然ある。
　そんな一夏の気持ちも手を振って気にするな、と表してから穂次は言葉を続ける。

「単独犯として考えれば、Mがお前に名乗った理由もなんとなく理由が出来るし。名乗ったなら尚更単独犯の可能性が高くなる。組織自体が透明なのに、Mだけが不透明になるからな」
「でも、じゃあなんでMは」
「ソレは知らん。こういう時は恨みとかの線が強いけど……まあ一夏だし女の子に恨みはいっぱい買ってるだろう」
「ねぇよ。なんだよ、その言い草は」
「自分の胸に聞いてみな」
「……そういえば、私はお前だとか言ってたな」
「……」
その言葉に穂次は眉を寄せて、言葉を迷う。
一夏は首を傾げながら穂次を見ている。
「何か気付いたのか？」
「仮の話なら何個か。あんまりお前に言うべきでもねーけど、お前に言わねーと意味も無い」
「……言ってくれ」
「可能性の話だから、ってのはちゃんと頭に入れとけよ」

「わかってるよ」
「……一つ。M氏がお前のクローン、或いは織斑先生のクローンである可能性」
「……っんだよソレ！」
「怒んなよ。可能性の話って言ってんだろ。ラウラさんの時もそうだけど、織斑先生のコピーとかに反応しすぎだ」
「それは……わかってるけど」
「まあ落ち着けよ。確定って訳じゃねーし、お前がどうのって話でもネー。問題はコレが逆だった場合だ」
「逆？」
「――お前がクローンの可能性」
「……は？」
一夏は一瞬、意識が飛びそうになる。否定する。否定する、否定スル。
そんな訳がない。だって、俺は、俺は――。
「落ち着け、相棒。ゆっくりだ、ゆっくり呼吸をしろ」
「――、ハァ、ハァ……スゥ……」
「おーけー、そのまま呼吸は続けろ。大丈夫だ。お前は織斑一夏だ」
「ハァ……ああ、知ってるよ」

「そりゃよかった。まあ俺に言われても皮肉にしか聞こえねーか」
　冷や汗を流しながら深呼吸を続ける一夏に対して穂次はなるべくいつもの調子でへらへらと笑う。
　少し冷めたお茶を飲み込んで、一夏は大きく息を吐き出す。そして穂次を見て、話を促す。
「大丈夫か？」
「可能性の話、って穂次が言ったんだろ？　それに、俺は知らなくちゃいけないだろ」
「……だな。おーけー、主人公（ヒーロー）。馬鹿な俺が考えた考察でも聞いて鼻で笑い飛ばしてくれ」
「任せろ」
「……まず、証明として、一夏がＩＳを動かせる理由だ。男であり――人である一夏がどうしてＩＳを動かせるのか。Ｍ氏のクローンであるから、女性のナニカに反応するＩＳがお前の中にあるナニカに反応した。
　Ｍ氏が言う通り、お前が彼女なら。お前は彼女の場所を奪い、今そこに居ることになる。恨まれてもおかしくはない。単独襲撃の理由にもなる」
「……でも、それでも、俺は今ココにいる」
「ああ、そうだ。お前が織斑一夏である証明だ。クローンでも、何でもお前はお前だ。頼

むぜ、相棒」
「ハッ、任せてくれ、親友。俺は潰れないさ」
穂次の言葉通りに、ちゃんと鼻で笑ってみせた一夏に穂次はどこか安心したように息を吐き出す。
そしてにやりとイタズラをするように口角をあげる。
「相棒が強くて何よりだ。まあ俺が言った考察全部とある一言で吹き飛ぶんだぜ」
「？」
「篠ノ之博士が原因だ」
「ぷっあはっはっははは、確かに。束さんが原因なら、仕方ねぇな」
「まあ実際は分かんネーな。可能性の話さ」
「ああ、わかってるよ。ありがとう、ちょっとすっきりしたよ」
「お礼は噂のマッサージにしてくれ」
「任せてくれ」
ニッと二人で笑い合い、既に中身の入っていない湯呑みをコツリと合わせて乾杯をしてみせた。

フルアーマーをパージしよう

「……」

無言で半透明のキーボードを指で叩いている簪を見ながら穂次は口をへの字にして頬を指で掻いた。

『私、不機嫌です』という看板がドコかで安売りでもされているのかと勘違いをしてから、意を決して、穂次は言葉を吐き出す。

「あー、ボス？」

「……何？」

この時点で「うわー、ツッコミも飛んでこないし、視線も合わせてくれない。プランD、所謂ピンチですね」と若干の後悔をしながらも穂次は言葉を続ける。

「どーしてそんなに機嫌が悪いんですかね？」

「……別に」

「じゃあいいや」

「……」

「別に何もないなら睨むのはヤメテクダサイ、ボス」

「……ボスじゃない」
不機嫌看板を下げて、少しだけ拗ねていつものやり取りをしてあげる。
チラリと穂次を見てみればへらへらといつもの様に笑いを浮かべており、簪は余計にむすっとしてしまう。
「それで、どーしたんスか？　落ち込む事はあっても不満漏らす様な簪さんじゃねーでしょ」
「……別に、なんでもない」
「ほらほら、言っちゃいなよユー」
「……鬱陶しい」
「まあまあ。ガーターベルトでも付けて踏んでくれるならスグにでもやめるから」
「……」
「ジト目もグーッスね！」
簪は目の前の変態をどうしてやろうかと考えた。とりあえず手近にあったスパナを投げてみても変態は軽々と掴みやがるので、ドライバーも投げておこう。
回転もせずに一直線に投げられたドライバーを掴んで、ワザとらしく「ふぃー」と息を吐き出した穂次を改めて不満を混ぜてジト目で睨む。
「ぐえっへっへっへ」

そんなワザとらしい下卑た笑いを漏らした穂次に溜め息を吐き出してから簪は作業へと意識を戻す。こういう時は無視に限るという事は簪は体験しているので意識の切り替えはアッサリと出来た。

作業をしながら、チラリと穂次を見れば三角座りで床に〝の〟の字を書いている。

「どーせ俺なんてー、俺なんてー」と少し大きめの声で言っているあたりコチラも簪の性格を大凡把握していると言ってもいい。

ともあれ、ここまでが二人にとってのテンプレート染みたやり取りであり、簪が溜め息を吐き出して作業を中断する事で定型動作の終了が告げられる。

「んで、どーしたのさ。マジで」

「……織斑くんが、私の所に来た」

「あー……もしかして、タッグ戦のお誘い？」

簪はコクリと頷いて視線を下に向ける。

今朝から女の子の誘いを断っている一夏を思い出して穂次は少しだけ疑問を浮かべて、なんとなくで当たりを付ける。その答えを言うか迷い、結局自分の中に留める事を選んだ。

「それで、スグに断ったと」

穂次の言葉に簪はもう一度頷いた。

なんとなく、その様子を思い浮かべて穂次は「あー……」と納得したように声を出した。どうせ一夏の事だから、という冠を着けた想像であったけれど、大凡現実と離れている訳でもないだろう。

「まあ簪さんが悪いって訳じゃねーし、あんまり気にする事ねーよ」

「……うん」

とは言ったけれど、簪が断った事を気にする事はなんとなく穂次には理解出来る。別にソレを払拭する為でも無いが、穂次は少しだけ乱暴にぐしゃぐしゃと簪の頭を撫でた。

「コイツもそろそろ完成……つーか、調整レベルになるし。簪さんの好きにすりゃぁいいよ」

「……ありがと」

「いえいえ。まあタッグマッチには間に合うだろうさ」

「うん……穂次くんは、誰と？」

「さっぱり誘ってもらってないんだよな……これでも今日はいっぱい女の子と喋ったんだぜ……」

「あ……ごめん」

「謝られると余計に泣きたくなるんですが……」

何かを察したのか穂次を可哀想なモノを見るように見た簪。可哀想なモノは肩を落として落ち込んでみせてからへらへらといつもの様に笑う。
「ま、一夏とちゃんと喋るのもいいと思うぜ。アレでイイ奴だし」
「……知ってる……穂次くん」
「ん？」
「も、もし……よかったら、私と組も？」
迷いに迷って吐き出せた言葉は随分と不安だったのか、簪は穂次の制服の裾を掴んで、身長の都合上、上目遣いで彼の顔を見つめた。
パチクリと穂次は瞼を動かした。それはもう驚いた。いや、目の前の女の子が可愛いとか、なんかエロかったとか、そういう事もあったけど。
「えーっと、俺？　自慢じゃないけど、不甲斐なさとか頼りなさがトップの俺なんスけど」
「知ってる」
「それはソレで悲しいなぁ……」
「……手伝って、くれてる。それに……」
と言葉をそこで止めてしまう。穂次はキョトンとした顔で簪を見つめていて、簪はその視線から逃げる様に視線を逸らす。

頭の中で色々な言葉が巡り、やっぱり心のドコかで決心もつかずに選んだ言葉が詰まり、別の簡単な言葉が口から溢れた。

「その……可哀想だから」

「がはっ！」

穂次の心に直撃した少女の口撃。簡単な理由が見事なまでに穂次へと命中した。会心の一撃だった。

自分の胸を抑えて、覚束ない足取りで壁へと凭れた穂次は恨めしげに簪を睨んだ。尤も、不甲斐なさや頼りなさを自負している穂次の睨みはそこまで怖くない。

「ぐっ、やるな……簪さん！　だが、俺を仕留めても第二、第三の刺客が簪さんを狙うだろう！」

「ほ、ほんと!?」

「どうしてそんなに嬉しそうなんですかね……いや、まあイイけどさ」

簪は相変わらず夢見る少女なのだ。お姫様に憧れる少女ではなくて、ヒーローを憧れる少女なのだが。

ヤラレ役の定型文を吐き出した穂次は簪をジトリと見つめて溜め息を吐いた。先ほどの精神ダメージなど無かったかの様にケロリと――ヘラリと笑って肩を竦めている。

「ま、簪さんが俺とペアになるのは別にいいッスけど、それなら制作に本腰入れないと

な」
「うん……！」
「よし、んじゃもっと武装と装甲を増やそう。そんでもって、遅さをカバーする為にバーニアも増やして……ええい！　いっそフルアーマー化して、ダメージ喰らえばパージする仕様にしようぜ！　パージしたらほぼ裸の簪さんが出てくるんだ……！　俺に任せろーバリバリ！」
「やめて!!」
　涙目で目をグルグルさせた簪が穂次の頭をスパナで殴ろうとするのにそれ程時間は掛からなかった。
　ビュンビュンと投げられる工具達をヒョイヒョイと回避して穂次はへらへらと笑いを浮かべて扉から出て行く。
「んじゃ、まあ、頑張ろうぜ、ボス」
「ボスじゃない！　もう!!」
　ぷんすかと怒る簪をへらりと見送って穂次は扉を閉める。閉めてから、ふぅ、と息を吐き出して顔を横に向ける。
「それで、簪さんを落とし損ねた相棒よ。何か言うことは？」
「落とし損ねた、とか言うな」

「そりゃ、失敬」
　へらりと笑みを浮かべた穂次が窓を背にして一夏と対面する。一夏は難しそうな顔をして穂次を見て、肩を落とした。
「お前が簪さんとペアになるのか？」
「一応は、な。まあ簪さんが願ってるし。俺はソレに従うさ」
「……楯無さんになんて言われるんだか」

「はっはっ、やっぱり更識会長の言いつけかよ」
　へらへらと笑っている穂次に一夏はゾクリとしてしまう。目が笑っていない。左目が黒に染まり黄色の瞳が一夏を貫く。
「あのさ、俺が言えたことじゃねーけど。お前、結構最悪な事をしようとしてるのわかってるよな？
　別に簪さんのＩＳが未完成なのがお前の責任とは言わねー。別にお前が悪いとは言わねーよ。
　だがな、更識会長の命令だからってのは気に食わねぇ。
　変な義務感で動いてるってのも気に入らない」
「……別に、そういうのじゃねぇよ」

一夏は眉間を寄せて穂次の言葉に否定を入れる。確かに義務感はあったのは認める。けれど、それでも選択は出来た。そして一夏は簪をペアにする事を選択した。尤も断られたが。

穂次は溜め息を吐き出して瞼を閉じる。左目を覆うように手を顔に当てて、拭う様に手を退ける。そこにはいつも通りの茶色の瞳がある。

何度か調子を確かめる様に瞬きをした穂次は窓から背を離す。

「ならイイけど。

簪さんとペアになりたいなら、それでもいいさ。頑張ってくれ、と一応言っとくわ」

「あ、ああ……」

「でも変な義務感とか要らないぞ。普通でいいんだよ、普通で」

いつもの様にへらへらと笑って手をヒラヒラと振った穂次はのんびりと廊下を歩く。

一夏は息を吐き出して、乾いた喉を無理やり動かして唾液を飲み込んだ。

あそこまで感情を露わにする穂次、というのを一夏は見たことが無かった。自意識が薄いと言われている彼だからこそ、無かったと言えるのだが。

そんな穂次が完全に怒りを露わにしていた。感情に触発されたように左目が変化した事が脳裏に強く残り、一夏は廊下を歩く穂次の背中を少しだけ長く見つめた。

「ふーん、そう……」

一夏の部屋で更識楯無は非常に魅惑的な足を組んでベッドに座っていた。その顔は真剣その物であるが、Yシャツと下着だけの姿であるのが実に素晴ら――残念である。

事のあらましを一夏から聞いた楯無は思案顔で口元を手で隠している。一夏はそんな楯無をなるべく見ないように、視線を床へと向けている。

「穂次くんが、そんな事をね……」

「その、穂次がペアなら大丈夫じゃないんですか？」

「ダメよ！　あんなヘタレ……簪ちゃんに合うわけないじゃない！」

「えぇ……」

楯無の言葉は尤もであるが、それでもその後の言葉に一夏は困惑したのも無理は無いだろう。一夏の主観で言うならば、穂次はヘタレであるけれど頼りになる男なのだ。

「別に個人的な理由で穂次くんと簪ちゃんのペアを否定している訳じゃないの」

「嘘だろ」

　咄嗟に出た言葉は敬語がさっぱり抜けていたいたが、一夏は気にしなかった。親友からシスコン呼ばわりされる自分であるが、コレほど重症ではないと親友に伝えたい。親友こと五反田少年は「似たり寄ったり」と言うだろうが、今は居ないのだ。
「以前も言ったけれど、穂次くんを怪しんでいるのは本当よ。だから簪ちゃんの側にあんまり置いておきたくはないの」
「建前は置いといて、本音はどうなんです？」
「あんなエロい男を簪ちゃんの隣に置いておける訳ないじゃない！」
「……」
「いえ、私情は一切ないのよ？」
「アッハイ、ソウデスネ」
　一夏は追求するのをやめた。きっと追求しても軽々とあしらわれるか、長々と妹自慢が始まるのだ。
「というか、あの簪ちゃんが穂次くんを隣に置いてる事が未だに疑問なのよ」
「そうなんですか？」
「その……なんというか、簪ちゃんって……ネガティブというか、ええと……暗いのよ」
「迷ったわりにバッサリ言いましたね……」
「いえ、その……と、とにかく。非生産的な行動を極力嫌う様な子なのよ。ソレなのに穂

次くんといるから」
「……まあ穂次だから、じゃないんですか？」
「あーはいはい。一夏くんが穂次くんの事を愛してるのはわかったから別のちゃんとした理由を言ってくれるかしら？」
「なんでそうなるんですか!?」
一夏はしっかりと怒鳴ってみせたが楯無はどこ吹く風と扇を開いてニンマリした口を隠している。やけに達筆な愛の文字が一夏を煽る。
そんな煽りにも負けずに一夏は溜め息を吐き出して、言われた理由を探す。
「なんというか、穂次と居ると楽なんですよ」
「楽、ねぇ……まあいいわ。ドチラにしても、私は穂次くんなんて認めませんからね！」
「ソレを俺に言われても困るんですけど」
「だって……だって簪ちゃんには『お姉ちゃん大っ嫌い』って……うっ」
「楯無さん、簪さんに何したんですか……」
「私は何もしてないもん！　どうせ穂次くんが悪いんだ！」
うわーん、とワザとらしく声を上げて泣いたフリをする楯無に一夏は困ったように頬を指で掻く。
ソレを穂次の責任というのは違うんじゃなかろうか。と一夏は思ったけれど口には

出さなかった。
「いいもん、いいもん！　二人が組むって言うなら、私だって考えがあるもん！」
「……なんだろう、凄い嫌な予感がする。スイマセン、楯無さん。ちょっと用事を思い出しました」
「安心して、一夏くん！　私と君が組めば優勝間違いなしよ！」
「ですよね……ハァ」
一夏は肩を盛大に落として大きく溜め息を吐き出した。
『打倒ヘタレ！』と大きく書かれた扇の端にデフォルメされた穂次っぽい何かがランスに貫かれて描かれている様な気がしたが、一夏はソレを見ないようにした。

君はいい道化だったよ

「はぁ……あのさ、穂次」
「なんだよ、相棒」
「お前が俺に対して怒ったのはわかる。だから俺は簪さんに対してもう口を出さない事を簪さんにも言ったし、穂次に怒られた事も言った。謝りもした」
「そうなのか？」
「……う、うん」
　第二整備室でいつもの様に自身のＩＳ――打鉄弐式の調整をしながらも簪は穂次の問いかけに頷いた。相変わらず穂次はへらへらと笑っているし、その穂次の隣にいる一夏は不満顔だ。
「で？　ソレがどうかしたのか？」
「なんで俺がココにいるのか、もう一度聞きたい」
「そりゃぁ、簪さんのＩＳ武装に荷電粒子砲があって丁度いいサンプルがお前だったからだ」
「お前さ、俺に怒ったよな？　変な責任感とか無しとか、色々言ってたよな？」

「ああ！」
「じゃあどうして俺の手を借りる事になってるんだよ！　俺だって訓練とかで忙しいんだぞ！」
「まあまあ。モデルの仕事をする程度には暇だろ？　データもらうだけだから。ほら、簪さんもこんなにお願いしてるし」
「べ、別に、大丈夫……」
「な？」
「明らかにデータ貰うのを嫌がってんだけど……」
「お前はこんなに誠心誠意頼んでる簪さんの気持ちがわからないのか！」
「あぅあぅ」
「凄い真っ赤になってお前を止めようとしてるのはよく分かるよ、ア穂次」
「大丈夫大丈夫。俺が適当に改竄（かいざん）して白式のデータって事は分からないようにしとくから！」
　任せろ！　と言わんばかりにドヤ顔でサムズアップをした穂次の隣で涙目をグルグルとさせながら「あぅあぅ」と穂次を止めようと袖を握りしめている。
　そんなチグハグな二人を見ながら溜め息を吐き出して一夏は右腕の待機状態でガントレットに成っている白式を軽く持ち上げる。

「まあ別に俺はイイけどさ」
「やったぜ。んじゃ、失礼」
穂次は自身の左薬指収まる村雨から伸びるコードを白式へと繋げて左瞼を閉じる。
その様子を一夏は訝しげに睨み、少しの時間を掛けてからようやく疑問を口にした。
「というか、前もだけど。お前左目どうかしたのか？」
「ん？　村雨との適合率上げたら左目の視力がぶっ飛んだ」
「……は？」
「……え？」
「だから、ホレ」
閉じた瞼を上げればソコには黒い目玉に黄色の瞳が浮かんでいる。
あっかんべーの様に左目を指差してへらへらとする穂次に対して二人は唖然としてしまう。特に簪はさっぱりと理解出来ていない。
ようやく頭を抱える程度に思考を戻せた一夏が言い淀む。
「つまり……えー、っと？　穂次の左目はラウラみたいにハイパーセンサーでも起動出来るって事か？」
「そんな高性能じゃねぇよ。村雨のデバイス替わりになってるだけで、実用性はない！」
「お前バカだろ！」

「ああ！」

　へらへらと笑いながら一夏へと応えた穂次。当然事態を理解出来ていない簪は頭に疑問を浮かべながら一夏の焦り具合を見て、悪い事であるのは理解出来た。

「ど、どういう事……？」

「んー……。俺の中に封印された特殊能力が作用して能力開放中は左目が変化してしまうのだッ!!」

「ほんとにっ!?」

「ああ、なんだろ。俺の中にあった簪さんの印象が凄い勢いで崩れていく」

「簪さんはずっとこんな感じだゾっ！」

「あと、穂次も変なキメポーズするな。なんというか、心にクる」

「男なら一回は通る道だから仕方ないね……」

　どうしてか過去を思い出して一夏は胸を抑えて、穂次はドコか遠い所を見つめている。簪はキラキラとした目で穂次を見つめている。

「まあ冗談は置いといて」

「冗……だん……」

「なーんで簪さんはそんなに落ち込んでるんスかね……」

「それで、大丈夫なのか？」

「別に問題ねーよ。ただちに影響はない」
「ならいいけど。何かあったら言えよ」
「安心しな。お前にだけは絶対言わねーよ」
へらりと笑った穂次に対して一夏はなんとなく納得してしまい、溜め息を吐き出す。
白式からコードを外して、村雨からも外した穂次の左目はいつもの様に戻っている。
「というか、なんで今変わってたんだ？」
「ん？　リアルタイムでデータ確認するのに楽だからな」
「こう、左側の視界がマトリックスみたいな感じになる」と付け加えた穂次の言葉に落ち込んでいた簪がまた目を輝かせている。一夏はそんな簪を眺めながら「楯無さんが言ってた感じじゃないなぁ」とボンヤリと思う。
妹と弟の差異はあれど、偉大なる姉を持っている同類として、なんとなく簪の気持ちも分かるような気がする。と、そこまで考えた所で一夏は頭を振る。簪さんは自分ではないし、自分は簪さんではないのだ。
「つー訳で協力ご苦労、織斑一夏くん。君はいい道化だったよ」
「俺が倒されるみたいな言い方するな。普通に感謝してくれ」
「だ、騙して悪いが、コッチも仕事、でね？」
「なんで簪さんもノるんだよ！」

「つーか、訓練ログまで見たけど、スラスターの数値オカシくなってたぞ……」
「マジか……操縦してる時は普通なんだけどな」
「お前の変な癖を白式さんがフォローしてるんだろ……その所為でエネルギー効率落ちてんぞ。あとは――」
　ツラツラと語られる調整不足の部分。一夏は瞼をパチクリさせながら穂次の話を頭に叩き込んでいく。
「――ぐらいだな。白式さんに頼りっぱなしって事ッスね！」
「うへぇ……というか、データ見ただけでよくそこまで分かるよな」
「お前のデータ一番取ってるのは俺だからな。外部データばっかりで内部データ見たのは初めてだから多少間違いはあるだろうけど、たぶん合ってる筈だ。自分で確認して直せ」
「了解したよ。頼れる相棒だな、まったく」
「……穂次、くん」
「ん？　どうしたんだ簪さん。ちなみに言うが俺はビームは撃てないぞ！」
「期待してない」
「というか、なんでビーム？」
「そこまで出来るなら……システムも手伝って」

簪の申し出に穂次は目をパチクリと動かして驚きを隠す様子もない。そんな穂次に対して簪は首を傾げた。

ちょっとの間があった後、穂次はへらへらといつもの様に笑いを浮かべて、簪の髪をクシャクシャにするように頭を撫でてニッコリと笑う。

「断る！」

「っ!?」

「嘘だよボス。ご命令には従いますよーへっへっへっ」

「――！　――！」

へらへら笑う穂次に対して顔を少し赤くして声にならない声を唸りながらスパナを振り回す簪。

なんとなく二人の関係性が分かった一夏はやっぱり溜め息を吐き出して、自分にスパナが当たらないように避難を始めた。

「んじゃま、武装は置いといて、稼働データッスねー」

「う、うん……」
　ヘラリと笑った穂次は既に村雨を纏っており、ふわりと軽く宙に浮いている。どういう訳か逆さだけれど。
　そんな穂次に対面している簪は穂次の熱い視線に少しばかり引き気味である。
「ど……どうしたの？」
「いや。なんか下から見上げるとなかなかおっぱいあるんだなーって」
「っ……！　――！」
「ハッハッハッ、捕まえてごらんなさーい！」
　気色の悪い声色で怒る簪から逃げる様に空を蹴り飛ばした穂次。蹴飛ばしても肉眼で見える範囲で留まっているあたり、穂次らしいといえばらしいのだが。
　そんな穂次の意図を理解しても、ちょっぴりは恥ずかしさで怒りながらＩＳを起動する。
　視界の端にコンソールを開きながら数値に目を通していく。何も問題はない。大丈夫、大丈夫。
　自分に少しだけ言い聞かせながら簪は偏向重力カタパルトに両足をセットして、一気に加速した。
　広い空。そんな空にポツンと黒い影がある。影は大きな盾を左腕に装着していた。

心を上向きの感情で満たしてから、簪は数値に目を通していく。加速による機体制御、そしてハイパーセンサーとの接続及び連動。

同時にハイパーセンサーが穂次を捉えて、ソレに気付いたのか、穂次がへらへらと笑みを浮かべていた。いつも通りだった。

『おーけー、簪さん。問題なさそうツスね』

「……まだ」

『おーけーおーけー。一応、俺の方でもモニタリングしてるから好きな様にしてくれ。何かあってもフォローするさ』

「……うん」

『任せな！　ボス！』

「ボスじゃない……」

そんなやり取りが秘匿通信で行われ、捻れた中央タワーを辿るようにゆっくりと簪は飛行を続ける。

その横をゆったりと浮遊している穂次は簪の集中を乱さない為か、ソレ以降の通信はしておらず、打鉄弐式のシステムが変化していく様をボンヤリと眺めている。

緩やかにタワーの頂上へと到着して、簪はホッと息を吐き出した。そんな簪に穂次はニコニコと笑いながら拍手をしている。拍手もガシャンガシャンと装甲を鳴らしながら

らである。
「お疲れ。リアルタイムでシステム構築とかスゲーッスわ……」
「そんな事……ない……お姉ちゃんなら」
「あの人、スペック高いけど変な所でポンコツだからなー……」
二人の頭に更識楯無が思い浮かぶ。
片方は完璧な女性である。ミスパーフェクトと言える。
もう片方も完璧な女性である。どうしてか『簪ちゃんらぶ』とか書かれたタスキをしているが……まあ大凡の行動は完璧だった。
どちらがドチラと言う不毛な事は言わないが、両方が両方自分の言葉に納得する。
「んじゃ、戻りは速度を出しながら行きますか」
「うん……」
お先にどーぞ、とヘラリと笑った穂次に従って簪が加速を始める。
その後ろに続く穂次をハイパーセンサーで捉えながら、システムが出来て余裕を持った簪がボンヤリと思考を始める。
どうして彼は左目を犠牲にしたのだろうか。
彼のＩＳ――村雨の事に関しては聞いた。

「一応、機密だから他言無用で」と付け加えられた説明だったが、簪はちゃんとそこで「それは聞いて大丈夫なの?」と聞いたし、穂次自身が問題ないと言い切ったので恐らく大丈夫なのだろう。たぶん。

適合率を上げる為に犠牲にしたというのなら、どうして適合率を上げたのだろうか。その事を聞けば彼は情けない笑みを浮かべて「ソレは秘密」と言うのだ。

彼がわからない。フザケている彼は知っている。だからこそ、自分の目を犠牲にする意味がまったくわからなかった。

そんな思考に少し浸った簪の意識を正しく現実に戻したのは打鉄弐式であった。尤も、異常を知らせるエラーを吐き出す事によってであったが。

右脚部ブースターが暴発した。

爆発の影響で身体が回転しながらタワーへと流されていく中、簪は慌てはしたがスグに機体制御に意識を割いた。そんな相棒にエラーを返す打鉄弐式。

エラー、エラー、エラー、エラー。

数々のエラーが浮かびあがり、そしてシステムダウンが起こる。抵抗など出来ないまま、簪はタワーへとぶつかりそうになり、瞼を強く閉じた。

そして衝撃では無くて、強く引っ張られる感触を得て瞼を上げる。

「あー、簪さん。ＩＳ解除してくれ。なーんか、制御がオカシイ事なってるわ」
「う、うん……」
「ちょっと速度出てっけど、安心してくれ」
どこか頼り無さそうな声で簪を後ろから抱えた穂次が喋る。頼り無さそうな言葉であったけれど、最後に付け足された言葉だけはキッパリと言い切られた。
そんな穂次に従い、簪はＩＳを解除する。同時に穂次の腕がしっかりと身体へと回されて抱き込まれる。安定を優先したのか、腕部装甲は解除されて生身の腕がしっかりと回されていた。
「ん、よし。しっかし、随分エラー出たッスねー」
「うっ……うん」
「つーか、エラー出て当然だから落ち込まなくていいっしょ。一番問題なのはエラー吐き出さないエラーだから」
大丈夫大丈夫と頭を軽く叩かれて簪は顔を赤くしてしまう。なんせ男に抱かれて撫でられているのだ。その男がどれほどのヘタレであろうと、自分を助けてくれた存在である。ヘタレだけど。
そんな簪の事など知らずに穂次はいつも通りの口調で「んじゃ降りるからなー」と言葉に出してゆったりと下降をする。

そこでようやく簪は気付いた。どうしてコイツの手は自分の胸を触っているのだろうか、と。

回した手が奇跡的に胸に当たっているだけだから、と頭の中で必死に彼に対しての弁明を繰り返している簪に対して、顔が見られないのをいい事に穂次はムニムニとおっぱいの感触を楽しんでいる。

事故だから事故。仕方ない仕方ないと言い訳を繰り返して、ほんのりと膨らみのある簪のおっぱいを押したりして楽しむ。腕に感じる鼓動がスゴく大きいのはきっと高さのせいだな！　と自分に言い訳をするのも当然忘れない。

果たしてゆったりと下降をしているのは誰のためなのか。きっと簪の為だろう。そうに決まってる。事故だから仕方ないのである。

とにかく、ゆったりと下降をして地面に到着した二人。すんなりと拘束が解かれて顔を真っ赤にした簪は決して穂次の方を見ずに、とりあえず心をどうにか落ち着けて、まだ赤い顔のまま穂次に振り返った。

キリッとした表情で顔を青くしている穂次がそこには居た。

「あ、あー、えっと、えぇ……ってですね……」

「どうかしましたの？　穂次さん。そんなに顔を青くして」

「ホントだね。どうしたのかな？　穂次」
　そんな二人の前には金色の髪をした美少女が二人。表情は笑顔だった。笑顔の筈である。笑顔だ。間違いない、笑顔である。
　そんなニッコリと笑った二人に呼ばれた穂次は冷や汗をダラダラと流している。両手を高々と上げて一歩後ずさる。
「ま、待ってください。コレは、えっと、その違うんだ、そう、違うんですよ。セシリア、シャルロット」
「何がデスの？　わたくし、何も言ッテませんワよ？」
「そうダね。何ヲ弁明しテるのカなー？　私気にナるなー？」
「ひぃっ」
　パチリと開いた目は光の灯らない瞳であった。ドコか棒読みな口調ではあるが、笑顔は決して崩れていない。怯えた様に声を出した簪は何も悪くはない。怯えて穂次の背中に隠れてしまったのは悪手であったけれど。
　美少女二人の笑顔がよりハッキリとする。その笑顔がスッと消えて、蔑む様な視線が穂次を見下す。
「何か弁明は？」
「俺が悪いです全部俺の所為デス許してください何でもしますから」

「えーっと、更識さんだっけ？　ちょっと穂次を返してもらうね」

簪は首を激しく上下した。涙目である。

簪に対してはニッコリとしっかりと笑顔を浮かべていたシャルロットであるが、簪は見てしまった。その笑顔が穂次を見た瞬間に消えてしまったことを。いいや、そんなコトはきっとない。簪は頭からその表情を消した。

二人に挟まれて連れて行かれる穂次を眺めながら簪は彼の無事を祈った。頭の中では仔牛を売り飛ばす童謡が鳴り響いていた。

仮面の笑顔

更識簪はシャワーを浴びながら彼の事を考えていた。
自分を助けてくれた彼、夏野穂次。
変態で、ちょっと怪しい所もあるけれど、頼られると断れず、信じれる人。……あとは、ちょっとだけ、ヘタレな所もある。
へらへらと笑っている癖に、色んな事を考えていて、自分が落ち込んでいればフザケて笑わせようとする。
上手く出来た時は一緒になって喜んでくれるし、システムエラーが大量に起きた時は一緒にげんなりしながらも手伝ってくれる。
いつか彼は「ヒーローにはなれない」と笑って言ったけれど、先日私を助けてくれた時はきっと彼は私の中でヒーローだった。
故意的にかはわからないけれど胸を触られたり、その後に真っ青になったいつもの彼を見たけれど、やっぱり彼は私の中ではヒーローだ。
だから、私は彼に憧れを抱いている。その憧れが強くなって、心の中を占領している。
へらへら笑い続けている彼。

私を助けてくれた彼。
どちらも彼である。
きっと左目も誰かを助けた結果なのかもしれない。もしもそうならば、きっと彼は本当のヒーローなのだ。

そう、ヒーローなのだ。
だから――、

怖くて仕方がない。
恐ろしくて仕方がない。
ヒーローなんてモノは普通の人間がなれるモノではない。憧れている自分だからこそ言える。ヒーローは成れないから憧れるのだ。
なりたい、という気持ちはあっても絶対に成れないからこそのヒーローなのだ。
誰かの為に戦うなんて事、人には出来ない。誰かの平和を無償にする為の対価を払い続ける正義の味方は物語の中だけに存在出来る物だ。
だから、怖い。夏野穂次がたまらなく怖い。
私を助けてくれた時に気が付いた。この言いようもない違和感に気付かなければ良

かった。

——けれど私は気付いてしまった。

迫り上がる吐き気。口を開けても何も出ない。何も入っていないお腹が引き攣り、痛くもないのに抱え込んでしまう。

引き攣る喉と不安で押し潰された自分と彼を信じれない弱い自分だけがとても——痛い。

叩きつけてくるシャワーのお湯だけが、物語じゃなくて現実に居ることを教えてくれた。

結局、眠れなかった。

不安で押し潰された日はいつだってそうだった。あの日も、あの日も、あの日も——。

そんな、弱い自分に気付いてしまう一日に新しく追加されただけ。

そんな風に簪は自分に嫌気を催しながら、どうにか通常の感情へと引き戻した。

アクビを一つだけ溢して目の前のディスプレイに注視する。吐き出されたエラーを

解析して、失敗を糧にしていく。何度も繰り返した作業だけれど、同時に姉のように何でも上手くいかない、と自分に言い聞かせているようで少し前までは嫌いな作業だった。

少し前からは……穂次が隣に居たから、その作業も楽しんでいた。そう感じていたのは他ならぬ自分である事は簪は認めている。

そして今日は、不安でいっぱいだ。

彼に会いたくない。そう思ったのは始めてかもしれない。いつの間にか隣に居てへらへら笑っているのが普通になっていたとも言える。

そこでようやく簪は自分が思った以上に彼へと感情を寄せていた事が分かって、自分を責めてしまう。

もしも、彼が人間らしく下心を持って自分に近づいてきたのであれば、その全てが仮初のモノになってしまう。けれど、出来る事ならばそうであって欲しいと願う自分もいる。

「お、簪さん早いっすねー」

いつもの様にへらりとコチラへと寄ってくる彼に簪は反応出来なかった。

「へい、ボス！　無視はいけませんよ！」

「……ボスじゃない」

いつもの様に返してようやく簪はいつもの表情を作る事が出来た。
相変わらずへらへらとしていた彼はいつもの様に少しだけ間を開けた所に座る。間がある、と言ってもお互いに手を伸ばせば届く様な距離だ。
心臓がドクリ、ドクリと脈を打つ。こうしてへらへら笑っている彼を見ていれば余計に彼の異常性に目が行ってしまう。
「き、昨日は……ありが、とう」
乾いた舌が上手く回らず、なんとか彼に感謝を伝える事は出来た。
きっと彼はへらへらと笑って、「おっぱいを揉めたので十分ですヨ！」とか言うのだ。私の知っている彼ならきっとそう言う。
だから――
どうしてアナタはキョトンとしているの？
「ああ、昨日はアレから大変だったんスよ――」
彼の口から聞かされる、セシリア・オルコットとシャルロット・デュノアからの折檻にも似た説教。きっと脚色しているだろうソレが面白おかしく語られていく。
まるで感謝されている事を疑問を無かった事にするように。
「――どうし、て」
「ん？」

「どうして、私を助けたの？」
「？　ほら、人を助けるのって普通じゃん？」
「普通じゃ、ない……普通なんかじゃない！」
立ち上がり、断言してしまう。
驚いている彼なんて無視して、泣きそうになってしまう。落ちた工具達が音を立てて、私の声に反応してか、周りの先輩達がコチラを見ている。
「あー、簪さん？　ちょーっと場所変えようぜ。ほら、な？」
どこか困ったように彼は笑って、私の背中を押していく。
頭に血が昇って、泣きそうになって、彼に怒鳴って。

彼が私を入れた場所は誰もいない静かな部屋だった。電気が点けられて明るくなった部屋には整理された工具達が並んでいる。
「えー、落ち着いて――はないな。どうしようかな、こんなの始めてだし」
彼は困ったように頭を掻いて、少しだけ情けなく笑みを浮かべている。
「えー、どうして助けたか、だっけ？」
簪はコクリと首を動かしてそのまま目線を床へと向ける。先ほど聞こえた答えが幻聴だと、まだ信じている。

「さっきも言ったけど、人を助けるのって普通じゃん？　それに簪さんは可愛いしな！」

はっはっはっ、とまるで冗談のように付け足された笑いが次第に勢いをなくしていく。そしてまた困ったように「あー……」と声が漏れた。

「その……えー、まあアレだ。そう、おっぱいが触りたかったんだよ。いやー、ちっぱい最高ッス!!」

イェイ、と戯けて言った穂次を簪は睨んでしまう。泣きそうな目で睨んだ穂次は眉尻を下げてどうしようもなく情けない顔をしていた。

彼が好きだ。彼が好きだ。彼が好きだ！　穂次くんが好き!!

けれどその感情が同時に逆転する。怖い。ただ只管に彼が怖い。そう思ってしまっている自分が許せない。

「嘘、吐かないで……」

「嘘じゃないッスよ。これでも俺は巨乳派とか言われるけどちっぱいだって大好きです！」

「そうじゃ……ない……」

否定した簪に困ったような顔をして、穂次はようやく息を吐き出す。

諦めたように、息を吐き出して、扉の鍵を締めた。音を立てて締められた鍵に簪はハッとして顔を上げる。

「なあ、簪さん。俺のドコがおかしかった？」
へらへらと笑っていた。
「なあ、簪さん。俺のドコが普通とは違った？」

まるで仮面を被ったように、ソレが彼のいつもの表情だったのに。

「なあ、簪さん。教えてくれよ。直すからさ。簪さんが変だと思った事を教えてくれよ」

一歩、男の足が進んだ。同時に一歩後ろに下がってしまう。
息が浅くなって、怖くて、恐ろしくて。
背中が冷たい。壁が背中に着く。
彼の左目が煌々と黄色に輝いている。ソレを汚すように黒が蠢いてた。
動きを封じるように顔の横に手を置かれ、壁が音を鳴らす。

「なあ、簪さん。パンツの色が何色か教えてくれよ。ほら……ほら！」
「ひっ……」
声を出して驚いた簪は少しだけ彼の言った言葉を考える間を置いて、怖くて閉じた瞼

を恐る恐る開いた。
「はら、パンツの色だけじゃなくてブラの色とかも教えてくれよォ！　ほらぁ!!」
「……」
「お、いつものジト目に戻りましたね！　さっすがボスだぜ！」
へらりと笑った穂次が壁から手を離して、腰が抜けてしまった簪が床にペタンと座ってしまう。
そんな座った簪に情けなく笑って穂次も床に座る。そこにはやはりちょっとだけ間がある。
「えー、まあ言いたい事もあるんだと思うんだけど、とりあえずごめん」
「……いい」
「ただ怖がってる簪さんが見たかったんだ！」
「……よくない」
力説するように拳を握りこんだ穂次にジト目を向ける。どうして彼は〝こう〟なんだろうか。
へらへらと笑っている彼は先程までの仮面のような感じはしない。
「んで、なんとなーく分かった。つーか、忘れてたんだけど。俺って自意識薄いらしいんスよ」

「……は？」
「だから、普通じゃない理由？　俺にとってはコレが普通だからさっぱり分かんねーッスけど」
　へらりと笑って穂次はそう明かす。
　簪の中で乱雑に置かれていたパズルが作られていく。自分を犠牲にする理由。正義の味方の様な行動。ぼんやりと形が出来ていくソレになんとなくではあるが、簪は納得をした。
「つー訳で、人を助ける理由ってのは大体そういうモノだって理解してるからッス。あとは簪さんを助けた理由だっけ？　結構コレは言いたくないんですけど……」
「言って」
「アッハイ……。まあ、ホラ、えーっと……アレだ。俺が簪さんを利用してるから、かな」
「……」
　簪は思わず自分の胸を腕で隠した。残念な事に溢れる事はなかった。だがそれがいい。
「嘘吐くなって言われたから言うけど、実は簪さんに最初近付いたのは一夏の為でもある」
「……ホモ？」

「ホモじゃなァい！　俺は決して男が好きとかそういう人じゃない！　女の子の方が好きだし！　おっぱい好きだし！　ちっぱいも好きだよ！」
「……変態」
「変態いただきましたー。まあ簪さんには悪いけど、あとは更識会長への防衛手段かな」
「？」
「ほら、俺って、スゲーかっこ良くて、こう、色んな人に狙われるジャン？　だから生徒会長である更識会長が風紀の為に俺の命をダナ」
「真面目に言って」
「アッハイ……。前も言ったけど、俺って元スパイな訳ですよ。んで、まあソレが原因で怪しまれてる訳ッス。だから、簪さんは人質代わり、みたいな？」
　ソレを聞いて、どういう訳か簪からは怒りではなくて安堵の息が吐き出された。
　よかった。彼がコレほどまでに人間らしくて、よかった。
「んー、つーか、マジでなんでバレたんスか？」
「え？」
「これでも〝普通〟はずっとしてるからここまで看破されたのって始めてな訳ッスよ。いや、マジで」
「そこは本当……だったんだ」

「パンツの色が見たいってのも本当ですよ！」
「あっそう」
穂次をバッサリと切り捨てた簪は落ち込んでいる彼を見ながら考える。どうして彼の異常に気付いたのか。
ド直球で言うなら、「アナタの事が好きでずっと見てました（ハート」と言えばいいのだが。そんな事は言えない。
更に言えば、彼は自分を利用するために手を貸しているのであって……きっとソレは恋愛感情にはならないのだろう。
顔を少し赤くさせて、正義の味方の為に、更識簪は自分の唇に人差し指を当てる。
「……秘密」
ようやく自然に笑えた簪に穂次は情けなく笑って簪の頭をグシャグシャと撫でる。
きっと、言えば壊れてしまう関係だから。今のままで満足なのだ。憧れは憧れのままで。私の味方である彼はきっと私だけの味方になることはないから。
今日はよく眠れそうだ。

ハイキック・パンティ

「……」

簪さんが目の前の投影されたディスプレイを注視して、瞼をゆっくりと閉じた。息を吐き出して、一つ一つ、丁寧に消していく。

全部が消えて俺達の前に変わらず鎮座しているＩＳ――打鉄弐式。心なしか輝いて見える彼女をぼんやりと眺めながら、俺と簪さんは溜め息を吐き出して、張っていた肩の力を抜いた。

「出来た……」

「そうッスね」

パチクリと俺の方を向いて、まるで現実かどうかを確認するように呟いた簪さんに俺は同意する。

出てきたエラーは消したし、調整も終わった。

完璧である――とは決していない。むしろ不足の方が多いだろう。時間が足りなかった、とは言わない。限界ギリギリが今であり、そして俺達はやり切った。

簪さんは一歩踏み出して、打鉄弐式に触れた。

「大丈夫……かな？」
「さあ、どうだろ」
大丈夫、とは言えなかった。なんせ俺も簪さんも打鉄弐式が不十分である事に気付いているから。けれど、不十分であるが、簪さんはコレを〝完成〟と言った。だからこそ、ココまでだ。
ヘラリと笑った俺の一言に少しだけ不貞腐れた簪さんは溜め息を大きく吐き出した。
「そこは……大丈夫、って言ってくれても……いい」
「俺は嘘が吐けないのさ。それに自信のない事を言い切れないんスよ」
へらへらと笑い浮かべて言ってみれば、むすっとした簪さんはまた打鉄弐式に向いた。
「まあ相手が誰であれ、簪さんは守りぬくさ。簪さんは落ち着いてロックオンすりゃぁいいさ」
「……へぅ」
どうしてか耳が真っ赤になった簪さんが小さく呟いた。
頭を振った簪さんが俺へと振り向く。顔はまだ少しだけ赤い。
「よろしく……穂次くん」
「任せなボス!!」

「ボスじゃない……」
ニヤリと笑った俺に崩した表情の簪さんがいつものように言葉を吐き出した。

簪さんと整備室の前で別れた俺は肩を落とす。
簪さんの前ではなるべく見せないようにしていた疲れた表情を出している事は理解しているが、幸いな事に廊下に人気は全く無い。調整に時間が掛かったから仕方ないか。
それにしても、どうしたモノか。困ったことがある。
別に今しがた目の前に出てきた更識会長ではない。確かにこの人は困ったさんだけど、そんな事で困る意味もない。
「こんばんは、穂次くん」
「こんばんは、更識会長。疲れてるんで、タッグマッチに向けた精神攻撃はやめてもらっていいッスかね?」
「あら、簪ちゃんの相手はして私の相手はしてくれないのかしら?」
「簪さんとアンタを比べる意味はねーでしょ。つーか、マジで何ですかね……」
さっさと帰って寝たいのだ。俺は傷心なのだ。目の前で更識会長が扇を広げている

けれど、何だあの漢字……達筆すぎて分からん。でも、なんかハートマークがあるから、きっと恋人の名前でも書いてあるんだろ。

「というか、傷つきすぎじゃないかしら?」

「何がツスか?」

「セシリアちゃんやシャルロットちゃんに無視されたり苗字で呼ばれたりしただけで」

「ガハッ……」

現実を叩きつけられた。もう俺は生きていけないかもしれない。痛む心臓を抑えて、息を吐き出してしまう。

苗字で呼ばれた瞬間は頭が真っ白になってしまったのだ。ちょっと現実逃避もした。その場でシャルロットに謝られもしたけれど、俺はいつもの調子を装う事でその場から逃げ出した。

いや、簪さんの手助けをしていた事は悪くない筈なんだ。でも、この仕打はヒドいと思うのだ。

決心が揺らぐ様な事は無かったけれど、全力疾走してわからなかった恋愛感情というヤツは痛いほどわかった。結果的に分かりたくはなかった。

「えー、っと、そのゴメン」

「……くっ、精神攻撃をして俺を弱らせるとは」

「案外余裕そうね」
「余裕を装ってるだけッスよ。これでも初恋だと思うんで」
「……あらそう」
　眉間を寄せてそう零した更識会長は少しだけ視線を下げて、スグに俺の方へと向き直した。
「それで、簪さんが帰る所見てたって事は俺に用ッスかね？」
「……アナタなんかに用がある訳ないでしょ？」
「じゃあ打鉄弐式にでも？」
「……アナタには関係ないでしょ」
「関係ない、って言えないんすよね。アレは簪さんが一人で仕上げた機体だから、更識会長が手を出すと意味がないんですよ」
「……はぁ。不完全な機体に乗せて簪ちゃんを危険な目に合わせたくないの」
「わぁー正論だー」
「なら退いて。邪魔よ」
「嫌ッス」
　ニッコリと笑みを浮かべてみれば、更識会長もニコリと笑みを浮かべた。
　瞬間、俺の側頭部に蹴りが迫る。ソレを腕で抑えて踏みとどまる。何故更識会長はス

パッツを履いているのか……。
「退きなさい」
「そんな事よりなんでスパッツ履いてるんですか。こういう時はパンティを見せてくれる流れでしょ？　俺知ってんですよ。漫画で読んだ」
「主人公になって出直して来なさい」
「それは無理な相談ッスね。まあスパッツでも大いに結構。その脚線美が素晴らしいッス！」
「そういう事を言ってるからセシリアちゃん達に怒られるんじゃないのかしら？」
「怒られてる時は好きッスよ。ああ、マゾって訳じゃねーですけど」
「……それで、退いてくれない？」
「嫌ッスよ。それに時間切れみたいッス」
「……ハァ。わかったわ。簪ちゃん何かアレばわかってるわね？」
「わー、怖ーいなー」
へらへら笑ってやればコチラをキツく睨む更識会長。残念ながら、時間切れである。
踵を返して歩き出した更識会長とは逆にコチラに寄ってきた影。
「……」
「やあ簪さん。さっきぶり！」

しょんぼりしてコチラに歩いてきた簪さんは俺の前で止まった。
「……なんで」
「ん？　ああ、更識会長が来た理由？　簪さんが心配だったらしいッスよ」
「……嘘」
「ほう、その心は？」
「あの人は……私に無能で居てほしいから……」
そんな言葉に思わず苦笑して簪さんの頭をグシャグシャと撫でる。なんとも心が繋がらない二人だなー、とボンヤリと考えもする。俺には何も出来ないけど。
「無能で居てほしいなら、わざわざ打鉄弐式の調整に来てないさ」
「……わかってる」
「そっか」
そう、簪さんはきっと気付いているのだ。ただソレが不安で仕方ないのだろう。
グシャグシャと撫でていた手を払われて、簪さんはちょいちょい、と自分の髪を手櫛で直していく。
「んじゃ、あの姉に認めてもらう為に頑張ろうぜ」
「うん……！」
きっと簪さんが認めてもらいたいのは、あの姉なのだろう。俺から見たら残念なお姉

さんなんだけれど、簪さんから見たならばさぞかし素晴らしいお姉ちゃんなんだろう。
「ま、こういう時は決勝とかで当たって戦うんだろ」
「物語の鉄則だね……！」
「ああ！　未調整部分、つーかマルチロックオンはほとんど出来てないからな。そこらも調整しながら戦おうぜ」
「……出来るの？」
「簪さんが頑張ればね。俺は守るだけだから」
へらりと笑う。守るだけ、というのなら問題はないし、後ろに置くであろう簪さんに接近を許す事もないだろう。
「開発部分は全然手伝えなかったからな。戦闘なら任せろーバリバリ」
「……やめて」
反応してしまってハッとしてから外方向いた簪さんに吹き出してしまう。
へらへらと笑っていれば簪さんも釣られてクスクスと笑う。
そうさ。不十分だからこそ、羨むのだ。
完璧だったり、天才だったり、色々を――羨むのだ。

翌日になり、開会式が行われる。俺はクラスの列に並んでいるが、一夏は生徒会の為壇上に居て、隣にいる布仏さんを支えている。

支えた瞬間に近くから舌打ちが聞こえた。きっとおっぱいの大きな人が舌打ちをしたんだろう。一番近いラウラさんからは聞こえなかったけれど、もう一人居る貧乳代表はきっと舌打ちをしたに違いない。

欠伸を零しながら、開会の挨拶をしている更識会長を見つめる。相変わらずの美人である。

どうせあのシスコンポンコツ会長の事だから「簪ちゃんに手なんて出せない……決勝までにどうにかしないと……」とか考えているのだろう。俺には分かる。だからきっとあのポンコツと戦うのは決勝戦になる筈だ。

ついでに一夏の補正的な何かを考えれば前評判が雑魚もいい所である俺と簪さんペアに当たる訳がない。篠ノ之さんと当たるのだろう。

へへっ、今日は勘が冴えてやがる。

さて、もう現実逃避は十分だろう。意識を現実へと戻して発表された対戦表を改めて

見る。

第一試合

織斑一夏＆更識楯無

対

夏野穂次＆更識簪

「あーはいはい知ってた知ってた」

思わずそう呟いた俺を慰めてくれる存在はココには居なかった。

「穂次くん……」

対戦表を見て呆然としていた俺の裾を簪さんが控えめに引っ張った事で俺は改めて現実に戻ってきた。

不安そうな簪さんの顔が俺の目に映る。ココは俺が気の利いたセリフを言わなくてはいけないのだろう。

「ヤバイ、簪さん。スゲーお腹痛い」

「!?」

「もうマジ無理……初戦とか無理だって」

お腹を抑えた俺は悪くない。悪くない筈だ。
「だ、大丈夫……！」
「ん？」
「頑張ったから……勝てる、よ！」
「……生意気めー」
「あぅあぅ」
珍しく勇気の満ち溢れている簪さんの頭を乱暴に撫でて気持ちを切り替える。相変わらず気持ちいい髪をしている。
気持ちを切り替えた俺は前を向く。セシリアが居た。光彩の無くなった瞳で俺を見て、ニッコリ。俺もニッコリ。
セシリアは踵を返した。
「待って！　待ってくれ、セシリア。これは、えーっと、その」
「何かご用でして？　アナタは第四アリーナまで行くのでしょう？　早く行けばいいですわ」
「怒ってませんかね？　俺が何をしたって言うんですか」
「別に何もしていないのではないのではありませんの？　少なくとも夏野さんの中では」

「――――」

息が止まりそうになった。

膝が折れ曲がり、倒れそうになるのを両手でどうにか止める。

そんな俺を一瞥して、少しだけ心配そうにしたセシリアがやはり何も言わずに俺の前から立ち去った。

「え、っと……」

「……んじゃ、行こうか簪さん……俺、この戦いが終わったら……終わったら……うぅっ」

「めんどくさいからヤメテ」

「はいはい。ボスの言うとおりに」

どうして演技だとバレてしまうのか。心にダメージ食らったのは本当だからバレないと思ったけど。

へらりと立ち上がった俺を見て簪さんが訝しげな表情を作る。

「どした?」

「ちょっと……嬉しそう」

「まあな」

むにむにと頬を触って、ニヤつく顔をどうにか収める。いつものヘラリとした笑いを

浮かべて歩き始める。
　そんな俺の隣で一緒に歩きながら疑問を表情に出している簪さん。
「嫉妬ってわかるから、嬉しいんだろうな」
「……惚気？」
「ちょっとだけな」
　照れが溢れて笑みになってしまう。
　俺が言葉を漏らせば、簪さんは少し驚いた顔をして目をパチクリとさせる。どうにも俺は嫉妬すらも理解出来ていない朴念仁と思われていた様だ。誠に遺憾である。そういう役割は一夏が担ってるから、俺は決して朴念仁ではない。
　ソレを言葉にして溜め息と一緒に吐き出そう口を開き――

　轟音と震動がアリーナを支配した。

狂気の浸り方

『全生徒は地下シェルターへ避難！　繰り返す、全生徒は――きゃぁあああああ』

教師の叫びを乗せた緊急放送がブツリと消えた。

カチカチと連続して鳴っている音で鼓膜を揺らしながら簪は赤に染まったピットで穂次の腕を掴んでいた。

辺りを見渡し、浮かんだディスプレイに表示されている『非常事態警報発令』を視界に入れる。

逃げなければ……、と簪は感じて、後退る。掴んでいた穂次はさっぱり動かない。

「ほ、穂次、くん、逃げなきゃ、逃げ」

「そうもいかねーみたいッスよ」

穂次の視線の先を簪は辿る。

そこには黒が在った。女性のようなシルエットを描いた全身装甲。右腕の肘から先が巨大なブレード、左腕は豪腕でゴテゴテとした腕の先に四つの砲口が付いている。

頭部はバイザー型のアイ・ラインがあり、まるで悪魔の様に捻くれた角が両側から前へと突き出されている。

――怖い。

震えてしまう簪は歯を鳴らして穂次の影へと隠れる。対して、穂次は震えずに、ただ一直線にその黒を見つめている。

「簪さん、大丈夫さ。落ち着いて」

そう穏やかな口調で呟いた穂次はいつものようにへらへらと笑っている。まるで目の前の出来事をそれほど気にしていないかのように、いつものように。

左腕を掴んでいる簪の手に自身の手を重ねて、ゆっくりと解いていく。

「昨日も言ったとおり、簪さんには攻撃は通さねーよ。ただ何かあった時のために打鉄弐式は起動してくれ」

「う、うん」

「おーけー、落ち着いた？　俺はまだちょーっとだけテンパってる」

そんな風には見えない、と簪は言わなかった。重ねられた手が僅かに震えていた。だから、彼の感情が伝わった。

――そう勘違いをした。

打鉄弐式を起動した簪をチラリと見た穂次はヘラリとした笑みを簪に見せて前を向

いた。
黒いＩＳ――ゴーレムⅢはバイザー型のアイ・ラインを光らせ、左腕を持ち上げる。
四つの深淵を覗かせて、その奥から光が溢れだし、直線に放たれた。
一瞬だけ、息を飲み込んだ簪の耳にまるで引き攣った喉を震わせて無理に出した様な声が――嗤いが入り込んだ。
目の前に居た穂次がＩＳを纏い、左腕の盾を超高密度圧縮熱線を防ぎきり、盾から黒い粒子が漏れ出した。
「ん、熱線防いでこの程度溜まればあとはどうにでもなるな」
よし、と一言だけ漏らして、穂次は一歩を踏み込んだ。
穂次の急接近に対してゴーレムⅢは簪程の驚きも見せずに淡々とプログラムに従って穂次へと右腕のブレードを振り上げる。
振り下ろされたブレードは大きく金属音を鳴らし、盾で防がれた。
盾の上部から飛び出した棒が宙でクルクルと回転し、穂次は右手でソレを掴み、強く握る。
棒の先端から現れたのは荒々しく黒い粒子を吐き出す刃だった。刀の形など保ってはいない。ただ純然たるエネルギーを相手に叩きつける為だけの――爪。
その爪をそのまま腕を振り下ろし、ゴーレムⅢの左腕を貫く。爪は左腕を貫通し人工

的な地面に突き刺さる。
　自身の左腕が使用不能と判断したゴーレムⅢは体勢を立て直すべく後ろへと移動する。移動と同時に左腕を切断し、爪の拘束を逃れた。
「甘いな」
　――けれど鬼がソレを逃がす訳が無い。
　ゴーレムⅢに併走するように、距離など開けないように同じ速度で、同じタイミングで跳ぶ。
　喜悦を食んだように、奥歯を噛みしめて嗤いを浮かべた男の口から言葉が零れ落ちる。
　同時に左腕に装着されていた大盾が八つに分離する。ゴーレムⅢと男の周りを巡り、その二つが男の両の手へと収まった。
　男の笑みが深くなる。深く、深く。
「ッハハ」
　喉の奥から溢れた嗤いがゴーレムⅢを反応させた。一本になった腕を振るい、ブレードを男へと振り下ろした。やはり男は嗤っている。
　振り下ろしたブレードはしっかりと男を通過した。故に男は斬れていて当然であり、或いは大きくバリアエネルギーを消費した――筈だった。

ドスッ、と鈍い音声がゴーレムⅢの集音システムに入った。そこには幅広のブレードが地面に刺さっていた。

自身の右腕のブレードだ。解析するまでもなく、そうであると断定出来た。ならば、どうして。

カメラを動かし、ゴーレムⅢは男を視界へと入れた。その両の手には黒い刃がある。分離された盾の先から溢れでた、黒い刃がソコにはあった。

右腕のブレードの半ばからは黒い粒子が漂い、切断されてしまったことが判明する。同時に男の身体がブレる。逆手に持った刃がゴーレムⅢの頸に当てられ、その腕は容易く振りぬかれた。

何かがゴーレムⅢから弾き飛ばされ、ソレが後ろにいた簪の前に転がった。

「ひっ……」

明滅するバイザーが光を消して、首元からは残滓のように黒い粒子が漏れている。

「無人機みたいッスね」

「――ッ」

そう零した穂次は盾を戻し、爪を直して、転がった頭を踏む。顔を上げて穂次の顔を見た簪は思わず戦慄してしまう。

左目が煌々と光っていることも、回路図模様が左頬に刻まれていることも、確かに怖

く感じた。けれどそれ以上に嗤っている穂次が怖かった。
　そんな怯えた簪を見て、穂次はキョトンとして「あー……」と情けなく声を出す。
「えー、まあ、そのアレだ。簪さんとの約束は守れそうにないかなーって」
「あ……え」
「だから簪さんは更識会長の所に行きな。俺はどうにか数減らしをするから、そういう事も更識会長に伝えておくれ、おーけー？」
「お、おーけぃ」
　弱々しく簪が肯定したのを確認して穂次はゆっくりと息を吐き出した。
　瞼を閉じればより一層強く感じる事が出来る。
　どう身体を動かせば正しいのか。如何に武器を振るうのが正しいのか。
　力の大きさとその使い方。戦闘技術。
　快楽。痛み。
　苦痛。幸福。

　ボンヤリと穂次が瞼を開けば、簪の姿はすでに遠く離れていた。どうやら言う通りに更識楯無の元へと移動してくれたらしい。
　少しばかりの浮遊感と幸福感、酩酊したような感覚に口から嗤いが溢れる。

「く、くくく、ハハハハハハハハ!!」

軽く踏んでいた頭を潰し、足裏に広がる機器も問答無用で擦り潰す。

力と一緒に多幸感が流れてくる。狂気に浸っている自覚はある。だからこそ、だからこそ——自分を否定する事が出来た。

こうでもしなければ自覚出来ないほどの自分を否定して、否定して、否定して——。

「——ァア……。助けないと——、ハハ、助けないとな」

まるでソレが義務のように、男はふわりと宙へと浮かぶ。そんな彼に追従するように八つに分離した武器達が巡る。

男はユラリと右腕を伸ばす。

巡っていた一つの欠片を強く掴み、その行動に反応したように欠片達が集まり、一つの棒へと形を変える。

穂次がソレを肩で抱えれば、先からは刃が生え、棒は黒い刃の付いた斧へと変化した。

「——さあ、行こうぜ村雨。勝ち星はそこらにあるみたいだ」

虚空を眺めていた穂次の瞳に光が灯る。左目は煌々と輝き、穂次の声に反応するように頬に刻まれた回路図模様が黒く明滅を始めた。

「なんだこいつは！」

天井を突き破り現れたゴーレムⅢにラウラは驚きを隠すことはしなかった。瞬時にＩＳを纏い、咄嗟の出来事に対応出来たのは彼女が軍人であり、織斑千冬の教え子であったからだろう。

天井を突き破った速度を維持したままゴーレムⅢはその巨大な左腕でラウラの頭部を掴みあげる。

ミシミシとラウラの鼓膜に響く嫌な音と視界を染め上げるエラーディスプレイ。舌打ちと同時に行動を起こす。混乱していると言っても彼女は敵対者に行動を起こせない程惰弱ではない。

左腕のプラズマ手刀を展開し、相手の腕を叩き切ろうとした。しかしソレを許す程敵対者も甘くはない。

右腕のブレードがプラズマ手刀を防ぎ、更にラウラの視界がエラーディスプレイに染まっていく。

「ラウラっ！」

頼もしいパートナーであるシャルロットが自身を呼び、そして左腕部シールドから飛び出している六九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》がゴーレムⅢの左腕を捉えた。

鈍い発破音と同時に打ち出された杭が左腕にぶち当たり、ラウラから離れた。同時にラウラはその左手から放たれそうな熱線を視認した。

「シャルロット！」

「ッ、伏せて！」

名前一つで意思を通わせ、シャルロットは物理シールドを三枚自身とラウラの前へと呼び出した。

強固なリヴァイブのシールドを三枚重ねて、尚熱線は僅かに貫きシャルロットの腕を焼いた。

「くうっ……」

シャルロットが痛みに呻き、咄嗟に右腕を庇う。不安そうに見るラウラに対して、シャルロットは気丈に笑顔を作り、冷や汗を流す。

「大丈夫だよ、ちょっとバリアエネルギーが削られただけだから」

痛みはあるが、それでも余波として伝わったモノだけである。ダメージとしては軽微と言ってもいい。

それでもラウラは奥歯を噛みしめて、怒りを叫ぶ。

「貴様ァツァア――あ?」

その怒りは容易く鳴りを潜めた。轟音と一緒に降ってきた黒によって。

人間、自分以上に怒りを感じている人物を見れば幾分も冷静になるものである。そんな事はないだろう、と思っていたラウラだが、今この時からその言葉を信じる事にした。

ゆらりと揺れた黒い装甲を纏う男が地面に突き刺した斧を気だるげに持ち上げて、下敷きにしていたゴーレムⅢの近くに転がっている何かを強く踏み潰した。何度も何度も何度も何度も何度も、徹底して、痕跡すら残さないように、踏み潰した。

「――あー、ホツギ?」

「なんだいラウラさん。あとにしてくれるかな?」

ブチ切れていらっしゃる。

ラウラは口を噤んで、どういう訳か織斑千冬を幻視した後、ガタガタと震えてシャルロットの影に隠れた。一体彼女の過去に何があったのか。ソレは鬼しか知らない事である。

一頻り粉々にして満足したのか穂次は斧を盾へと変化させてシャルロットへと歩く。へらりといつものように笑みを浮かべていたが、ラウラだけは「ひェ」と怯えたように声を出して涙目である。

「なんで怯えられてるンすかね?」

「仕方ないと思うよ。穂次、普段怒らないし」
「……まあいいッスけど」
どこか納得がいかないように頭を掻いた穂次はため息吐き出した。シャルロットはそれがオカシイようにクスクスと笑ってしまう。
「そんじゃ、俺は行くからテキトーに避難してくれ」
「私も行くよ」
「わ、私も行くぞ！」
「……うーん、俺だけで大丈夫ッスから。ラウラさんはシャルロットを頼む」
「穂次」
「俺は大丈夫さ。だから心配そうな顔しないでくれ」
ふにゅりと穂次の手がシャルロットの頬を緩く触り、付いていた煤を指で拭う。へらりと笑った穂次に対してシャルロットは不満そうな顔をする。
まるで何も無いように穂次はニッと笑ってラウラを一度見てから、穴の空いた天井から空へと戻った。
「……その、シャルロット」
「いいよ。大丈夫」
触られた頬を触りながらシャルロットはため息を吐き出す。どうせ止めても止まら

ない彼なのだ。
　きっと優先順位では上だからソレで満足してやろう。まあ説教はするけど。
「ひっ……しゃ、しゃるろっと？」
「何かな？」
「なんでもなイデス！　移動スルゾ！」
　どういう訳か怖くなったパートナーに震えながらラウラは移動する。避難、というよりは繋がった通信先である織斑千冬の指示に従う形なのだが。

「ちょっと鈴さん！　ちゃんと抑えておいてくださるかしら？」
「うっさいわね！　コッチも手一杯なのよ！」
　口喧嘩を交わしながらセシリアと鈴音は空を泳いでいた。鈴音の双天牙月による接近戦とセシリアの狙撃によりゴーレムⅢのエネルギーを削っていた。
　口喧嘩が何かしらの暗号となっていて、ソレに対応して動いている訳ではなく、二人はただ単純に相手の事を知っているが故に行動を予測して射撃と接近戦を繰り返して

いるだけだ。何度も戦った相手だからこそ、わかるのだ。
「今の外すとかないわー」
「鈴さんが抑えていないからでしょう!?」
「はぁ!?　アンタは私ごと貫くつもり!?」
「わたくしの精度を疑っていますの!?　決め手に欠けるから最大出力で貫くに決まってますわ！」
「アンタね……。なんか最近穂次に毒されてるんじゃない？」
「そ、そうですわね」
「照れんな！」
……あー、えっと。そう。何度も戦ってるからこそわかるのだ。うん。
ともあれ、セシリアの言っていた事も事実である。
小競り合いに対しては回避と防御。しかしながらゴーレムⅢは的確にセシリアの狙撃と鈴音の衝撃砲だけはエネルギーバリアで防ぎきっている。
「セシリア、エネルギーは？」
「今の鈴さんを一撃で落とせる程度には」
「あっそ。私も似たようなモンよ」
ジリ貧である事などはわかっていた。そもそも相手のエネルギーがわからないのに

持久戦にもつれ込んだのは悪かった。
　鈴音とセシリアは小さく息を吐き出して、迫る熱線を回避していく。
「どうする？　このまま避け続けて助けが来るのを待つ？」
「あら弱気ですわね」
「うっさいわね。それとも何か案でもあるの？」
「……そうですわね。騎士様でも待ちますわ」
「こんな時にまで惚気られるとどうしていいかわかんないわ」
「ふふっ。でも、きっと来てくれますわ」
「あーあーそうですかー」
　口をへの字にした鈴音とは違って、セシリアの顔は微笑んでいた。けれど微笑みの中に僅かに含まれた不安が見え隠れする。
　セシリアはドコか直感的なモノで自身の騎士様が来てくれるのがわかっている。ソレはあの時の様に、自分を守る為に来てくれる事がわかっている。
　だからこそ、彼がまた何かを犠牲にするんじゃないかと不安になってしまう。助けてほしい、けれど助けてほしくない。そんな感情がせめぎ合い、少しだけ意識が逸れてしまった。
「セシリア！」

「ッ」

鈴音の叫びと当時に身を捻り熱線を避けた。そして同時に迫る熱線を視界に入れた。息を飲み込んでしまう。

迫る熱線は余波すらなく、何かにブツカって消えていく。八つの何かは熱線を防ぎきるとセシリアの周りを巡り、ふわりとその後ろへと飛んで行く。

黒い装甲の騎士の右腕に捕まれた欠片は、変形し一つの棒へと成る。先端から吐き出された刃先を確認した騎士は、身体を捻り上げて、宙を踏みしめて、その槍を投げた。

黒い粒子をまき散らしながら槍は一直線にゴーレムⅢへと向かい、エネルギーバリアごとゴーレムⅢの身体を貫いて、壁へと張り付けにした。

「うわぁ……」

「遅いですわよー」

「スイマセンデシタ。シャルロットを助けたら遅れました」

「わたくしは二番目ですのね」

「いや、ほら、えっと――鈴音さーん助けて」

「無理よ。というか、アレはまだ動いてんだけど?」

鈴音が指差した先にはゴーレムⅢが辛うじて動く腕をセシリア達へと向けている。

「おっと。ちゃんとコア狙ったつもりだったけど外れたか。まあいいや」

穂次は宙で一歩踏み込んで壁に張り付けにされているゴーレムⅢの腕を踏みつけて、槍を掴む。勢いよく引き抜いた槍をそのまま振りかぶり、穂先を頸へと向けて一閃する。

ゴトリと地面に落ちた頭を一瞥してから穂次は息を吐き出し槍を盾へと戻す。

「なんかアンタ容赦ないわね」

「無人機に容赦もいらないでしょーよ」

「それで穂次さん、わたくしは二番目ですの？」

「いや、ほら、えーっと。セシリアは耐えてくれると思って、そう信頼してたからあとに回したんですよ、ええ」

「信頼、フフ、そうですかそうですか」

「ふぃー……危なかったぜ。なんとか誤魔化せたな！」

「アンタ、それも聞かれてるわよ」

ジト目で睨む鈴音と額の汗を腕で拭った穂次。そんな二人の言葉を聞かないようにしているセシリアはニタニタとしている。

「ん……りょーかいです」

「どうかしまして？」

「織斑先生からの依頼。敵の殲滅だってさー」

「ふふふ、分かりましたわ！　このセシリア・オルコットが――」
「あー、セシリアは避難で」
「……」
「そんな顔してもダメッス。ほら、エネルギーも無いでしょ」
「そうですが……」
「アンタは大丈夫なの？」
「問題ねーッスよ」
「……エネルギーじゃなくて、アンタ自身よ」
「……それこそ問題じゃねーッスよ」
へらりと力無く笑った穂次はこれ以上の追求を逃げる様に空へと一歩踏み込んだ。
高速で空へと逃げた穂次を見送った二人は同時に溜め息を吐き出した。
「セシリア達に任せるわ。アタシだと無理」
「ええ。わかってますわ」
げんなりした鈴音がヒラヒラと力なく手を振ってセシリアに押し付ける。その責任を当然のように受け取って、セシリアは不安そうにもう一度空を見上げた。

喜劇の道化

黒い空と白い地面。

もう数えきれない程見ている世界で俺は目を覚ました。

体を上げて辺りを見渡す。相変わらず、代わり映えもしない光景が続いている。空は黒で塗りつぶして、地面には白骨の絨毯が敷かれている。

そんな変化のない光景だからこそ、俺が探していた存在はスグに見つかった。

濡羽色の髪を揺らし、髪と対極とも言える白い着流しを纏った女。その着流しを押し上げる双丘と透き通るような白い肌。

冷たさを覚えるような貌(かお)が今はドコか蕩けている。

「ふひっ、ヒッヒヒ、ヒィーッヒッヒッヒッヒッヒッヒッ!!」

悪の三段笑いよろしく、天高く声を上げている俺だけの武器に思わず困惑してしまう。実際怖い。

美人なだけあって、余計に怖いのだ。もしも今もあの魅力的な腰に刀があったのならば俺は単なる欲求の為に叩き斬られていたかもしれない。

あー……、えー……、と言いよどんでいる俺に気付いたのか口角を歪めて俺の方へ向

いた。
「のぉ、主い。ようやっと勝ちおったのぉ」
「……あんなの勝ちじゃねーよ」
口角を歪めてそう言う村雨に俺は否定する。あれは勝負ですらないのだ。
単なる虐殺。弱い存在が束になって、ソレを潰しただけ。そんな俺の思考を読み取ったのか、村雨はクツクツと喉を震わせて嗤う。
「それでも勝ちは勝ちじゃろぅ？　くっふ、ようやっと、ようやっと主が勝ちおった。くっひ、ひひっひ」
「負け続きで悪かったな」
少しだけ不貞腐れたように吐き出せば、村雨は更に喉を震わせて嗤う。
笑っている村雨に溜め息を吐き出して、絨毯の上で胡座をかく。俺がココに居るということは意識を失っているのだろう。
目に見える、織斑先生からの報告で知るかぎりの無人機はすべて頸を落とした。大きな爆発のあとに織斑先生から聞いた状況終了の声で意識を失ってしまった。
セシリアやシャルロットは大丈夫だろうか。避難をするように言ったけれど、どうだろうか？　そこらを詳しく織斑先生に問えばよかったと終わってから思ってしまう。ある程度把握している性格を考えれば出撃しそうだけれど……織斑先生や鈴音さんが

きっと止めている筈だ。
　一夏や簪さんは……近くに更識会長もいた筈だ。意識の端に残っている爆発がアイツらなら、まあ問題はないだろう。
「さて、主。妾がココに呼んだ理由はわかっておるんじゃろう？」
「……さあ？」
「阿呆め……自分の肉体がどうなっておるか自覚しとらんのかえ？」
「左目の視力消失ぐらい？」
「戦闘中、妾に引き摺られておったろぅに……アレを相手に全て頸を弾いとる時点で主は気付いておるじゃろうて」
「頸落とした方が早いだろ」
「武器相手ならば心の臓を狙うのが一番じゃろう。頸は所詮感覚器官じゃ」
「……次からは善処するよ」
　コアを狙う事も考えたけれど、感覚の都合で頸を落としてしまった。ソレは村雨が言ったようにつられた結果なのだろう。
　俺を前から抱きしめた武器は甘く、熱っぽい吐息を耳に叩きつけてくる。
「主はやはり愚か者じゃ」
「そうか？」

「……その主に従う妾も、また愚かな武器かも知れんがのぉ」
「なら愚か者同士、仲良くしようぜ」
「これ以上仲良くなるとなればやはり契るしかないと思うんじゃよ」
抱きつく力が強くなり、彼女の豊かな乳房が胸で潰れ、甘みのある匂いが強く鼻を擽る。僅かに錆びた鉄の香りがする辺り、彼女特有の香りなのだろう。
なんとも言えない気持ちになり、眼の奥にハートでも浮かべていそうな彼女を引き離す。
「いけずぅー。へたれぇー」
「うっせ！」
ぶうたれる彼女の言葉を聞き流して溜め息を吐き出す。
クール系の美女の癖に変にこういう姿が様になる辺り、製作者の趣味を感じてしまう。顔見知り程度の交友関係であるけれど、どうにもそうには見えないので変な感じだ。
「それで、俺の体はどうなるんだ？」
「別にどうにもならんよ。これ以上になっても、これ以下にもならん」
「なら別に問題はねーッスな」
「阿呆。どうせ主の事じゃから力を求めるのじゃろう？」

「ああ！」
「やっぱり主は愚か者じゃのぉ……妾を求める、という一点だけを言えば頗る嬉しいがの」
「つーか、自分で言っといてアレだけど。コレでも結構強くなってると思うんですが」
「……主の目的から言えば、まだ足りんじゃろうて」
「マジか……んじゃ、もうちょい求めるかもな」
村雨が言うからにはそうなのだろう。彼女の力に溺れるのも気分がいいので問題はない。
目的さえ果たせるのなら、どうだっていい。
俺が決めた事だ。
俺が選択した事だ。
俺が決断したことだ。
「やはり主は愚か者じゃのぉ」
「頭の良い生き方が出来るんなら、そうしてるよ」
「……それもそうじゃの」
あっさりとソレを認めやがった村雨が立ち上がり俺を見下す。
お互いに止まれないのだ。そしてお互いを止めようともしない。ソレが俺達の関係

だ。なんせ彼女は俺の武器で、俺はその担い手なのだから。
「……大立ち回りの日取りは決めておるのか？」
「まだツスね」
「……へたれめ」
「いやー、ハッハッハ……自分の武器にまで言われるのかよ」
「まあよい。さっさと行動せんか。あの女共が主の前から去るかも知れんぞ」
「……まあソレはソレで構わないよ」
「阿呆め。そんな顔で言われても信用など出来るか。自分を蔑ろにする癖に独占欲だけは強い主らしくもない」
「……いや、まあ、ほら、俺が変に留めるってのもおかしいかなーって」
「……へたれめ」
「はぐぁ……」
ヤメテ！　これ以上のダメージを俺に負わさないで！　現実に戻っても筋肉痛らしき幻痛があるんでしょ!?
ジト目で見下していた村雨が溜め息を吐き出し、頭を振る。
「妾には理解出来んのぉ……主の欲望は実に愉快じゃ」
「欲望を愉快と言われる主の気持ちを少しは汲んでほしい」

「どうせ何も感じとらん癖によう言いおるわ……」
　諦めたように呟いた村雨が再度溜め息を吐き出してチラリと俺の腰元を見つめる。
視線を追えば、一振りの刀へと行き着く。
「……主は――……いや、よい。妾は主の武器であることを願ったんじゃ」
「なーに、一人で納得してんですかね……」
「五月蝿い。さっさと戻ればいいじゃろう愚か者め」
「お前が呼び出したんだよなぁ……」
　ともあれ、ボンヤリと瞼が落ちてきたので、どうやら本当に現実へと戻る様だ。
　白い絨毯に寝転がり、カラコロと響く音で鼓膜を揺らす。黒い天井を瞼で閉じる。
　甘みのある匂いと錆びた鉄の香りが同時に鼻を擽る。
「何をしようと、妾は主の隣に居るよ……じゃから、捨てんでおくれ。妾も一緒に堕ちるから、捨てないで……ご主人様」
　望むように、縋るように聞こえた声がやけに耳に残り、俺の意識は空気を求めるように浮上した。

◆◆

「あら、目が覚めたのね」
右半分だけの視界を開けば声が聞こえた。この学園に居る限り何度だって聞く声である。首を動かしてそちらを向けば、入院服を着ている水色髪の美少女が居た。
なんだ、あのおっぱいは……。服を盛り上げて腹部のラインがさっぱり見えない。こう、もっとぴっちりとしたＩＳスーツ的なモノでもいいんじゃないだろうか。
そんな俺の視線に気付いたのか更識会長は隠す訳でもなく少しだけ胸を張って見せた。最高です！　流石更識会長だぜ！
「それで穂次くん。どうしてガン見してるのかしら？」
「そこにおっぱいがあるからです！」
「……なーんか怪しんでるのが馬鹿になっちゃうわね」
「つーか俺を怪しんだ所で何の得にもならんでショ。簪さんは？」
「面会時間は終わってるわ。ついでにセシリアちゃん達も部屋に帰っているわ」
「二人とも怪我とかしてたんですか？」
「アナタのお見舞い。結局起きなかったけどね」
セシリアやシャルロットも無事だったようだ。仮定で動いていても、現実ではどうな

るかわからなったかったので一安心である。
　上半身を上げようとすれば、頭に響くように痛みが伝わる。歯を食いしばって痛みを耐えて、ヘラリと笑いを浮かべる。
「大丈夫？」
「別に問題はねーッスよ。運動不足からの筋肉痛みたいなモンですよ」
「私はアナタの努力を知っているから隠す意味はないわよ」
「いやーん、エッチィ」
「……怪我が無ければ殴ってたわ」
「普段、更識会長がしてる事なんだよなぁ……」
「美少女だから許されるのよ！」
「一理ある」
　自分の事を美少女という美少女はたちが悪い。実際に美少女だから何も言わないけれど。
「それで、俺への怪しさは払拭されたんですかねー」
「ソレを自分で言うのもどうかと思うわよ」
「我ながら怪しさ満点の動きをしてることは自覚してますしー。そこらを言い始めると簪さんに近付く意味はなかったッスからねー」

「私への牽制でしょ？　尤も、余計に怪しくなったのだけれど」
「そもそも更識会長が俺の事を怪しむから、俺は仕方なく簪さんに近付くしか無かったんスよ」
「元々政府のスパイである君が変な動き方をするのが悪いのよ。あと仕方ない、って言う割には随分と肩入れしていたようだけれど？」
「……他意はないッスよ」
「じゃあ本意だけを聞きましょうか」
「……人には良く見られたいってだけッスよ。もしくは関わったから、って言った方がいいかもしれないですけど」
「あらそう。てっきり、更識家に金銭を要求する為だと思っちゃった」
「くれるなら貰いますけど、どうせくれないんでしょ？」
「勿論よ」
「チョーウケルー。まあ簪さんに関してはお金の為に動いた訳じゃないからイイッスけど」
「ホント、現金ね」
「目的の為なら神様だって売り飛ばしますよ」
「過激な目的ね。私には聞かせてくれないのかしら？」

「そりゃ、世界征服に決まってるでしょ」
「……ああ、そっか、馬鹿だったわね」
「馬鹿じゃなくて阿呆、ッス」
「そこの訂正はいるのかしら……」
　呆れたように溜め息を吐き出した更識会長をへらへらと笑ってみせ、伸びをする。ギシギシと痛みを伝えてくる筋肉を伸ばして、息を吐き出す。
　コレで体に異常は無いというのだから、なんとも不思議なモノだ。
「今日ぐらいはゆっくりしてもいいんじゃない？」
「ココに居ても軽い誘導尋問されるだけッスからね。アホだけどソレはわかるゾ☆」
「自分で言うのも中々滑稽ね」
「滑稽で結構。俺は喜劇の主人公じゃなくてピエロなんですから」
　ヘラリと笑えば、なんとも言えない顔で俺を見る更識会長が溜め息を吐き出して、いつもの様に胡散臭い笑みを浮かべる。残念な事に扇は手元に無いらしい。
「それに――ドコかの天才に追いつくには血反吐でも吐かなきゃやってけねーんですよ」
「アナタも難儀な性格してるわね」
「よく言われます。

んじゃ、更識会長。おやすみなさい」
「ええ、おやすみなさい。道化の穂次くん」
へらりと笑ってみせれば、彼女もいつもの胡散臭い笑みを浮かべてくれる。
扉を閉めて、冷や汗を拭いてから息を吐き出す。瞼を閉じて、呼吸に集中していく。
体に異常は無い。異常はない。異常はない。
ならば動けるのが道理だろう。
「……うん、大丈夫だな」
まるで油の差していないブリキのようにギシギシと無理に動かしている感触はするけれど、動くのならば何も問題はないだろう。
何度か手を動かして調子を確かめながら瞼を開く。
「何が大丈夫、なのかしら？」
「私達にも聞かせてほしいなぁ」
拭いた筈の冷や汗が吹き出した。どうして俺はこんなに震えているんだろうか。風邪か、風邪だな寝ないといけない。
踵を返して医務室の扉に手を掛ける。同時に両肩に手が置かれる。錆びたブリキのように後ろを確認すればニッコリと笑っている金髪の二人。
怒っていらっしゃる。これは間違いない。二人は怒っていらっしゃる。

頭の中で必死に何故かを検索しても、さっぱり思いつかない。ココは、そう、アレだ。俺の小粋で面白いジョークで場を和らげるしかないな（使命感）

「部屋に戻りますわよ」

「いや、ほら、俺って怪我人ですよ？　いや体に異常は無いけど」

「はいはい。言い訳は部屋で聞くから」

「あ、逃げれないヤツだ。穂次知ってるヨ！」

「それじゃあ今回無理した言い訳でも考えてようか。私達を納得させる言い訳が出来ればいいね」

ニッコリしてるシャルロットが真っ黒である事はよく分かった。怒っていらっしゃるのもよくわかった。でもどうして怒ってるかはやっぱり分からない。

とりあえず、二人が握ってくれている手がスゲーいい感触である事だけは確かだ。スゲーすべすべなんだ……。

ヘタレた財布

更識簪は特殊な立ち位置の人間だ。

更識家という対暗部用暗部の次女。完璧な姉と劣等な自分。けれど、彼女に才能が無かった訳ではない。

押さえつけられた並列処理思考が開花したのはあの織斑一夏の助けになりたかった……自身もヒーローになりたかった。そんな願いからの出来事だ。

ＩＳのソフト部分の開発。マニュアルでのミサイル誘導。幼い頃から仕込まれてしまった戦闘スキル。

姉さえ居なければ……いいや、あの姉に少しでも才能が欠けていれば『楯無』は妹である簪のモノになっていただろう。

更識簪は特殊な立ち位置に居た。

頭を抱えて「どうしてこうなった！」と声を荒げて言いたい気持ちでいっぱいだった。

「私は部屋に帰ってアニメに没頭したいのだ！」と言えない辺り、簪のコミュニケーション能力の欠落が伺える。いや、例えコミュニケーション能力が高かったとしてもソレは言えないだろうけれど。

ともあれ、冒頭で書いたような事とは一切関係無しに更識簪は特殊な立ち位置に居た。

専用機持ちタッグマッチ襲撃事件――ゴーレムⅢ襲撃事件と後に言われるであろう事件がその原因だ。そもそもの原因は他にもあるかも知れないが……。

簪は俯かせていた顔を少しだけ上げて目を動かして周りを確認する。机を挟むように、一年生の専用機持ちがいた。篠ノ之箒、凰鈴音、ラウラ・ボーデヴィッヒ、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノアの五人だ。放課後のカフェテリアであったけれどコレから戦争でも起こそうというのか。

男二人はこの席には居らず、視線を少し動かせば少しばかり遠くの席でパフェを食べている唐変木とケーキを食べているヘタレが何かを言い合っている。ヘタレがパフェグラスの中ほどをフォークで叩いている事から、中身のシリアルの事だろう。

そんな至極どうでもいい話をしている彼らと自分がどうしてコレ程の差が出てしまったのだろうか。お誕生日席に座っている筈なのに、気分は罪人だ。溢れ出る溜め息をグッと飲み込んだ。

「で？」

いい加減に話が進まないと思ったのか、それとも自身のキャパシティの限界を感じたのか、やや低く威圧するように箒の声が出た。その声に小動物の如く反応して「ヒッ」と

声が漏れてしまった。簪は逃げたい気持ちでいっぱいである。

「まあまあまあ、落ち着きなよ、箒。ほら、簪さん、怯えちゃってるし」

そうやや温和に言ったのはシャルロットである。簪はまるで天使の助けのように聞こえて顔を上げた。天使は居たがその天使は怒っていらっしゃる。実際怖い。頭の中で「笑顔とは本来攻撃的なものである」とナレーションでも流れて気がした。アニメの見過ぎかもしれない。

そんな声と表情だけは温和なシャルロットが全員をなだめる。

そんなシャルロットに対して舌打ちをしたのは簪の対面で不機嫌極まりない表情で腕を組んでいるラウラである。

「やめろ、シャルロット。拷問か自白剤の投与をしたいところを私はギリギリ耐えているんだぞ」

ヤバイ。ここから逃げ出さなくては。

ラウラの言葉を耳にした簪の思考はソレだけだった。逃げるルートを構築して、どう助けを呼べばいいか思考した。きっとこの場を改善してくれるであろうアホとバカの方を見れば、優雅にカップに口を付けている。どうやらシリアルに関しては決着したらしい。

ともあれ、簪はどうしてこうなったかを頑張って思い出した。

そもそもの原因は先日の襲撃事件とソレに連なる関係だった。
襲撃事件で共に戦って、よく言えば戦友となった一夏と簪。『話せばイイ奴』というのはドコかのヘタレが言っていた通りで、一夏が簪を諦めたあとに何度かヘタレが「武装情報寄越せ」と一夏を簪へと引き合わせて会話をし、それなりの交友関係を築いた。互いを名前で呼び合う程度の仲である。
名前呼びで仲良く会話をしていれば要らぬ誤解を生むものである。という事を簪は心に刻んだ。出来ればもう少し早めに気付きたかった。
そこからはまるで流れるような魔女裁判だった。簪はそう記憶している。――本当は「あぅあぅ」していた簪が激流に身を任せて結果的にお誕生日席という断頭台に立たされている訳だが。
あとは風船を膨らますように簡単な出来事だった。
「一夏に助けられたし、いつの間にか名前で呼んで、仲良さそうにしている！　有罪（ギルティ）!!」
魔女裁判もビックリである。
唐変木に関してはそんな感じである。問題はヘタレ関係である。
なんせ、あのヘタレ。セシリアとシャルロットには簪との関係を完璧と言っていい程秘匿していたのだ。まるで義務か「そう命令されたから」と言わんばかりに簪とペアを組んでいた。だからこそセシリアとシャルロットはタッグマッチでヘタレをボコボコ

にして、ペットか何かにでもしようかと計画をしていた訳である。当然、冗談である。

さて、そんな二人がまるで高みの見物のように一夏に恋する少女達を見ていれば、簪からトンデモナイ事が吐き出された。ヒーローショーを一緒に見に行った事、結構な長時間一緒にＩＳの制作をした事。気持ちは宛ら浮気が発覚した妻である。二人はとりあえずあのヘタレに首輪をする事を心の予定に組み込んだ。当然、本気である。

結果的に、簪は一夏もしくは穂次に恋をしているのではないか。というのが現在の罪状である。

こうして考えれば、中々に落ち着いたような気がする。よし、とりあえずヘタレはともかく、唐変木には恋をしていない事を言おう。

簪は意を決して顔を上げた。魔王の如き睨みをしたラウラと目が合った。簪はアッサリと意思を捨てた。逃げたい。

「それで、一夏さんと付き合ってますの？」

あっさりと放たれた言葉はセシリアのモノだった。冷静に、本意だけを突きつけた言葉である。

幾分も余裕を持ち、簪のことも考えて言葉を促したセシリアを簪はチラリと見た。まるで女神のように慈愛に満ちた微笑みである。

「わ、私と一夏は、……そういう関係じゃ……」

「一夏ぁ？」
「ひっ!?」
どうしろというのだ！　簪は怯えながらも頭の中で叫んだ。口からは代わりに怯えた声が出た。
底冷えするような低い声で威圧する箒をまるで調教師のように「どうどう」と宥める鈴音。そんな鈴音に一度目配せしたセシリアはまた微笑みを浮かべて言葉を促す。
簪は呼吸を正して、しっかりと言葉を選んで、口を開いた。
「付き合って、無い」
「じゃあ穂次さんと付き合ってますのね!!」
「ひっ!?」
テーブルを叩いて立ち上がった女神の顔は微笑みではなかった。女神なんて居なかったのだ！
セシリアはビシッと真っ直ぐに遠くの席に座っているヘタレに指を差す。
「あんなヘタレのドコがいいんですの!?　基本的には変態ですし！　女の胸の事ばかり考えてるような、脳が下半身に移住した男ですわよ!!」
物凄い言われようである。聞こえていたのかヘタレが唐変木に慰められている。
完璧に言い放ったセシリアだが、ソレを取り繕うように「まあ格好いい所もあるのは

認めますが」とぶつぶつと呟いて、自身の髪をクルクルと指に絡めて顔を少し赤くしている。その言葉を少しは向こうで落ち込んでいる本人に言ってあげればいいのではないだろうか。簪は結構本気でそう思った。口には出なかったけれど。

「私は、……穂次くんとは……付き合えないよ」

それだけはハッキリと、簪は言い切った。言い切った言葉に少しだけ目を細めたセシリアは「ならいいですわ」と言い切り、また微笑みを浮かべた。なんて余裕のある態度であろうか。

「ん？　終わった？」

そう声を出したのは鈴音である。まるで現状に似つかわしくないあっけらかんとした声であった。

そんな鈴音を睨んでしまったのは宥められていた箒と『不機嫌デス！』看板を掲げたラウラである。

「そういえば鈴音は大して怒ってなかったな」

「まあ、別に怒るような事じゃないし？」

「どういう事だ」

「簪のＩＳ制作にはアタシも一応関わってたからね」

「……あ」

「いや、当事者が忘れてどうすんのよ……」
　呆れたように笑った鈴音に更に怒りを表す箒とラウラ。そんな二人を「どうどう」と押さえつけてニヤリと鈴音は笑う。
「何？　アンタ達は自分に自信がなくて一夏が簪を選ぶと思ってんの？」
「なっ!?　そ、そんな事はない！」
「じゃあ簪に怒るなんて八つ当たりもいい所よ。ここらが落とし所なんだから、いい加減にしときなさいって」
「む……むぅ」
「というか、鈴。全部わかってるんだったら言ってくれればよかったのに」
「穂次に関してはわからなかったし、アンタ達二人が簪を責めるとなーんか嫌な予感がしたからよ」
「別に何もしませんわよ。ねえシャルロットさん」
「そうだよ。当然じゃないか」
　どうだか。と小さく吐き出した鈴音は自身を涙目で見つめてくる簪に気付いた。
「もっと早く助けてくれても……」
「アンタはこうでもしないと他人と接点持たないでしょうが」
　溜め息を混ぜて吐き出した言葉はコミュニケーションに問題があることは自覚して

いる簪に深く突き刺さった。
　空気を一新させるように手を二度叩いた鈴音は再度自身に視線を集中させる。
「はいはい、コレはココでオシマイ。あとはケーキでもパフェでも食べましょ。お代はアッチのヘタレが全部持つわ」
「……ああ、その為に呼んでいたのか」
「他に呼ぶ理由は無いでしょ」
　キッパリとヘタレは財布である事を宣言した鈴音にいい顔はしないセシリアとシャルロット。意中の相手が財布扱いされれば当然である。
「鈴音さん。穂次さんを財布扱いするのはやめていただけるかしら？　ヘタレが加速したらどうするんですの！」
「そうだよ！　穂次はヘタレなだけで財布じゃないんだよ！」
「……アンタ達も大概だと思うわよ」
　鈴音はチラリと唐変木に慰められているヘタレを見て溜め息を吐き出した。

三回勝負にしよう

意識が浮上する。大きく息を吸い込んで首が繋がっている事を確認する。どうやら、俺の首はまだ落ちていなかったらしい。

溜め息のように息を吐き出して、強張っていた精神を解きほぐす。嫌な夢を見たわけでもない。夢は楽しい未来の話なのだから、そもそも〝嫌な〟という冠は必要無い。

息を吸い込めば、特有――……と言うべきかわからないけれど、ここ最近よく鼻にする甘い香りを吸い込んでしまう。

なるべく意識しないようにしていた右腕に柔らかい感触。抱きつかれている訳ではなくて、握られている手。

首を動かして隣を見れば、瞼を閉じて静かに呼吸をしているセシリアが居た。何かを言っても美しい彼女は何も言わなければ更に美しく思えてしまう。口を開けば「ふふん」と得意げに鼻を鳴らすのだから可愛らしい、と言えるのだろうけど。

緩やかなネグリジェを押し上げるおっぱいが彼女自身の腕によって圧迫されてやや強調されている。触りたい気持ちを必死で抑え込む。

細くしなやかな指を一つ一つ丁寧に解いて、彼女から離れる。人が変われば殆ど毎日

している行動なので、セシリアやシャルロットがコレで目を覚ますことはない。

彼女に背を向けて、視線を落とす。自身の欲がズボンを押し上げて、なんとも言えない気持ちになってしまった。

愛している、という気持ちはある。ソレは世間一般的な感情を自分の尺度で計った結論だ。だから、俺は二人を愛している、と言える。

覚えた喪失感、駆り立てる激情、自然と平穏の中に彼女達が居る。自分よりも大切な存在なんて腐るほどいるけれど、それでも二人は別格だと言える。

夏野穂次が言ったところで非常に信用出来ない所がアレだが……。それでも俺はそう宣言出来る。

ココまで感情的な思考が出来る存在じゃないんだけどなー。と苦笑が溢れた。

何も考えずに行動することと自分の感情を優先した行動はまた別だ。だから、俺はこの感情を大切にしなくてはいけない。だから、俺はこの存在達を大切にしなくてはいけない。だから、俺はあの喪失感を味わわない為に――……。

モゾリと何も掴んでない手を先ほどまで俺が眠っていた場所に漂わせるセシリアを見て思考を止める。

布団をかけ直して、彼女の艶やかな金髪を撫でて、彼女を改めて夢の世界へと旅立たせる。

彼女が改めて寝た事を確認してからベッドから離れる。ジクジクと痛む程自己主張をするソコを無視して、サクッとジャージに着替えよう。

◆◆

「――ククク、ハハハ、アーッハッハッハッハッハ!!　騙されたな一夏ァ!」
「くっ……!　なんでだよ……!　どうしてなんだよッ!　穂次!」
「くふ、ヒヒ!!　別に騙そうと思ってたんじゃァないんだぜェ!?　ただ俺を信用していたお前が悪いんだよォォォ!!　ヒャッホォォ!!」
口をコレでもかと言わんばかりに歪ませて嗤う穂次とその目の前で拳を握りしめて現実を否定しようと、理由を聞こうとする一夏。
大きく開いた手で口を隠し、けれど嗤いは溢れるようで穂次の顔が愉悦へと染まっている事がありありとわかってしまう。
「で、アレらは何をしてんの?」
「お姉ちゃんの手伝いをどっちがするか、ってじゃんけんしてたけど……」
「……あっそ。ホント、どうでもいい事で盛り上がるわね、アイツら」
グーで負けた一夏とパーで勝った穂次を呆れたような視線を送る鈴音。隣には困っ

たように笑う簪が居る。
　先日の非常に良心的且つ常識の伴った魔女裁判によって幾らか更識簪という存在は織斑一夏（＋ａ）を取り巻く存在達に認められた。そこには女の子特有の牽制などは無い。
　基本的にサバサバとした感性を持ち合わせている鈴音と武人然としている箒、更に恋愛感情に初心な軍人然としたラウラ。空気を読む事に長けているシャルロットと冷静な淑女であるセシリア。
　そんな五人にとって女性的ヒエラルキーはあまり存在しない。あるのは競争相手からどのように勝利するか、という意思と意中の相手にどう気付かせるかという問題だけである。
　そんな意中の相手である朴念仁と阿呆は三回勝負になったジャンケンを繰り返している。
「そういえば、簪は『あのアホに恋出来ない』って言ってたけど、どういう事？」
「え……えっと――」
「わたくしも気になりますわ」
「ひっ!?」
「……セシリア、アンタ何かしたの？」

「人聞きの悪い。何もしてませんわ」
　突然背後に登場したセシリアの声にビクリッと反応した簪は素早い動きで鈴音の影へと隠れた。当然、少しばかり鈴音より高い身長の全ては隠れなかったけれど、鈴音はしっかりとセシリアと簪の間に壁を作るように身体を移動させている。
　怯えた様子の簪に唇を少しだけ尖らせて不満を表すセシリアに少しだけ申し訳ない気持ちを押し出す簪。簪だってセシリアの事を嫌っている訳ではない。ただ、なんというか、単純に怖いのである。
「それで？」
「え、えっと……その……、私は、穂次くんが怖くて……」
「あのアホのドコが怖いのよ……今もジャンケンに負けて地面を叩いてるようなヤツよ？」
「うっ……うん」
　両手を高々と上げている一夏の前には四つん這いになり、その拳を地面に叩きつけて悔しがる穂次の姿がある。しかしスグに立ち上がり一夏に懇願するように手の平を広げている。五回勝負になるようである。
「人と話すと……大凡の人柄は、わかるんだけど」
「アンタはなんでソレでコミュ症患ってるのよ……」

「……――私は〝更識〟、だから」
「？　そりゃぁアンタは更識簪だけど」
「あ、えっと……その、……」
「まあいいですわ。それで？」
「う、うん……穂次くんは、よくわからなかったから」
「……ふーん」
三人で〝あいこ〟の度に「へへへ、やるな」「お前こそ」なんてやってるバカとアホへと視線を向ける。
確かによくわからない。どうしてあいこの度にお互いが何も言葉を交わさずに手を引いているのだろうか。さっぱり理解出来ない。
「穂次くんは……ずっと演技してる感じがする……と思うたぶん」
「最後で台無しじゃない」
「穂次くんも〝普通〟はずっとしてたって言ってた、から……だから」
「あー……簪ってアイツの事って知ってたの？」
「え、えっと……うん。その時に、教えてもらった」
自意識が薄いと言われている、なんてへらへらと笑いながら言った穂次の事を思い出しながら簪は応える。同時に感情だけはハッキリと叩きつけてくるクセにソコに何も

ない不思議な感覚を思い出す。笑顔であるのに、その奥には何も無い。そんな彼だから、怖い。

　けれども、そんな彼だからこそ人の言う〝普通〟を意思も無く行動してしまうのだろう。だから――恐ろしい。

「でも簪の趣味的には穂次はそれこそ理想なんじゃないの？」

「へ？」

「ほら、人を助けるなんてヒーローみたいじゃない。そういうの好きなんでしょ？」

「ほぁっ!?　ふぇ!?　な、なんで!?」

「それなりにアンタと仲良くなったし、趣味とかは知ってるわよ。というか、アイツがポロッとヒーローショーに行ったって言ってたし」

「ほ、ほっ――」

「――穂次さん、少しよろしくて？」

「アイエェェェエエ!?　セシリア!?　セシリアナンデ!?」

　顔を真っ赤にして怒ろうとした簪は鈴音の背中へと隠れた。その向こうからヒーローの情けない叫び声が聞こえたような気がするが強く瞼を閉じていた簪は知らない世界である。鈴音が呆れたように「あー……」と呟いているのでなんとなくの情景は思

い浮かんでしまうが……。
「それで、理想じゃないの？　正義の味方」
「あ、憧れではあるけど……」
「……ま、理想の男では無いことは確かね」
今しがた完璧な形の土下座に移行した男を見下しながら鈴音がそう呟いた。目の前に神様でも在るのか頭を上げては両手を握り祈るようにしている。
無償で人を助ける正義の味方。それは確かに簪の理想である。人の為に自身をすり減らし、人の為に戦い、勝利する。ソレは確かに、理想であり憧れだ。
だからこそ、簪は穂次の隣に立つ事など出来ない。その歪さを知っているから。無償で人を助けてしまう穂次が怖くて堪らない。更に言えば、彼にとって敵は助ける人ではない。純然たる敵なのだ。容赦や配慮、思いやりなど在りはしない。
――敵だから、殺す。そこに人である事など関係ない。敵は敵だ。きっと、彼はそういう思考と判断であの戦場に立っていたのだ。あの瞬間に隣に居た簪だから、ハッキリと言える。
今しがた土下座から解放された穂次はへらりと笑って一夏と軽快な会話を繰り広げている。どういう訳かご満悦なセシリアもその会話に入り、笑顔を作っていた。
「穂次くんは……オカシイよ」

「……まあ変態だしね。単純なのよ、ア穂次は」

溜め息に混ぜて、鈴音はそう言い切った。簪程ではないにしろ、鈴音も穂次の歪さは知っている。ソレも含めて、これ以上話す事を拒んだ。

掘り下げた所で答えは出ないし、答えを求めようとまるで一般論のような答えか、納得出来ない答えが返ってくるに違いないのだ。「男だから可愛い女の子を助けるだけだ！」なんてその筆頭だ。下心をあるように見せているが、本当に下心があったならそんな事は言わない。穂次はそれなりに頭の回る存在だ。そんな事は理解（わかって）ている。

その頭の回るであろう存在は更識楯無に微笑まれてまるで囚人のように連れて行かれている。一夏も同じく連れて行かれている事からどうやら二人とも徴収されたらしい。

「それで、セシリア。穂次が連れ去られたけどいいの？」

「べ、別に穂次さんがどうなろうと、わたくしには関係ありませんわっ」

「アーソウデスカー」

鈴音の棒読みに食って掛かるセシリア。その言葉に対して反論する鈴音。売り言葉に買い言葉とはこの事か、と少し遠い目をしている簪。

二人の軽い言い争いがお互いの想い人に対する言葉に変化してきた所で簪の視線が穂次達の消えた出入り口へと向かう。キョロキョロと顔を動かして、目標を見つけたの

かカツカツと靴を鳴らす。
「お前ら、夏野はいないのか？」
「ひっ!?　ち、千冬さん!?」
「織斑先生だ、凰。更識妹、夏野を知らないか？」
「え、えっと……お姉ちゃんに、連行されました」
「そうか」
「ほ、穂次さんがまた何かしましたの？」
「まるでアイツが四六時中何かしらの罪を犯しているような言い草だな」
織斑千冬はその冷たい表情に苦笑を混ぜて、「間違いではないか」と呟くように付け足した。
改めて辺りを見渡して、件の罪人が居ないことを確認した千冬はセシリアへと視線を向ける。
「オルコット、少しいいか？」
「へ？　わ、わたくしですの？」
「ああ。別に何かやましい事をしている訳ではないだろう？　例えば、夜に出歩いている、とか」
セシリアが一歩後退る。頭の中にはＩＳ学園の校則が濁流のように流れて、自身のし

ていた行動が罰則に当たるかを判断する。当然、”ＩＳ”を使う学園であるからソコに”男性”に関する文言は無い。だから、何も問題は無い。

佇まいをスグに直したセシリアは焦った顔を笑みで覆い隠して、余裕を見せる。同じく千冬も笑った。

「なに、安心しろ。デュノアも一緒だ」

コチラは獲物が罠に掛かった瞬間を見るような笑みであることを追記しておこう。

ドキドキ魔王裁判

「しゃ、シャルロットさん……」
「や、やぁ、セシリア……」
指導室で既に座っていた真っ青な顔のシャルロットが真っ青な顔をして入ってきたセシリアに引き攣った笑みを浮かべながら声を交わした。
おそらく同じ罪で呼び出されたであろう存在を見て、両者とも意を決する。ココで逃げ道ではなくて償う道を模索する辺り、二人の優等生振りが伺える。
「まあ気負わずに座れ」
悪の司令官も恐れて逃げる程の笑みを浮かべて千冬はセシリアの背中を軽く押して指導室の扉を閉める。
シャルロットの隣へと座ったセシリアは改めてシャルロットに目配せをして確認をする。呼びだされた内容は穂次の部屋で眠っている事だろう。
確かに自分達も幾らかは悪いと感じている。それこそ一般常識に基づいた判断だ。同世代の異性の部屋で同衾しているなど、教師の立場からは許される事では無いだろ

う。

　セシリアとシャルロットの前に座った千冬は悪役よろしくな笑みを緩めて、悪戯が成功したように笑みを浮かべる。

「何か勘違いしているようだが、あの阿呆の部屋に入り浸っている事で呼び出した訳ではないぞ」

「ほ、本当ですの!?」

「ああ。それこそアイツの場合はＩＳ学園もあまり手を出せないからな。責任は取れるだろう、お互いにな」

「そ、そうなんですかね……」

　千冬の言う責任をありありと想像してしまい少しだけ顔を赤くした二人であるが、同時にあのヘタレが責任を重んじる姿が想像出来ない。

「まあアレでいて、アイツはそこらにいる男共よりも幾分もマシだ。おすすめはしないがな」

「え、っと……わたくし達はどうして指導室に呼び出されたのでしょうか？」

「指導室に呼び出した理由は、ココが情報規制によって守られている所だからだ。カメラも無ければ録音機材もない」

「ソレは……学園としてはどうなんですの？」

「いき過ぎた指導に関して心配するなら問題ない。――そんなモノはココに入れなくても出来るからな」
「……」
「冗談だ。笑って構わないぞ」
笑えるか。とは口が裂けても言えなかった。
口元を歪めるように笑う千冬に対して引き攣った笑みを作るのが精一杯な二人である。千冬の感覚上、空気も和んだ所で会話を切り出す。
「さて、わざわざ放送ではなく、私個人がお前達を呼んだのには訳がある」
「――……それは指導室に連れてきた事も」
「そうだ。第一として、あの阿呆に気付かれる訳にはいかなかったからな」
「穂次に？」
「……まあ、ソレはいい。幸い、生徒会長が上手く動いてくれたからな」
「……穂次さんに何か？」
「……オルコット。お前は穂次が陰で努力を続けている事は知っているな？」
「え、ええ。先日シャルロットさんから教えていただきましたが……」
「ならば話は早いな。コレを見ろ」
千冬が二人の前に投げた紙束。クリップで止められたソレを訝しげに眺めながら二

人はほぼ同時に手に取り、紙を捲り、そして顔を顰めていく。
ソコに書かれていたのはデータである。誰かの訓練データ。ＩＳの起動時間。訓練内容、その出来栄え。適合率。
訓練内容自体はそれ程驚く事はなかった。それこそ、代表候補生ならば出来るだろう、そんな内容だった。
「別に、普通ではありませんの？」
「イイから最後まで目を通せ」
そのデータの日付が六月に入っていない事を除けば、である。殆ど毎日続けられていた訓練、当然人間は成長するモノで多かった失敗も減り、同時に訓練内容も激化していく。
数値としての変化は臨海学校から戻ってきた日付。全ての数値が良くなっていた。いいや、良くなりすぎていた。
訓練の成功という文字が増え、失敗が無くなっていく。同じ訓練を繰り返していたならば道理であるが、訓練内容は日々激化していく。
比例するように増えていくＩＳ稼働時間。学園で過ごしている時間を除けば殆どが訓練に費やされている。
「ま、待ってください。穂次はちゃんと寝ている筈です！」

「そうですわ！　わ、わたくし達がちゃんと確認もしてます！」
「――教師として、その発言は咎めるべきなのだろうが、まあいい。その為の指導室でもあるからな。
　けれど、データではあの阿呆は睡眠時間すらＩＳを稼働している。尤も、データが動いているだけであって装甲が出ているという訳ではないだろうがな」
「……織斑先生は何か知ってるんですか？」
「確証が無い。何にせよ、夏野はオーバーワークである事は変わらん」
「わたくし達に……どうしろと言うんですの？」
「泣き落としでも何でもいい。あの阿呆を訓練から遠ざけろ」
「お、織斑先生が言えば――」
「言った所でアイツは訓練を続けるさ。そもそもアイツが訓練を続ける理由を作っているのはお前達でもある」
「私達が？」
「……口が滑ったな。これ以上は直接本人に聞け」
　自分の不足を呪うように溜め息を吐き出し、千冬は席を立つ。二人が机に置いた資料を奪い、扉を開いた。
「それと、ココであった話は外部に漏らすな。特に夏野には絶対にバレるな」

「……はい」
「では、任せたぞ」
いつものように冷たさを含む笑みを浮かべて千冬は扉を閉めた。
指導室の椅子に体重を預けた二人はぼんやりと天井を見上げる。
――どうして訓練を続ける理由が自分達に繋がるのか。
二人はその真実を知らない。けれど、ソレを知らなくてはきっと彼を止める事など出来ない、という事だけはわかった。
度が過ぎる稼働時間。彼の特性を考えれば精神的疲労は想像を超える筈だ。そんなモノを続ければどうなるかなんて、分かりきっている。
だから――彼を止めなくてはいけない。どんな理由があったとしても。

「うん、まあ二人の主張はわかったよ。ああ、わかった」
「わかってくれて何よりですわ」
シャルロットとセシリアの深夜訓練を知っている事を少しばかり訝しげに思いなが

らも、「休め」という二人の主張はしっかりと聞いて、理解もした。
　別に主張を聞き入れた訳でもない穂次としては訓練を休むつもりなど毛頭ない訳であるけれど、二人に真っ先に聞かなくてはいけない事があるのだ。
「それで――……
　俺が縛られている理由は何なんですかね？」
「うん。穂次は休まないとダメだよ」
「ねぇ！　俺の話を聞いて!?　無視しないでっ！　ほらよく考えて！　休まないといけない事は分かったけど縛られるのは違うと思うんだっ！」
「なるほど……休むつもりはないということですのね」
「違ェよ！　そうじゃねーよ！　オカシイだろ！　休ませようとしている相手をロープで縛るとかオカシイって話だよ！　そういうプレイなら事前に言ってって言ってたよね!?　俺言ってたよね!?」
「ちょっと黙ってくれるかな？」
「アッハイ……ごめんなさい」
　自室の椅子に縛られて身動きが取れない穂次にニッコリと笑いながら口を閉ざすように命令したシャルロット。その素晴らしい笑顔に何を感じたのか、穂次は先程まで忙しく喋っていた口を閉ざして背筋を伸ばして佇まいを直した。決して怖かった訳では

ない。
　へらりとした笑いはいつも通り浮かべてはいるけれど穂次の頭の中は混乱の真っ只中である。縛られている事自体は別にいつも通りだと言えるけれど、今回ばかりはさっぱり理由がわからなかった。いつもわかってなど無いけれど。
　そもそもどうして訓練の事がバレているのだろうか。その理由もさっぱりわからなかった。
　その時穂次の頭に電流が走る。決してそういった趣向の拷問を受けている訳ではない。
「なるほど……コレはそういう理由に託つけたプレイなんですね――うわーすげー冷たい目だー」
「ちょっと黙ってくださるかしら？」
「アッハイ……ごめんなさい黙ります」
　決して怖かった訳ではない。これだけは真実を伝えておかなくてはいけない。例え縛られている椅子がガタガタと震えていても、ソレは穂次の感情とは一切の関係は無いのだ。
　セシリアとシャルロットは冷ややかな視線を穂次に浴びせながら思考する。とりあえず、捕獲は完了した。あとは徹底して理詰めしていけば、この阿呆は停止するだろう。

そこそこに頭の回る存在であることはわかっているし、穂次の行動原理が一般常識に基づいている事もわかっている。その一般常識に基づいた行動がいき過ぎているから今回問題になっているのだけど。

「それで、どうして無茶をしますの？」

「……」

「黙ってちゃ、わかんないよ。穂次」

「……」

穂次は決して喋らない。懇願するように言葉を放った所で穂次の口は今は開かない。

数秒ほど、お互いを見つめ合う沈黙が続き、シャルロットがふと気付く。

「――喋っていいよ、穂次」

「いやー、黙れって言ったり、喋れって言ったり忙しいッスねー」

「……」

「セシリア!?　銃口がコッチに向いてるから！　死ぬから！　ソレは死んじゃうから!?」

「そうですわね」

「ひっ!?　俺は悪く無いだろ！　理不尽だ！　訴えてやるっ！」

「多数決で今から裁判でもする？　ちなみに私は有罪に入れるけど」

「俺が有罪確定じゃないですかヤダー！　ふぇぇ……どうすればいいんだよぉ……」
「それで、喋りますの？　永遠に黙りますの？」
「片方が死んでるんですがソレは……」
「そうですか。わたくしも悲しいですわ」
「なんで後者を選んだ事になってんですか!?　喋るから！　もう何でも語っちゃうっ！」
　その言葉でようやく目の前から銃口が消えて、ホッと一息吐き出した穂次。えー、と口に出しながら視線を巡らせて言葉を選ぶ。
「俺って何から喋ればいいの？」
「全部だね」
「全部に決まってますわ」
「おっぱいが好きで――ごめんなさい、真面目にしますゴメンナサイ。そんな目で俺を見ないでください」
　結局、何を語ればいいのかわからずに、誤魔化すように冗談を口にすれば絶対零度のような視線が穂次を突き刺した。
「えー、あー、」と言葉を改めて選びながら、逃げれない事を悟り、穂次は小さく息を吐き出した。

「えー、……よりにもよってセシリアとシャルロットに言うのかー」
「何か問題でもありますの？」
「問題というか……なんというか、言いたくないってのが本心」
「……わたくし達はそこまで穂次さんに信用されてませんのね」
「そっ……か」
「いやいやいや、違うから、えっと、そういう事じゃなくて……あー！　もう！　なんて言えばいいかわからないんだって！」
「言いたくないのでしょう？」
「うっ……それはそうだけど……でも、セシリア達を信頼してない訳じゃないから。ほら、えっとアレだ。彼氏に隠れて料理の勉強してる感じなんだよ」
「どうして彼氏が例えに出たのかな？」
「そんなに目を輝かせても俺から出てくる答えは恋愛小説参照だから、シャルロットの喜ぶ答えは返ってこないゾ！」
「なるほど……言いたいことはわかりましたわ」
　穂次の言葉に穂次の言わんとしている感情を理解したセシリア。確かに、自分も穂次に隠れて料理の勉強をしている。ソレを穂次に聞かれればテキトウに誤魔化してしまうだろう。

言いたくない、という感情はよくわかった。だからこそ、口元がニヤけそうになる。ヒクヒクと口角が動き、セシリアは耐えられずに口元を手で隠して背中を向けた。
「じゃあ穂次、言おうか」
「鬼畜ゥ！　言っても俺が恥ずかしいだけなんですけど……」
「恥ずかしがってる穂次を見たいから聞くんじゃないか」
「コレが真性鬼畜ってヤツですね、間違いない」
「えー」と声を漏らしながら、何処から、何から話そうかと思考を巡らせる。途中でどうせ全部語るんだしいいんじゃないだろうか、という鬼畜（天使）の囁きもあったが穂次は必死で考えた。
　ともあれ、最初に言わなくてはいけないことがある。
「そもそも俺は無茶してないんですが……」
「……」
「ほ、ほら、無理って言葉は嘘つきの言葉なんですよ？　血反吐を吐いても出来りゃぁ無理って言葉は嘘に――」
「そういうのはいいから」
「というより、血反吐を吐いている時点で無茶はしてますわ」
「でっすよねー……でも、ほら、俺って弱いじゃん」

「先日の無人機戦を見ている限りそうとは思えませんが？」
「それでも弱いよ。だから、俺は強くならないと、強くならないと――」
まるで呪文のように二度呟いた穂次はやはりへらへらと笑っていた。けれども声だけはまるで使命を帯びたようにハッキリとしている。
「強くないと、二人を守れないじゃないか」
「――は？」
「あの時だってもっと早く気付いていればセシリアを守れた。あの時ももっと早く敵を倒せていればシャルロットを守れた筈なのに――」
へらへらとした笑いが崩れそうになり、必死でソレを取り繕おうと更に表情が歪む。憎い相手を呪うように、言葉が穂次の口から溢れていく。
ソレは渇望だった。ソレは否定だった。ソレは彼の欲望だった。
ただ純粋な願いの形だ。誰かを守る為には強くなくてはならない。だからこそ彼は力を求めた。求め続けた。自身の出来うる事は全て手を付けた。けれど足りなかった。だから穂次はもっと力を求めた。自分の肉体や精神などどうでもよかった。むしろ壊れてしまえと願った。壊れれば辛さもなくなる、そうなれば大好きな二人を単純に守る事が出来る。
不必要な自分が必要とされる為。過程である努力など、無茶などではなかった。そん

な事で不足が生じるのなら、自分を襲った虚無感を味わうぐらいならば。
「バカですわね」
「えぇ……」
「そうだね」
「そもそも、わたくしがサイレントゼフィルスと戦って負傷したのはわたくしの責任ですわ」
「私が無人機に攻撃された時も、私の不注意だからね」
「だから穂次さんが変に責任を感じなくても大丈夫ですわよ」
「私達は穂次(騎士)に守られるだけのお姫様じゃないんだからね」
「それは――……わかってるけど」
愛しているから守りたいという訳ではない。守りたいから愛しているのだ。
だからこそ、守らなくても良くなれば――穂次は否定する。無価値な自分でも、手が届かなくても、二人の事が好きなのだ。好きで好きで、だから自分何かが触れてはいけないと感じてしまう。
どこか納得のしていない穂次に気付いたのか、セシリアは呆れたように小さく溜め息を吐き出して縛られている穂次の手を取る。
「穂次さんはわたくし達が悲しむ事も嫌なのですわね？」

「まあ……」
「それじゃあ、これ以上の無茶はやめてくれるよね？」
「いや、それとコレは話が」
「うわー、穂次が無茶すると悲しいなー。好きな人が無理をしてるのは嫌だなー」
「そーですわー。悲しいですわー」
とんでもない棒読みだった。けれどもソレでも穂次に対しては大ダメージだったらしく、「うぅう」と唸っている。
「だから、今日は休もうよ」
「でも――」
「でも、も何もありませんわ。穂次さん」
顔を寄せて真剣な表情で見つめるセシリア。当然、意味もなく、打算も何もなくそんな行動をしている訳ではない。穂次の弱点などお見通しなのだ。
ジィ、と見つめていると徐々に顔が赤くなっていく穂次。彼の頭の中では「いけません、いけませんわ！　お代官様！」と言っている穂次と「良いではないか、良いではないか」と笑んでいるセシリアがいる。配役逆であったならばどれほど良かっただろう。
彼の脳内の出来事はさておき、セシリアは縛られている穂次の手を撫でる。そして穂次の頬に柔らかい感触と鼓膜が小さく音を拾った。

「あー!!　セシリアズルい!!」
「ふふん!　こういうのは早いもの勝ちですわ!」
「いいもんね、私もするから」
セシリアとは逆の頬に柔らかい感触が触れ、スグに離れる。
ようやく何が起こったかを理解した穂次の顔が真っ赤になり、バスン、と音を立てるように目を回す。
ぐったりとした穂次を見て、セシリアとシャルロットは顔を見合わせて、微笑み合う。
改めて彼の頬に唇を落として、優しく彼に微笑んだ。

◆◆

「あぅあぁぅあぅあうあぁああ――――……」
真っ白と真っ黒の世界。カラカラと白い絨毯に転がりながらコチラに来る直前の事を思い出して顔が熱くなる。
そんな俺を見ながら口をへの字に曲げる村雨。
「来て早々、情けない声じゃのぅ……主」
「うっせー、うっせー、ばーかばーか」

「そんな事じゃから〝へたれ〟などと言われるんじゃ」
「うぐ……自分の武器にも言われるとか」
「そもそも、さっさとヤればいいじゃろ。お互いに好いておるんじゃろ？」
「ヤっ、てお前……」
両手を組んで胸を強調している村雨に視線を強めに向ける。
「俺がそんな事出来ると思うのか！　したいけどな！」
「へたれじゃのぅ……」
「うっせー！　お前は誰の味方なんだよ！」
「妾は主の武器じゃが？」
何を当たり前のことを聞いてるんだ？　って顔はやめてもらっていいですかね……。
俺の立つ瀬がない。いや、元々ないけど。
かしゃり、と絨毯を鳴らして胡座をかく。
「それで、主は休むのか？」
「まあ、セシリア達に言われたし……」
「……妾は別に構わんがの。ソレにあまり無理をして主に継承する意味もないからのぉ」
「つーか、どれだけ進んでるんだ？」

「ふむ……小刀二刀、槍、斧、弓。これらはある程度なら戦えるじゃろう。鬼相手なら目眩ましにもならんがの」
「アレでまだ勝てないのかよ……」
「当たり前じゃろ。ソレに妾以外ではアレに勝てんからのぉ」
「……それはわかってるよ」
「――ならば良い」
近くにあった槍をクルクルと弄びながら、その穂先を俺の頸へと勢い良く向け、寸前で停止する。
俺が微動だにしなかった事が嬉しいのか、それとも俺を殺せる事が嬉しいのか、村雨はその口をニタリと歪ませる。
「さあ主。妾の準備は出来ておるぞ。あとは主が踏み出すだけじゃ」
「……わかってるよ」
「クヒッ、ならば重畳。主の欲望が尽きない事を心から願うておるよ」
村雨は喉を鳴らして笑い、俺の頸を弾き飛ばした。
俺の意識はゆっくりと浮上していく。

優柔不断ヘタレ男の決断

「さて、どうすっかね」

食堂で欠伸を一つ噛みながら淹れられた珈琲を口に含む。ほのかな苦味と酸味に舌鼓を打ち、スティックシュガーを入れる。

へっへっへ、お前は甘くなるんだよぉ！

こういったボケを口に出さないのは俺の近くにいる筈の一夏が居ないからだ。ＩＳの調整、そしてデータの採取の為に倉持技研へと向かっているらしい。先ほどから携帯に「向かってる途中暇すぎる」という内容のメールが写真と一緒に送られてきている。どれだけ山奥にあるんですかね……。

ソレを言い始めると『村雨』を作った所も大概山奥だから何も言えないか。

二本目のスティックシュガーを入れ終わり、カチャカチャとマドラーで混ぜる。飲み込めば先ほどよりも幾分も甘い珈琲が俺の舌を蹂躙していく。僅かな苦味と強い甘みを少しだけ転がして、喉に通す。珈琲特有の香りが鼻から抜けて、口元が少しニヤけてしまう。紅茶も好きになったけれど、珈琲も好きと言えるかもしれない。

こうして考えると〝好きなモノ〟は少なかったんだなぁ、と変に感慨深く思ってしま

う。思った所で一銭の価値にも成りはしないけど。
「なんだ、珍しいな。珈琲とは」
「んー、俺としては、俺単体に絡んでくるラウラさんの方が珍しく見えるけど？」
「そうか？　……そうだな」
　俺の対面に座ったラウラさんを眺めながら珈琲を飲み込む。別に沈黙が嫌いな訳でもないし、ラウラさん自身も口数が多い方ではない。
　こう言ってなんだけれど、一夏が居ない平穏もある事が証明されたな。というか、アイツが基本的な争いの中心に居るような気がしてきた。たぶん気のせいでもない。
　それにしても美少女だなラウラさん。強気な瞳が今は伏せられているし、いつものような軍人らしい雰囲気は抑えられている。ゴスロリっぽい服装とかも似合うだろう。着た際には是非とも写真を撮らせてほしい。一夏あたりに頼ませれば着てくれるかもしれないな……一夏が拒否しそうだけど。
「その……穂次」
「ん？　どったの？」
「……お前はセシリアとシャルロット、ドチラが好きなのだ？」
「ッ、ゲホッ、ゲホッ。何、急に？」
「お前の事を我が隊の副隊長に聞いてみた結果だが？」

噂の副隊長殿か。ラウラさんに不必要極まりない情報を渡している張本人か。いや、一般論的にはラウラさんの指摘も正しいんだろうなぁ。

俺だってあんな美少女二人に釣り合ってるとも思ってないし。机に置かれているペーパーナプキンで口元を拭き、どうにか逃げれないかを模索する。ラウラさんの真っ直ぐな目から逃げれる訳ないじゃない！

「あー……ほら、えっと――ええ」

「なんだ、ハッキリしろ」

いつもの軍人らしい雰囲気を取り戻したようなラウラさんに情けなくへらへらと笑ってしまう。俺の中でドチラか、という選択肢は無いのだ。ドチラかに順位を付ける事すら烏滸がましい。こうして客観的に自分を改めて見れば糞野郎という事を理解してしまう。

それでも糞野郎は二人を一緒に選んでしまう。糞野郎らしく、という事ではないけれど。ドチラも幸せにする、なんて主人公みたいな事も言えないけれど。

「――ドッチも好きだよ」

「……そうか」

「ありゃ？　てっきりラウラさんだから俺の事を優柔不断のクズ男みたいに言うと思ってたけど」

「？　両方が好きならば仕方ないだろう」
「……うわ、なんだろ。その何言ってんだコイツみたいな目は。俺の葛藤は何だったんですかね」
「そんなモノ私が知るわけがないだろう」
「でっすよねー」
　ホント、俺の葛藤は何だったんですかね……。頭を掻きながら、自分の感情を後押しする〝何か〟を流し込む為に珈琲を飲み干す。
「二人とも大切ならばソレでいいんじゃないのか？」
「……」
「なんだ、その目は」
「いや……なんつーか、ラウラさんってド直球な事を言うなーって」
「ソレは、褒めてるのか？」
「褒めてるよ。ホント、ありがとう」
「む……お前から感謝されると不思議な感覚だな」
「俺が普段感謝してないみたいな言い草はやめてもらえますかね……」
　溜め息を吐き出して天井を見上げる。迷っている自分がバカのように思えてくる。
いや、バカだけど。

確信をそのまま言われた感じがする。まあ俺が糞野郎である事は変わらないけれど、自分の中で何かが進んだ事も確かだろう。

「それで、ラウラさんはソレを聞いてどうするのさ」

「む……その、だな……」

「お兄さん、何でも答えるよー」

「……その……、一夏は私の事をどう想っているかをだな」

「ラウラさんは好きだと思うよ。アイツあれでも一定以上女の子から距離置いてるけど、ラウラさんとかは普通に距離は近いし」

「そ、そうか！」

「そうそう。ゴスロリ服とか着て、一夏に迫れば一発だな。間違いない」

「な、なるほど！　『ごすろりふく』だな！」

「正式名称『ゴシックロリータドレス』だ。詳しいことは副隊長殿に聞いてくれたまえ、ボーデヴィッヒ少佐。健闘を祈る」

「感謝する。夏野二等兵」

お互いに形だけの敬礼を取り、口元だけで笑う。すまない、ラウラさん。でも俺は君のゴスロリ姿が見たいだけなんだ……！　あとは一夏が慌てふためく姿を見たいだけなんだ！　許してくれ。

でも何かと言って、一夏も可愛い物は好きだろうし。姉属性寄りのシスコンだけど、年上好きって訳でも無さそうだしなぁ。――まあホモだから仕方ないか。

ククク、一夏は俺に感謝するに違いないな！　なんたって間違った知識しかない副隊長殿に全てを一任したのだ！　いっそ肌が見えすぎたゴスロリ服かもしれない！　写真を撮って貰わないと……！

そんな俺を罰するように、何かが切れたように食堂が暗闇へと包まれた。幸い、昼間という事もあり日の光が入り込んでいたが、ソレも防火シャッターが降りたことで無意味となった。

心の中で二秒数えて携帯を取り出して明かりを確保する。

「どう思う？」

「非常灯もつかない、緊急用の電源にも切り替わらない。電源切られた可能性はあるけど、ＩＳ学園の警備網を潜ってわざわざ電源消す意味はねーでしょ。もう侵入してるんだし」

「つまり、システム面か……」

ふむ、と唸っているラウラさんを尻目にセシリアとシャルロットに連絡を取る。

『ハァァロォオオオ！　無事ッスかねぇ？』

『発音がなってないですわ。無事ですわ』

『コッチも無事だよ。今度発音の勉強もしようね』
『ええ……』
ふざけて言った発言がまさか駄目出しを貰うなんて……。いや、まあ無事でよかった、と言うべきか。
明かりの確保だけしてもらい、携帯をポケットの中へと入れて村雨をローエネルギーモードで起動する。消えていた左目の視界が戻り、辺りを認識する。
「穂次。左目は――」
「カッコいいだろ?」
「……はぁ、ソウダナ」
「いやー、棒読みいやぁ!」
恐らく染まっている左目を見たラウラさんにへらりと笑って誤魔化す。別に痛みも何も無いのだから問題ないし、コレは心配されるような事でもない。
織斑先生からの通信が入り、転送された地図の目的地……地下のオペレーションルームへと移動していく。幸い、コチラには軍人であるラウラさんがいるのだ。何の心配も無い。
問題があるとするならば、俺がラウラさんを苛つかせて殴られるかどうかぐらいだろう。

「電脳ダイブ、ねー」

織斑先生から長々と説明された内容を頭の片隅へと追いやり、掻い摘んだ事を頭の中で整理していく。

独立したＩＳ学園のシステムにＩＳコアを用いた電脳ダイブをして、侵入者をぶっ潰せ。というのが織斑先生から説明された事だ。あの目はマジだった。

驚いているセシリア達を尻目にどうしたモノかと考える。

「夏野。お前は電脳ダイブに慣れているだろう」

「まあ……似たような事はずっとしてましたし」

「お前は確実に電脳ダイブするように」

「えぇ……辞退は自由だって言ってたじゃないですか……」

「なんだ、人生も辞退したいならそう言えば――」

「わーい！　電脳ダイブ！　穂次、電脳ダイブダーイスキー！」

「うわぁ……穂次くん、こういうのに弱いのね」

「更識会長、俺は死にたくないんです。そして織斑先生に逆らう事は死に繋がるのんですよ」
「なるほど……さすが穂次くんね！」
「お前ら……」
苛立っている織斑先生がおっぱい先生――おっぱいに宥められて、溜め息を吐き出す。俺をスゲー睨んでくるオマケ付きだ。実際怖い。
逃げるようにアクセスルームへと入り込み、村雨へと視線を落とす。彼女を経由する、という事は色々と問題になりそうだけれど、どうにかなるだろう。
俺の後から入ってきたセシリアとシャルロットを見ながらへらへらと笑う。
「大丈夫ッスよ。危険なんざないし、気楽に行きましょ」
「なんでアンタはそんなに楽観的なのよ」
「こういうのは楽しんだ方がいいっショ。まあ、一定の緊張を持つのはいいけどね」
「お前は……いや、元々お前はそういうヤツだったな」
「箒さん、スゲー含みのある言い方はやめてもらっていいッスかね」
「お前は元々阿呆だったな」
「ドストレードになったよぉ……」
「それで簪。私達はどうすればいい？」

「えっと……みんなはイスで楽にして、私は向こうのデスクでバックアップするから……」

　簪さんの一言にみんなの視線がベッドチェアへと向き、触り心地などを確かめている。僅かに硬いソレに横たわり、ＩＳを接続する。

「そういえば、穂次は電脳ダイブみたいな事をしてるって言ってわね」

「ん？　まあ、似たような事だけどね」

「……ちなみにどんな感じなの？」

「うーん……仮想現実で訓練ばっかりだったからなぁ。参考にならないッスよ」

「……穂次さん。コレが終わったら説教ですわ」

「ヒェッ……あの日からは全然入ってないから許し下さい」

「お前が努力しているという時点で信じられないのだが……」

「……普段サボってる分わね。ま、俺の事はいいでしょ。別に危険もねーし、適度に頑張りましょ。ほら、もしも危険があって、向こうで囚われたりしてもヒーローが助けてくれるだろ」

「……そうだな！」

「いやー！　危険があったら仕方ないわね！」

「？　どういう事だ？」

「ラウラさん。危険だったら一夏が助けてくれるんですよ！」
「嫁を危険な目に合わせる意味はないだろう」
「……」
「どうした、急に黙って」
「いや、なんか……こう、自分の浅はかさが嫌になってきたから、うん、ごめん」
「それで、穂次さんはわたくし達を助けてくれますの？」
「その場合、俺も囚われてるんですがソレは……」
「囚われた穂次を助けるのもいいかもね！」
「そうですわね」
「なんか男としてスゲー情けない事を言われてる気がするゾ！」
「えっと……始めても大丈夫……？」
「むしろ早く始めて。早く俺をこの空間から逃げ出させて！」
「う、うん！」
意識が落下していく。
ゆっくりと、力が抜けていく。

ブワリと意識が急浮上した。
見渡す限りの草原に俺は立っていた。初夏を思わせる日差しと、草を撫でていく風。
俺は耳が飛ばされないように抑えて、自分の恰好を改める。締められた蝶ネクタイとベストにズボン。幸いシャツは許されたようで肌の露出は少ない。頭の圧迫感を確かめれば藁の付いたウサミミが着けられている。どうやら外せない仕様らしい。
自分の恰好をあまり確認したくない事を思いながら辺りを改めて見渡す。
「おお……」
思わず感嘆してしまったのは仕方ない事だ。青のドレスに白いエプロン。まるで不思議の国に迷い込んだ少女のような恰好をしているセシリアとシャルロットが居たのだ。
写真とかって撮れるのか？　仮想現実だからＩＳの録画機能を使うことは出来るのだろうか。
「ギャー！！　何よ、この恰好！」
そんな実に女の子らしい鈴音さんの声に意識を戻す。どうやら鈴音さんも同じ恰好をしているらしい。写真でも撮って一夏にプレゼントしなきゃ……！
「全員……」
「同じ恰好……」

「もしかして穂次さんも!?」
「穂次は何処!」
「なーんでそんなに必死に探すんですかね。残念ながらドレスじゃねーよ、アリス達」
三月ウサギらしく仰々しく一礼をしてみせる。へらりと笑う事も忘れてはいけない。
「アンタも凄い恰好ね」
「アリスに対するなら三月ウサギだろうな。そこまでアリスに詳しい訳じゃねーけど。この調子だと一夏は帽子屋にでも扮してくれるんじゃね?」
「穂次さん、その耳、とても可愛いですわ」
「そりゃーどーも。スゲー嬉しくない発言だよ。箒さんとか俺みて爆笑してんじゃん」
「いや、ふひ、スマ、フフ……ゴホン、スマン。別に笑っていた訳ではないフフフフフフ」
「取り繕えてねーよ……」
溜め息を吐き出して、アリスの世界を思い出す。この調子なら、どこかに猫か白いウサギでもいるかも知れない。そういう事ならば、この世界は随分と平等な世界だ。
カタカタとキーボードを叩く音が広がり、何処からか簪さんの声が響く。
『ぷっふっふふ……ウサギさん、穂次ウサギさん』
「うぉい! 簪さん!? 笑う為に通信開いたの!? つーか、コッチをモニタリング出来

てるんだな！　スクショ撮って！　セシリアとシャルロットをちゃんと撮って！　そしてそのデータを俺にください！　お願いします！」
『任せて……。穂次くん一杯撮る、よ！』
「違ぁう！　そうじゃない！　頼むよボス!!」
『……ボス禁止』
「あっはい」
ボス禁止だけすごく冷たい言い方でした……。なんでなんですかね。いや、いいけど。
あと俺の後ろでセシリア達がデータを渡してくれと懇願しているような気がするが気のせいだろう。うん！　ウサミミの男とか得しないから。
「それで？　現状どうなってんの？」
『電脳世界がハッキングを受けてて……皆さんには与えられた役を、演じてもらう必要があるの』
「役ぅ!?」
「鈴音さんはアリスって言うよりも……ハートの女王だもんな」
「アンタぶっ飛ばすわよ!?」
「アリスって事は……」

シャルロットが呟いて俺とラウラさんを見比べる。ラウラさんは首を傾げているが、俺は首を横に振る。

「たぶん、俺もラウラさんも白兎じゃねーよ。ラウラさんは明らかにアリスだし」

「ふん。そもそも白ウサギなどという軟弱な存在と比べるな」

「ウサギに軟弱とかあるのかよ」

「穂次さんは違いますの？」

「時計無いし。何より頭に藁付いてるから俺は三月ウサギだよ」

配役に悪意を感じるけれど、俺にドレスを着せなかった事だけは感謝しよう。

と、視線を向ければ白い塊が移動していた。

「おい、アレじゃね？」

「ホントだ！」

「待てぇえええ――……ああ！　もうスカート走りにくい!!」

慌てた白ウサギを追う、忙しないアリス達。俺は立ち止まり、溜め息を吐き出す。

『穂次くん？』

「いや、俺は白ウサギを追えないからな」

三月ウサギはこの時点で登場しない役柄だ。だから白ウサギを追うのはオカシクなってしまう。

そんな、当然の事実を口にして後ろを振り向く。そこには先程まで無かった扉が一つ。
「簪さん。俺はコッチみたい。たぶん、通信も届かないと思うから、みんなをよろしく」
『うん……頑張って』
「任せな、ボス」
『……うん』
ヘラリと笑いながら、扉を開き、その中へと入る。
真っ白い空間。地面も天井も何も無いような、真っ白い空間。ソコにポツンと人影が見えた。
機械式のウサミミとアリスに似たドレスを纏う美女。恐らく今回の元凶。そして、共謀者。
「やぁ！　三月ウサギくん。狂ってるかい？」
「どうも、アリスさん。相変わらず天災的な出迎えだよ」

理想世界の主

その世界は――ただ普通（イビッツ）だった。
決して地面から生えているビルが捩じり曲がっている訳ではない。
決して壊れた武器がソコらに転がっている訳ではない。
決して地面が白骨に隠されている訳ではない。
決して太陽の昇らない漆黒が空を覆い尽くしている訳ではない。
至って普通の世界。
その世界をゆるりと歩きながら男はへらりとした笑みを浮かべ続けた。
誰も男に見向きもしない。誰も男の存在など知らない。男は存在などしない。
男は誰にも視線を送る。男は誰でも知っている。男は確かに存在していた。
男は世界（日常）を眺めながら、作り上げた積み木を見るように、少しの達成感を含んだ笑いを浮かべた。

織斑一夏にとってソコは眉を顰める程、歪（フツウ）だった。
IS学園という舞台で、平々凡々な日常が流れていく。ソコには篠ノ之箒も凰鈴音もセシリア・オルコットもシャルロット・デュノアもラウラ・ボーデヴィッヒも更識簪もいる。更識楯無だって、織斑千冬だって存在していた。
そこに自分が追加されたにも関わらず、その世界は織斑一夏を容易く受け入れた。
姦しく騒ぐ女の子達。自分を叱る姉。やんわりと自分を窘める温和な先生。人誑しのような先輩。一夏はそれを日常だと認識出来た。同時にそれが歪である事も理解出来てしまった。
それこそ——それが世界の異物である織斑一夏の役目でもあった。
姦しく騒いでいた幼馴染達に気付かれないように移動を果たした一夏は空を見上げてボソリと言葉を呟いて眉を顰めた。
「簪さんへの通信は切れてる、か」
現実世界に置いて自分を見守っているであろう気の弱い友人を思い浮かべて、悩むように一つ唸る。
一夏はココが電脳に作り上げられた世界である事を知っている。そして、この世界の役割が『夏野穂次を捕らえる為』という事も知っている。だからこそ、この世界が歪だと言えたのだ。

体感時間にして数分前、アリスに扮した少女達を助けた一夏はお礼の言葉と一緒に背中に蹴りをもらってこの世界へとやってきた。

アリス達の世界はそれこそ彼女達に甘い世界だと言えた。全てを肯定される世界と言ってもいい。夢の世界――その中に登場していた織斑一夏（自分）や夏野穂次（親友）を打倒して、「なぜ自分があの場に居たのか？」という疑問をアリスにブツケて蹴りと罵倒と冷たい笑顔などを頂いた一夏である。追加するように言えば、更識簪からは「……唐変木」という言葉を吐き出された訳だが。

ともかくとして、一夏はこの世界が残った親友に肯定的な世界である事をなんとなくではあるが、理解して挑んだ。それこそ、全裸の少女達が並んで親友に奉仕している姿を覚悟して、自分に扮した何かがまるで奴隷なような扱いを受けている事も覚悟してこの世界へと挑んだのだ。

蓋を開けてみれば、その世界は普通（イビツ）でしかなかった。

今までの世界ならば、自分――或いは親友――を倒して、アリスを現実へと目覚めさせる。そういった工程を踏んでいた一夏にとって、この世界はお手上げであった。

なんせ助けるべき存在がいないのだ。

夏野穂次。助けるべき存在。この世界に居なくてはならない存在。けれど、その姿が無い存在。

「あら、一夏さん。お困りですの？」
　ビクリ、と一夏は背中を揺らして振り返った。ソコには太陽を照り返す金色の髪を揺らした少女が疑問と微笑みを浮かべていた。
　一夏にとってはよくわからない何かを奪い合う少女達の戦い。その戦いにこの少女もしっかりと参加をしていた。だからこそ、違和感があり、怖くもあった。
　一夏は空をもう一度見上げて、意を決して口を開く。
「なあ――、穂次を知らないか？」
「ほつぎ？　なんですのソレは……」
「あー……いや、なんでもない」
「変な一夏さんですわね」
「あはは……そうだな」
　変なのは、少女である。そんな事を一夏は吐き出さなかった。乾いた笑いを浮かべて、どうにか表情を取り繕う。そうでもしなければ、吐き出してしまいたい気持ちで一杯だった。
　自意識が薄い、という事は聞いていた。聞いていただけで理解などしていなかった。ようやく一夏は理解した。
　全てを肯定されるような、夢のような世界であっても――いいや、夢の世界だからこ

そ、ソコに不必要なモノは存在出来ない。だから、穂次は存在していない。

強く拳を握りしめて、少女の前からどうにか逃げ出して一夏は痛くなる程に歯を食いしばった。

「――……馬鹿野郎」

小さく呟いた言葉が空気を揺らし、壁に強く拳が打ち付けられる。

こんなモノ、夢である訳が――理想である訳がない。自分にとってステキな世界に自分が居ないなんて、そんな事が許されて良い訳がない。

「つざけんな！　穂次！　居るんだろ！」

親友だから。親友として。少なからず穂次に影響されていた一夏は叫ぶ。冷ややかな瞳を向けられても関係ない。そんなモノこそ不必要だ。

居ないはずの男の名前を叫んで、一夏は辺りへと視線を向ける。

人、人、人人人――。忙しなく巡る存在達を見送り、その奥に立っていた男に気付く。

〝のっぺらぼう〟のように瞳も口も描かれていない仮面で隠れた顔。ＩＳ学園の男子制服を着た存在は丸いテーブルに肘を付き、気怠げに積み木を重ねている。

「穂次ッ！　退け、退けよ!!」

「――――……」

人混みを掻き分けて、一夏は男へと向かう。一夏の荒げた声に反応したのか、男は無地の顔を一夏へと向ける。

男は静かに重ねた積み木の一つを掴み、ゆっくりと抜き取り――捨てた。

「おわっ!?」

驚きを隠そうともしない一夏はべしゃりと自分の勢いを殺せずに地面へと転げた。カラン、と一夏の前に捨てられた積み木。男は溜め息を吐き出したのか肩を下げて、気怠い様子のまま椅子に深く腰掛ける。

「穂次、助けに来たぞ!」

「……――なぜ?」

「なんで、って……ココは現実じゃないだろ」

「そうだな」

一夏の言葉に対して肯定した男は無地の顔を世界へと向けた。

「……――それでもココは平和だ」

「それは……」

「誰もが幸せで、誰もが優しくて、少しだけ騒がしい、ステキな世界じゃないか。何が不満なんだ?」

男は机に置いた積み木を指一つで傾けながら、疑問を言葉にする。

男の言葉通りならば、この世界は人間が描く普通の世界だ。優しくて、悪意が無く、幸福が少しあり、少しばかり騒がしい。そんな普通を描いた理想世界。

一点を除けば、一夏もこの世界をある程度は肯定しただろう。けれど、その一点だけが織斑一夏にとっては許せなかった。

「お前はどうなんだよ」

「……俺？」

「そうだよ。お前は幸せなのかよ」

「俺なんてどうでもいいだろ」

「どうでもよくねぇよ！」

泣きそうな顔で一夏はそう叫んだ。誰しもが幸せになる。そんな世界に親友がいないなど、そんなモノを認められる訳がない。

男はそんな一夏の声に反応も示さずに、積み木をゆっくりと重ねる。まるでソレが義務のように。

「どうしてお前が幸せじゃない世界なんだよ！　もっと求めてもいいだろ！　なんでお前だけが居ないんだよ！」

「……――ないだろ」

「答えろよ！」

「仕方ねーだろ!!　俺だって幸せになりたく無い訳じゃねェ！　俺だって不幸が好きな訳じゃねェ！　それでも――仕方ねーだろ！」
「なんでだよ！」
「――んだよ！　他人の幸せを願っちゃダメなのかよ！　誰かの為に頑張っちゃいけねぇのかよ！」
「そうは言ってねぇだろ！　なんでその幸せにお前が居ないんだよ！」
「俺が居るよりも幸せなんだから仕方ないだろ！」
「そんな事ねぇよ！」
　男が手に持っていた積み木が滑り落ち、机に重ねていた全てがガラガラと崩れ落ちる。
　〝のっぺらぼう〟の仮面がひび割れ、一部だけが剥がれ落ちる。ソレを覆い隠すように男は手を顔に被せた。
「……――本当ニ、ホントウにおレが幸セになってもいいノか？」
「ああ、本当だ」
「――あア……」
　男の手から白い欠片がバラバラと音を立てて崩れ落ちる。まるでソレを待ち望んでいたように、男はゆっくりと手を降ろしていく。

――そこには何もなかった。

あるのは底の見えない黒だけ。黒。不思議と一夏は〝顔〟であると認識はしたけれど、ソコには表情も目も鼻も口も肌も何もかもが無い〝黒〟しかなかった。

「ありガとう、一夏ァ、フヒ、ヒッヒッヒヒ！　これで、ヒヒヒヒ、俺はお前に成れるよ！」

「――ガッ」

男は一夏の頸を掴み力を込める。〝黒〟がジワリジワリと肌色に侵食されて、その形を作っていく。一夏はその顔に目を見開きながら、男の腕を掴み首の拘束を阻む。

男の顔を一夏は知っていた。何度も鏡で見た顔だ。知らないわけがない。

「あァ、成るように成るさ！　ひひっ、ヒッフヒ!!　俺はやっと主人公に成れるんだッ！」

男の叫びを耳にしながらも、一夏の目が霞んでいく。

噎い、噎い、噎い、噎い。喉を引き攣らせて噎う一夏。そして既に手の力があまり入らない男。

フワリと一夏の肌に風が当たる。首の拘束が外れ、ゲホゲホと正常に呼吸がようやく再開された。

涙目になりながらも一夏は顔を前に向ける。

「よォ、相棒。まだ生きてるか？」
ソレは探し求めていた存在だった。
ソレは救うべき存在だった。
ソレは、自身の親友とも呼べる存在だった。
いつものようにへらりと笑みを浮かべた夏野穂次が一振りの刀を握り、ソコに立っていた。
目を白黒させて〝男〟と穂次を見比べる一夏に対して穂次はどこか困ったように眉尻を下げる。
〝男〟は何もない顔で穂次を睨み、口調を荒げる。
「どうしてだ！　何故だ！　お前が――！　俺が望んでることだろ!!」
「別に俺は一夏になろうなんざ思ってねーよ、バーカ」
「いいや、お前は思ってる筈だ。全部消されたお前が望まない訳が――」
「望んでた――……でも、ソレはもう終わった話なんだよ。俺は主人公には成れねーし、成る気もねー」
穂次は息を吐き出しながら、刀を構える。構えとしては至って自然体だった。ただ立っているだけだと言ってもいい。それでも後ろから見ていた一夏はソレを〝構え〟であると感じた。

隙がない訳ではない。それでも攻撃をしたならば容易く反撃される事は想像出来た。
「そんな事よりも許せねー事があるんだよ」
穂次はチラリと後ろにいる一夏へと視線を向けて、刀を強く握り直した。それこそ穂次の琴線に触れたのだ。穂次が許せない行為だ。許される訳がない。
「――俺の声を使って一夏とホモホモしい会話なんかするんじゃねぇよ!!」
「そこかよッ!!」
〝男〟を一太刀で両断した穂次は付いてもいない血液を振り払い、腰に差している鞘へと刀を収めた。
一夏はドコか疲れたように穂次を見て、ドコか安心してしまった。
「それで、一夏。こんな所まで何しに来たんだよ」
「何って、お前を助けに来たに決まってんだろ!」
「そりゃぁ、また……」
「というか、なんだったんだよ、アレ」
「アレ？　あー……セキュリティ的なアレだ」
「なるほど……全然分かんねぇよ!」
「ほら、アレだよ、なんつーの？　えっと、IS学園のセキュリティがヤバイ感じに俺の精神を解析して、なんかアレやコレをした結果だ!」

「すげぇあやふやだな」
「俺もわかんねーッス。つーか、ＩＳ学園の深部に潜ってたのに、変にセキュリティ反応するから戻ってきたらお前居るし。俺ビックリ」
「お前は何をしてんだよ……」
「いやー、なんか迷子になってたら助けてもらって、それで成り行きに任せてたら……」
「穂次、迷子センターは最初に場所の確認するんじゃなかったのか？」
「迷子センターだと思ったらＩＳ学園中枢だった。俺は悪くない」
　いや、悪いだろ。とは一夏は言えなかった。そんな事よりも気になった事がある。
「助けてもらったって？」
「ああ！　ええっと、とりあえずこんな所に居たくもないから、移動するか」
「居たくもないって……」
「人に心を覗かれるのは好きでもねーの」
　それは、そうか。と一夏は納得してへらへらと笑う穂次の後ろを着いて行く。
　穂次に着いて、到着したのは一つの喫茶店だった。少し古びた喫茶店。扉を開ける時にベルの音と扉の軋む音が響く。
　店員による歓迎の言葉はない。店員が居ない訳ではなく、ドコか見覚えのあるような目付きの悪い店員が一夏と穂次を一瞥して舌打ちをした。

ソレにそれ程反応もせずに穂次は軽く手を上げて目的の人物に声を掛ける。
「ヘイ！　彼女ォ！　一人ィ？」
「……」
「おい、穂次。凄い顔されてるぞ」
「大丈夫だ問題ない。俺の心はお湯を入れたペットボトルだからなッ」
「クシャクシャじゃねぇか……」
胸を張ってフフンとしている穂次に対して、一夏はどうしてか頭が痛くなった。
閉じた瞳のまま二人の方を向き、少女は立ち上がる。銀色の長い髪を少し揺らして、頭を軽く下げる。
「初めまして、織斑一夏さん。私はクロエ・クロニクルと申します」
「えっと、どうも。初めまして？」
「クロクロって呼ぶと喜ぶゾ☆」
「今まで無表情だったのに、凄い顔が険しくなってるぞ」
「ふっ、喜んでるんだな。俺には分かる」
「ヘタレは黙ってくださいますか？」
容赦などないクロエの一言によって穂次は大ダメージを受けた。普段から言われている言葉ではあるけれど、それでも言われる事に慣れるという訳でもない。

　そんな穂次は放って置いて一夏はクロエに向く。どうやら穂次に対しての一言で大凡の苛立ちは解消出来たのか、その顔は無表情である。
「えっと、それで？」
「クロニクルさんは今回の首謀者だよ」
「は？」
「クロニクルさんが犯人です……！」
「私が……犯人です」
「いや、キリッとしなくていいから。というか、真面目な人だと思ってたけどボケ側の人間なんだな。また俺の苦労が増えるんだな」
「ああ！」
「私は別にボケてなどいません」
「ソウダネ、ボケテナイネ」
　酷く痛む頭を放置する事に決めた一夏はやや細めた目で無表情なクロエを見つめた。どうしてかその視線は穏やかなモノだった。
　その視線に納得がいっていないのか柳眉を寄せて不満を表したクロエは小さく息を吐き出して、頭を振る。
「此度はお騒がせして申し訳ありませんでした」

「いや、まあ、俺はいいんだけど……」
「そうだよ。コイツは程々にイイ思いしてるだろうし」
「アナタがソレを言うのですか、セカンド」
「お前、何をしたんだよ」
「理想世界作れるって聞いたから全裸ワールドを作ってクロニクルさんに怒られたゾ！」
「……」
「冗談だよ。本気にするなよ、一夏」
「そうです。このヘタレがそんな世界を作れる訳がありません」
「なあ俺ってクロニクルさんに何かしたっけ？　泣きそう」
「勝手に泣いてろ」
「ひぇっ……一夏も酷い」
「……そろそろ私の時間も限界です。これにて舞台を退場いたします」
「お、おう……？」
ドコか劇染みた言葉を残し、クロエは綺麗に一礼をして0と1へと分解されて消えた。
そんな様子をボンヤリと眺めていた一夏と穂次はお互いに目を合わせて、肩を竦め

る。
「これで一件落着だな」
「みたいだな。ホント、なんだったんだよ」
「まあまあ、それじゃあ俺たちも舞台から降りようぜ」
「穂次ってそういう言い回し好きだよな」
「格好いいからな！」
「そうだなー、よかったなー」
　一夏の棒読みを受けて穂次がへらりと笑う。それでお互いに気が抜けたのか、笑みが溢れる。
「んじゃ、現実世界で」
「おう、現実世界で」
　互いにハイタッチを交わし、一夏は0と1へと変換されて分解されて消えていく。ソレを眺めた穂次は息を吐き出して、口を歪める。
「あァ、ホント。悪いな一夏、もう舞台からは降りれないんだ」
　そう呟いた言葉は空気に溶かされて、穂次と共に0と1へと還元されて、世界からは誰もいなくなった。

正妻の余裕×2

「はい、あーん」

ハートは付かないであろう、男の声が聞こえた。その男が向いているのは水色の髪のナイスバデーな少女――更識会長。恥ずかしいのか僅かに頬を赤らめている更識会長とその更識会長を甲斐甲斐しく見舞いに来る男――織斑一夏。――そしてその場に同じく入院している俺。

一夏の「あーん」攻撃に幾らかの恥ずかしさを持っていた更識会長も度重なる攻撃と一夏作の唐揚げの前には無力であったようで、口を開き、噛めばニンニクと生姜の香りが溶け込んだ肉汁が溢れる唐揚げを口にした。

珍しく、というか更識会長が入院した事をいい事に普段奪われている主導権をもぎ取った一夏はご満悦である。『一夏は』の話であり、先ほどからその一夏を睨み、俺を左右に激しく揺らしているラウラさんと箒さんと鈴音さんは激しくご立腹だ。

俺の前にあった筈の一夏の弁当は未だに唐揚げ一つしか箸を着けていないと言うのにおかずの数品は無くなっている。

激しく揺らされている俺を心配そうに、あわあわしながら見ている簪さん。俺の頭を

追って、僅かに左右に揺れている瞳が印象的だ。
「何、アレ」
「聞くのはイイんスけどー、揺れを止めてくれませんかねー」
「何なのだ！　アレは！」
「だーかーらー！　吐くから！　吐いちゃうから止めてッ！」
「む、このチクゼンニ？　は美味しいな」
「ラウラさんも弁当摘んでないで、この二人を止めて、つーか！　一応俺の弁当なんですけど!?」
「ふっ……嫁が作ったのモノならば私が食べても問題ないだろう」
「そういうのはあそこの嫁に言って。俺唐揚げ一個しか食べてないのに、あとご飯だけなんですけど……」
　凄い超理論を聞いたような気がする。いや、ラウラさんと箒さんの口から超理論が飛び交うのはいつもの事だから問題ないだろう。問題はあるけど。
　それにしても、実年齢が幾分か年下であろうラウラさんと似たような発言をする箒さんは一体……やっぱりおっぱいに栄養がいったのだろう。証拠として鈴音さんは幾らか理性的な発言をしている。している筈だ。やっべー、急に自信が無くなってきた。
「つーか、あの二人が付き合うとか、付き合わないとか、俺が知る訳ねーでしょーが」

「なんでよ！　なんの為のアンタだと思ってんのよ！」
「鈴音さんの栄養はドコにいってんだろーネ」
　おっぱいじゃないことは確かだけれど、頭にもそれほどいってないらしい。けれど、そんな事は決して言わない。言えない。
「まあ電脳世界で何があったとか知らないけどさー。変に一夏が皆の事を意識してるってのはわかってあげて」
「……一夏が」
「意識してる……」
「そそ。普段、この状態だったら不必要極まりない『弁当が食べたかったなら作るぞ』とか言ってないし」
「なるほど……」
「ふ、ふん！　そんなことは知っていたぞ！」
「あ、そうッスか……まあ意識している内に普段とは別角度から攻めまショ」
「ふむ……」
「暴力を振るわないとか、変な言いがかりを付けるとか、喧嘩をふっかけるとか……ん、コレって日常的な普通の恋愛指導なんだよな？　不良高校生の生活指導じゃないんだよね？」

　自分でも疑問に溢れてきた。いやいや、そもそも俺の知っている普通なんてモノは変わるモノだ。きっと今の恋愛観はそういったモノなのだろう。俺には真似出来そうにないけれど。
「ま、まあ、ほら、今よりもお淑やかにするとか。ちょーっと違うアプローチも考えた方がいいんじゃないかなーとか」
「なるほど……しかし、どうすれば嫁の気を引けるのだ？　深夜にベッドに潜り込む以外は――モゴモゴ」
「ラウラさん、ちょーっと黙ろうか」
　イケナイ発言を聞いたような気がする。いや、少なからず今ココにいる存在達に聞かせてはイケナイ言葉だろう。落ち着け、落ち着くんだ俺。
　いや、色々と言い始めれば俺も似たような事をされている訳だし、むしろラウラさんよりも肉感的なセシリアやシャルロットに抱きつかれている俺の方がむしろダメなのではないだろうか。いや、ダメな訳がない。もしもダメならばソレは世界が悪いのだ。世界壊さなきゃ……（使命感。
「ま、まあ、一夏は女性らしい女性が好きだと思うよ」
「……なんでアンタはアタシと箒の胸を見比べて言ったのよ」
「別に一夏はソレを判断基準にしてないから問題ないと思うゾ！」

「答えになってないわよ」
　別に胸囲的格差社会の縮図を見比べていた訳ではないのだ。うん、これっぽっちも思ってない。女性らしい女性というのはお淑やかで、優しくてという意味である。決して身体に表れる母性の事を言っている訳じゃない。
「ん、ちょいと失礼」
「どうかしたの？」
「ちょっとね。まあスグに戻るよ」
「というか、アンタも一応入院扱いなんだからおとなしくしときなさいよ」
「俺は目が覚めるのが遅かっただけで、仮入院みたいなモンだから。メディカルチェックでも正常値叩き出してるし。問題ねーッス」
　へらりと笑って部屋から出て行く。ぼんやりと天井を向いて、息を吐き出す。
　先ほどから通知を知らせてくる電話相手に少しだけ嫌気を思いながら、ペタペタとスリッパを鳴らして歩く。

◆◆

「あれ？　穂次は？」
「さっき出て行った所だけど、会わなかった？」

シャルロットの問いかけに応えたのは鈴音であった。扉を開けたままにしていたシャルロットは自分が来た方向とは逆の方向を見つめて、自分の手に持ったモノを見つめる。

しっかりと包まれた自作の弁当と部屋で「あーん」とかしている一夏を見比べて、現実世界で二秒にも満たない妄想を繰り広げ無事に穂次とゴールインを果たした。

だらしなく緩みそうになる口をどうにか普段の笑顔に保つ。

「じゃあ、ちょっと探してこようかな」

「……お幸せに？」

「簪!?　ち、違うから、そのえっと」

「はいはい、さっさと行きなさい」

妄想を看破した簪に慌てながらシャルロットは鈴音に押し出される形で部屋の扉を閉められた。ほのかに赤くなった頬に片手を当てながら、保っていた笑顔が崩れる。だらしない笑みが浮かんでしまう。

ハッ、と意識を現実へと戻したシャルロットは慌てたように周りを確認して、一つ呼吸をする。どうやらシャルロットの奇行は誰にも見られていなかったようだ。改めて、お弁当を確認したシャルロットは口元に笑みを浮かべて足を進めた。

普段歩いている廊下を笑顔で少しだけ浮かれた足取りで歩く。こうしてシャルロッ

トがセシリアを出し抜いて穂次と二人きりに成れるタイミングというのはそれほど無い。

ある意味確約されている夜這いの順番を除けば二人はあくまで競争相手であり、同じく同盟でもある。

二人は二人で穂次が自分達を好きになってくれている、という事は知っている。それこそ、彼の感情の全てを知るわけではないけれど、彼の言葉を捉えていればアッサリとそんな事は理解出来た。

だから、この同盟関係はあってないような、そんなモノだ。裏切る事もないけれど、出し抜く関係であるし、けれど恨み言を言う関係でもなければ情報も交換する関係だ。こうして冷静に考えれば恋敵として少しばかり歪な関係なのかも知れない。

結局勝つのは自分である、なんて心の底で思っているのもお互い様だったりするのでシャルロットはそれ程の危機感を覚えていない。むしろ標的である穂次が変に無茶をする方が心配だ。

だからこそ、今もこうして彼を探している。下心もあるけれど、ソレはソレ。穂次も下心をさらけ出しているし、ソコは納得してくれているだろう。そんな言い訳を心の中でしながらもシャルロットは足を止める。

耳に……音に意識を向けて、いつも聞いている声がする事に気付いた。どうやら近

く、誰かと喋っているらしい。
　悪戯心で、驚かせてやろう、なんて考えてしまうのは幼稚なのだろうか。いや、それでも彼が驚いた顔を見てみたい。自分だとわかって安心して笑う顔も見てみたい。
　曲がり角の向こうで彼が喋っている。呼吸を整えて、チラリと確認する。確かに夏野穂次がいた。けれど、どういう訳か雰囲気が違いすぎる。へらへらとも笑わずに、何かに追い詰められているように真面目な顔でもない。ただ平坦で、冷たく、感情らしい感情など一切こもらない声を口から吐き出していた。
「――わかってる。コッチも計画の準備はそろそろ完了するし」
　計画？　準備？
　シャルロットの頭の中で様々な可能性が広がり、そして彼の会話へと集中していく。
「……もう決断したって知ってるのに、わざわざその質問は必要ないだろ。そっちの準備もよろしく。
　――ハハ、うっせーです」
　そんな一言で電話を切った穂次は大きく息を吐き出して、目を細めて携帯電話を見つめる。何の感情も無い視線で見つめて、携帯電話をポケットの中へと収めた。
　ハッと何かに気付いたように顔を動かして、その視線はシャルロットを捉えた。
「シャルロット？」

「や、やあ穂次」
「どうったの？」
「えっと……」
シャルロットは言葉を迷う。追求すれば、きっと穂次は応えてくれるかも知れない。けれど、踏み込んでいいのだろうか。
無茶をする穂次だ。つい先日無茶をしない事を誓わせたけれど、それでも穂次は穂次だ。だから踏み込んで聞かなくてはいけない。
けれど、相手の領域に踏み込む事に躊躇してしまう。

そんな言葉に迷っているシャルロットを見ながら穂次は困ったように笑いを浮かべて頬を掻く。
なるべくシャルロットやセシリアには嘘を吐きたくない穂次としては話す事も視野に入れている。ソレはソレで穂次の覚悟に触れてしまうけれど、それでも穂次は喋ってしまうだろう。
だから、穂次は小さく息を吐き出して、少しだけ真面目な顔つきになる。
「シャルロット」
「な、なにかな」

「こ、今度一緒にデェトに行きませんか？」
バッチリ噛んだ。声も裏返った。顔なんて真っ赤だ。
パチクリとお互いに瞼を動かして、穂次はゴホン、とわざとらしく咳込んだ。そう、喉の調子が悪かったのである。顔の赤みはさっぱり取れていないけれど。
「えぇ、っとですね。それでですね。よろしければ次のお休みにデートに」
「行く」
「お、おう……即答されると俺は安心したよ」
自分の胸を抑えてホッと息を吐いた穂次はシャルロットの左手に持たれた包みへとようやく視線を送る。
その視線に気付いたシャルロットはヒョイと包みを上げてニッコリと微笑んだ。
「お弁当だよ。もしよかったら――」
「食べる。絶対食べる」
「う、うん。そこまで求められるとは私も安心だよ」
ガシッと左手を包むように握った穂次に少しだけ顔を赤くして狼狽するシャルロット。そんなシャルロットから弁当の包みを奪い、窓から外を眺める。忌々しい程の晴天であった。
「んじゃ天気もいいし外で食べようか」

「そ、そうだね。あ、穂次。あーん、とかしてあげようか？」
「……」
「ほ、穂次!?」
何を想像したのか、ボフンと音を立てるように顔を赤くした穂次が廊下の壁にぶつかった。弁当は揺らさないように保護している辺りが実に彼らしい。

空が夕焼けに染まり、セシリアは鼻歌を奏でながら穂次の部屋へと向かっていた。
メディカルチェックで何も異常が検出されなかった穂次はあっさりと退院して、部屋に戻ったらしい。そのことを聞いたのはどういう訳か余裕のある声だったシャルロットだった。
何かあったのか聞いてみれば「ふへへへへへ」とだらしない笑いばかりの恋敵であったけれど、内容に関しては頑なに何も言わなかった。
恋敵は何も言わなかったけれど、幸いな事に今日は自分の日なのだ。標的ならばアッサリと言葉にしてくれるだろう。
そんな自信と久しい自分の番に喜びを隠すこともせずにセシリアは彼の部屋の前に

到着した。
　喉を鳴らして声の調子を整える。今日の香水は彼が好きだと言った花の香水だ。いや、彼は何でも好きと言いそうだけれど、一番反応がよかったモノがコレだった。
　改めて自身の服装をチェックして、セシリアは扉をノックする。
「はいよぉー？」
　少しだけ時間を開けてから、気の抜けた声と一緒に扉が開かれて、セシリアは言葉を失う。
　僅かに水気を帯びた髪にシャツ。その首元にはネクタイが垂れ下げられ、シャツの首元のボタンも幾つか外れている。普段は見れない夏野穂次がソコには居て、珍しくマトモな恰好をしている穂次に見惚れてしまったセシリアもソコには居た。
「えぇっと？　どうったの、セシリア」
「い、ひぇ、なんでもありませんわ」
「お、おう」
「それで珍しくフォーマルを着て……」
「え、似合ってない？」
「……ネクタイはそれだけしかありませんの？」
「えぇっと他に何個か」

「見せていただけます？」
「アッハイ、お願いします」
アッサリと主導権をセシリアへと渡した穂次はセシリアを部屋の中へと招き入れた。
ベッドに広がるネクタイと上着を見て、セシリアは頭痛を覚えながら溜め息を吐き出してテキパキと上着をハンガーに掛けて壁に吊るした。
ネクタイを数本掴んで、穂次の首から垂れ下げて、どうやら満足いくものがあったのか一本だけ選びソレ以外――穂次の首元にネクタイも一緒にハンガーの内部分へと掛けた。
「それで、どうしてフォーマルを着てるんですの？」
「ちょっと、ね」
「……わたくしには言えない事ですのね」
「いや、ええっと、そうじゃないんだけど」
ネクタイを締める為に彼のシャツのボタンを閉めていたセシリアが上目遣いで穂次を見つめる。その視線は弱い、とばかりに穂次は視線を外して情けない笑みを浮かべる。
逃げた穂次を逃がさない様にネクタイを掴み、そのまま見つめ続ける。穂次は諦めたように溜め息を吐き出して両手を上げる。

「降参デス。言うから、悲しそうに見上げるのやめて。あとおっぱい当たってるんですけど」
「当てているんですわ」
「そうッスか」
まるで音符でも付きそうな程上機嫌になったセシリアに顔を赤くしながら口をモゴモゴとして言いそうになった言葉をどうにか飲み込んだ穂次。
えー、と言葉を一度迷ってから穂次は言葉を吐き出す。
「ほら、学園祭の時に居た俺の保証人いるじゃん」
「……ああ、えっと確か――」
「で、その保証人からのお呼ばれ。どこぞのホテルで会食だってさ。保証人の関係してる人も来るっぽいし」
「それでフォーマルに」
「そそ。ついでに視察も兼ねてかなー」
「視察？」
「……あー、今の無し」
「何の視察ですの？」
「何の事か穂次わかんなーい」

「穂次さん？」
「スイマセン言います。言うから」
はぐらかそうと適当な言葉を吐き出した穂次はあっさりとセシリアに負けた。勝った方のセシリアはニッコリと穂次に笑みを向けている。
穂次は意を決したように、一度深呼吸をしてから口を開く。
「ええっと、セシリア。今度の休みにデート行かない？」
「――――……」
「え、ダメ？」
「いえ！　そんな！　行きますわ！　絶対に！」
「お、おう……」
「ド、ドレスを家から送ってもらわないとっ」
「あー、セシリア？　別に普通の恰好でイイんだけど」
「そ、そうなんですの？」
「別に今日行く所に行くって訳じゃねーし。最悪コッチで準備もするし」
部屋を出ていこうとしていたセシリアの左手を掴んで止めた穂次はいつものようにへらりと笑って、そんな見通しの甘い計画を口にした。
慌てていたセシリアは一度落ち着いて、肩の力を抜く。何より相手は穂次なのだ。何

を気取る必要があるのだろうか。それこそ綺麗な自分は見てほしいけれど……。

自分の妄想の世界へと少し入って、セシリアは自分の顔を覗く穂次に顔を真っ赤にして背中を向けた。穂次は困ったように頬を掻いて、ネクタイを締めようとする。

「あ、ネクタイはわたくしが締めますわ」

「そこは譲らないのか……」

クルリと穂次の方に向いたセシリアは耳を赤くしながら彼のネクタイを締める。首元までしっかりと締めたネクタイを見てから、穂次の顔を見つめる。

「ちょっとした、憧れでしたの」

「……ふーん」

照れて笑うセシリアの言葉に穂次は追求も何もしなかった。セシリアの頭を軽く撫でて、僅かにする花の香りを楽しむ。

少しの時間をそうして、時間に気付いた穂次が動き出して、同時にセシリアも動き出す。

ハンガーに掛けていた上着をセシリアが持ち、ソレに袖を通す穂次。ボタンをして、セシリアの最終チェックが入り、どうやら合格したらしい。

ホッと一息吐き出して、穂次は扉に手を掛ける。いつものようにへらりと情けない笑みを浮かべながらセシリアに向き直す。

「それじゃ、行ってくるよ。セシリア」
「行ってらっしゃい、穂次さん」
二人して言葉は自然と出た。出た言葉に気恥ずかしさを覚えながら、二人は吹き出して笑顔になる。
「それじゃ、デートに関しては後で連絡するから」
「ええ、楽しみにしていますわ」
「あんまりハードル上げると、下を潜るから程々に」
ヘラリと笑いながら穂次は自室の扉を閉めた。
一人部屋に残ったセシリアは名残惜しそうに扉を少しの間見つめて、彼が放り出していた着替えを回収していく。
今日何かがあっただろうシャルロットとあの穂次（ヘタレ）にデートに誘われた自分。果たしてドチラがリードしているかなど、比べなくても分かる事だ。
セシリアは鼻歌を奏でながら、口元をニヤけさせ、時折〝いやんいやん〟と身体をくねらせる奇行を見せながら、自信に溢れた様子でふふん、と鼻を鳴らした。コレが正妻の余裕か、などと俗的な考えも当然している。
何にしろ、打算的である彼女らは『情報交換をする』という名目はあるけれど相手を

出し抜く為に穂次に誘われたデートに関しては一切の情報を漏らさなかった。
当然である、コレは戦争なのだ。相手に負ける訳にはいかない。騙してはいない、故に問題などはない。
お互いに「ふへへへへ」と笑いながら近い未来に待っている穂次とのデートを妄想する。既に相手を出し抜いたと思っている辺り、二人は似た者同士なのかも知れない。

裏切り者、夏野穂次

人同士の争いという物は相手が受け入れられないという理由だけで発生する訳ではない。
相手を恨み、妬み、そして人は自然と相手と争うという選択をしてしまう。
相手を羨み、願い、そして人は必然と相手と争ってしまう。
理解していても、人は争う事を止める事は出来ない。
意識していても、人は争う事を止める事は無い。

二人の美少女が相手の事を意識して早数分。濃淡の違う金髪を風に揺らしながら、お互いに不機嫌を隠す事もせずに相手を睨み続けている。
何故目の前にシャルロット・デュノアが居るのか。
何故目の前にセシリア・オルコットが居るのか。
互いに互いを冷たく睨めつけて、心の中で舌打ちをする。
『自分だけ』だと思っていた事が『自分たち』になってしまった。その差は大きく、同時に相手など今スグにでも蹴落としたい気持ちでイッパイだった。

例え同盟関係であれど、これだけは譲れないし、譲るつもりなど毛頭ない。
「あら、シャルロットさん奇遇ですわね」
「そうだね、セシリア。そんなにオシャレして、ドコかに買い物かな？」
「ええ。嬉しい事に穂次さんがデートに誘ってくれたので」
「アハハ、ソレは勘違いじゃないかなー。穂次は私を誘ったんだから」
「オホホホホ、そちらこそ耳がオカシクなったんじゃありませんこと？」
数分の膠着状態から売り言葉に買い言葉。不機嫌を露わにしていた表情に笑顔を貼り付けて、やや棒読みであるが、大凡いつもと同じような穏やかな声で相手に喧嘩を売る。
もしも、瞳から何かしらの光線が出るのならば相手との間にバチバチと火花を散らしているだろう。
そんな二人を少しだけ距離を開けて見つめる男が一人。冷や汗を流しながら、何度も深呼吸を繰り返し、激しく動く心臓をなだめる。
あの渦中に飛び込む事なんてかなり前に決めていた事だから、ソコに躊躇など存在しない。彼自身が選択した決断だ。戸惑いも、迷いも、無い。
「……――しっ」
いつもの様に、二人が揃う前からソコにいた夏野穂次は改めて心を動かして、荒ぶる

心臓と緊張を抑える。いつもの様にへらりとした笑いを浮かべ、一歩目を踏み出した。
「いやー、遅れてごめ――」
「穂次さんッ！」
「穂次ッ！」
「えぇ……そこまで遅刻で怒られるんですかね……。一応、予定してた時間よりは早く到着したんですけど」
「そうじゃありませんわ！」
「そうだよ！　どういう事!?」
「……ま、まあ落ち着いてくださいよご両人。コレには深い訳があるんです。そこらの水溜りよりは深い訳がある筈だ！」
「……」
「スイマセン。そんな冷たい目で見ないで！　いや、むしろ見て！　もっと俺を見てもいいんですよ!!」
穂次は二人の視線を一身に受ける様に手を少し広げて身体を晒す。その行動を睨んでから、セシリアとシャルロットはお互いに視線を交わしてから溜め息を吐き出した。
惚れた弱み、とは言わないがそれなりに穂次の事を許容している自分がいる事も事実だ。

　へらりと情けなく笑った穂次が二人を見つめていれば、改めて二人は溜め息を吐き出す。
「それで？」
「へ？」
「わたくし達二人を同時に、という事はデートではないんでしょう？」
「そもそも穂次にそこまで求めた私達が間違ってたよ」
「そうですわね」
「なんでそんなにボコボコに言われなきゃならないんですかね……」
「普段の自分を思い返せばいいかと思いますわ」
「まあソレは置いといて」
「ヘタレって自覚はあるんだね」
「うっせー！　コレでも頑張ってんだよ！」
　自覚していても否定したい事はある。かと言って、否定した所で意味もない叫びはアッサリと本人によって流される。
「つーか、デートッスよ」
「ふーん」
「うわー信じられてねーです……」

「本当ですの？　何か悪い物でも食べたとか……誰かの入れ知恵という可能性も……」
「入れ知恵って事は否定しないけど、選択したのは俺だから」
「否定しないんだね」
「まあね。一応、計画として練ったけど俺だけだとボロボロで鼻で笑われても仕方ない計画だったし」
「……それって、この前の電話？」
「ハッハッハッ、ナンノコトカナー」
　シャルロットから視線を外して空を見ながら棒読みの言葉を吐き出した穂次。セシリアはシャルロットへと視線を合わせて内容を確かめようとする。その視線を受けたシャルロットは首を横に振り、詳しい内容までは知らない事を示した。
「ま、ほら、サプライズって事で」
「それを言いますのね……」
「期待はしないでおくよ」
「俺の我侭だからねー」
　へらりと情けなく穂次は笑い、セシリアとシャルロットはキョトンとしてしまう。珍しい事を聞いた、という気持ちが浮上する。
　そういえば、このヘタレがこうしてデートに誘うことも奇跡的だけれど、自分から『我

侭』を言う事も初めてかも知れない。それこそ知り合って一年と経っていないけれど、少なからず穂次の為人は大凡把握しているつもりだった。

だからこそ、二人は顔を見合わせて疑問を確かめようとして――やめる。

「仕方ありませんわね」

「そうだね。仕方ないから、穂次の我侭に付き合ってあげよう」

その疑問を味わうのも、またデートの楽しみなのだろう。恋敵が隣にいる事が非常に遺憾であるけれど。

「やったぜ。スゲー嬉しいです」

笑っていた表情に照れを少しだけ混ぜた穂次は二人に対して、仰々しく一礼をする。

「それじゃあお嬢様方、慣れもしないエスコートとピエロの我侭にお付き合いくださいな」

懇願するように言われたソレはやはりドコか穂次らしくて、顔を上げた表情はやはりへらりといつもの様な笑いが貼り付けられていた。

二人は改めて顔を見合わせて、微笑みを浮かべて、道化に手を差し出す。

「よろしくお願いいたしますわ」

「私達を楽しませてくれるんでしょ？　ピエロさん？」

「ハッハッハッ。残念ながら、今日楽しむのは俺だッ！　俺の欲望に従ってもらうの

だッ！」
「ヘタレのクセに」
「それは俺に効く。やめてください」
二人の手を取り、しっかりと宣言をした穂次の言葉はバッサリとシャルロットによって叩き切られた。それでもピエロはへらりと笑みを浮かべ続けた。

「……」
「……」
セシリアとシャルロットはお互いに顔を赤らめながら、姿鏡に映る自身の姿を見つめていた。
少し広めの部屋に居るのは二人と二人の着替えを手伝った係員の女性二人。その女性二人もセシリアとシャルロットの姿を見て、微笑ましく口元を緩ませて「お似合いですよ」と口にした。
純白のドレスを纏った二人はやはり信じられない様に目をパチクリとさせて鏡を見つめ続ける。

「ん、おお……」

そんな感嘆の声を出しながら部屋に入ってきた穂次も同じく白いタキシードを着せられていた。ドレスが似合う二人に対してタキシードに着られている。

穂次をやはり微笑ましい物を見るように見た係員の二人は一礼をして静かに部屋から退出した。頬を指で掻いてから息を吐き出して、改めて二人へと視線を戻す。

純白のウェディングドレスを着た美少女が姿鏡を見つめて、呆然としている。のんびりと二人が戻ってくるのを待ちながら、二人のドレス姿を見つめ続ける穂次は口元を緩めて、近くにある椅子へと座った。

「綺麗だ……」

眺め続けていれば自然と声が溢れて、余計に口元が緩んでしまう。そんな綺麗な二人が今は自分が独り占めにしていると思えば、ドコか申し訳なく思ってもしまう。

けれど穂次は同時にそんな二人を離したくないという独占欲を抱いてしまう。だからこその計画だった。この状態の二人を見たかった、そんな自分の欲望からの行動だった。

穂次の呟きを耳にした二人は顔が熱くなり、緩みそうになる口元をどうにか抑えこんで変な表情になってしまっていた。

ふにゃふにゃになりそうな顔をどうにか整えて二人は振り返る。姿鏡越しで見てい

た穂次の姿を改めて見て、顔を更に赤くする。
「ど、ど、どういう事ですの？」
「そ、そうだよ。ウエディングドレスなんて着せて」
「えっ!?　白無垢の方がよかったとか!?」
「それはそれで捨てがたいけど、そうじゃないよ」
「種類ではなくて、理由を聞いているんですわ」
「着せた理由だと、二人のドレス姿が見たかっただけですけど？」
「――……」
「思った以上に綺麗だし、喜んでくれてるようで何より」
まるで当然の理由を言葉にしたように、穂次は淀みなく欲望を吐き出した。へらりと笑った口から吐き出された素直な感想に二人は顔を更に赤くする。
「と、言っても結婚する訳じゃないッスけどね」
「そ、そ、そそうだよね」
「結婚式の真似事――、金の掛かったママゴトみたいなモンだよ。我ながら子供っぽいね」
へらへらと笑いながら自分を卑下して、それでも穂次はその事を後悔などしなかった。二人を見ただけでもそれだけの価値があった。掛かった金額など二人と比べる価

値もない。そう穂次は断言出来た。
純白のドレスを着た二人以上に大切な物なんて現在は存在していないだろう。未来的にも、二人以上に大切な存在はきっと存在する事も無いだろう。
だからこそ、穂次は選択をした。決意を形へと昇華させた。同時に二人に選択させる為に。
「それで――真似事を真似事じゃなくす為にこんな物を用意しました」
深呼吸をして、穂次はゆっくりと立ち上がり二人の前に足を進める。
手に持っているのは小さな箱だった。手で掴み上げれる程度の小さな箱。そんな箱を二人の手の平へと渡して、穂次は情けなく笑う。
「ドチラか、とかは俺には言えないし。両方とも同じくらいに愛してるので――って言うと、ホント屑みたいな言葉だけど、コレは真実で……あー、えっと、」
「そのまま言葉にすればよろしいですわ」
わたわたと言葉を迷いながら口にしている穂次をしっかりと見ながら、セシリアとシャルロットは微笑む。どうしようもない男だと思う。けれど、そんな男に恋をしてしまったのは自分達だ。
だから、セシリアもシャルロットも男の選択に従おうと決めていた。
セシリアに促されながら、穂次は自分を落ち着けるように深呼吸を一つ。

「あー……その……。二人とも好きです。愛してます。誰にも渡したくない。俺だけの二人にしたい」

「――……穂次って、ヘタレなのに独占欲は凄いんだね」

「ヘタレなのに、は余計だ。つーか、俺もこういう自分本位な事を思うのは初めてだから、色々と遅くなりました。結局、世間的には最低な選択だと思うけど、それでも俺は片方なんて選べないです」

「本当に、最低ですわね」

「そうだね。二股宣言を堂々としている訳だし」

「はぐぁ……いや、ホント、スイマセン。アレなら全然その箱を突き返してもらって大丈夫ですよ……」

「絶対に――」

「――嫌ですわ」

ニコリと赤く染めた頬を緩ませた金髪二人は手に持った箱を胸に抱いて彼の選択を肯定する。

穂次は安心したように息を吐き出して、椅子に座って情けなく「あー……」と声を出している。張っていた気が緩んだのか、自身の決断が肯定されて安心したのか。

「安心したのは分かるけど、もうちょっと取り繕うよ」

「無理ッス。スゲー緊張したし。あぁ、よかった。ココまでしたけど突き返されると思ってたし」
「むしろこんな格好までさせてどうしてそんな事を思うんですの？　いえ、穂次さんでしたわね」
「その納得の仕方はどうなんですかね……。俺の事を知られてて喜ぶべきなのか、悲しむべきなのか」
「喜べば？」
「やったぜ」
　よっこいせ、と呟きながら座った佇まいを直した穂次は改めて女神と天使を視界に入れる。相変わらず大事そうに抱かれている小さな箱を少しばかり羨ましく思いながら、口を開く。
「ソレで、その箱の中はお察しの通り……だと思うんだけど」
「左薬指にするつもりだけど」
「そうですわね」
「……――、幸せってこういう事を言うんだろうなぁ……いや、まあ、ソレはいいとして。たぶん、コレから先、俺は二人に酷い事をすると思う」
「二股宣言の次は関白宣言ですのね」

「それなりに人っぽい事をしてるけど、足りない所は沢山あるって自覚してっからな。それで、もしも俺が信用出来なくなったら、ソレを外してくれ」
「……わかりましたわ」
「うん、わかったよ」
穂次の言葉に頷いて、二人は箱を開く。簡素なシルバーリングが箱の中央で存在を誇示している。そのシルバーリングを指で摘み、一頻り眺めてから二人はふと気付く。
「そういえば穂次さんが付けてくれませんのね」
「もう俺の心は限界です。指輪贈っただけでゼーハー言ってるんですが……」
「付けてくれればもっと好きになるなのになー」
「頑張りますっ」
「現金ですわね」
「二人に以上に大切な事はないから」
自分を持ち上げる為に大きく呼吸をした穂次が立ち上がる。自然と吐き出されてしまった言葉に頬を緩めてしまう二人。
差し出された左手を優しく手に取り、受け取ったリングを薬指に嵌める。しっかりと嵌ったリングを光にかざして、弛んだ表情で眺める。
「いやー、両方ともピッタリでよかった」

「……いつの間にサイズを測ったんですの？」
「デートに誘った時に左手触ったじゃん。アレ」
「……アレだけで測れるモノじゃないと思うんだけど？」
「伊達にＩＳと適合してないって事。機能はフル活用しないと無駄だろ」
恋人のリングサイズを測る為にＩＳの機能をフル活用することが無駄であるかどうかはこの際置いといて。
当然のように条例を無視している穂次に対して呆れの視線を向けながらセシリアとシャルロットは溜め息を吐き出した。
そんな呆れの視線と溜め息をへらりと笑いながら穂次は気にしないようにする。彼にとって条例を無視する事なんて最早それ程重要な事でもない。
「誓いの言葉――はしなくていいや」
「あら、ちょっとは楽しみでしたのに」
「健やかなる時も、病める時も、私達を愛する事を誓いますか？」
「神様なんざ信じてないから誓えないッス」
「えぇ……」
「でも、二人には誓うよ。夏野穂次は――……いいや、俺は誰よりも二人を愛する事を誓うし、二人の平和を守る事も誓うよ」

へらりと照れを混ぜた表情で穂次は誓いを言葉にする。誰にも侵せない誓いの言葉を宣言する。

変な言い回しを疑問に感じながら、セシリアもシャルロットも顔を真っ赤にして穂次の手を取る。

「わたくしも、誓いますわ」

「わたしも、誓うよ」

誓いの言葉を言い、三人以外も誰もいないそんな空間を沈黙と羞恥が支配する。けれどソレを覆そうともせずに、三人は顔を真っ赤にしながらも相手を見つめている。

自然と閉じられた少女達の瞼。その表情を見て穂次は情けなく声を出したけれど、確かめようとはしなかった。彼は決断したのだから、行動をしなくてはいけない。

柔らかい唇を穂次から合わせて、少女二人は満足気に微笑む。

「ふふふ、穂次さんからは初めてですわね」

「そうだね、えへへ」

「スゲー顔熱い」

「それで、真っ赤なあなた。コレからのご予定は？」

「えぇー……ホテルでディナーを用意してます。そこまでちょっと時間もあるし、買い物でも行こうかなーと」

「ホント、今日の穂次は凄いね……入れ知恵した人に感謝しなきゃ」
「いや、あの人には普段から感謝してるから別にいいんじゃないかなーとか」
「？」
「コッチの話」
「それじゃあ、エスコートは任せるねあなた」
「スゲー意味深に聞こえる二人称なんですが……お任せください。微力を尽くすよ、まいふぇあれでぃ」
　仰々しく一礼をした穂次に二人は微笑む。
　そしていつもの様に、この夢のような世界を現実に刷り込ませる為に言葉を吐き出す。
「本当、相変わらず発音がなってませんわね」
「ホントだね。仕方ないから私達がしっかりと教えてあげよう」
「ふぇぇ……頑張って気取ってるのに残念になったゾ」
「いつもじゃないか」
「そうだな」
　ガックシと肩を落とした穂次はスグに立ち直るようにへらりと笑う。ソレにつられるように二人も笑みが溢れた。

◆◆

セシリアとシャルロットへの告白、もとい誓いをしてから数日。

夏野穂次は鼻歌を奏でながら廊下を歩いていた。腕にした時計を眺めて、口元を緩ませる。

「お、居た居た。やっほい、一夏。訓練するなら俺も付き合うぞ」

「珍しいな。穂次が訓練なんて」

「俺だって頑張ってるんですよ……」

へらりと笑った穂次は一夏の隣に並んで歩く。相変わらずご機嫌そうに口元が緩んでいる。

そんな穂次を見て一夏が少しだけ疑問に思う。

「何かあったのか？」

「聞く？　聞いちゃう？　ふふん、仕方ないなぁ」

「いや、いい。聞きたくない」

「そんな事言うなよー、聞けよー」
「うっぜぇ」
　ヘラヘラと笑った顔を更に緩めながら穂次が一夏へと「仕方ないなー」と口にする。
一夏は聞きたくもない……事もないがいつも以上に面倒な相棒を見て少しばかりげんなりとした。
「それで？」
「ふふん、よくぞ聞いてくれましたっ！」
「ふーん、よかったな」
「まだ何も言ってねーよ！　俺泣いちゃうぞ！」
「はいはい。それで何があったんだ？」
「いやー、セシリアとシャルロットに告白してオッケー貰ったんですよ」
「……ふーん」
「だから一夏スマナイ……お前の気持ちには応えられないんだッ！」
「いや、別にお前に対して何の気持ちも無いから」
「ソレはソレで酷いなぁ……。
　まあ、告白の件もあるんだけど実はもう一つあるんだよ」
「まだあるのか」

「ふっふっふ、実は前々から計画してた事がそろそろ実行出来るんだ」
「へぇ」
アリーナへと到着して尚、自慢のように語る穂次に適当な反応をしていた一夏。穂次は穂次でへらへらと笑う。
「それで、その計画ってなんだよ」
「気になるかね、織斑一夏」
「いや、別に知りたくはない」
「そんな事言うなよぉー」
「はいはい、聞きたい聞きたい」
「仕方ないなぁ、一夏だから言うんだゾ☆」
「ホント、今日の穂次は鬱陶しいなぁ」
穂次の言葉にげんなりとしながらも付き合いのイイ一夏は穂次の言葉を促していく。
穂次はへらへらとした笑みのまま、一夏を見つめる。
瞬間
アリーナが真っ赤に染まる。緊急事態を知らせる様にブザーが響き、ディスプレイには警告と赤く、大きく表示されて異常を知らせる。
「なんだ!?」

「ん……？　アリーナのロックとその他ウィルスが侵入したかな」
「マジかよ……大丈夫なのか？」
「まあ時間は掛かるだろうけど、問題は無いかなー。ところで一夏、話の続きなんだけどさ」
「こんな時でも言うのか……」
「慌てても意味ないし、アリーナロックされてるし、一夏が出来る事なんて限られてるからなッ！」
「酷い事言うなぁ」
「そんな一夏に一生のお願いがありますッ！」
「お、おう」
「死んでくれ」

「は？」
　気軽に言われたその言葉に一夏は一瞬だけ呆気にとられた。その瞬間だけで、その瞬間だけがあれば良かった。
　穂次の手に収まった棒から暴力的なまでの黒い粒子が溢れ辛うじて刃の形へと変化する。

へらりと笑ったままの穂次が何の迷いも躊躇もないその刃を一夏へと振り下ろし一夏の視界が真っ黒に染まった。

好敵手

真っ白の粒子群から抜け出した一夏は白い鎧を纏い空へと駆けた。軌跡が残り、その先には未だに大量の白と黒の粒子が混ざり合い視界を防いでいる。

生きている。一夏は自身の頸が未だに繋がっている事を呼吸によって確認して、冷や汗を流す。白式が反応してくれなければ死んでいた。そう思える程に躊躇も何もない一撃だった。

「あー、やっぱ〝鬼の爪〟じゃぁ雪羅は抜けねーッスね」

白い粒子を腕で振り払いながら穂次は空にいる一夏を見上げる。先ほどまで荒々しく粒子を吐き出していた柄は僅かに黒い粒子を散らすだけで刃としての形は保っていない。

その柄を左腕へと、まるで鞘に収める様に量子変換をした穂次はへらりと笑っている。

その様子に、何かを言おうとして喉が詰まったように声が出ない。きっとそうなんだろう、なんて先ほどの事実を適当に結論付ける。目の前にいるのはいつもの夏野穂次なのだ。

へらへらと笑い、冗談を言う。だからきっと――……。
「おいおい、相棒。冗談だよ。だから早く降りてこいよ」
「……冗談じゃ済まないだろ」
「そうだな。まあ冗談じゃねーし」
「……」
「ハッハッハッ、せっかく正直に応えてやってるんだから、そんなに泣きそうな顔をするんじゃねーよ。俺困っちゃーう、ってか？」
相変わらずヘラヘラとした笑みを浮かべながら穂次は一歩を踏み出す。歯を噛み締めながら、信じたくない事実を一夏は受け入れ始める。一夏は知っていた。知っていた筈だった。ただソレを受け入れてなかっただけ、それだけなのだ。
その情報が穂次の事でなければ、一夏は容易く楯無の情報を信じた。けれど、穂次だから否定した。穂次だからこそ、信じていた。
「――んでだよ……」
「ん？」
「なんでだよッ！　穂次！」
「なんで？　なんで、って何がだよ。俺がお前を攻撃した事か？　それとも俺がお前の命を狙った事？　ああ！　わかった、きっと俺が亡国機業に所属している事だな！」

飄々と、コレが「当たりだろう」と言わんばかりにいつもの様にへらりと笑みを浮かべながら言葉を吐き出す。その言葉に一夏は更に眉間を寄せる。
何故。どうして。そんな言葉が頭に溢れて一夏の思考は回転する。穂次がそうしなければいけない理由を探す。
「おーらい、相棒。実は両親が人質に取られてるんだ」
「は？」
「ふむ、コレは微妙か？　じゃあそうだな、金の為なのさッ！　ハーッハッハッハッハッ!!　とか？」
「ふざけんなッ！」
「おいおいコレがふざけて見えるのか？　結構本気でお前の命狙ったんだけど……ぐぬぬ」
「そうじゃねぇよ！　なんでお前が――」
「亡国機業に、ってか？　別に両親は人質に取られてねーよ？　まあ金の支払いはいいから加担してるってのはホントだけど」
「ソレで……それで俺達を裏切るのかよ」
「お金大好きッスからねー、チョーウケるー？」
へらへらと笑った穂次に対して一夏の頭に血が昇る。本当にソレで裏切ったのなら

ば、ソレは許される事ではない。友達、仲間を大切に想う一夏だから――穂次を攻撃出来る筈がなかった。

血が昇っても、頭だけは冷静に。楯無から叩きこまれた思考回路が淡々と事実だけを突きつけ、一夏の願いを否定していく。

「うーん、困ったなー。金の為ーって言えばお前が怒って俺を攻撃してくれると思ったのに」

「嘘だったのか？」

「ん？　ああ、金の為ってのはホントだぜ？　理由の一部でしかないけど」

頭を振って、へらりと笑っていた穂次は自分の左薬指に嵌っている黒いフィンガーバンドに触れる。黒々とした粒子が穂次を覆い隠し、粒子が鎧へと変化していく。装飾の無い、簡素なＩＳ。武装らしい武装は左腕を隠す大型の盾しか見えない勝つための機体。

一夏はその姿を見て目を細める。

黒の装甲は穂次とＩＳの適合率が上がったから、それは穂次自身が言っていた事だ。だから驚きはない。

けれど、ソレは違う。

左腕にある筈の盾の形状が大きく変化していた。幅広のソレが、細長く変形してい

る。アレは盾ではない、むしろ――鞘のようだ。
「なあ一夏。俺はさ、お前に勝ちたかったんだよ」
穂次の言葉に呼応するように、鞘の端が開き黒い粒子が漏れだす。発生するエネルギーを抑えきれない様に、次第に荒々しく吐き出されていく。
抑え込んでいた欲望が形になるように、鞘が機械的な音を立てる。
一つ、二つ、三つ――。
一夏に冷や汗が流れる。へらりと笑った穂次の目が次第に黒に染められ黄色の瞳が中心で発光していく。頬を侵食するように回路図模様が伸び、黒く脈動する。
ソレはきっと危険な力だ。一夏は直感した。仲間を大切に想える一夏だからこそ、例え敵かもしれない穂次の事を想わずにはいられなかった。
「やめろッ穂次！」
「やめろ？　何をだよ。今の行動全部か？　ハハッ、やめられるかよ。もう舞台は整ってんだ。大立ち回りでもしなきゃぁ観客の目が引けねぇだろ？」
八つ目の音が鳴ると同時に黒の粒子の流動が停止し、鞘がガチリと音を鳴らして開いていた八つの部品が閉じた。穂次は柄を握り、一息にソレを鞘から引き抜いた。
鯉口から僅かに溢した粒子が散り、鋒の軌跡を黒く描く。変哲もない刀だった。白い刀身と黒い峰。人が握れば大太刀とも呼べるソレはＩＳにしてみれば打刀とも言える

程度の長さ。

穂次はその刀を一瞥し、一直線に一夏へと向き直る。

地が蹴られた。

瞬時加速にも劣らない穂次の踏み込みに一夏が反応出来たのは単に白式の速度が原因だった。相手の速度に合わせる様に、一夏の視界が一瞬狭まり世界が鈍くなる。鈍くなった世界で正常に、或いは異常なまでの速度を出している穂次だけが一夏の視界に収められた。

左からの薙ぎ払い。穂次の動きからそう判断した一夏は雪片弐型を起動し、攻撃を防ぐために動く。斬り返しまで含んだ動作だった。

「ッ」

「それは悪手だぜ、相棒」

触れる程度に当たった刀を弾き、一夏は穂次とほぼ同時に雪片弐型を翻し、振るう。空に高々と響く金属音と火花。擦れ合う刀身をお互いに弾き、一夏と穂次は同時に左腕を上げる。

一夏の左腕に光が収束し、荷電粒子砲が唸りを上げる。光が穂次を覆い隠し一夏は咄嗟に距離を取ってしまう。

稲妻を走らせながら、鞘を盾にした穂次は嗤いながらも姿を現す。歪んだ口元に一夏

はハッとして、舌打ちをした。回転していた思考が現実を逃避する。逃避するだけの理由が生じた。

「村雨に乗っ取られたのか」

「……お前がそう思いたきゃぁソレでいいんじゃね？　夏野穂次は裏切らない、だからきっと村雨が悪い。そんな選択も別に構わねぇよ」

穂次はソレを肯定した。いいや、否定しなかっただけで、ソレは肯定とは言い難い言葉だった。だからこそ一夏は思考が乱れる。

稲妻を走らせていた鞘へと刀を戻した穂次はへらへらと笑みを浮かべて口を開く。

「妾（わらわ）が主に代わり――、ってか？　つーか、一夏はコイツの事を知らないから別にコイツの性格に成らなくてもいいのか。うっかりしてたゼ☆」

「嘘……なのか」

「嘘も何も俺は何も言ってねぇだろ。まあお前がどんな選択をしようが俺は受け入れてやるよ。だがね、今回の俺の選択だけは絶対に否定させない。

誰にも否定させるつもりはない。一夏にも、箒さん達にも、俺にも、セシリアやシャルロットにも、否定させねー」

「んで……なんで裏切ったんだよッ！　何が悪かったんだよ！　セシリア達に告白したんだろ!?」

「……なんで裏切ったかって？

ソレをお前が言うのか、ファースト！」

穂次の顔が笑みから怒りへと変化し、一直線に一夏へと加速する。同時に引きぬかれた刀の鋒が眼前へと迫り、一夏は雪片の腹でソレを防いだ。

一夏の事を一番目（ファースト）と読んだ二番目（セカンド）は歯を剥き出し、一夏を睨み、芽生えたソレを吐き出していく。

「どうしてお前が一番目なんだ……どうして俺が二番目なんだッ！　どうしてお前が普通に日常を過ごせて、俺は政府に拷問紛いの検査をされた!?　なんでお前は織斑一夏を名乗れて、俺は夏野穂次を名乗らなきゃならないッ！　答えろよ、答えてみろよッ！織斑一夏（ファースト）！」

「それは――」

僅かに緩んだ一夏を咎めるかのように穂次は一夏を蹴り飛ばす。衝撃に言葉を詰まらせながらも一夏は体勢を立て直した。

「――……別にお前が悪い訳じゃねーさ。誰が悪いわけでもねぇ。ただ全部が悪かったのさ」

怒りを鎮めて、誰かを諭すようにゆっくりと、納得させるように言葉を穂次は吐き出

した。
　織斑一夏が一番目だったことも、夏野穂次になる少年が二番目だったことも、誰も悪くはなかった。
　誰も悪くなかったからこそ、人に成れた二番目は恨まずにはいられない。羨まずにはいられない。妬まずにはいられなかった。
「俺はお前に成りたかったよ……だからお前を殺す」
「……」
「後の事は任せてくれ。お前を殺した理由なんて俺には腐る程言い訳出来る。それこそお前が言った通り、ＩＳの暴走とかな」
　叩きつけられる殺意に一夏は冷や汗を流してしまう。一瞬だけ、一夏は自分が死んだ方がいい、などと考えてしまうが、ソレはスグに否定する。
　死んでいい訳がない。死にたくない。けれど、穂次を否定する事など出来ない。否定出来る訳がない。
「だから、本気で戦えよ一夏。お前はライバルなんて思ってないかも知れねーけど、な！」
　穂次が接近し、刀での連撃が繰り出される。連撃と連撃の合間には格闘が挟まれ、一夏は防戦するしかない。いいや、一夏の感情も問題だった。

一夏は穂次の事を相棒だと思っていた。自分よりも先に行く、好敵手だとも思っていた。だから、一夏は穂次に勝ちたかった。ソレこそ全てを度外視して、勝ってみたかった。

一夏の心が震える。全身の毛が逆立ったように、過敏にソレを求めてしまう。

「チッ……予定してた時間より短いな」

舌打ちをした穂次の言葉と同時に身を翻して穂次は迫ってきたレーザーを防ぎ、一夏から距離を取る。

アリーナのバリアに穴を開ける程のエネルギーを込められたレーザーを撃ち込んだ存在は真剣なな顔を悲しみで染めて、スコープを覗き込んでいた。

「……穂次さん、動かないでくださいます？」

「俺を撃つのか？　セシリア」

「撃ちたくないから言ってるんですわ」

「動きたいからそう言ってるんスよ」

へらりと笑った穂次は不可視の攻撃を避け、アリーナに飛ぶ影を数える。一夏と自分の間に入ってきた篠ノ之箒、ラウラ・ボーデヴィッヒ。その少し後ろに凰鈴音とシャルロット・デュノア。一夏の後ろに移動したセシリア・オルコットと更識簪。

穂次は安心するように息を吐き出して笑みを深める。この程度ならば予定通りだ。

「ああ、助けてくれ！　ＩＳが暴走しちまったぜ！」
「……」
「ありゃ、誰も反応してくれないなんて俺がまるで悲しい存在じゃないッスか！」
「理由は全部さっき聞いたわ」
「あっそ。理解が早くて助かるよ。何より、ココに織斑先生がいない事が幸いしたね、いやまったく」
「……前の告白は嘘だったの？　私達を騙したの？」
「騙した？　人聞きの悪い事を言うんじゃねぇよ。俺はこんなでもシャルロットとセシリアを愛してるよ。世界と比べるまでもなく、な」
「それなら――」
「――だから俺と一緒に行こう。こんな世界なんて一緒に壊そうぜ。セシリアもシャルロットも、世界を恨む理由なんてあるだろ？　だから一緒に行こうぜ」
　へらりと笑う穂次が両手を広げてそんな言葉を吐き出す。自分が当然の事をしているように語る穂次にセシリアとシャルロットの眉が顰められた。
　否定したい現実はある。穂次の言う通りに世界を恨んだ事もある。彼が愛と呼ぶソレに準じて、それこそ彼の言った通り、彼のことを信じれば――二人は彼に着いて行くべきなのだろう。

「冗談ッスよ。そもそもセシリアやシャルロットが来るなんて思ってないし。性格的な話でも、倫理的な話でも、何より俺との関係の話でも」

アッサリと自分の言葉を否定した穂次は溜め息を吐き出しながら、泣きそうな程に情けない顔を無理矢理笑いを作り上げる。

穂次との関係と言われて、二人は疑問を浮かべ、その疑問に答えるように穂次が嫌そうに言葉を続ける。

「織斑先生に俺の事を見張れって頼まれてんでしょ？」

「なにそれ……」

「わざわざ通信規制の掛かってる指導室に入って、俺にバレてはいけない話をしてたのにィ？　いったい俺に何がバレちゃいけないんデスかねー？　二人は何を任されたんデすカねー？」

顔を隠してカタカタと嗤う穂次にセシリアとシャルロットは息を飲み込む。

違う、アレはそう言った話ではない。そう口にする前に穂次が高らかに空に向けて嗤い出す。

「ハーハッハハハハ！　ホント、騙されたぜ。織斑先生に頼まれたから、なんて考えたくなかったけどな」

「ち、違うよ穂次！」

「ふーん……別にどっちでもいいッスよ。ソコは俺に関係ない事ですしィ？　織斑先生がずっと俺を怪しんでたのはホントだし。わざわざ俺を自分の近くに置いたのもそういう事だろうし」

　ヤんなるね、と言葉に続けた穂次は溜め息を大きく吐き出して、これ以上話す内容が無いかの様に。もう何も聞きたくないように、決別と決意を表す為に無銘の刀を鞘から引き抜いた。

「それじゃあ、敵として改めて自己紹介をしてやるヨ。

　ドーモ、セイギノミカタ＝サン。対戦乙女（アンチ・ヴリュンヒルデ）ＩＳ無銘（ムメイ）に乗ってる、世間と政府から名前を抹消された無名（ムメイ）デス。

　感動的な皮肉だろ？」

無名の悪の王様

夏野穂次――いいや、無名のＩＳ適合率の都合上、長期戦は不得手である。

攻撃に当ってしまえば、ソコが削れたような幻痛が走るのだから、肉体的にも精神的にも損傷が生じない一夏達を相手取るのならば相手の攻撃に当たらずに、一方的に攻撃出来る位置取りに居るのが理想だ。

抜いた刀を一度鞘へと戻し、鞘を盾へと変化させて、盾を弓へと変形し逃げながら撃ち続ける。長期戦になるが、無銘ならば継続戦闘を続けることは可能だ。

ソレが正しい選択だろう。

けれど無名は刀を鞘に戻す事なく、篠ノ之箒と剣戟を繰り広げていた。高速に移動を続け、ソレを追うように箒も移動しながらの攻防戦。単純にソレだけを見れば箒の方がやや優勢と言える。

それを見ながら、顔を顰め続けていたのは他のメンバーだ。エネルギーの回復に努めている一夏はともかくとしてセシリアと鈴音とラウラはその戦闘を悪手だと知っていた。

無名は常にセシリアと自分の間に箒を挟むように動いている。鈴音の攻撃が届かな

い程高速で動いている。ラウラのＡＩＣを警戒し続けている。
　そこまでの事をして、無名はようやく劣勢なのだ。剣戟を愉しんでいるのか、変わらずへらへらと笑みを浮かべていもいる。
「何故一夏を裏切ったッ」
「裏切ったつもりはねーですよー」
　繰り広げられている剣戟の合間に箒が叫ぶ。その問いにへらりと嗤いながらも無名は応える。裏切ってなどいない。無名は裏切ったつもりなど毛頭ない。
　頭に血が昇ったのか攻撃が甘くなり、空いた隙に無名は容易く刀を突き入れる。非固定浮遊武装に突き刺さった刀をそのまま横に薙ぎ払い切断した。
　呆気に取られた箒は一瞬でソレを理解して距離を素早く離した。
　箒との距離が離れた事で無名へと射撃の雨が降る。ソレも容易く、避けて、危険なモノは鞘に防がれていく。
「んー、時間があんま無いんですけどねー」
「お前の体質を考えるとそうだろうな」
「……ああ、勘違いしてんスねー」
　ラウラの一言に男は動きを停止させて一身に銃弾とエネルギー、更にはミサイルを受け止める。爆炎と煙に包まれながら、無名は煙を振り払い姿を現す。ドロリと彼の額か

ら赤い液体が流れ、露出していた腕からも赤が滲み出ている。
体質に間違いはない。そもそも無銘と完全に一体化した所で改善出来る体質ではない。男が否定したかったのはソレではない。
「攻撃なんて当たっても気にしねーッスよ。目的の為なら、俺なんてどーでもいいッス」
へらりと口元を緩ませた男は額からにじみ出た液体をそのままに髪を掻き上げる。
唖然とするしかなかった。誰だって、怪我はするのは嫌悪する。けれど、男はそうではない。人間として大切なネジを何処かに置いてきたのか、それとも彼にとって崇高な目的にとってソレは取るに足らない事なのか。
息を飲み込んで停止してしまった少女達の前に織斑一夏がフワリと移動する。
「よぉ、相棒。エネルギーの貯蔵は完璧か？」
「……ああ、親友。お前を止める程度には、な。お前も十分回復しただろ？」
「ハハッ、やっぱり気付かれてたか」
ニヤリと笑う男の左腕――鞘が息吹を上げる。黒の粒子を盛大に吐き出して、十二分に貯蔵がある事を示す。
二人の視線がかち合う。どうしてか、両者とも死ぬ可能性を孕みながらも、口元には笑みが浮かべられていた。
「俺が勝つぞ、穂次」

「お前が負けるさ、一夏」
いつもの軽口のような気軽さを出しながら、一夏と無名は構える。――動いたのは同時であった。
白い極光と無銘刀がぶつかる。
無銘刀――対戦乙女ＩＳの武装。その称号を冠した者は一人しか居らず、因果の如く同じ特性が白式に顕れている。だからこそ、無銘はその牙を剥き出しにする。
黒の粒子が刀身から溢れ、白を侵食していく。極光はソレを覆すように更に輝きを増し、一夏はスグさま身を引く。
「それが――無銘の単一仕様能力か」
「正確には違うけどな。大体の攻撃に対処出来る無銘が唯一専用の機能を持ってるのがこれッスよ」
刀身から溢れでた粒子を大きく振り払う。
零落白夜を無効化している訳ではない、むしろ正しく零落白夜は起動していた。起動していたからこそ、無銘の能力が発動してしまう。
普段よりも余計に消費してしまったエネルギーを確認して一夏は眉を顰める。無効化ではなくて助長させる能力。故に諸刃の剣が自身に牙を剥いてしまう。
「厄介だな」

「人体には直ちに影響はないから。俺の虚脱感スゲーけど」
　へらりと笑った無名は一歩後ろへ跳ぶ。同時に不可視の鉄槌が上空から振り下ろされた。
「なんだ、コレは避けるんじゃない」
「許容できる痛みを凌駕するのはちょっと……」
「超えたらアンタは気絶するぐらいでしょ。死んでも死にそうにないし」
「えぇ……ほら、一夏はどうでもいいけど、もっとさ『穂次を攻撃したら穂次が傷ついちゃうっ！　でも攻撃しないと穂次を止めれない！　アタシ困っちゃうッ』みたいな思考してもらってイイッスかね」
「アンタをぶっ倒して、そのあと生身でボコボコにすれば問題無しッ！」
「……ま、どうせ当たらないからいいけどさ。そもそも一対多は無銘の領分だし」
　鈴音の開き直り方に戸惑いを隠すこともせずに、どうにか取り繕うように溜め息を吐き出した男は、ふむ、と一人唸った。
「それに――一人ぐらい落とした方が一夏もやる気になるよな？」
　ニタリと笑んだ無名が一歩を踏み出す。一夏をすり抜けて、その奥にいる鈴音へと迫り無銘刀を突き出す。
　双天牙月を巧みに操り、その鋒を逸らした鈴音。その瞳に映るのは変わらず嗤ってい

る男の顔だった。
　無銘刀の鍔を左手で擦り、量子変換された棒が――柄が左手に握られる。荒々しく吐き出された黒い粒子が鈴音の視界を染め上げる。
「んじゃ、ご苦労サン」
「ッ」
　容易く振りぬかれた〝鬼の爪〟。同時に鈴音の身体が横にズレる。何かによって押し出され、そしてその押し出した本人は黒の粒子に包み込まれた。
　水色の髪を揺らしながら落下していく少女。僅かに身体に残る粒子がその軌跡を描いていく。
「ツンタねぇ！」
「ありゃ、簪さんだったか……うーん、戦力的に鈴音さんは落としたかったけど、まあ後ろで狙われる可能性は減ったからいっか」
　激高した鈴音はスグに血の気が引いていく。誰だ、誰だこの男は。少なくとも知っている男ではない。知っていた男はそんな事を言わない。言ったとしても戦力的、という言葉が胸囲的という言葉になっていた筈だ。
　ようやく、鈴音は怖くなった。へらりと笑いながら、何の感情の起伏もなくソレをやり遂げた男に恐怖した。

「穂次ッ！　コレなら外さないでしょ!?」

鈴音に気を取られていた穂次の背後にシャルロットが近寄り、灰色の鱗殻を構える。構えたソレを撃とうと、シャルロットは指に力を入れる。男がへらりと笑いながら振り返って、躊躇してしまった。

「ん、まだまだ甘いッスよ」

腕を掴みあげて、灰色の鱗殻を逸らした男は情けなく笑いながらもシャルロットへと視線を合わせた。泣きそうになっているシャルロットを見ながら、男の口は嗤いに歪む。

「ああ、俺で怖がってくれるなんて、とってもイイじゃないかッ……！　でも、もう必要じゃないよ」

「シャルロットッ」

「ラウラさんも、甘い」

シャルロットをラウラへと投げ飛ばし、穂次は溜め息を吐き出し、視線を地面へと向ける。

水色の少女を隣に居た山田先生へと渡した存在が居た。黒い髪が揺れ、桜色のＩＳを纏う存在。

「ああ、惜しい。実に惜しい……。予定より早くないッスか？　織斑先生」

「阿呆が……誰が好き好んでお前の予定に合わせねばならん」
織斑千冬がソコには居た。
苛立ちを隠す事もせずに、刀を抜くこともせずにただ真っ直ぐに織斑千冬は名も無い男を睨んだ。
「投降しろ」
「残念ながら。何ならココで一戦します?」
へらりと嗤う男は千冬の提案を容易く斬り捨てて、挑発する。その挑発にピクリと眉を動かした千冬は更に睨みを強くする。
「冗談ツスよ。ココで戦って損するのはソッチでしょうに」
「お前程度に勝てないと思っているのか?」
「少なくとも、一夏の頸は刈り取る自信はありますよ」
チリチリと肌を焦がすような空気に支配される。ドチラが動くこともなく、ただ睨み合っているだけだというのに。
千冬が無名に勝つ事は可能だろう。ソレが一夏達を守りながらとなれば話は変わってしまう。何より、一夏達の命と無名の確保、ドチラが大事かなど天秤を使う意味もない。
「……勝手にしろ、阿呆」

「どーも」
「待てよ穂次」
「待てねーよ。信仰してる神様のお告げに従って、俺は世界を征服してやるよ。……それと、お二人さん。俺の監視ご苦労様。もう俺に構わなくてもいいッスよ」
へらりと笑った無名はセシリアとシャルロットにソレだけを言い残し、バリアを切断して飛び去った。
無力感に苛まれている一夏達に対して千冬は溜め息を吐き出してしまう。
「ラウラ、アレの行方を追跡しておけ……どうせ逃げられると思うがな」
「わかりました、教官」
「……まあいい。さて、お前達。わかっているとは思うが、この事は緘口令が布かれる。何も口にするな」
「……千冬姉、穂次は本当に」
「……私の落ち度でもある。あまり考えすぎるな」
深く溜め息を吐き出した千冬は頭を振り、頭を切り替えてセシリアとシャルロットへと視線を合わせる。
「デュノア、オルコット。お前達は軟禁させてもらう」
「なっ!?　なんでだよ、千冬姉！」

「アイツと恋人関係だったのだろう。十二分に情報を持っている可能性がある。わかってくれるな？」
「……わかりました」
「山田先生、お願いします」
二人を山田先生へと受け渡した千冬は改めて一夏達へと視線を向ける。
「お前達からも話は聞くが……少し時間を置こう。私も少し疲れた」
疲労の色を見せながら、千冬は大きく息を吐き出して空を見上げた。どうしようもない快晴が千冬の視界を埋め尽くした。

◆◆

ＩＳ学園の制服を纏った男は地下のレストランに立っていた。その後ろに控えてい

たクロエ・クロニクルは静かに瞼を閉じている。
「やっと来たのね、セカンド……いいえ、無名と呼んだ方がいいのかしら？」
「お好きにどーぞ」
上座に座っていたスコールの言葉に男はへらりと笑いながら応えた。
「ハッ、オメェも負けたんだってな！」
「ああ、無様にラウラさんから撤退したオータムと違って俺は織斑千冬から華麗なる撤退をしたけどなッ！」
「ぶっ殺す！」
「返り討ちッスよ！」
「やめなさい」
売り言葉に買い言葉と言うべきか、スコールの一言で停止した二人は威嚇なのか唸り声を少しだけ上げた。
その様子に呆れるように息を吐き出したエムは机をコツコツと指で叩いた。
「ほらほらぁ、まどっちが苛ついてるよォ、ムメー君」
「おっとコレは失礼。つーか、篠ノ之博士も居たんスね」
「そりゃぁ歴史に書かれない舞台の裏側なんて、特に私が主導じゃないなんて滅多に見れないからねッ」

「お、おう……まあいいッスけど」
キュルルン、なんて効果音が付きそうなウィンクをされた無名は少しばかりドギマギして、心を落ち着けてから一歩を踏み出す。
胸から掛けられた小さなチェーンに通された二つのシルバーリングが音を鳴らしながら揺れる。その音を耳にしながら無名はスコールの隣へと足を進める。
「それじゃあ、スコール」
「ええ」
立ち上がったスコールが椅子を引き、その椅子に無名が座った。
上座へと座った男へと視線が集まり、男は変わらずにへらりと笑ってみせた。
「コレは喜劇の為の第一歩だ。
では、諸君。喜劇の為に反逆を始めよう」
無名の一言にスコールと束は笑みを深める。
まるで悪の王様のように、無名はニタリと笑ってみせた。

喜劇の開幕

どうして夏野穂次は自分達を裏切ったのだろう。

考えれば考える程、頭は現実を逃避するように理由を探してしまう。理由を探せど、答えは見つからず、結果だけが頭を支配してしまう。

軟禁の為に懲罰房に入れられたセシリアは簡素なベッドに腰掛けて、乱れた髪をそのままに何の飾りもない壁や天井を視界に収めるだけにしていた。

軟禁――いいや、正しくコレは監禁と言ってもいいだろう。食事は運ばれてくる、案外ベッドの質はいい、それだけだ。時計も無く、ＩＳコアも徴収されてしまった。

食事の数で言えば、今日で三日目。恐らく同じ境遇だろうシャルロットとの連絡は断たれているし、一夏達との連絡も言わずもがな。

彼に恋をしてしまったから。そう考えれば容易く彼を恨むことが出来た。自身の左薬指に収まるシルバーリングを右手で少し弄って、外さずにそのままにしてしまう。

外して、彼を捨ててしまえば……いいや、自分が捨てられたのだったか。苦笑を浮かべて、セシリアはベッドの上に横たわる。

開いた扉の音で姿勢を戻し、セシリアは扉へと向いた。ソコには黒い髪を揺らした教

師が冷たい瞳のままセシリアを見つめている。
「オルコット、出ろ」
「……あら、ようやくわたくしの時間ですのね」
織斑千冬の一言に嫌味の一つを吐き出したセシリアは手櫛で簡単に髪を整えて立ち上がる。何を聞かれるかなどわからない。けれど、彼の事を聞かれるのだろう。
彼……夏野穂次――無名になってしまった男の事を。

指導室へと入ったセシリアは椅子に座り、その前の椅子には織斑千冬が座った。持っていたバインダー型のタブレットを机の上に音を立てて置き、千冬はセシリアを睨む。
「さて、知っている事を吐いてもらおう」
「……わたくしは何も知りませんわ」
「本当にそうか？」
千冬はタブレットを手に取り、指を滑らせる。
「あの時……お前だけはアイツに――無名に攻撃されていなかったな」
「それは距離的な問題なのでは？　わたくしと彼の間にはバリアもありました」
「無銘の能力からして、バリアなど意味は無い。距離に関してもあの程度の距離ならば

一瞬で詰める事は可能だろう」
「……何が言いたいんでしょうか」
「オルコット、お前はあの裏切り者と繋がりを未だに持っているな？」
「なっ!?」
頭に血が昇り、思わず腰を上げてしまう。歯を食いしばり目の前で淡々と言葉を吐き出している千冬に怒りを表す。千冬はそんなセシリアを鋭く見つめながらも微動だにしない。
自身の怒りを喉の奥へと抑え込んだセシリアは腰を降ろし、大きく深呼吸をする。怒りは未だに収まらない。
「繋がりは持っていません」
「では、どうして未だにあの裏切り者が贈った指輪を大事にしている」
「コレは……」
「ソレには通信機能でも入っていて、裏切り者が私達の会話でも聞いているのか？」
「違いますわっ！」
「ならばソレを外して壊せ、セシリア・オルコット。現状、信用出来る存在が不明瞭だ」
セシリアは千冬の命令を耳にして、左薬指へと視線を落とす。震える右手で薬指に触れれば、滑らかな感触のリングが指に引っかかる。コレを外せば、とりあえずは自身の

疑いが晴れるだろう。
　裏切り者と呼ばれた彼がくれた指輪。誓いの言葉、想い、裏切り、否定、勘違い。三日間ずっと頭の中でグチャグチャに混ぜられた感情が瞳から溢れ出る。
　左手を握りこんで、胸元に抱き込む。
　信じたい。裏切ったあの人を信じてあげたい。だからこの指輪を外す訳にはいかない。
　外してしまえば、きっともう会えない。会って怒る事も出来ない。伝える事も出来ない。何も出来ないかも知れない。
　自分達を大切だと言った――、あの戦闘でも愛していると言ってくれたあの人の事を諦めるなんてセシリアには出来る訳がなかった。
「……そうか、外さないか」
　呆れの混ざった大きな溜め息がセシリアの鼓膜を揺らして、背筋を凍らせる。
　まるで銃を額に突きつけられているような感覚。殺されるかも知れない。そう思ってしまう程の何かがセシリアを支配した。
　鋭い瞳をセシリアへと向けている千冬は再度口を開く。
「もう一度聞こう、セシリア・オルコット。裏切り者を捨てろ」
「いや、です……」

「そうか……少しだけ待っていろ」

途切れ途切れに言葉を吐き出したセシリアの言葉を噛みしめるように、千冬は残念そうに言葉を続け、席を立った。

指導室の扉が閉められ、ようやく一人になれたセシリアが思い出したように呼吸を再開して、嫌な汗を流す。

どうして自分が――、という感情はそれ程無かった。きっとこの選択……穂次に加担しているような選択は間違いだったのだろう。

セシリアは自分の選択を嘲る。けれど、後悔などはない。頭の中に浮かんだ可能性達は随分と暗いモノだったけれど……少しだけ、ＩＳ学園から出れば彼に会えるかも知れないという妄想もしてしまう。

彼の愛が深いと思っていたけれど、これでは自分も彼の事を言えないのかも知れない。

扉が開き、セシリアが振り向けばソコには自分とは濃淡の違う金色の髪を乱した恋敵が立っていた。その目は赤く、どこか顔もヤツレて見える。

「三日ぶり、セシリア」

「……ええ。随分とヤツレましたわね」

「セシリアもね」

短く言葉を交わし、お互いの視線を左手へと落ちる。薬指に収まったシルバーリングが大凡の事を理解させた。

シャルロットの後ろから千冬が部屋に入り、指導室は完全に閉められる。最早、通信は一切出来ない。中にいる三人以外に中で起こった事を知れる存在は居なくなった。

「お前達は実に馬鹿らしい選択をした……という事は理解しているか？」

「はい……」

「裏切り者に加担している可能性を持っている事への覚悟もあるか？」

「……それでも、私達は穂次を放しません」

「そうか」

千冬は椅子から立ち上がり、座っている二人を見下ろす。見下されて尚、二人は真っ直ぐに千冬を見た。

そして千冬は頭を下げる。

「スマナイ」

「え？」

そんな謝罪の言葉に対して二人は唖然と声を出すしかなかった。

どうして千冬が謝罪をしているのか、理解なんて出来ない。少なくとも今は裏切り者に加担しているであろう自分達への尋問だった筈だ。
「謝って許される事ではないが――」
「ま、待ってください。どういう事ですか？」
「今回……いいや、全ては計画された事だった」
「……計画？」
「全てって……いったい」
頭を下げたままの千冬とその言葉に疑問しか浮かばない二人。千冬は顔を上げて、椅子に座る。二人は固唾を飲み込み、千冬の口が開くのを待った。
「亡国機業を徹底して潰す為の計画。私や束が機業に対し危機感を覚え計画し、そしてアイツが実行した」
「ちょ、ちょっと待って下さい！　どうして穂次が」
「都合が良かった、と言えば聞こえは悪いな……しかし、ソレ以外に言いようはない。セカンドという立ち位置、政府からの拷問、不遇、人間性――そしてＩＳの使用が可能である事」
「つまり……穂次さんはアナタが計画した通りに動いたと？」
「そうだ」

「ッ！　どうしてですの！　どうして穂次さんが巻き込まれしまったのですか！」
「仕方なかった……というのは言い訳だな」
「アナタは世界最強なのでしょう!?　たった一人の戦乙女（ブリュンヒルデ）なのでしょう!?」
「せ、セシリア、落ち着いて」
　立ち上がり、今にも千冬に殴りかかりそうなセシリアを抑えこむシャルロット。千冬はソレを受けるつもりだったのか、微動だにしていない。
「私や束が動く事も可能だった……だが、それでは亡国機業の本体を潰す事は不可能なのだ」
「だからって、どうして穂次さんが」
「アイツが決断した道だ。私にも否定は許さなかったよ、アイツは」
　彼の言葉を思い出すように、苦笑した千冬を見て、セシリアはようやく腰を降ろして頭を抱えた。
「――……アイツが計画に乗ったのはお前達の為だ」
「私達の……」
「お前達を意識し始めてから、アイツは常にお前達の事を第一に考えていたよ。だから二人の平和の為に計画に乗った。それまでは別に興味のなかった計画にな」
「それで……その、穂次さんはいつ戻ってきますの？」

「戻っては来ない。夏野穂次は裏切り者として認識されているからな」
「待ってください。えっと、つまり？」
「この情報……アイツがスパイとしてＩＳ学園を裏切った事を他言するな」
「ど、どうしてですの！」
「アイツの行動を無駄にする気か。胸を張って言える事ではないが、ＩＳ学園にも少なからず他国の諜報員が存在している。亡国機業もな。
　お前達をあの時点でスグに軟禁――確保したのはお前達がアイツにとって弱点となるからだ」
「……なら」
「夏野穂次は帰ってこない。コレは確定している事だ」
「そんな……」
「予定では悪に落ちた友人の元にヒーローがやってきて倒す。そんな流れだそうだ」
「……は？」
「その後ヒーローは悪のトップである天災マッドサイエンティスト・Ｄｒ．タバネを倒し、世界は平和を取り戻す」
「何を言ってますの？」
「これから先に起こるであろう喜劇の内容だ。ちなみに脚本はＤｒ．タバネだ」

二流作家の脚本だってもっとしっかりしているだろう。とは口が裂けても言えなかった。

セシリアとシャルロットが呆けて口を開いている姿を見ながら千冬は顔を破顔させる。

「コレは活劇でも、悲劇でも、ましてや惨劇ですらない。喜劇だよ」

「……内容は、わかりましたわ」

「う、うん……でも、結局穂次は帰ってこないんですよね」

「その為の指輪だろう。安心しろ、無銘とアイツに勝てる存在など早々居ない事は私が保証してやろう」

二人は指輪へと視線を落として、ようやく全てが繋がった。

だから彼はあの時、夏野穂次という一人称を使わなかったのだ。夏野穂次ではない自分を対象にして誓った。

帰ってくる。裏切ってなどいなかった穂次……いいや、無名の男はちゃんと二人の元へと帰ってくるのだ。その事を理解したセシリアとシャルロットは安心出来たように深く息を吐き出した。

そこでふと、疑問が生じる。

「……その……穂次さんは表向きで世界を裏切っている訳ですが……国際指名手配など

はされないのでしょうか……」
「安心しろ。以前も言ったように、アレは特殊な立ち位置にいるのだ。ＩＳ学園もセカンドに裏切られた事を公開したくはないし、何より原因は日本政府にある。だからこそアレが罪に問われる事などはない」
「本当に、全部計画の内だったんですね」
「お前達に恋する以外はな」
千冬の一言に、ようやく余裕を持てた二人の顔が熱くなる。顔を赤くした二人を目の前に、千冬はわざとらしく溜め息を吐き出した。
「お前達がアイツが戻ってくるまでその恋心を保てるかが少し心配だったが……問題ないだろう」
「お、織斑先生も穂次の事を想ってたんですね……」
「アレでも私が直々に教えた阿呆だ。考えない訳がないだろう？」
ニヒルに笑った千冬とそんな千冬を見て、一瞬の間を取った後に笑う二人。笑われた事に少しだけ口をへの字にしながらも千冬は溜め息を吐き出した。
「何度も言うようだが、他言はするな。アイツは表向き〝村雨の修理〟の為に政府に出向している形になる」
「政府にも協力者が居ますのね」

「当然だろう。目付きの悪い後輩がせっせと働く手筈だよ」

◆◆

「ん……クロクロじゃぁないか！」

「……クロエです」

「スイマセン、クロエさん。その怖い目で睨まれるとお兄さん感じちゃうッ！　でも婚約者が居るんだ……君の気持ちには答えられない！」

「……」

「そんな、勝手にやってろみたいな表情するなよー。三日も衛星から逃走して疲れてるんだよぉ」

　へらへらと笑いならがクロエさんへと一歩近寄る。一歩退かれた。嫌われた……？

　いや、そんなまさか。篠ノ之博士に言われてた通りにクロクロと呼んだのに喜んでくれない……だと？

「準備は出来ているのですか？」
「当然だろ。そっちは問題なかったのか？」
「当然です。アナタが世界の目を引いている内に全ての準備は完了したようです」
「おーけー。それじゃ、行きますか」
へらりと笑いながら俺は地下のレストランへと一歩踏み出す。何歩か歩いてから、停止する。
「ヤバイ、どうしようクロエさん」
「不足でもありましたか？」
「悪役っぽいセリフ考えてたけど、何にすればいいか迷う」
「どうでもいいのでさっさと歩いてください」
「いやー、クロエさんが虐めるぅ」
「そうですね。だから歩いてくださいポンコツヘタレ」
「誰だクロエさんにそんな言葉を教えたのは!?」
「束様ですが？」
「あっ……」
全てを納得させる言葉だと思う。篠ノ之博士がだいたい悪いんだっ！
それにしてもポンコツはいいとしてヘタレは違うと思うんだ。ほら、頑張ってシル

バーリング渡したし？　うん、俺、ヘタレじゃない。
「まあ、成るように成るさ」
「……その吹っ切れ具合は良好だと思います」
「フッ、婚約者がいるから惚れるんじゃないぜッ！」
「惚れる人の気がしれません」
「なんか否定の仕方に棘が無いッスかね？」
「いいから進んでくださいヘタレ」
「ポンコツも無くなった……」
　ポンコツが無くなって喜べばいいのか、単純にヘタレ扱いされてることを悲しめばいいのか……。
　いっその事美少女に罵られてる事に歓喜すれば問題ないな！　ん、背筋が凍ったゾ。おかしーな。セシリア達には俺の事が言われない筈なんだけど……。
　まあいいか。
「それじゃ、俺達の喜劇を始めようか」
　俺は地下レストランの扉を開いた。

舞台裏の主人公

誰でも主人公になれる。

なんていうのはきっと都合のイイ言葉だと俺は幼いながらに思っていた。

自分の人生の主人公は自分自身である。なんて事は決してない。

「マジかよ、笑えるー」

そういう考えだったから、俺はきっと何も得る事が出来なくなったんだろう。中二病と言ってもいい。発症が中学二年生ではない辺りが手もつけられないが。

自分の事がどうでもいい。関心が持てない。自分がまるで他人の様に感じる。他人だからこそ、どうでもいい。

けれど、最悪な事に、最低限の生命を維持し続けないといけない。コレはたぶん親に悪いだとか、そういう感情であって、別に俺は俺が死んだところで何も感情は湧かないだろう。死んでるから当然と言えば当然だけれど。

俺という存在……確か、名前は——いいや、どうでもいいか。これから先の話、尤もスグの話になるけど、俺の名前は譲るのだから俺はもうこの名前では名乗れない。

俺の人生が歪んだきっかけ――……俺が一瞬だけ俺の人生で主人公になった時の話をしよう。

簡単な事だった。女にしか扱えないＩＳを動かしたのだ。ちなみに、俺を合わせて二人目。

俺は特別な人間だったのか。なんて事も感じた。俺だってかろうじて男なのだ。そういった憧れを持ち合わせていないわけじゃない。

ＩＳを起動したのだって、よくわからない声が聞こえたからだ。初めは幻聴かと思った。

ソコからは検査の嵐だった。血も抜かれたし、ややこしい精神テストもされた。血族関係を改められたし、ソコで唯一俺を人間たらしめていた柱がポキリと折れてしまった。

ああ、いや、ソレが原因で俺が歪んだ訳じゃない。

話は少しだけ変わるけれど。

悪役がいる。正義の味方がソレを倒す。コレが一般的な事だ。

けれど、悪役はいるけれど、正義の味方がいない。だから悪役を倒した者が正義の味方になる。コレが俺の受けた説明――洗脳だったかな？　まあそんな所。

生憎、と言うべきか。幸い、というべきなのか。自分という確固たるソレを持ち合わせていない俺はその洗脳に冒される事はなかった。

ただし、かなり魅力的に映ったのは……間違いない。

俺はスパイになった。コレは乗り気だった。

だって、スパイだぜ？　格好いいだろ？　そういうのに憧れてもいいじゃないか。

俺は俺の人生で初めて主人公になった。前述してるけど、俺が人生の主人公になったのは一瞬だけ。後にも先にも、コレが最初で最後なのだ。

ああ、それで、名前を捨てたのはココ。正確には捨てられたんだけど。まあ、細かい所は別に問題にはならない。

さて、問題は悪役が誰なのか。

最初は篠ノ之束だった。政府側の人間、最初に俺を洗脳しようとしたヤツらからは『篠ノ之博士を捕まえろ』と言われた。

俺は二つ返事で応えた。理由？　そりゃぁ自分が主人公だからだよ。だから俺は主人公らしく格好良く振る舞ったのだ。

篠ノ之博士が標的になり、俺は必死でＩＳの事を勉強した。我ながら初期理論も読み漁ったのは馬鹿だと思う。けれど、それで見えてくる事実もあった。

篠ノ之博士は悪人ではない。聞かされた話での篠ノ之博士はぶっ飛んでたけど、求めている事は実に人間らしかった。

俺に人間らしい、などと言われている時点で人間らしくはないのかも知れないけど。

ＩＳ学園に入学して、必須書類が届いてない事を知った。最初は政府と学園の不仲が原因だと思った。もしくは学園が警戒していたか。

どちらにせよ、侵入出来なくては意味もないので書類は俺が書くことになる。

へらへらと笑いながら、適当に応対する。そんな事は慣れている事なのだ。なんせそうやって生きてきたのだから。

「えっと……織斑一夏です」

記念すべき俺が主人公で無くなった瞬間だった。笑えるだろ？　挨拶一つでわかったんだ。いや、直感した。

……いや、まどろっこしい言い回しは止めよう。俺は織斑一夏に憧れたんだ。よくわからないけれど、ただただ憧れた。だから、俺はこの時点で主人公じゃなくなった。炉

端の意思に逆戻りしたのだ。おめでとう。なんてな。

えっと、それで、何だっけ？

そう。俺と一夏の会話だ。俺はこの時点ではまだ主人公で居たかった。まあへばりついた怨念みたいだと思ってくれ。

とにかく、俺はこの時点ではスパイなのだ。まあ情報らしい情報なんてＩＳ理論だけで精一杯だったけど。

だからこそ驚いたのは織斑と篠ノ之の関係だった。幼馴染だってよ。笑える。政府側がこの情報を渡さなかったのか、渡せなかったのか、ソレはわからないけれど、スパイとしての俺は大きな一歩を踏み出したと思っていた。当然、奈落への第一歩だ。当時の俺は気づいてないけどな。

俺が織斑千冬――織斑先生とちゃんと会話したのは深夜帯の話だ。俺の上に乗った織斑先生との会話だ。あー、いや、睦言とかそういうのじゃない。なんせ俺はこの時関節をキメられてたんだから、そういう色っぽい話じゃないのは確かだ。

アッサリと織斑先生は俺がスパイであることを看破した。そりゃぁ、もう、アッサリと。

さて、悪は誰？　という話に戻るけれど。

俺の中では篠ノ之博士は既に悪役ではなかった。悪役であったとしても、ソレは悪ではなく、悪役なのだ。

織斑先生との熱い語らい――尋問は実に有意義であった。

届けられなかった書類は政府の一部の人間がしたことらしい。俺に指令を与えた人間ではなく、別のグループ。

スケープゴートかよ。なんて思った俺を即座に否定したのは他ならぬ織斑先生であった。

ココで織斑先生は二重スパイの話を切り出した。

政府とＩＳ学園の二重スパイ……ではない。亡国機業（ファントム・タスク）とＩＳ学園の二重スパイだ。

日常生活でヘラヘラ笑い続けたのは俺に変化が無いことを示すためだった。織斑先生曰く、監視の目は常にあるから、との事。織斑先生がそういう事を喋るときは問題無いらしい。

この時点で、俺はまだ喜劇を演じる道化になることは考えていなかった。

じゃあいつからかって？　もう少し待ってくれ。ほら、話には流れがあるだろ？

織斑先生の尋問、及び政府――亡国機業側を騙すのと俺のＩＳ操縦技術向上の為の訓

練の約束を取り付けた。

弱い俺はＩＳの言葉を聞きながら、どうやったらいいのか試行錯誤で頑張っていた。ＩＳの言葉を聞けるってチートじゃね？　と思うかも知れないけど、中々にＩＳの言葉通りに動くのは難しい。そもそも基礎も出来てない俺にとっては四苦八苦しながら頑張って動かせる程度なのだ。

ココで俺は発想の転換をした。ＩＳに聞いてから自分で動くから難しいのだ。ならＩＳに全部任せればいいんじゃね？　と。いや、ぶっ飛んだ思考なのは理解してる。ほら、深夜のテンションでぶっ通しで訓練をして頭がおかしかったんだ。

そこからは、自分の情報を遮断した。幸い、そういう事には慣れてた。そもそも他人である自分を遮断するなんて簡単な事だ。

視界を閉じ、何も考えずにＩＳに全てを任せる。結果としては大成功だった言える。まあ俺が筋肉痛にならなければの話だけれど。

自分へのフィードバックを考えてか、織斑先生はコレを禁止した。まあ、当然だ。

ＩＳにある程度の感覚を渡しているからバリア・エネルギーの消費もリアルに伝わる。ゾリゾリ削られていく感じを伝えた時にスゲー嫌な顔されたのは覚えている。

実際にセシリア・オルコットとの最初の戦いで、近距離からミサイルを受けた時はアッサリと気絶をしたから、問題は大いにあるのだろう。

専用機の名前は、実は無かった。
黄色い装甲に黒いライン。ＩＳの癖に盾を着けられているのが非常に印象的だった。
俺がソレに触れた瞬間に、景色が飛んだ。
白骨の絨毯、そこに立つ白い着流しの女。
「また客人かのぉ」
古めかしい喋りをする女は腰元に備えられた刀を抜こうとして、舌打ちをした。
どうしてか鞘から抜けない刀を大事そうに提げ、女は俺を睨んだ。
睨んでから、パチクリと瞼を動かした。
「お主……もしや声が届いておるのか？」
「まあ、うん」
「なんじゃと!?　お主何者じゃ！」
「夏野穂次だ」
「なんと……話も出来るのか……」
「いや普通だろ」
「妾の領域に連れ込んだ者はアッサリ気が狂うて死ぬというのに……」

「怖いわ！」

むぅ、と唸ったコイツはどうやらそういう性質らしい。

何にしろ、気が狂って死ぬというのなら、アッサリと俺を殺してくれても何も問題はない。ふと、そんな事を思って、きっと主人公が俺を倒してくれる。なんて考えたのは結構な末期だったのだろう。

「……まあよかろう。妾は無銘と謂う」

「んだよ、俺と一緒か」

「なんじゃと!?　お主も無銘という名じゃったか……」

「そういう事じゃねーよ。天然か、天然さんか」

「むぅ……」

無銘と名乗った女に俺は全てを語った。どうせＩＳと喋れるのは俺だけみたいだし、少なからず無銘に変な同族意識を持ったのも本当だ。

だからこそ、俺は名もない彼女に――俺と同じ彼女に村雨を譲った。そして同時に、彼女を離したくなくて、俺の檻へと閉じ込めた。

ここで説明をいれるなら、無銘……いいや、村雨はドコかの最強と戦える為のＩＳでしか無い。戦闘データをＩＳコアネットワークで得て、常に最強を冠する。そういうＩ

Sだ。

その事を知ったのはかなり後の事になる。それこそ、本格的に俺の決心が出来た頃の話になる。

対戦乙女用ＩＳ。無銘。ソレが正しい彼女の名称だ。そして同時にそこまでしても”対”戦乙女である事がオカシイのだ。きっと戦乙女を冠する存在は鬼か悪魔か、はたまた戦いの神様か、魔王様に違いない。少なくとも、人間じゃない事は確かだ。

初めて篠ノ之束に会った時の感想を言うなら、頭の狂った美女、という感想だった。

何がどうなって篠ノ之博士に情報が伝わっていたのか……いや、織斑先生から伝わったのか？　まあきっと俺にはわからないだろうけど。

何にしろ、篠ノ之博士は俺の事を俺以上にわかっていた。よくよく思えばそう思う。

臨海学校で出会った篠ノ之博士はとにかく頭がぶっ飛んでたとしか言いようが無い。この時点で、俺には政府の監視があった筈なのに国家機密をボロボロと出すし、挙句に全部騙している事まで仄めかした。

きっと監視の目を区切って現れたのだろう。今になればそう思うけれど、あの時は本

当にヒヤヒヤした。なんせ新米スパイだったのだから。

夏野穂次……つまり俺の事なのだけれど。名前だけを言えば、俺は三人目のＩＳ操縦者に当たる。当然、メディアから言えば二人目であるし、二人目は俺だ。簡単な話、二人目と三人目は同一人物で、そして俺である。これだけの話。

ただココで問題があるのが、俺の事を三人目だと言える人物というのは政府の極一部の関係者、もしくはその情報を入手出来る存在だ。

俺が夏野穂次になった瞬間から、二人目の名前は抹消されている。情報すら消えた。だからこそ夏野穂次は二人目なのだ。

篠ノ之博士による、クソ面倒極まりない会話で分かったことは篠ノ之博士が非常に協力的って事だ。

新米スパイの為にちゃんと情報を落としてくれている。まあ、俺が気付いたのは少し後なんだけど。

篠ノ之博士は俺の事――存在しない二人目の事を一人目と呼んだ。一夏ではなく、俺を保護すべきだと言った。

ＩＳを動かした事。一夏の初動は彼女の仕組んだモノだという事。同時に俺がＩＳを動かせた一人目の男だという事。だからこそ、俺は一人目だと彼女は言うのだ。まあ存在してないのだけれど。

ついでに言えば、動かし続けている、という事に関しては俺は二人目になる。だからこそ三人目なんて現れない。

イカした頭かイカレた頭を持った三人目が出てくる訳なんて無いのだ。

本格的に、政府と亡国機業の繋がりが見えたのはスコールさんが俺の目の前に現れたからだ。

俺が捨てた名前を呼んだ時点で、繋がりは見えた。もしかしたら篠ノ之博士みたいに情報を得たかも知れないけれど、ソレはきっと薄いだろう。

そもそも、ここまで二重スパイとして活動していた俺だけれど、実際はまだどちらに着くかなんて決めてなかった。いいや、ある程度は織斑先生に従う事は決めていたけれど、踏ん切りはついていなかった。

そして、ソレはここまでだった。

「織斑一夏に勝ちたくはないかしら？」

この一言さえ無ければ、俺は喜劇の為の道化になる決心がつかなかったかも知れな

い。

前述しているけど、俺は一夏に憧れを抱いていた。イケメンだから、という意味ではなくて。

ただ純粋に、自分では立てない場所に立っているから、憧れた。妬んだ。羨んだ。恨んだ。

俺は一夏に勝ちたいという気持ちは少なからず持っていた。それは友人として、アイツの隣に立てる様に、相棒と言う俺を親友と呼ぶ一夏を失望させない様に。

だから、だからこそ、一夏を狙う事は許せない事の一つだったのだろう。

かと言って、この時点で俺がスコールさんを倒しても意味は無い。なら、俺は立場を利用し尽くし、立ち回らなくてはならない。

ここでようやく悪役が決まったのだ。

同時に俺が喜劇の為の主人公（道化）になる事を決心した。

悪役を倒すためにはどうすればいいのか。

悪役を倒すのはヒーローの役目だ。そしてソレは俺じゃない。そんな事は分かり

きっていた。
　主人公に成れない俺と、主人公である一夏。わかっているから、計画はアッサリと決まった。
　幸いな事に、亡国機業は夏野穂次がよほど欲しかったのか、スグに動き出した。
　俺を連れ去り、拷問して、仲間へと引き入れる。ソコでわかったことは俺の情報はそこそこに彼らに伝わっているらしい。お金が大好きな事、金の為なら友人であれ情報を売り飛ばす事、女が好きな事。繋がりを大切にしていない事。そもそも繋がりが無い事。
　そんな上辺だけの情報は知られているらしい。ありがたい事だ。お陰で簡単に亡国機業へと入り込めた。
　無銘――村雨を自分で暴走させたのにも理由がある。俺には力が足りないのだ。
　より、亡国機業に魅力的な力が。ついでに言えば、ちょっとだけ一夏に勝ちたいという気持ちもあった。コレは秘密だ。
　より深く、より濃く、より熱く。俺と繋がった村雨が興奮気味に語っていた事も追記しておこう。あとは全力を出せない事への不満ばかりだったけれど。
　この時点で俺の立場というのは空中に浮いているようなモノだった。
　それこそ裏では亡国機業と繋がりを持っていたけれど、表ではスパイをやめた状態な

のだ。ぶっちゃけ裏切り者として干されている方が俺としては都合がよかった。そういう風に動きもしたけれど、どうやら織斑先生の判断はまた別だったようだ。

受け入れてくれた一夏達に俺が二重スパイだとバラした織斑先生。バラした時点でのその場所が情報規制をされている場所だと判断して、洗いざらいは話した。尤も、亡国機業と繋がっている事は言わなかったけれど。

信頼はしているけれど、誰が誰に漏らすかわからない。だから、この情報だけは言わなかった。

織斑先生に状況を聞けば、政界の方の掃除は政府側で俺を担当していた人がある程度頑張ったらしい。それでも根は深いだろうからまだ油断は出来ないけれど。

まだ問題はある。二重スパイ、そしてその後の計画を知っている人物は織斑先生と俺と篠ノ之博士。そして政府側にいる二人ぐらいしかいないのだ。

だからこそ更識会長は非常に厄介だった。政府のスパイである時にある程度の隠蔽工作は学んだけれど、あの人は容易くソレを看破して、俺に接近を果たした。一夏との関係を結ぶ、なんて建前を言っていたけれど、あの人なら普通に関係も結べただろう。たぶん……いや、変な所でポンコツ発揮するからわからないけれど。

そんな更識会長に対抗する為にはどうすればいいのか。簡単な事だった。人質をとれば何も問題はない。

人質と言えば聞こえは悪いけれど、実際はある一定程度に仲良くなる事が目的だった。それだけで更識会長の動きをある程度止める事は可能だった。

妹である簪さんに会うのは簡単だった。ホント、簡単というか偶然会ったからスグに行動に移したぐらいだ。幸いな事に彼女の趣味はある程度把握していたので、ヒーローショーにでも連れて行けば、親交は深める事は可能だ。

それに時期を合わせるように学園祭が行われる。亡国機業に怪しまれる訳にもいかないので、入場チケットを渡すんだけど、外出すれば更識会長に怪しまれる。いやー、簪さんって便利ダナー。

マドカにチケットを受け渡して、俺は簪さんの信用を得る為に自分の事を話した。当然、スパイだった事なのだけれど。

人間、そういった人に言えないような秘密を暴露すればある程度の信用を得れる。ソレはなんとなく知っていた。それこそ、他人に取り入る事なんて常の事だから上手くいった。

学園祭は滞りなく進んだ。それこそスコールとオータムはすんなり潜入出来たみたいだ。ＩＳ学園の警備ェ……と思いながらもスコールからある程度の作戦を聞いた。

一夏から白式を奪うらしい。どうにか出来ないものかと考えていれば更識会長による『灰被り姫』の演目に誘われた。時間を稼げば準備も出来るだろう。

その事をスコールに伝えて、逃げる時に一夏をオータムが控えているだろう場所へと誘導する。我ながら本当に亡国機業務めの方がいいんじゃないかな、と思えた手腕だった。

それに一夏には更識会長も着いていたので何も問題は無かっただろう。

俺は早々に移動を果たして、オータムの回収補助に徹さなくてはいけない。

オータムはどうやら俺を警戒していた様だけど、知らない筈の〝オータム〟という名前を呼べば納得をしてくれた。当然、周りにはラウラさんが居たから反応らしい反応は無かったけれど。本当にわかってたんだよな？　いや、わかってたんだろ。オータムに聞いたら「ばっきゃろ、そんなのわかったに決まってんだろッ」とか言ってたし間違いないな。

さて、ココで問題が起きた。

更識会長が計画を知ってしまったのだ。俺の心の中はマズいとヤバイでイッパイだった。というかイッパイイッパイだった。オッパイオッパイの方が絶対にイイネ。間違いない。

アッサリと更識会長に計画を話している織斑先生に俺は冷や汗しか出なかった。馬鹿野郎。鬼に勝てるわけがないだろ！

キャノンボール・ファストに関してはソレ程言う事はない。スコールからの指示でアリーナのバリアを時間で解けるようにしておけ、と言われただけだった。
まあソレが非常に面倒な事になったんだけど……。そう考えれば我ながらバカな事をしていたと思う。でも後悔はしてないから問題ないな。

……さて、七面倒臭い話は少し休憩しよう。紅茶でも飲んでゆっくりしてくれ。
そうそう、紅茶と言えば、俺の愛しい人達の話をしよう。え？　いらない？　まあまあ聞けよ。聞いてくださいお願いします。
そう、アレは一目惚れだった。間違いなく、一目惚れだったと思う。たぶん……うーん、今思うとそうじゃないかも知れない。
それでも変に意識してたのは最初からだったと思う。何よりセシリアはスゲー美人なんだ。もう美人過ぎたね。それに何よりおっぱいが大きいんだ。重要じゃない？　人間は中身だ？　おいおい、内臓に恋をするなんてスゲー人種だな。違うって？　別にいいじゃねぇか。おっぱいが大きいことは、いいことだ。うん。
いやいや、こんな話をしてるとまた怒られるんだけど。

えーと、そう、それで美人なんだ。え？　聞いた？　マジかよ。言い足りないんだけど。

えー、っとじゃあアレだ。メイド服の着てたセシリアの話をしよう。スゲー可愛いの。マジで。ホントスゲーよ。へっへへへ。

俺が初めて呼び捨てになったらキョトンとするんだ。マジで可愛かったんだぜ。

それで実はもう一人居るんだよ。

浮気？　違うよ。俺に戸籍が無いから、結婚すらしてないから……。そう思うと悪いことしてるなぁ……。

えっとそれで、そう。シャルロットの話もしよう。可愛いんだよ。マジで。おっぱいもあるんだぜ。重要じゃない？　なんだよ、お前は貧乳派かよ。おっぱいに貴賤なし。ちっぱいも良いものだ……。

いや、違う違う。おっぱいの話をしたい訳じゃないんだよ。え？　何、する？　おっぱいの話。あ、必要ない。そうですか。

それで、シャルロットの事な。シャルロットも美人なんだよ。美少女って言った方がいいのか。いや、俺の美的センスは無いって二人から言われてるし……。

うん。まあ、俺の大切な人達な。この二人の為に俺は計画に本格的に乗った。ぶっ

ちゃけ世界の為に命を使うとか出来ないし。死んでも気にしないけど、二人に会いたいから生きる理由にもなった。

そんな二人が学園祭でスコールに会ったんだ。未だに俺を信用してないスコールに。内心慌てたね。さっさと話を切り上げて二人を逃したい気持ちでイッパイだった。

まあ二人は恋人とか、色々言われてテンション上げてて可愛かったけどさ。スコールも変に「若いっていいわね」みたいな表情してたし。どうしろってんだ。姦しいとかそういうレベルじゃないから。

キャノンボール・ファストで二人が……セシリアが狙われた時は本当に計画を無視するつもりだった。それぐらいにはマドカの事を殺すつもりだった。

怒りに我を任していた訳じゃなくて、単純に敵だと思ったから殺すだけだったのも手に負えない感じがする。

スコールが止めなかったらたぶんバッサリしてただろう。間違いないね。

タッグ戦前の話になるんだけど、ある程度のコアと対話……つーか、一方的な会話をする事が出来る俺は白式に計画の種を仕込んだんだ。我ながら不自然な動機で一夏を誘い出したから怪しまれないかドキドキしてたね。ホント、簪さんっていい立ち位置にいると思う。

俺の言葉「死ね」だとかそういう類の言葉と村雨の起動に合わせて雪羅を起動するように伝えた。コレで俺の不意打ちは防がれる筈だ。

もしかしたら一夏がちゃんと俺を警戒してくれてたらマシだったんだけどな。つーか、更識会長、もっと一夏に警戒心抱かせて。一夏死んじゃう。

電脳世界で篠ノ之博士と会って計画の打ち合わせを詰めていた。あの人マジで凄いな。俺がこうしたいって言うと「えー、ヤダ」とか言って拒否した挙句、自分で決めていくんだぜ？　俺要らなくね？

それでもちゃんと俺の事を考えてくれていたみたいで、セシリアとシャルロットの事も計画にちゃんと入っていた。後から聞いたら「君に嫌われて死なれるよりも、適当に恩を売る方がいいじゃん」と言われた。いや聞かなかったことにしよう。何も言われてないッ！

電脳世界に一夏が侵入してくるのは知ってたけれど、随分と早い時間に俺の世界へとやってきた。タイムアタックじゃないんだぞ、と文句を言いたい気持ちを抑えた。

ともかく、ちゃんと俺を怪しむように、怪しそうな言葉を吐き出して一夏を見送ったけど、アレは無理だ。絶対俺を信用してる。嬉しいけど、違うそうじゃない。シレッとＩＳ学園深部に潜ってるって言ったのに、ちょっとは怪しんでくれ。マジで。

一夏との戦いで言った言葉は大体本当の事だった。
一夏の事を羨んだし、恨んだし、妬んだ。まあ理解はしてたけどさー。やりきれねーって事。
それでもそれが当然の理由に聞こえて、亡国機業が俺の裏切りに集中する筈だ。その隙を狙って篠ノ之博士が亡国機業を掌握する、という計画だった。それでも全部は無理な事はわかっていたので、一部だけを完璧に切り離した。
俺が裏切ってから、ソコに所属し、そして亡国機業に反逆をする。Ｄｒ．タバネが全部悪いんだッ！　が計画の合言葉になったのは笑った。だいたいＤｒ．タバネが悪い。

「だいたいそんな感じかなー」
「……お前さ、バカだろ」
「失敬なッ！　俺は阿呆だぞ、一夏！」
「ソコは誇る所じゃねぇよ……マジで。親友に裏切られた挙句に親友を叩き斬って悩んだ俺の時間を返せ！　今スグ返せ！」

「世界が平和になったからいいじゃん、スゲーじゃん。さっすがヒーロー！」
「この野郎ォ……」
「ん、まあコレで全部終わったから許して……許して」
「俺は別にいいけど、セシリア達は知ってるのか？」
「……」
「おい、知らないのか？」
「いや、知ってるんだよ」
「なんだ、よかったじゃないか」
「いやいや、秘密の計画がなんでかあの二人に知られてるんだよ。マジ怖い。何があったの？　コレでも計画の実行犯だけなあって、俺の責任で漏れてるっぽくて怖いんだけど」
「いや、俺が知るわけないだろ」
「だよな……簪さんが教えたのかな」
「……簪さんは計画を知ってたのかよ」
「ちょくちょく会ってたからな。更識家ってスゲーよな……マジで。更識会長が仲間でよかった」
「お前に何があったんだよ……」

「情報集めてたんだけど、更識のデータベース入る方が早いよー、って篠ノ之博士から言われて覗いたぐらい？」
「束さんか……Ｄｒ．タバネが全部悪い」
「だいたいＤｒ．タバネの責任だ」
「……それで、これで計画は全部終わったんだろ？　どうするんだ？」
「そりゃぁ、無職になったからには俺の運命は決まってるのさ」
「ヒモか」
「違ァう！　お婿さんだッ！」
「……」
「やめろぉ！　そんな目で俺を見るなァ！」
「それで？」
「まあ、一応死んでる扱いだから、サプライズ的に執事の格好をして潜入しようかなーって」
「……ふーん」
「クックク、スパイとして二年近く活動した俺の本領を見せてやるぜッ！」
「それは楽しみですわね」
「そうだね楽しみだね」

「アイェェェェエエ!?　ナンデッ!?」
「悪いな、つけられた。イヤー、二年モスパイシテナカッタカラナー」
「そうかそうか君はそういうヤツなんだな！」
「はいはい、行こうね旦那様」
「そうですわ旦那様。沢山言いたい事がありますもの」
「お、お手柔らかにお願いします」
「……」
「ニコッてされたッ！　コレ絶対に折檻コースだッ！　俺知って――」
古ぼけた喫茶店の扉が閉められた。